

愛野向山Ⅱ遺跡

—愛野向山Ⅱ遺跡・愛野向山B古墳群発掘調査報告書—

2004

静岡県袋井市教育委員会

愛野向山Ⅱ遺跡

—愛野向山Ⅱ遺跡・愛野向山B古墳群発掘調査報告書—

2004

静岡県袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は、昭和60・61年度に袋井市教育委員会が実施した、^{あいのむかいやま}愛野向山Ⅱ遺跡・愛野向山B古墳群の発掘調査報告書である。本遺跡については既にいくつかの文献で紹介してきたが、本書をもって正式見解とする。
2. 本発掘調査は袋井市教育委員会松井一明を発掘調査の担当者として実施した。
3. 本調査に係る事務については、袋井市教育委員が行った。特に、商工課の担当部局には現場を進めるについて円滑な調整をして頂いた。
4. 本書の編集と執筆は松井が行った。
5. 本書に使用した遺構の実測図は、A区とC区・B区の遺構詳細図に関しては松井、篠原修二、前田庄一（調査員）他が作成したものであるが、B区の遺構平面図については航空測量図面を使用した。なお、方位については磁北（当地域は国家座標真北に対して西へ約6°10'傾く）をそのまま使用した。写真撮影は航空写真以外の現地遺構・遺物に関しては松井が撮影を行った。
6. 本調査で得た資料については、すべて袋井市教育委員会が保管している。
7. 現地作業や報告書作成に関する費用については、委託者であるチャーム工業株式会社に負担して頂くと共に、全面的かつ忍耐強いご協力を得ることができました。ここに記して感謝の意を表します。
8. 小銅鐸他の保存処理に関しては、東京国立文化財研究所（当時）の樋口・青木両先生にお願いするとともに、化学分析に関しても格別の御便宜を頂きました。また、耳環の化学分析については元興寺文化財研究所の渡辺氏に分析をして頂きました。保存処理・化学分析の関係者には、ここに記してお礼申し上げます。さらに、渡辺氏以外の化学分析の原稿につきましては、調査終了時に提出して頂いており報告書の刊行が遅れたことにより、多大なご迷惑をおかけしました。文中に原稿受理日を明記すると共に、ここに記してお詫び申し上げます。
9. 本書作成のため以下の機関・方々から資料の提供やご協力を賜りました。（敬称略）
石野博信 伊丹徹 伊藤敏行 伊藤寿夫 伊藤雅文 井村広巳 岩本貴 大賀克彦 大島慎一
太田好治 大谷宏治 大谷弘幸 及川良彦 川江秀孝 加藤理文 北山健一郎 後藤健一 白澤崇
柴田稔 田村隆太郎 常松幹雄 斎野裕彦 佐藤由紀男 鈴木敏則 塚本和弘 寺沢薫 戸塚和美
中山誠二 沼野栄 瀬川田佳男 平野吾郎 松本一男 三木文雄 溝口彰啓 向坂鋼二 桃崎裕輔
山本宏司 米田文孝（財）元興寺文化財研究所 関西大学考古学研究室 方形周溝墓研究会

目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 調査の経過	1
第3章 遺構・遺物の概要	3
1. 遺跡の位置	3
2. A地区の遺構・遺物	3
3. B地区の遺構・遺物	4
4. C地区の遺構・遺物	8
第4章 化学分析結果	12
静岡県袋井市愛野向山Ⅱ遺跡出土のガラス玉の化学組成	12
静岡県袋井市愛野向山Ⅱ遺跡出土の青銅器の鉛同位体比	15
静岡県袋井市愛野向山Ⅱ遺跡出土乳文鏡に見られる赤色物質の同定	17
静岡県袋井市愛野向山Ⅱ遺跡出土の繊維遺物について	18
静岡県袋井市愛野向山Ⅱ遺跡出土耳環の自然科学的調査	20
第5章 まとめ	23

愛野向山Ⅱ遺跡第1次発掘調査報告書

第1章 調査に至る経過

袋井市内には、東海道新幹線を始めとし東海道本線、東名高速道路などが通過する交通の要衝の地であり、昭和60年代には好景気もあり急速に宅地造成や工場建設などの開発事業が進んだ。そうした世情の中で、昭和59年袋井市愛野寺山他地内にてチャーム工業株式会社静岡工場建設計画がもちあがり、袋井市役所商工課を通じて工場建設予定内の埋蔵文化財所在状況を確認するための連絡が、袋井市教育委員会にもたらされた。これを受けて教育委員会は直ちに、寺田義昭（当時指導主事）を現地に向かわせたところ、①同用地内にはすでに周知の文化財である愛野向山B古墳群が数基ほど存在すること、②雑木で不明な点もあるが未登録の低墳丘の古墳がさらに何基か存在すること、③五軒平と称される地区（B地区）でかつて茶園造成時に五鈴鏡・玉類（市指定文化財、沼野栄氏所蔵）と鉄刀が出土したとされ古墳群の範囲以外の茶畑のなかにも古墳が存在しそうなこと、④用地内南斜面に愛野向山横穴群が存在する可能性があることの4点が確認され、商工課を通じて原因者に報告された。

その後しばらく連絡が絶えていたが、昭和60年度に入るとにわかに建設計画が進行し、工場建設用地内の埋蔵文化財の取り扱いが問題となってきた。そこで、チャーム工業株式会社、商工課、教育委員会の三者でその取り扱いについて協議を行った結果、①緑地部分に所在するものについては現状保存すること、②現状変更する地域については試掘トレンチで遺構の範囲確認を行いつつ設計変更して現状保存できるものがないかどうか協議すること、③設計変更が不可能でやむおえず現状変更で破壊される埋蔵文化財については記録保存のための発掘調査を実施し、そのための経費については原因者に負担をお願いする旨の3点を提示した。

以上の協議内容から、現地作業は工事の工程上の理由からC地区から始めB地区、A地区の順番で発掘調査の計画を作成することとした。計画では、昭和60・61年度の2年度に渡るものとして、昭和60年度はC地区の確認調査と本調査、B地区の確認調査と本調査、昭和61年度はA地区の確認調査と本調査を実施することとしたが、一番面積の広いB地区の北側斜面の茶畑部分に遺跡の範囲が存在するかどうか不明のまま調査を並行して行う不安があった。しかしながら、昭和60年6月には調査を開始しないと工場の建設計画に間に合わないため、委託契約書、遺跡の取り扱いに関する覚書、2ヶ年度にわたる調査のため協定書を5月までには取り交し6月からの調査の準備を行った。

第2章 調査の経過

昭和60年の6月から早速C地区のトレンチによる試掘調査を開始し、7月には全域に遺構と遺物の出土が認められたため全域を遺跡の範囲と認定した。10号墳より北側については緑地保存することが可能となり、愛野向山横穴群の一部については調査対象からはずれ現状保存することとなった。8月にはC地区の北側から人力による表土除去を始めたところ、いきなり表土直下から小銅鐸、B12号墳とした小古墳から三環鈴を発見し、袋井市内でもかなり重要な遺跡であると認識されたが、同時に遺跡の現地の保存や、調査期間の延長問題がにわかに起こってきた。9月に入るとC地区の遺構や遺物の出土量が当初の予定より多く、小銅鐸付近からはガラス小玉が多数発見されたことにより土壌洗浄の作業が

必要になったこと、12号墳からは豊富な副葬品が発見されたこと、10月には懸案事項であったB地区の茶畑部分の試掘調査を行う予定で、調査員、作業員の不足が明らかとなった。さらに、小銅鐸やB12号墳の副葬品の保存処理などの問題が山積みとなってきた。追い討ちをかけるように、これらのC地区の北側の調査区で発見された重要な遺構・遺物についてはいつまでも公開しないわけにはいかなくなり、9月には新聞発表と現地説明会を実施することになった。現地説明会には400人ももの市民が訪れ、新聞には一面を飾るものもあり、テレビ取材も行われ、教育委員会はあまり慣れていないマスコミ対応に追われた。小銅鐸他の保存処理については、川江秀孝氏（浜松市博物館、当時）の仲介により東京国立文化財研究所にお願いすることが可能となった。

さて10月になるといよいよ懸案のB地区の試掘調査を実施したところ、山頂部で周知の古墳以外にはほぼ一面に古墳が存在し、斜面部分からも弥生時代後期の竪穴住居が密集して確認され、当初恐れていたB地区全域が遺跡の範囲になることが明らかとなった。そこで、予定期間で終了するためには調査体制の再編成を行う必要があり、急遽、教育委員会から商工課を通じてチャーム工業株式会社に経費の増額と調査期間の延長の打診を行った。調査期間は工場建設計画の予定は絶対に譲れないが、経費は遺跡の範囲が当初より3倍近く拡大したこと、小銅鐸他の重要な遺物が発見されたことが考慮され、倍額に近い経費の変更が承諾された。そこで変更契約・協定を結び、調査を続行することとなった。調査員不足については、菊川町在住の篠原修二氏を迎えることができ、作業員の倍増も可能となったことから、11月からB地区の本格的な調査を着手することとなった。また、10月中頃にはC地区では南半分の10号墳まで調査が到達し、11月までには終了できそうな状況となってきた。

11月からB地区の調査を開始した。表土は山頂部の山林部分については、C地区の経験から古墳群の副葬品が表土中や表土直下から出土する可能性があったため人力により掘削したが、山頂部西半分と斜面地の茶畑の部分について表土は攪乱を受けていると判断し重機による掘削を行った。また、斜面地の調査は調査面積が広いため、東、中、西の調査区に分割し、東から西、最後に中央区の順番で調査を進めることとした。12月に入ると斜面部に予想以上に竪穴住居や掘立柱建物が重複していること、山頂部の古墳群についても鉄製品の副葬品を伴うものが見つかり、相当量の遺構数に上ることが判明してきた。C地区についても、小銅鐸出土地区の周辺を精査したところ、木棺墓が複数基見つかり、また12号墳に重複して方形周溝墓が存在したため、さらに調査を続行する必要がでてきた。

年があけて昭和61年の1～3月になると、斜面東区の遺構数が予想以上に多く予定通り終了しないため、さらに調査員を1名を増員して西区の調査を開始した。こちらも多数の重複した竪穴住居や掘立柱建物が見つかったが、東区に比べると数はやや少なく順調に調査は進んだ。3月になると東区の調査が完了し、西区の調査も大方終了に近づいたため、中央区の調査に入ったが、遺構数は西区同様に多く年度内のB地区の終了は難しくなった。山頂部の古墳群の調査も本格的となり、茶畑開墾で破壊された部分以外でもかなり密集して古墳が存在し、副葬品で直刀を保有する古墳も見られたが、3月に入るとほぼ終了した。C地区については、遺構が重複していた12号墳下層遺構などの調査を1月には完了し、測量調査も1月中頃に終了し全ての調査を完了した。

昭和61年度の4月にはB地区中央区の残った部分の調査を終了するために全力を投入する必要があったが、年度が明けると調査員はもとの1名体制に戻ってしまった。しかしながら、5月には予定通り航空測量を実施して、A地区の調査に入らないと8月までには調査が完了できないため、強行日程で調査を完了させ、5月にはB地区の航空測量を終了した。6月になると、作業員賃金の予算も尽きてきたため、A地区の調査後半とB地区の補足調査は、調査員1名で行うというなんとも作業効率の良くない最悪な事態になったが、7月にはなんとか予定通り調査を終了させることができた。

第3章 遺構・遺物の概要

本報告書においては、調査終了後かなりの年月を費やして資料整理を継続したため十分な予算が取れなかったが、全ての遺構・遺物の実測図を漏れなく報告することを目的としたため、遺構・遺物の記述に関しては必要最低限の記述内容にならざるをえなかった。よって、各地区別の遺構・遺物は概要の記述になるが、個々の遺物や遺構のデータは実測図にできるだけ盛り込むようにした。

遺物の時期の表記は、弥生時代の土器では中期中葉＝嶺田式、後葉＝白岩式古・新、後期は菊川式前半古＝山中以前、同新＝山中古、後半古＝山中新、同中＝欠山古、同新＝欠山新の5段階、古墳時代前半期の土師器は小山角田Ⅰ－1式＝庄内古、同Ⅱ式＝庄内新、同Ⅲ式＝布留1、同Ⅱ－2式＝布留2式、見性寺Ⅰ式＝布留3式、同Ⅱ－1式＝布留4式古、同Ⅱ－2式＝布留4式新、後半期の土師器・須恵器は坂尻0－1式＝Ⅰ期（TK208）、同0－2式＝Ⅰ期（TK23・47）、同Ⅰ－1式＝Ⅱ期（MT15）、同Ⅰ－2式＝Ⅲ－1期（TK10）（松井1995）、灰釉陶器はⅡ期＝黒笹90、Ⅲ－1期＝折戸53古、Ⅲ－2期＝折戸53新、Ⅳ－1期＝東山72、とした（松井1989）。

1. 遺跡の位置

袋井市域の地形は、南に小笠山丘陵、北に南アルプスである赤石山系より連なる丘陵が展開し、これらの丘陵を侵食しながら太田川や原野谷川などの中小河川が流れ、この河川により中小規模な沖積平野が形成されている。これらの中小規模の沖積平野では水田が営み易かったらしく、中小河川が形成した自然堤防上の微高地には弥生時代を中心として古墳～中世の集落が多数営まれている。本遺跡はこのような沖積地の遺跡ではなく、中小河川により侵食され形成された小笠山北西山麓の枝状に分岐した丘陵地の一面に営まれた遺跡である。今回対象となった調査区は、小笠山丘陵の末端に形成された小支谷が複雑に入り込んだ舌状丘陵のA・C地区と、比較的広い北側に緩斜面をもつB地区の丘陵からなるものである。西側の丘陵からA、B、C地区と便宜的に命名し調査区を設定した。

2. A地区の遺構・遺物

調査対象地区の中では、一番西側の南北に延びた細長い丘陵地で、北側の部分については過去の土取工事により大半が破壊されている。遺構としては弥生時代の方形周溝墓2基、木棺直葬の古墳であるB3～5号墳の3基の古墳を調査した。

方形周溝墓 方形周溝墓2基のうち1号周溝墓は南と東溝が確認できたが、北溝についてはB3号墳周溝により破壊されていたので全体の形態は不明であるが、残された部分から見ると弥生中期の四隅に陸橋をもつタイプの周溝墓と考えられる。2号周溝墓も、南と東溝が調査区内で検出されたが、北と西溝は区域外に一部試掘トレンチを入れたが見つけれなかった。おそらく1号墓同様に四隅に陸橋をもつタイプと思われる。主体部は2号周溝墓で小口に小溝をもつⅡ類木棺である（松井1998）。

出土遺物は、1号周溝墓東溝から1の中期中葉の嶺田式壺の胴部下半が出土しているのみであるため、1号周溝墓は中期中葉、2号周溝墓については中期中～後葉の時期幅で考えられる。

古墳 古墳はB3号墳が土取工事によりほとんど失われているため全形は不明であるが、B4・5号墳は明確な周溝を伴わず、墳丘のほとんどは地山を整形し少しの盛土で造られた、直径10mにも満たない小円墳である。B3号墳については周溝の幅がやや広いので直径10m以上の円墳になる可能性もあり、古い遺跡台帳では前方後円墳になる記載もあるが、B3号墳がこの前方後円墳にあたるかどうか

かは、古い土取工事により墳丘のほとんどを失っている現況からは判断できなかった。残された地形と第1図の都市計画図から見ると前方後円墳であった可能性は低いと考えられる。前方後円墳が存在したならば、さらに北側の丘陵先端部分であっただろう。

主体部はB5号墳より箱形木棺を納めたと思われる土坑が見つかったが、副葬品は確認されなかった。B4号墳については土師器の小破片が多数出土した盗掘坑らしいものが墳頂部で見つかり、確実な主体部は検出できなかった。B5号墳墳丘裾の北側には土坑1基が見つかり、副葬品はないが埋土から古墳に伴う土坑墓の可能性が高い。鉄鏃の破片と思われるものがB5号墳墳丘裾から出土している。土器類は、B3号墳より5世紀後～末葉の壺・甕類の破片、B4号墳の墳頂土坑と墳丘斜面から高坏を中心とする5世紀末葉（坂尻0-2式）の多量の土師器、B5号墳の墳丘裾でも6世紀前葉（坂尻I-1～2式）の土師器が出土している。これらの遺物から見ると、B3からB4・5号墳への築造時期の変遷が考えられる。その他清ヶ谷産灰釉陶器Ⅲ-2期（10世紀後葉）が、B4号墳付近から出土している。これらは、平安時代の山や古墳を対象とする祭祀遺物と考えられる。

3. B地区の遺構・遺物

B地区は北側に緩斜面をもつもっとも面積の広い丘陵地で、山頂部と斜面地上部に展開する弥生時代後期を中心とする方形周溝墓と古墳時代中期の小古墳群、斜面地下部の弥生時代後期～古墳時代中期の竪穴住居と掘立柱建物群からなっている。

竪穴住居 竪穴住居は、弥生時代中期後葉1棟、後期は84棟以上、古墳時代前～中期については6棟程度の合計91棟以上という、弥生後期後半の一集落の全容と考えられる膨大な軒数を確認できた。

弥生時代中期後葉の白岩式古段階の確実な竪穴住居としては、調査区北西部端の谷部で見つかった平面形態が楕円形になると思われるSB63が該当する。遺物からはSB54の547の壺とSB89の821の甕は中期中葉の嶺田式、SB51・64から中期後葉の白岩式新段階壺破片も出土していることから、中期中～後葉の住居が後期の竪穴住居と重複して数棟存在していた可能性が考えられる。後期の竪穴住居は出土土器から、前半古段階になるSB21、SB29b、前半新段階になるSB40、SB7の一部、後半古段階のSB10になるほかは、後半中・新段階がほとんどである。しかしながら、破片の中にはSB36の304、SB40の331、SB41の338、SB47の430の高坏は前半古段階、SB2の35、SB7の65、SB12の104・109、SB18の176、SB41の332、SB43の360、SB51の469、SB55の564、SB57の583、SB61の610の高坏や壺は前半新段階に属するものであることから見ると、少なくとも10棟以上の後半中段階以前の竪穴住居が存在したものと想定される。

平面形態は、SB2・49・50・64・75などの大型のものについては楕円形に近い隅丸長方形、小型のSB3・32・76などに円形が見られる以外は、基本的には隅丸方形が主体的な形態であるが、平坦地に近い場所に位置するものは全体の形態が判明するが、急斜面に位置するものほど壁面が斜面側でしか発見されていない。柱穴は4本柱が主柱穴である。炉は基本的には地床炉であるが、小数ではあるがSB22・81のように配石を伴うもの、SB9・23・27のように粘土を貼るものなどが見られる。炉の位置は、谷側の北向きに位置に存在するものが多いようであるが、反対に南側にあるものも小数存在する。斜面地に位置するSB12、SB15・16、SB69では、竪穴住居の外周に壁溝状の周溝が見られ、この小溝の性格は竪穴住居外部に存在する周堤帯の補強や排水目的と考えられる（松井2002）。

古墳時代の竪穴住居は、前半期の土師器が出土（破片を含む）したものが存在し、時期別に列挙すると小山角田I式のSB30・42、同II式のSB19・33・58・62、同III式のSB19・27・51・52・53、見性寺I式のSB53、同II-2式のSB43・45などである。古墳時代前～中期の全般に渡る継続性が

がみられるが、各時期は2～3軒と予想され住居の数から集落として成立していたかどうかは疑問である。また、いずれも弥生時代後期の土器も一緒に出土するものが多いため、弥生後期の遺構と重複するか、付近の遺構からの土器が混入した可能性がある。

最後に竪穴住居の切り合い関係が判明したものを示す。

S B 1→5号周溝墓、S B 7 B→D→C、S B 8・10→S B 9、S B 10→S B 6、S B 12 A→B→D→C、S B 12 D E→C、S B 15→S B 14→S B 23、S B 15→S B 16→S B 18、S B 17→S B 18、S B 17→S B 20→S B 19、S B 22→S B 20・21、S B 24→S B 14、S B 24→S B 23、S B 26 C→A→B→S B 25 A→C→B、S B 29 B→A、S B 36→S B 33、S B 36→S B 38、S B 37 B→A、S B 40 B→A→S B 39、S B 46→S B 47→S B 88、S B 49→S B 50、S B 51→S B 52、S B 52→S B 50、S B 53 C→B→A、S B 54 B→A→S B 55、S B 57 B→A、S B 58 B→A、S B 59 A→B、S B 62 C→B→A、S B 64→6号周溝墓、S B 61 E→F→C→D→A、S B 63 B→A、S B 68→S B 67→S B 45、S B 70→S B 71→S B 72、S B 77→S B 73、S B 82→S B 81、S B 83→S B 84

掘立柱建物 掘立柱建物は合計49棟を確認できたが、自然崩落のため谷側の柱穴が確認できないものも多数存在するため、もう少し数は多かったと考えられる。少なくとも60棟以上は存在してものと考えられる。形態は間口梁行1間が基本で、桁行2～3間がほとんどである事、谷側の柱列のほうが低い位置にあることから、高床建物が多いと考えられる。S H 13のように非常に小型のものから、S H 6・7のように大型ものまでの差が大きい。1間×1間のものについては竪穴住居の上部構造が流失したものとも考えられるが、S B 89とした竪穴住居については大型柱穴をもつため、あるいは物見台などの高床建物であった可能性も指摘しうる。

掘立柱建物の位置は竪穴住居と重複するものがほとんどで、多くは切り合い関係が不明であるが、わずかに分かったものは掘立柱建物のほうが新しい傾向にある。この状況は、例えば斜面地の自然崩落のため竪穴住居を再建するための面積がなくなり、その場所を再利用して掘立柱建物に切り替えた可能性もある。集落内での位置関係については、竪穴住居個々に付属するというよりいくつかの竪穴住居単位に1～2数棟の掘立柱建物が伴うという傾向が読み取れる。ただし、大型の掘立柱建物については、S B 68とS H 25やS B 49とS H 6・7の関係に見られるように大型竪穴住居と組み合わせになる可能性も考えられるが、S B 2やS B 64のように大型掘立柱建物と組み合わせにならない大型竪穴住居も存在するため決して普遍的な傾向ではない。集落の中心域に比較的大型の掘立柱建物が存在したと考えたほうが妥当であろう。

時期は、柱穴内や削出部の出土土器から見るとほとんど弥生後期後半に該当するが、S H 9・11の856・866、S H 14の870・872・875、S H 18の878は中期後～末葉の土器、S H 19の887、S H 24の908は小山角田Ⅲ式に該当し、弥生中期と古墳前期のものも小数存在している可能性はある。

柵列・土坑 柵列は4箇所認められたが、建物を囲郭するものはないため、小柱穴からなる掘立柱建物であった可能性が指摘される。しかしながら、S A 4のように竪穴住居の斜面地側に並んだものについては、土留用の杭列であった可能性も指摘しうる。

土坑については28基見つかり、形態も様々であるが、その内焼土を伴う所謂焼土坑が18基発見された。焼土坑はS K 2や4のような方形のものもあるが、多くは円形や不定形である。焼け方も何回か火化したものが多いが、S K 3のように少ないものもある。検出場所は、竪穴住居や掘立柱建物の付近に多いため屋外炉の可能性が高いが、S K 2や4のように大型のものについては狼煙のような遠距離地の通信手段に使われていた可能性は否定し得ない。時期については、少量土器のともなった例から見ると、弥生後期後半中・後段階に該当すると考えられる。ただし、土坑のうちS K 20・22・24・

28のような大型で深いものについては、縄文時代中期以降の落し穴である可能性が考えられる。

方形周溝墓 方形周溝墓は、竪穴住居群と一部重複するが、おおむね急斜面の居住域にむかない調査区南半分に位置している。何れも斜面地側の溝しか見つかっていないため、全体の形態は不明ではあるが弥生中期以来の四隅に陸橋をもつ形態ではないだろう。おそらく、斜面地側の南・東・西側に周溝を掘り、北側の溝は浅く北西・東の1～2箇所に陸橋をもつ形態で、平地から見た場合墳丘を強調した構造をなした方形周溝墓であったと考えられる。住居と切り合い関係のもつものは、5号と6号周溝墓でいずれも竪穴住居の方が古い。とくに6号周溝墓については、大型竪穴住居であるSB64を材に火を放った後に廃棄した後、あたかもその住人の一人を埋葬したかのような印象を受けた。

主体部については、長さ2m前後の伸展葬可能なI類の大型木棺が主体であるが、5号周溝墓主体部1、9号周溝墓主体部1のように子供用かと思われる小型木棺、2号周溝墓主体部3、7号周溝墓主体部1、8号周溝墓主体部1、11号周溝墓主体部1のように土坑状のものも存在する。主体部は1棺が基本であるが、2号周溝墓で木棺1基と土坑状主体部2基、3号周溝墓で木棺2基、9号周溝墓は墳丘内木棺墓1基と周溝に隣接して木棺1基、11号周溝墓木棺1基と土坑主体部1基、12号周溝墓は木棺2基となり14基中5基が2～3基の主体部をもつ。6号周溝墓では北溝中央の溝底付近からガラス玉が出土しており、溝内埋葬があった可能性がある。また、13号方形周溝墓については、周溝が円形状をなしているが、周溝や主体部上層から坂尻0～I-1～2式土器が出土しているため、周溝は小型円墳の周溝に該当する可能性が大きい。ただし、主体部内から緑色凝灰岩と鉄石英製の細身の管玉が多量に出土しており、主体部のみが弥生後期の小型の木棺墓であったと考えたい。

周溝墓の築造時期は、土器や主体部からの副葬品の出土が少ないため良く分からないが、6号周溝墓の周溝内の西北・南隅から時期の分かる土器が出土しており、いずれも後期後半中段階の一括資料である。溝内や付近から出土している土器棺については、溝内の土器棺3は後期前半新段階まで遡る可能性はあるが、南溝内土器棺と墳丘内の土器棺2は後期後半中段階以降になる。10・11号周溝墓から出土している土器についても後期後半中段階以降の土器であり、土器の出土していない周溝墓のほとんどの時期は竪穴住居の主体的な時期である後期後半中段階に一斉に造られたと考えられる。

土器棺 土器棺については、土器棺1・4が5号周溝墓の北側、B18号墳西と周溝内、土器棺2・3・5が6号周溝墓の溝内と墳丘内裾部から近接して発見された。土器棺3・5は6号周溝墓溝の掘削の際、土器棺4もB18号墳周溝の掘削のため上半部分が破壊されていた。土器棺については位置や切合関係から見ると周溝墓に伴うものではないが、墓域の一面にまとまって営なまれる傾向は読み取れる。土器棺の出土状況は、土器棺1・2・4は壺形土器の口縁部を打ち欠いた後横置き、土器棺3・4は縦置きで埋葬したものである。土器棺の時期については、土器棺3については後期前半新段階まで遡る可能性はあるが、その他の土器棺は後期後半中段階に該当するものである。

古墳 古墳はいずれも明確な高い盛土はもたない、地山に周溝を掘り込んで墳丘を整形した、直径10mにも満たない小円墳である。しかしながら、B18号墳は方形周溝墓状の周溝をもつ方墳、B26号墳は墳丘を円礫で構築した所謂積石塚古墳で、周囲に浅い周溝状遺構が見られ方墳と考えられる。

主体部については1棺の埋葬が基本ではあるが、B18号墳のように木棺3基、24号墳では木棺2基が埋葬された例が認められた。主体部の種類はB26・27号墳のように断面U地型をなす割竹型木棺、B18号墳主体部1のように小口に粘土を充填する細長い箱形木棺の他は、掘方の長さ3m前後、木棺長さ2m前後になる伸展葬可能な箱形木棺が主体である。ただし、B23号墳主体部1のように木棺の長さが1mしかないことと、墳丘も3mしかない極小古墳であるため、子供用古墳の存在も指摘しうる。主体部の主軸方向も全て東西方向を示し何らかの規則性があったと考えられる。

主体部内の副葬品のうち被葬者の頭位方向を現すと言われている刀・剣や刀子の切先方向、青白色粘土の小口での量が多い方向が検討できるB18号墳主体部1、B20号墳主体部1、B22号墳主体部1、B23号墳主体部1、B26号墳主体部1、B30号墳主体部1、B32号墳主体部1で頭位方向を検討する。18号墳主体部1では両小口に粘土がみられるが、西側の粘土のほうが良好で厚く見られ、西側にベニガラらしい赤色顔料が認められたことから西頭位、B20号墳主体部1は両小口に粘土が見られるが、西側の粘土が厚く、刀子の切先は東西両方向を向いているため西頭位、B22号墳主体部1は東側に粘土があるので東頭位、B23号墳主体部1は両小口に同量の粘土があり副葬品もないため頭位不明、B26号墳主体部1の小口粘土は西側、剣の切先は西側を向いているため判断が難しいが剣の位置を優先すると東頭位、B30号墳主体部1の粘土は東側にあり、直刀の切先は西側を向くため東頭位、32号墳主体部1では粘土は東側のものが厚く、直刀の切先は西側を向いているため東頭位が想定される。なお、主体部は墳丘の自然流出のため不明であるが、副葬品が比較的元位置を保っていたB29号墳の直刀の切先は西側向のため東頭位と考えた。この結果から見ると、B18号墳は5世紀前葉になる古墳で西頭位、その他5世紀後葉の古墳はB20号墳を除いて大方は東頭位であった可能性が高い。

副葬品の内容については採集品まで考慮すると、調査区西側と東側の群では内容が大きく異なる。西側のB27号墳で鏡や直刀が出土したのを頂点として豊富な内容を示し、さらにその西側で直刀が見られたB29号墳、B30号墳、B32号墳の調査区西側端の尾根線に南北方向にならんだ単位群、比較的多くの古墳の副葬品内容が判明した東側の古墳については積石塚のB26号墳に鉄剣が副葬されていた以外は、刀子や鉄鏃といった内容である。B18号墳については、鉄斧や鎌等の工具や農具の副葬が見られ、5世紀後葉の古墳の副葬品とは異なる内容を示す。

周溝内出土土器を検討すると、B18号墳は見性寺Ⅱ-2式の一括資料が出土しており5世紀前葉の時期となるほかは、B15・B20・B23・B27・B29号墳からTK208段階の須恵器や坂尻0-1期の土師器が、B8・B19・B21・B22・B24号墳からTK23~43段階の須恵器や坂尻0-2期の土師器が、B6号・B28・B30・B31号墳からも5世紀後葉の須恵器の甕の破片、B20・24号墳からTK10段階の甕や坂尻Ⅰ-1~2期の土師器が出土している。よって、B地区の古墳群の主体時期は5世紀中~後葉で一部6世紀中葉まで降るものを含むと考えられる。さらに、B地区の古墳群はB18号墳が5世紀前葉にまず築造されるが、5世紀中葉以降古墳の数が飛躍的に増えると共に西側の刀を副葬するグループと、刀子・鉄鏃などを主に副葬するグループに分かれていく傾向がある。6世紀前葉になると24号墳に追葬か再利用される程度となり、6世紀中葉には古墳の築造を停止すると考えられるのである。集落との関係から見ると、古墳時代の竪穴住居の最終時期は見性寺Ⅱ-2式となるので、集落の機能を完全に失った直後に古墳群の築造が開始されていることになる。

B20号墳の墳丘裾に土坑墓が1基、B29号墳でも土坑墓が2基伴う例が見られた。土坑墓についてはB29号墳SK2のように副葬品と思われる鉄鎌が伴う例や、土坑墓すべての埋土は中央部分で黒色土が底面近くまで陥没したように入り込んでいる。このような土坑墓は茶園造成の攪乱で消滅したものがあると考えても、全ての古墳に伴うものではなく数は少ないと考えられる。

その他の遺構と遺物 古墳群の存在する山頂部や周溝内から、奈良時代の須恵器や平安時代の灰釉陶器が出土している。なかでも、B17号墳墳丘裾から出土している清ヶ谷産の小壺に関しては立ったままの状態出土しており、何らかの埋納遺構に伴って出土した可能性が高い。時期は10世紀末葉の清ヶ谷Ⅳ-1期（松井1989）に該当する。奈良時代の須恵器については8世紀前~後葉、平安時代の灰釉陶器は清ヶ谷Ⅱ期~Ⅳ-1期の9世紀末~10世紀末葉の製品が出土しており、平安時代初頭を除く約200年間に渡る土器が連綿と出土することから、古墳や山を対象とした何らかの祭祀行為がそこに存

在したものと考えられる。なかでも小壺については、単なる蔵骨器とも思えない。祭祀行為の内容は不明であるが、何らかの古墳や山を対象とする信仰に係わる遺物と考えられる。

4. C地区の遺構・遺物

C地区は南北に細長く延びた狭い舌状丘陵で、比較的幅広の部分や瘤状に高い場所に古墳が存在する。弥生時代の遺構に関しては調査区北半分から弥生時代後期後半の方形周溝墓と小銅鐸を出土した木棺墓群、南半分からは同時期の竪穴住居と方形周溝墓が検出されている。

竪穴住居 竪穴住居は、何れも弥生時代後期後半中段階のものが5棟、掘立柱建物ではなくて同時期の竪穴住居上部構造が流出したもの（SB6）1棟を含む合計6棟が発見され、一単位の竪穴住居群を構成し、B地区と同一の集落域に含まれると考えたい。各竪穴住居は比較的散在した位置関係にあるが、SB3・4は接近しているため1時期3～4軒程度の単位群を構成すると考えられる。

平面形態は、いずれも隅丸長方形で、大きさも均質なものである。柱穴は4本柱が支柱穴である。炉は基本的には地床炉であり、その位置は北によるSB1・2・5と、中央にあるSB3、反対に南側によるSB4のバラエティが存在する。SB1・2・5は入口が南側、SB3・4については南側が高い丘陵地になるため東西の何れかに入口が存在したためと考えられる。丘陵鞍部に位置するSB5については竪穴住居の南側外周に周溝が見られ、B地区で発見されたものと同じく、周堤帯外側に掘られた排水目的の溝と考えられる。

遺物はSB1・4・5から比較的まとまった量の土器が出土しており、なかでもSB5からは後期後半中段階の一括資料が出土している。また、SB1・3からガラス小玉が出土していることから見ると木棺墓群との何らかの関係が伺える。

掘立柱建物 SB6を掘立柱建物と認定しなかったが、仮にこれが掘立柱建物とすると1間×1間の高床建物となり、竪穴住居3～4棟に1棟の掘立柱建物が伴うことになる。

土坑 土坑はSB1やSB2の付近と12号墳周溝内に、楕円形や円形のものが見られるが、竪穴住居と切り合うものや接近するものがあるため、必ずしも竪穴住居とは同時期になると思えない。出土遺物からの時期判定は、蛤刃石斧が出土したSK12以外まったくないため明らかではない。土色から見ると弥生後期以前から縄文時代に属すると思われる。特にSK1については、円形で深い形態、土色から見ると縄文時代の落とし穴になると思われる。

方形周溝墓 方形周溝墓は、調査区北半分から2基、南半分で竪穴住居群と重複する1基が検出されている。北半分の1号周溝墓、2号周溝墓については、墳丘の自然流失や古墳と重複し周溝が壊されているためすべての溝が検出されていないが、弥生中期の四隅に陸橋をもつ形態の方形周溝墓になると思われる。2号周溝墓についてはA地区での1号周溝墓と同様に、地形を利用するためか斜面部の北と西側の溝が省略される形態をなしていると思われる。南半分の調査区からは古墳と弥生後期の住居と重複して3号周溝墓が検出されている。3号周溝墓は古墳の周溝により周溝のほとんどを破壊されているため全体の形態は不明であると言わざるをえないが、四隅に陸橋のある形態ではないだろう。おそらくB地区の方形周溝墓と同じ1～2箇所陸橋をもつ形態と想像される。

主体部については、1号周溝墓で長さ1.5 m前後の伸展葬が不可能なI類木棺が5基、土坑墓らしいものが1基と多数埋葬となる。このうち、主体部1からは棺上に壺形土器、主体部4については木棺堀方内や棺上の一部に礫を覆っていた。位置関係から見ると主体部4が主埋葬で、その後主体部1と5が埋葬され、最後に主体部2・3・6が伴うものと考えられる。埋葬主体部の検出面で小穴8基が見られた。なかでも主体部4の西脇にある小穴は、墳丘中央にあり祭祀用の柱が建てられていた可能

性も指摘しうる。3号周溝墓では長さ2m前後の伸展葬が可能なⅠ類木棺1基が、墳丘中央で確認されている。B14号墳主体部に壊されているものが存在する可能性もあるが、位置関係から見ると埋葬主体は1基の単数埋葬であったと考えたい。また、埋葬主体部検出面で破碎された土器が多数出土したことから土器を使用した棺上祭祀行為の存在を指摘できる。

時期については、周溝や主体部から土器が出土しており、1号周溝墓については後期前半古段階、2号周溝墓は白岩式新段階、3号周溝墓は後期後半新段階のまとまった土器が出土している。出土した土器の中には、1号周溝墓付近から底部穿孔土器が、2号周溝墓東溝から胴部下半に穿孔の見られる壺形土器が見られ、当地域の胴部から底部に変化した穿孔土器の変遷過程を読み取るには良好な資料であろう。また、土器の出土位置も、中期後葉の完形率の高い土器が溝から出土する様相から、後期の木棺上層祭祀の在り方への変遷も読み取ることができる。1・2号周溝墓についてはB地区の竪穴住居のなかに同時期のものがある。3号周溝墓についてはB地区の6号周溝墓とSB64の関係と同じように、SB3の廃材を燃やした後にこの住居の住人を周溝墓に埋葬したように見える。竪穴住居の土器とほとんど時期差はないため、住居の廃絶後間もなく周溝墓を築造したのは間違いない。

木棺墓群（SX1） SX1は出土遺物の検討の結果、北と南側に木棺墓群を区画するような溝（SD3・5）と、西側には南北方向に長さ7mほどの底面が平らな祭祀場と思われる段状遺構が存在するが、方形周溝墓のように奇麗に区画するための周溝が巡る状態には見えない。主体部は周溝墓の木棺と良く似た埋土と形態になる伸展葬可能なⅠ類大型木棺の主体部2・3・4・6・7と、埋土中央に黒色土の流入が見られる小型土坑墓になる主体部1・5に分けられる。このうち最終段階の埋葬に近い主体部2の南側付近からは、ガラス小玉や有孔礫とともに小銅鐸が表土直下より出土した。また主体部2の上層からは破碎された壺形土器が小礫やガラス小玉とともに出土しており、これらも棺上祭祀に係わるものと考えられる。他には主体部4を除く全ての主体部埋土内からガラス小玉が出土するため、これらの埋葬主体部の最初か、埋葬主体部ごとにガラス小玉を使用した棺上祭祀が行われていた可能性は極めて高い。また、正確な場所は特定できていないが主体部8の西側墓底より鉄石英製の細身の管玉2点が出土している。これが耳飾りだとすると、被葬者の頭位は西側と想定できる。

主体部の切り合い関係は、主体部7・8→主体部6・7と、主体部3→主体部4が確認できた。この切り合い関係から見ると、土坑墓が必ずしも最終段階の埋葬主体にならないこと、南北方向に主軸をもつ主体部が新しくなる可能性がある。おそらく木棺墓である主体部8・3が最初に埋葬され、その後土坑墓である主体部5と木棺墓の主体部4が続き、埋葬方向を替えて新たに主体部6・7を中央に埋葬した後、その周辺に土坑墓の主体部1や木棺墓の主体部2の埋葬が続き、最終の主体部2の棺上祭祀の終了後に、小銅鐸を廃棄したものと考えられる。

祭祀場所とおもわれる西側の段状遺構からは、下層より破碎された比較的小型の無文の壺形土器を中心として広範囲に出土している。上層からは木棺墓の棺上祭祀遺物と思われるガラス小玉1点、小型扁平片刃石斧1点、銅鏃1点（出土時は完形品であるが先端部は錆化が進んでいたため取り上げられなかった。）が流れ込んだ状態のように出土している。

木棺墓群の造営時期については、棺上祭祀に使われた土器を検討すると主体部2から後期後半中段階、主体部1から後半古段階の土器が出土しているので後期後半古～中段階の時期幅、段状遺構下層の土器は後期前半新～後半古段階となる時期幅があるため、初葬時は1号周溝墓築造直後の後期前半新段階、最終埋葬時は後期後半中段階になる長い継続的な造営時期となり、短期的な方形周溝墓の存続期間とは全く異なる。しかしながら、B地区の後期の集落の存続期間とは一致する。

土器棺 土器棺については、土器棺1～3が1号周溝墓の東側、土器棺4が10号墳の東側から発見さ

された。土器棺 1 は台付甕を破碎して胴部を小穴の底や壁に敷き詰めその壁部分外側に口縁部を裏返しにしてさらに全周入れ込むという特殊な土器棺である。土器棺 2 は口縁部を打ち欠いたうえに横置きし、台付甕や壺形土器の破片で口の蓋をしたと思われる。土器棺 3 は一端破碎した壺形土器を小穴内に敷き詰めたもので、小破片のうえ風化の激しいもので復元できなかった。土器棺 4 は台付甕の台部を打ち欠き縦置きした後、壺形土器の破片で蓋をしたものである。該当時期は大形土器のうえ無文であるため良く分からないものが多いが、蓋に使用された破片や甕の形態から見ると、後期後半中段階を中心とすると考えられる。C 地区の土器棺は周溝墓に伴わないが、土器棺 1・3 は類例がない土器棺のため、土器棺 1～3 は木棺墓群の築造の最終時期か終了直後に連動して営まれた可能性が高い。土器棺 4 は、堅穴住居群のさらに南側に位置するので、3 号周溝墓の造営に関係したと考えたい。

古墳 C 地区の古墳は 4 基発見され、B12 墳と 13 号墳は方形周溝墓の墳丘を再利用するもの、B10 号墳と 14 号墳については、地山を整形して墳丘を造り出した、いずれも直径 10m にも満たない小円墳である。しかしながら、B12 号墳については南東方向に陸橋もつ円墳、B13 号墳については南北の尾根線を切るように周溝を掘削している。

主体部については B13 号墳が 1 棺埋葬である以外、B10・12・14 号墳のように木棺 2 基が基本となる点は、B 地区の古墳群とは異なる様相である。B12 号墳については墳丘の土層を検討すると、主体部 1 を埋葬する段階に北側に墳丘を拡張した様子が確認できた。この状況から、従来墳丘の中央にあった主体部 2 を壊さないように主体部 1 を墳丘中央に埋葬しようとした意図が読み取れるのではないかと考えられる。主体部の切合関係は B13 号墳で、主体部 2→主体部 1 の新旧関係が確認できた。

主体部の種類は B10 号墳主体部 2 のように断面 U 字型の割竹型木棺、B12 号墳主体部 1 のように小口と側面のみに礫を充填た礫郭の省略形態で細長い箱形木棺となるもの、B13 号墳主体部 1 や B14 号墳主体部 1・2 のように木棺の長さ 3.5m 前後になる伸展葬可能な程度の箱形木棺、B12 号墳主体部 2 や B10 号墳主体部 2 のように長さ 1.5m 前後の伸展葬が可能かどうかぎりぎりの短い箱形木棺が埋葬されたものなど、かなりのバラエティが見られた。

主体部内の副葬品のうち被葬者の頭位方向を現すと言われている刀・剣や刀子の切先方向等の副葬品の出土状況で B12 号墳主体部 1、13 号墳主体部 1、14 号墳主体部 1 で頭位方向を検討する。B12 号墳主体部 1 では主軸方向東西で西側に馬具と鉄鏃、中央から東側にかけて管玉が散ったような状況、西端で切先を西に向けて直刀が 2 本、三環鈴、銅鏡が出土している。さらに、東側の小口の礫は少なく立石が 1 個見られることから見ると東頭位であると考えられる。なお、馬具の木芯鉄板張輪鐙は分解され西側の馬具の中や堀方の礫内より出土している。三環鈴や管玉に関しても上層から出土しているため、棺上祭祀に使用されたものと考えられる。礫の中に、砥石が認められることから集落付近から持ち込まれた礫である可能性も指摘される。B14 号墳では東側にスズ製耳環（元興寺文化財研究所渡辺氏分析）や玉類が、底近くから出土しているため東頭位、B14 号墳主体部 1 は 2 点の刀子が東側のものの切先が西向、西側のものが東向きであるため頭位不明ということになる。B14 号墳主体部 1 のような中央に切先を向ける出土状況は、B20 号墳で反対に切先東西方向の外側に向けるものと類似し、1 棺内に 2 体埋葬があったとは考えられないだろうか。10 号墳主体部 1 については主体部の主軸方向は南北と、他の主体部とは異なる方向になる。副葬品は短剣と再利用品を含む玉類で、4 世紀代まで遡る可能性が高い。B10 号墳主体部 2 は東側に副葬品がないことから東頭位？、B12 号墳主体部 2 については頭位方向は不明である。このように C 地区の古墳の頭位方向は判明している範囲では、5 世紀後葉～6 世紀前葉の古墳については、B 地区と同様に東頭位が優勢になるであろう。

副葬品の階層差については、B12 号墳で銅鏡、三環鈴、馬具、直刀と首長墓に劣らない内容豊富な

な副葬品が見られ、それ以外は短剣が見られたB10号墳主体部2程度で、残りは鉄鏃や刀子、玉類といった数少ない内容である。B10号墳主体部2については短剣や玉の再加工形態から見ると4世紀代になる可能性が高く、5世紀後葉の中ではB12号墳は突出した副葬品の内容となっている。

各古墳の時期を周溝や主体部付近出土土器で検討すると、B10号墳主体部付近と墳丘からTK47とTK10段階の須恵器、B12号墳は主体部1上層からTK47段階の須恵器と坂尻0-2段階の土師器、B13号墳主体部1上層と周溝からMT15段階の須恵器と坂尻1-1～2段階の土師器、B14号墳主体部1上層と周溝からTK10段階の須恵器と坂尻1-2式段階の土師器が出土している。これらの土器を重視するとB12号墳主体部1とB10号墳主体部2が5世紀末葉、続いてB14号墳が6世紀前葉、B13号墳が6世紀中葉に築造されたと考えられる。B12号墳主体部2については、重圈文鏡の変形である櫛歯文鏡の小型鏡が出土したことから、同じ短い箱形木棺を採用するB10号墳主体部2と同様に4世紀代に遡る可能性もあるが、主体部上層から出土したガラス小玉の中に黄色や緑色の鉛ガラス製品（第4章参照）が含まれているため、古くても5世紀中葉となる可能性もある（大賀克彦氏ご教示）。

C地区の古墳群については一部4世紀代に遡るものも含むが、5世紀末葉～6世紀中葉の中に収まることからB地区の古墳群より築造開始時期が1段階新しくなり、6世紀前～中葉に築造の主体時期がC地区へ移行していると考えられる。この状況はA地区の古墳群も同じであると思われる。よって、調査された範囲ではB地区の古墳群が中核となり、5世紀中葉（TK208段階）から築造が爆発的に始まり、5世紀末葉（TK47段階）に入るとA・C地区にも造墓域を広げ、群集墳のなかの首長墓もB地区のB27号墳から、C地区のB12号墳に変遷があったと考えられる。

B12と14号墳の墳丘裾に土坑墓が各1基、B12号墳の周辺に土坑墓群7基の存在を確認した。土坑墓についてはSK1・5・6のように埋葬主体上での祭祀に伴う土器の出土例があったので、土坑墓と認定した。土坑墓の何れも中央の埋土の状況で黒色土が底面近くまで陥没したように入り込んでいたため土坑墓と判断した。土器が出土したものは、この黒色土の陥没とともに埋もれたような出土状況を示す。出土した土器から見ると、SK2でMT15段階の須恵器、SK3・5・10ではTK10段階の須恵器が出土しているため、何れもC地区最初の5世紀後葉の古墳であるB12号墳が築造された後の、6世紀前～中葉に造られた土坑墓群であることが分かる。出土した須恵器はSK2・10で、坏身・蓋のセットになるものの他、SK3・5のように高坏の蓋のみが出土しているものあり、高坏という本来の意味が失われて祭祀用土器として使用されているものも見られる。

その他の遺構と遺物 C地区でも古墳群の存在する山頂部や周溝内、用途不明の溝から、奈良時代の須恵器や平安時代の灰釉陶器が出土している。なかでも、12号墳周溝から奈良時代の須恵器と平安時代の灰釉陶器がまとまって出土している。破片の中には1271の清ヶ谷産細頸壺や、表土中より1331の双耳坏の須恵器など、平地の集落遺跡からはあまり出土例が少ない器種が見られる。奈良時代の須恵器については8世紀前～後葉、平安時代の灰釉陶器は清ヶ谷Ⅱ～Ⅳ-1期の9世紀末葉～10世紀末葉の製品が出土しており、平安時代初頭を除く約200年間に渡る土器が連綿と出土している。A・B地区と同様に、古墳や山を対象とした何らかの祭祀行為がそこに存在したと考えられる。

B12号墳墳丘内や周溝内から水神平式の甕と壺形土器の破片が2個体分以上が出土しており、土器棺の存在が推定される。縄文時代の遺物としては1321の鍔付の浅鉢で曾利1式、凹基部形態の石鏃や石錘の石器などもこの中期後葉の土器に伴うと思われる。

第4章 化学分析結果

静岡県袋井市愛野向山Ⅱ遺跡出土のガラス玉の化学組成

富沢威、馬淵久夫（東京国立文化財研究所当時）

薬袋佳孝 富永健（東京大学理学部化学研究室当時）

1. はじめに

筆者らのグループでは、従来からわが国の弥生時代や古墳時代の遺跡で出土する古代ガラスの化学組成について、分析化学的な検討を行ってきた。それらのガラスを組成で分類すると、アルカリ石灰ガラスと鉛ガラスの二つの種類に大別されている^{1)~3)}。ガラスの化学組成に関する情報は、ガラス製造の技術や歴史を知る上では重要な知見であるが、化学分析が行われた例は極めて少なく、ガラスの化学組成や着色剤についての多くは知られていない。

考古遺物や美術資料などの貴重な資料の分析には、一般には非破壊分析が用いられている。ガラス玉の化学組成や着色剤の特徴を知ることが目的として、代表的な非破壊分析手法である蛍光X線分析と中性子放射化分析を行ったので、本稿ではその結果の概要について報告する。

2. 実験

試料 分析試料は、静岡県袋井市愛野向山Ⅱ遺跡で出土した、弥生時代後期から古墳時代中期に属するガラス玉である。

実験の方法

（1）**蛍光X線分析** 測定には、東京大学アイソトープ総合センターに設置されているエネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いた。試料表面から発生する特性X線を検出器に受けて、そのX線のエネルギーと強度に基づき元素の同定や含有量についての情報を得る方法である。分析システムの構成は、X線を励起するための100 ミリキュリーの²⁴¹Am（半減期458 年）のRI線源と、有効面積30平方センチメートルのSi（Li）半導体検出器、および4024チャンネル波高分析器である。測定時間は、おおよそ1000~60000 秒間である。表1に、測定に用いた特性X線の詳細を示す。

（2）**放射化分析** 中性子の照射は、武蔵工業大学原子力研究所の照射孔を用いた。武蔵工業大学原子力研究所のTRIGA-II型原子炉では、気送管（熱中性子束 $1 \times 10^{12} \text{ n} \cdot \text{cm}^{-2} \cdot \text{sec}^{-1}$ ）と照射溝（熱中性子束 $4 \times 10^{12} \text{ n} \cdot \text{cm}^{-2} \cdot \text{sec}^{-1}$ ）を用いた。短寿命核種は、ガラス試料を気送管で1分間照射し、7分冷却後、Ge（Li）半導体検出器と4096チャンネル波高分析器を用いて5分間 γ 線スペクトルの測定を行った。長寿命核種は、試料を照射溝で15時間照射し、7日間冷却後、Ge（Li）半導体検出器と4096チャンネル波高分析器で5000秒間 γ 線スペクトルの測定を行い、1ヶ月冷却後、Ge（Li）半導体検出器と4096チャンネル波高分析器で60000 秒間 γ 線スペクトルの測定を行った。

短寿命核種、長寿命核種の定量にはNBSのガラス標準試料や、USGSのG-2及び工業技術院地質調査所で調整した岩石標準試料のJB-1やJG-1を標準に用いた。定量に用いた核種の半減期とエネルギーの一部を表2に示す。

3. 結果と考察

ガラス玉の破片についての蛍光X線分析や中性子放射化学分析により、化学組成や着色剤に関するいくつかの有用な結果を得ることができた。

今回分析したガラス玉の化学組成の特徴を検討する前に、ガラスの種類や原料、及びガラスの製造

表1 蛍光X線分析に用いた主な元素の特性X線エネルギー (keV)

原子番号	元素	K α_1	K α_2	K β_1	K β_2
25	マンガン Mn	5.898	5.887		
26	鉄 Fe	6.403	6.390	7.057	
29	銅 Cu	8.047	8.027	8.904	8.976
33	ヒ素 As	10.543	10.507	11.725	11.863
56	バリウム Ba	32.191	31.815	36.376	37.255
原子番号	元素	L α_1	L α_2	L β_1	L β_2
82	鉛 Pb	10.549	10.448	12.620	12.611

表2 中性子放射化分析の定量に用いた核種の γ 線のエネルギーと半減期

元素	核種	半減期	γ 線エネルギー (keV)
Al	²⁶ Al	2.3 min	1779
V	⁵¹ V	3.76min	1434
Ti	⁴⁸ Ti	5.8 min	320
Ca	⁴⁵ Ca	8.8 min	3084
Hg	¹⁹⁹ Hg	9.5 min	1014
Mn	⁵⁵ Mn	2.58hr	847
K	⁴⁰ K	12.52hr	1525
Na	²² Na	15.0 hr	1369
La	¹⁴⁰ La	40.2 hr	1596
Sm	¹⁵² Sm	47 hr	103
U	²³⁵ U	2.35d	106
Lu	¹⁷⁷ Lu	6.7 d	208
Ba	¹³⁷ Ba	12.0 d	496
Rb	⁸⁷ Rb	18.7 d	1076
Th	²³² Th	27.0 d	312
Yb	¹⁷⁶ Yb	30.6 d	198
Ce	¹⁴¹ Ce	33 d	145
Hf	¹⁸¹ Hf	42.3 d	482
Fe	⁵⁹ Fe	45.0 d	1292
Sb	¹²⁵ Sb	60.9 d	603
Sc	⁴⁶ Sc	83.8 d	1121
Co	⁶⁰ Co	5.26y	1333
Eu	¹⁵¹ Eu	12 y	1408

表3 古代ガラスの着色剤とその色調

着色剤	焼成雰囲気	
	酸化条件	還元条件
鉄	黄褐色	青緑色
コバルト	紺青色	紺青色
マンガン	紫 色	無 色
クロム	黄緑色	エメラルド緑
カドミウム	無 色	黄 色
ニッケル	藍色 (カリガラス)	藍色 (カリガラス)
	褐色 (ソーダガラス)	褐色 (ソーダガラス)
銅	青 色	銅 赤*
金	金 赤*	—

*再熱処理で発色させたコロイド着色法。

表4 蛍光X線分析測定結果

試料名称	形 状	色調	時 代	重量(mg)	遺 跡 名 称	検出元素	ガラス組成
No134(541)	ガラス玉	緑色	古墳時代中期	34.2	B12 号墳 主体部2	Pb,As,Cu,Fe,Sn	鉛ガラス
No137(544)	ガラス玉	紺色	古墳時代中期	18.7	B12 号墳 主体部2	Fe,As	アルカリ石灰ガラス
No150	ガラス破片	紺色	弥生時代前期	15.7	B10 号墳 主体部1	Fe,As	アルカリ石灰ガラス
No175(45)	ガラス玉	青色	弥生時代後期	57.9	C区 SX1主体部6	Cu,As,Fe	アルカリ石灰ガラス
No201	ガラス玉	青色	弥生時代後期	45.3	C区 SB1北端	Cu,Fe,As	アルカリ石灰ガラス
(34)	ガラス玉	紺色	弥生時代後期	195.7	C区 SX1主体部2	Fe,As,Mu,Ba	アルカリ石灰ガラス

() 内No.は実測No.と一致する。

表5 中性子放射化分析定量結果

試料名称	No 140	No 150	No 178	No 201	No 240
時 代	古墳時代 前期	古墳時代 中期	弥生時代 後期	弥生時代 後期	弥生時代 後期
色 調	青色	紺色	青色	青色	紺色
試料重量(g)	8.7	15.7	9.3	2.1	12.7
Al ₂ O ₃ (%)	6.0	2.8	0.1	6.4	1.8
Na ₂ O	0.77	12.7	0.35	2.0	0.36
K ₂ O	2.4	5.0	2.0	4.8	1.2
CaO	0.6	5.2	0.3	n.d.	1.3
TiO ₂	0.28	0.16	0.13	0.32	n.d.
HgO	0.29	0.01	0.22	0.19	0.14
RnO	0.008	0.021	0.023	n.d.	0.98
Fe ₂ O ₃	4.2	1.5	0.51	0.50	1.1
V (ppm)	22	10	n.d.	20	56
Sc	2.7	1.2	2.0	1.7	3.1
Co	5	470	4	2	520
Rb	590	n.d.	530	570	210
Sb	8	860	3	5	1
Ba	n.d.	790	n.d.	n.d.	1000
La	13	8	9	16	12
Ce	22	14	12	11	121
Sm	1.7	0.6	1.3	2.2	3.3
Eu	0.06	n.d.	0.35	n.d.	0.87
Yb	1.3	n.d.	0.8	0.8	1.0
Lu	0.18	n.d.	0.16	0.22	0.24
Hf	5.6	5.5	2.8	3.4	n.d.
Th	3.5	4.3	2.3	2.8	1.7
U	0.8	n.d.	1.5	0.8	0.8
ガラス組成	鉛ガラス	アルカリ 石灰ガラス	鉛ガラス	鉛ガラス	鉛ガラス

n.d. 検出限界以下で定量出来ず。

備考：ガラス片試料の出土遺跡名称

No145 B10号墳 主体部1

No150 B10号墳 主体部1

No178(45) C区 SX1主体部6

No210 C区 SX1北端

No240(60) B区 6号方形周溝墓内

() 内No.は実測No.と一致する。

法に関する基礎的な知見を簡単に概観しておこう。ガラスの種類は、主成分元素に基づいて分類される。ガラスを構成する元素は、ケイ素Si、アルミニウムAl、ナトリウムNa、カリウムK、マグネシウムMg、鉄Fe、カルシウムCa、マンガンMn、チタンTi、鉛Pbの10元素である。ガラスは、これら10元素の酸化物として表現される。一般にガラスの種類は、酸化鉛とケイ酸を主成分組成とする鉛ガラスと、ケイ酸とアルカリ成分を主成分組成とするアルカリ石灰ガラスの組成の二種類に大別されている。さらにアルカリ石灰ガラスは、ナトリウムを主なアルカリ成分とするソーダライム系ガラスと、カリウムを主なアルカリ成分とするカリライム系ガラスの二つの種類に分けられている。ガラス原料の重要な成分は、天然砂や長石及び天然ソーダなどのアルカリ分である。こうしたガラスの主成分原料の供給源には、ケイ酸原料のケイ砂や天然砂、アルミナ原料の長石や粘土、ソーダ原料の天然ソーダや芒硝、カリ原料の植物灰や硝石、石灰原料である石灰石や貝殻及びケイ酸原料の不純物などがある。ガラスは、これらの原料に着色剤などの副原料に加えて、調合・熔融されて人工的に合成される。したがって、ガラス組成の種類の相違は、ガラスの主成分となる原料の調合率の差異で生じていると考えることができる。弥生時代のガラス組成には、鉛ガラスとアルカリ石灰ガラスの二種類がある。また、弥生時代の遺跡で出土するガラスが、わが国最古のガラスであると考えられている。

ガラスの色を支配する金属酸化物を、一般には着色剤と呼んでいる。ガラスは、組成の種類の相違や合成時の雰囲気や酸化状態か還元状態であるという熔融条件の違いによって異なる色調を示すが、金属イオンによるガラスの色は、基本的には添加する金属酸化物の種類の相違で異なってくる。代表的なガラスの色調には、紺色、青色、緑色、赤色、黄色などがあり、その着色剤はコバルトCo、鉄Fe、銅Cu、ガドミウムCd、ウランU などである。着色剤として用いられていた金属酸化物の種類とガラスの色調との関連を、表3に示した。

(1) 蛍光X線分析 表4に測定結果を示す。蛍光X線分析では、ガラス組成の種類を識別するのに有効である鉛Pbや、着色剤に由来する鉄Feや銅Cuなどを簡単に測定することができる。鉛Pbの顕著なピークが認められた試料は、No134 だけである。鉛を検出した試料は鉛ガラスとし、それ以外の試料はアルカリ石灰ガラスとした。

清澄剤に由来するヒ素Asはすべての試料で検出されている。またバリウムBbやスズSnに富む試料がある。緑色や青色のガラス玉には着色剤に由来する鉄Feや銅Cuの含有率が高い。紺色のガラス玉は鉄Feの含有率が高いが、色調からコバルトCoによる着色と推察される。

(2) 放射化分析 分析にはガラス玉の破片を用いた。中性子放射化分析による5例の分析結果を表5に示す。中性子放射化分析は、微量元素について高感度で分析できる特徴がある。微量元素についてみると、No150 やNo240 の紺色ガラスはバリウムBaや着色剤に由来するコバルトCoに富んでいる。さらに、No150 は、清澄剤に用いられるアンチモンSbの含有率が高い。

中性子放射化分析法では、鉛Pbやケイ素Siは分析できない。したがって、ガラスの種類を鉛Pbの含有率に基づいて識別することはできない。ところが、アルカリ石灰ガラスはナトリウムNaとカリウムKを合計すると一般には十数%の含有率を示すことから、アルカリ成分に基づいた識別が可能である。No150 はアルカリ成分をおよそ18%程含有していることからアルカリ石灰ガラスであり、アルカリ成分の少ない他の4例は鉛ガラスと推察される。

【参考文献】

- 1) 富沢威 1986 「第3章古代ガラスの化学—古代オリエントから日本まで」馬淵久夫・富永健編『続考古学のための化学10章』東京大学出版会
- 2) 富沢威・富永健 1982 「古代ガラス」『材料化学』第19巻2号
- 3) 富沢威・富永健 1983 「古代ガラス化学」『化学の領域』第37巻9号

1987年3月20日原稿受理

馬淵久夫（くらしき作陽大学現在）

1. はじめに

鉛同位体比法は、青銅器の原産地を推定するための手法として、近年クローズアップされてきた（文献1－2）。鉛は質量の異なる4種類の同位体の ^{204}Pb 、 ^{206}Pb 、 ^{207}Pb 、 ^{208}Pb の混合物であり、その混合比（同位体比）は鉛鉱床の性格によって異なるので、産地の指標となり得る。筆者は弥生時代から歴史時代初頭に至るまでの日本出土の青銅器にこの手法を応用し、各時代の青銅原料に関する知見を得ている（文献3－7）。今回、愛野向山Ⅱ遺跡および愛野向山B古墳群出土の青銅器の鉛同位体比を測定したので、その概要を報告する。

2. 実験の方法

本方法はほとんど非破壊法といっても差し支えない。出土青銅器に必ず生じている錆を微量（約1ミリグラム）採取すればよく、外観を損なうことはない。弥生時代および古墳時代の青銅器の多くの場合、数パーセントの鉛を含んでおり、錆にもそれに近い鉛が含まれているので、1ミリグラムの錆には数十マイクログラムの鉛が存在する。錆試料の化学分離によって得られた鉛のうち1マイクログラムを採って、東京国立文化財研究所に設置されている日本電子社製表面電離型質量分析計で鉛同位体比を測定した。

3. 測定結果

各試料の測定値は次の表のようになった。

N o	資料名	出土地点	$^{206}\text{Pb} / ^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb} / ^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb} / ^{206}\text{Pb}$
1	乳文鏡	B12号墳主体部1	18.452	0.8508	2.1084
2	三環鈴	B12号墳主体部1	18.066	0.8646	2.1350
3	小銅鐸	SX1	17.748	0.8761	2.1676
4	小銅鐸の舌	SX1	17.758	0.8762	2.1661
5	銅鏃茎	SX1段状遺構上層	17.793	0.8753	2.1626
6	櫛歯文鏡	B12号墳主体部2	18.279	0.8587	2.1255

測定誤差 ± 0.010 ± 0.0003 ± 0.0007

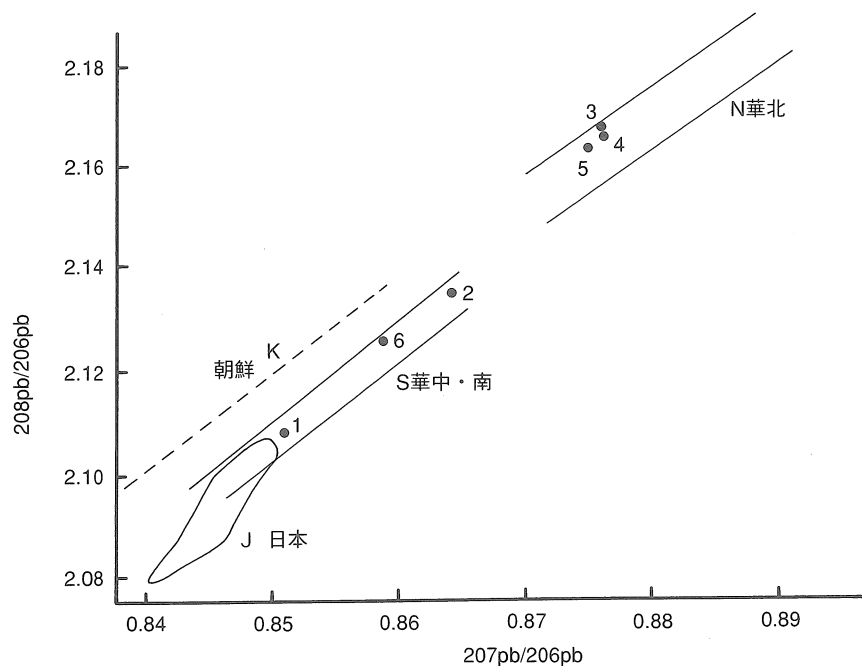
4. 考 察

鉛同位体比の測定値から鉛の産地を推定するためには、産地の分かった鉛鉱石と時代別の考古遺物の推定値を基準にしなければならない。筆者が確立したタイプ別の鉛同位体比の分布範囲を、第1図に示す。以下、この図の概略を説明する。

まず、Nの範囲は弥生時代に将来された前漢鏡が占める位置で、華北の鉛である。Sは後漢・三国時代の舶載鏡の占める範囲で、華中または華南の鉛で、古墳出土の青銅鏡の大部分はこの範囲に入る。Jは日本産の鉛鉱石、Kは多鈕細文鏡・細形銅利器のような弥生時代に将来された朝鮮系遺物が位置するラインである。弥生時代から古墳時代中期までの出土遺物はN、S、Kの何れかに属し、Jに入るものがないことが今までの測定で分かっている。以下、資料別に第1図を参照しながら説明する。

1) 乳文鏡 第1図のSに入る。すでに測定した鏡および鉛鉱石から考察すると、Sの左半分に入るこのような鉛は華南産と推定される。

2) 三環鈴 乳文鏡と同様にSに入るが、右半分に位置するこの鉛は華中または華南産であっても、乳文鏡のそれとは異なる産地と推定される。漢式鏡の中では「舶載」三角縁神獣鏡にときどき見られる鉛同位体比である。朝鮮半島産の可能性は低く、日本産の可能性はない。



第1図 青銅器の鉛同位比分布図

3) 小銅鐸 第1図のNに入り、華北産の鉛である。すでに測定した静岡県浮島開嶺出土（文献4）、栃木県小山出土（文献4）、神奈川県海老名市本郷出土（文献8）の小銅鐸の鉛同位体比と測定誤差の範囲で一致し、近畿式・三遠式銅鐸と同じ弥生時代後期の画一的原料である。

4) 小銅鐸の舌 鉛同位体比の測定値を見れば明かなように、小銅鐸本体と完全に一致した値を示している。小銅鐸本体と同じ原料で同時に造られた可能性が高い。

5) 銅鏃茎 この資料もNに入り、小銅鐸と同様に弥生時代に用いられていた華北産原料である。第1図の両軸の値は近畿式・三遠式銅鐸の範囲の下限に近く、これらの銅鐸を造るのに用いた原料と同じか、あるいは若干早い時期の原料と考えられる。いずれにしても、弥生時代後期の原料と見てよいだろう。

6) 櫛歯文鏡 第1図でSのほぼ中央に位置し、古墳出土の鏡に最も多い鉛同位体比である。「舶載」三角縁神獣鏡にしばしば見られる値であるが、種々の形式の仿製鏡にもよく見られるので鉛同位体比から鏡式を特定することはできない（筆者注：原稿受理時には櫛歯文鏡という名称は与えられていなかった。）。

【参考文献】

- 1) 馬淵久夫・富永健編 1981 『考古学のための化学10章』東京大学出版会
- 2) 馬淵久夫・富永健編 1986 『続考古学のための化学10章』東京大学出版会
- 3) 馬淵久夫・平尾良光 1982 「鉛同位体比による漢式鏡の研究」『MUSEUM』370号
- 4) 馬淵久夫・平尾良光 1982 「鉛同位体比からみた銅鐸の原料」『考古学雑誌』第68巻1号
- 5) 馬淵久夫・平尾良光他 1982 「古代東アジアの銅貨の鉛同位体比」『考古学と自然科学』15号
- 6) 馬淵久夫・平尾良光 1983 「鉛同位体比による漢式鏡の研究（2）」『MUSEUM』382号
- 7) 馬淵久夫・江本義理他 1983 「鉛同位体比による太安萬侶墓誌銅板および武蔵国分寺付近出土銅造仏の原料産地推定」『古文化財の科学』28号
- 8) 馬淵久夫・平尾良光 1985 「本郷遺跡出土小銅鐸の鉛同位体比」『海老名本郷I』

1987年3月22日原稿受理

門倉武夫（東京国立文化財研究所当時）

1. はじめに

銅鏡乳文部の顔料と見られる赤色付着物について非破壊的方法によりその物質の同定を行った。

2. 測定方法

測定には文化財試料の測定用として開発した非破壊、非接触方式による蛍光X線分析装置およびX線回折装置を採用し、乳文部に固着した赤色部について元素の分析および構造解析を行った。

3. 測定結果および考察

蛍光X線分析法では銅（Cu）、錫（Sn）、鉛（Pb）、鉄（Fe）の元素が検出された。

また、X線回折法で得られた回折波形から鉄の化合物として鉄の酸化鉄（ Fe_2O_3 、JCPDS、No.13-334）が同定された。

両測定結果から赤色付着物質について考察すると、検出された元素のうち銅、錫および鉛は、鏡を構成している合金組成と見ることができる。そして、鉄の存在はX線回折法の結果から赤色物質に起因するものと考えられる。

X線回折法で同定された酸化鉄は、鉄以外の多くの金属遺物の錆中にも見られるが、特に、土中における鉄の存在は極めて一般的で、意識的に着色の目的で使用された場合は、赤色顔料として酸化鉄すなわち「べんがら」の他、硫化水銀（Hgs）の構造をもつ「朱」が考えられる。今回の蛍光X線分析結果では水銀（Hg）が検出されなかったことから、銅鏡乳文部に見られる赤色付着物質は、着色のため顔料として用いられたとすれば「べんがら」が使用されていたと考えられる。

1987年3月20日原稿受理

中田節子（帝京大学山梨文化財研究所客員研究員現在）

1. はじめに

愛野向山Ⅱ遺跡より出土の小銅鐸内銅鏃付着紐1点、愛野向山B12号墳主体部1出土の乳文鏡付着繊維1点と三環鈴付着繊維調査成果を報告する。

2. 調査の方法

残存部の計測＝紐、繊維魁は最大長と最大幅を0.1 cmまで測る。布は織目に平行あるいは直角に縦方向と横方向の最大値を0.1 cmまで測る。

撚り方向＝肉眼観察、読取顕微鏡により検鏡した。

撚り角度＝出土品では解撚は不可能であるので、見かけ上の角度で判断した。

見かけ上直径＝3ヶ所以上を読取顕微鏡で検鏡。0.1 mmまで測定し平均値を記した。

密度＝3ヶ所を読取顕微鏡で検鏡し、1 cm間での経糸と緯糸の平均値を記した。

材質同定＝側面は出土時の繊維束、及び単繊維までほぐしたもののプレパラートを作成し検鏡した。

断面はパラフィン切片法によりプレパラートを作成し判断した。

3. 調査結果

1) 小銅鐸内銅鏃付着紐について

資料は発見時に、舌として利用されていたと思われる銅鏃と小銅鐸を結んでいたとのことである。銅鏃に残されている部分は最大長1.7 cm、最大幅1 cm強を測る。巻きついたまま、硬直化しているため実際の長さは不明であるが、少なくとも8 cm以上はあるであろう。

銅鏃にどのように結びついていたのか正確なところはわからないが、現状では結び目は4ヶ所、明らかにちぎれている部分も4ヶ所、種類は2種類観察できる。残されている部分で判断すると、吊す方を上とすれば、茎を一つ結びにして紐の先を上へ出し小銅鐸へ結ぶ部分を残しておく。次に茎に6～7回位巻き付けていく。太い方の紐は、その上に茎のほぼ半分の位置から下に向かって巻き付けていく。最後に巻いたところに1回通して、2回また上へ戻りながら巻きそれに先端を輪にしたものを通して、一つ結びにしているように見える。細い方の巻き終わりもたぶん先端を輪にして縛り残りの部分をはじめに残しておいて紐と結んで小銅鐸に縛るのであろう。太い紐は細い紐が切れたため上から巻いたのであろうか。発見時には細い紐の巻きははじめの部分のみ少々小銅鐸についていたようである。

細い方の構成糸は、太いものよりゆるく撚られ、撚方向は右（S）撚を、左（Z）撚に合せてある。見かけ上の直径は、0.9 mm前後を測る。太い方の構成糸は比較的しっかりと撚られており、撚り方向は右（S）撚を、左（Z）撚にしている。見かけ上の直径は、1.5 mm前後である。

小銅鐸と銅鏃を結びつけていた長さ1 cm弱、幅1 mm弱の資料の側面、断面を検鏡した。側面は縦走る亀裂が見られ、節が存在し、先端はあまり残存していないが一部鋭く尖っているものが観察された。

断面は楕円形に近い鈍角の多角形を示し、内腔は広く楕円形を呈していた。材質は苧麻などイラクサ科植物と思われるが、保存状態が悪いため確定できない。ごく一部であるが白い鞞皮部分に混じって、表皮らしいものも見られた。繊維にする工程で残されたものと思われる。

2) B12号墳主体部1出土乳文鏡付着繊維について

鈕内に詰まっていたもので、紐状ではなくてバラバラになった繊維のかたまりという状態である。出土繊維は最大長1 cm、最大幅0.4 cmで、その一部を依頼され側面、断面を検鏡した。いずれも無撚りで

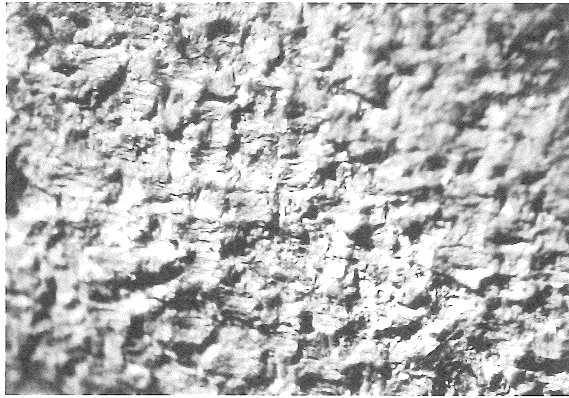


写真1 小銅鐸内銅鍬付着紐拡大写真

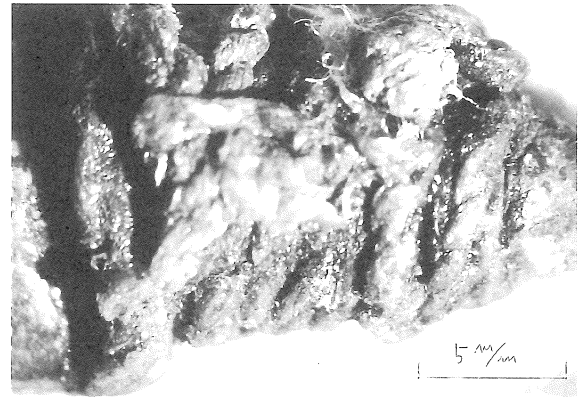


写真2 三環鈴表面付錆着布片拡大写真

あり、そのほとんどはこわれた不定形物体であった。側面は絹特有の細い縦状の繊維の集合体が観察された。断面は三角形で、単繊維（brin）のなかに一部2本の単繊維が並んだ状態のbaveらしきものが見られた。蚕から吐き出された糸はすべてbaveの形態をしており、その後灰汁などで並んでいる2本の単繊維を接着しているセシリンを取り除くことにより単繊維となる。これが残っているということは精練の程度が浅いということであろう。同じような例は、時代は遡るが熊本県宇土市向野田古墳出土絹製品がある。また、乳文鏡のように鈕に結び付けられていた絹紐の一部と思われるものの発見例は、奈良市円照寺墓山1号古墳出土仿製鏡付着絹紐などがある。

3) B12号墳主体部1出土三環鈴付着錆着布片

三環鈴の両面ほぼ半分に不規則に付着あるいは錆着している。残存部分の最大のものは4cm×2.5cmである。繊維面は摩滅している。三環鈴に接していた部分のみ残されたのであろう。布目方向は、付着錆着の箇所により異なり、一部方向を異にして重なり合っていた。これは三環鈴を包んでいた布と思われる。平織で糸に撚りはかかっていない。見かけ上の直径は経糸0.2mm前後、緯糸0.23mm前後であり、密度は1cm間で経41本×緯29本を数えた。一部別の箇所では、見かけ上の直径が経糸0.12mm、緯糸0.18mm、密度が経50本×緯41本となっている。ここの部位は状態が悪いため、錆びたり、とけたりして細くなったのかもしれない。側面、断面を検鏡した結果、材質は絹と判断した。1983年の布目順郎先生の報告による同時代の出土絹70例の繊維密度の平均値は経43.6本×緯23.1本でありその比は、2.08となっている。三環鈴の絹はそれに比較して経糸はほぼ同じであるが、緯糸がやや多い。比は約1.4であり、経と緯が全国平均ほどは大きくない。なお、検鏡中に気がついたことであるが、視野に入ってくる資料のほとんどが、中心部まで赤色あるいは緑色、一部黄色に染まっているように見えた。出土絹のため量も少なく、状態も悪いので染料によるものと確定はできないが、その可能性は考えられる。

終わりに資料を提供して下さった、袋井市教育委員会の松井一明氏、断面観察の方法をご教示下さった布目順郎先生に深く感謝の意を表します。

【参考文献】

布目順郎著 1979 『養蚕の起源と古代絹』雄山閣

布目順郎 「繊維からみた古代絹」『繊維学会誌』第32号5号

布目順郎 1981 「向野田古墳出土の絹製品について」『宇土市史研究』第2号

鳥取県教育文化財団 1983 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告V』

布目順郎 1982 「石原亀甲・徳王両遺跡出土の小形仿製鏡の鈕内にあった紐の材質について」『古代学研究』第97号

1987年3月22日原稿受理

渡辺智恵美・菅井裕子（(財)元興寺文化財研究所）

1. はじめに

昨今、考古学の分野で材質の分析や製作技法の観察など、自然科学的な手法を用いた調査が実施されるようになり成果をあげている。袋井市に所在する愛野向山Ⅱ遺跡のB13号墳から出土した耳環2点について、材質調査を行う機会を得たので結果を報告する。成分分析は、エネルギー分散型ケイ光X線分析装置（セイコーインスツルメンツ(株)製：SEA5230 以下、XRFと略す）を用いた。この機器は、試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光X線を検出することにより元素を同定するもので、非破壊で調査を行うことができるため文化財の調査に広く用いられている。

XRFの測定条件は以下の通りである。

・モリブデン管球使用、大気条件下、 コリメーター0.18mm、管電圧45kV

2. 耳環の残存状況および分析結果

まず耳環の残存状況について記す。これらの耳環は、暗紫色を呈し全体が粒状に腐蝕している。腐蝕が激しく、本体だけでは遺構から取り上げることができなかったため、土ごとに取り上げられている（写真1）。No.1の方が本来の状況をよく留めており、おおよその大きさがわかる。耳環の法量は、約 2.6×2.6 cm（縦径×横径）、断面径約0.5cmである。No.2は2/3程度の残存状況であるが、No.1に準じると推定できる。既存の分析結果や腐蝕の状況より、耳環は錫製の可能性が窺えた（注1）。

分析結果について以下に記す。耳環の各部分の呼称については図1に、分析箇所については写真1に、またXRFスペクトルは図2にそれぞれ記した。

XRFでは、表面層から錫（Sn）、鉄（Fe）を検出した（図2の各スペクトル参照）。鉄は土壌に由来するとみられる。

以上の結果より、この耳環は錫製無垢の耳環であると判断できる。

3. 耳環の製作技法と材質について

耳環の製作技法は大きく分けて、①銅芯を金や銀で装飾するもの（鍍金したものを含む）、②中空で金や銀の板を用いたもの、③無垢製のもので鉛、錫、鉄などを用いたものなどがある（注3）。錫製の耳環は、千葉県や福岡県などでも出土しており、当該遺跡に比較的近接する出土例として三重県金塚横穴墓群があげられる（注2）。また袋井市に隣接する浅羽町五ヶ山B-1号墳で錫製釧が出土している。錫の腐蝕状態に対する認識不足のため、潜在的にはまだまだ存在するのではないかと考えている。今後の分析調査が待たれる。これまでの出土状況をみると、古墳群の中でも集中する傾向が窺えるが、出土例が少ないため推定の域を出ない。今後の課題の一つとしたい。

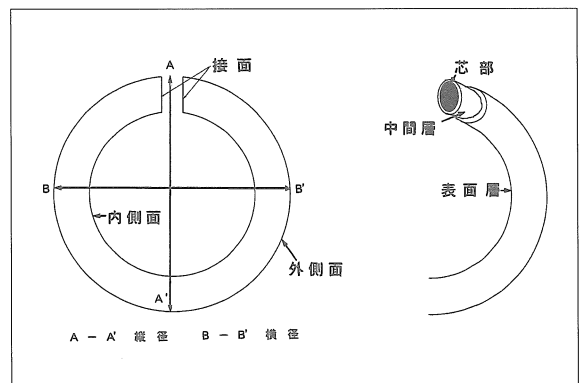


図1

注1 「金塚遺跡・金塚横穴墓群出土遺物のケイ光X線分析」 『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財調査報告227-1 2002.3

注2 同上

注3 「耳環小考-製作技法、材質からみた分類-」 『創立三十周年記念誌』 元興寺文化財研究所 1997

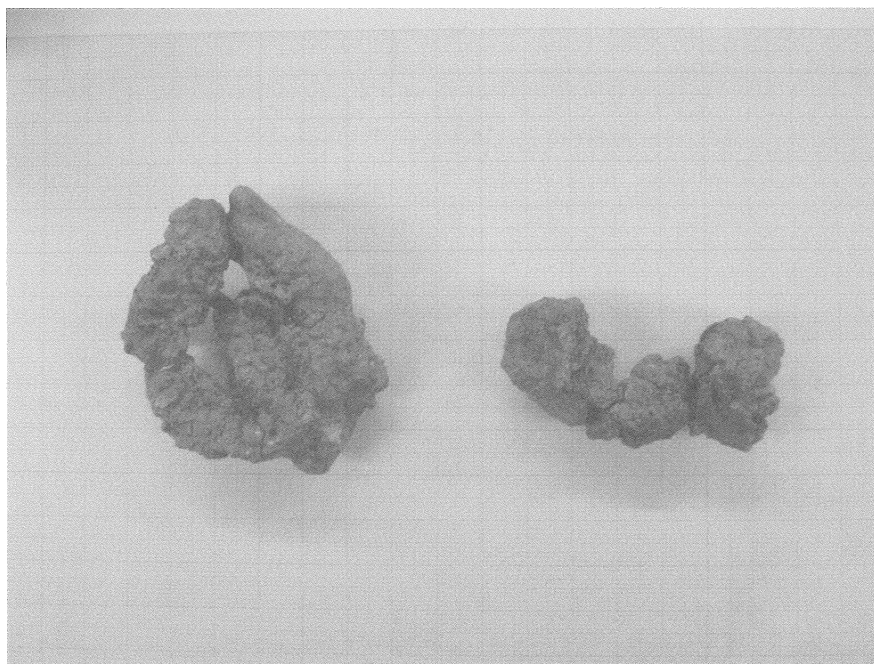
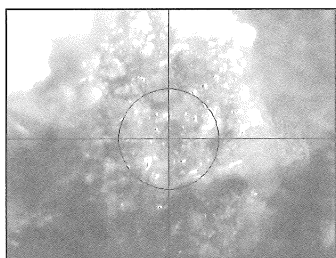
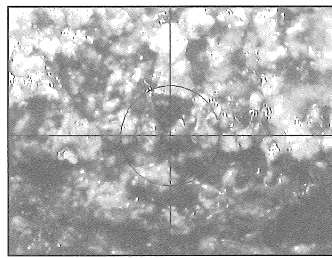


写真1 耳環の分析箇所

試料像



耳環No.1



耳環No.2

視野：[X Y] 6.60 4.95 (mm)

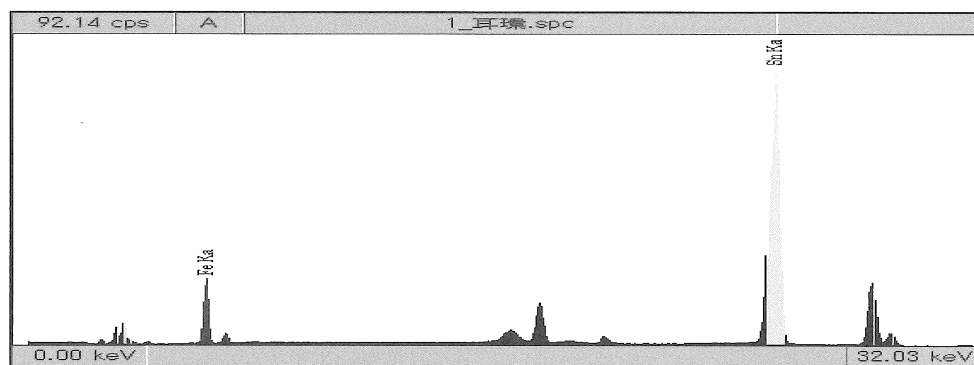


図2-1 耳環No.1 矢印のケイ光X線スペクトル

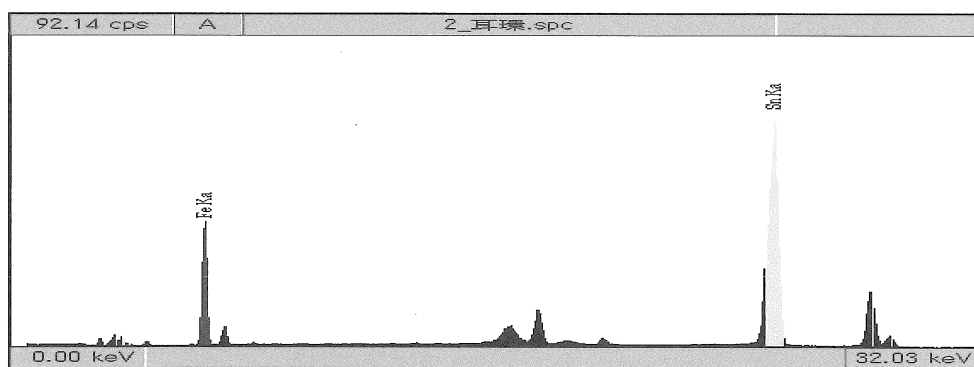


図2-2 耳環No.2 矢印のケイ光X線スペクトル

第6章 ま と め

愛野向山Ⅱ遺跡の発掘調査区では、弥生時代後期の拠点集落の全容、古墳時代の初期群集墳の良好な遺構、遺物を確認することができた。冒頭で述べたように本章では予算から紙面と時間制約もあるので、これらの遺構・遺物の考察をすることはできない。遺跡の重要性から見ていささか簡単ではあるが、調査から得られた以上2点の内容の概略を提示しまとめに替えたい。

弥生時代後期集落について

本遺跡での弥生時代後期集落の様相は、中期中葉～後期前半新段階まで2～3棟の竪穴住居で構成された小規模集落が、後期後半古段階に拡大現象が見られ、後半中～新段階（＝欠山式段階）に大規模集落として変貌を遂げる。小規模集落段階では居住域はB地区で、方形周溝墓を中心とする墓域は、中期中葉ではA地区、中期後葉～前半古段階ではC地区と丘陵を離れた場所に墓域を設定していたものが、後期後半段階になるとB・C地区共に居住域に隣接した場所に設定される変化が読み取れた。ただし、C地区の小銅鐸を出土した木棺墓群については、後期前半新段階から造墓が始まり後期後半中段階成まで継続するという、短期の方形周溝墓とは異なる長い造墓期間を有していた。おそらく、方形周溝墓が集落内の有力家長や首長層の墓であったのに対して、木棺墓群は小銅鐸祭祀を司る司祭者集団の墓と想定されるのである。このように本遺跡の弥生後期集落については、墓域と居住域の両方が確認され集落構造の全容が判明した遺跡としては、静岡県内でも数少ない調査例となっている。

初期群集墳について

初期群集墳については、4世紀代に遡るものがC地区10号墳主体部1で確認できたが、5世紀中葉になると爆発的に小円墳が造られるようになる。弥生後期集落は古墳時代初頭には壊滅的となるが5世紀中葉まで2～3軒程度継続し、その墓域としては小古墳がC地区に築造されたと思われる。5世紀中葉に集落が廃絶すると同時にB18号墳の築造がB地区で開始され、まずB地区を中心として須恵器編年TK208段階に爆発的に造墓が開始される。この段階では五鈴鏡を伴うB27号墳が中心古墳となり、TK23～47段階になるとB地区からC地区の乳文鏡や馬具をもつB12号墳主体部1に中心古墳が移動する。6世紀前半段階になると、B地区ではB24号墳に追葬が見られる程度となり、築造の主体はA・C地区に移動すると考えられる。TK43段階には土坑墓も含めて築造は終了する。その後、C地区とB地区の南側に総数30基以上になる中規模の愛野向山横穴群の築造が開始される。このように、本古墳群は当地域の初期群集墳の内容を知るうえで欠くことのできない資料を提示している。

なお、本遺跡・古墳群の検討課題の内、高地性集落や環濠集落との関係についての文献（松井1988・2001）、当地域の竪穴住居の形態変化に関する文献（松井1992）、掘立柱建物の位置づけに関する文献（松井1995）、周溝をもつ竪穴住居に関する文献（松井2002）、方形周溝墓と集落、木棺に関する文献（松井1996・1998）、小銅鐸に関する文献（松井1989・2004）、初期群集墳に関する文献（松井1994・1996）にてすでに若干の考察しているため、これらの文献を参照されたい。

本遺跡の現地調査終了後すでに20年近い歳月が流れてしまった。現在の発掘調査計画から見ると無謀な予算や期間を強いられた計画で、今から見ると現地調査もよく終了できたと感慨深い。これというも、チャーム工業株式会社を始めとし調査員、現地作業員、化学分析と早くから原稿を執筆して頂きました諸先生方、多くの関係者の方々のご支援を頂いた賜物である。しかしながら、成果の公表を長期に遅延させ関係者に迷惑をかけた責任は、組織的な問題もあるが担当者の責任に帰するものである。資料提供に徹した報告書になったが、これで責任が少しでも果たされたと切に希望する。

【参考文献】

- 袋井市教育委員会 1986 「愛野向山A-1号墓」 『昭和60年度国庫補助事業発掘調査報告書』
- 袋井市教育委員会 1987 『愛野向山A-2・3・4号墳』
- 袋井市教育委員会 1988 『愛野向山A-8号墳 愛野向山墳墓群 愛野向山IV遺跡』
- 袋井市教育委員会 1992 『団子塚遺跡-遺構編-』
- 袋井市教育委員会 1995 『坂尻遺跡-遺物・総括編-』
- 袋井市教育委員会 1996 『金山古墳群・金山横穴群Ⅰ・Ⅱ』
- 袋井市教育委員会 1996 『井守塚古墳群』
- 袋井市教育委員会 1996 『高尾向山遺跡Ⅱ』
- 袋井市教育委員会 2001 『掛之上遺跡Ⅶ』
- 袋井市教育委員会 2002 『掛之上遺跡Ⅵ・Ⅷ』
- 袋井市教育委員会 2002 『掛之上遺跡Ⅸ・Ⅹ』
- 浅羽町教育委員会 1992 『団子塚遺跡(1)』
- 浅羽町教育委員会 1994 『北山遺跡』
- 松井一明他 1987 「静岡県愛野向山遺跡」 『日本考古学年報』 38 日本考古学協会
- 松井一明 1988 「静岡県における囲郭集落と高地性集落について」 『マージナル』 No.8 愛知県考古学談話会
- 松井一明 1989 「静岡県袋井市愛野向山Ⅱ遺跡出土の小銅鐸」 『考古学雑誌』 第75巻第2号 日本考古学会
- 松井一明 1989 「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器陶器生産の一考察」 『静岡県の窯業遺跡』 静岡県教育委員会
- 松井一明 1992 「考察-中遠地域の竪穴住居の編年の様相-」 『鶴松遺跡Ⅴ』 袋井市教育委員会
- 松井一明 1994 「遠江・駿河における初期群集墳の成立と展開について」 『向坂鋼二先生還暦記念論集 地域と考古学』
- 松井一明 1995 「古墳時代の掘立柱建物について」 『古墳時代の集落』 静岡県考古学会
- 松井一明 1995 「古墳時代前半期土器について」「古墳時代後半期土器編年」 『坂尻遺跡-遺物・総括編-』 袋井市教育委員会
- 松井一明 1996 「原野谷川中流域における初期群集墳・後期群集墳の成立と展開」 『金山古墳群・金山横穴群Ⅰ・Ⅱ』 袋井市教育委員会
- 松井一明 1996 「高尾向山遺跡に見る後期方形周溝墓の様相」 『高尾向山遺跡Ⅱ』 袋井市教育委員会
- 松井一明 1998 「静岡県における方形周溝墓の埋葬主体部について-木棺を中心として-」 『静岡県考古学研究』 No.30 静岡県考古学会
- 松井一明 2001 「東西日本弥生集落の交差点-東海の弥生集落-」 『弥生時代の集落』 学生社
- 松井一明 2002 「竪穴住居と掘立柱建物-静岡県下における低地集落の建物構造と集落イメージ-」 『静岡県における弥生時代集落の変遷』 静岡県考古学会
- 松井一明 2004 「小銅鐸と銅鐸祭祀」 『季刊考古学』 第86号 雄山閣

図 版

図版目次

第1図	愛野向山遺跡の位置図	第96図	B23・26号墳主体部実測図
第2図	弥生時代遺跡分布図	第97図	B24・27・30号墳主体部実測図
第3図	周辺遺跡分布図	第98図	B20・29号墳SK1・2実測図
第4図	A地区地形・全体図	第99図	B32号墳主体部 土器棺1～4実測図
第5図	1・2号方形周溝墓 B3号墳実測図	第100図	C地区地形・全体図
第6図	B4・5号墳実測図	第101図	SB1・2実測図
第7図	2号方形周溝墓・B5号墳主体部実測図	第102図	SB3・4実測図
第8図	B地区全体図	第103図	SB5・6実測図
第9図	SB1・4・5実測図	第104図	SB1～5炉実測図
第10図	SB2・3実測図	第105図	1号方形周溝墓実測図
第11図	SB6・8～10実測図	第106図	2号方形周溝墓実測図
第12図	SB7実測図	第107図	3号方形周溝墓実測図
第13図	SB11・13実測図	第108図	SX1実測図
第14図	SB12実測図	第109図	1号方形周溝墓主体部1～3・5実測図
第15図	SB14～16・23・24・27実測図	第110図	1号方形周溝墓主体部4・6実測図
第16図	SB17～22実測図	第111図	3号方形周溝墓 主体部2 SX1主体部1・2実測図
第17図	SB25・26・28実測図	第112図	SX1主体部3・4実測図
第18図	SB29・30実測図	第113図	SX1主体部5～8実測図
第19図	SB31・32・34実測図	第114図	SK1～4実測図
第20図	SB33・36・38実測図	第115図	SK5～7実測図
第21図	SB35・37実測図	第116図	SK8～11実測図
第22図	SB39～41実測図	第117図	SK12～15実測図
第23図	SB42・43実測図	第118図	B10号墳実測図
第24図	SB44・46・47実測図	第119図	B12号墳実測図
第25図	SB45・67・68実測図	第120図	B13号墳実測図
第26図	SB49・50実測図	第121図	B14号墳実測図
第27図	SB51～53実測図	第122図	B10号墳主体部実測図
第28図	SB54・55実測図	第123図	B12号墳主体部1実測図
第29図	SB56～58実測図	第124図	B12号墳主体部2実測図
第30図	SB59・63 湧水遺構実測図	第125図	B13・14号墳主体部実測図
第31図	SB60・61実測図	第126図	B14号墳主体部1実測図
第32図	SB62・90実測図	第127図	土器棺1～4実測図
第33図	SB64～66実測図	第128図	土器実測図1
第34図	SB69実測図	第129図	土器実測図2
第35図	SB70・71・76実測図	第130図	土器実測図3
第36図	SB72・73・77実測図	第131図	土器実測図4
第37図	SB74・75実測図	第132図	土器実測図5
第38図	SB78・79・86・89実測図	第133図	土器実測図6
第39図	SB80～82実測図	第134図	土器実測図7
第40図	SB83～85実測図	第135図	土器実測図8
第41図	SB87・88・91実測図	第136図	土器実測図9
第42図	SB2・4～10炉実測図	第137図	土器実測図10
第43図	SB12・14・18・20・22・23・25・27 炉実測図	第138図	土器実測図11
第44図	SB28・29・31・39・41～44炉実測図	第139図	土器実測図12
第45図	SB45・46・49・50・53・55・57炉実測図	第140図	土器実測図13
第46図	SB58～62・64炉実測図	第141図	土器実測図14
第47図	SB67・69・71・72・75～81・84・85炉実測図	第142図	土器実測図15

第48図 SH 1 ~ 3 実測図
第49図 SH 4 ~ 7 実測図
第50図 SH 8 ~ 13 実測図
第51図 SH 14・15 実測図
第52図 SH 16・17 実測図
第53図 SH 18・19 実測図
第54図 SH 20 ~ 22 実測図
第55図 SH 23・24 実測図
第56図 SH 25 ~ 28 実測図
第57図 SH 29・30・32 ~ 34 実測図
第58図 SH 31・35 ~ 37 実測図
第59図 SH 38 ~ 40 実測図
第60図 SH 41 ~ 43・48 実測図
第61図 SH 44 ~ 46 実測図
第62図 SH 47・49 SA 1・4 実測図
第63図 SA 2・3 実測図
第64図 SH 6・7 周辺遺構配置図
第65図 1・2号方形周溝墓実測図
第66図 3・5号方形周溝墓実測図
第67図 4・7号方形周溝墓実測図
第68図 6・8号方形周溝墓実測図
第69図 9・10号方形周溝墓実測図
第70図 11号方形周溝墓実測図
第71図 B 8号墳 12号方形周溝墓実測図
第72図 13・14号方形周溝墓実測図
第73図 1・2号方形周溝墓主体部実測図
第74図 3・4号方形周溝墓主体部実測図
第75図 5・6・11号方形周溝墓主体部実測図
第76図 7 ~ 10号方形周溝墓主体部実測図
第77図 11・13・14号方形周溝墓主体部実測図
第78図 12号方形周溝墓主体部実測図
第79図 SK 1 ~ 4 実測図
第80図 SK 5 ~ 9 実測図
第81図 SK 10 ~ 15 実測図
第82図 SK 16 ~ 19・26 実測図
第83図 SK 20 ~ 23 実測図
第84図 SK 24・25・27・28 実測図
第85図 B 6号墳実測図
第86図 B 15・18号墳実測図
第87図 B 17・19・31号墳実測図
第88図 B 20号墳実測図
第89図 B 21・23・26号墳実測図
第90図 B 22・25号墳実測図
第91図 B 24・32号墳実測図
第92図 B 27・33号墳実測図
第93図 B 29・30号墳実測図
第94図 B 18・19号墳主体部実測図
第95図 B 20 ~ 22号墳主体部実測図

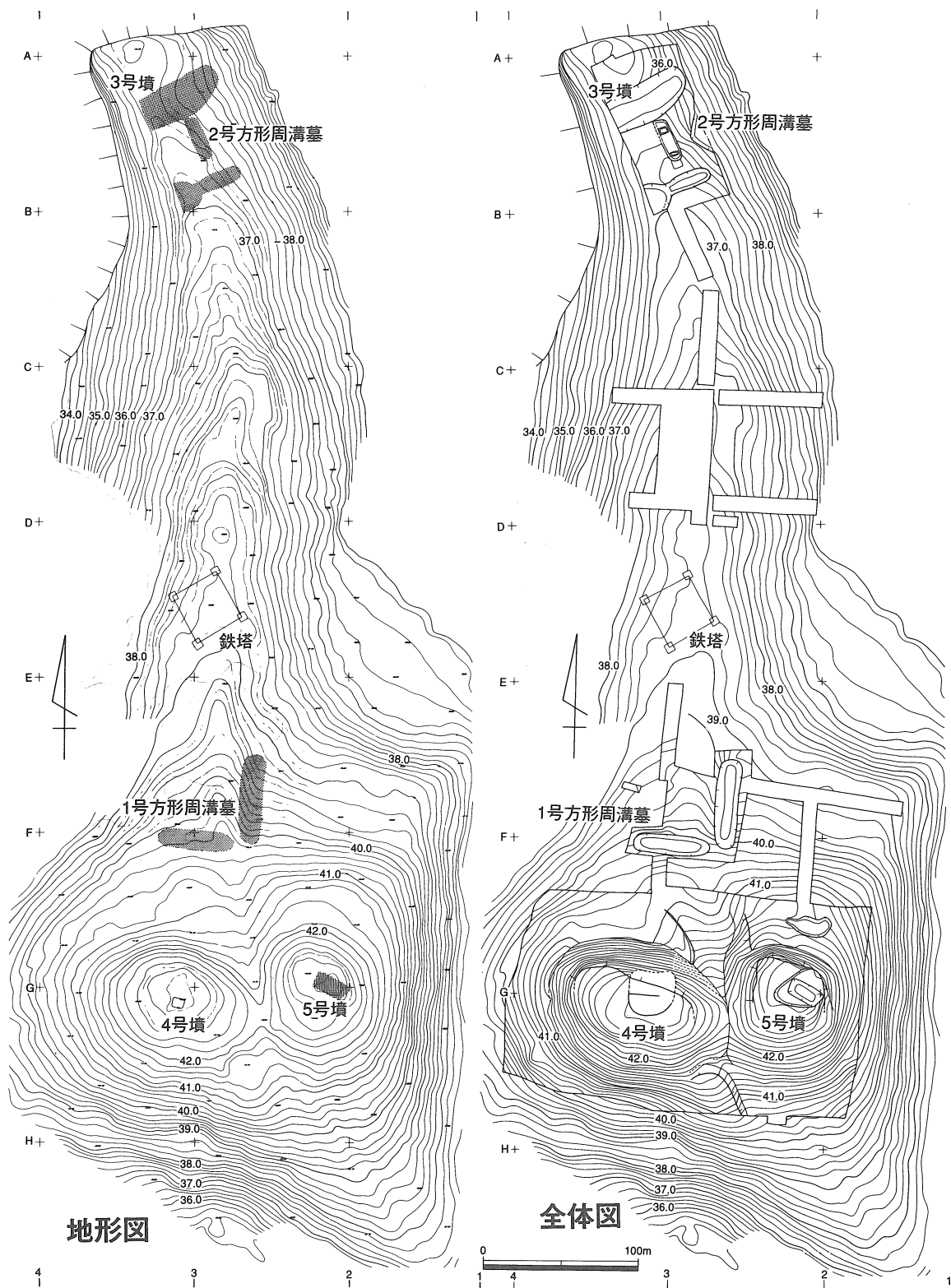
第143図 土器実測図16
第144図 土器実測図17
第145図 土器実測図18
第146図 土器実測図19
第147図 土器実測図20
第148図 土器実測図21
第149図 土器実測図22
第150図 土器実測図23
第151図 土器実測図24
第152図 土器実測図25
第153図 土器実測図26
第154図 土器実測図27
第155図 土器実測図28
第156図 土器実測図29
第157図 土器実測図30
第158図 土器実測図31
第159図 土器実測図32
第160図 土器実測図33
第161図 土器実測図34
第162図 土器実測図35
第163図 土器実測図36
第164図 土器実測図37
第165図 土器実測図38
第166図 土器実測図39
第167図 土器実測図40
第168図 土器実測図41
第169図 土器実測図42
第170図 土器実測図43
第171図 土器実測図44
第172図 土器実測図45
第173図 土器実測図46
第174図 土器実測図47
第175図 土器実測図48
第176図 金属器・玉類・石器実測図 1
第177図 金属器・玉類・石器実測図 2
第178図 金属器・玉類・石器実測図 3
第179図 金属器・玉類・石器実測図 4
第180図 金属器・玉類・石器実測図 5
第181図 金属器・玉類・石器実測図 6
第182図 金属器・玉類・石器実測図 7
第183図 金属器・玉類・石器実測図 8
第184図 金属器・玉類・石器実測図 9
第185図 金属器・玉類・石器実測図10
第186図 金属器・玉類・石器実測図11
第187図 金属器・玉類・石器実測図12
第188図 金属器・玉類・石器実測図13
第189図 金属器・玉類・石器実測図14



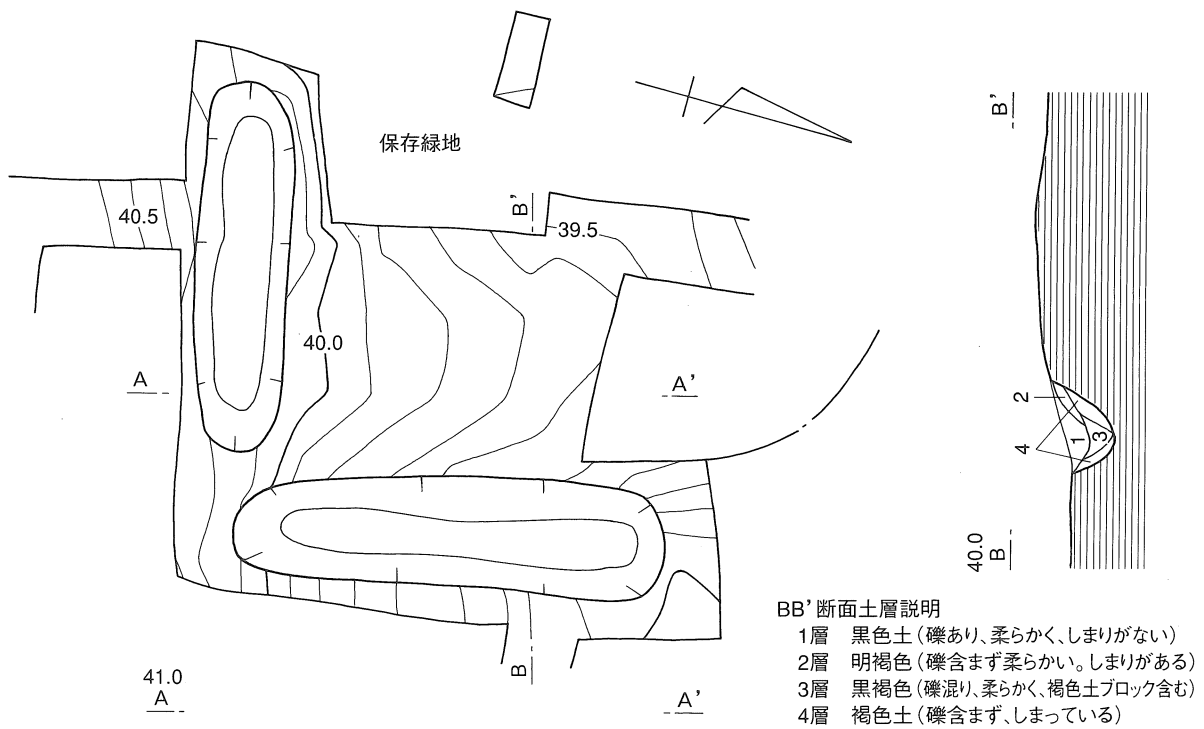
第2図 弥生時代遺跡分布図



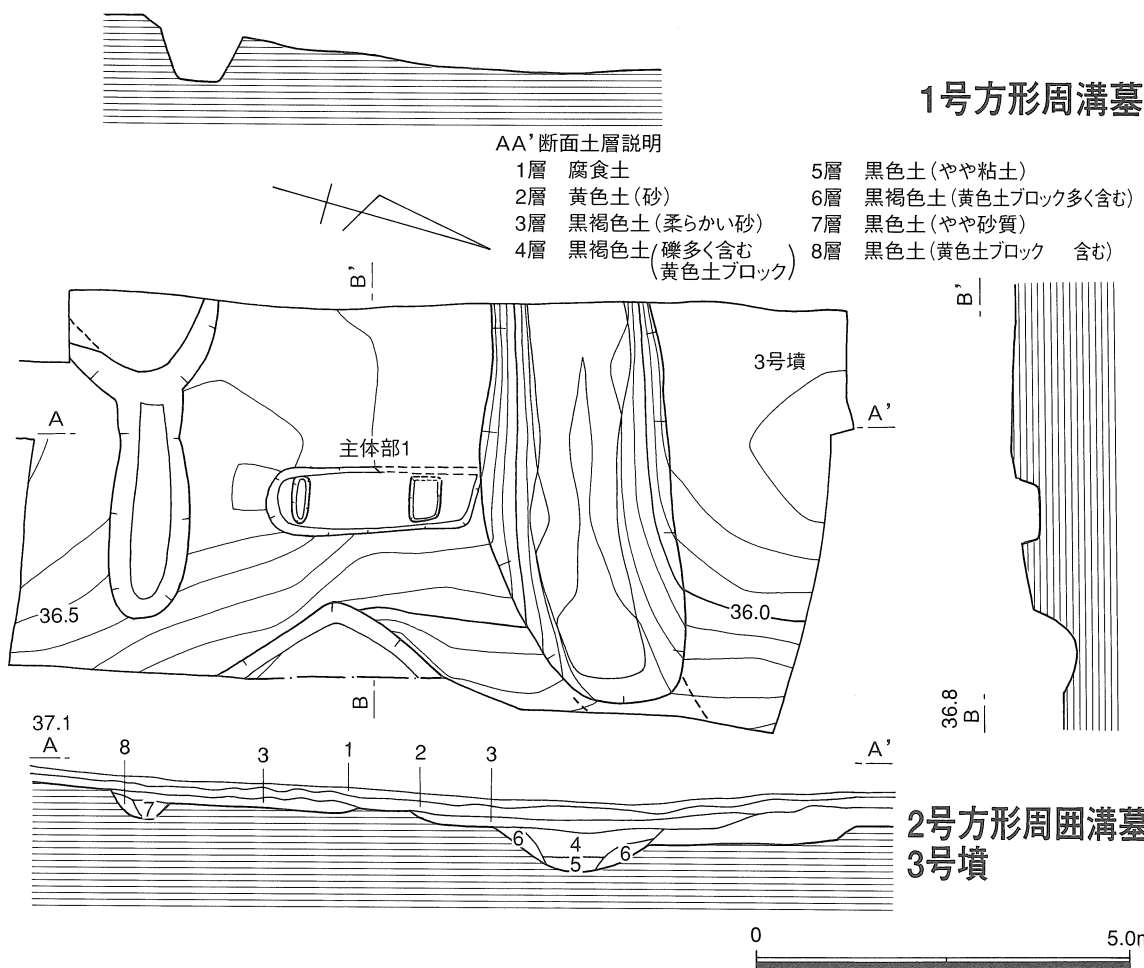
第3図 周辺遺跡分布図



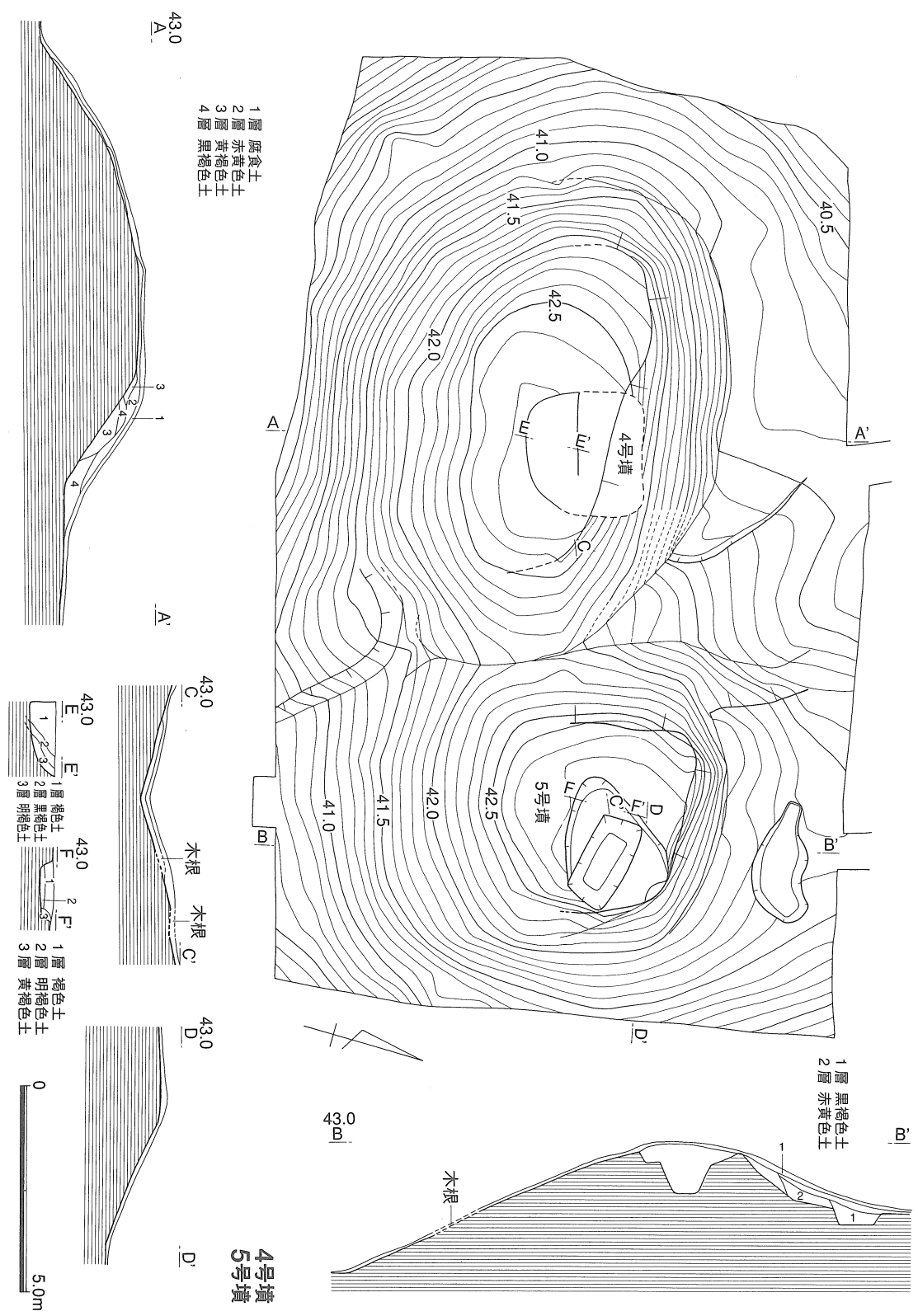
第4図 A地区地形・全体図



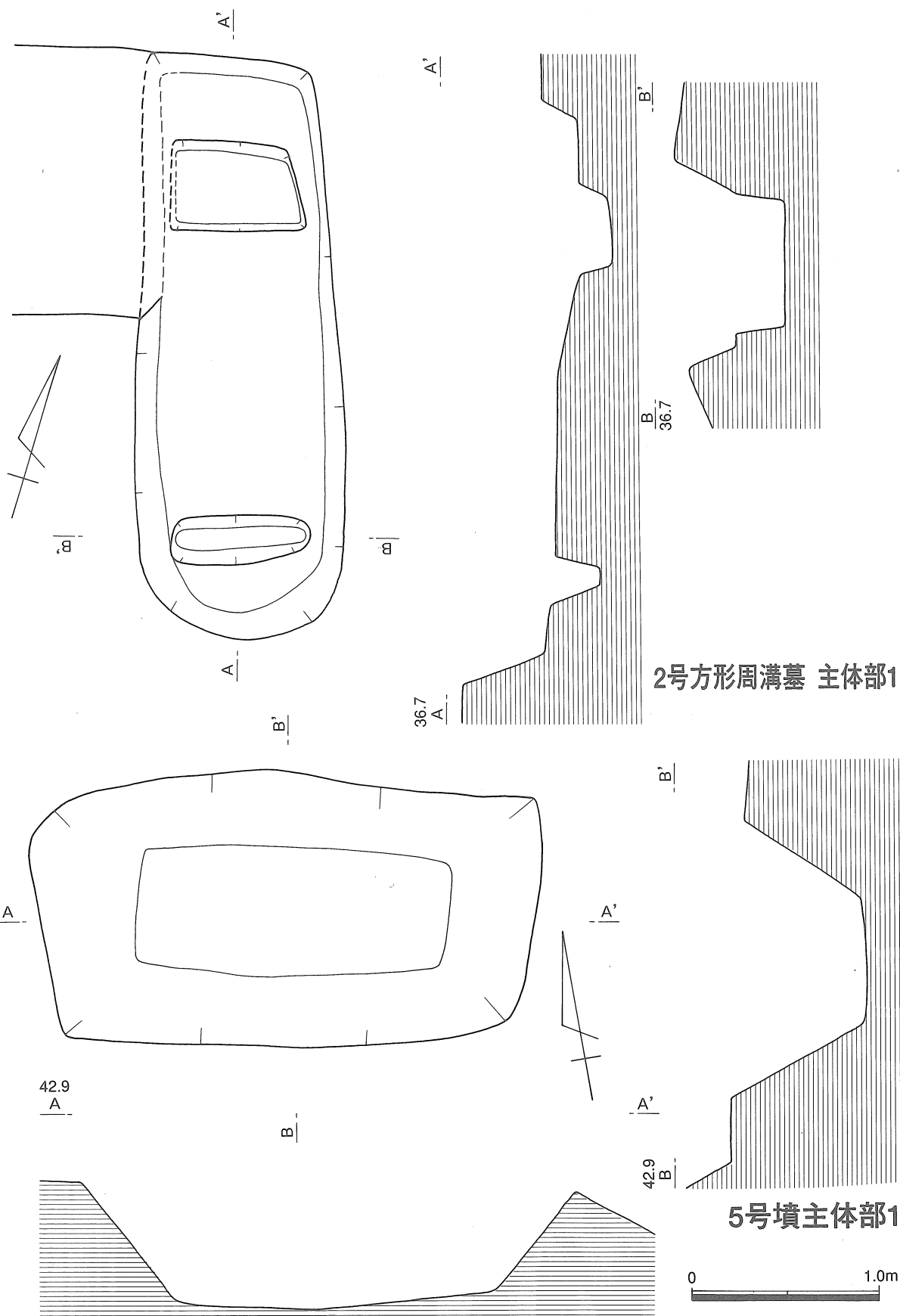
1号方形周溝墓



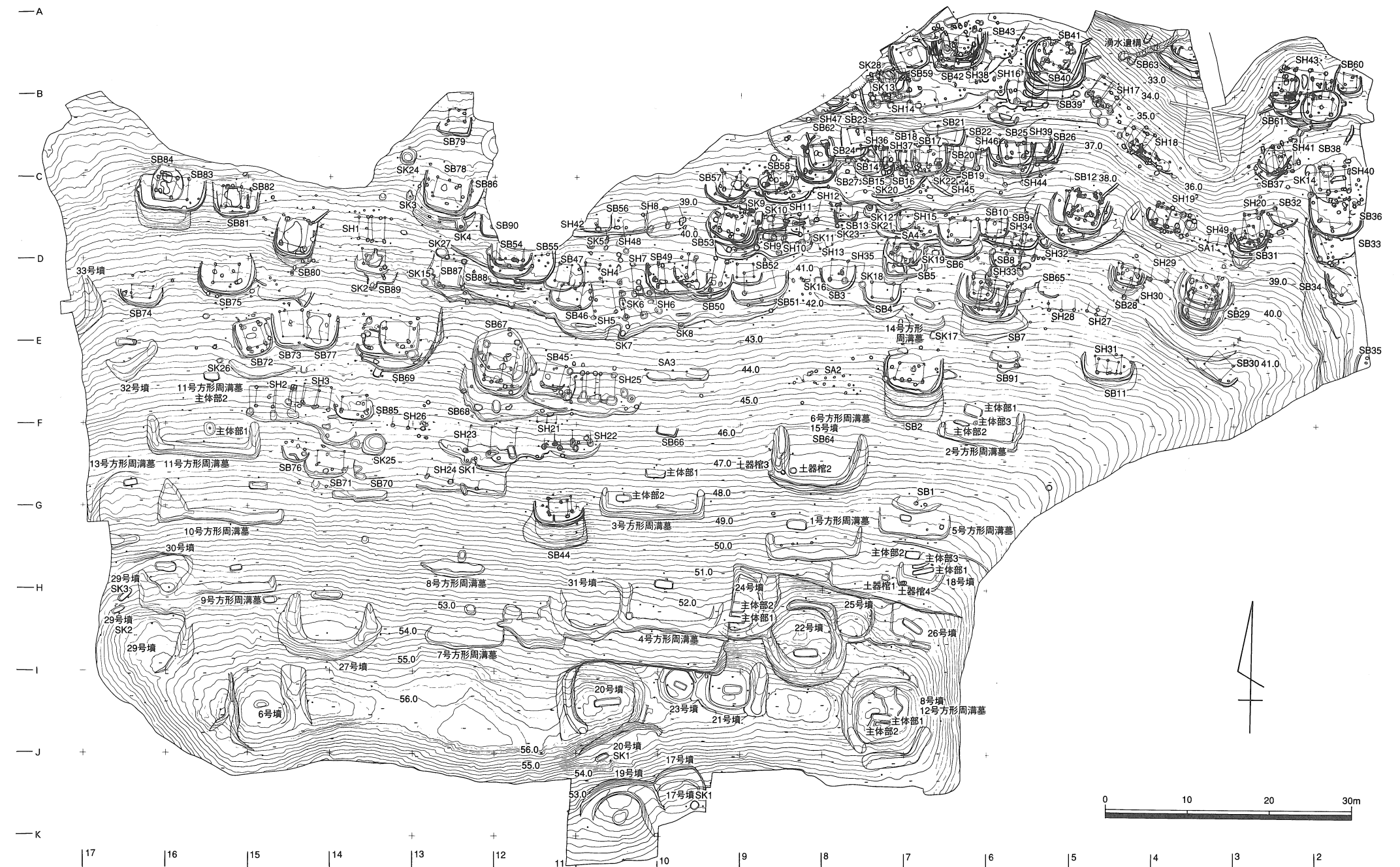
第5図 1・2号方形周溝墓 B 3号墳実測図



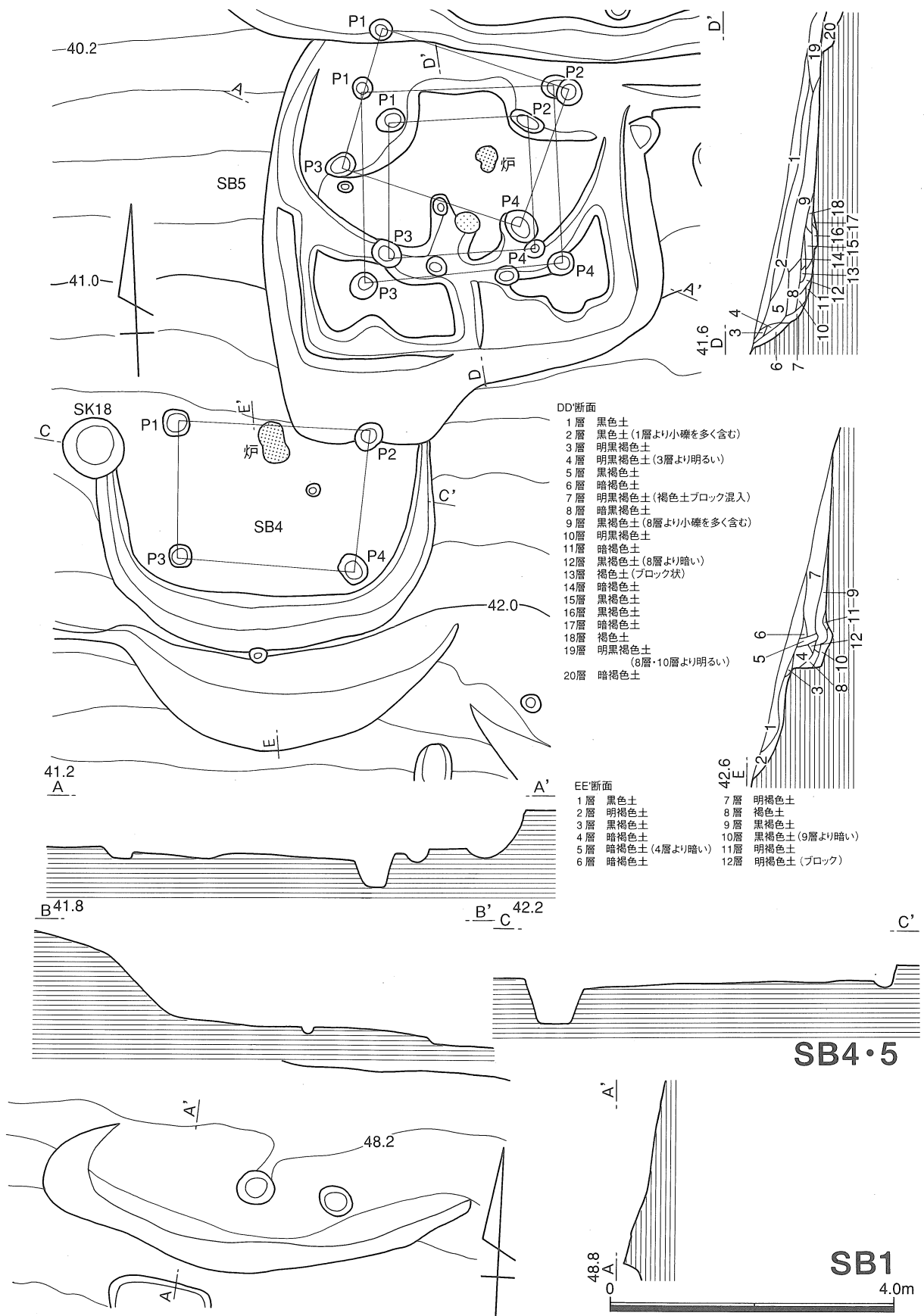
第6图 B4・5号墳実測図



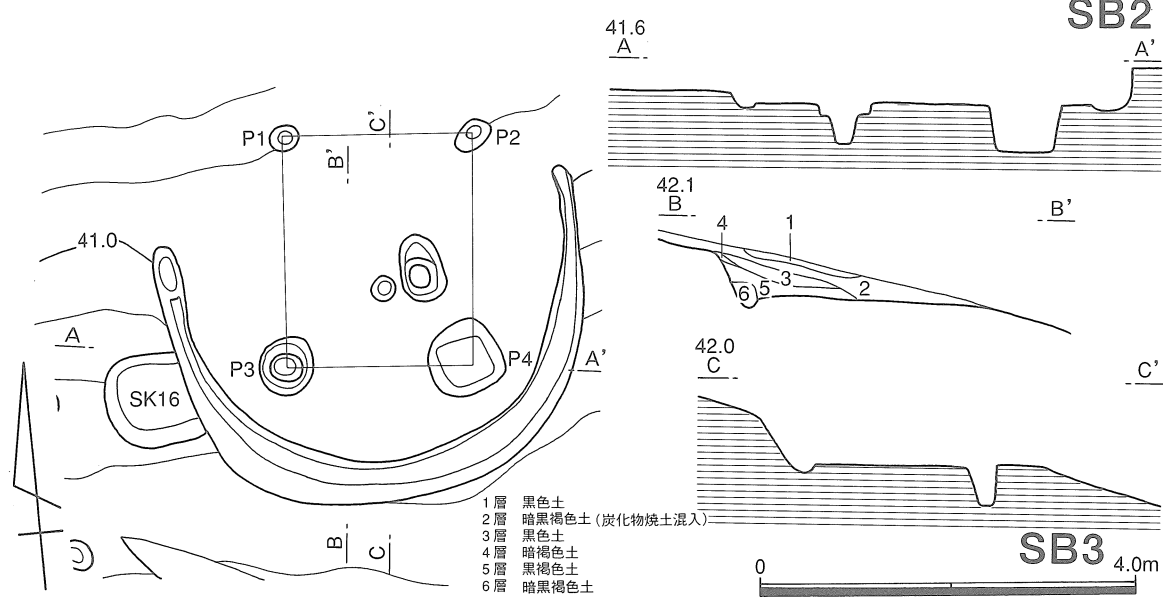
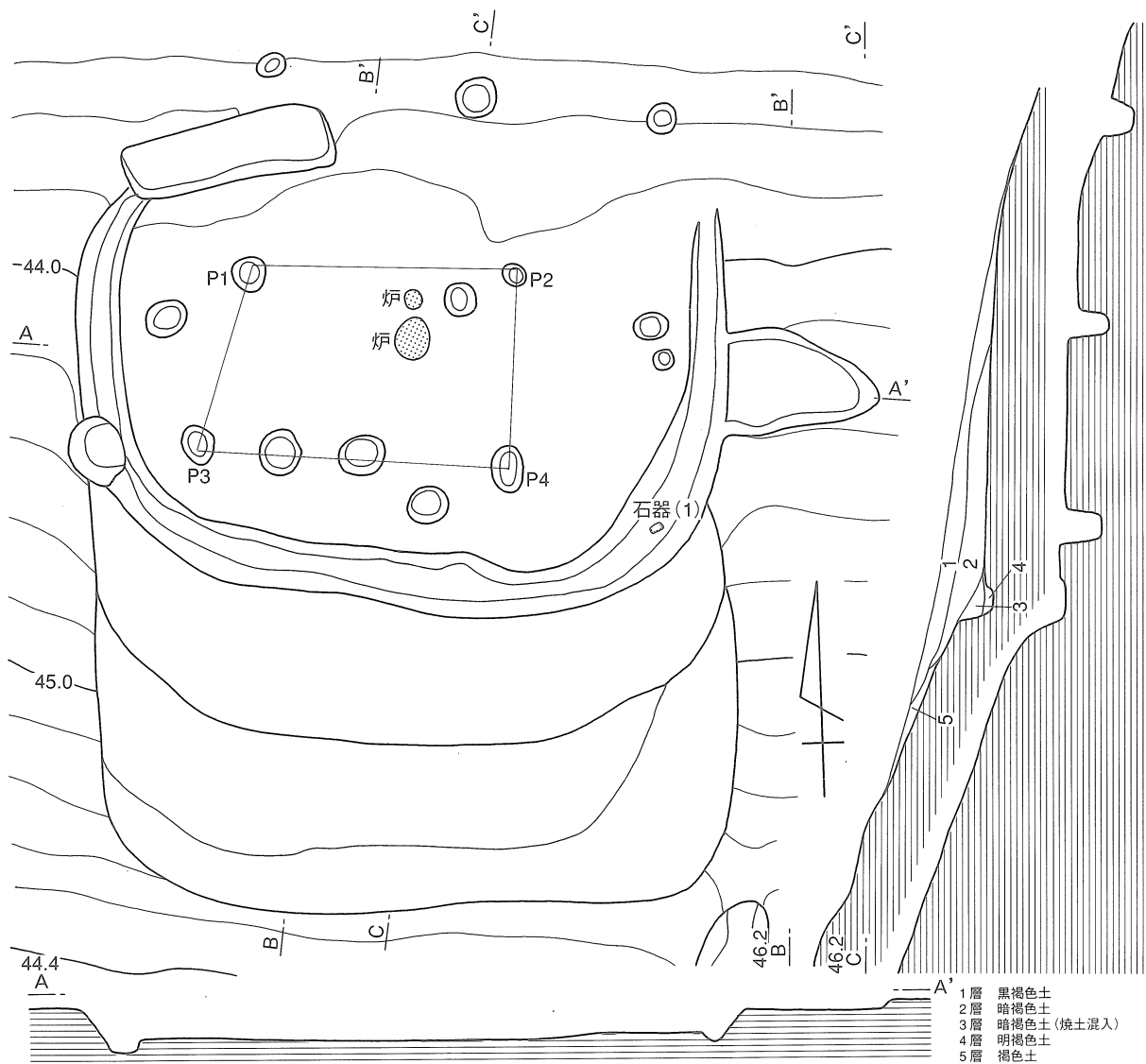
第7图 2号方形周溝墓・B 5号墳主体部実測図



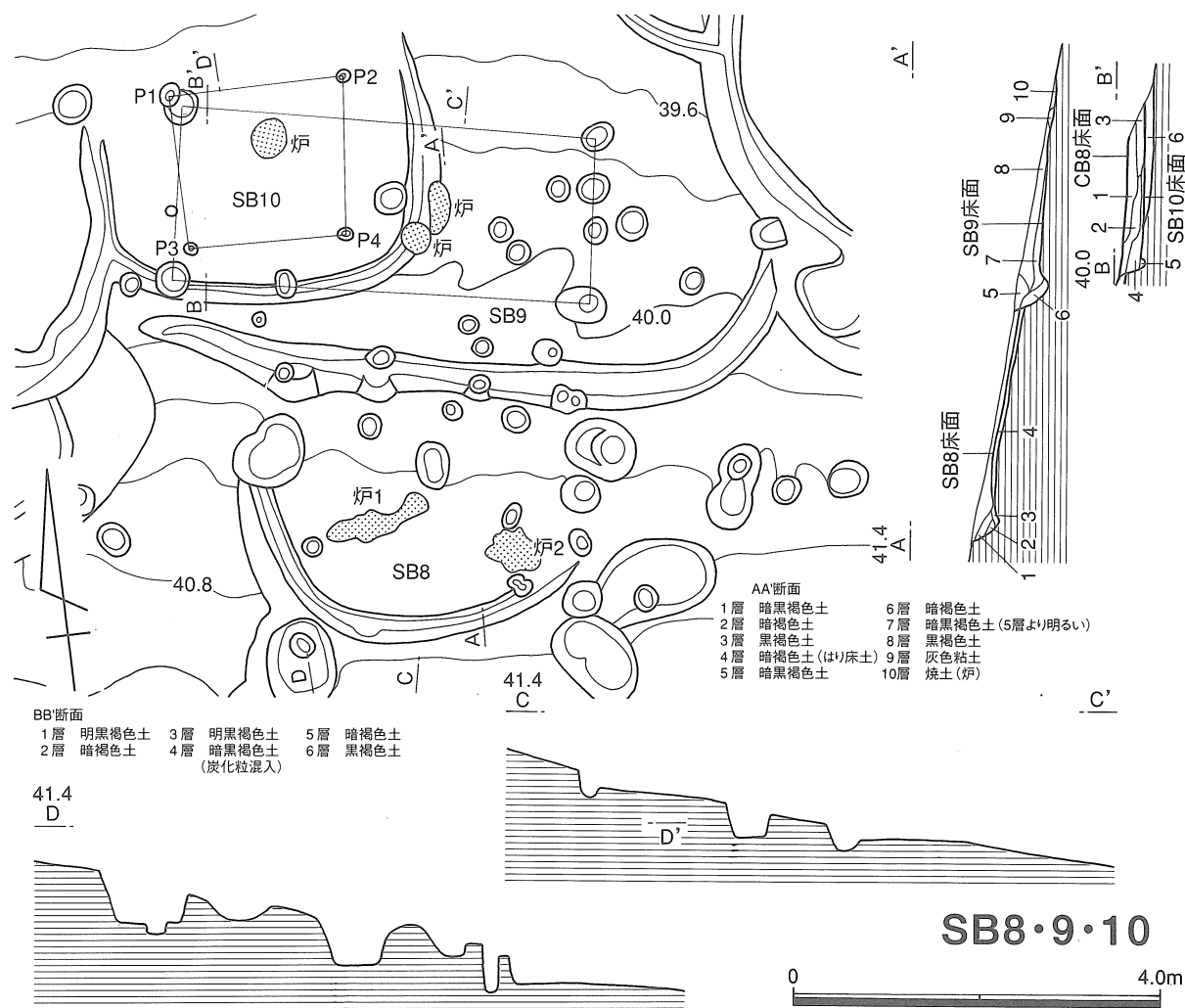
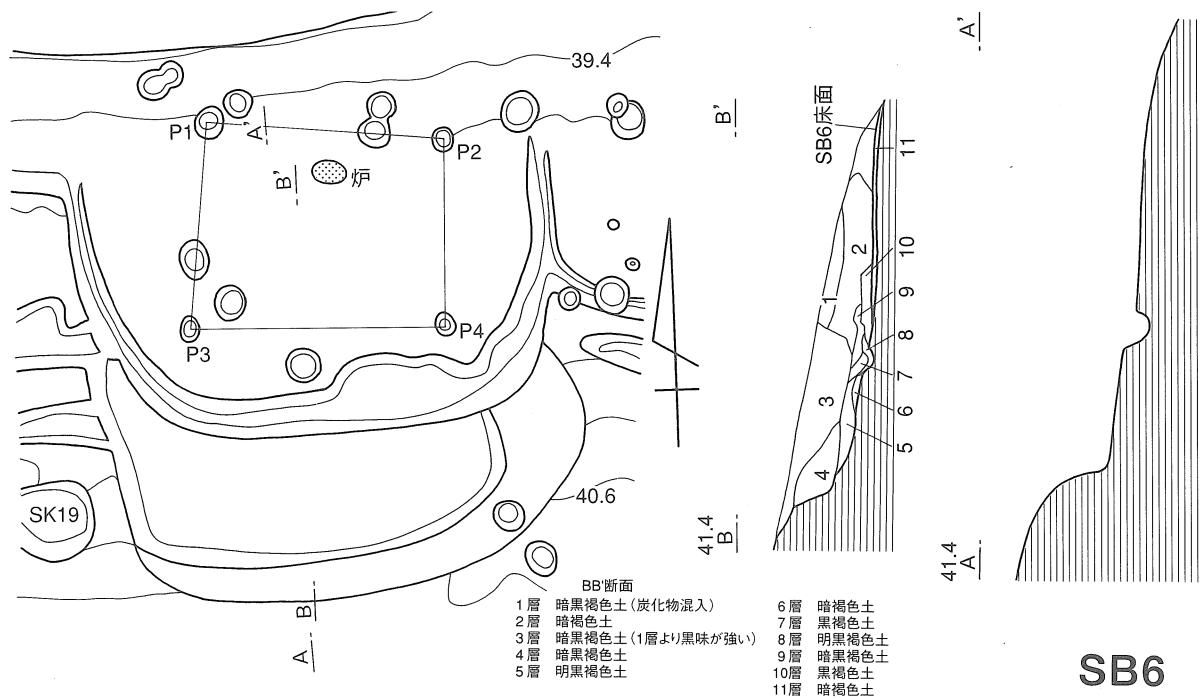
第8图 B地区全体图



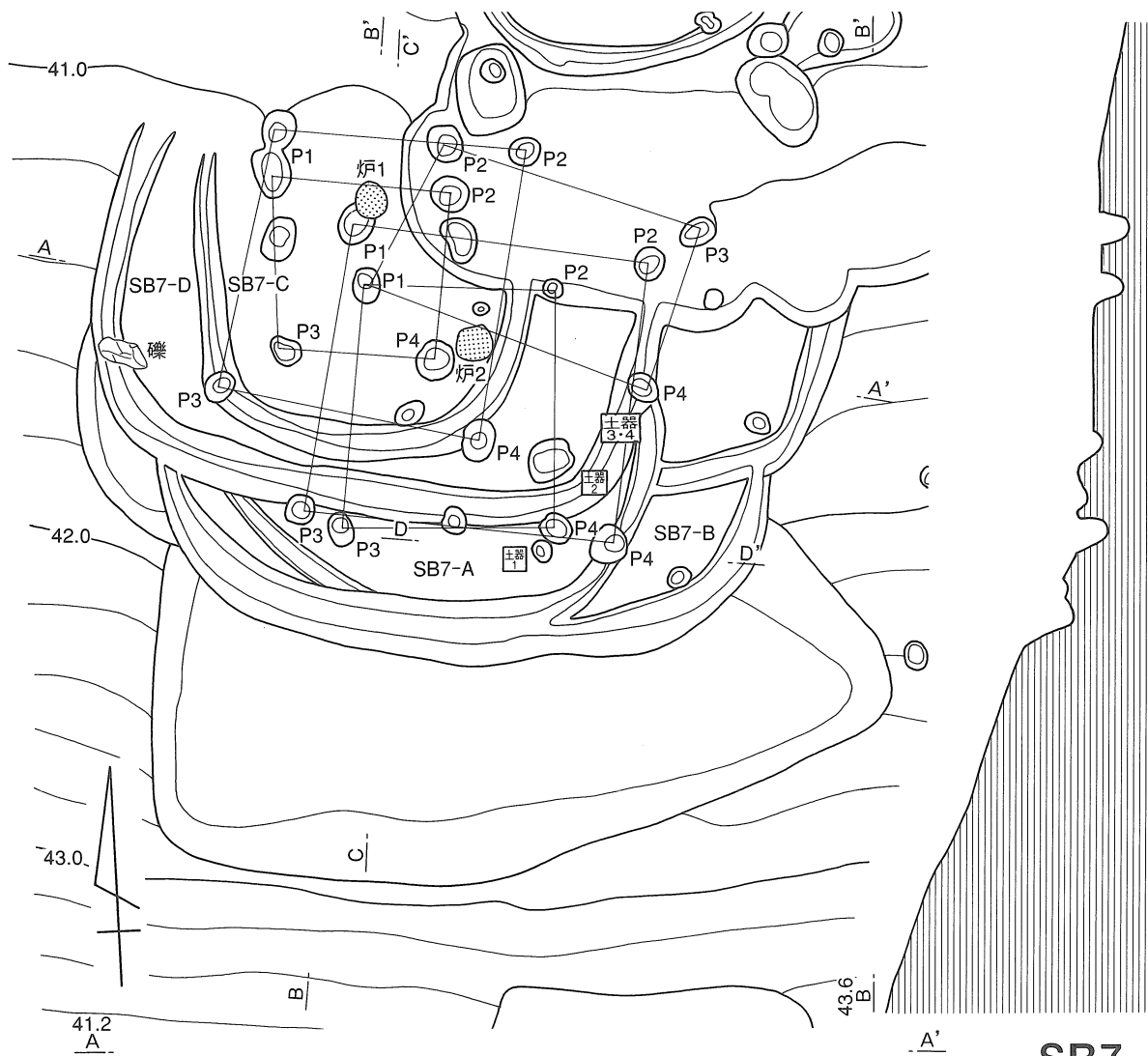
第9図 SB1・4・5実測図



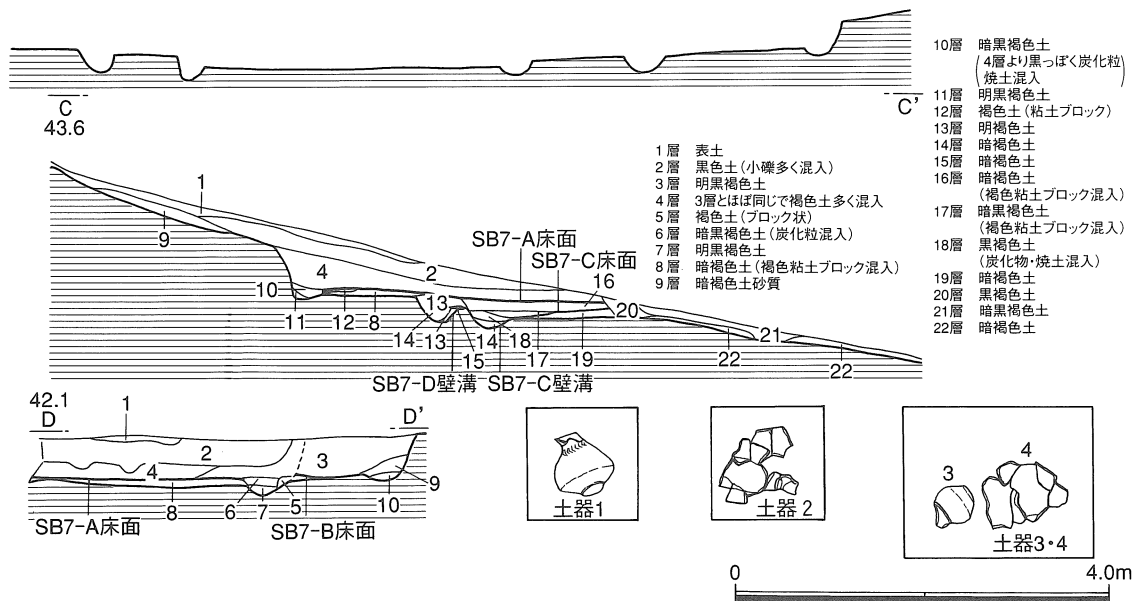
第10図 S B 2・3実測図



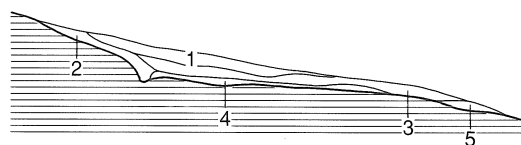
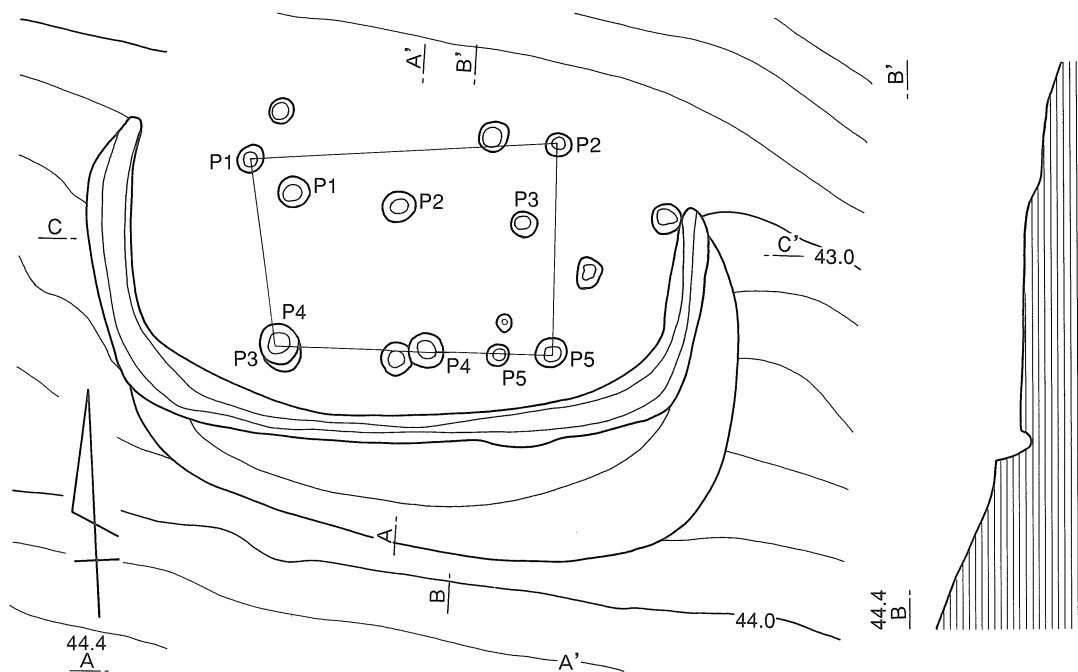
第11図 SB6・8・10実測図



SB7



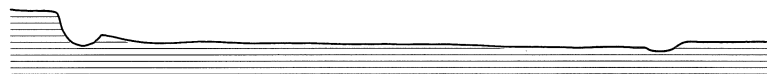
第12図 SB7実測図



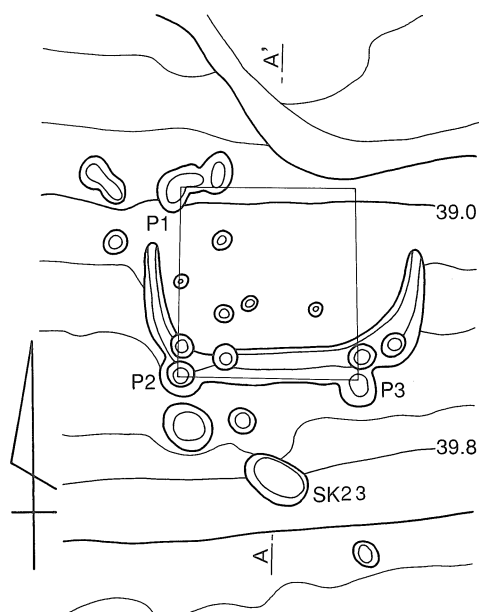
- 1層 暗黒褐色土
- 2層 暗褐色土
- 3層 明黒褐色土
- 4層 暗褐色土(はり床)
- 5層 褐色土

39.8
C

C'

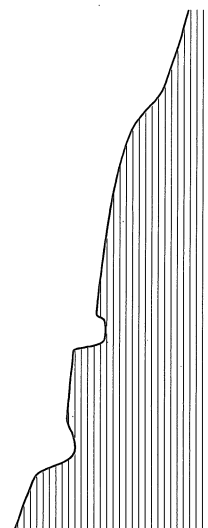


SB11



A'

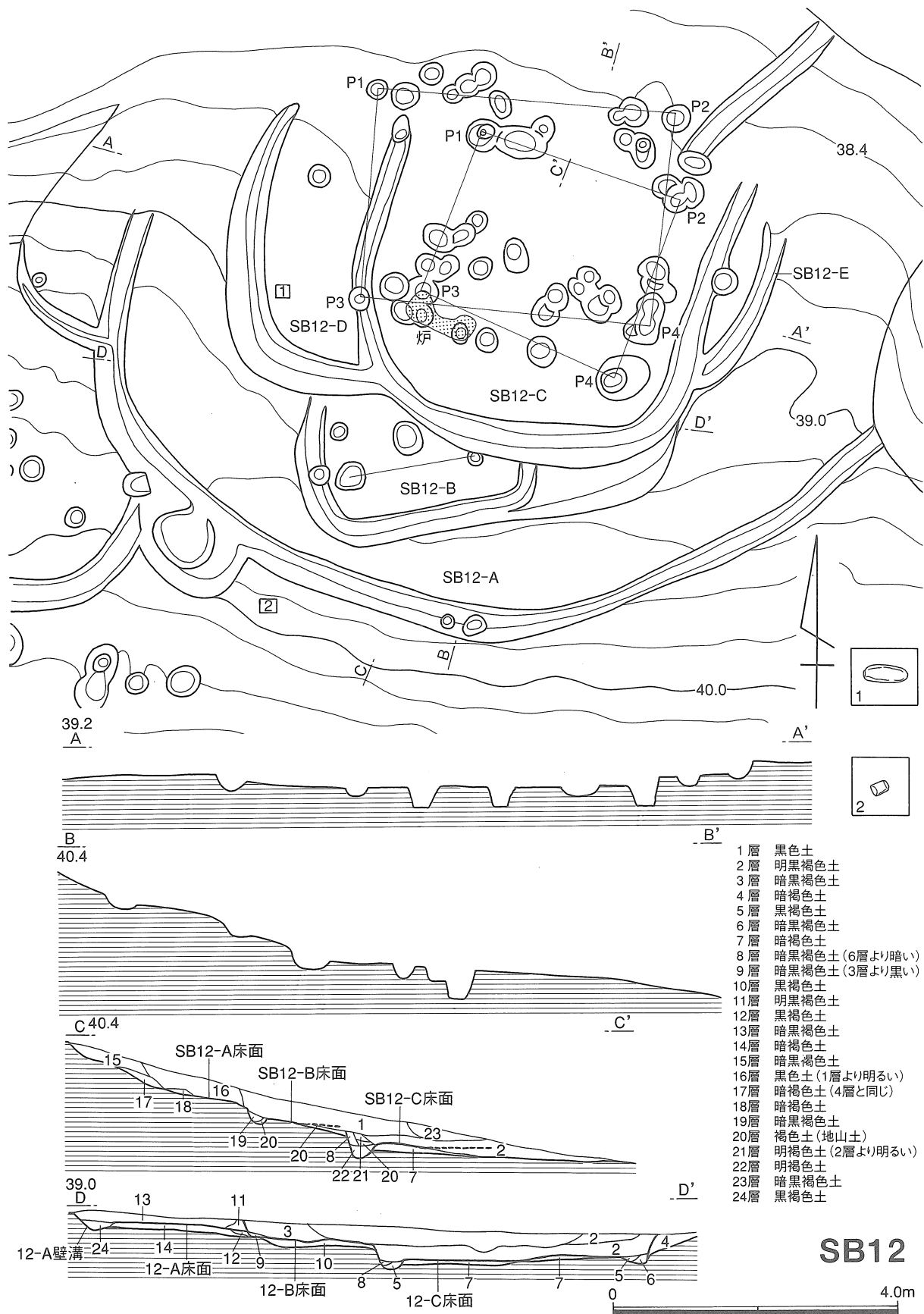
40.4
A



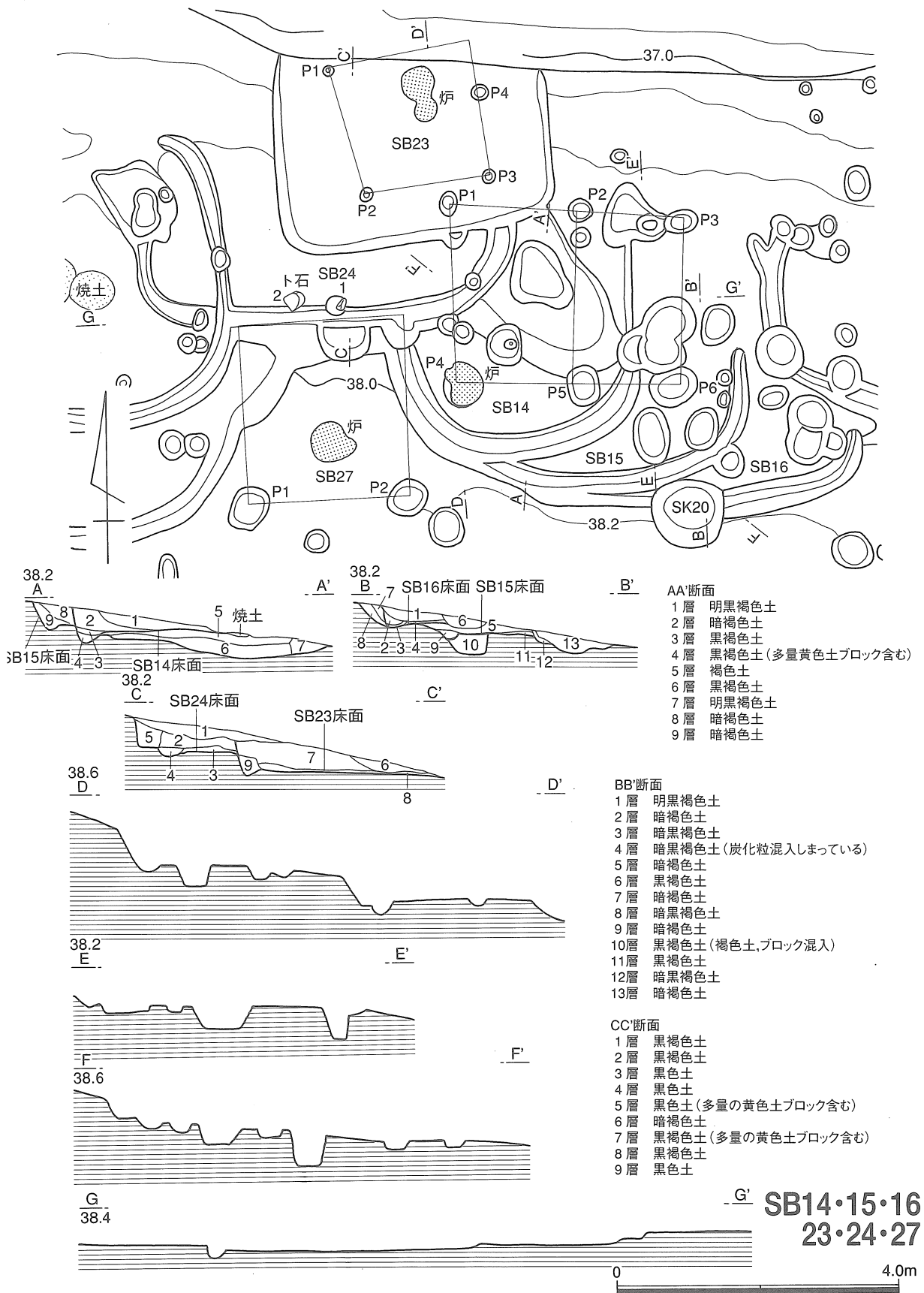
SB13



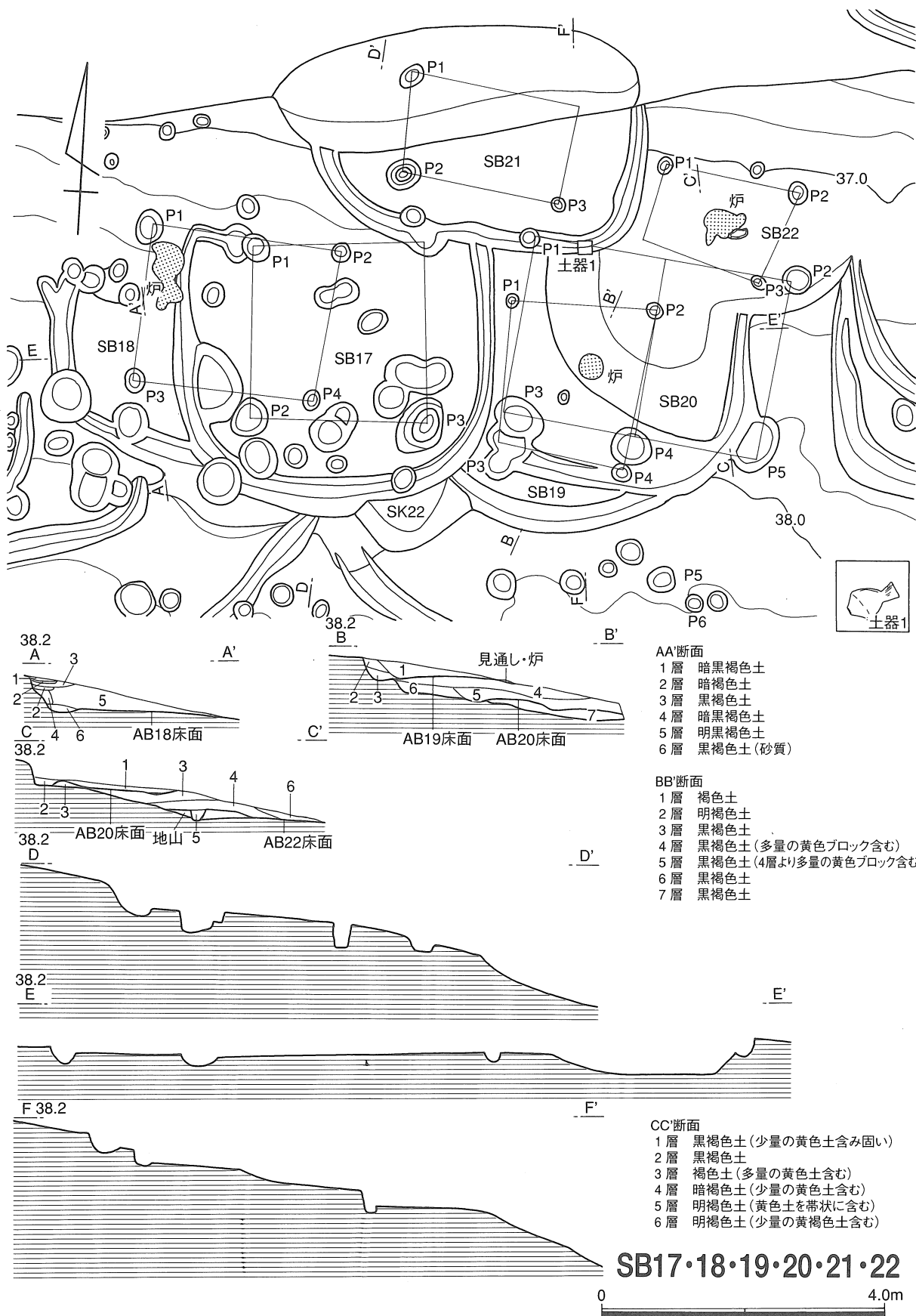
第13図 S B 11・13実測図



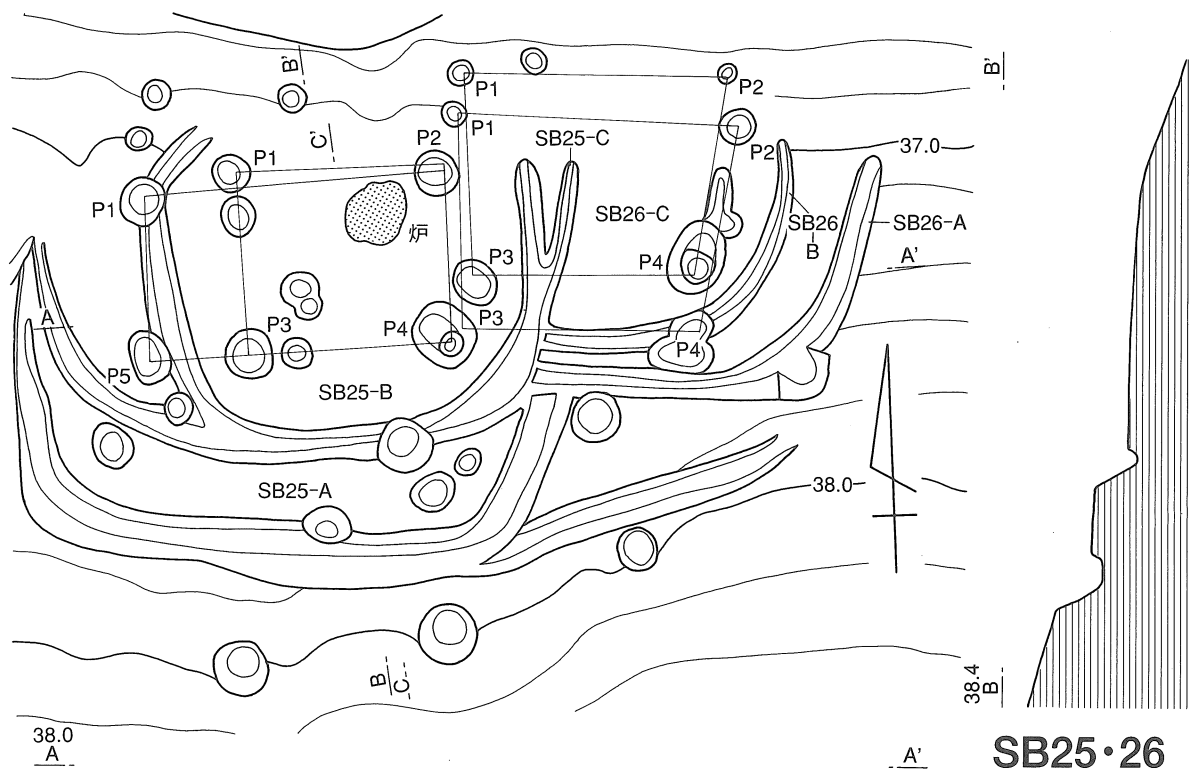
第14図 SB12実測図



第15図 S B 14~16・23・24・27実測図

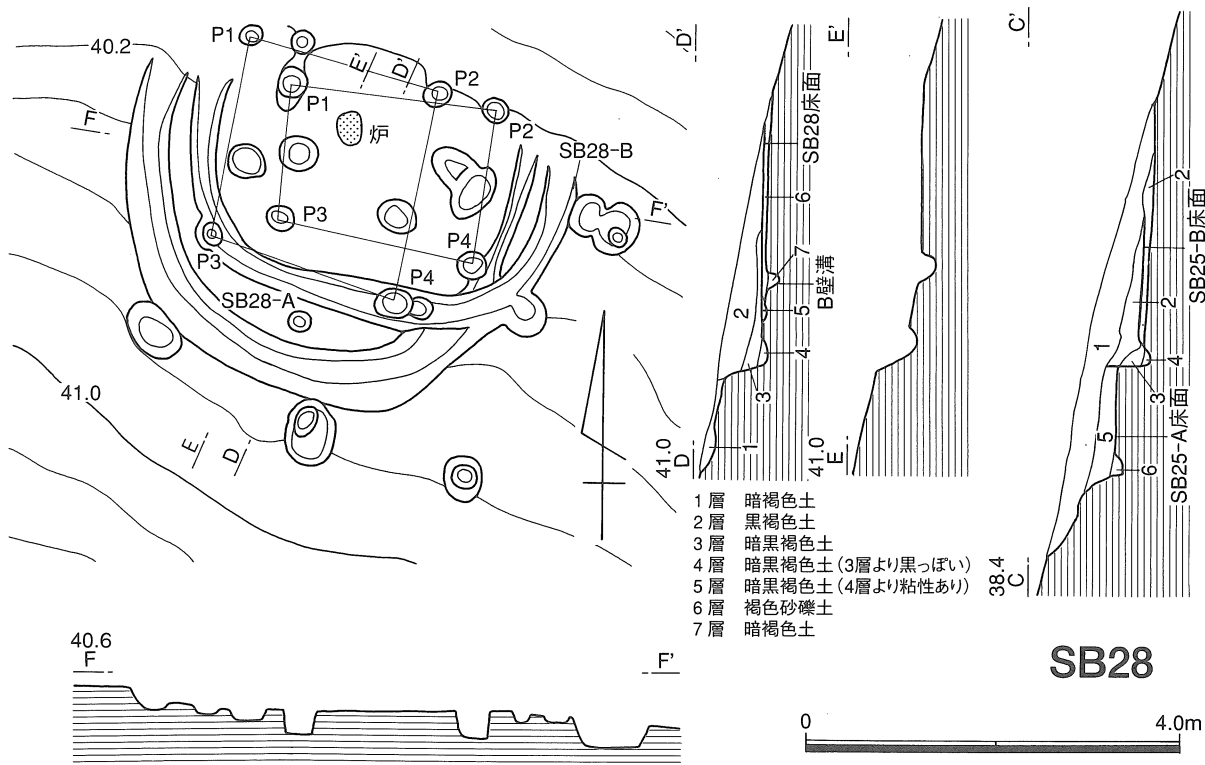


第16図 S B 17~22実測図



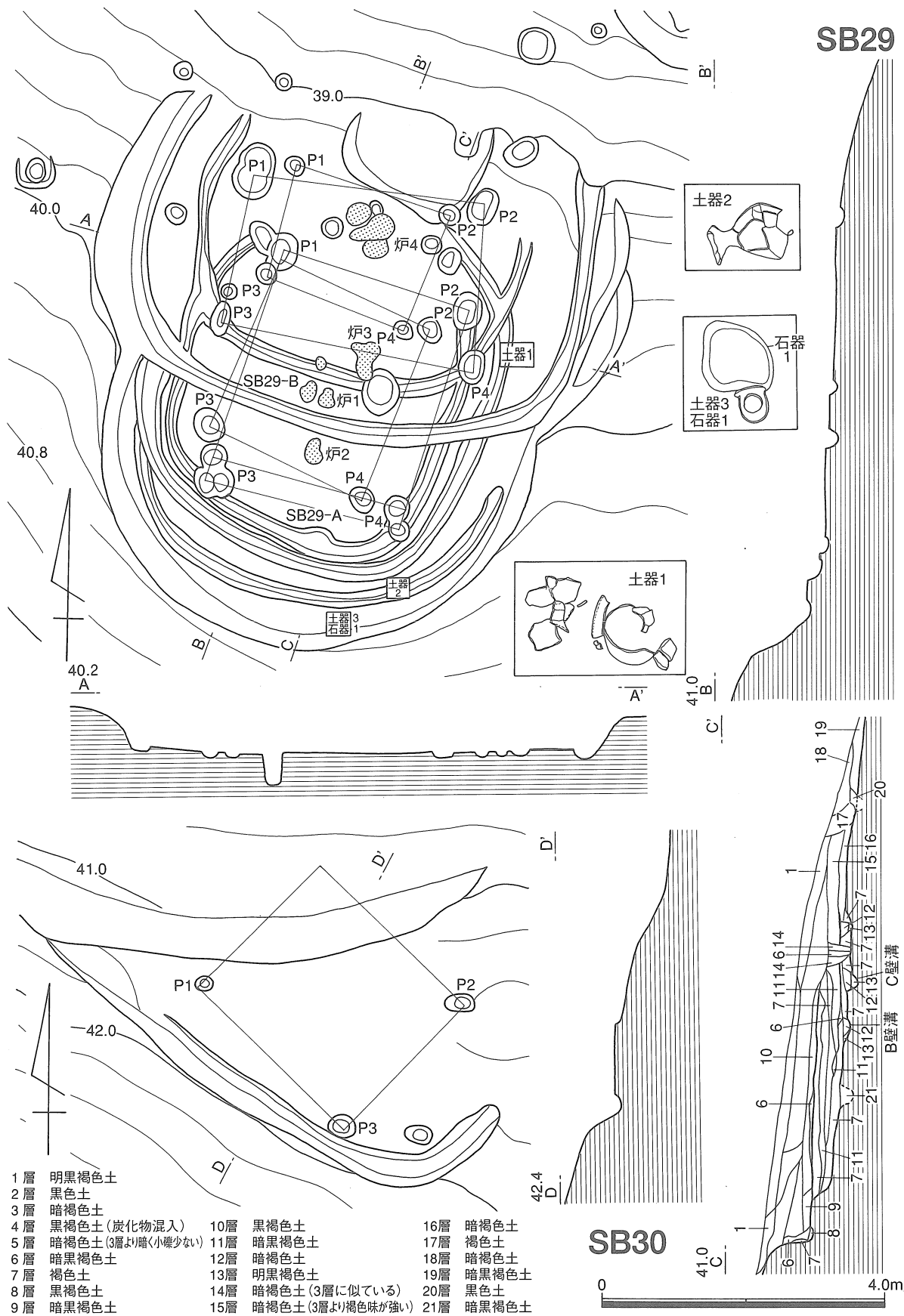
CC'断面

- 1層 黒色土
- 2層 黒色土 (焼土少量含む)
- 3層 黒色土
- 4層 黒褐色土
- 5層 黒褐色土 (黄色土ブロック含む)
- 6層 黒色土

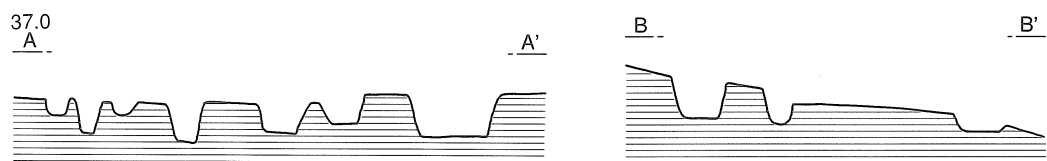
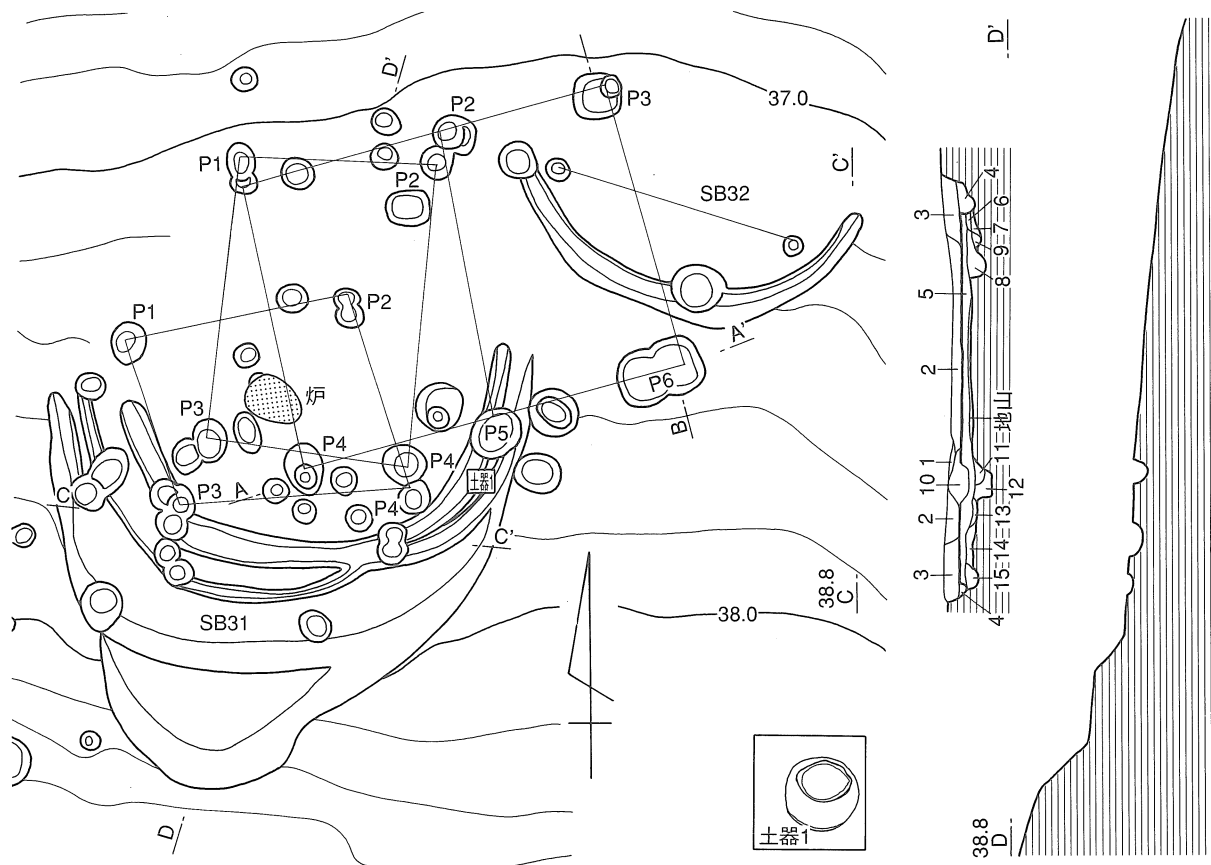


- 1層 暗褐色土
- 2層 黒褐色土
- 3層 暗黒褐色土
- 4層 暗黒褐色土 (3層より黒っぽい)
- 5層 暗黒褐色土 (4層より粘性あり)
- 6層 褐色砂礫土
- 7層 暗褐色土

第17図 S B 25・26・28実測図



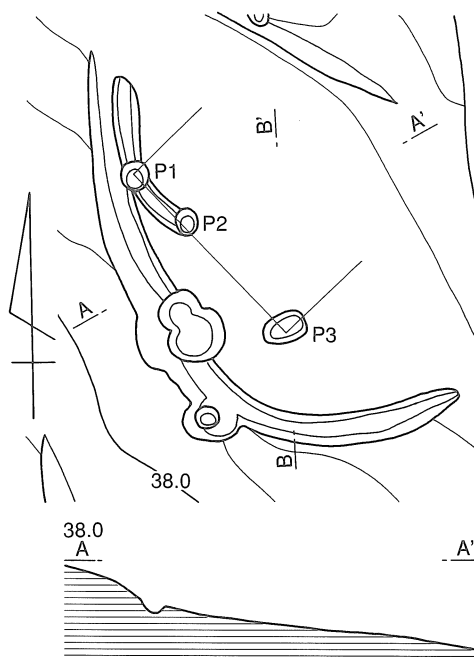
第18図 S B 29・30実測図



SB31・32

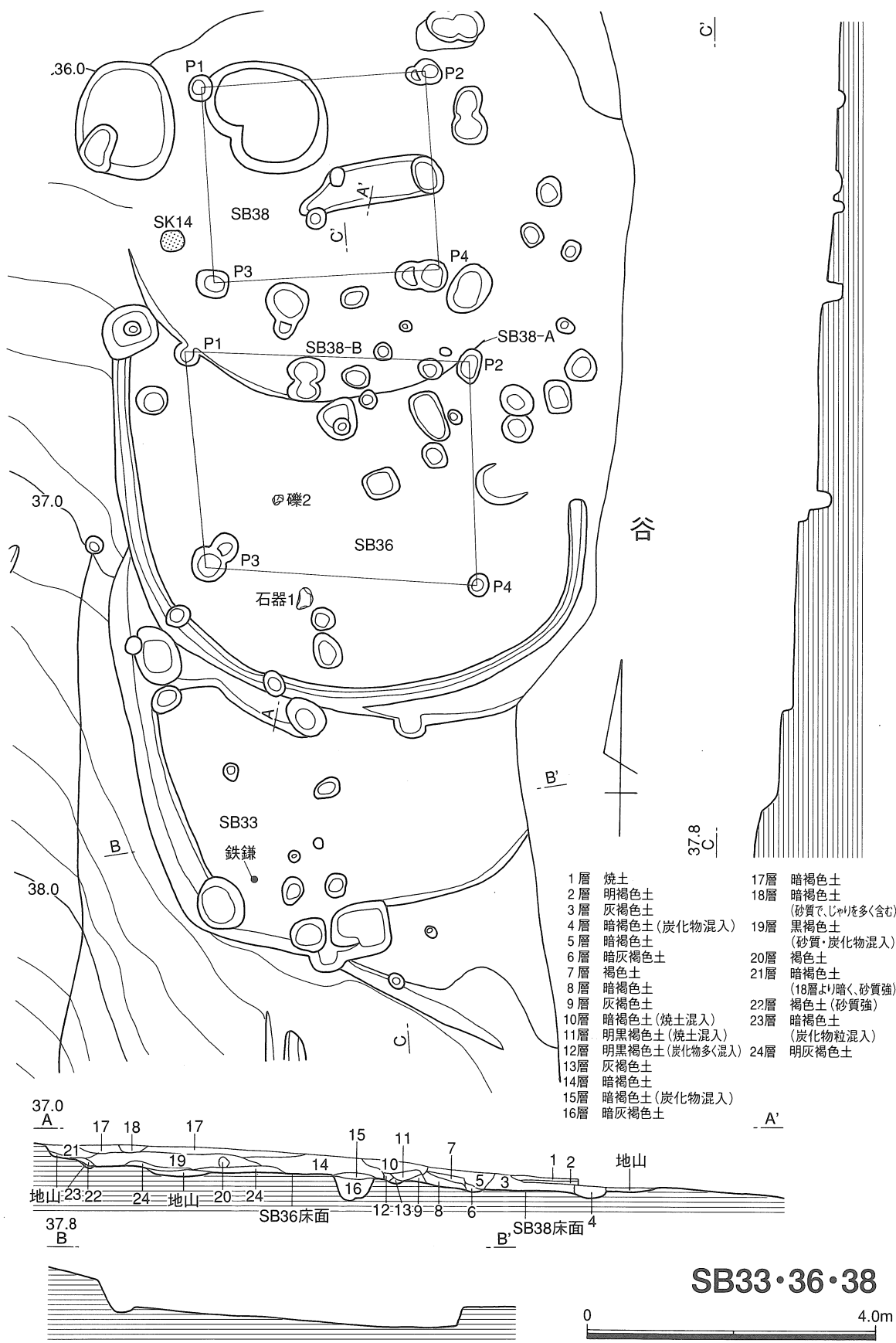
CC'断面

- 1層 表土
- 2層 黒色土(炭化物混入)
- 3層 黒褐色土
- 4層 明黒褐色土
- 5層 暗褐色土
- 6層 褐色土
- 7層 暗褐色土
- 8層 暗褐色土(混土7層より黒い)
- 9層 暗褐色土(黒色土混り)
- 10層 黒褐色土
- 11層 暗黒褐色土
- 12層 明黒褐色土
- 13層 明黒褐色土
- 14層 暗褐色土
- 15層 明黒褐色土

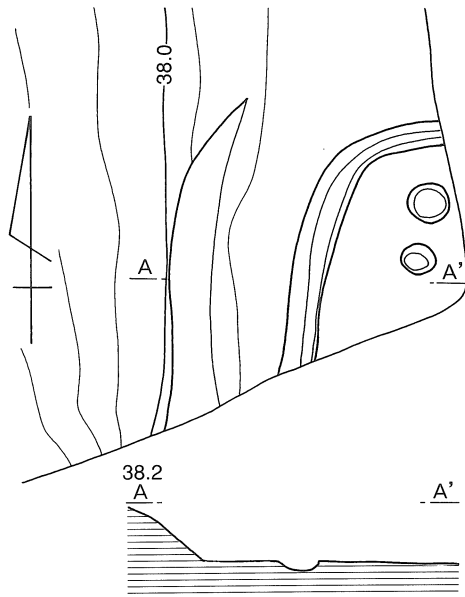


SB34

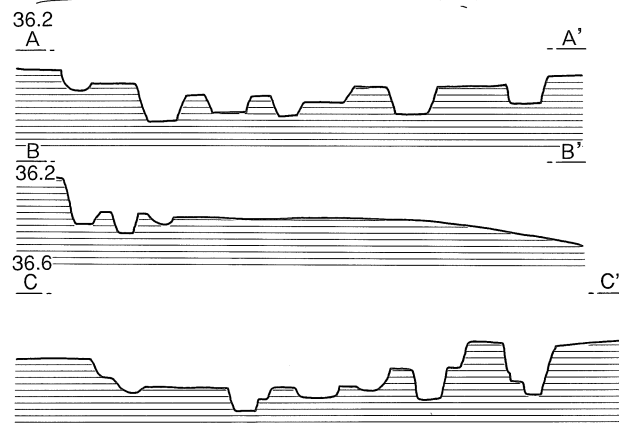
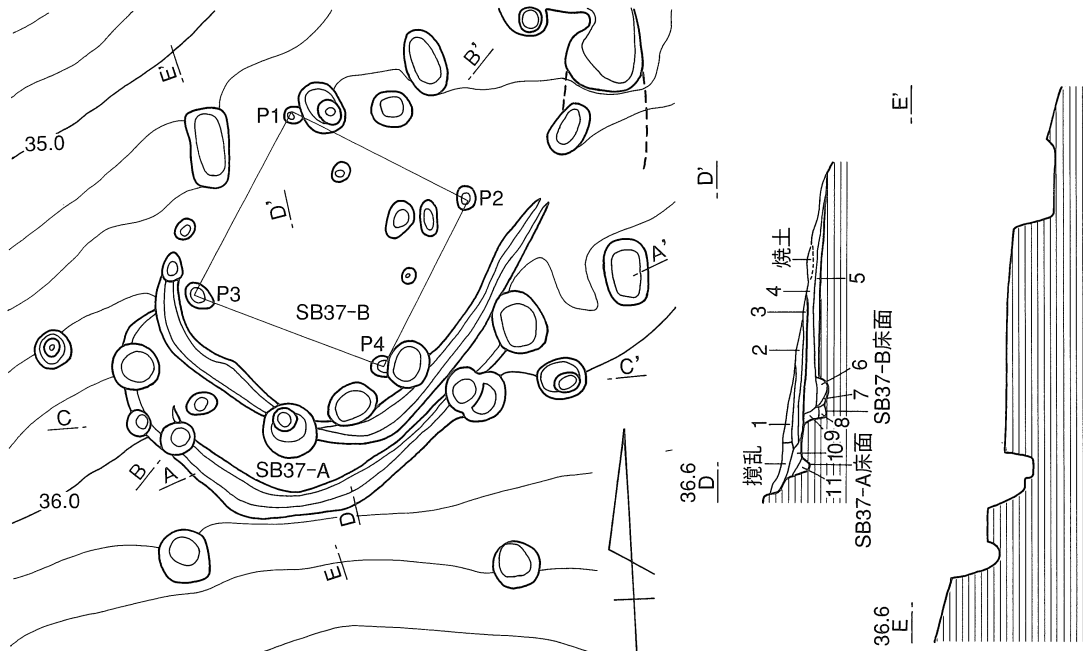
第19図 S B 31・32・34実測図



第20図 S B 33・36・38実測図



SB35

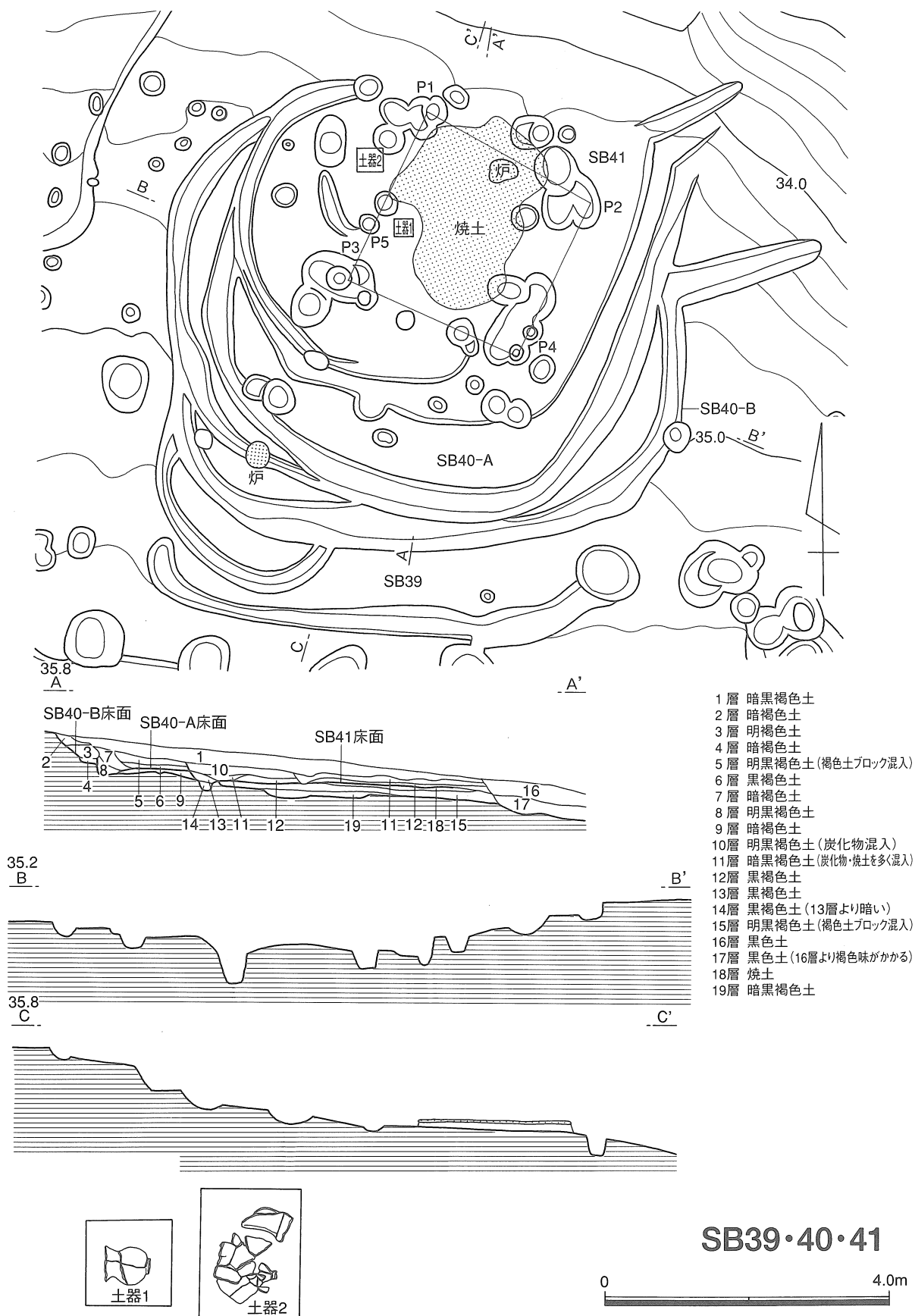


- 1層 暗黒褐色土(砂質)
- 2層 明黒褐色土
- 3層 暗黒褐色土(炭化物混入)
- 4層 明黒褐色土
- 5層 暗褐色土
- 6層 黒褐色土
- 7層 暗褐色土
- 8層 暗黒褐色土
- 9層 暗褐色土(砂質しまりあり)
- 10層 暗褐色土
- 11層 暗黒色土

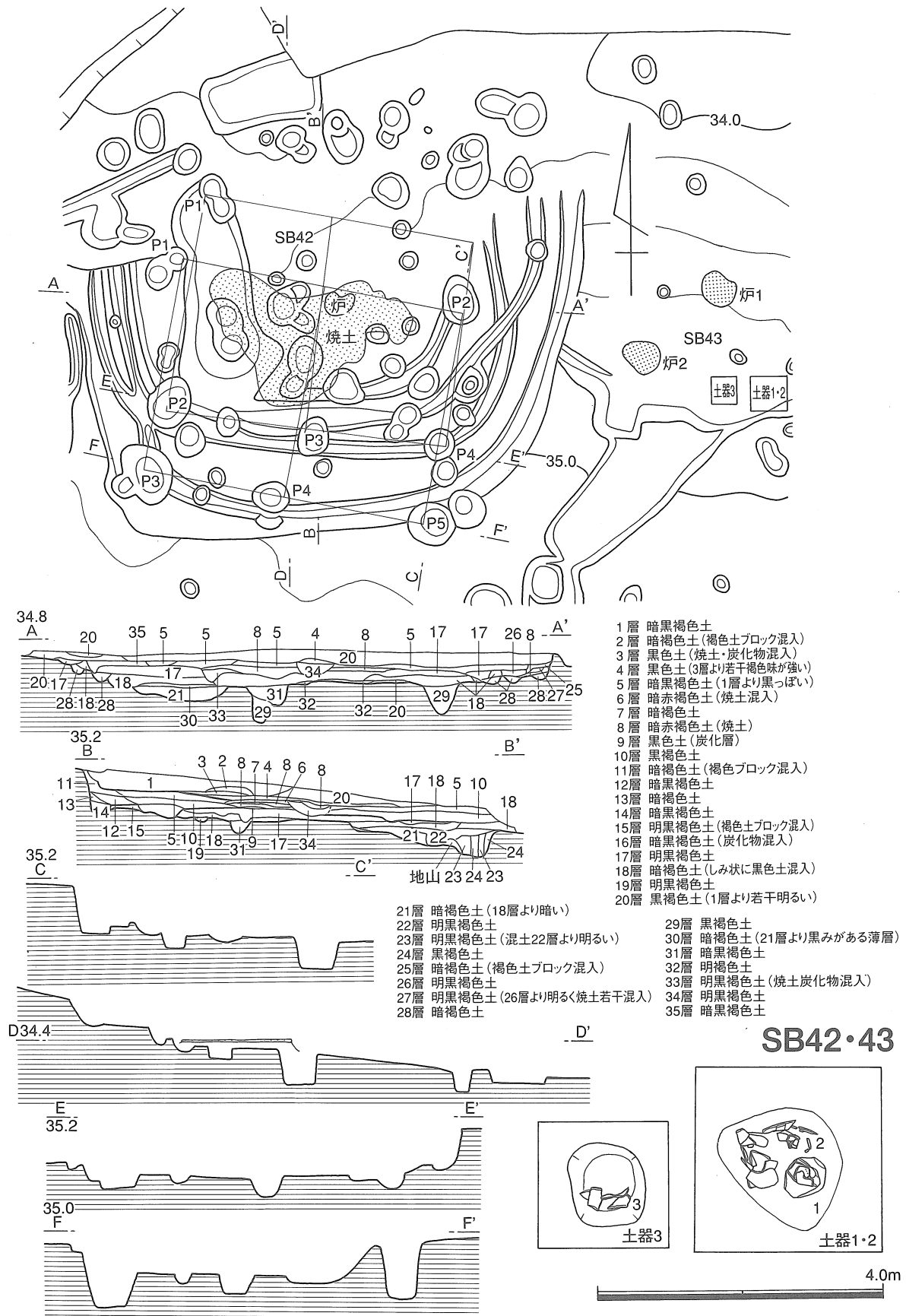
SB37

4.0m

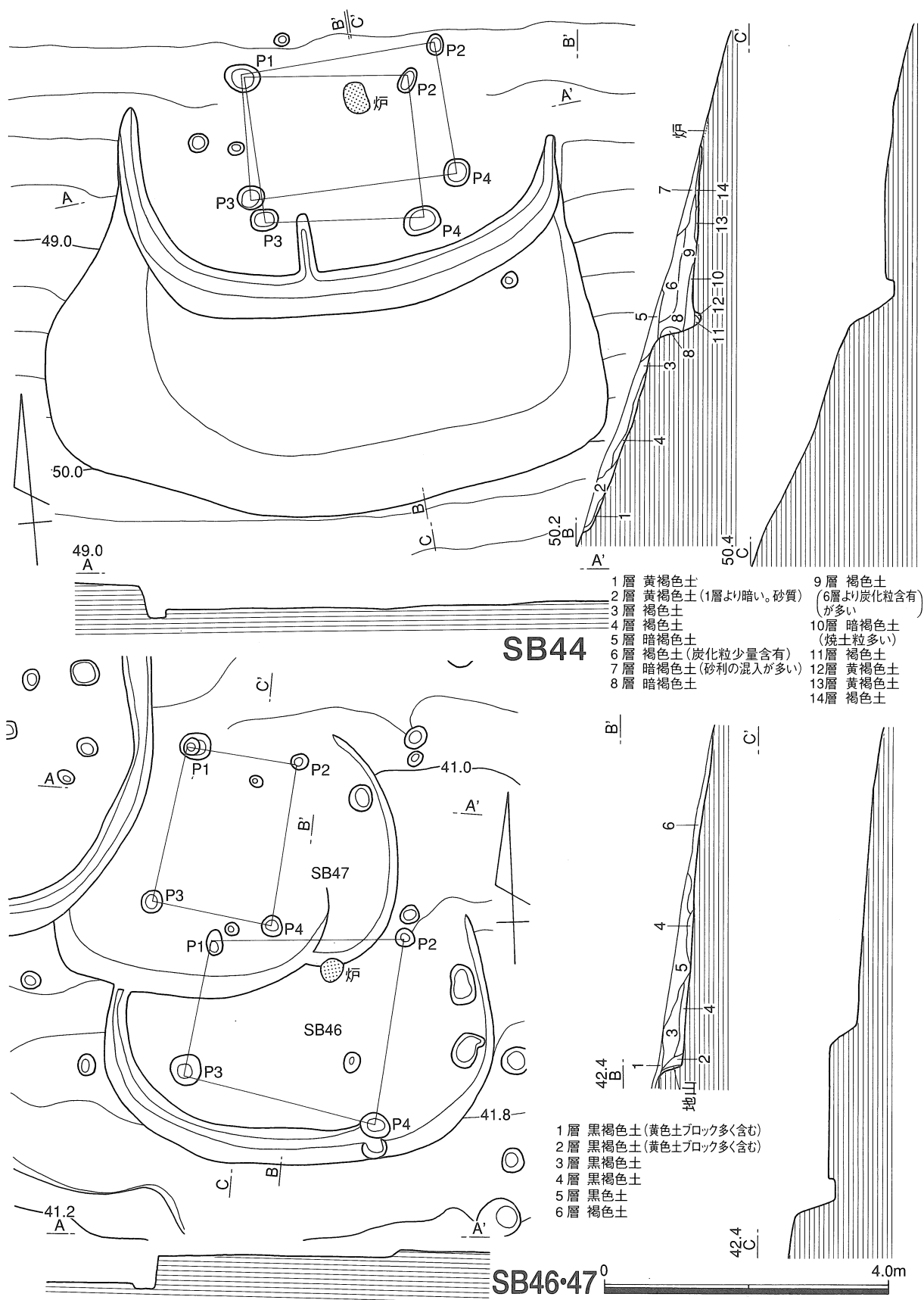
第21図 S B 35・37実測図



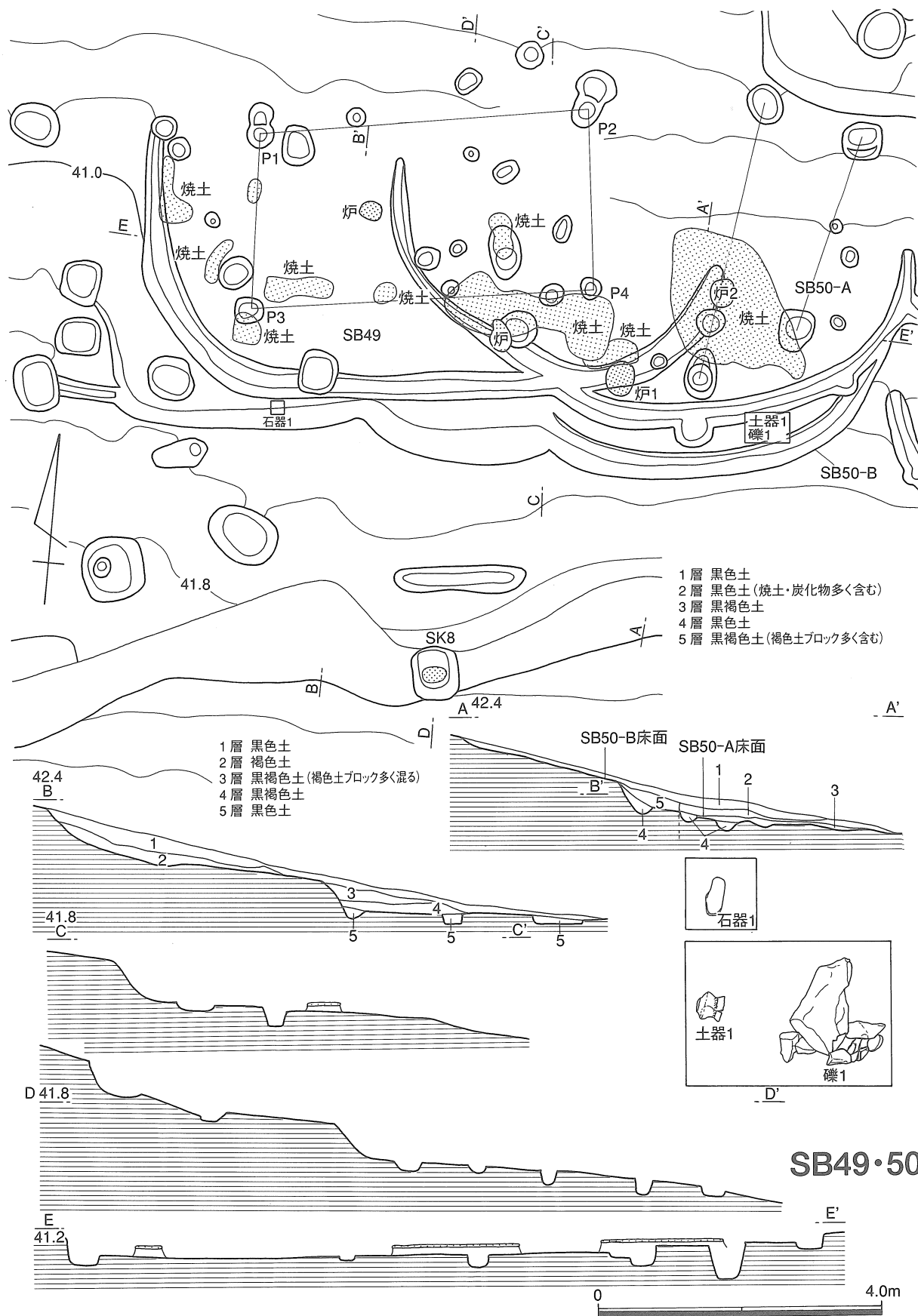
第22図 S B 39~41実測図



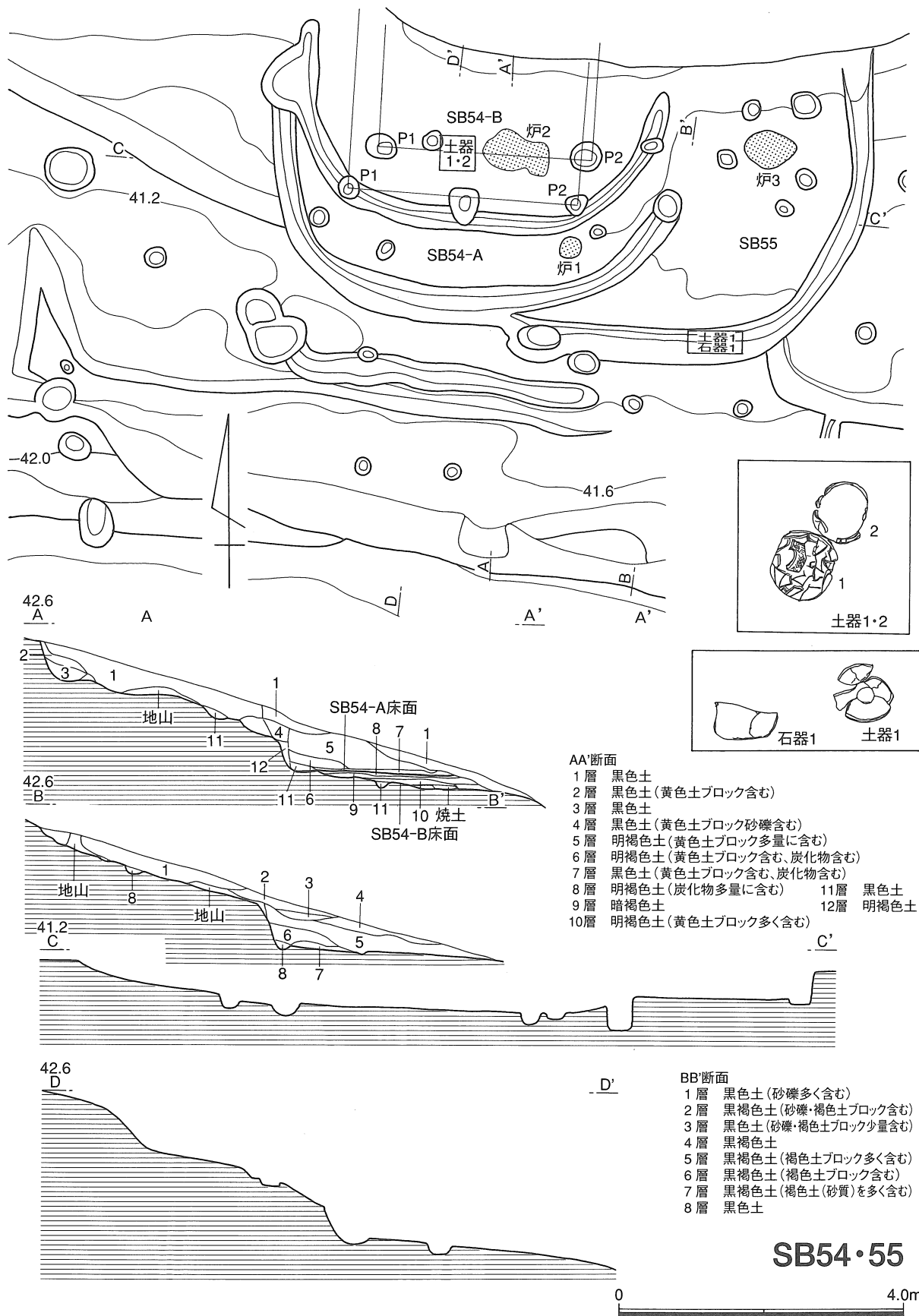
第23図 S B42・43実測図



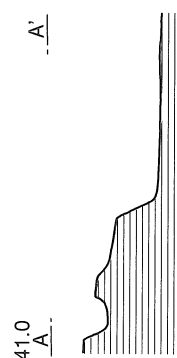
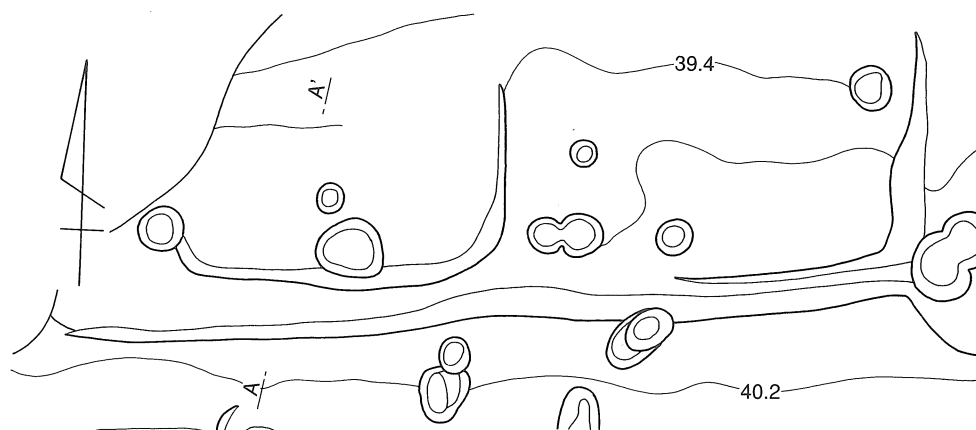
第24図 S B 44・46・47実測図



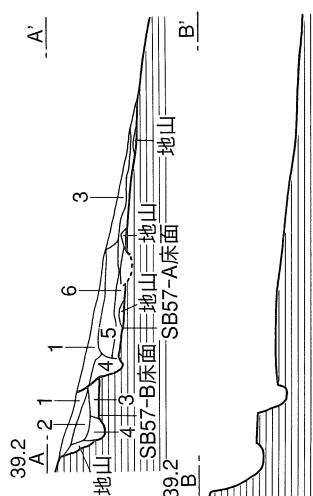
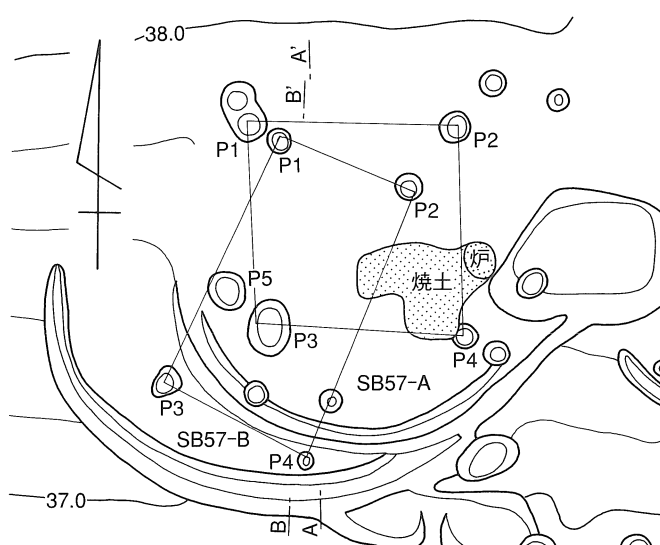
第26図 S B 49・50実測図



第28図 S B 54・55実測図



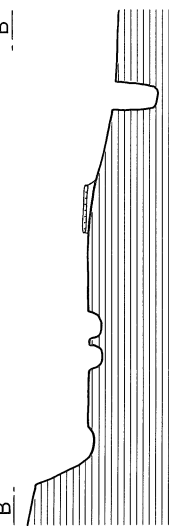
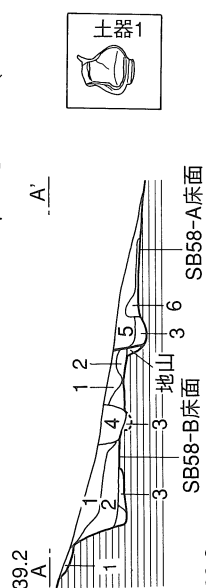
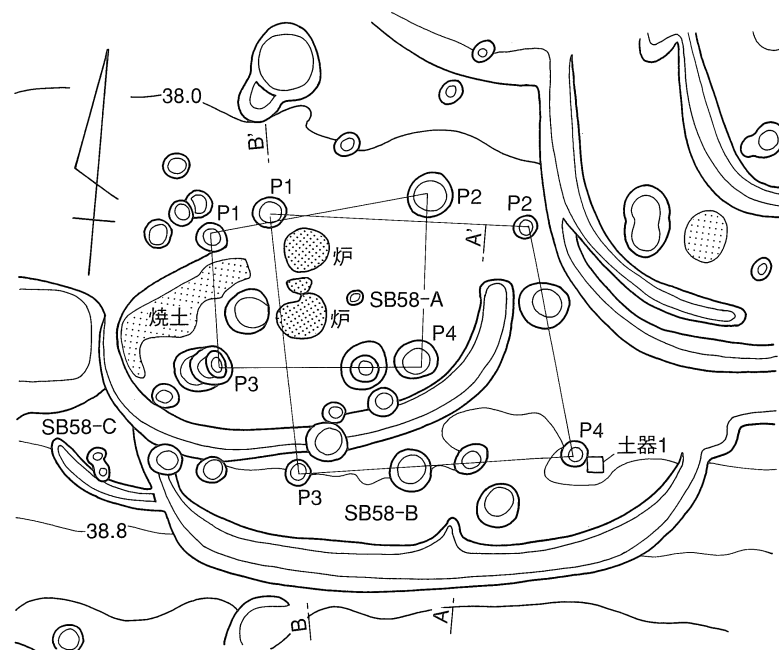
SB56



- AA'断面
- 1層 黒色土
 - 2層 黒褐色土
(黄色土ブロック含む)
 - 3層 黒褐色土
 - 4層 黒褐色土
 - 5層 褐色土
(黄色土ブロック多含む)
 - 6層 黒褐色
(焼土粒子、炭化物
多く含む)

- BB'断面
- 1層 黒色土
 - 2層 褐色土
(黄色土ブロック多含む)
 - 3層 黒色土
 - 4層 黒色土
 - 5層 黒色土
(焼土混り)
 - 6層 褐色土
(黄色土ブロック含む)

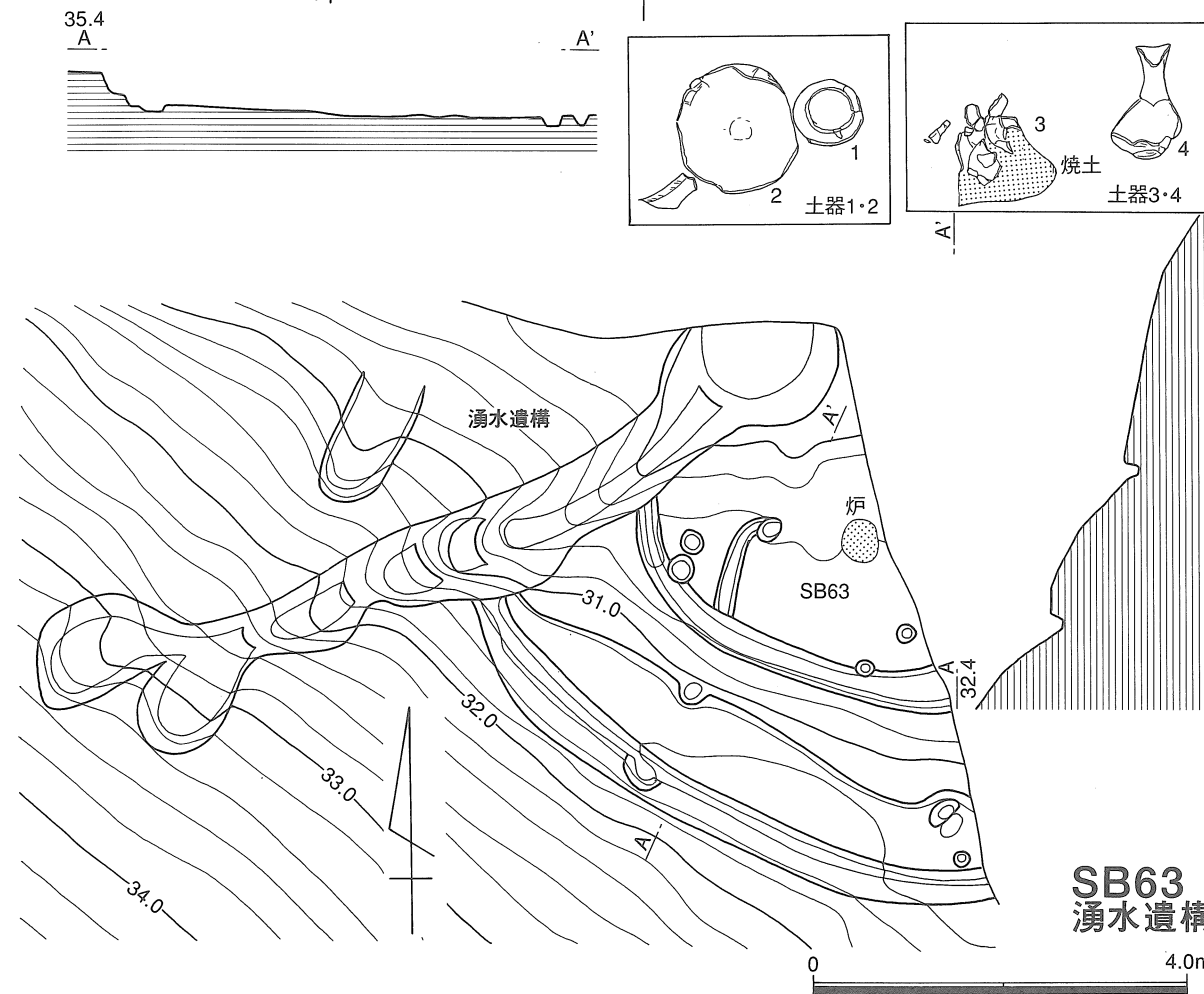
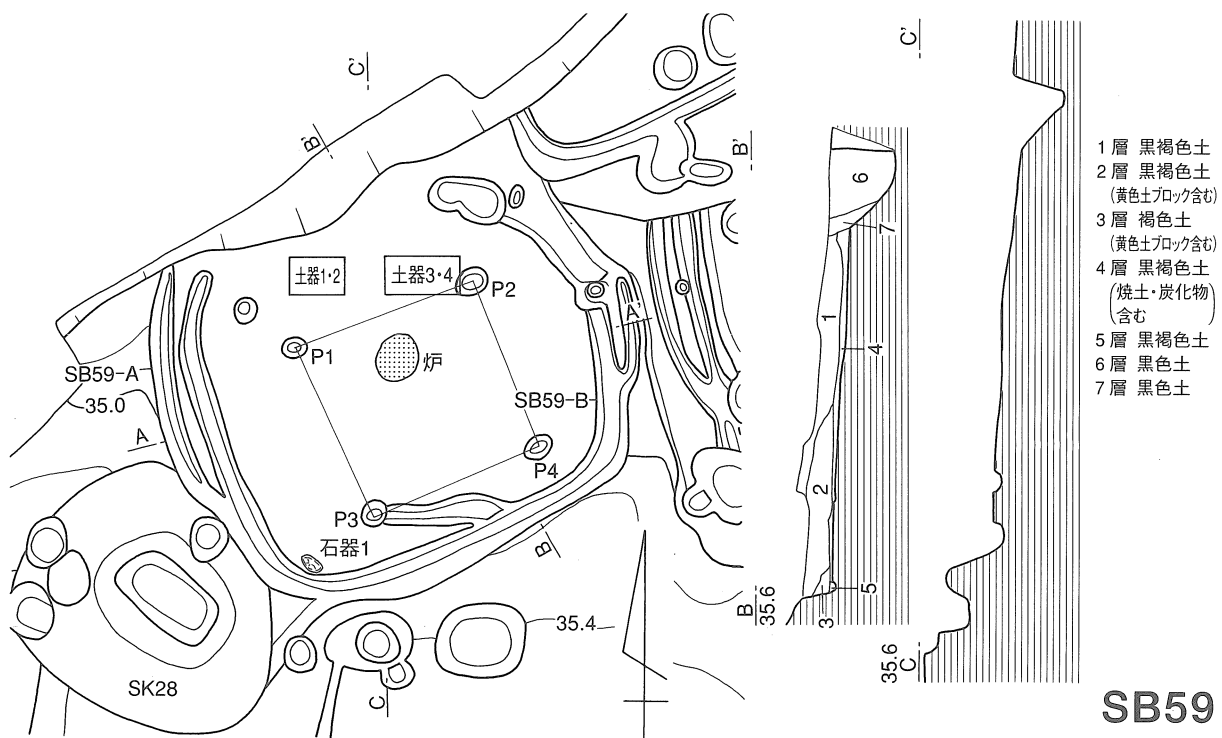
SB57



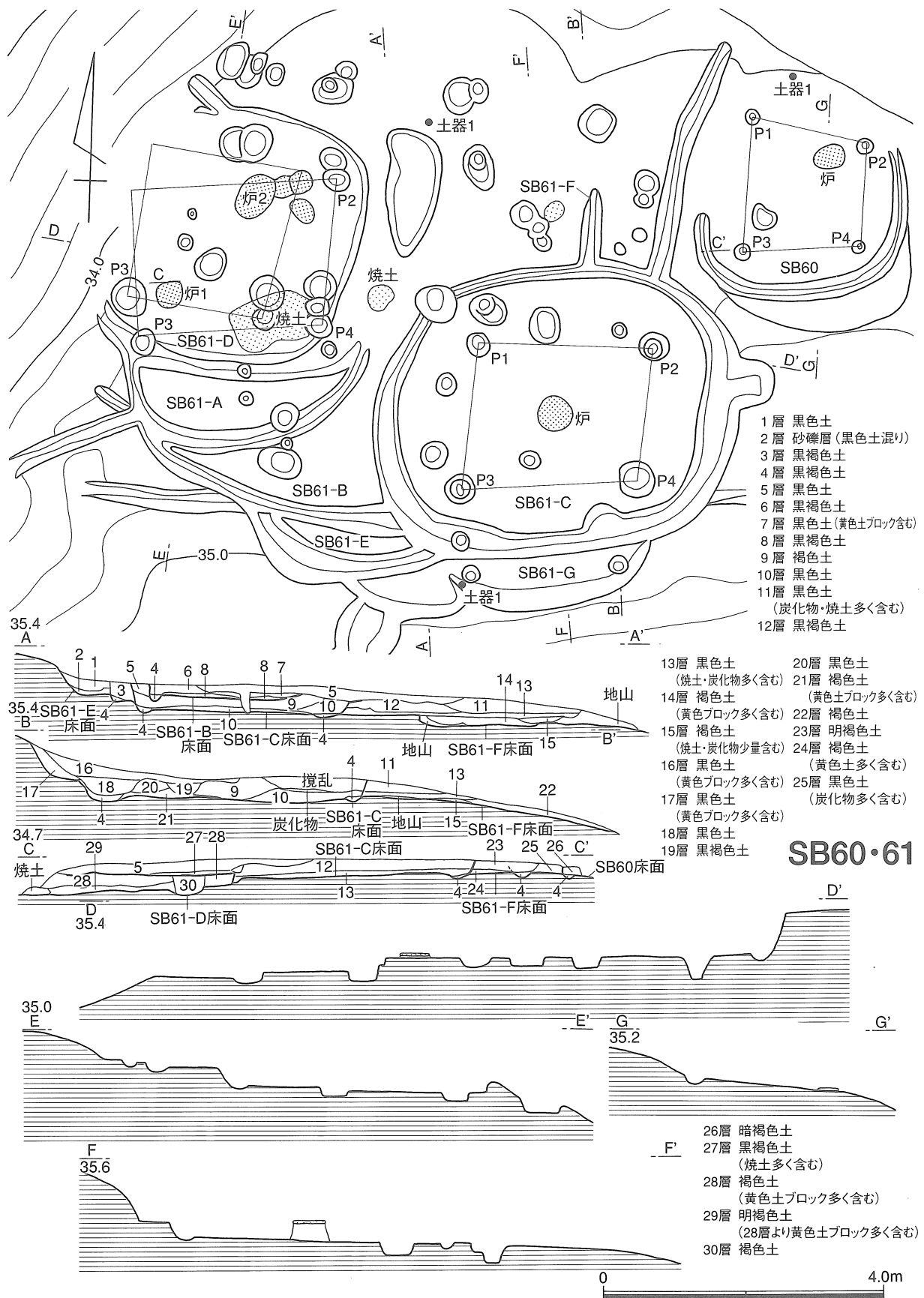
SB58



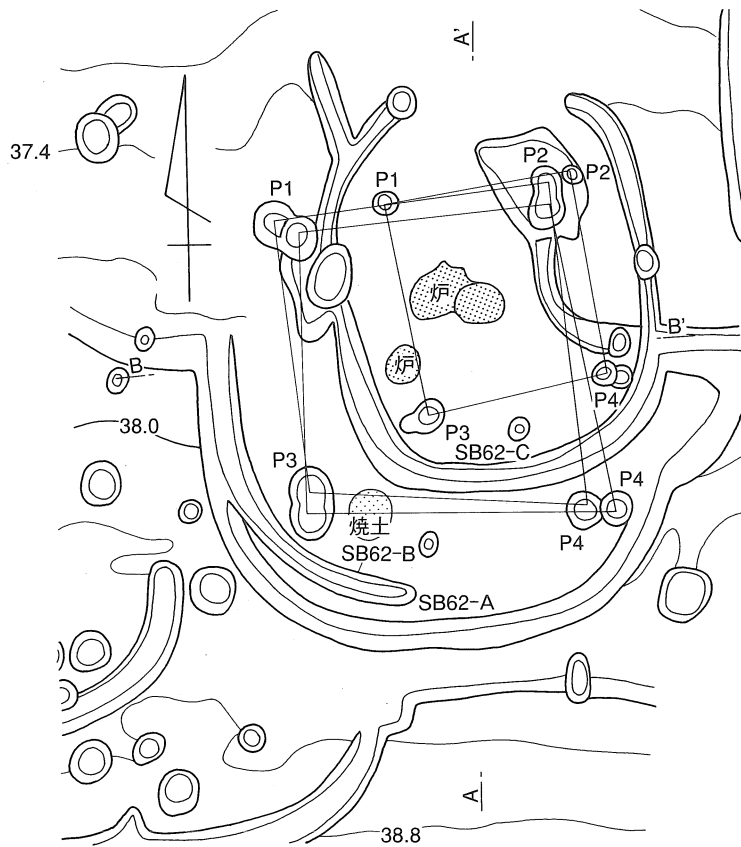
第29図 S B 56～58実測図



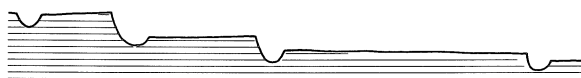
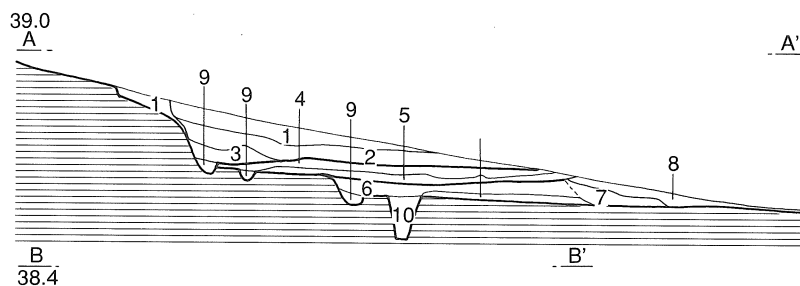
第30図 S B 59・63 湧水遺構実測図



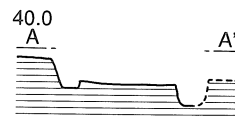
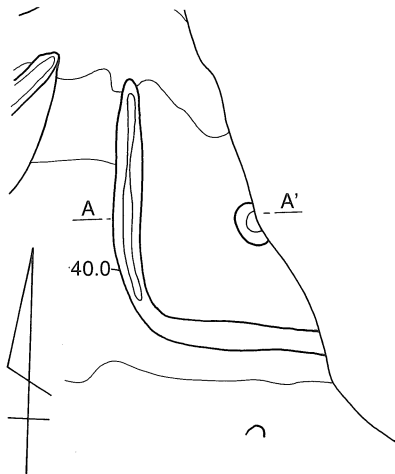
第31図 S B 60・61実測図



- 1層 黒色土
- 2層 黒褐色土
- 3層 黒褐色土(黄色土ブロック多く含む)
- 4層 褐色土(黄色土ブロック多く含む)
- 5層 黒褐色土(炭化物少量含む)
- 6層 黒褐色土(黄色土多量に含む)
- 7層 明褐色土(黄色土多量に含む)
- 8層 明褐色土
- 9層 黒色土(黄色土ブロック多く含む)
- 10層 黒色土



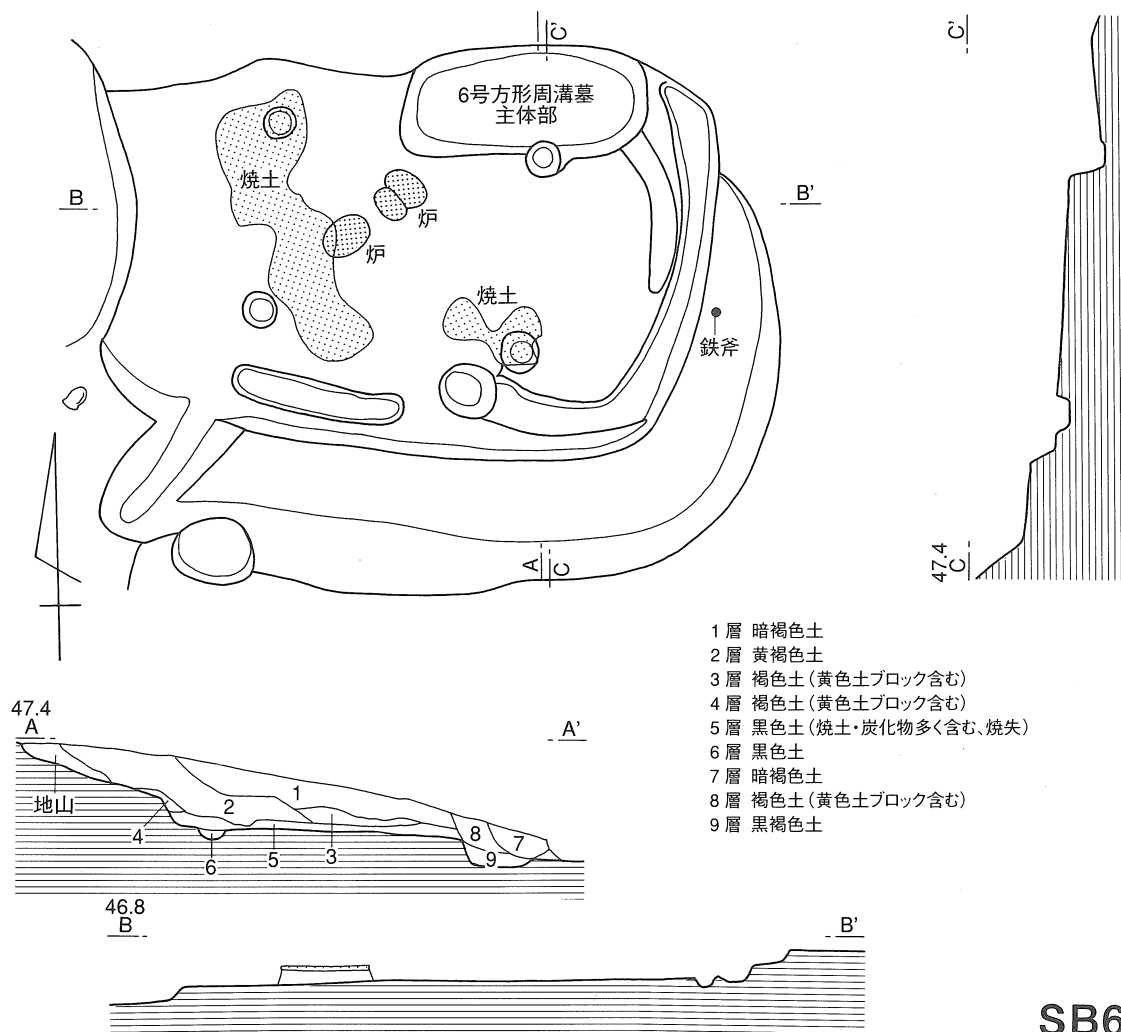
SB62



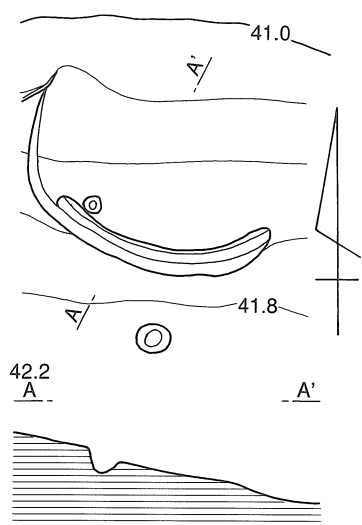
SB90



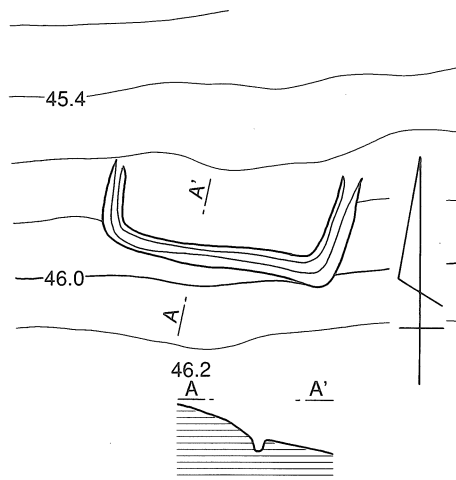
第32図 S B 62・90実測図



SB64



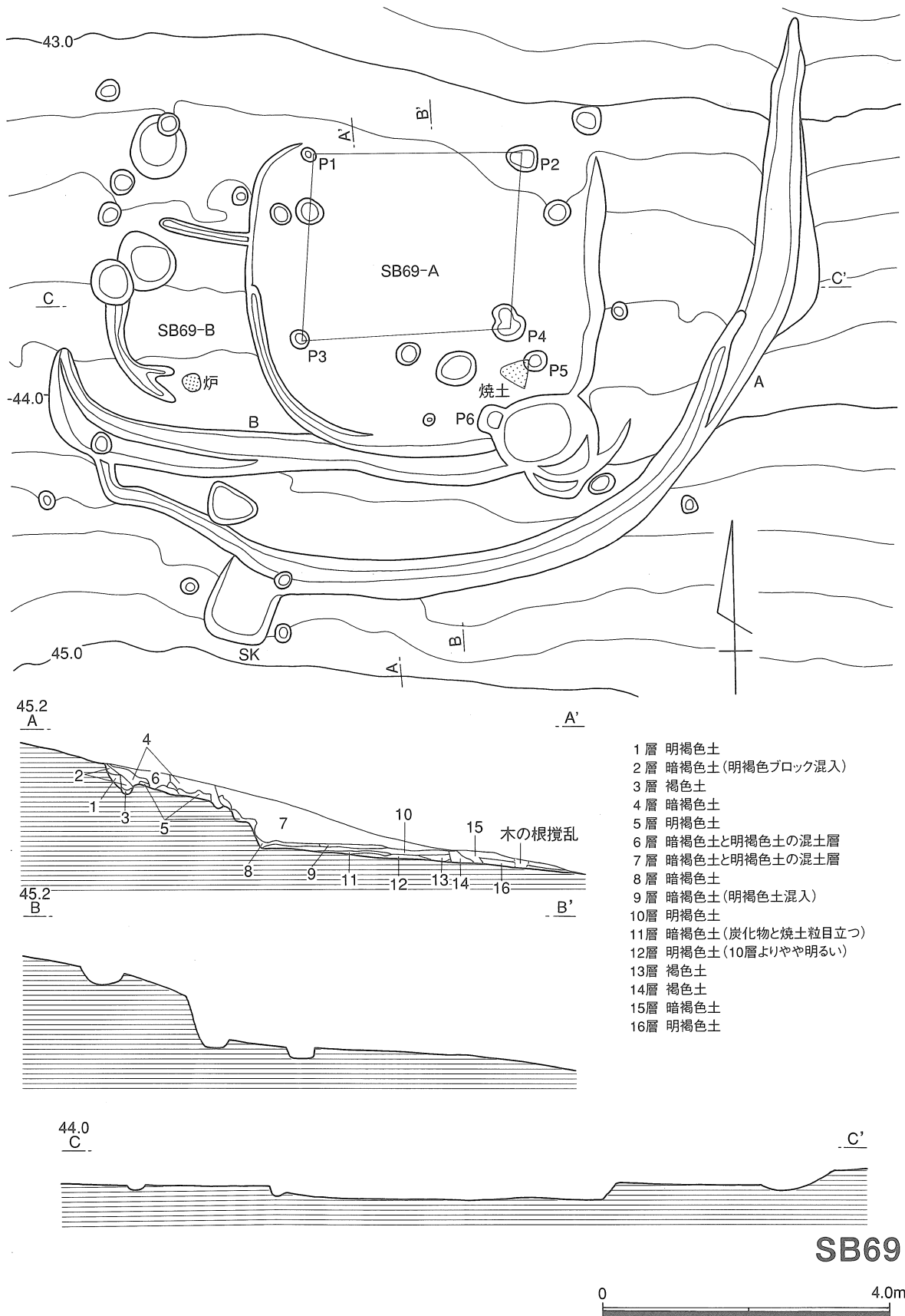
SB65



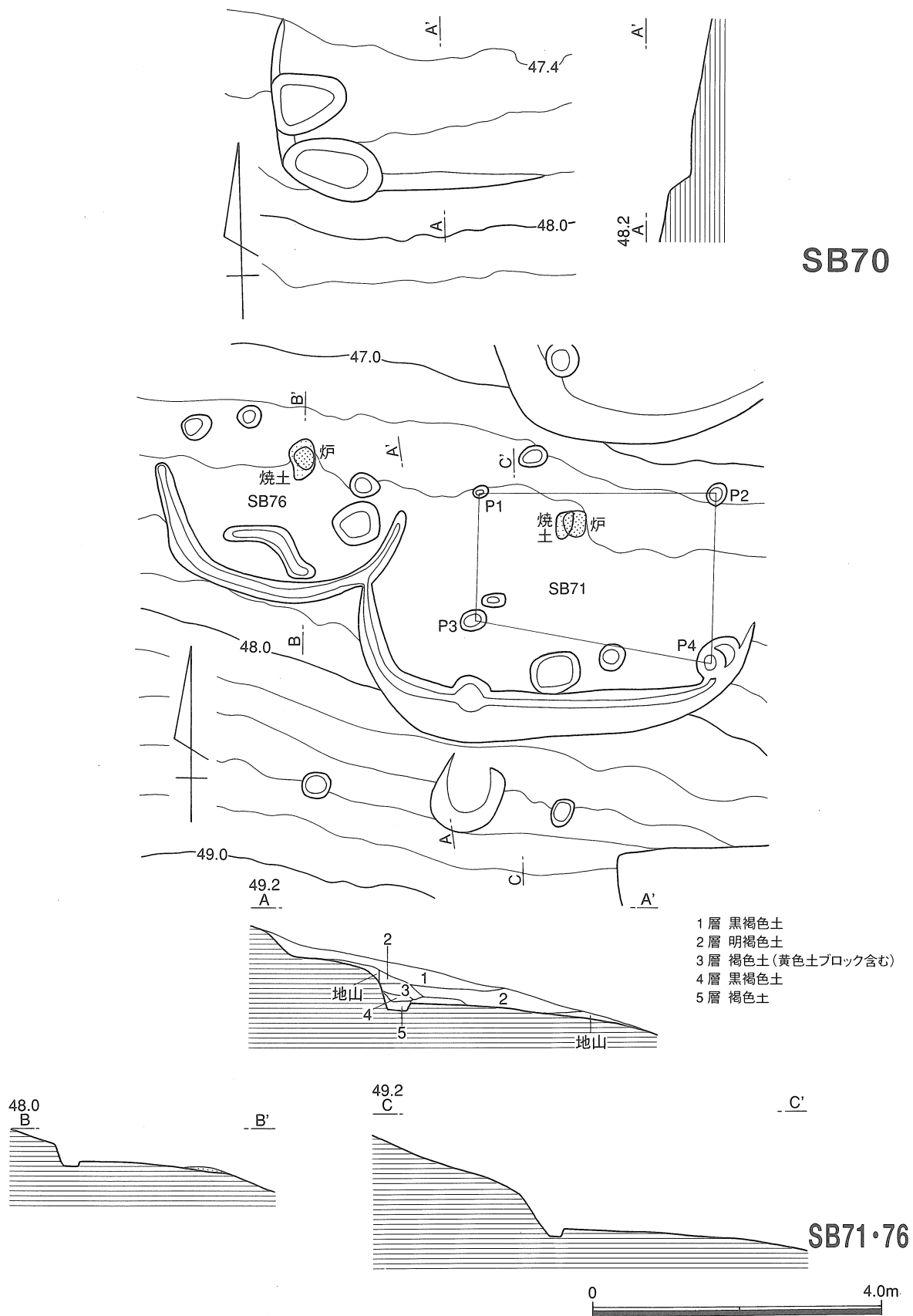
SB66

0 4.0m

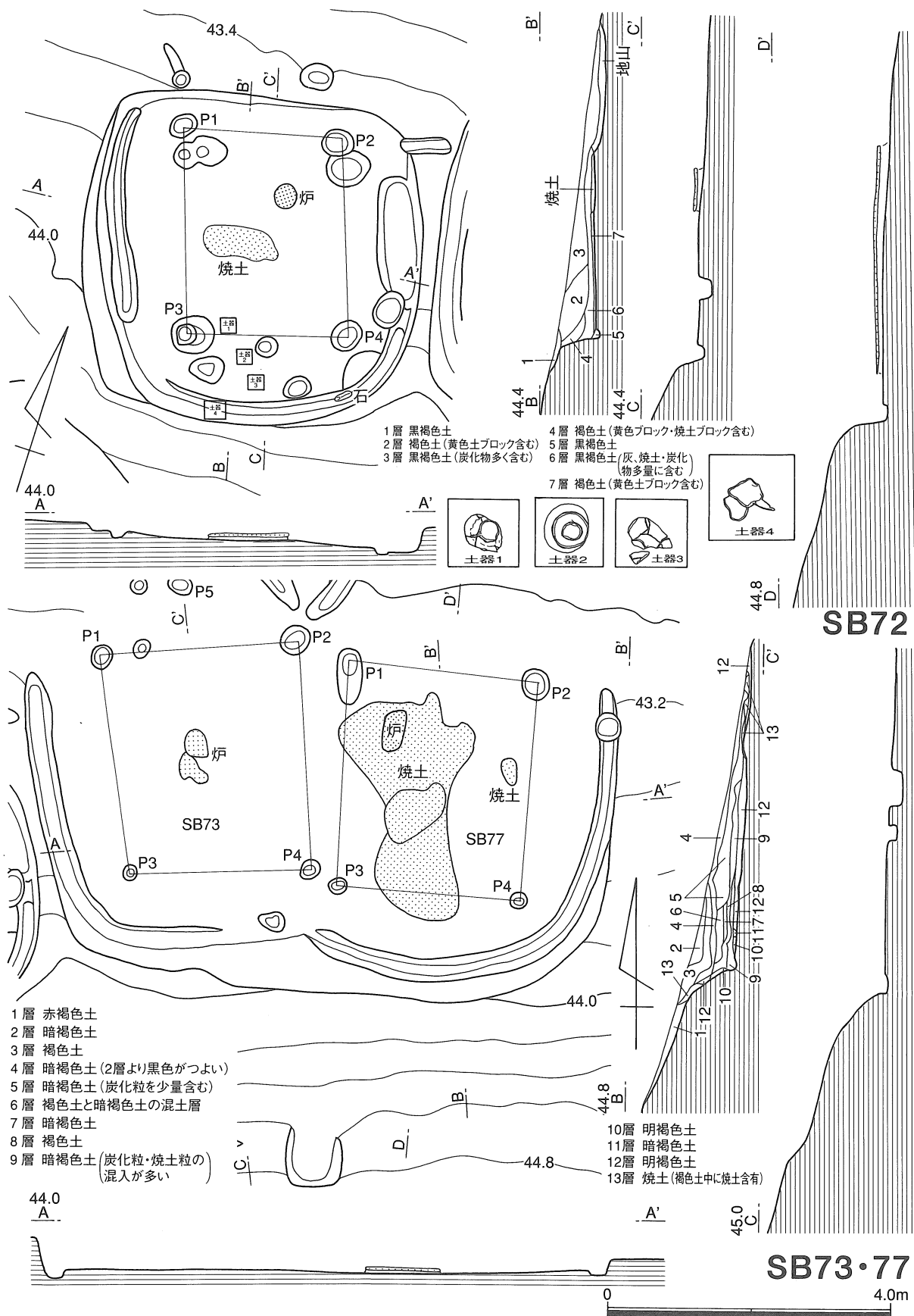
第33図 S B 64~66実測図



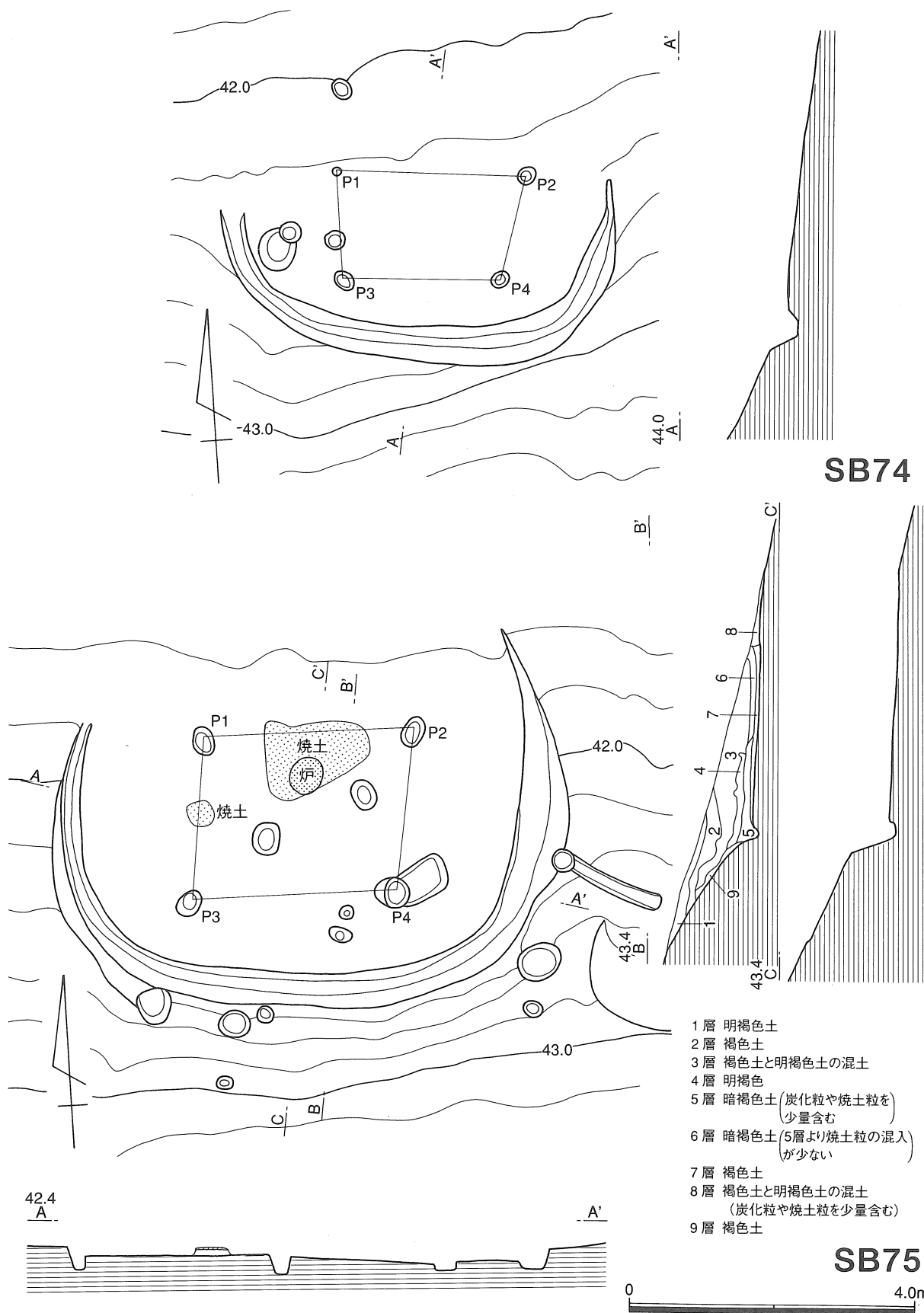
第34図 S B 69実測図



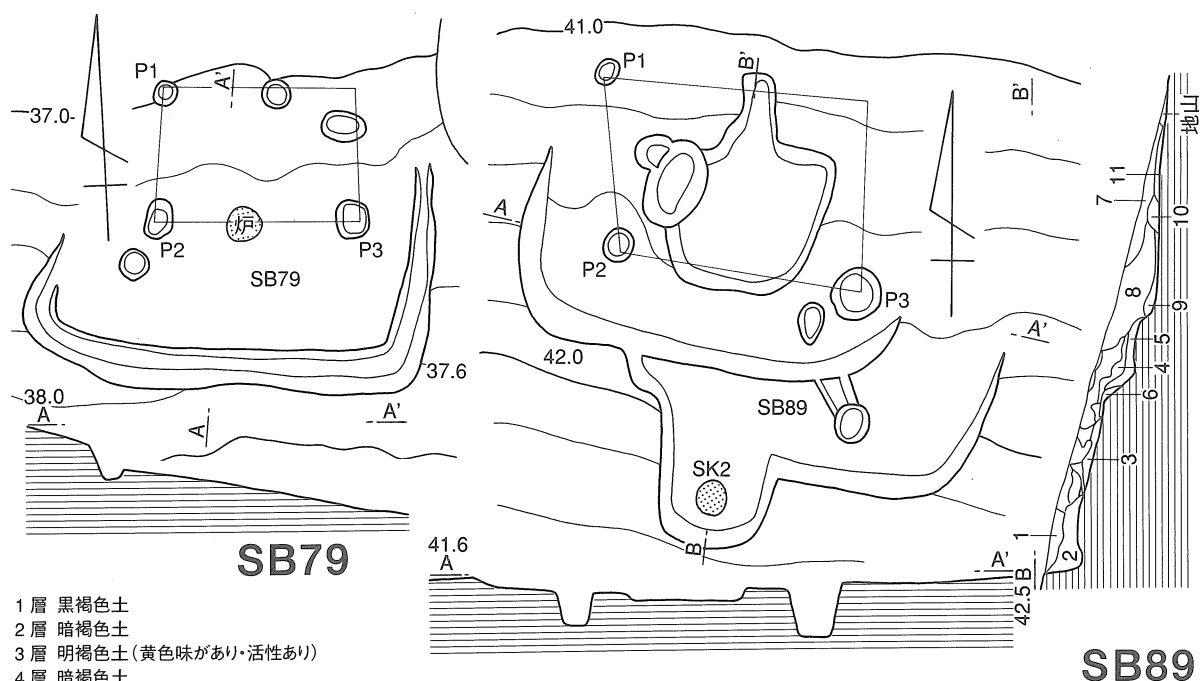
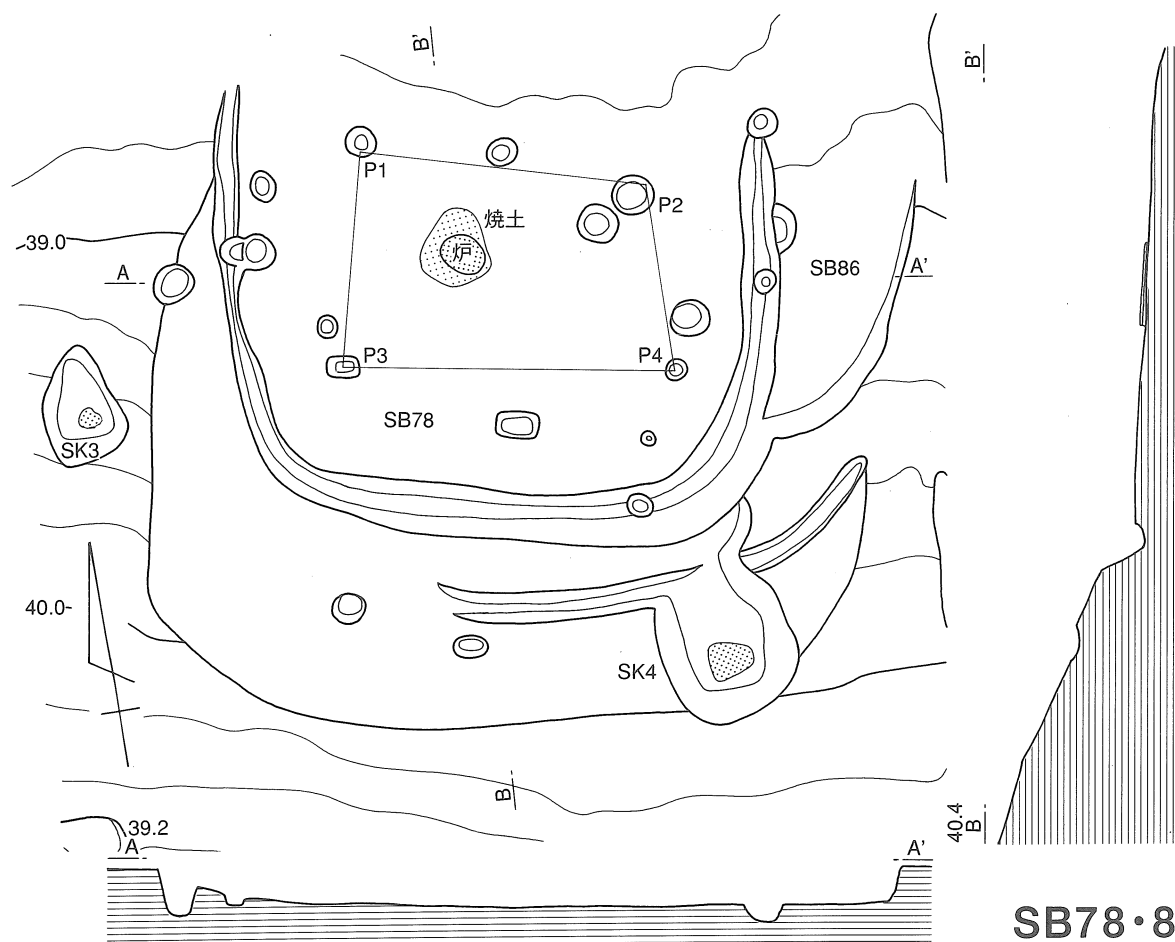
第35図 S B 70 ・ 71 ・ 76実測図



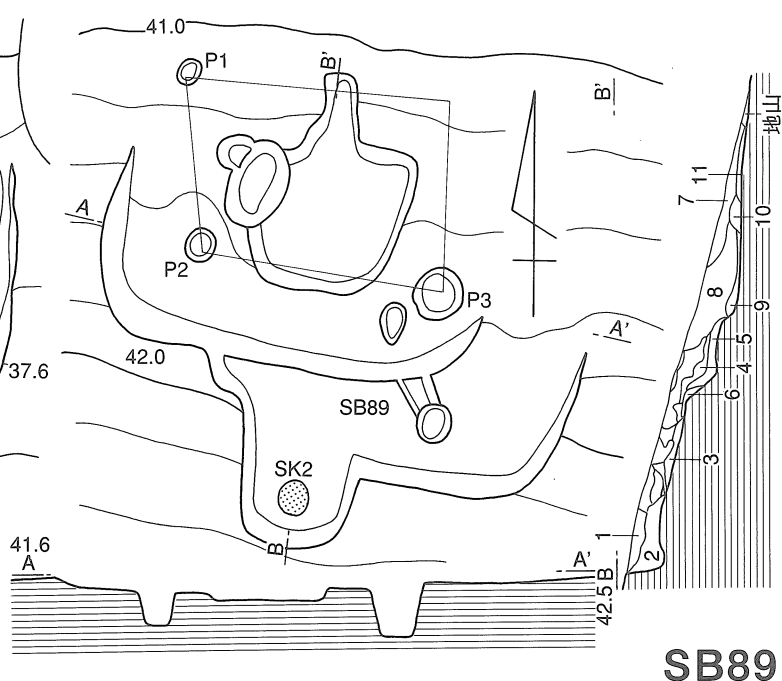
第36図 S B 72・73・77実測図



第37図 S B 74・75実測図

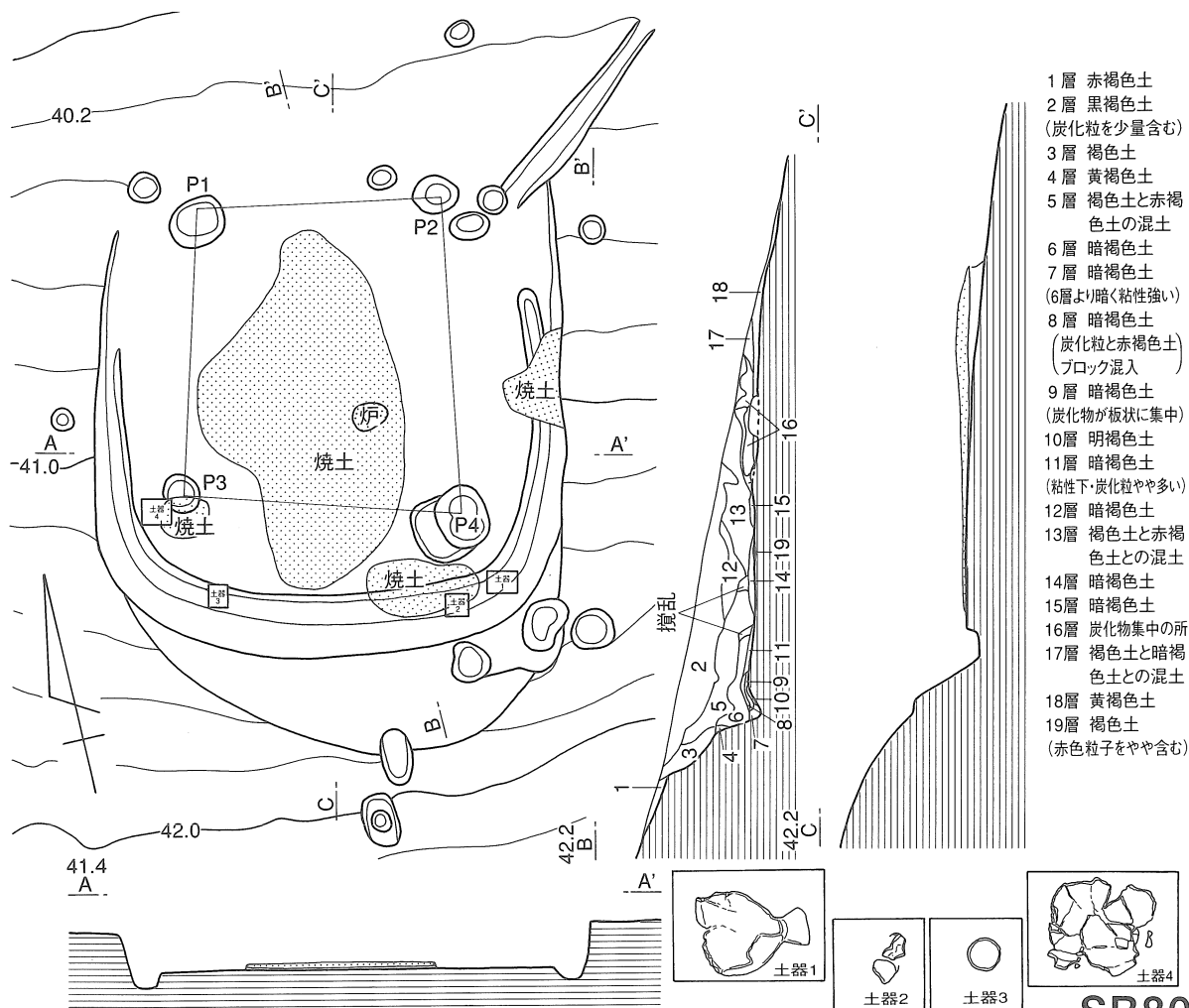


- | | |
|----------------------|----------|
| 1層 黒褐色土 | 9層 褐色土 |
| 2層 暗褐色土 | 10層 明褐色土 |
| 3層 明褐色土(黄色味があり・活性あり) | 11層 褐色土 |
| 4層 暗褐色土 | |
| 5層 褐色土 | |
| 6層 明褐色土(3層とほぼ同様) | |
| 7層 黒褐色土 | |
| 8層 褐色土と黒褐色土との混土 | |

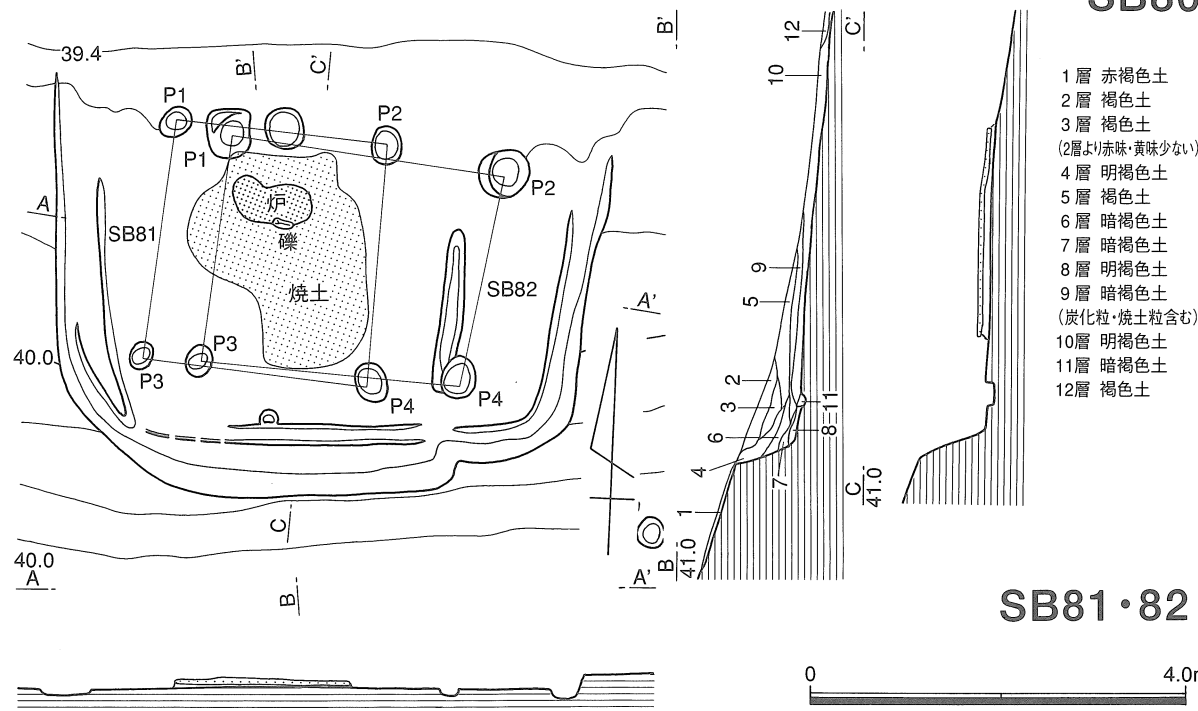


0 4.0m

第38図 S B 78・79・86・89実測図



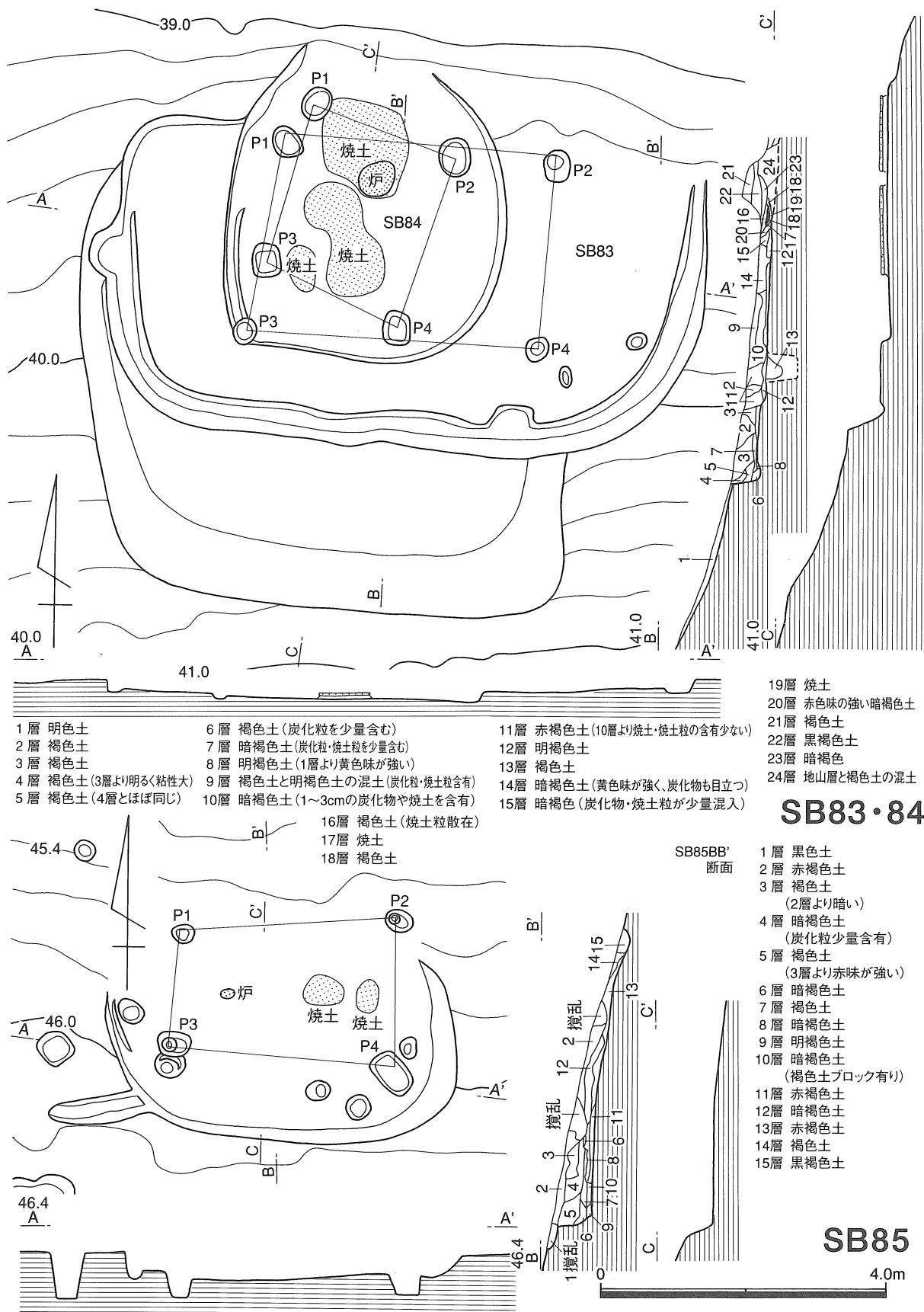
SB80



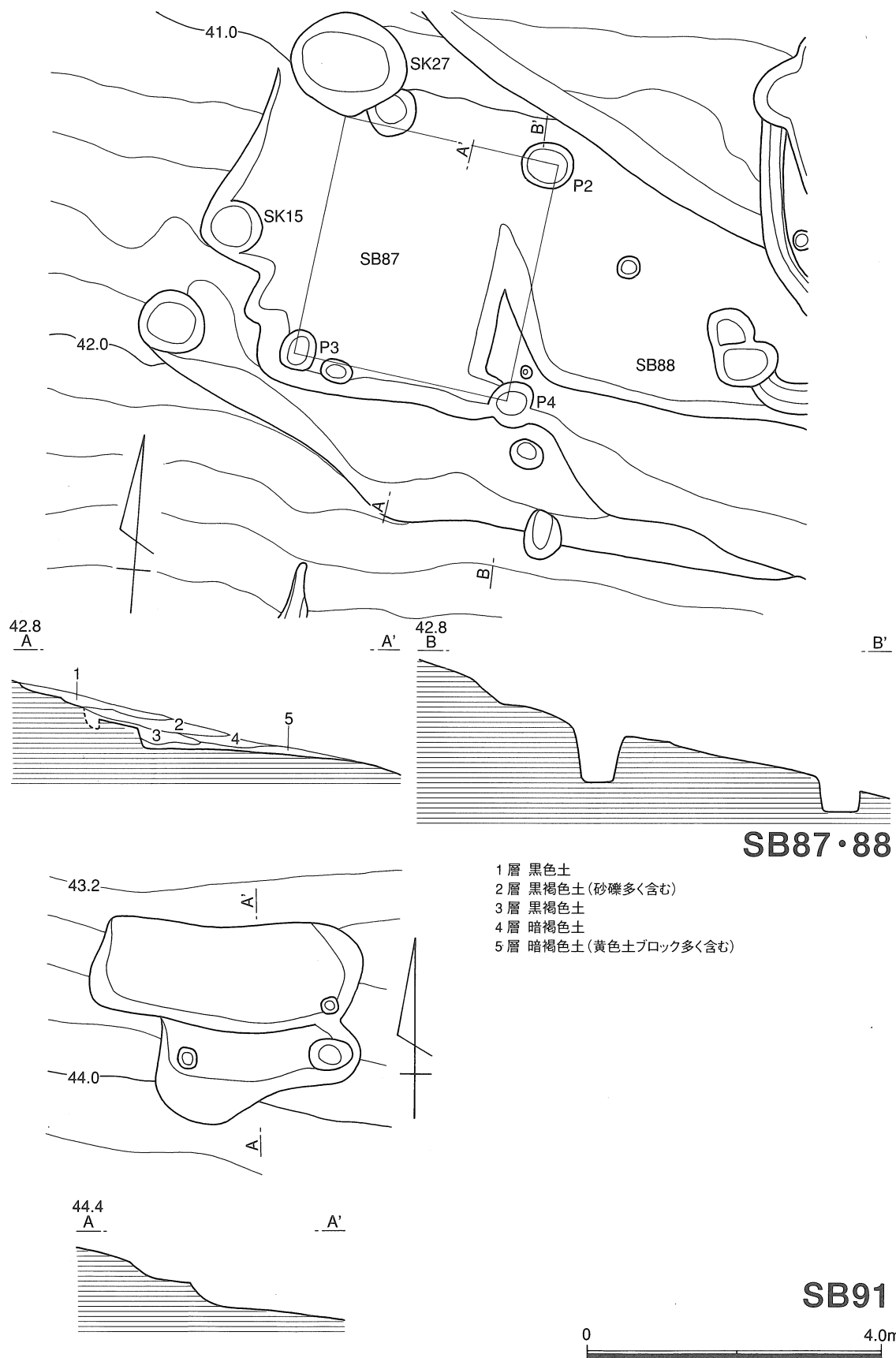
SB81・82

0 4.0m

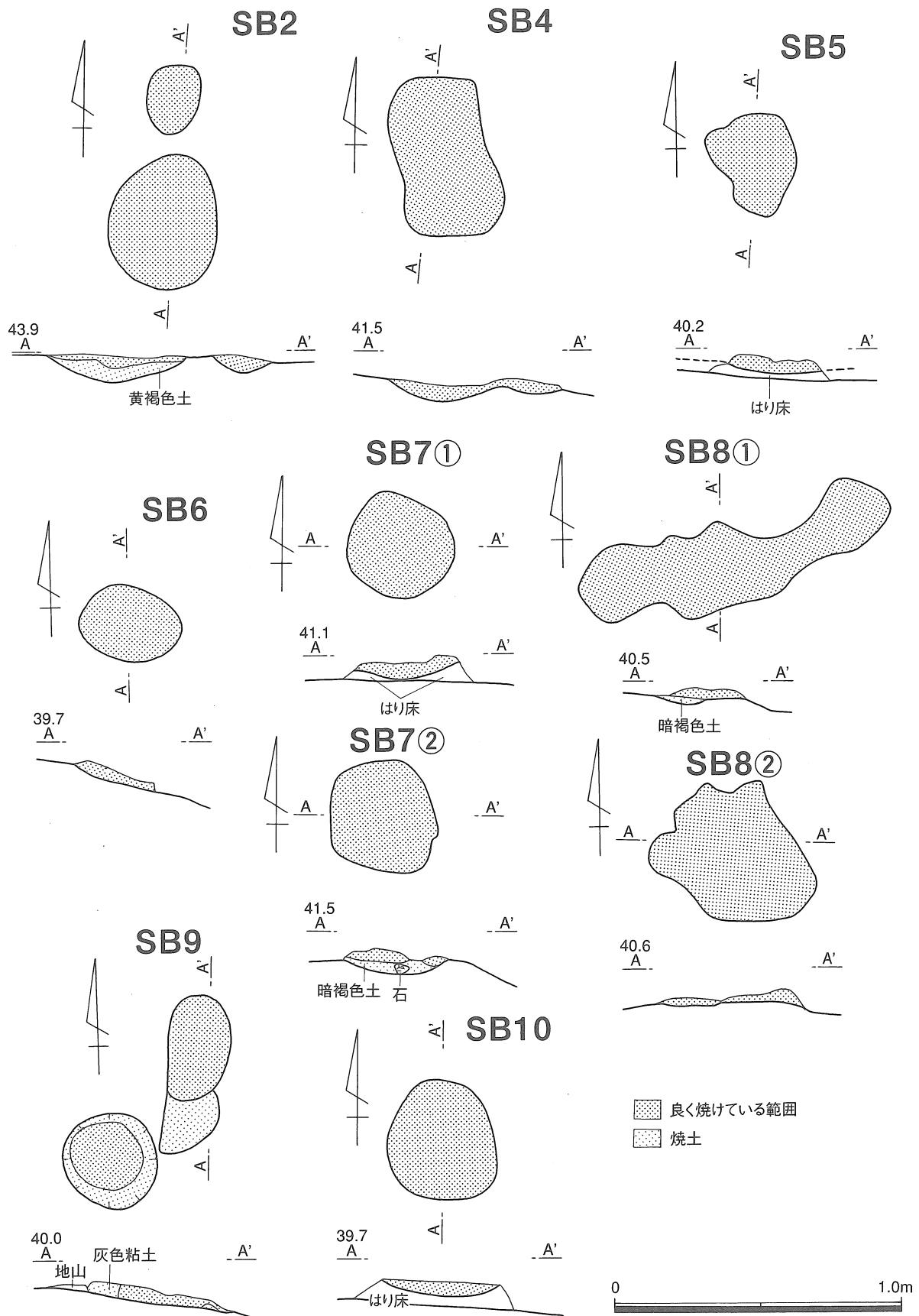
第39図 S B 80～82実測図



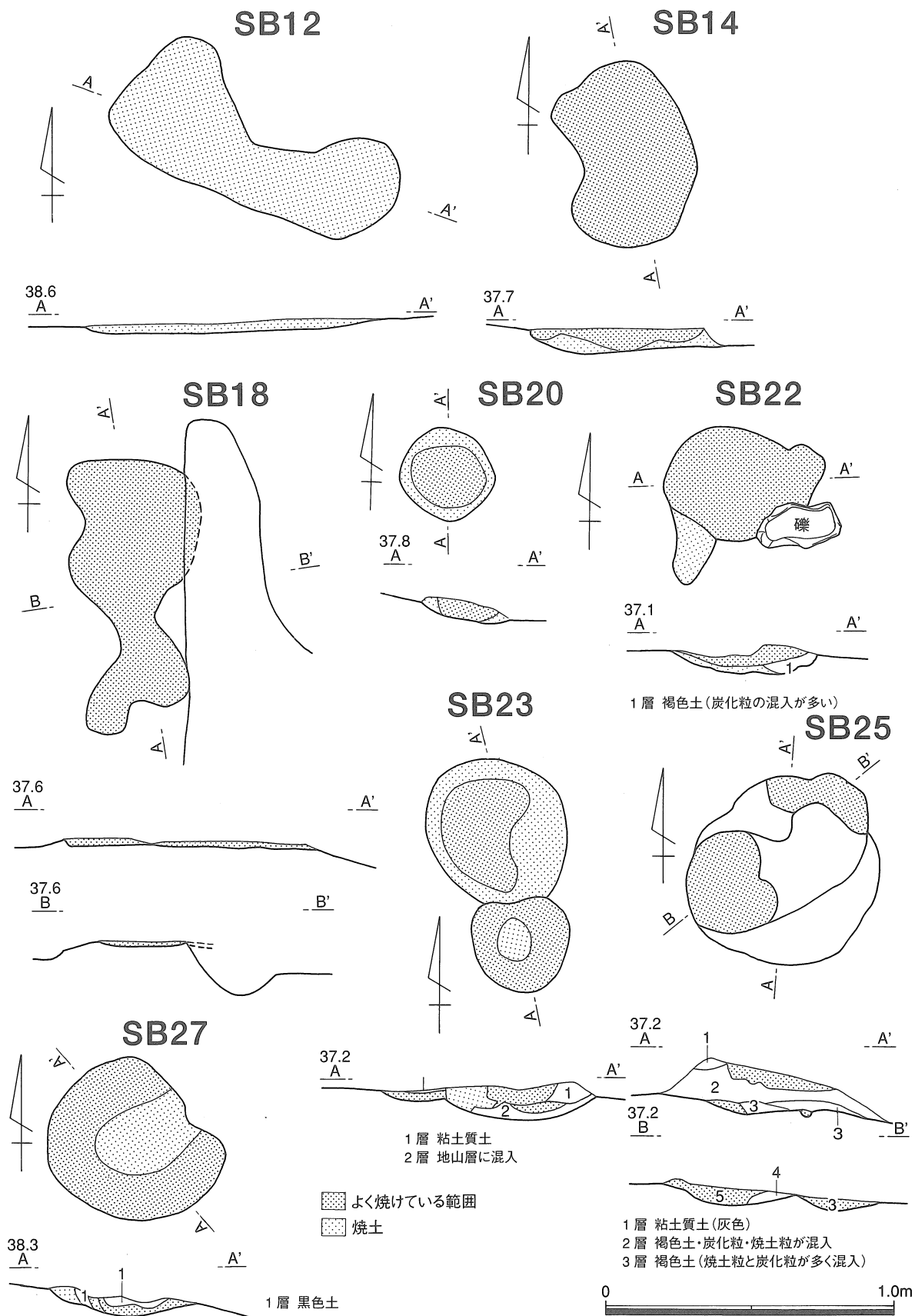
第40図 S B 83~85実測図



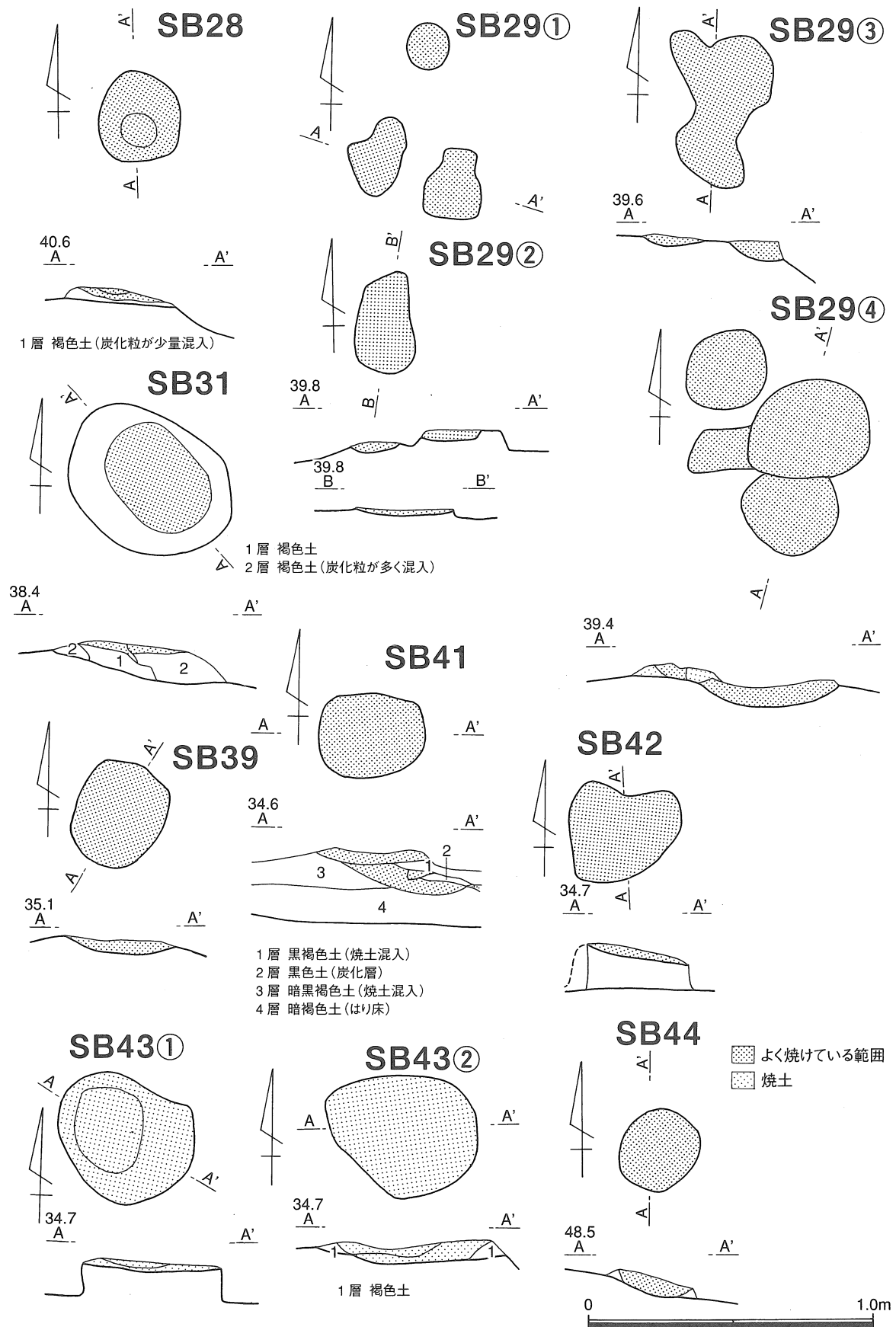
第41図 S B 87・88・91実測図



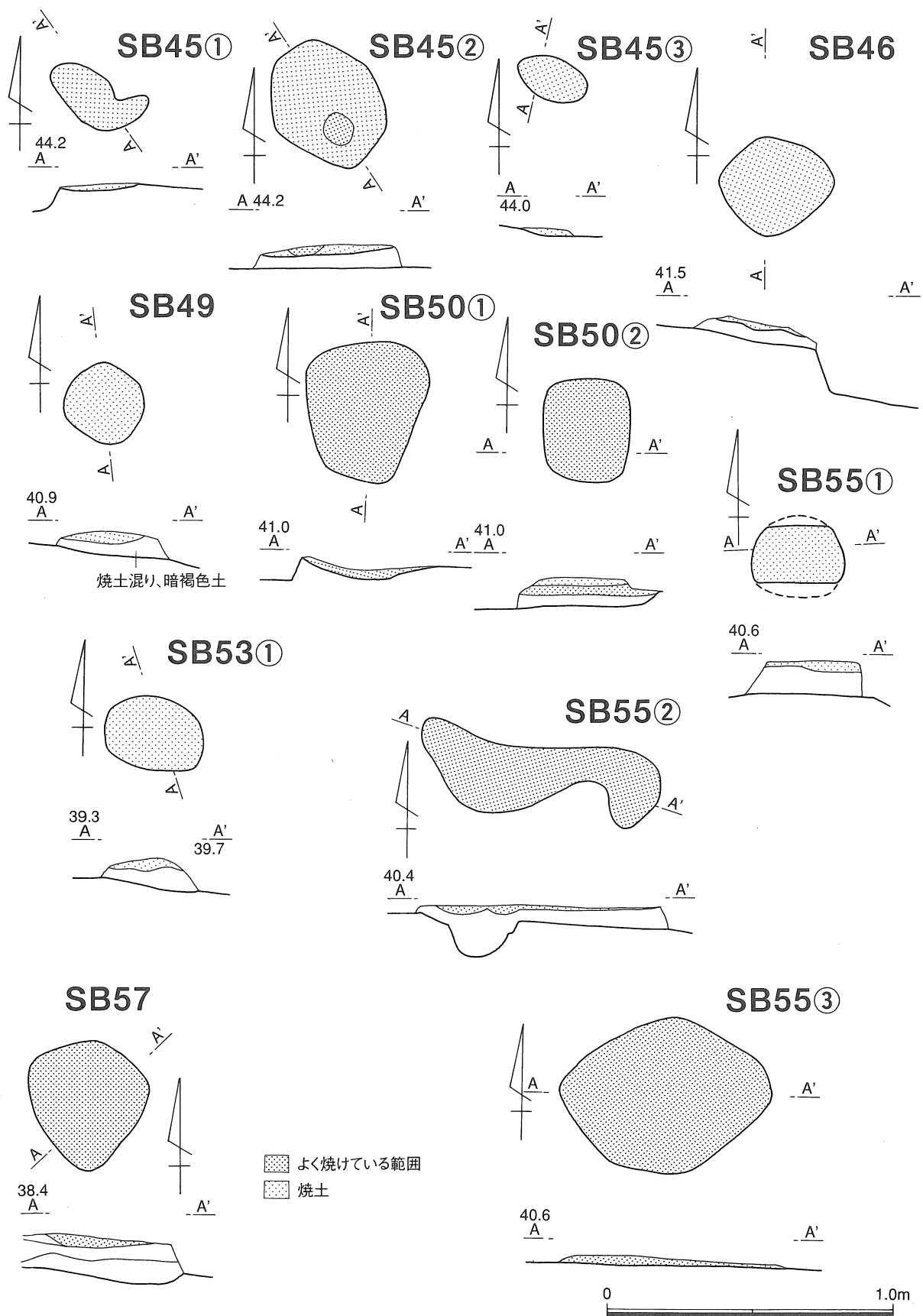
第42図 SB2・4～10 炉実測図



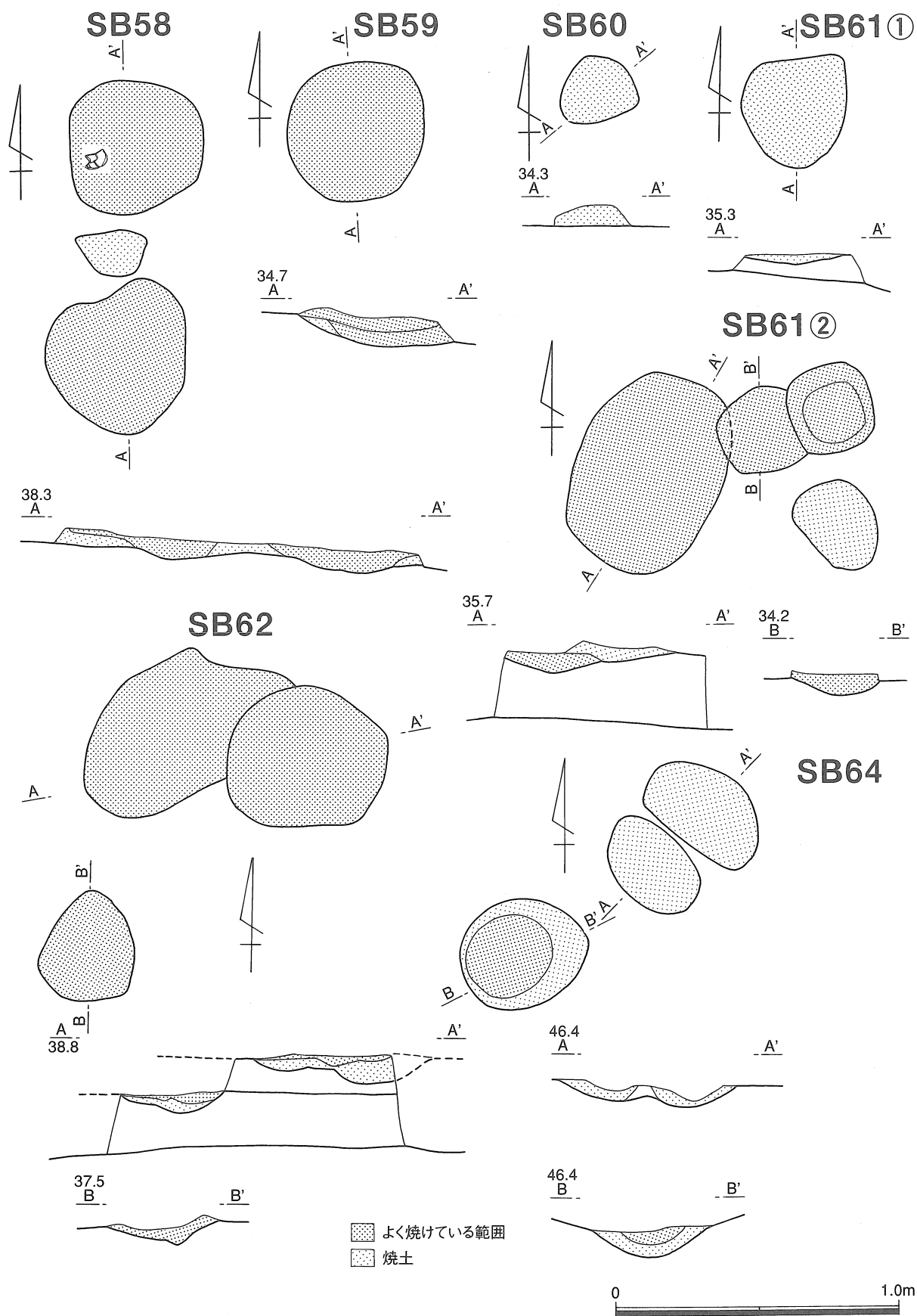
第43図 S B 12・14・18・20・22・23・25・27 炉実測図



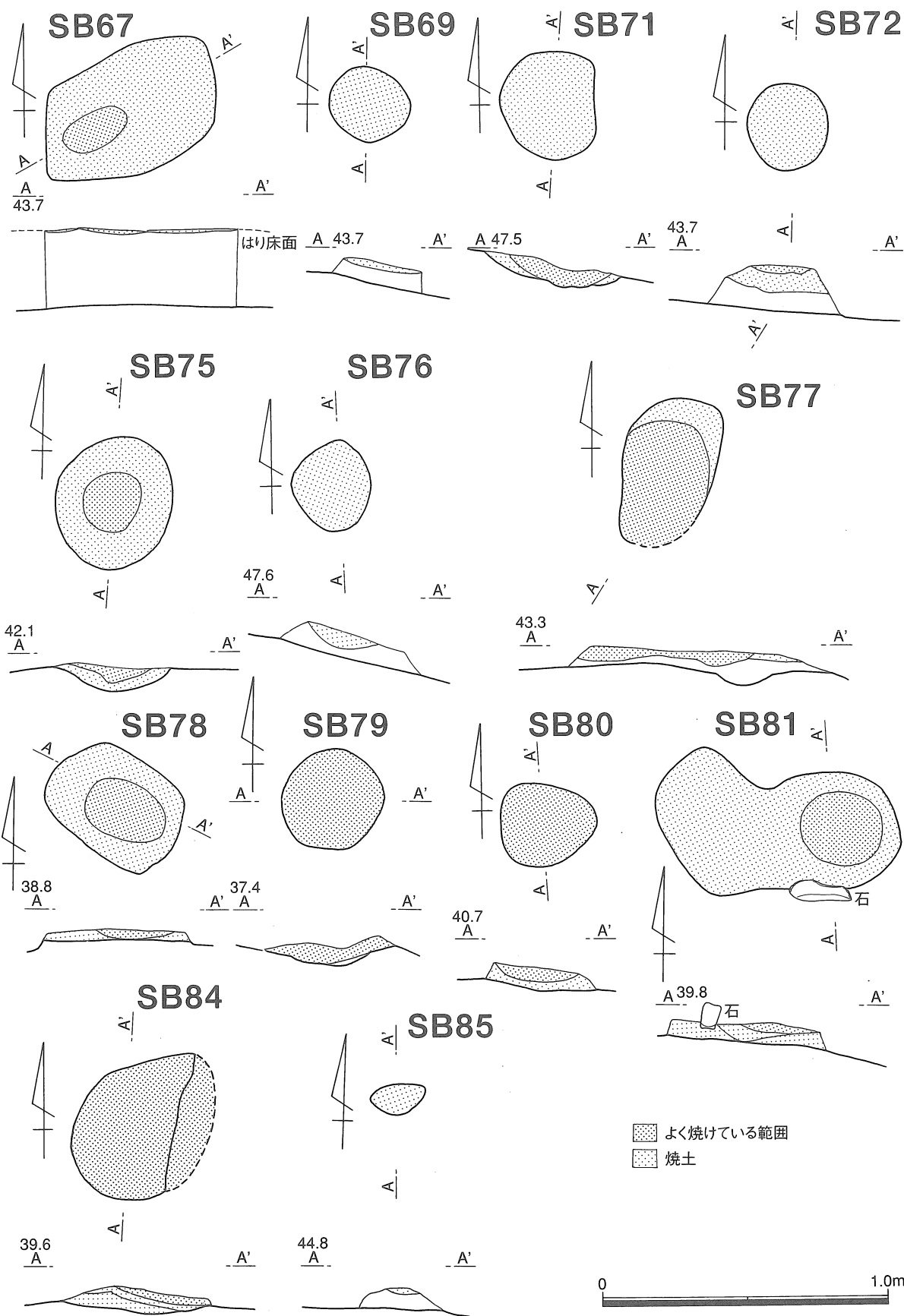
第44図 S B 28・29・31・39・41~44炉実測図



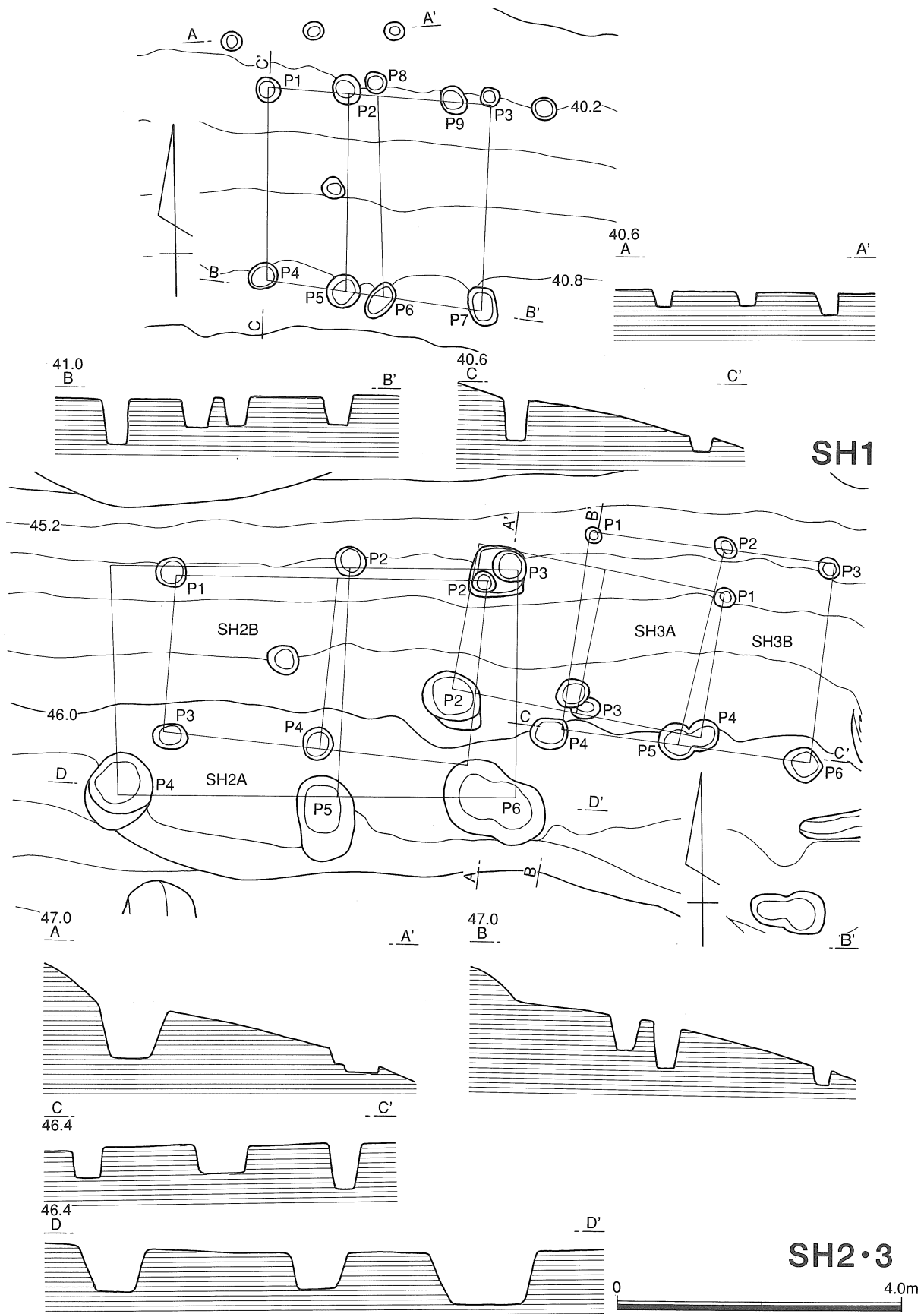
第45図 S B 45・46・49・50・53・55・57炉実測図



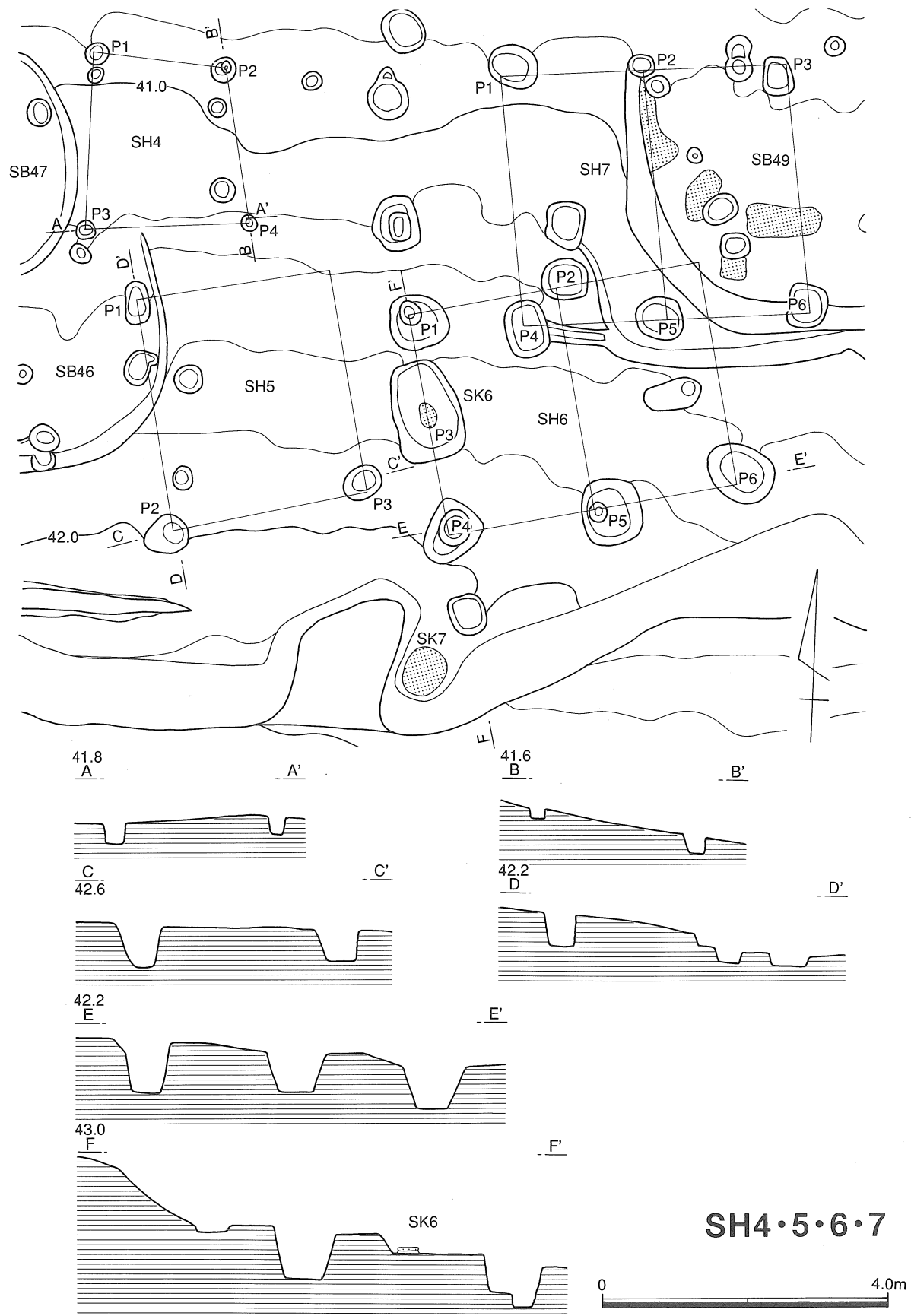
第46図 S B 58~62・64炉実測図



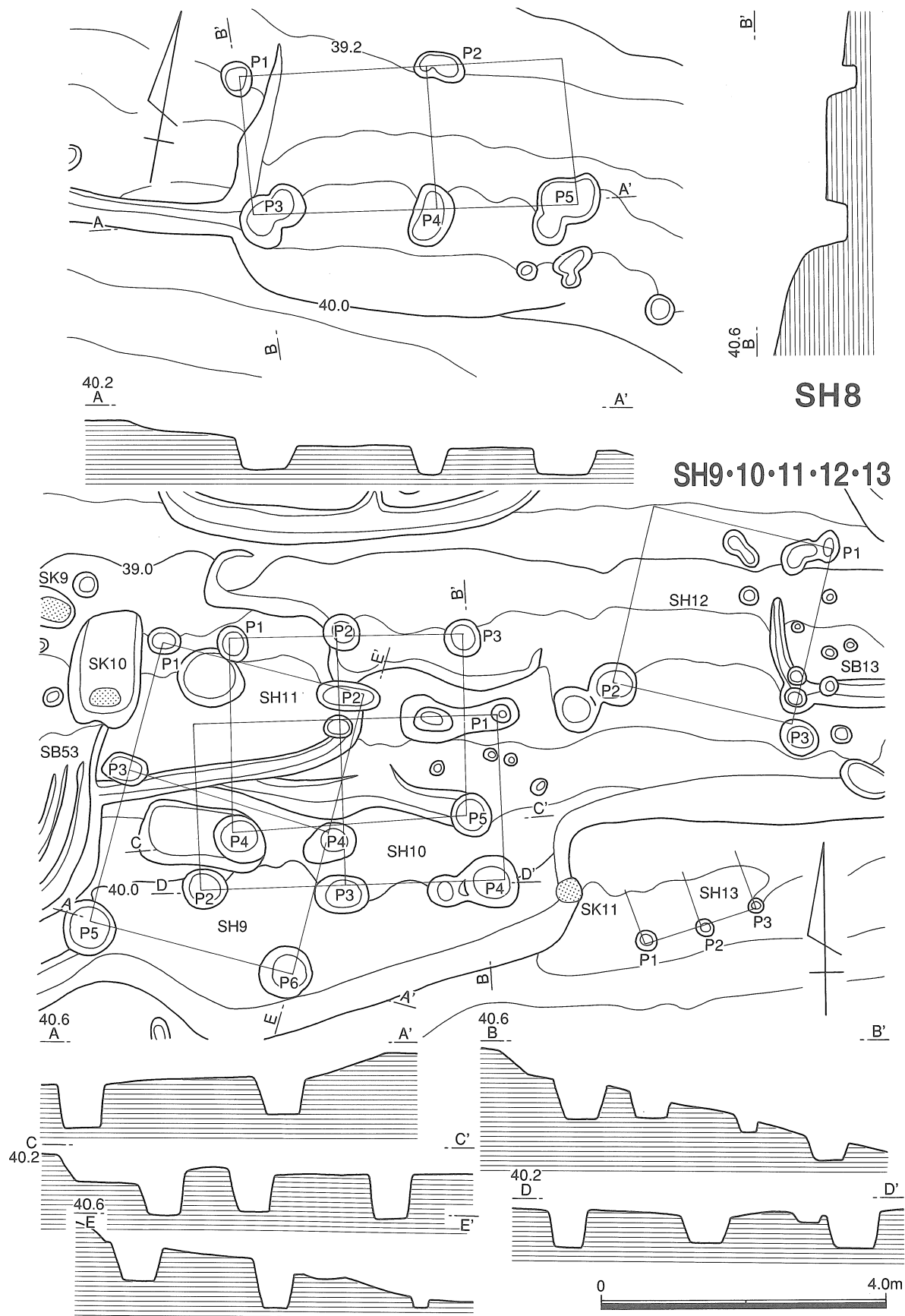
第47図 S B 67・69・71・72・75～81・84・85炉実測図



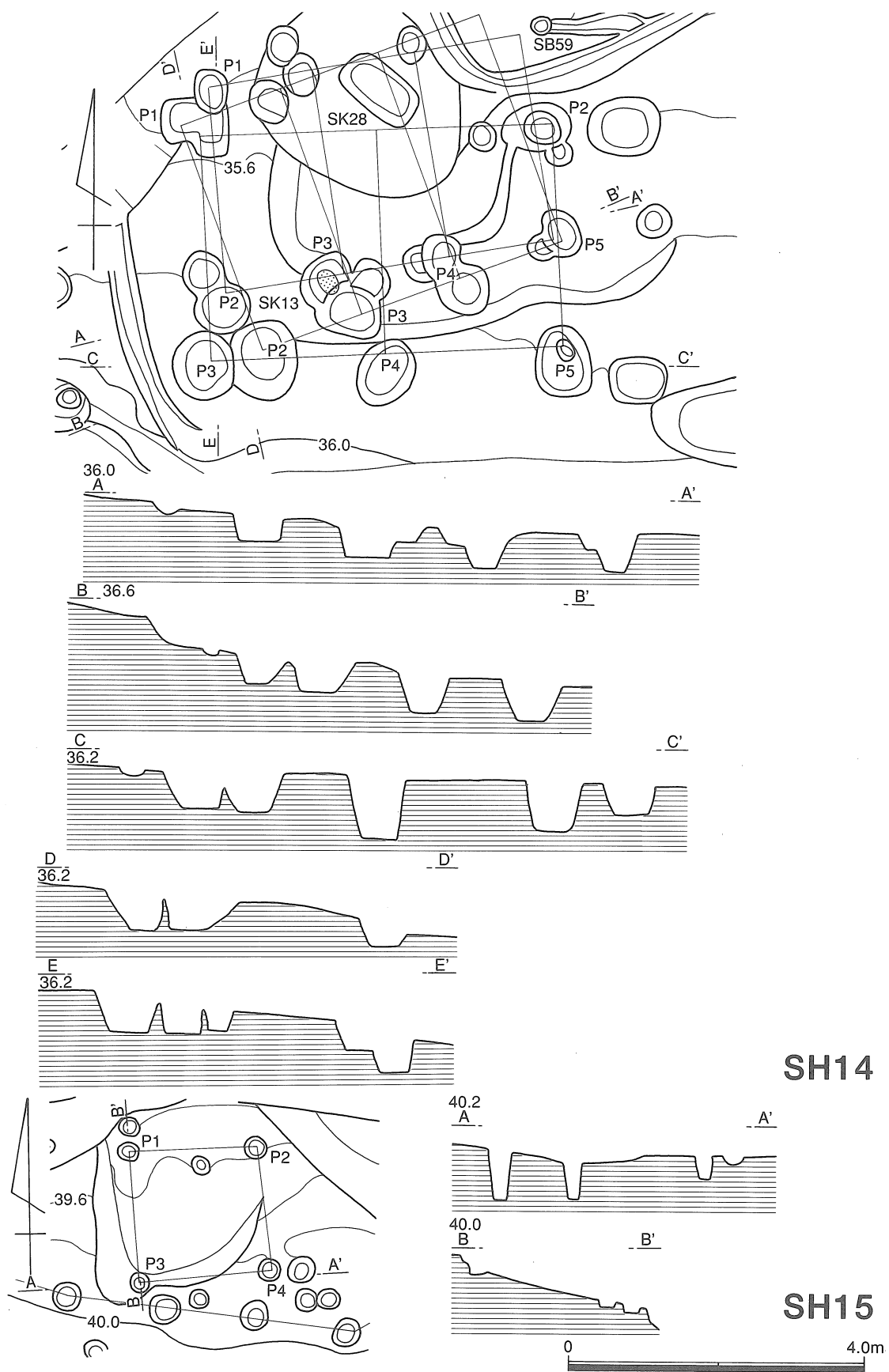
第48図 SH1～3実測図



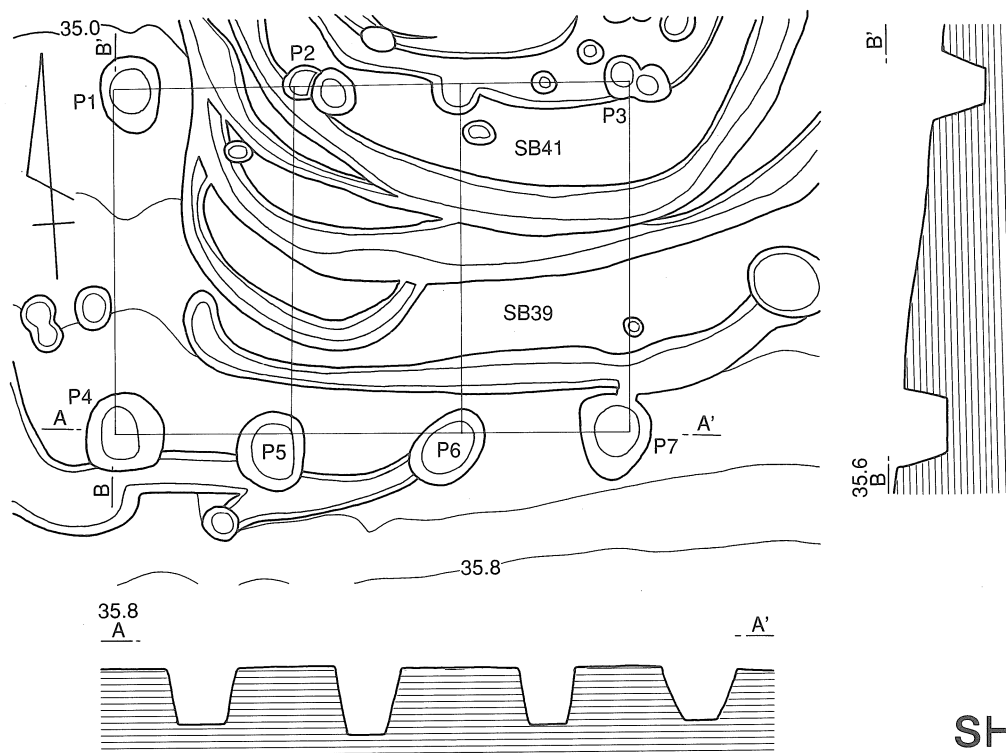
第49図 SH4～7実測図



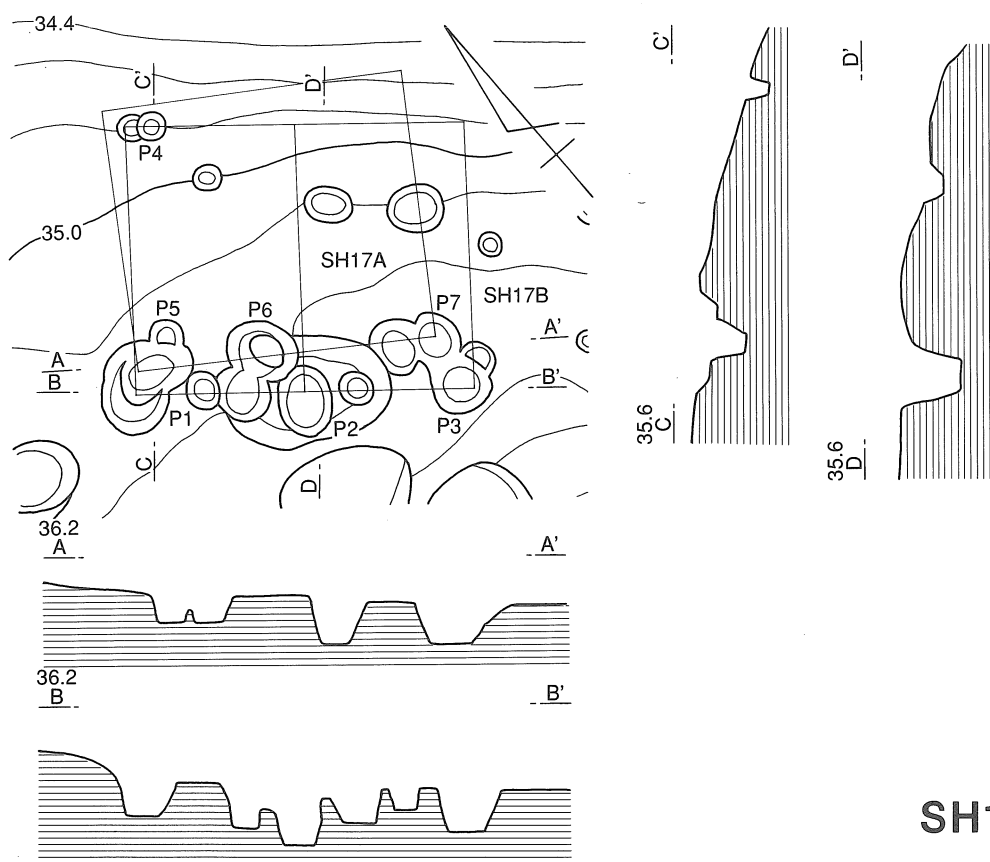
第50図 SH8~13実測図



第51図 SH14・15実測図

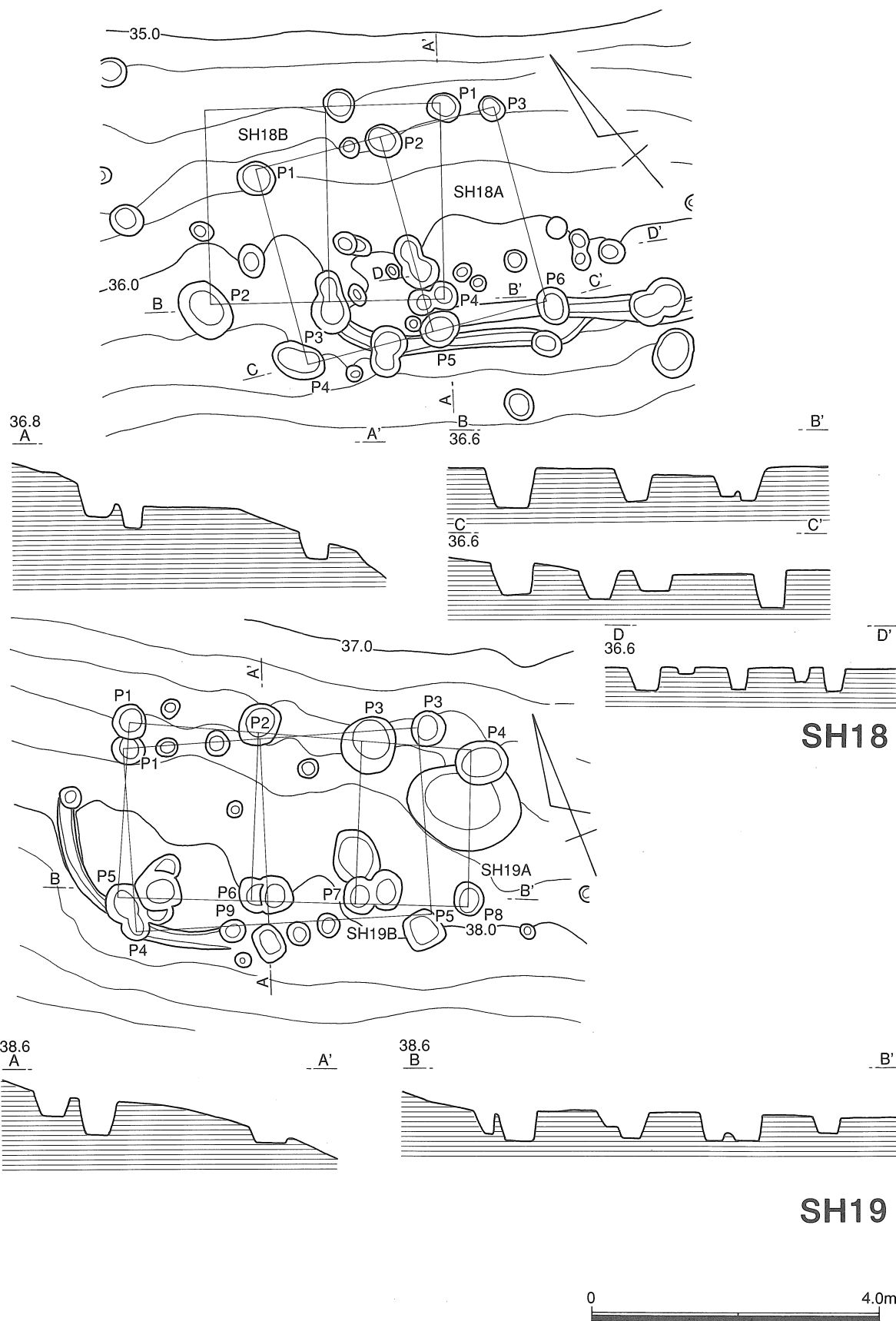


SH16

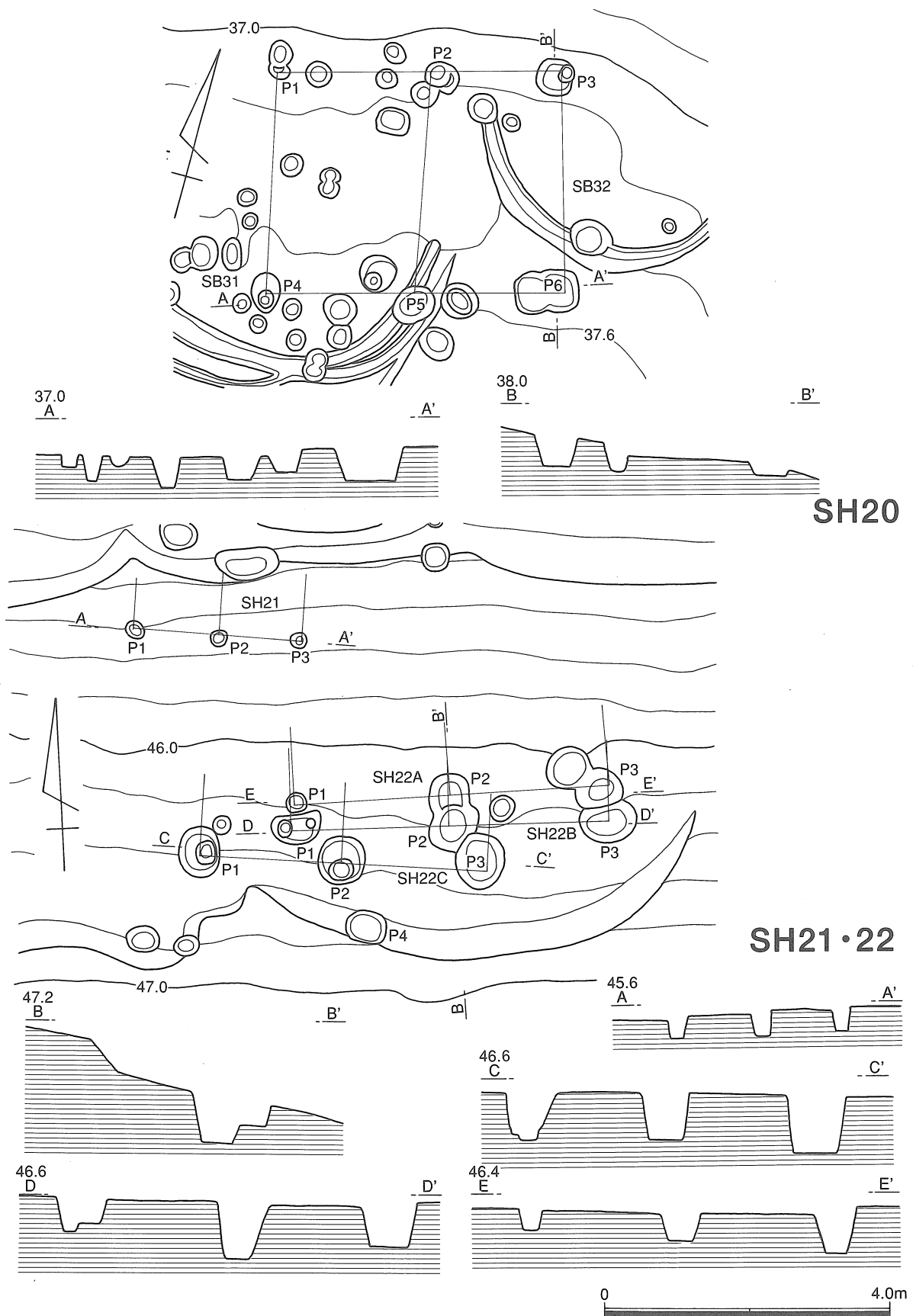


SH17

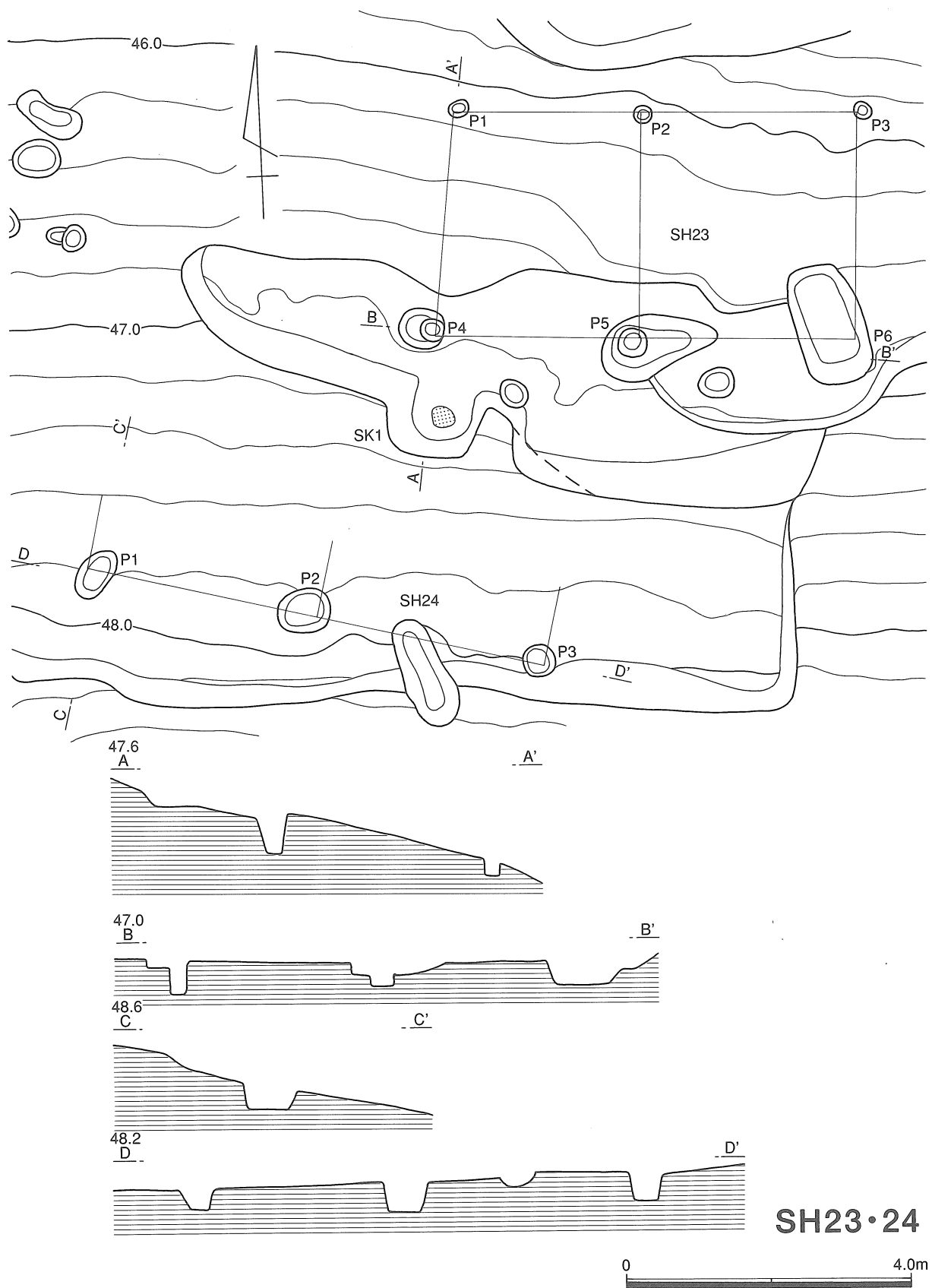
第52図 SH16・17実測図



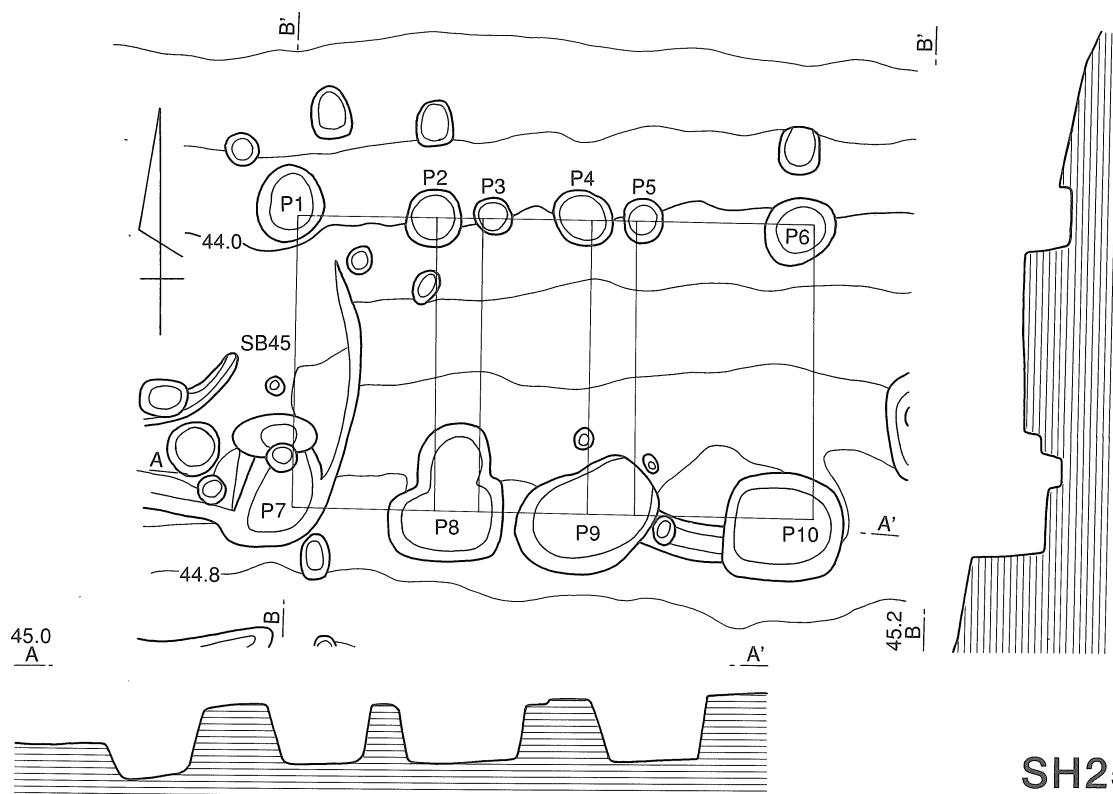
第53図 SH18・19実測図



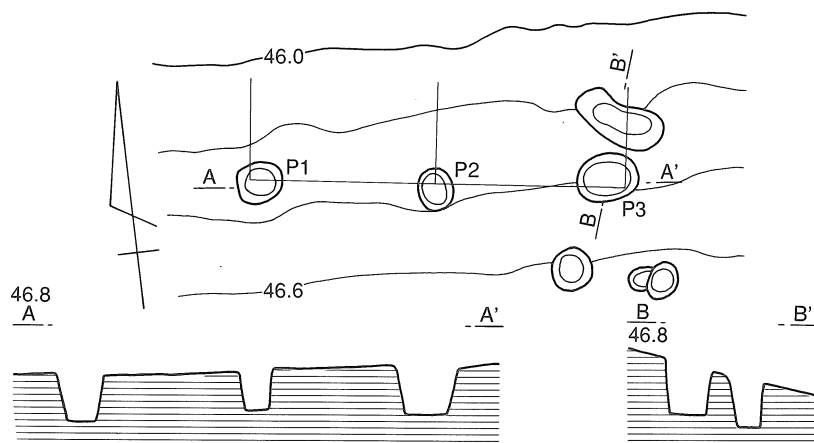
第54図 S H20~22実測図



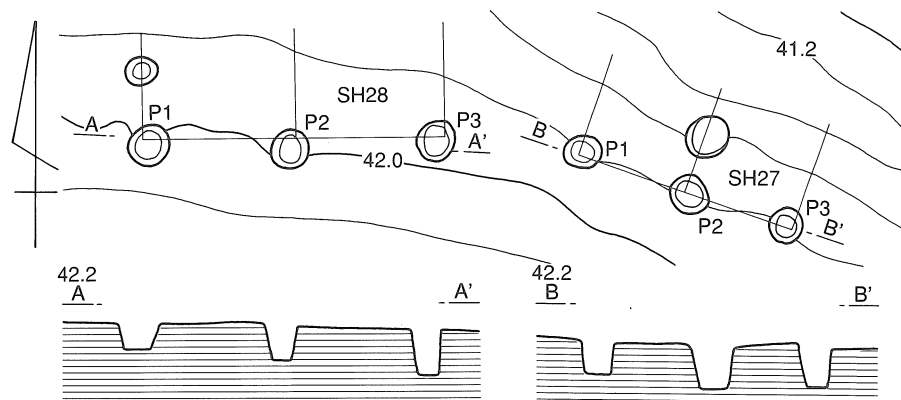
第55図 SH23・24実測図



SH25



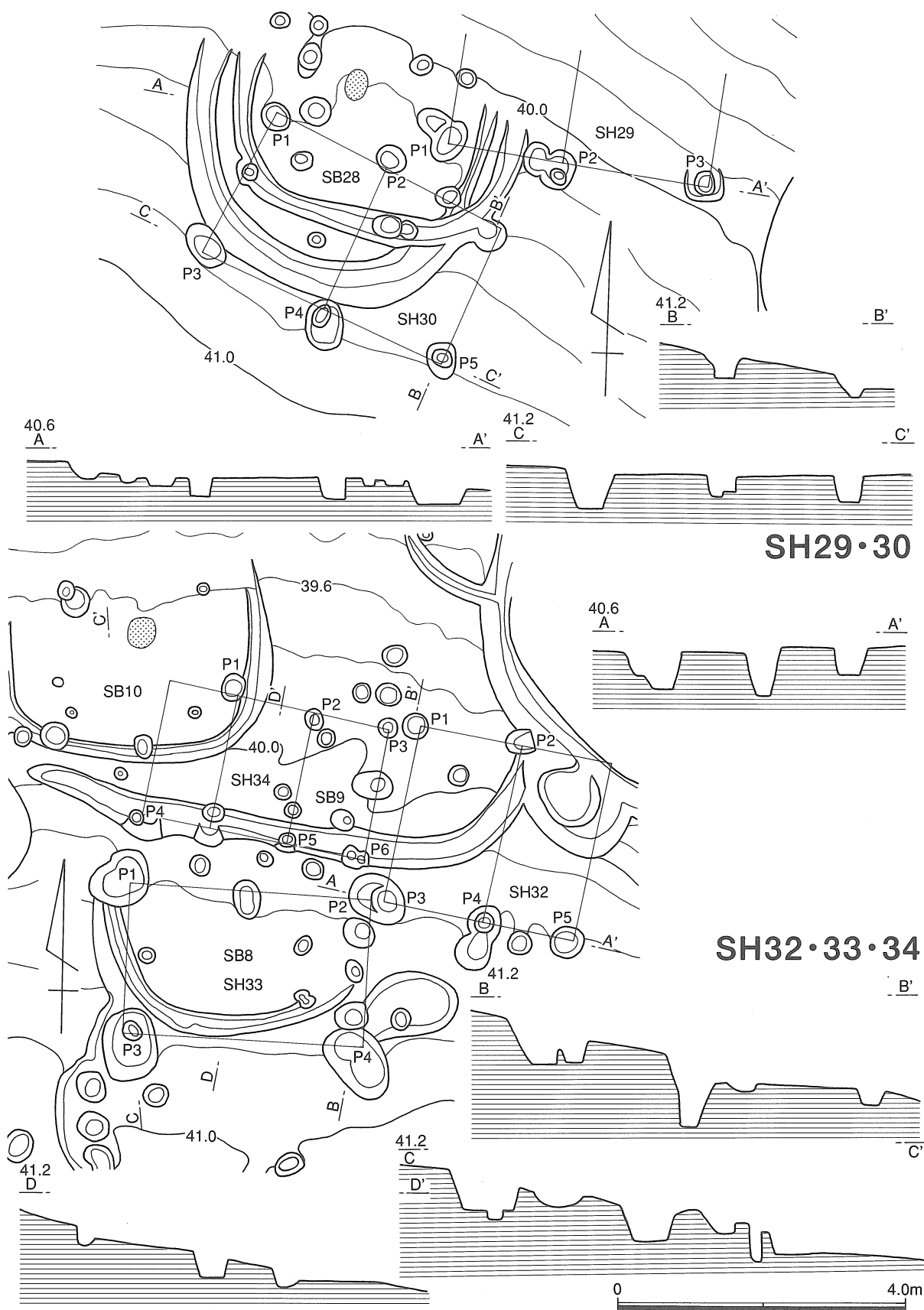
SH26



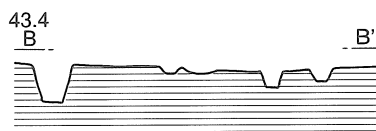
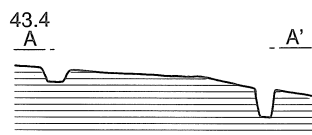
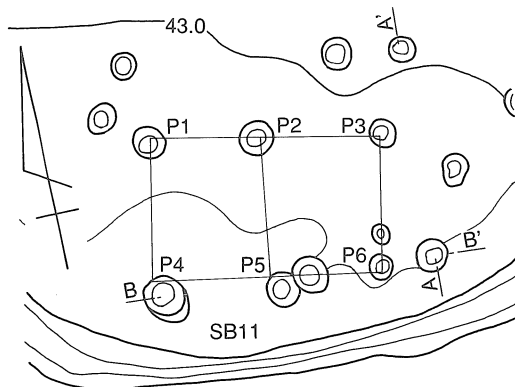
SH27・28



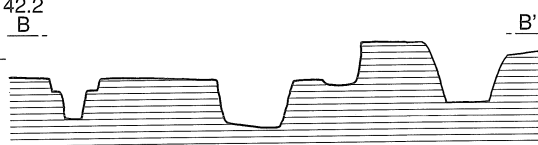
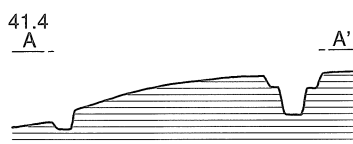
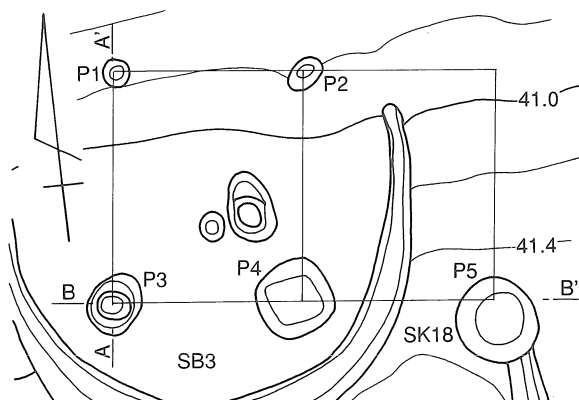
第56図 S H25~28実測図



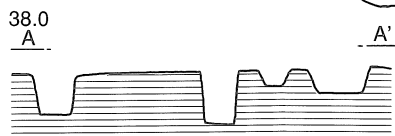
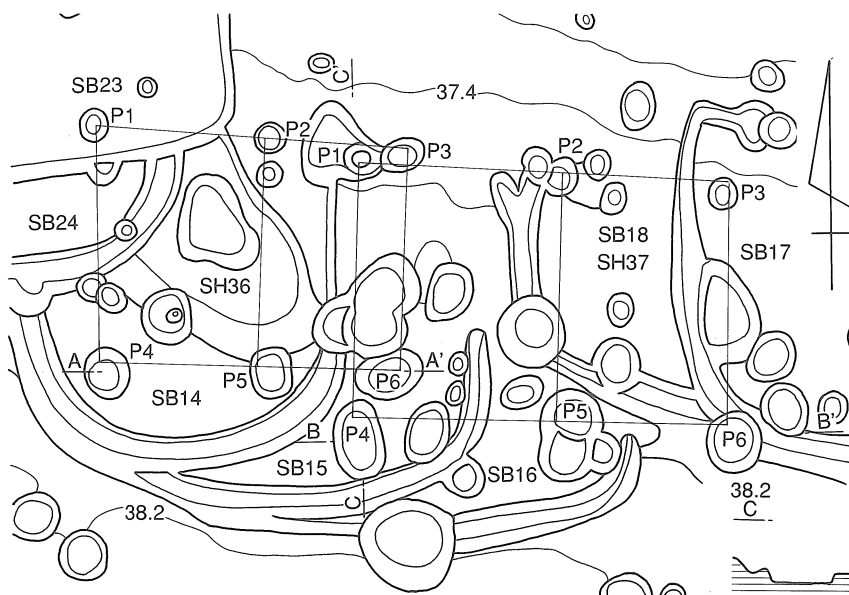
第57図 SH29・30・32~34実測図



SH31



SH35

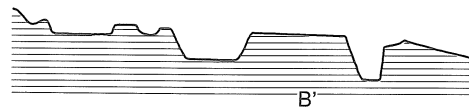


38.2

B

B'

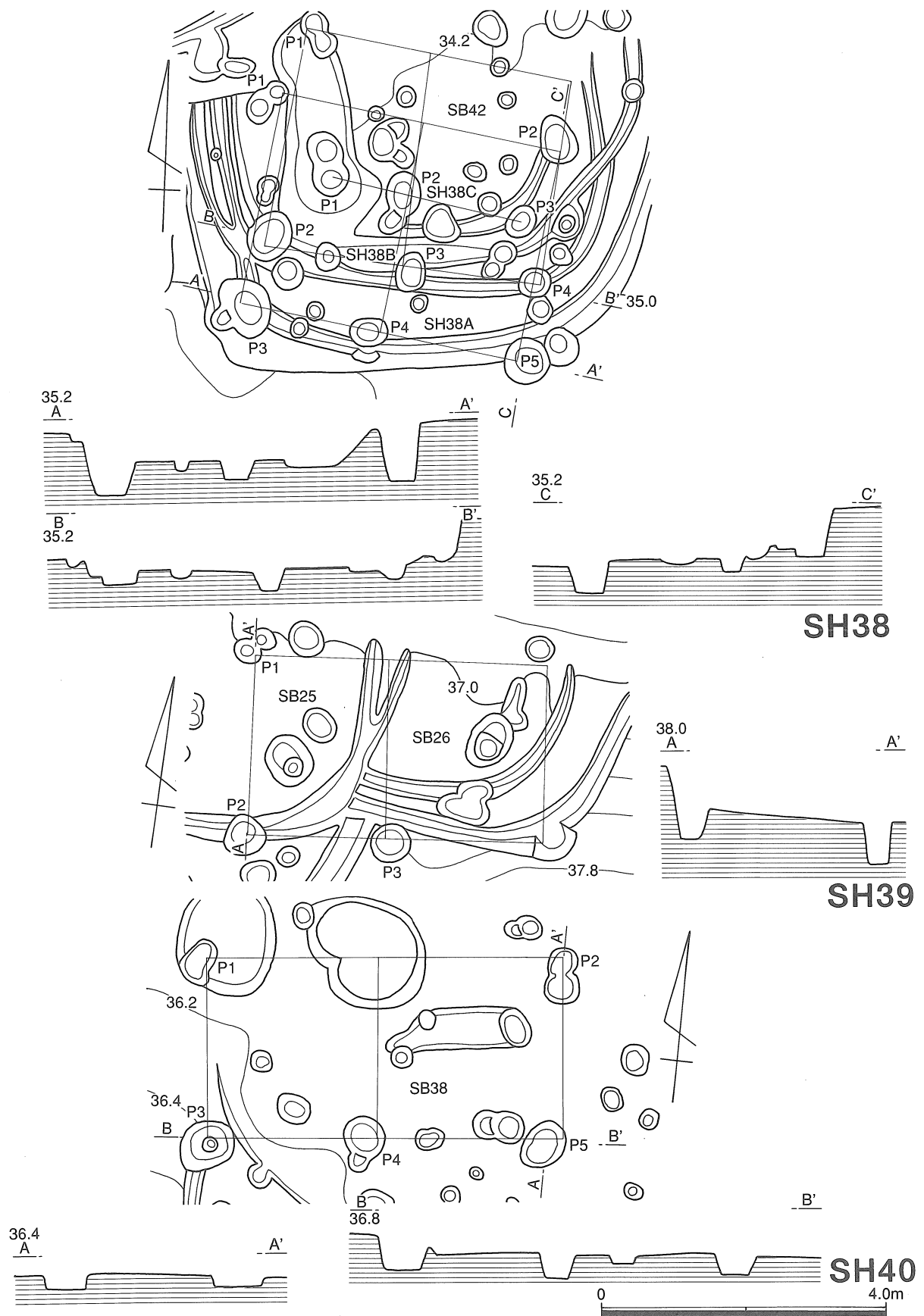
SH36-37



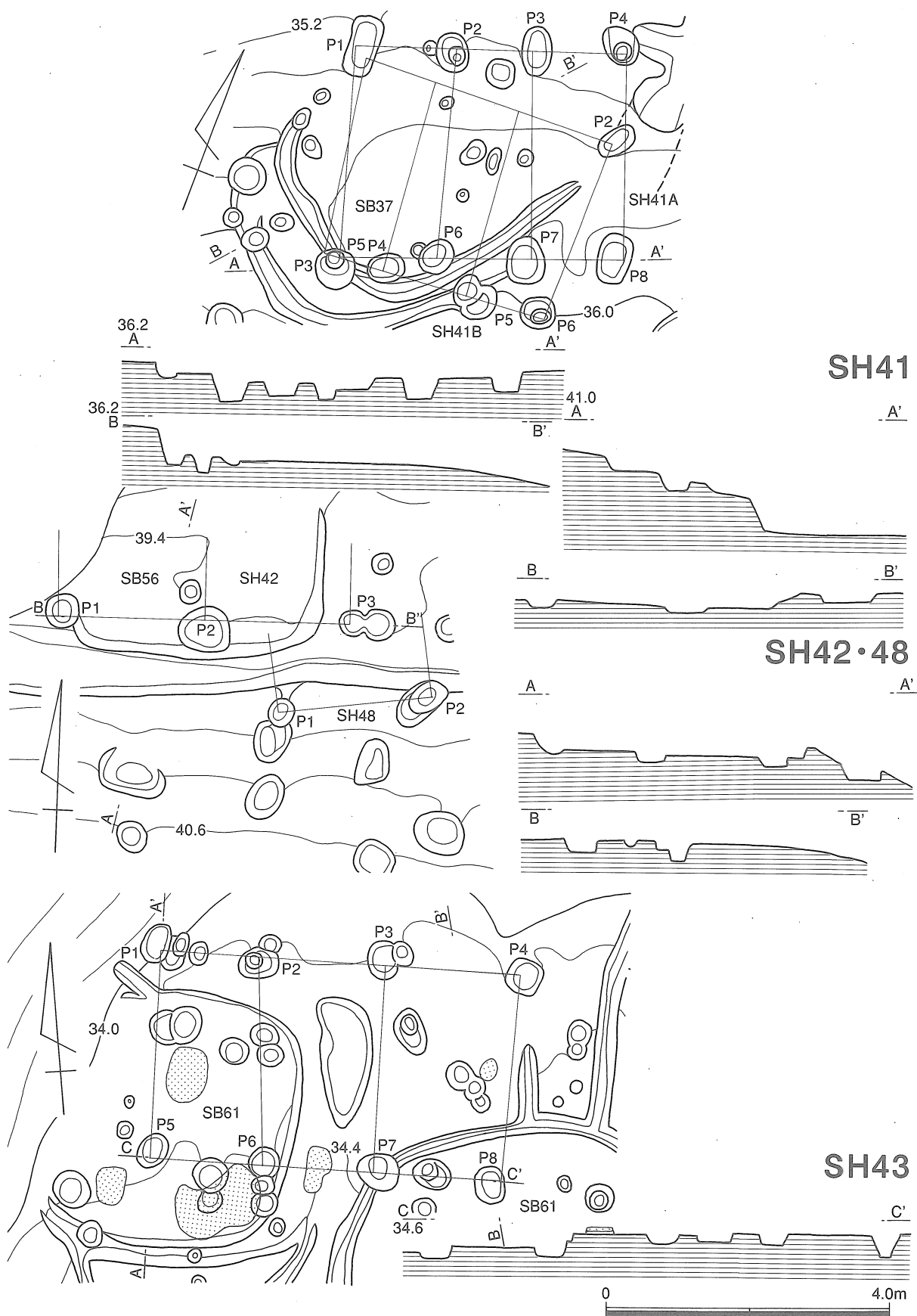
C'

0 4.0m

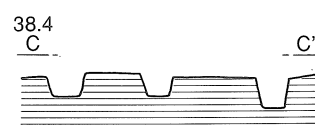
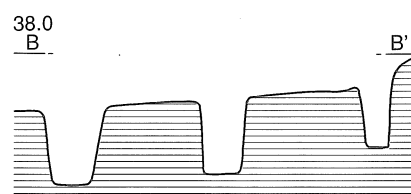
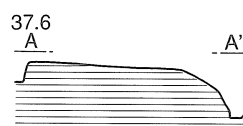
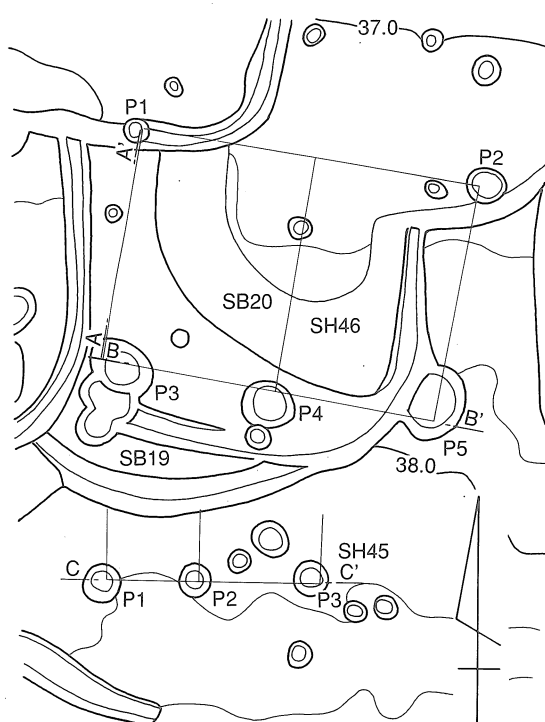
第58図 S H 31・35~37実測図



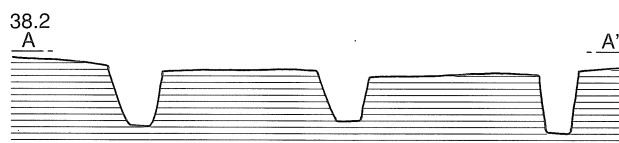
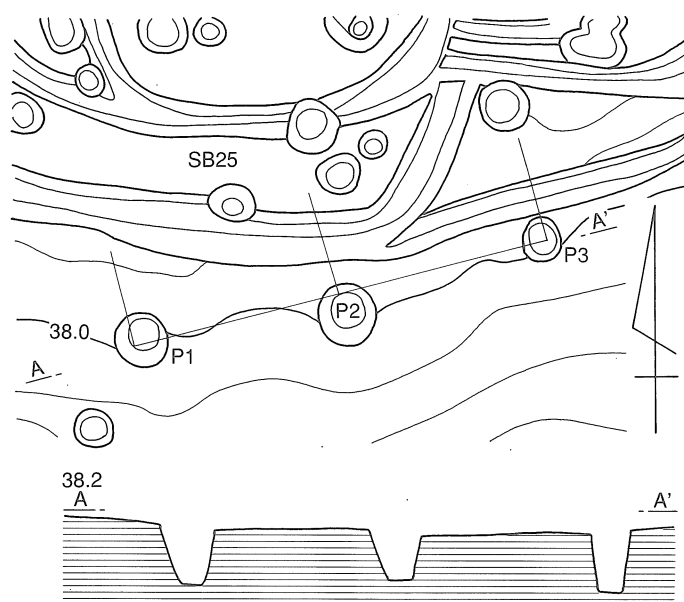
第59図 SH38~40実測図



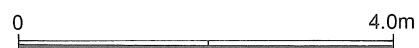
第60図 SH41~43・48実測図



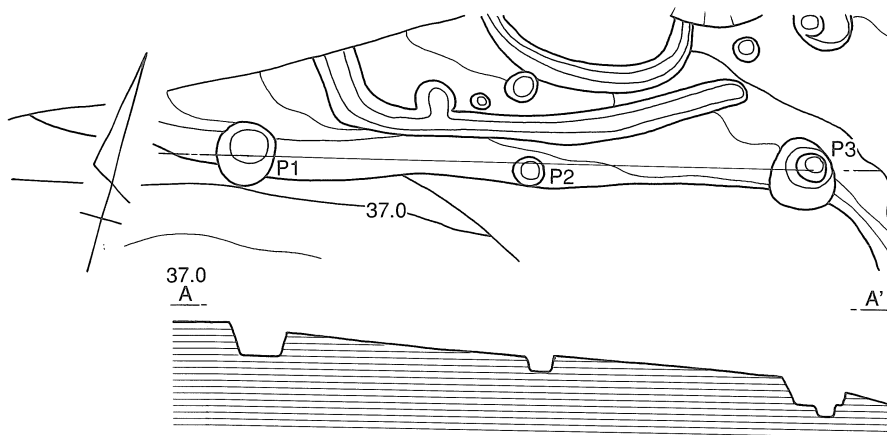
SH45・46



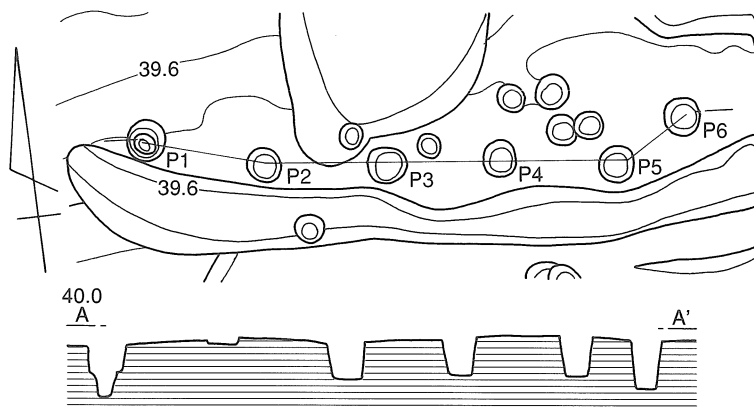
SH44



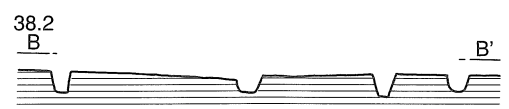
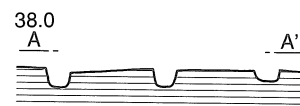
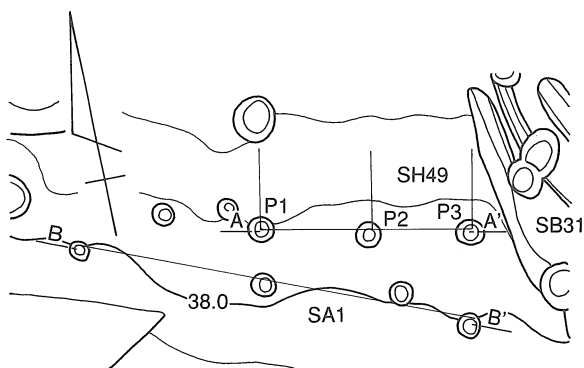
第61図 S H44~46実測図



SH47

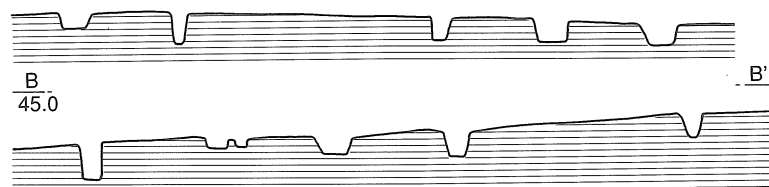
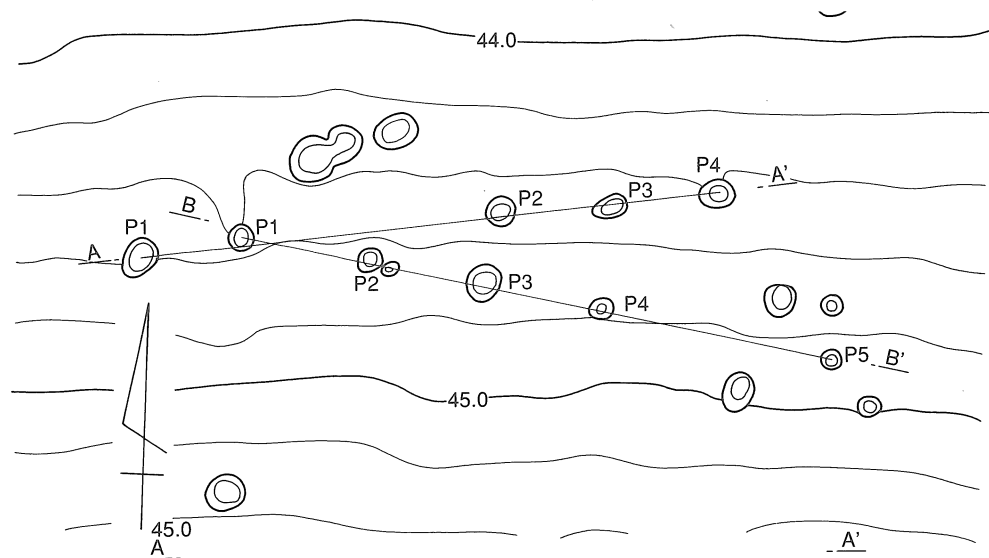


SA4

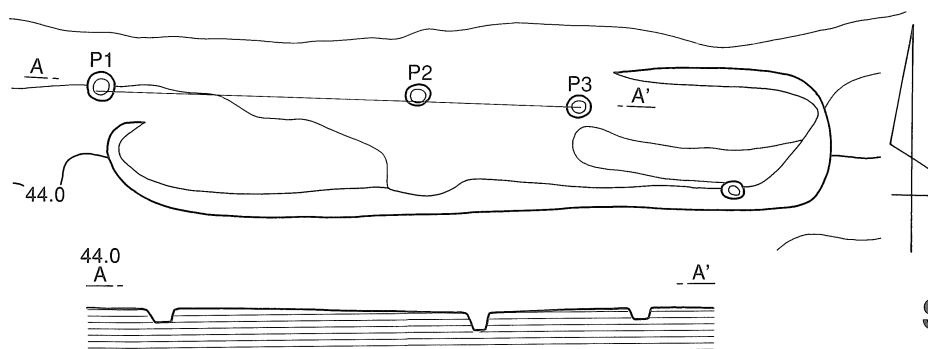


SH49
SA1

第62図 SH47・49 SA1・4実測図



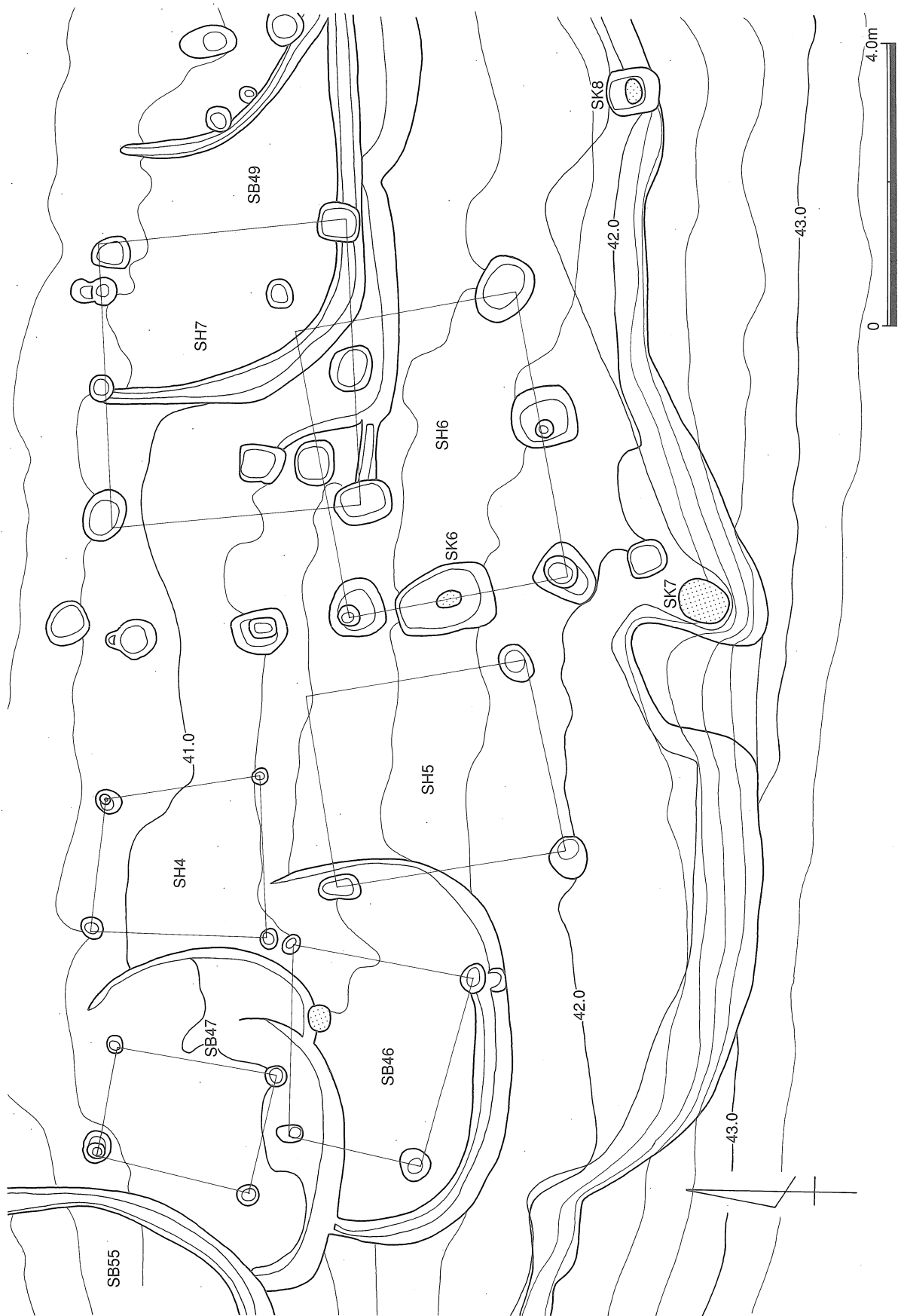
SA2



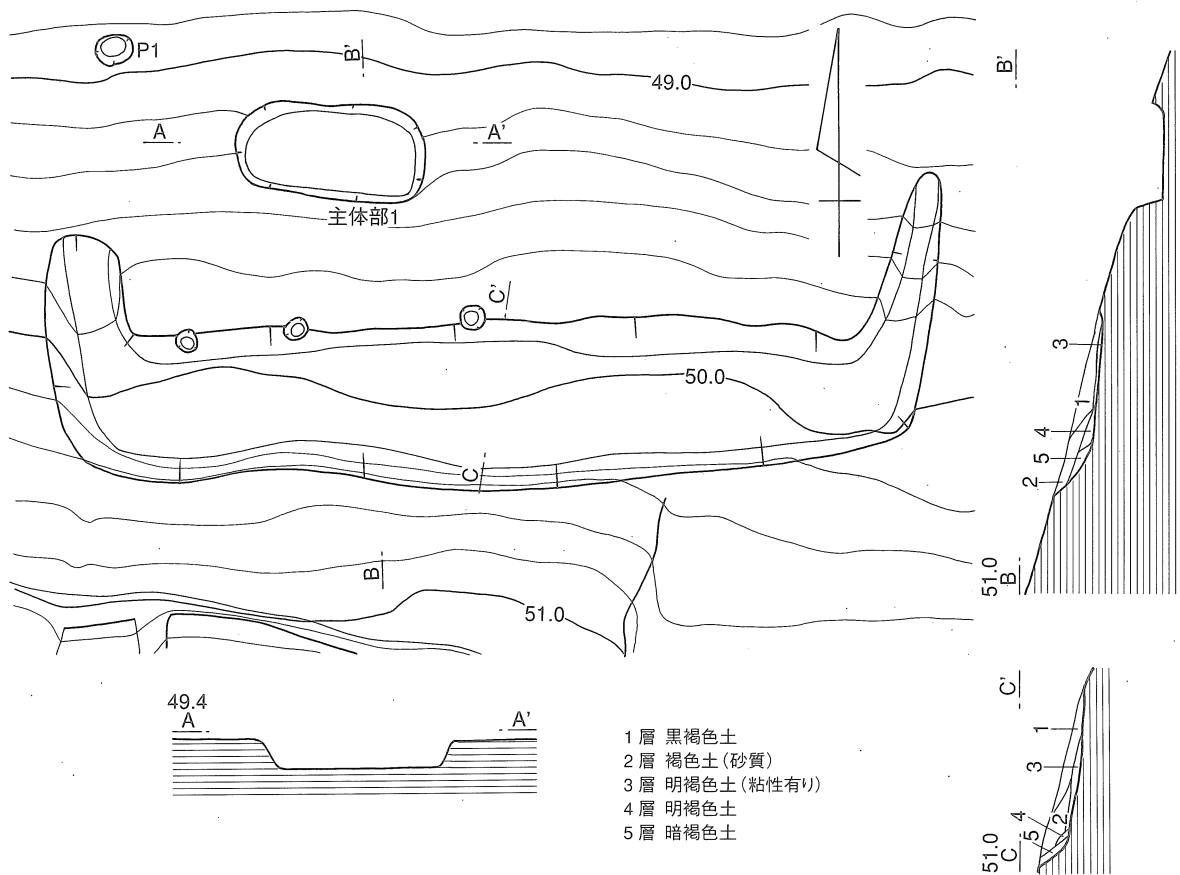
SA3



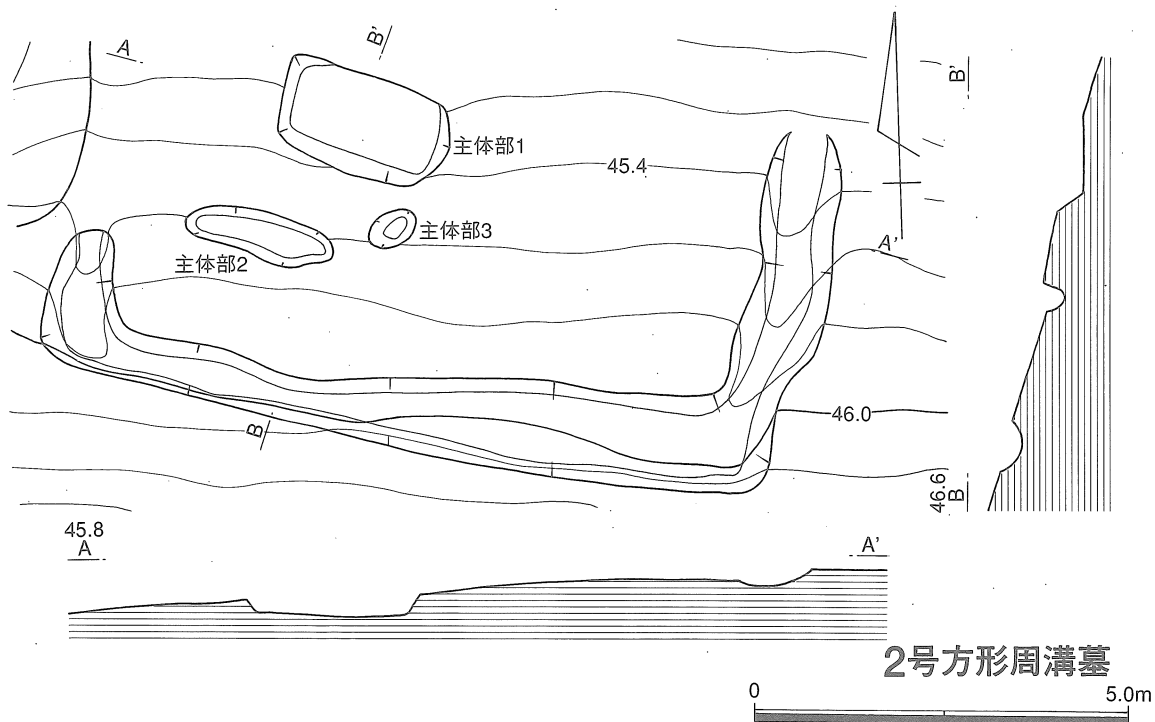
第63図 SA2・3実測図



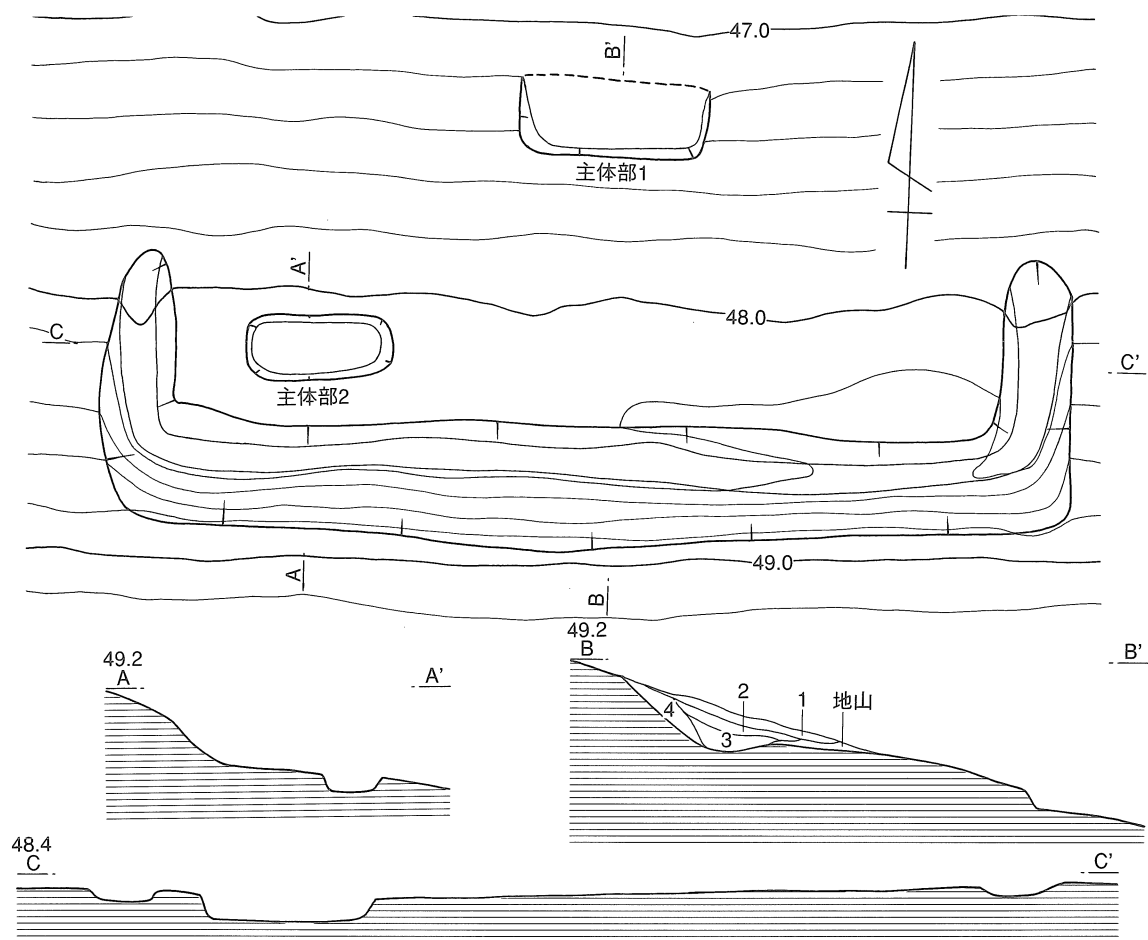
第64図 SH 6・7 周辺遺構配置図



1号方形周溝墓

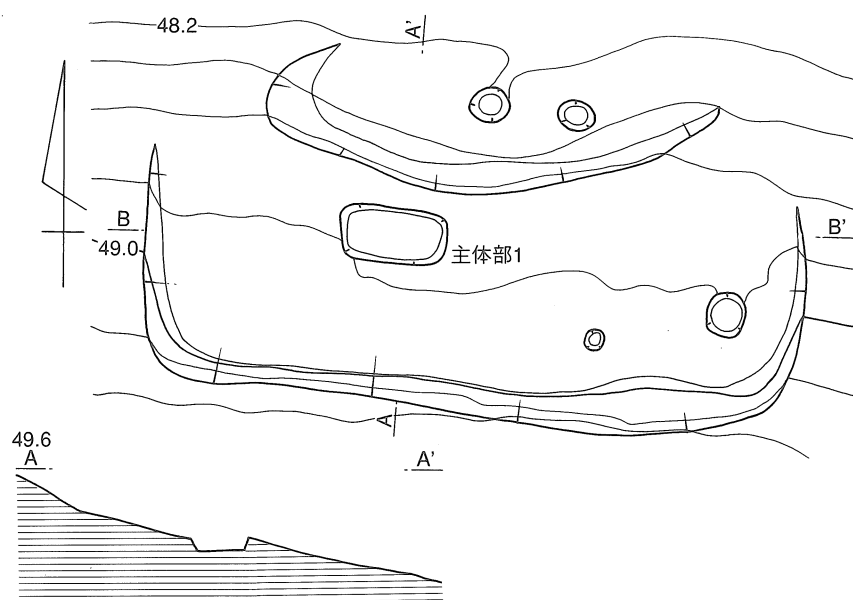


第65図 1・2号方形周溝墓実測図

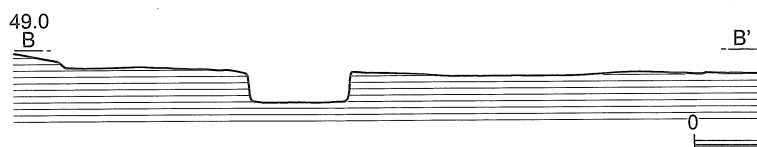


3号方形周溝墓

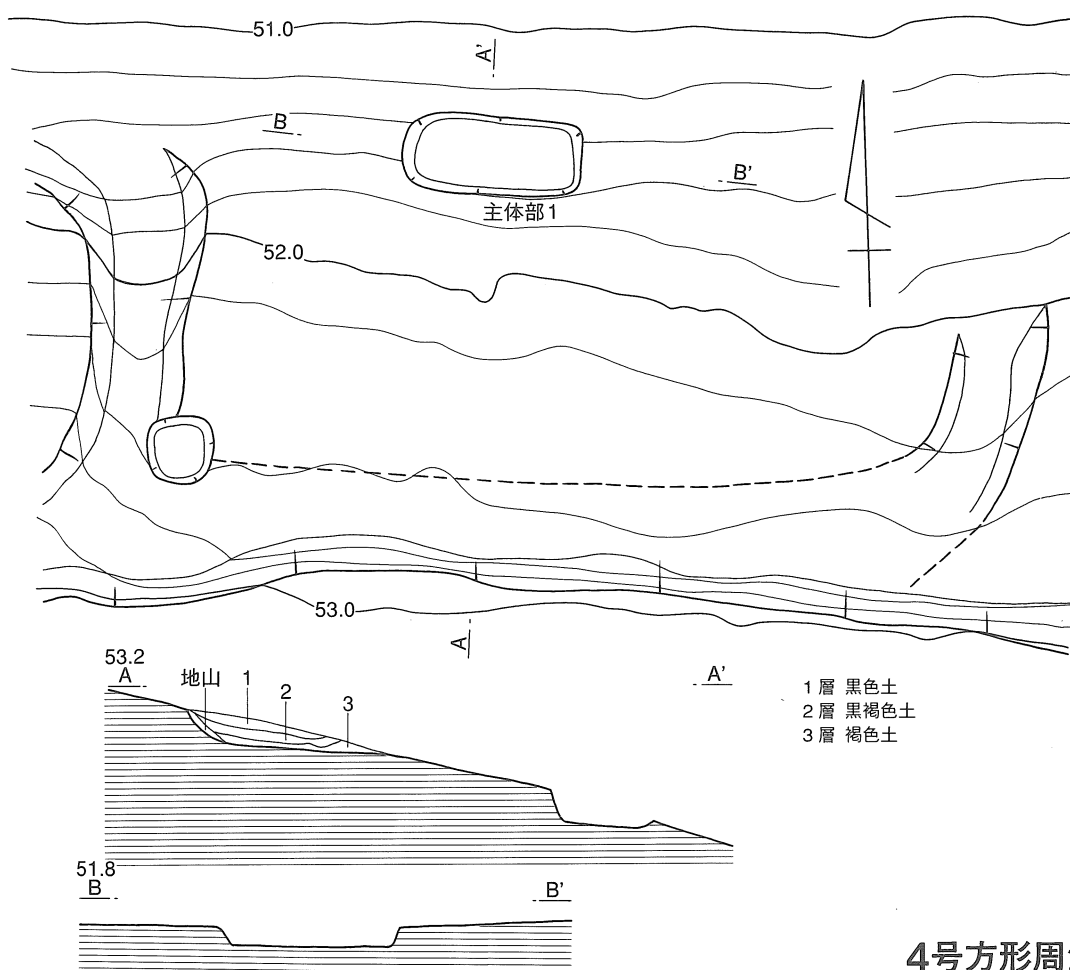
- 1層 暗褐色土
- 2層 暗褐色土
(1層より、やや明るい)
- 3層 暗褐色土
- 4層 褐色土



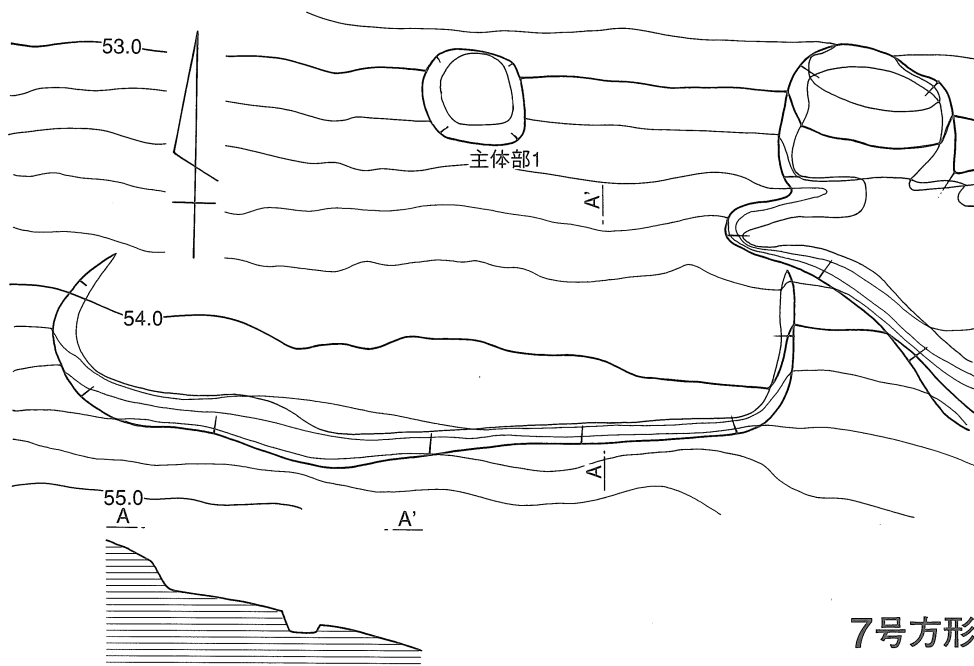
5号方形周溝墓



第66図 3・5号方形周溝墓実測図



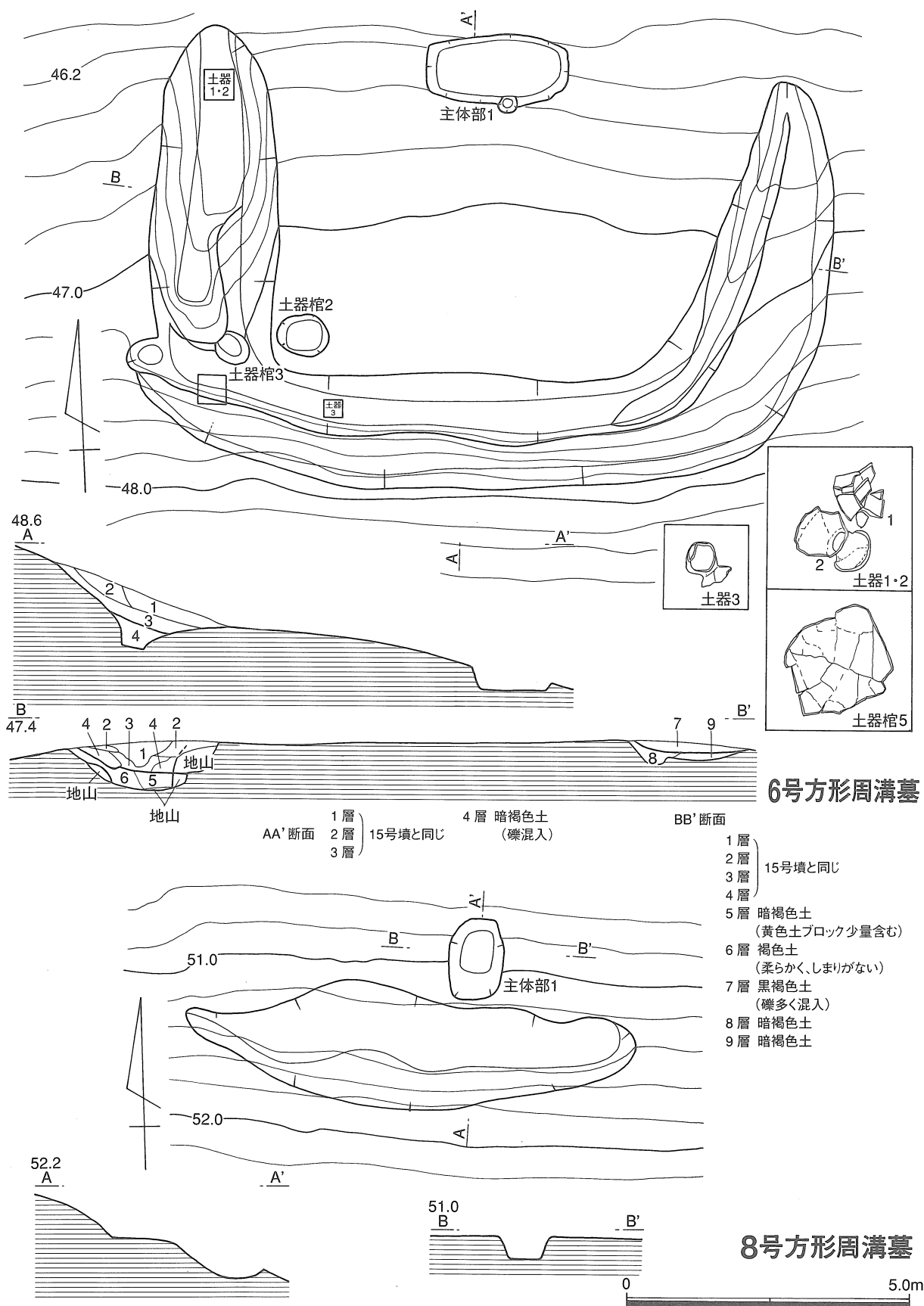
4号方形周溝墓



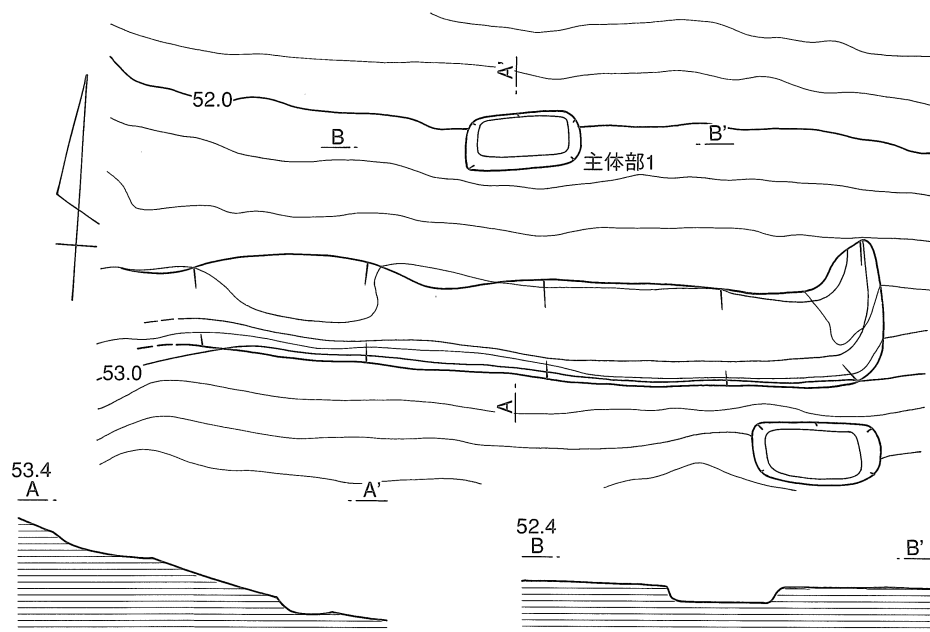
7号方形周溝墓

0 5.0m

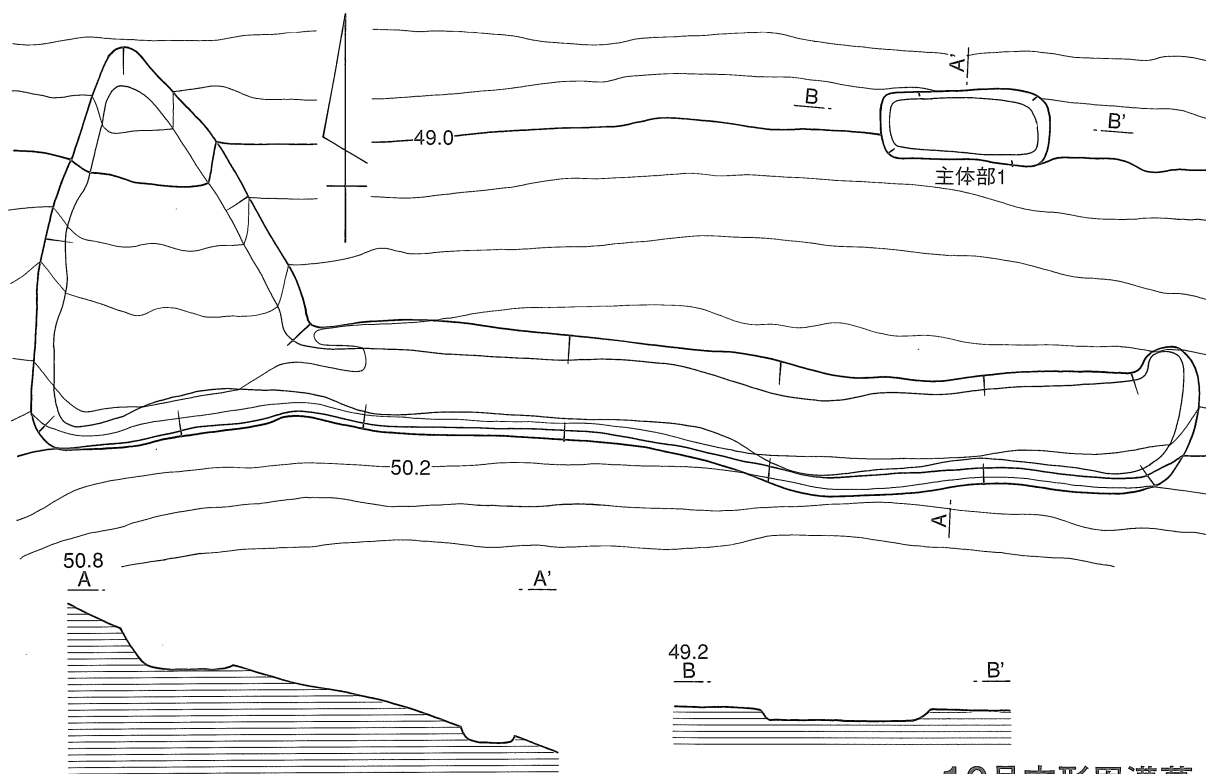
第67图 4・7号方形周溝墓实测图



第68図 6・8号方形周溝墓実測図

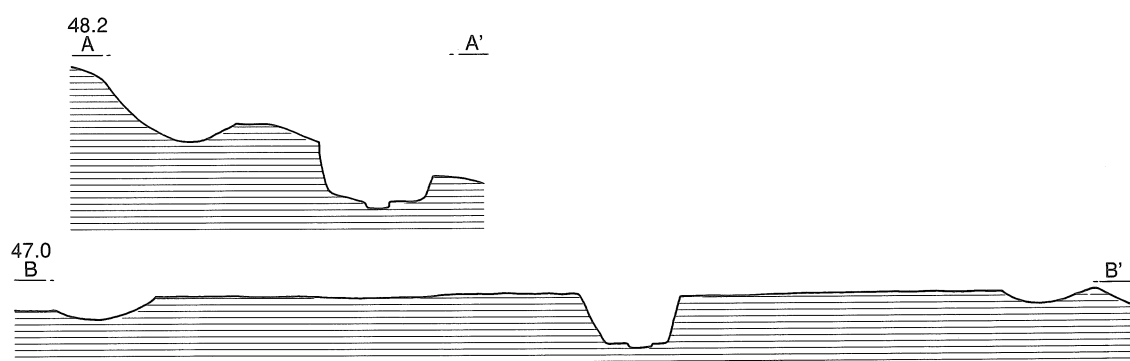
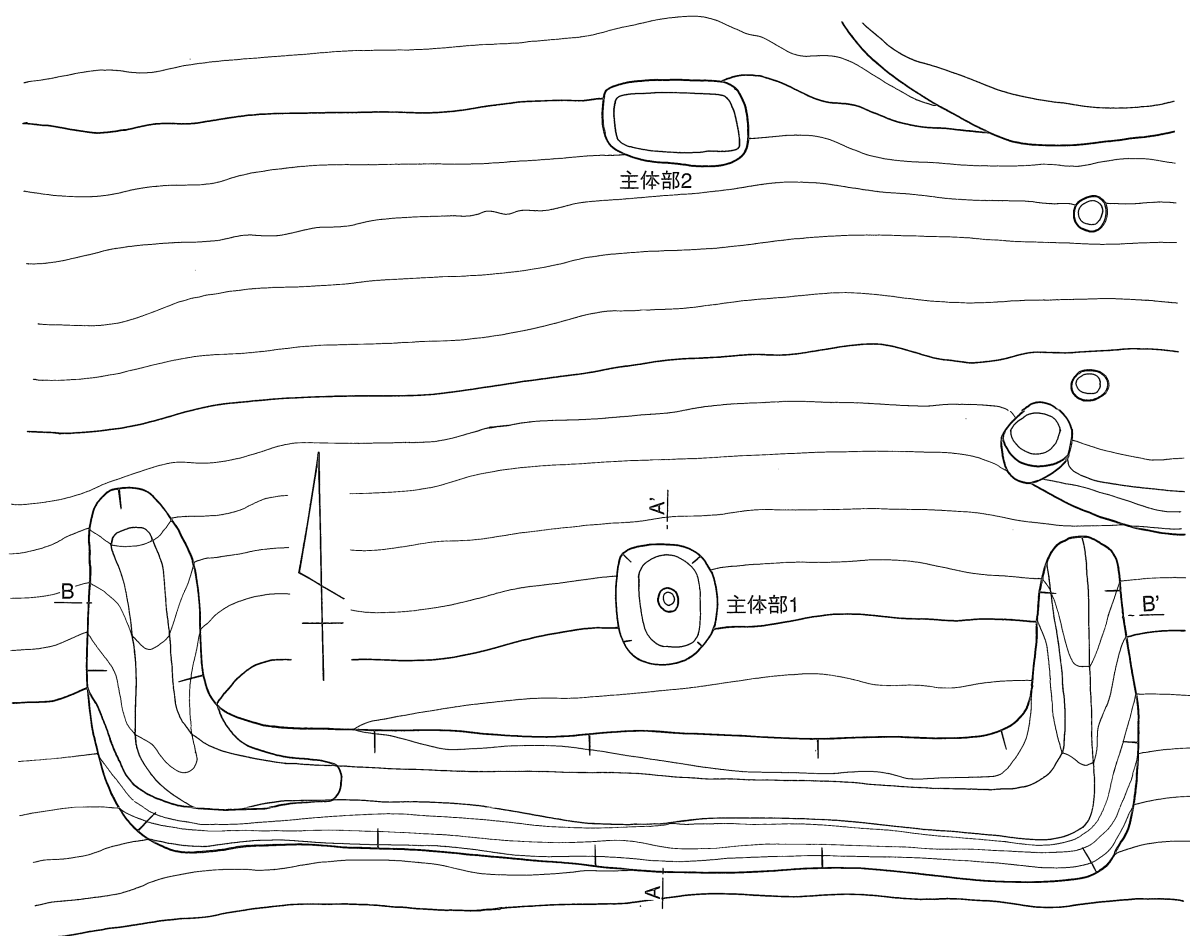


9号方形周溝墓



10号方形周溝墓

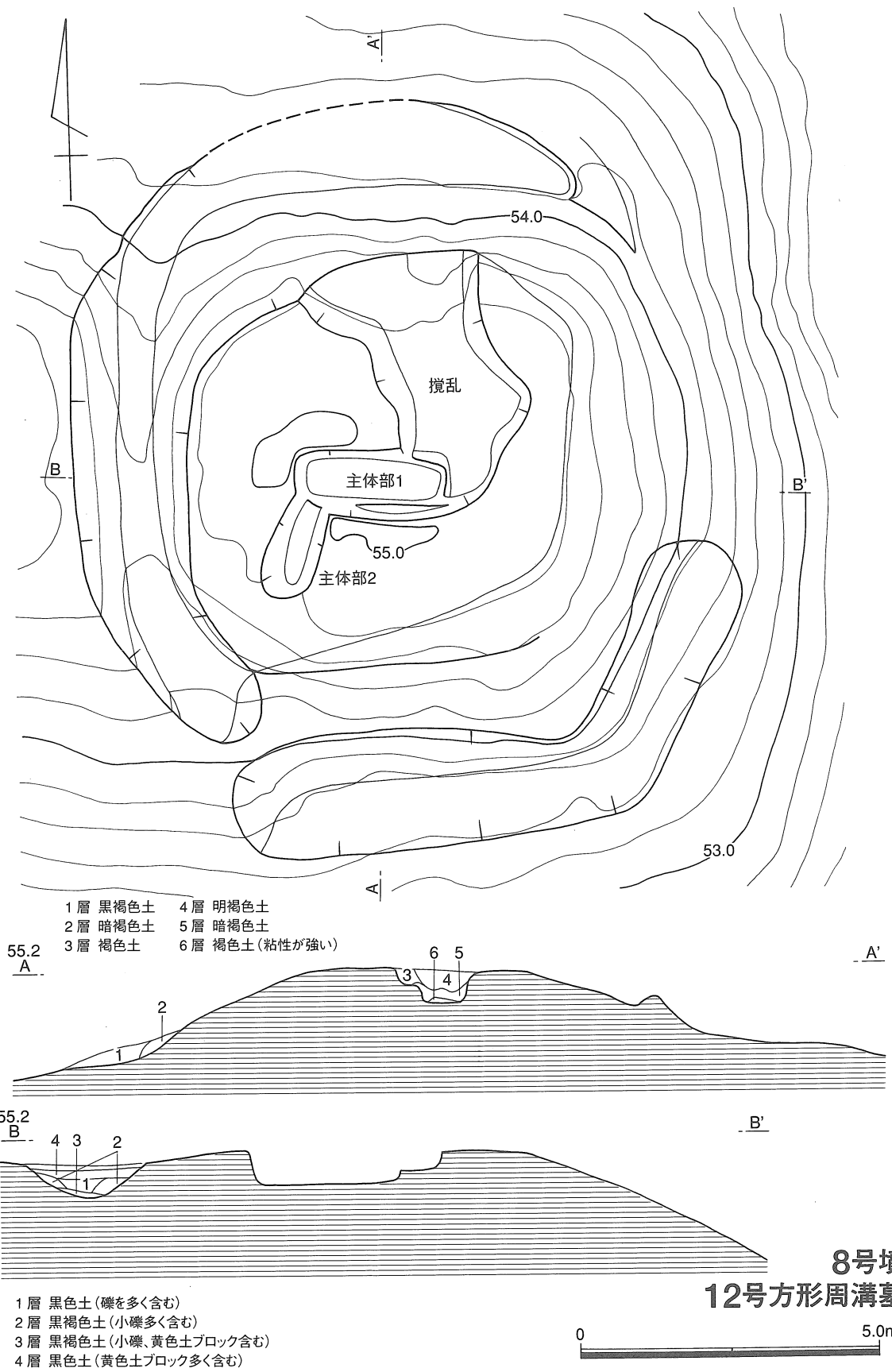




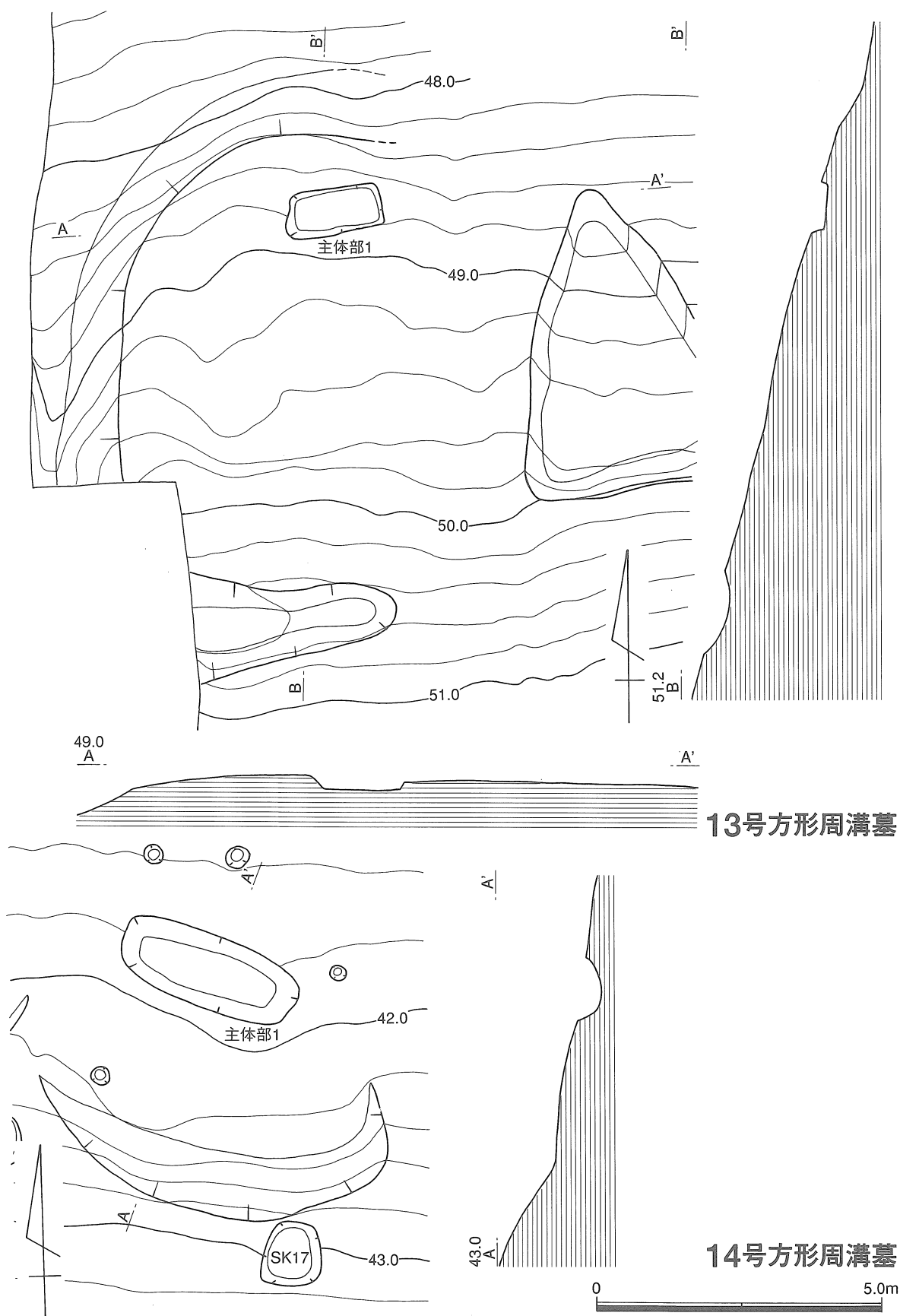
11号方形周溝墓



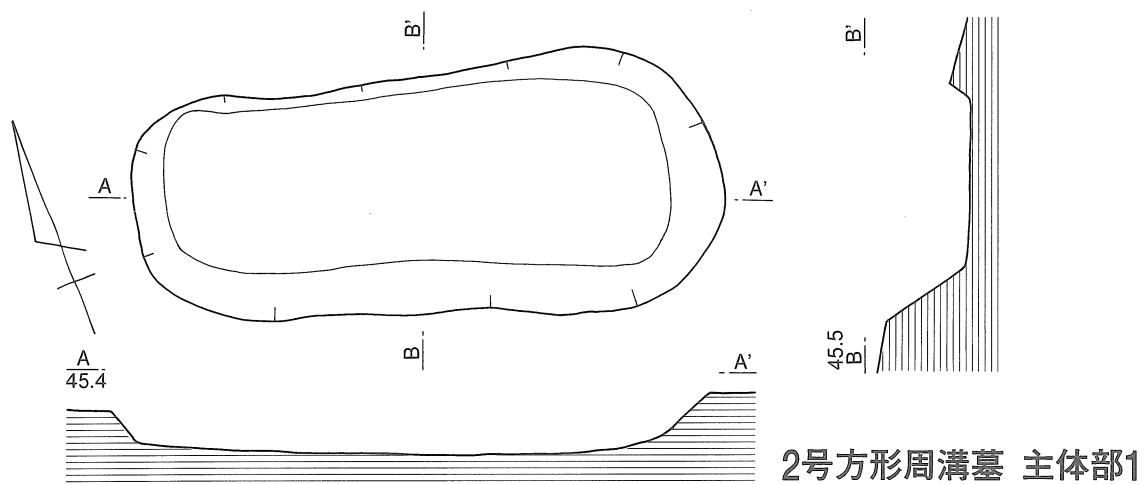
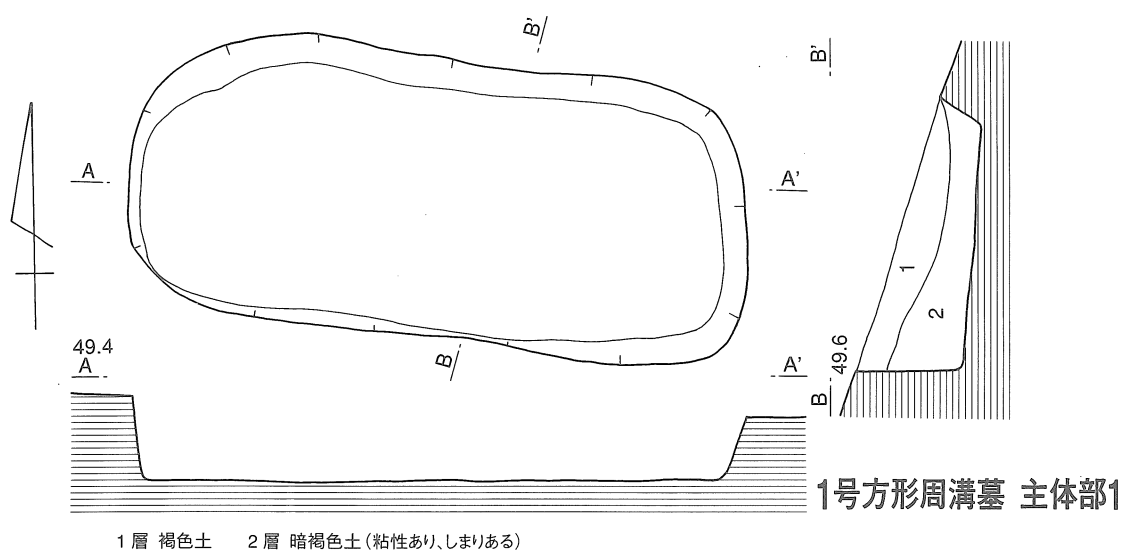
第70图 11号方形周溝墓実測図



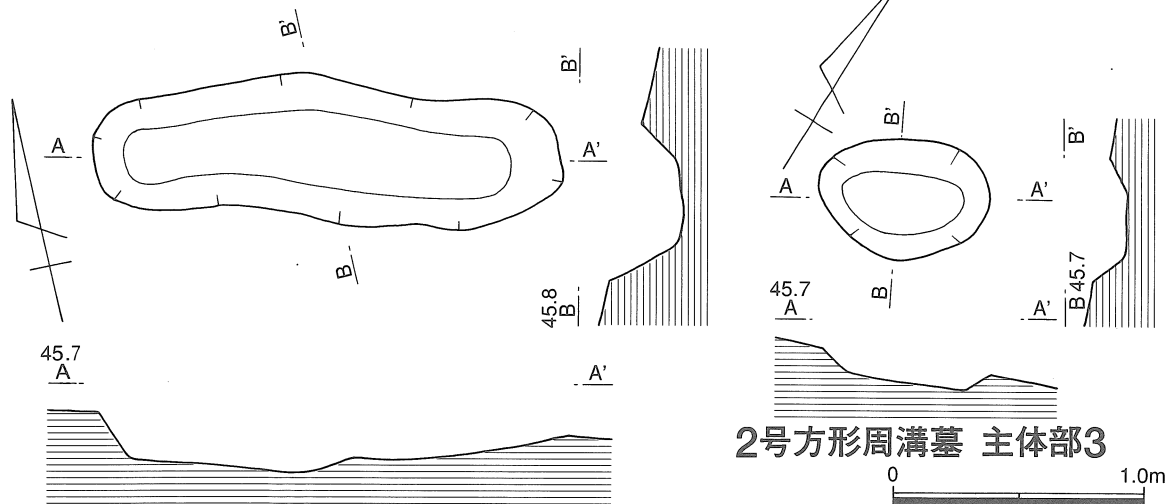
第71図 B 8号墳 12号方形周溝墓実測図



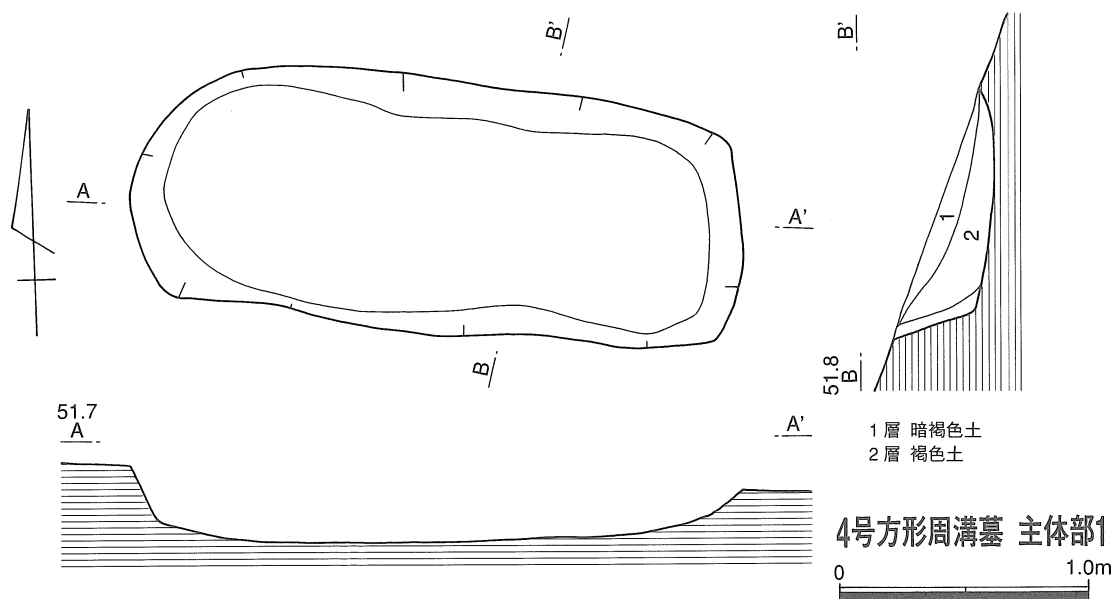
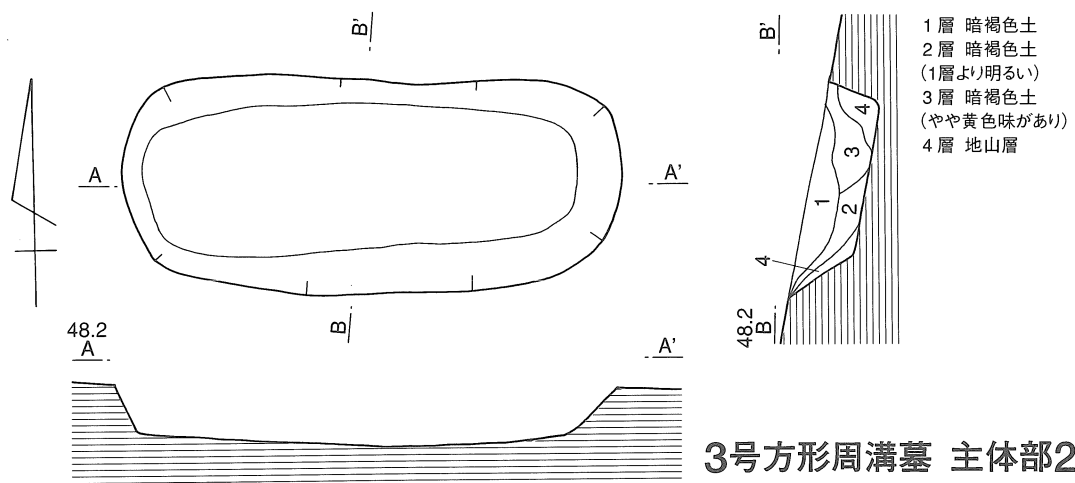
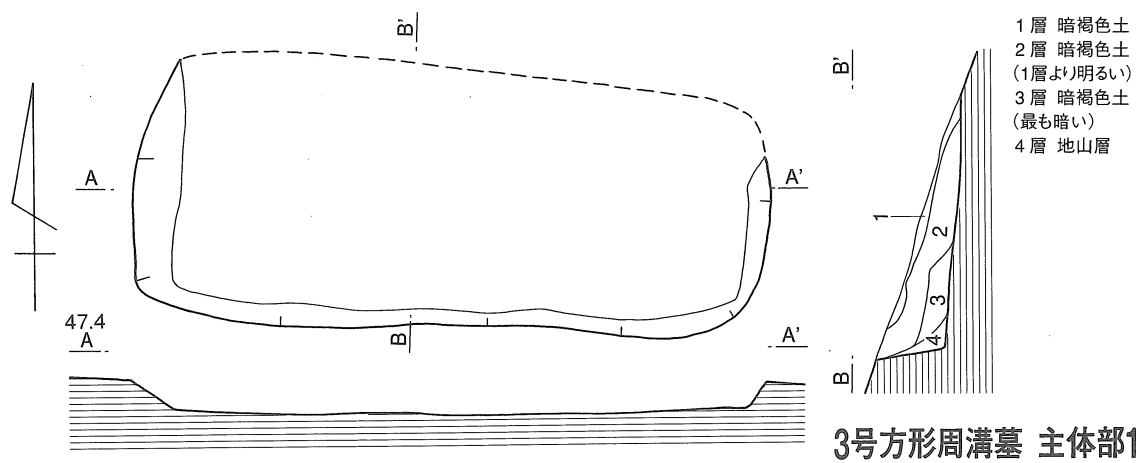
第72图 13・14号方形周溝墓実測図



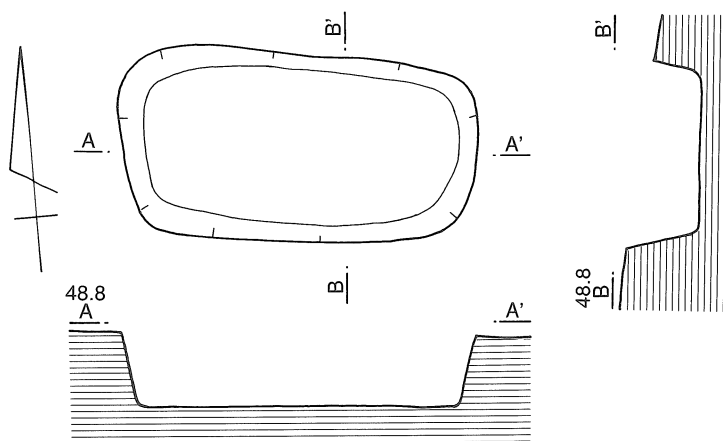
2号方形周溝墓 主体部2



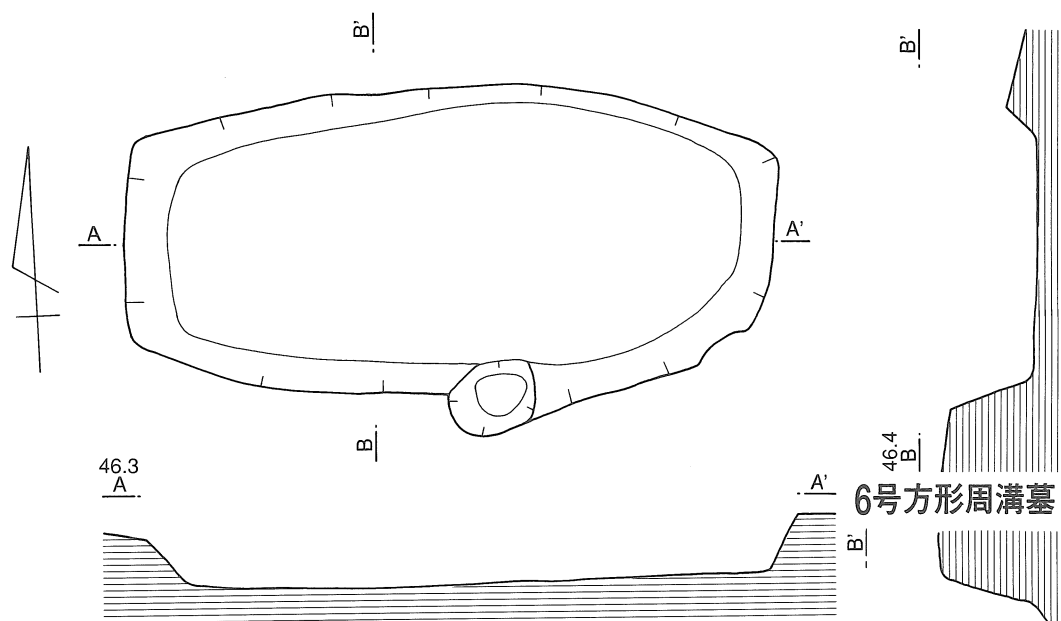
第73図 1・2号方形周溝墓主体部実測図



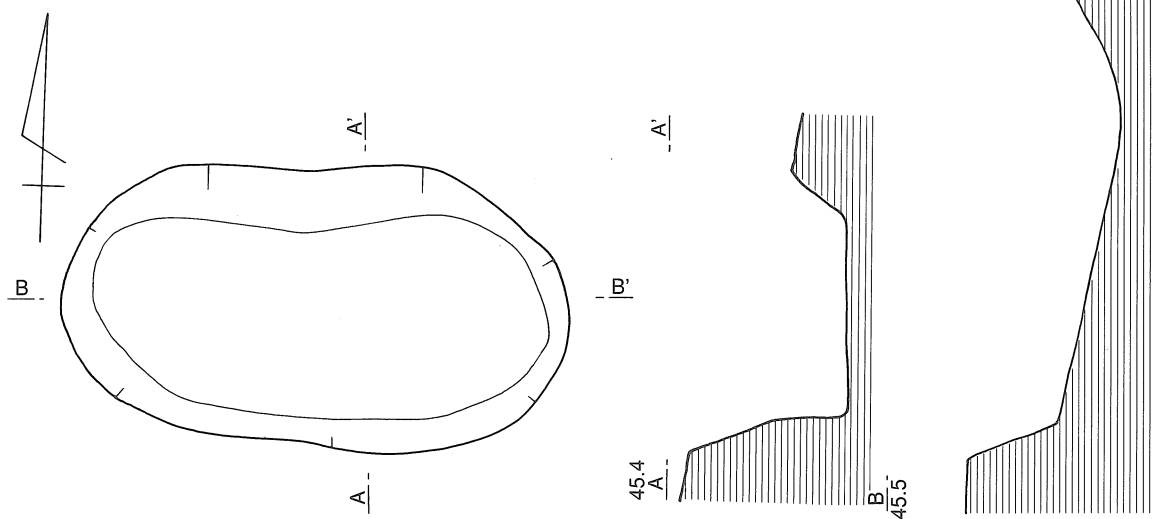
第74図 3・4号方形周溝墓主体部実測図



5号方形周溝墓 主体部1

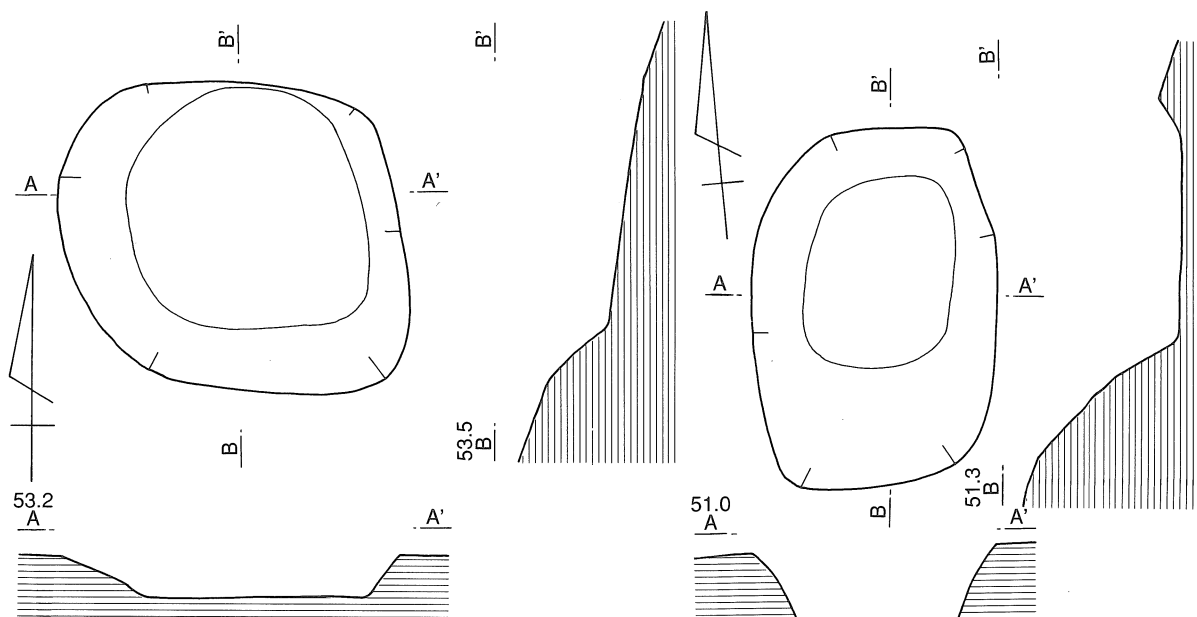


6号方形周溝墓 主体部1



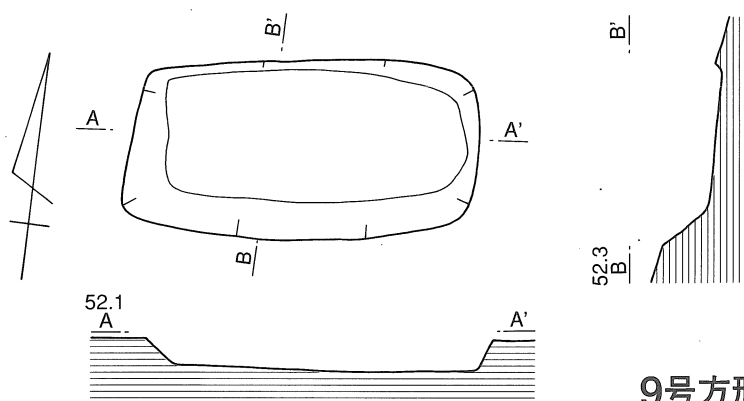
11号方形周溝墓 主体部2

0 1.0m

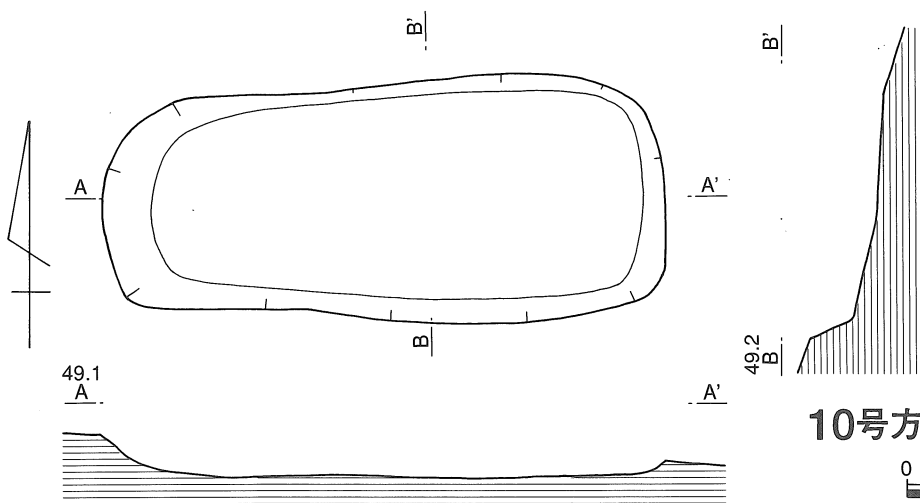


7号方形周溝墓 主体部1

8号方形周溝墓 主体部1



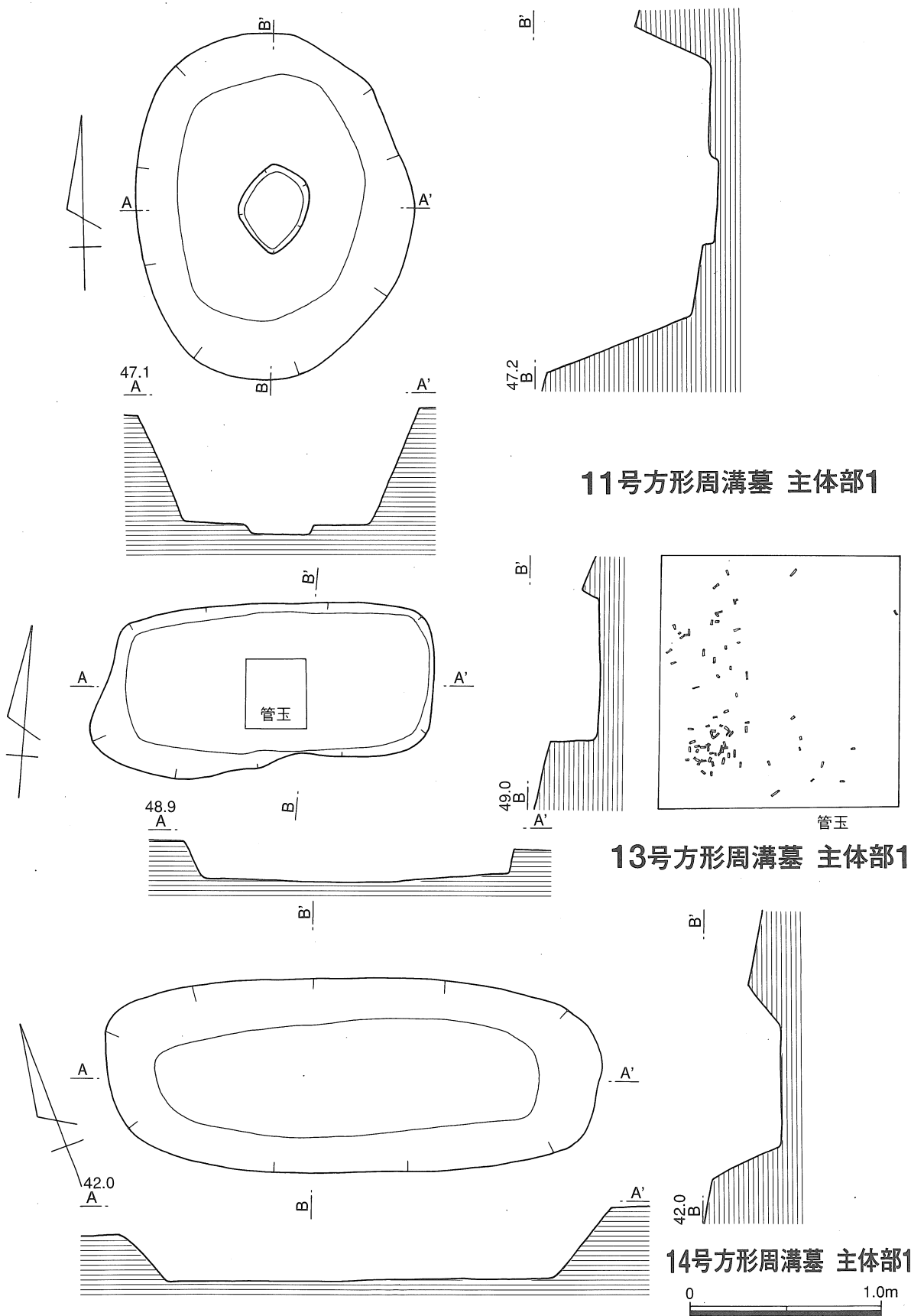
9号方形周溝墓 主体部1



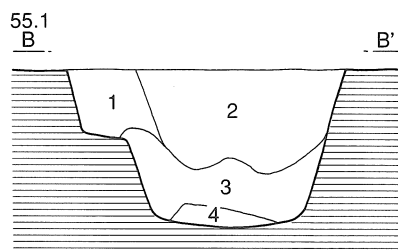
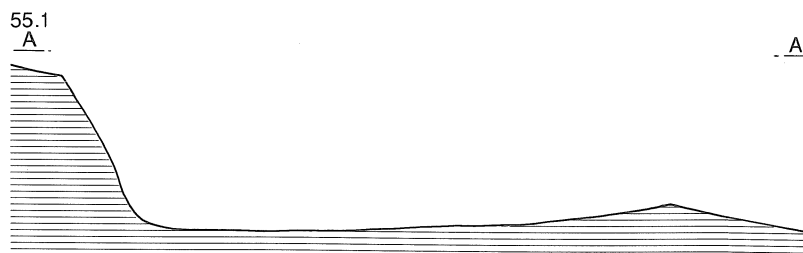
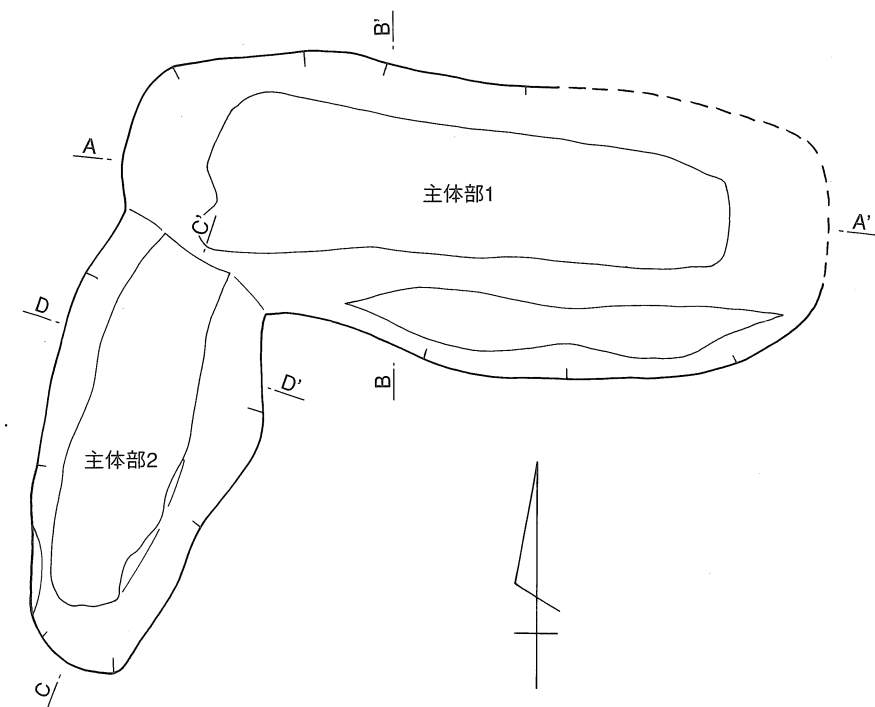
10号方形周溝墓 主体部1



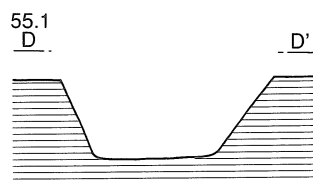
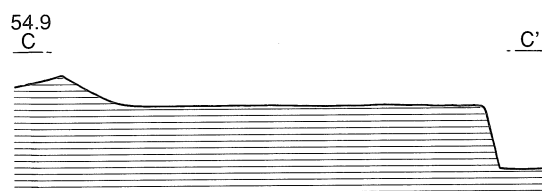
第76图 7~10号方形周溝墓主体部実測図



第77图 11・13・14号方形周溝墓主体部実測図



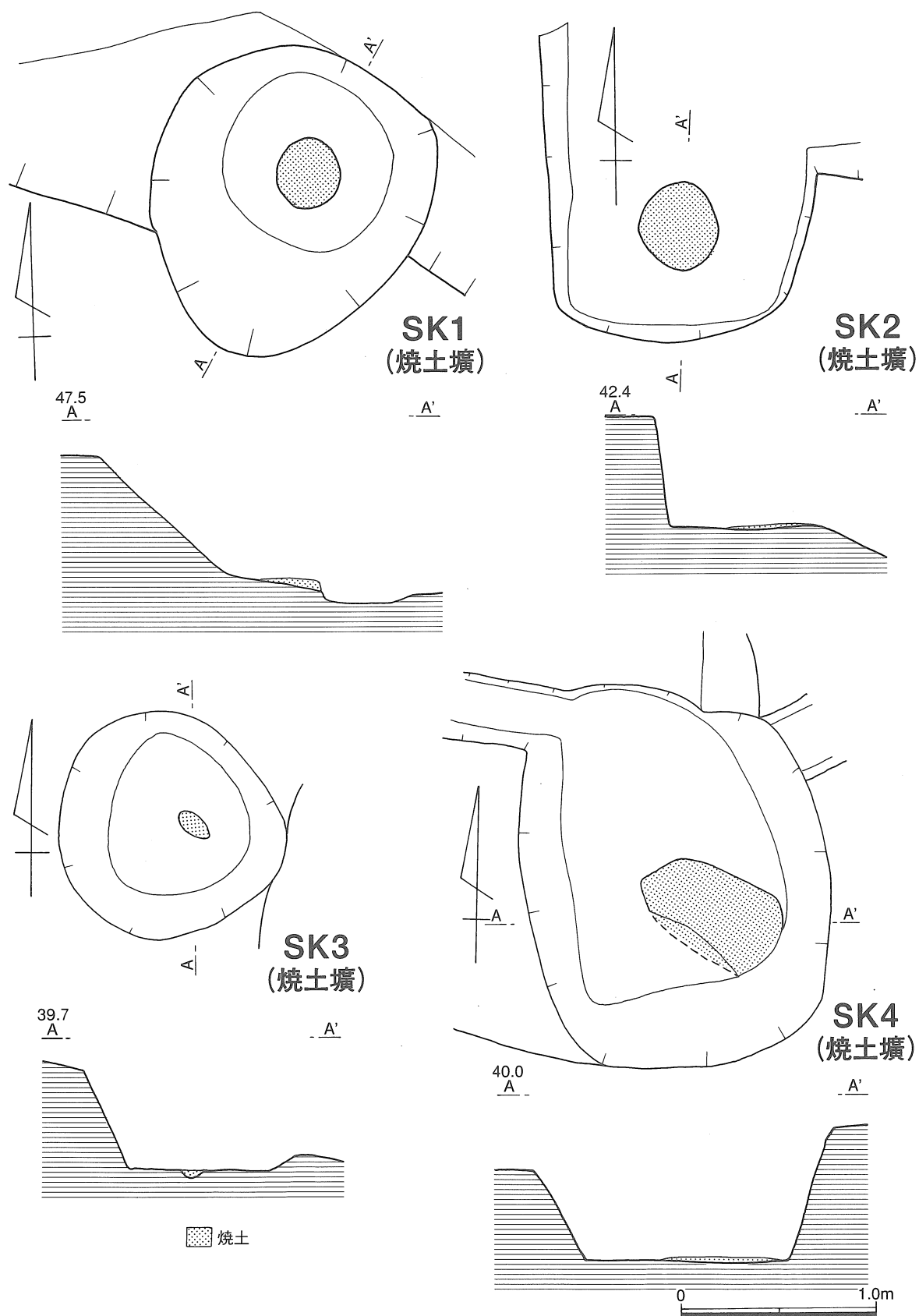
- 1層 褐色土
- 2層 明褐色土
- 3層 暗褐色土
- 4層 褐色土(しまりよく、粘性が一番強い)



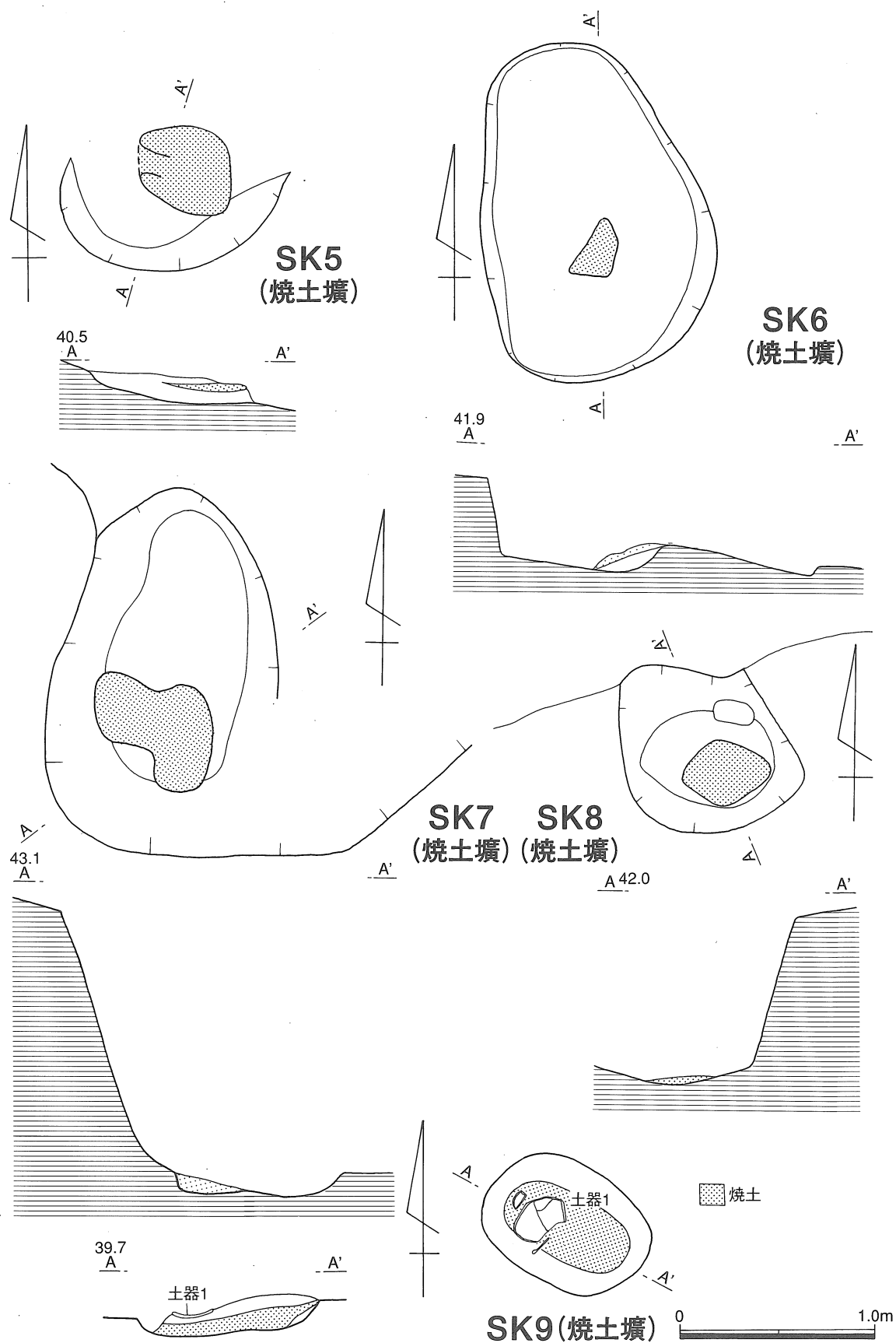
12号方形周溝墓 主体部1・2



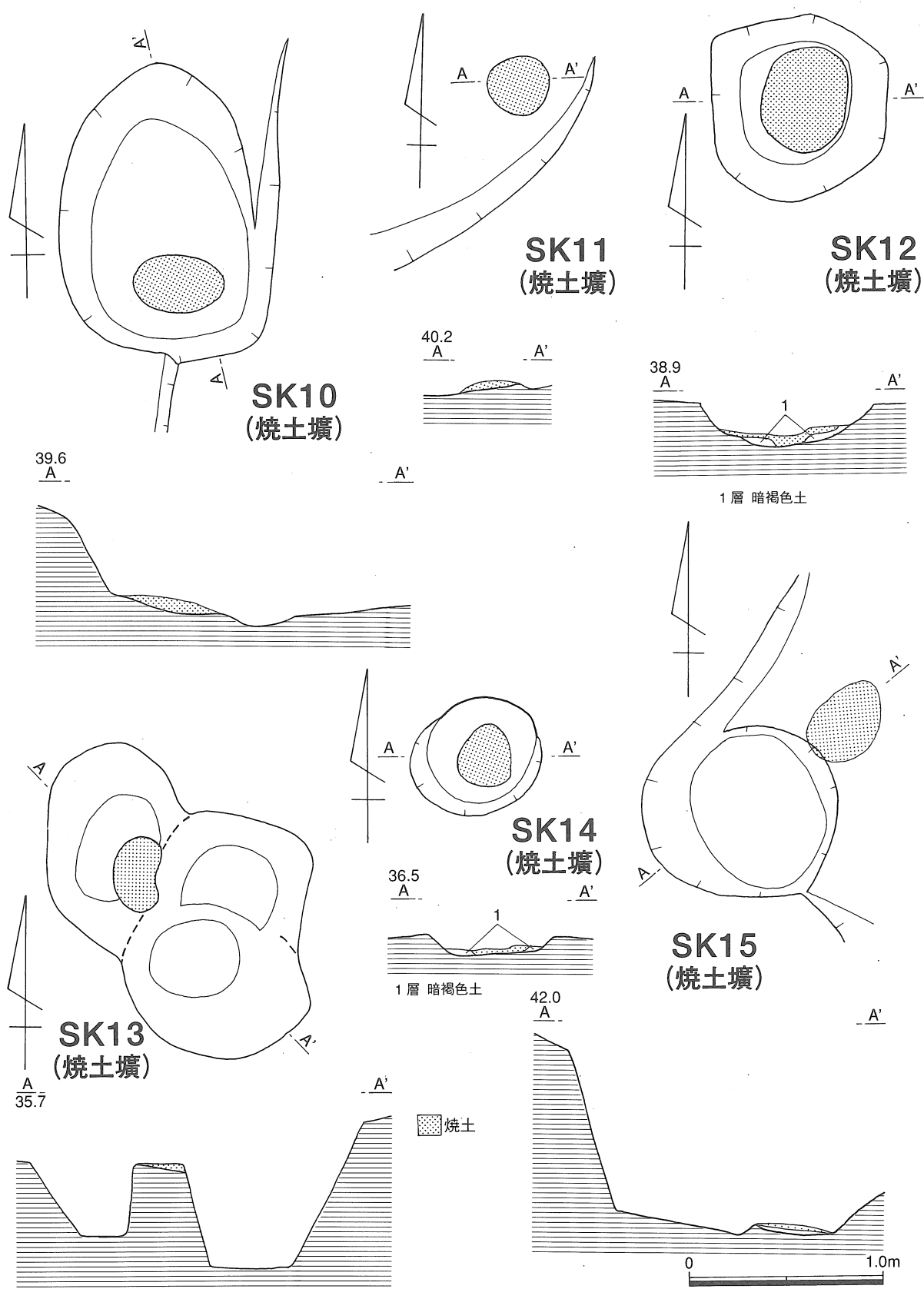
第78図 12号方形周溝墓主体部実測図



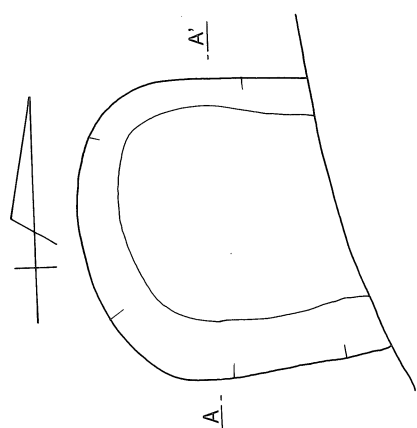
第79図 SK1～4実測図



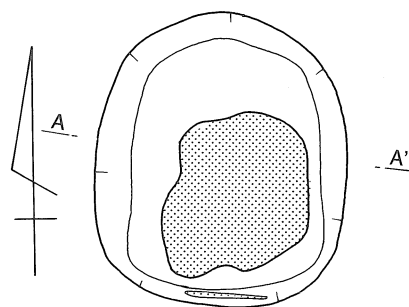
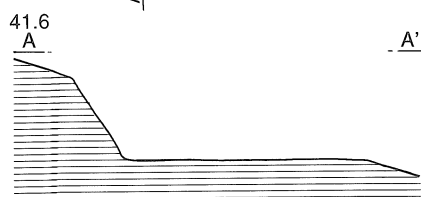
第80図 SK 5 ~ 9 実測図



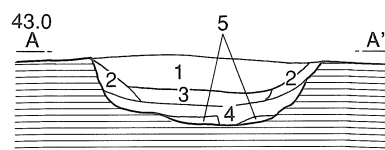
第81図 SK10~15実測図



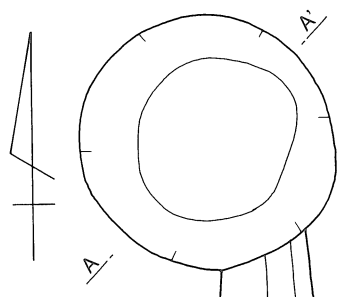
SK16



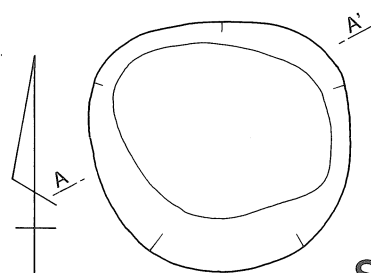
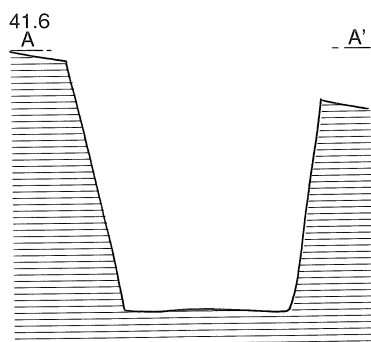
SK17
(焼土墳)



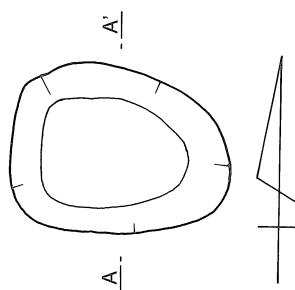
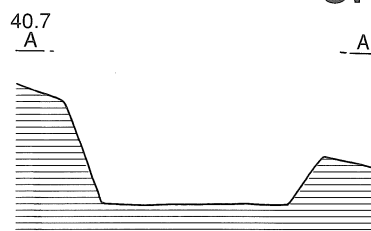
- 1層 暗褐色土
- 2層 褐色土
- 3層 黒褐色土
(炭化物・焼土混入)
- 4層 暗褐色土
(炭化物・焼土混入)
- 5層 赤褐色土(焼土)



SK18

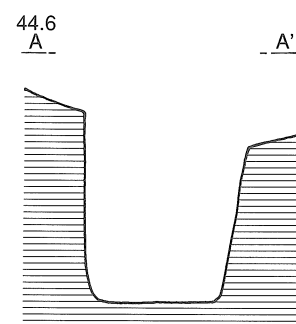


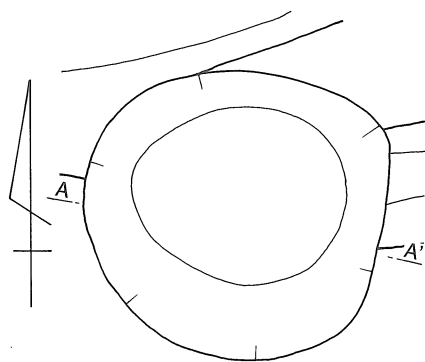
SK19



SK26

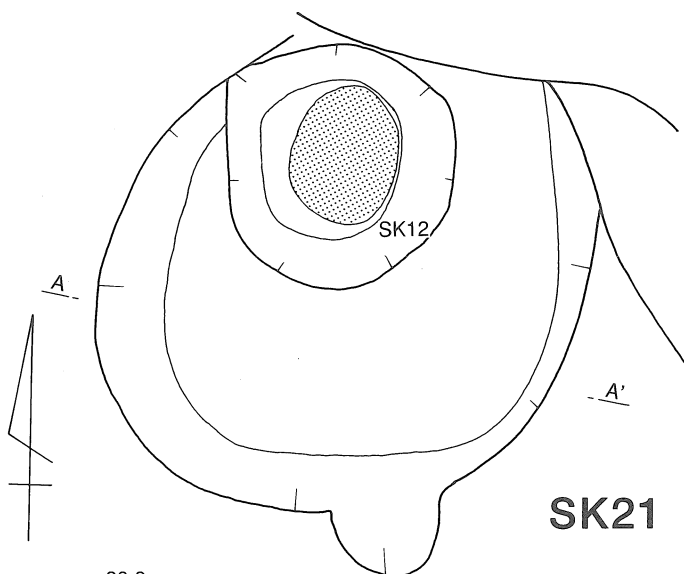
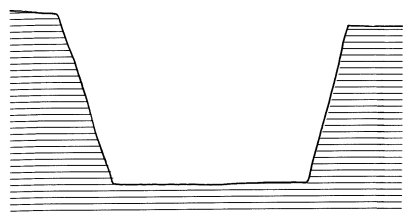
■ 焼土





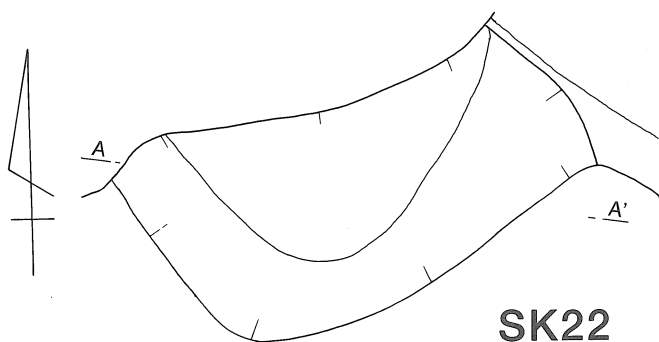
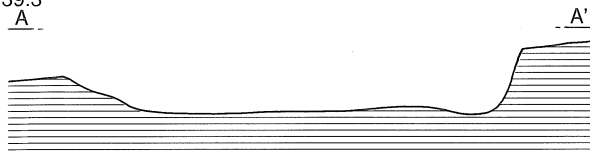
SK20

38.3
A



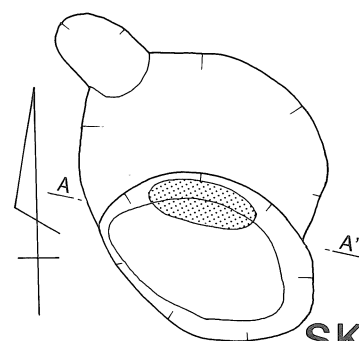
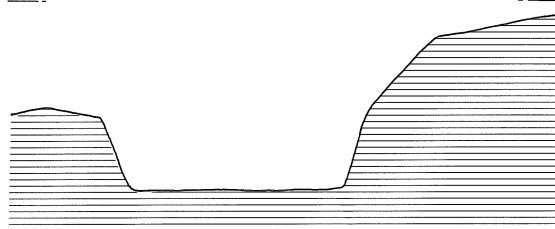
SK21

39.3
A



SK22

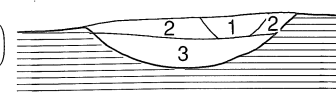
38.1
A



SK23
(烧土境)

1層 黒褐色土
2層 暗褐色土
3層 暗褐色土
(烧土・炭化
物混入)

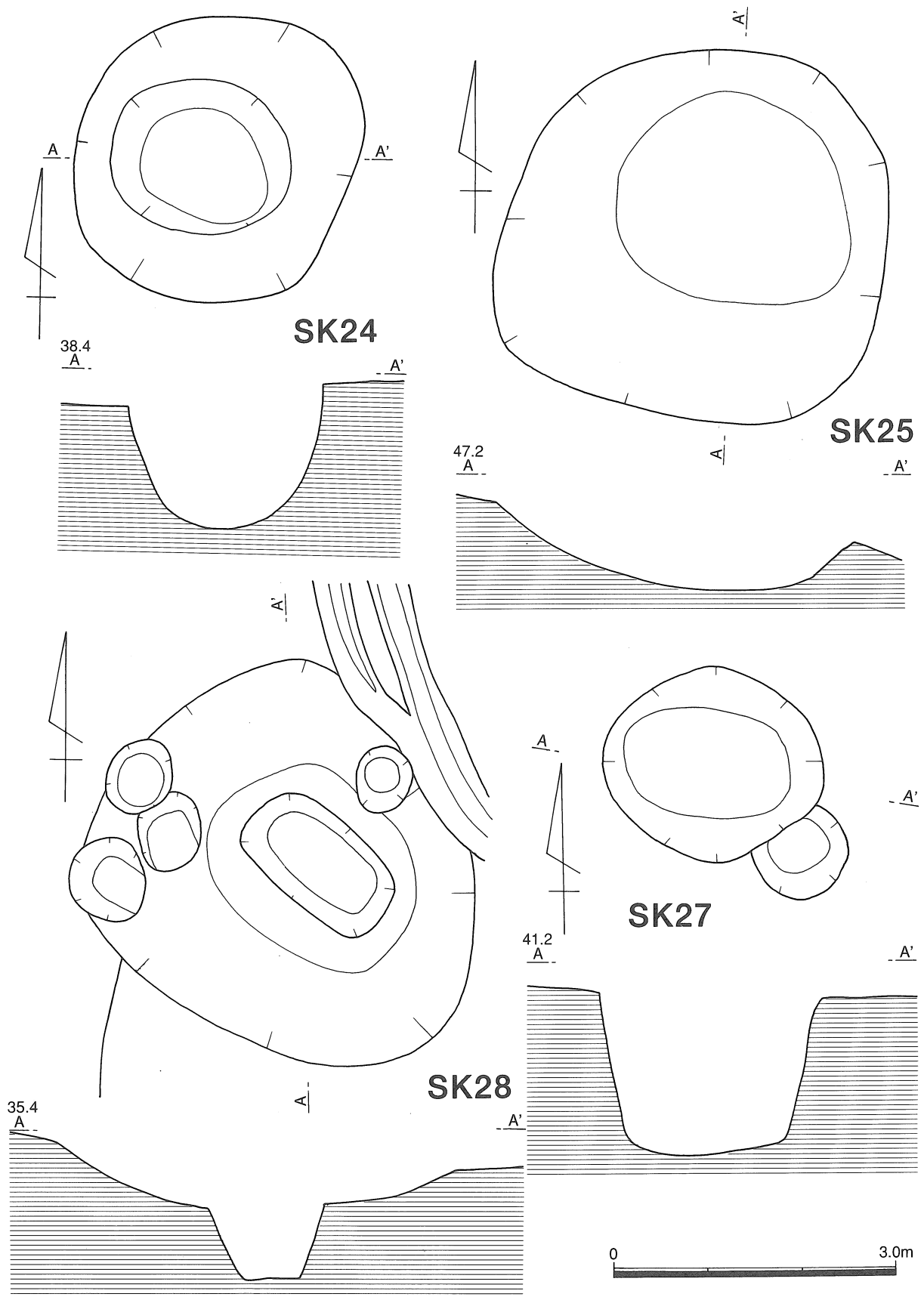
39.8
A



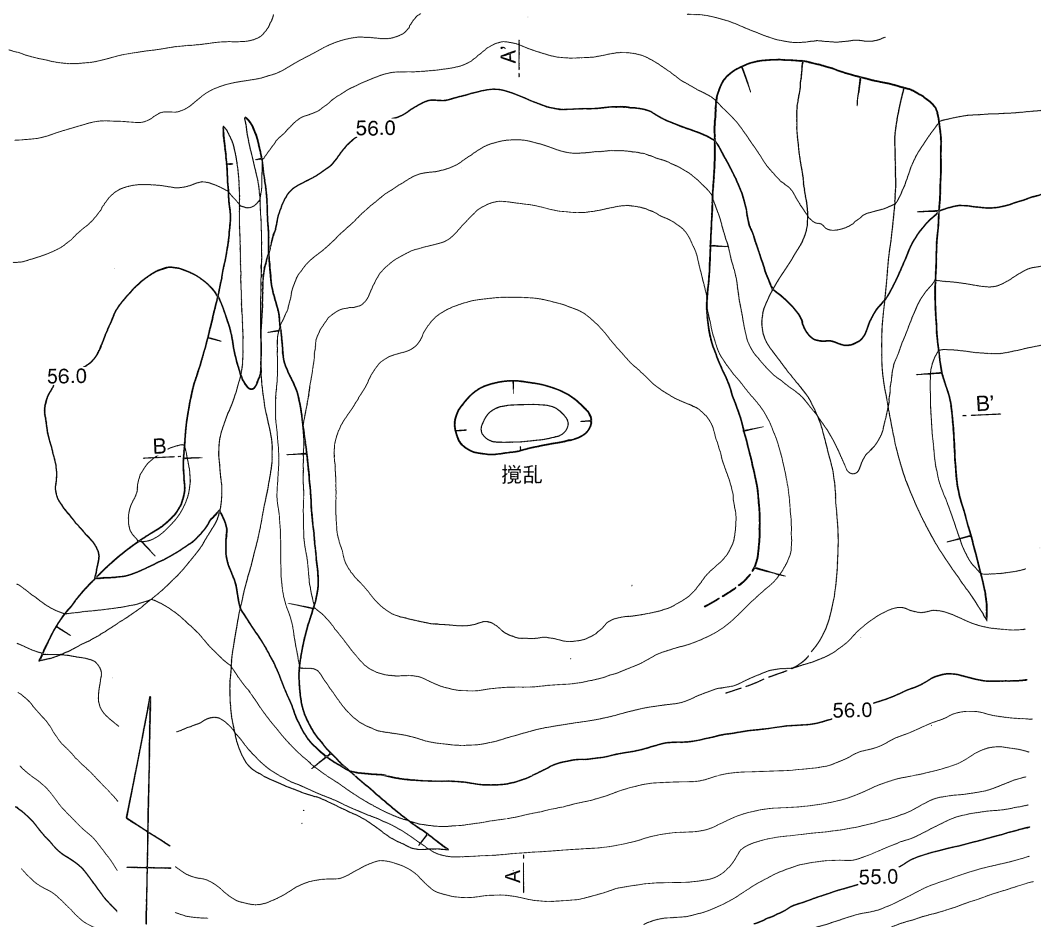
烧土

0 1.0m

第83図 SK20~23実測図

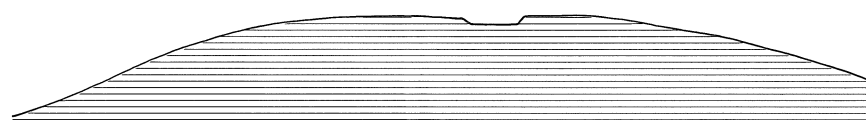


第84図 SK24・25・27・28実測図



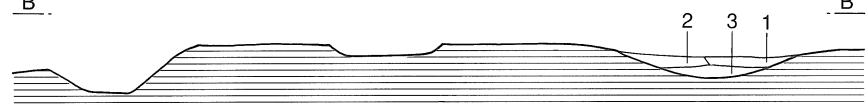
57.0
A

A'



57.0
B

B'

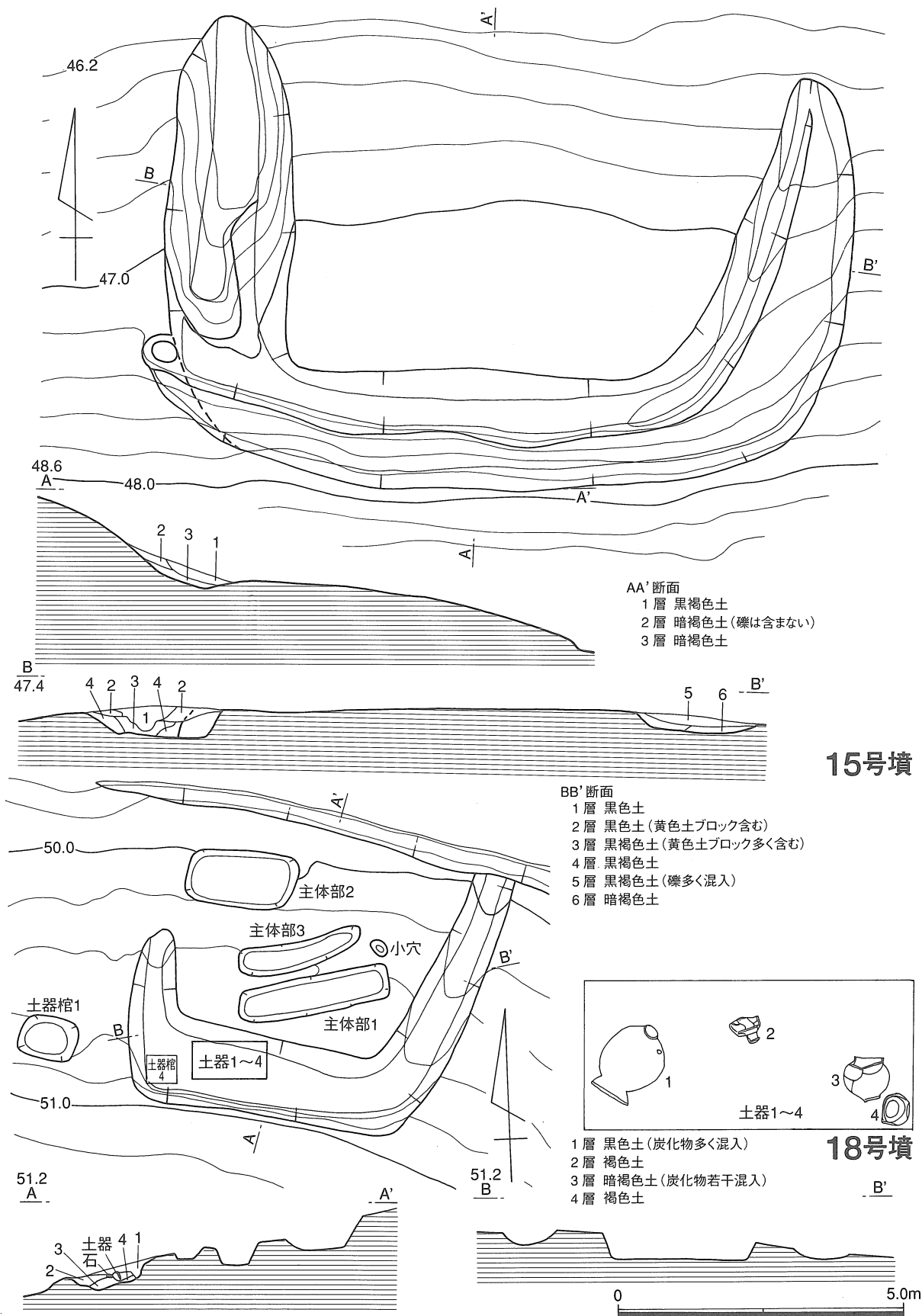


- 1層 暗褐色土 (砂礫多く含む)
- 2層 暗褐色土
- 3層 黒褐色土

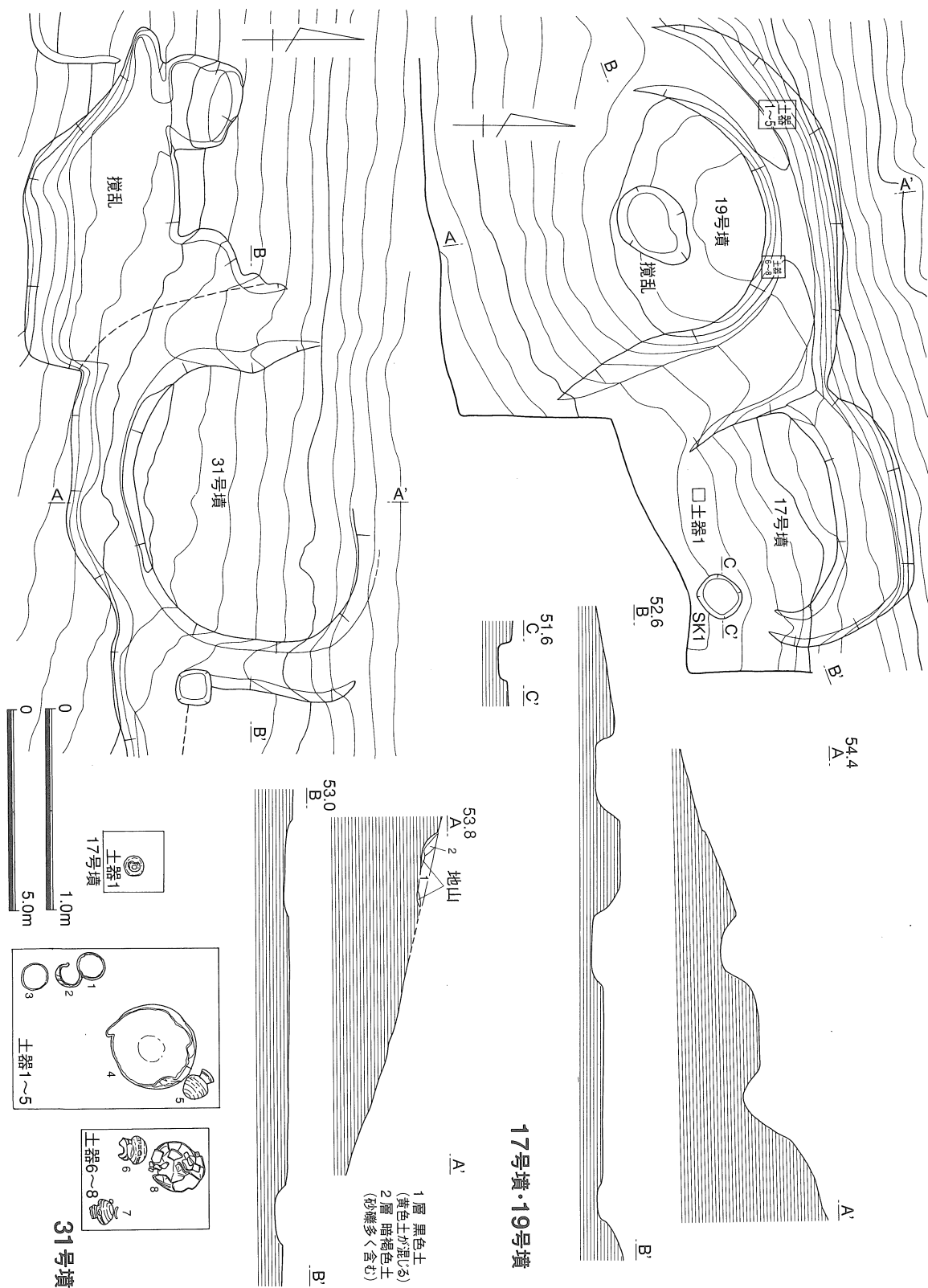
6号墳



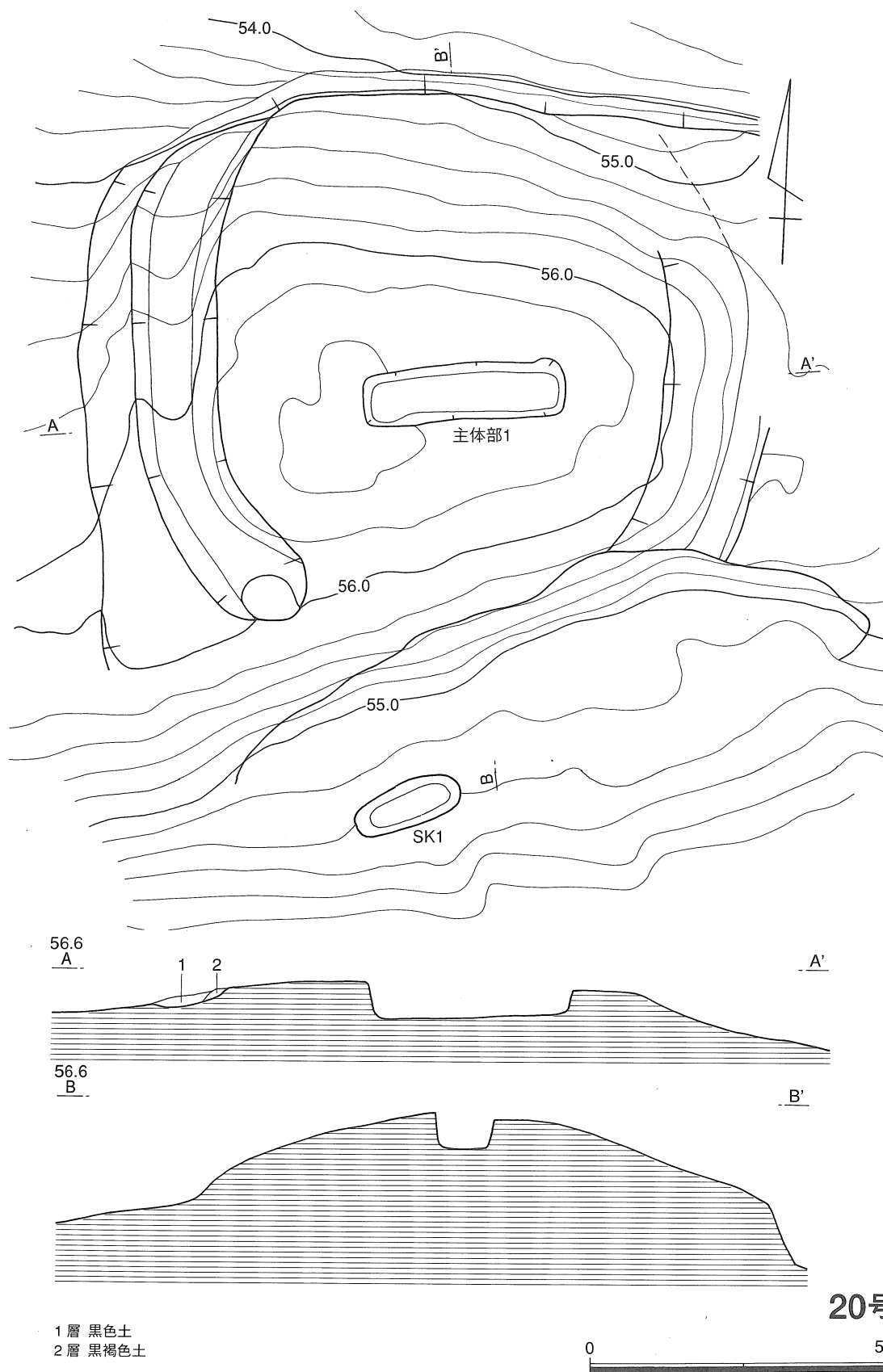
第85図 B 6号墳実測図



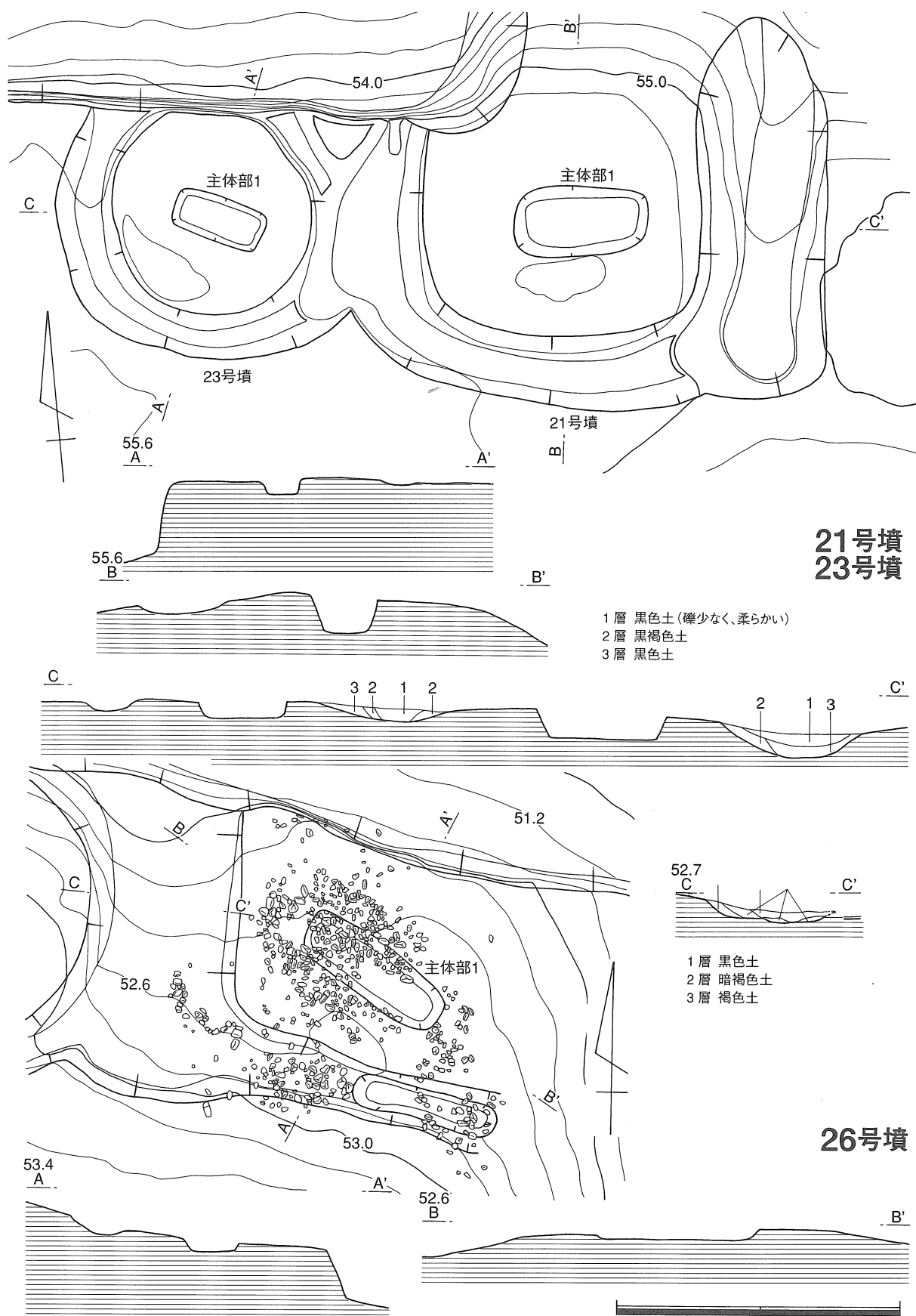
第86図 B 15・18号墳実測図

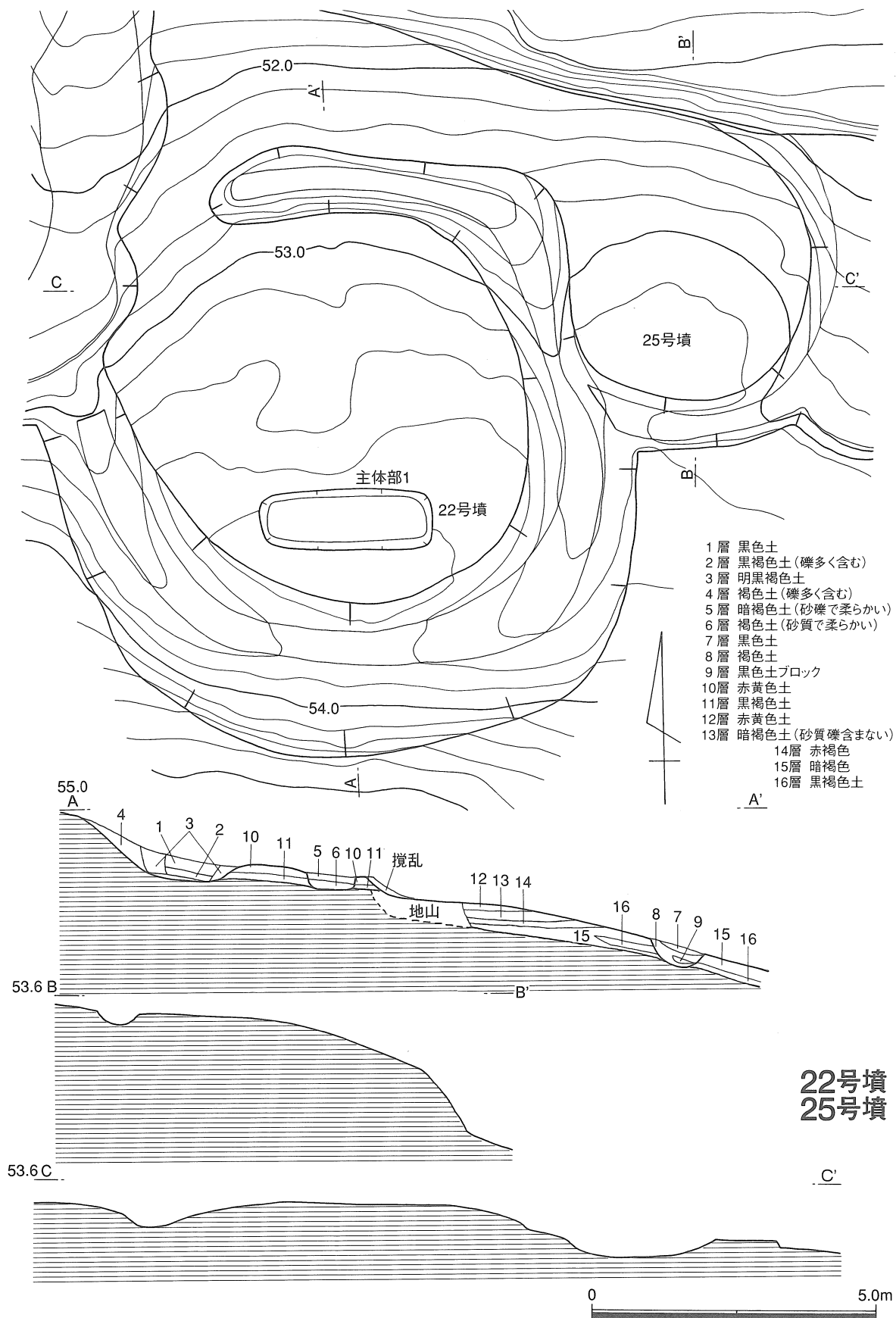


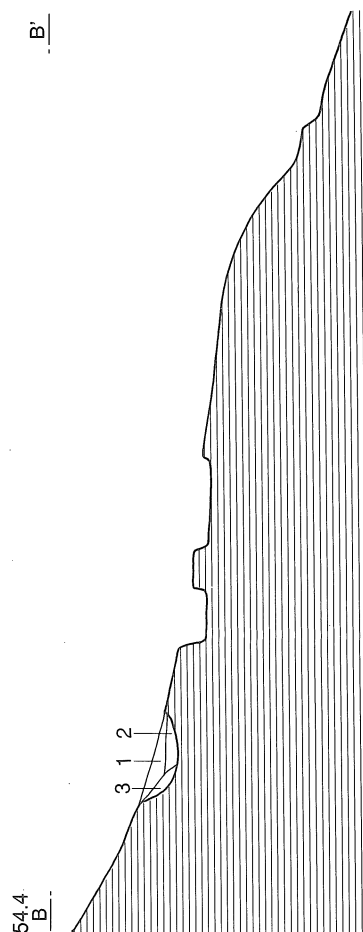
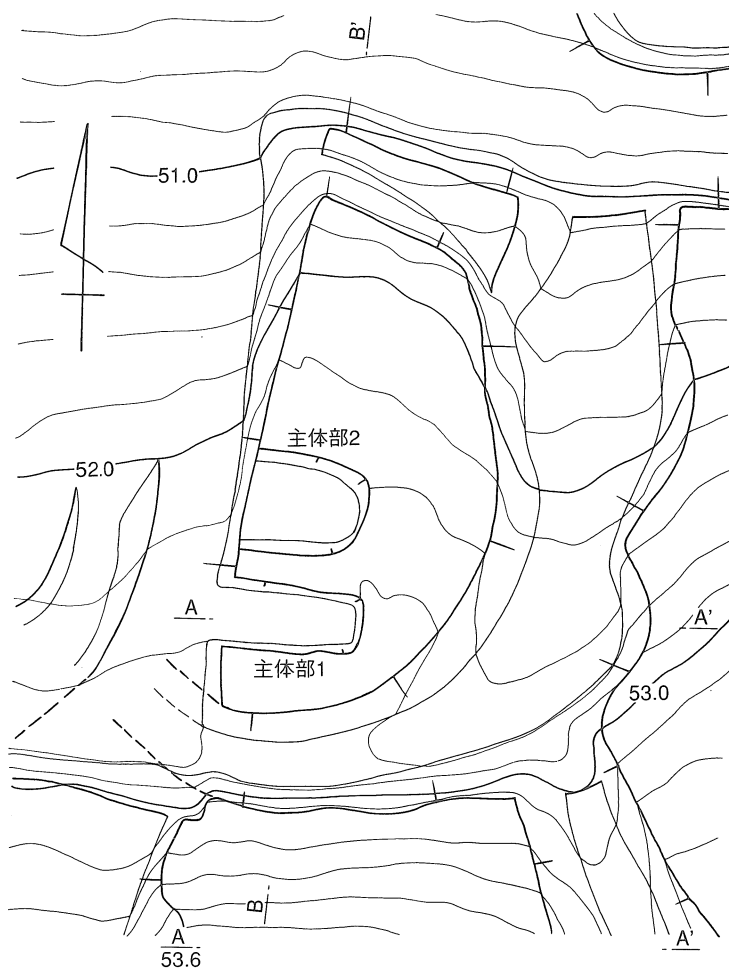
第87図 B17・19・31号墳実測図



第88図 B20号墳実測図

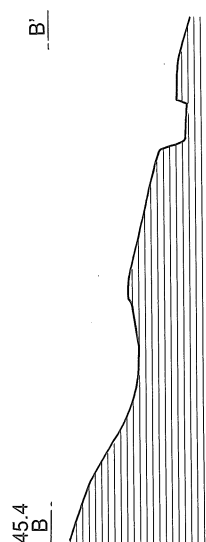
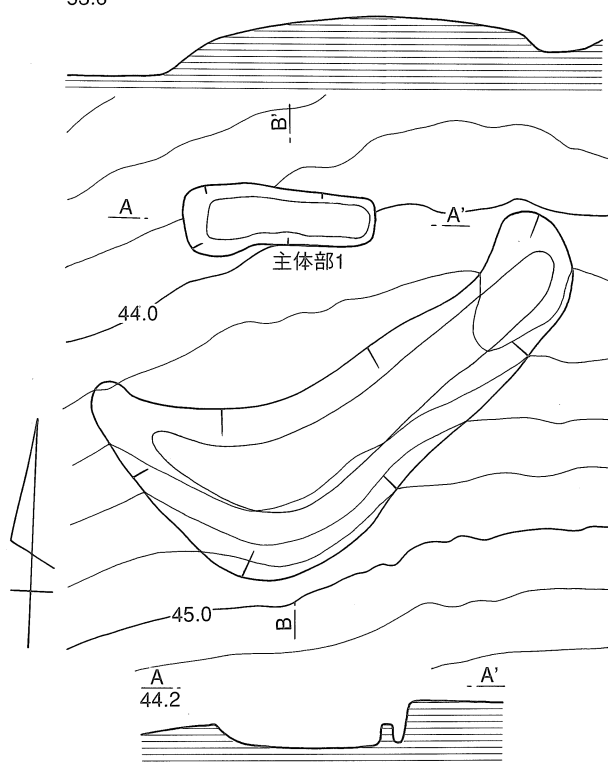






- 1層 黒色土
- 2層 黒褐色土
- 3層 暗褐色土

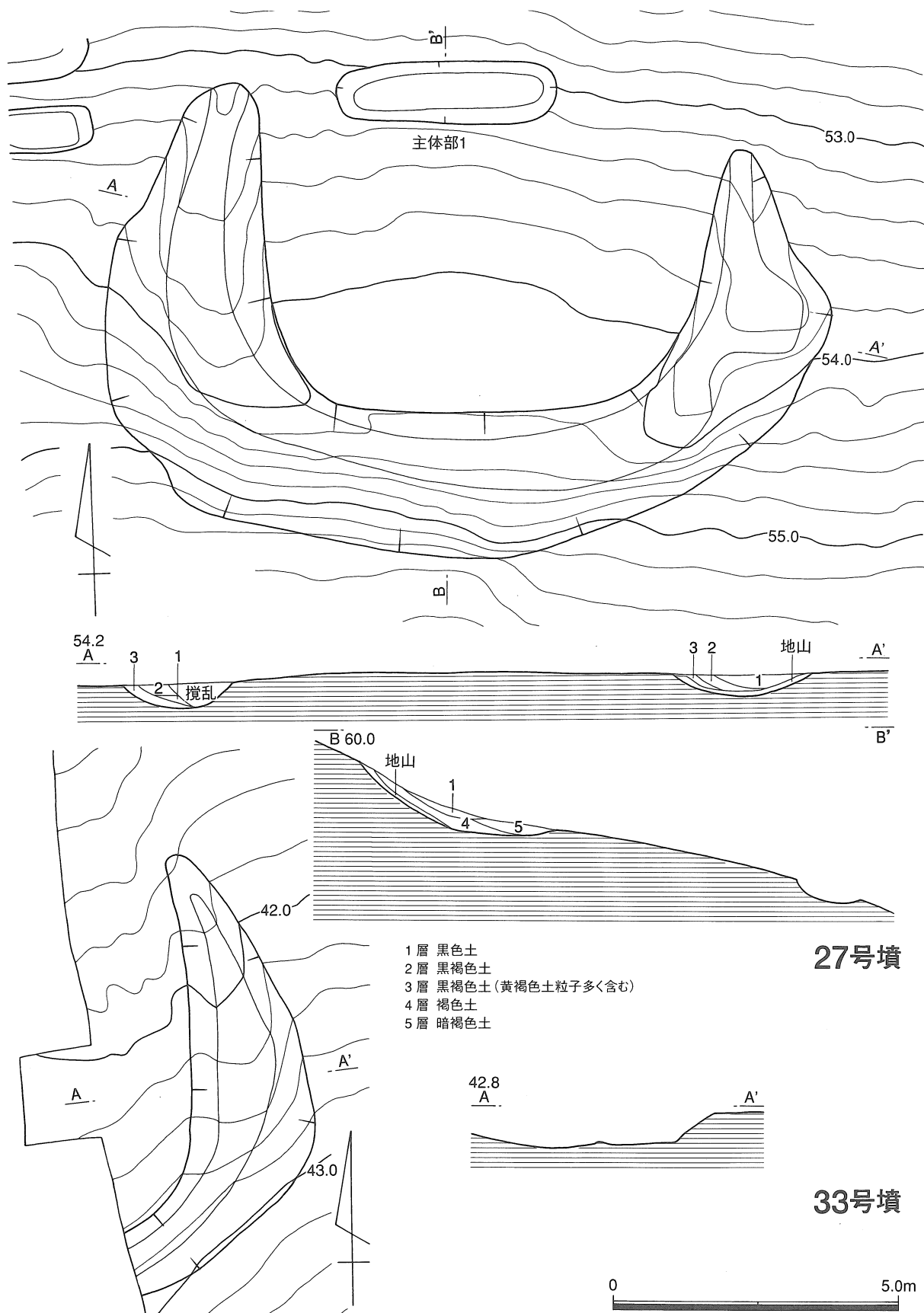
24号墳



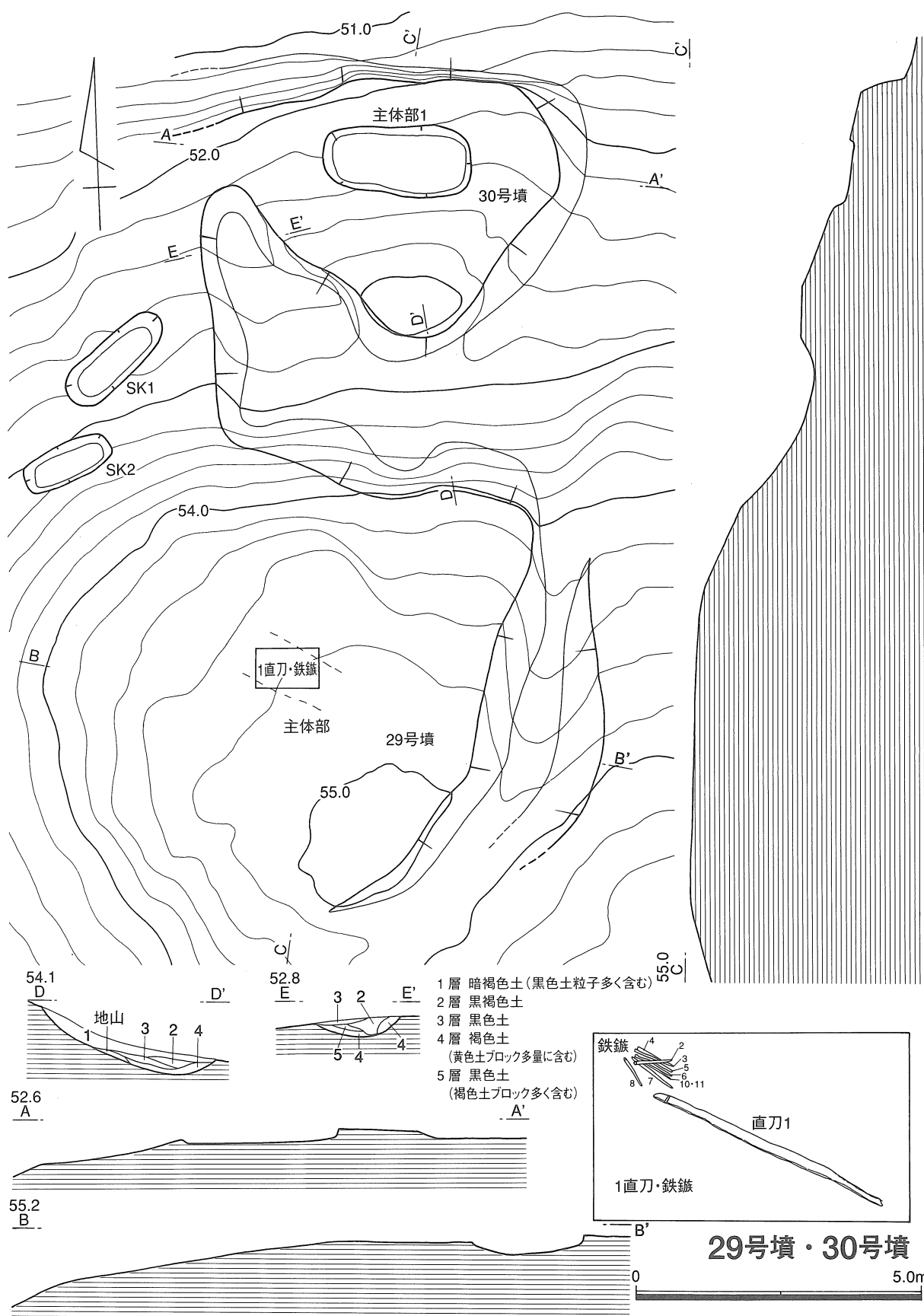
32号墳



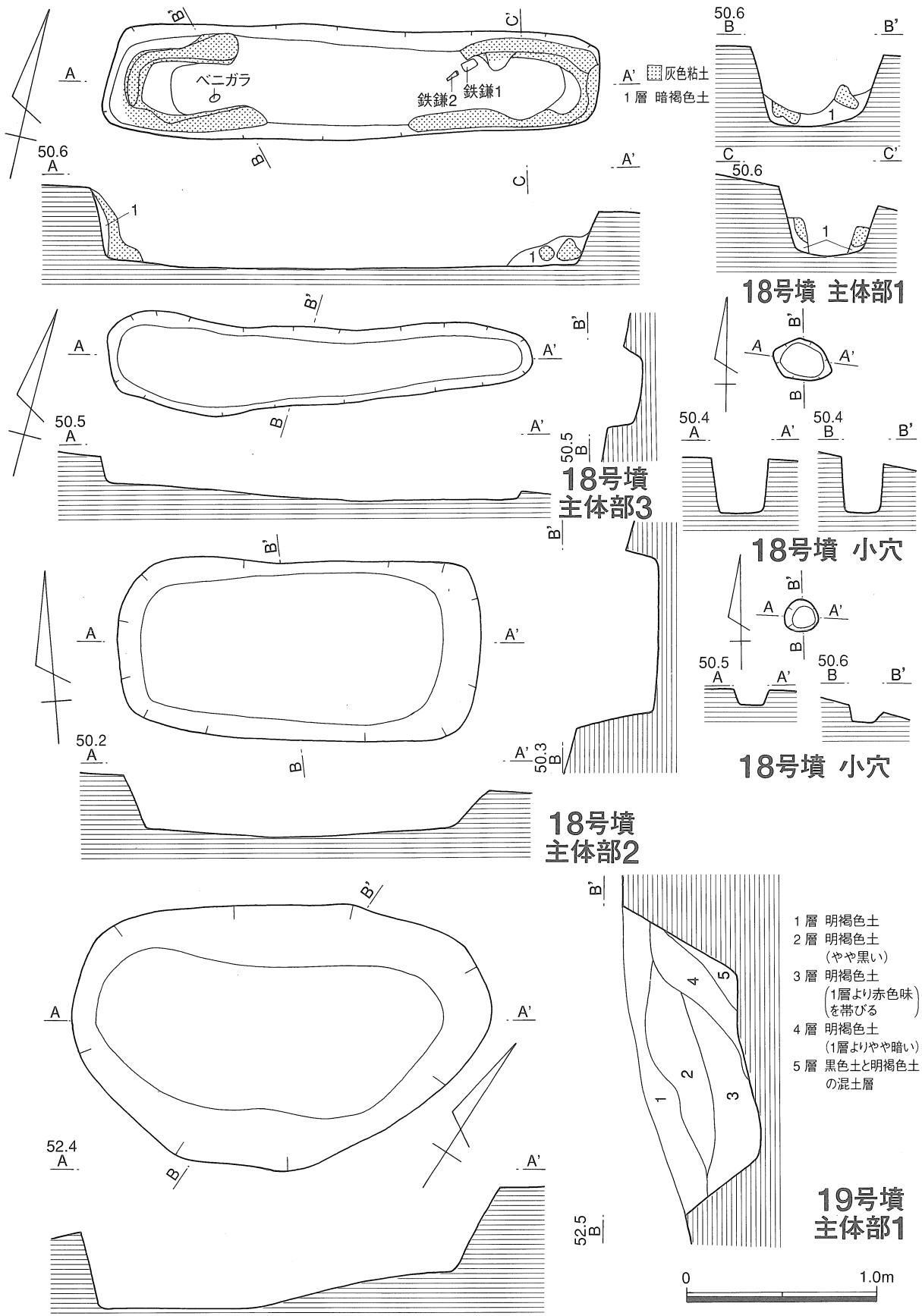
第91図 B 24・32号墳実測図



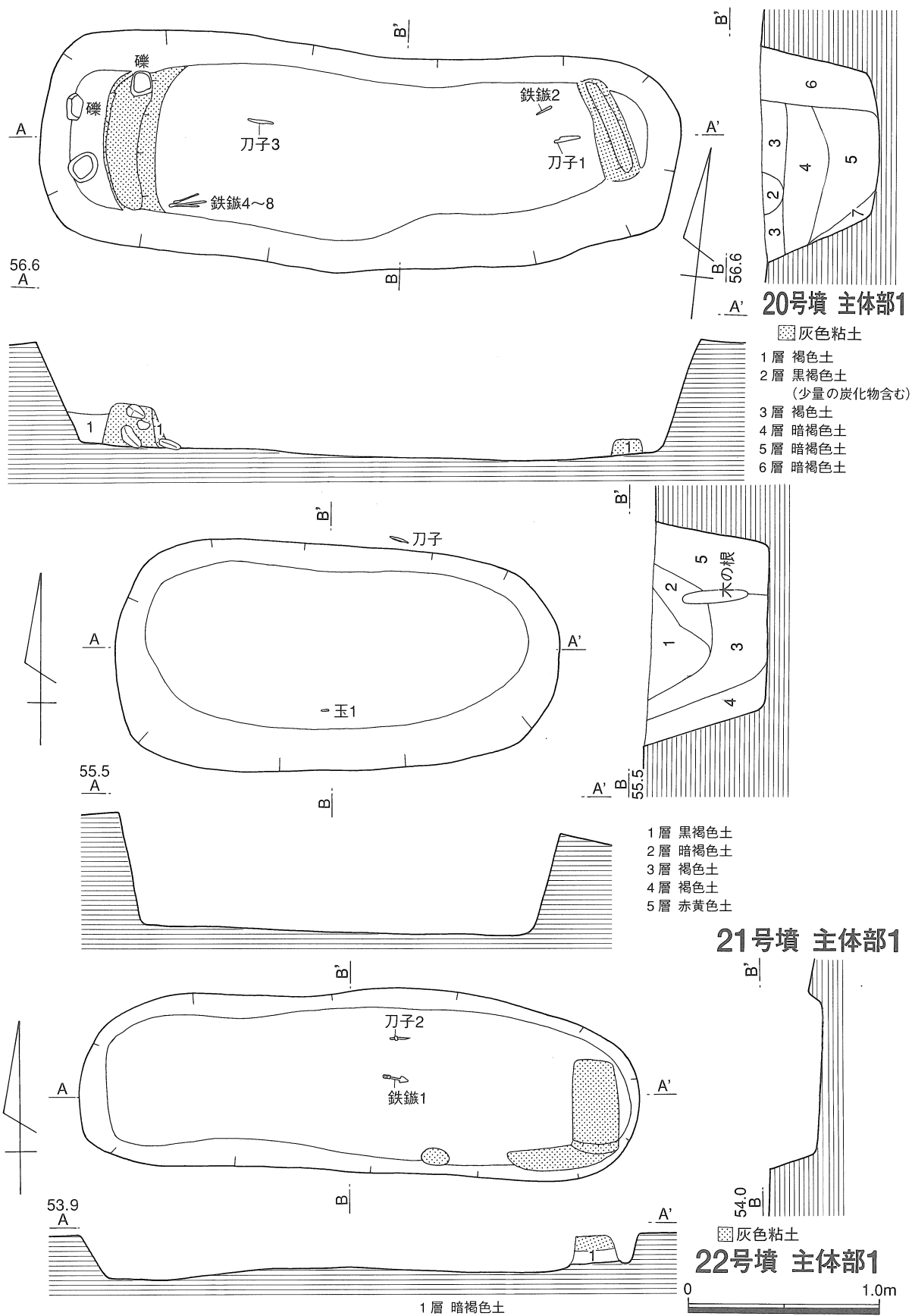
第92図 B 27・33号墳実測図



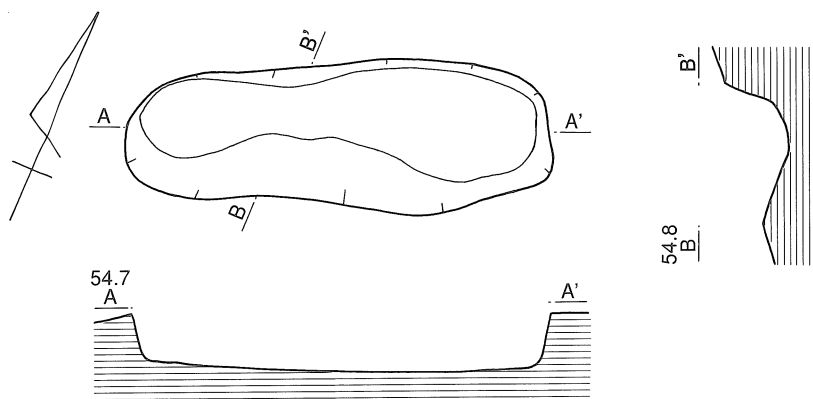
第93図 B 29・30号墳実測図



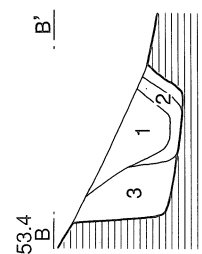
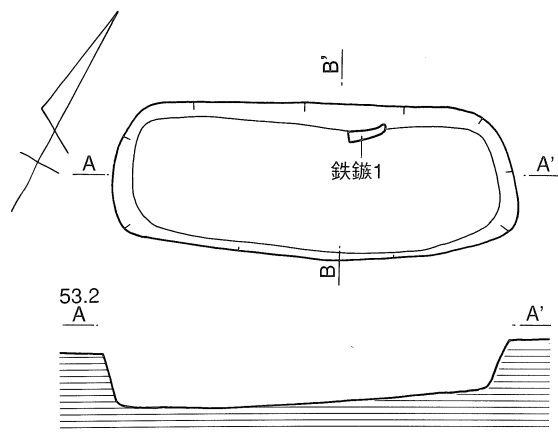
第94図 B 18・19号墳主体部実測図



第95図 B 20~22号墳主体部実測図

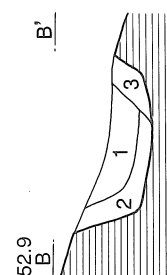
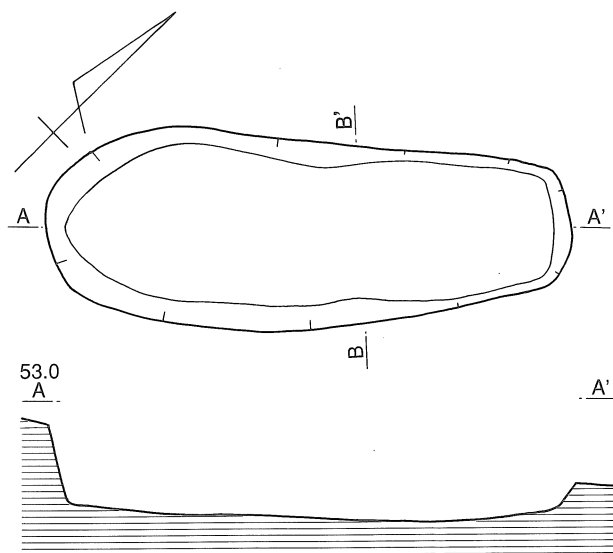


20号墳
SK1



1層 黒褐色土
2層 暗褐色土
3層 褐色土

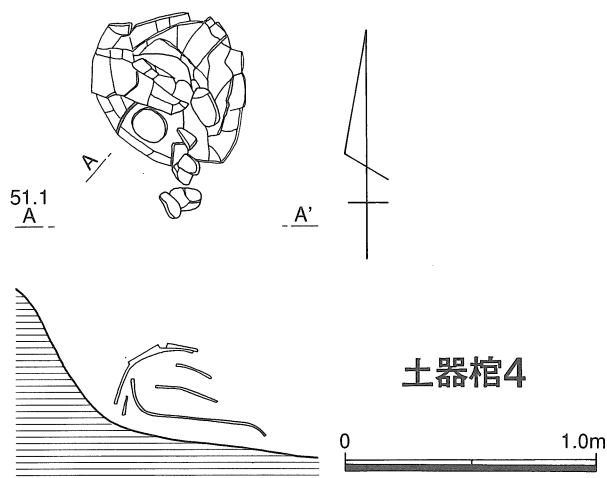
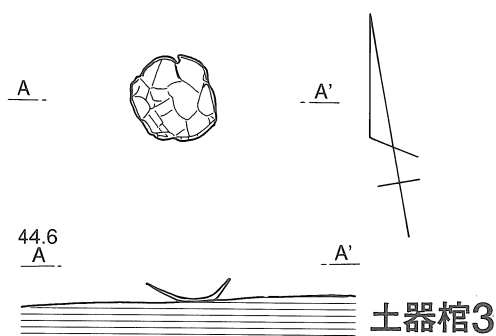
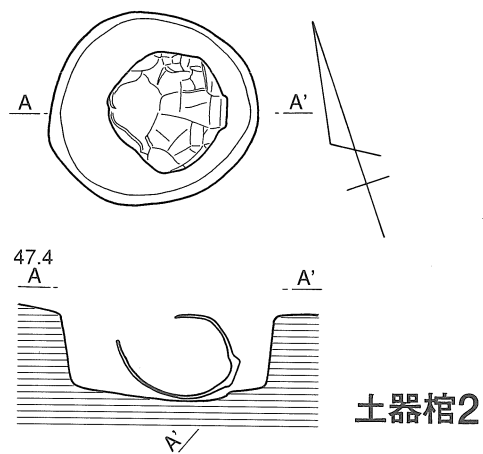
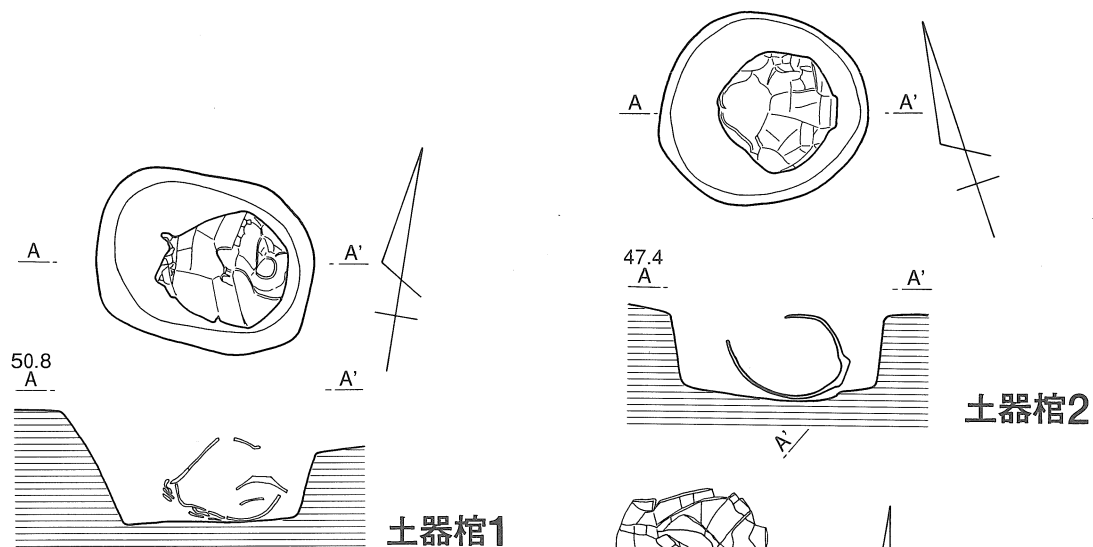
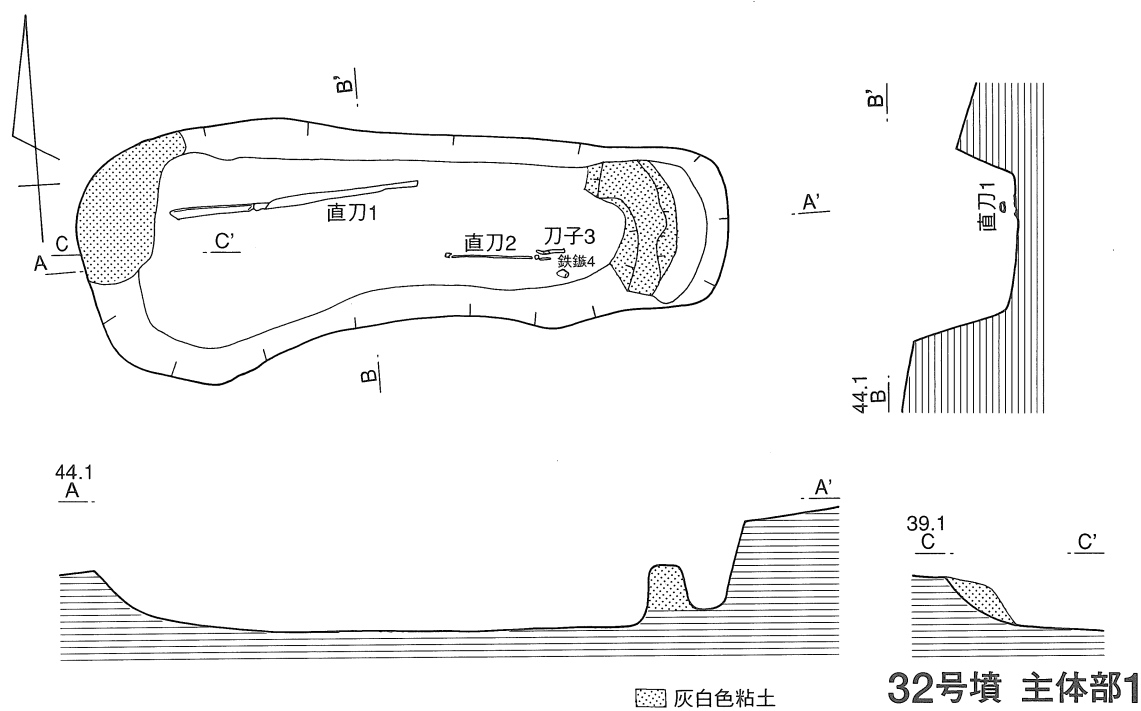
29号墳
SK2



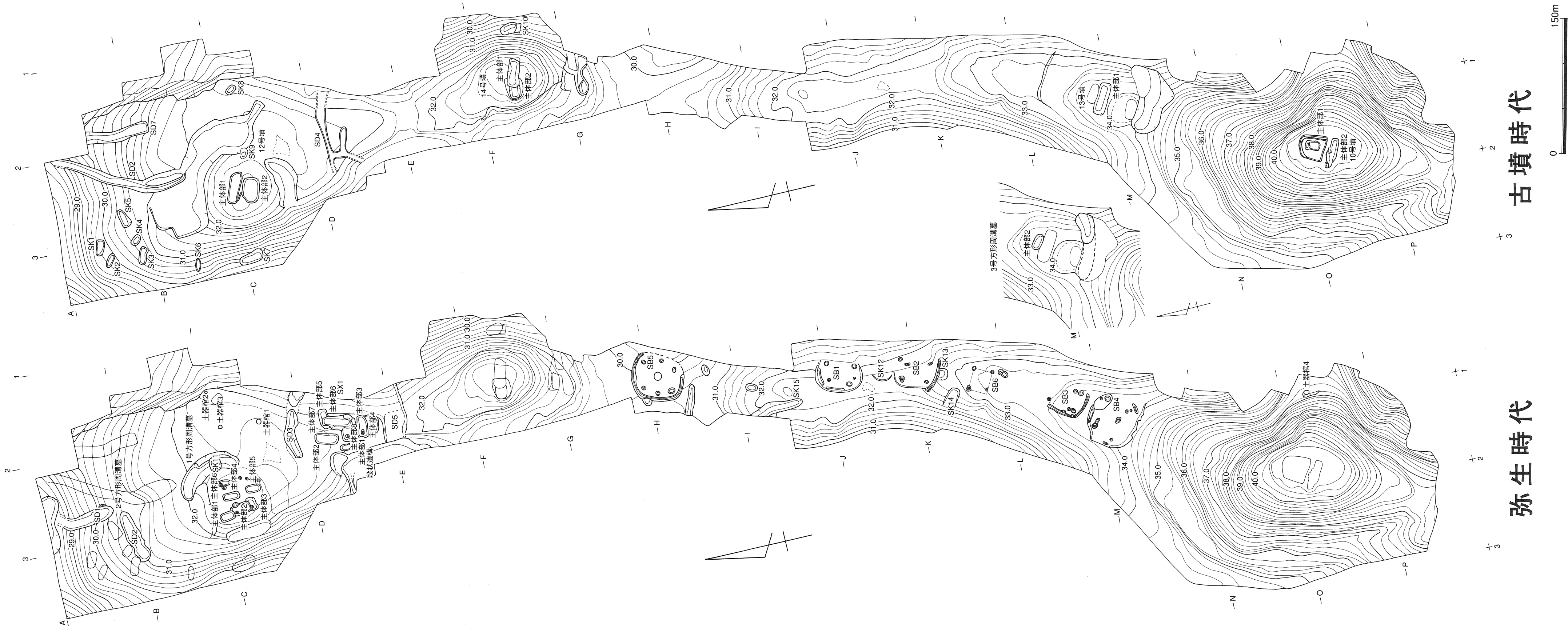
1層 黒褐色土
2層 明褐色土
3層 褐色土

29号墳
SK1

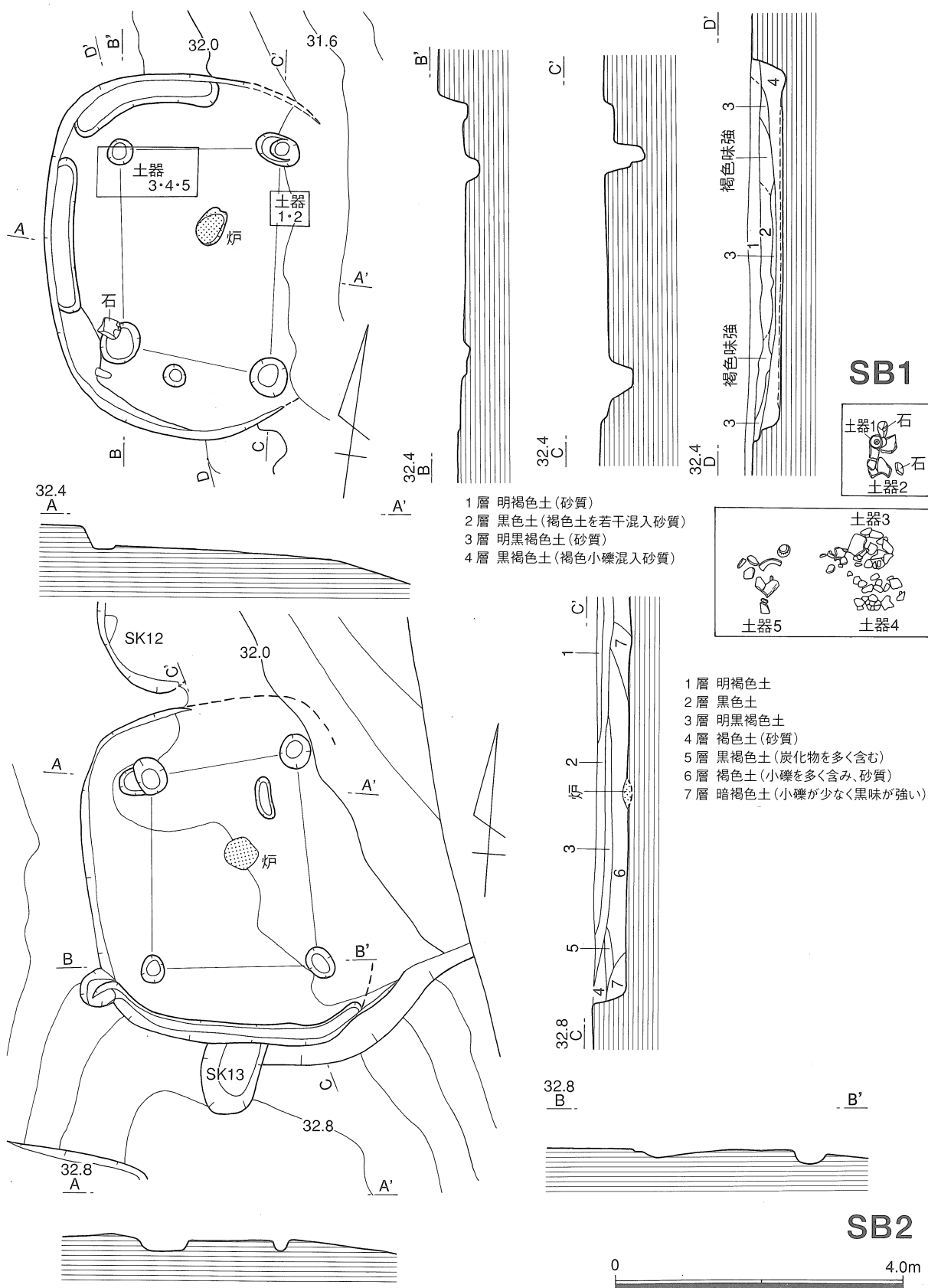




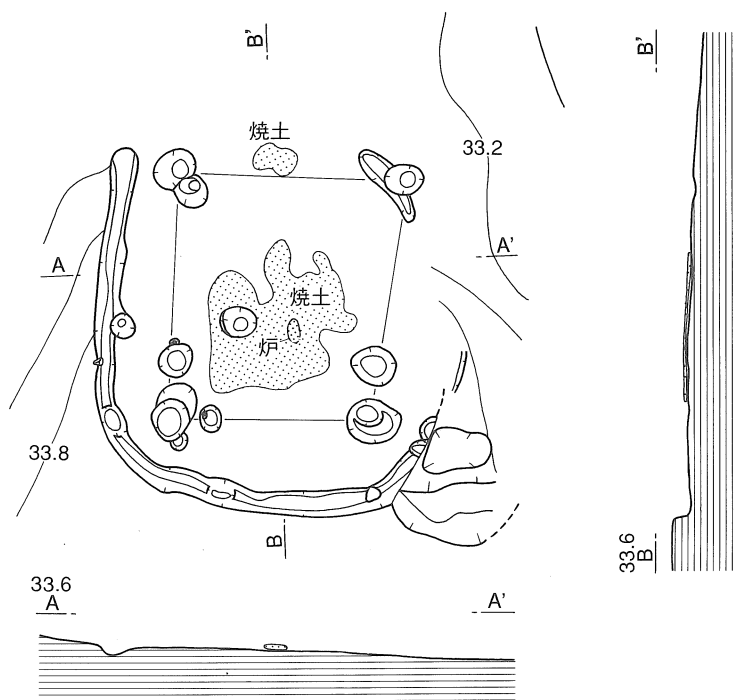
第99図 B 32号墳主体部 土器棺 1 ~ 4 実測図



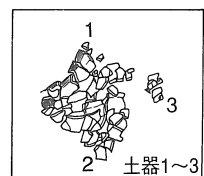
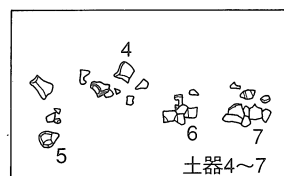
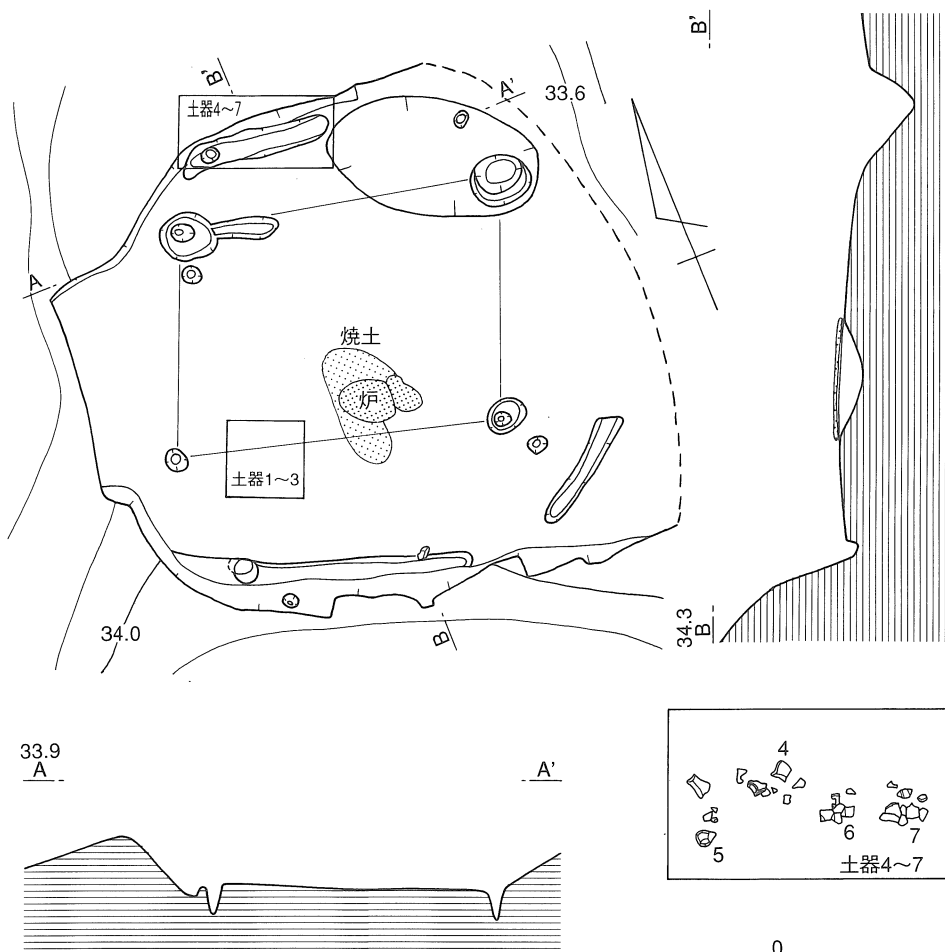
第100图 C地区地形・全体图



第101図 SB1・2実測図



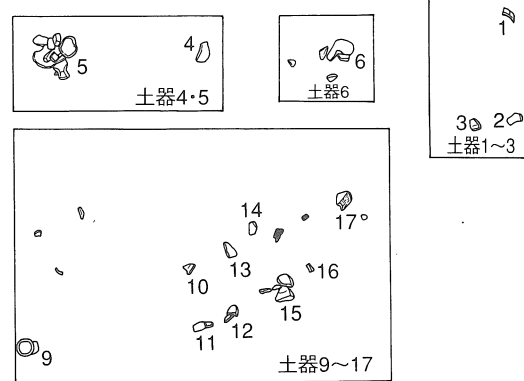
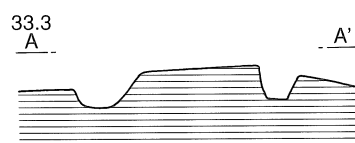
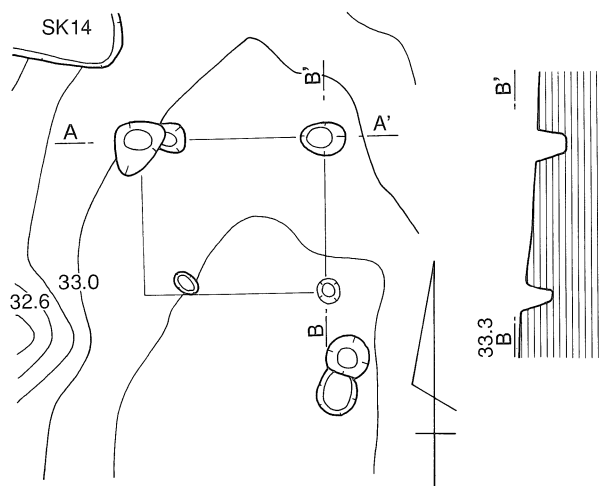
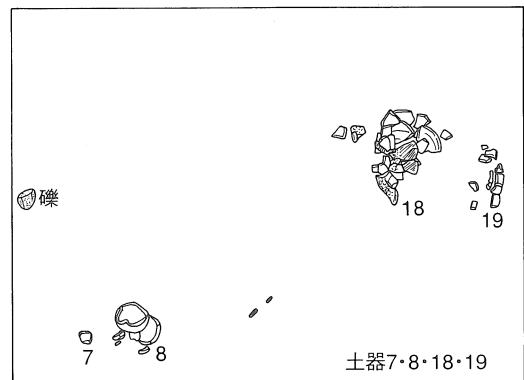
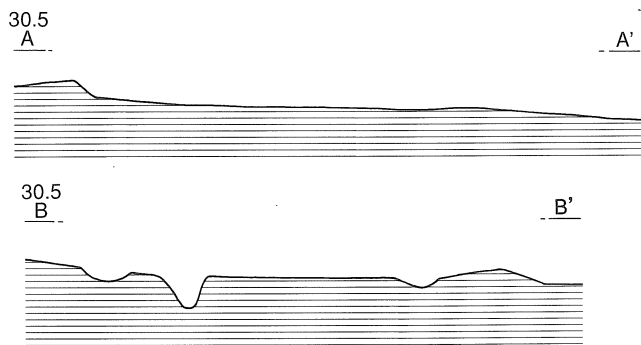
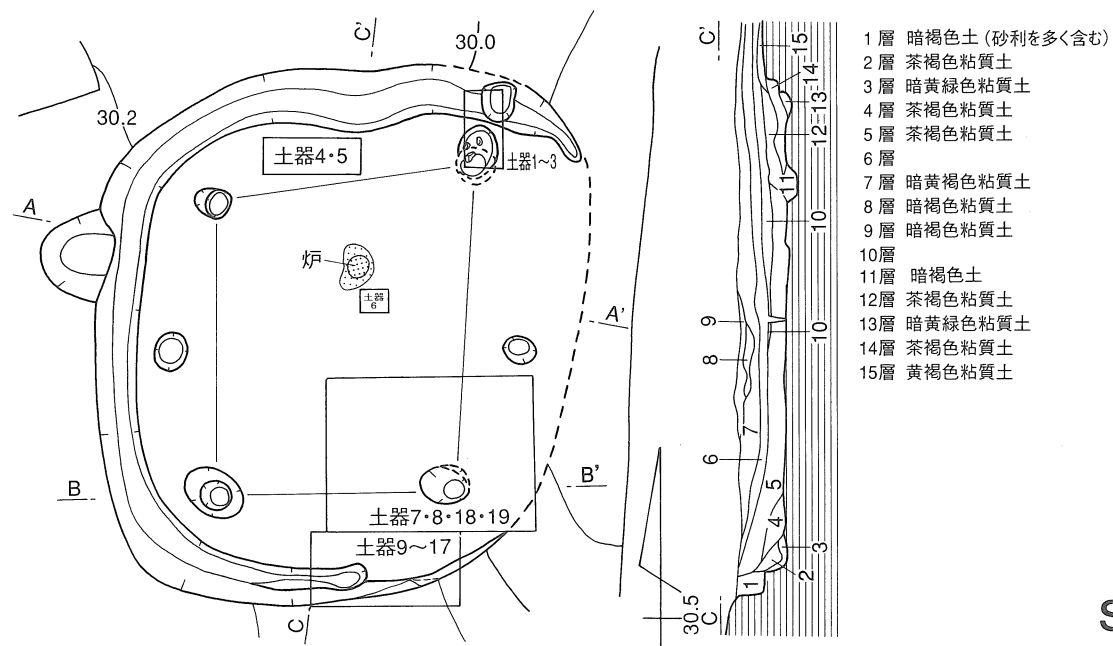
SB3



SB4

0 4.0m

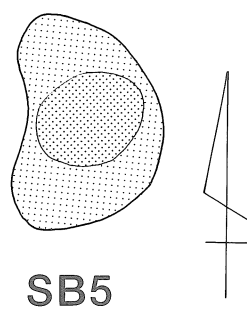
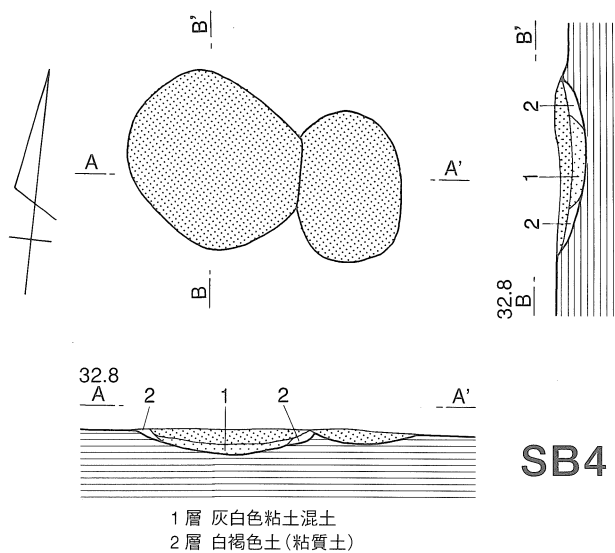
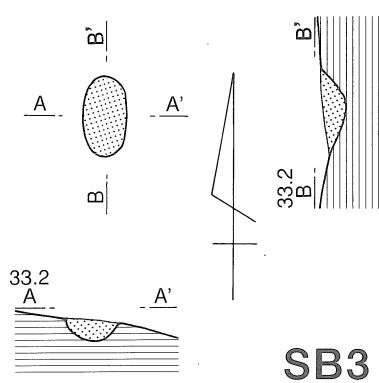
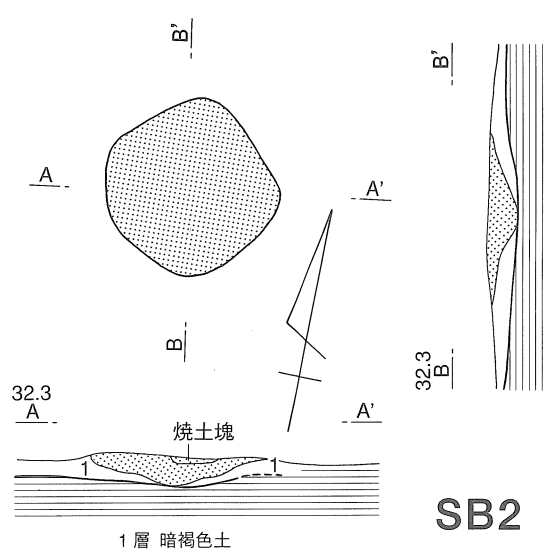
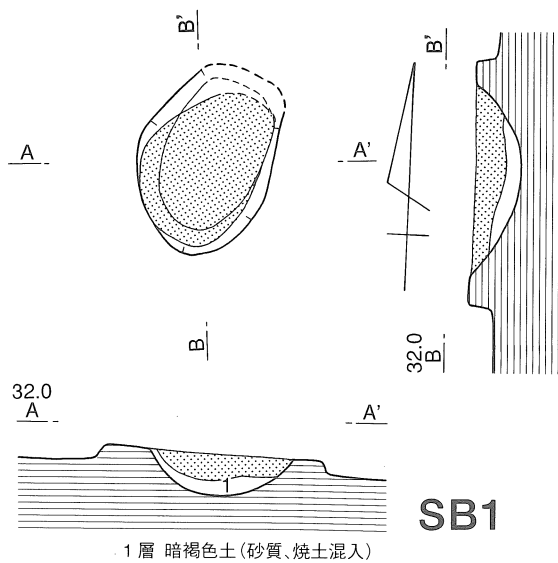
第102図 S B 3 ・ 4 実測図



SB6



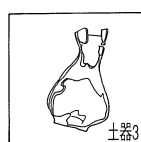
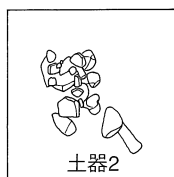
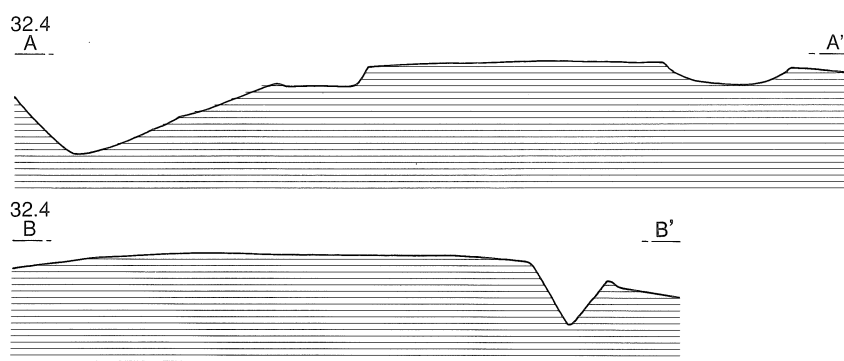
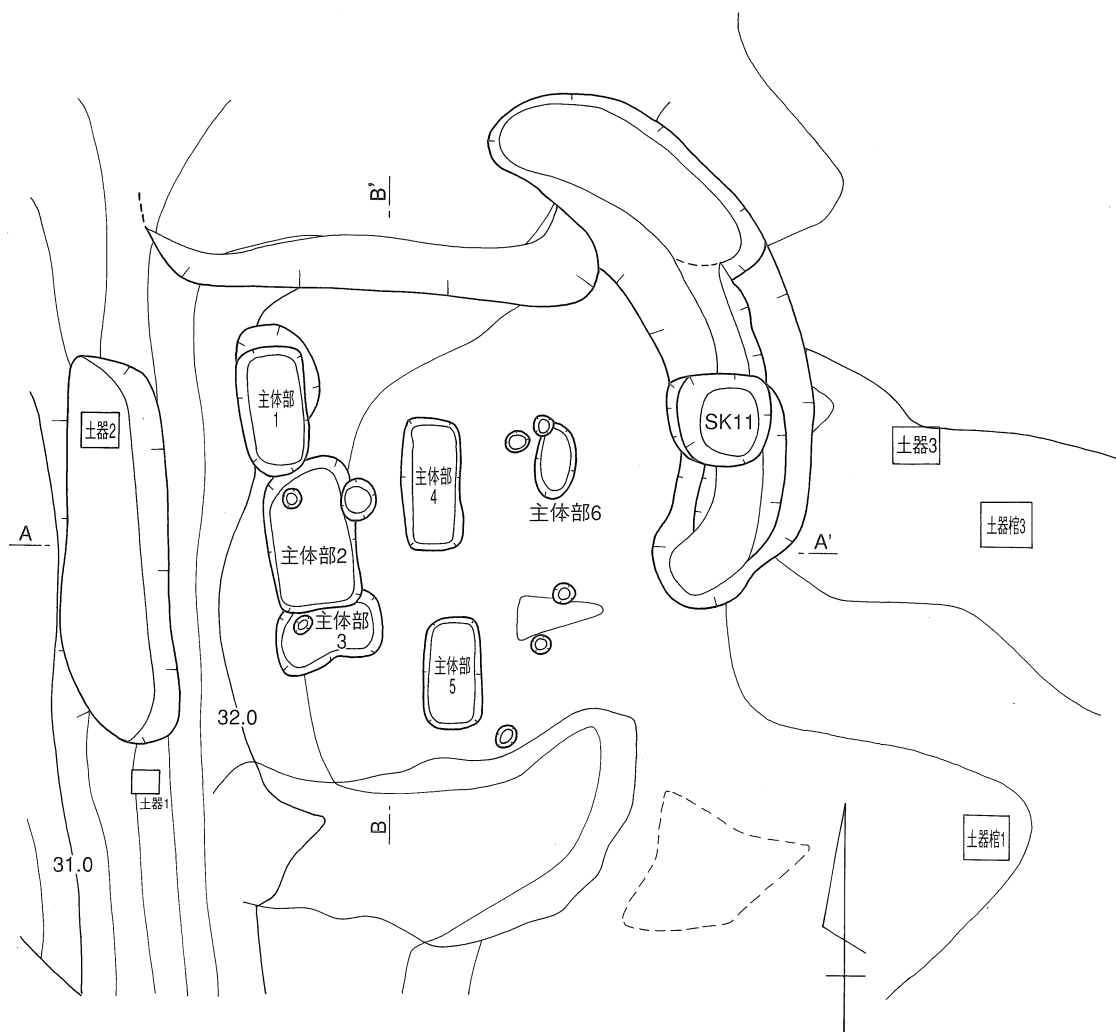
第103図 SB5・6実測図



 良く焼けている範囲
 焼土

0 1.0m

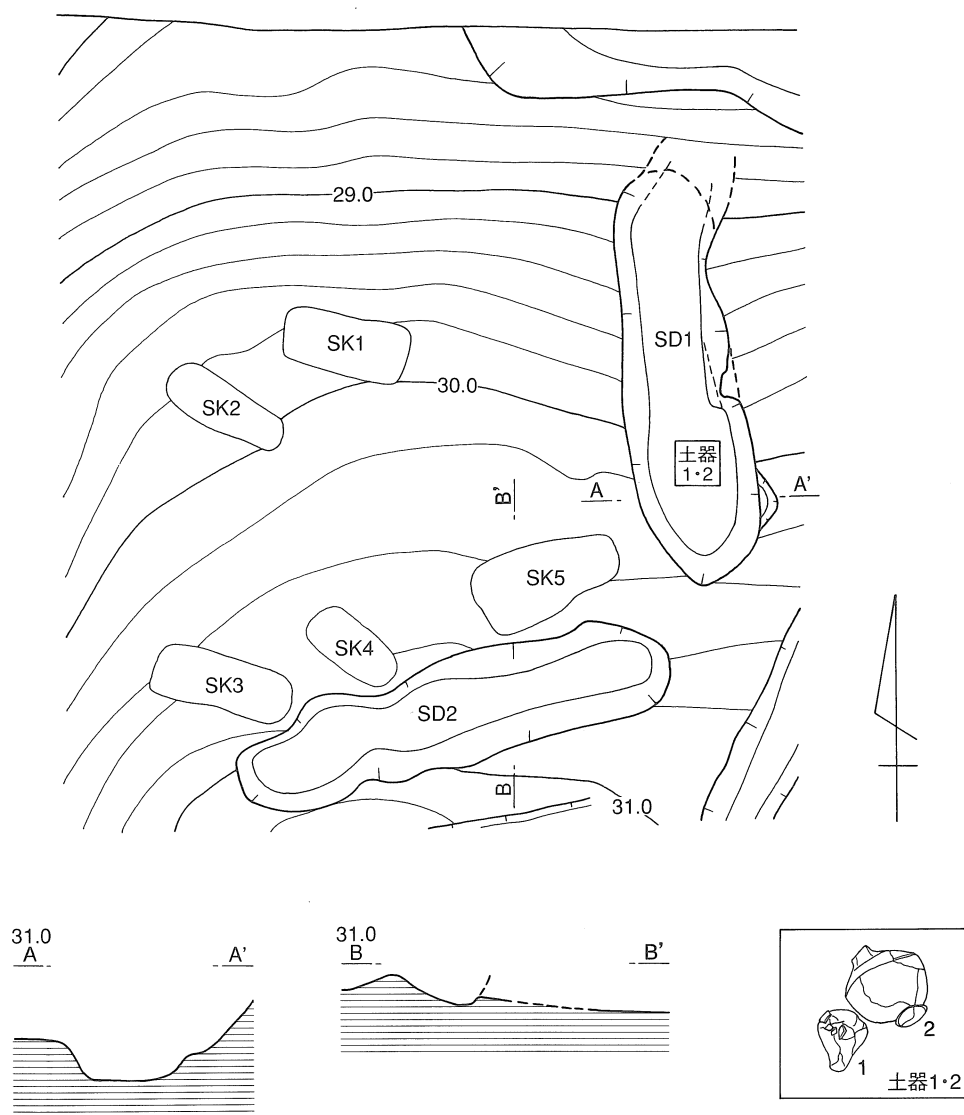
第104図 SB1～5 炉実測図



1号方形周沟墓



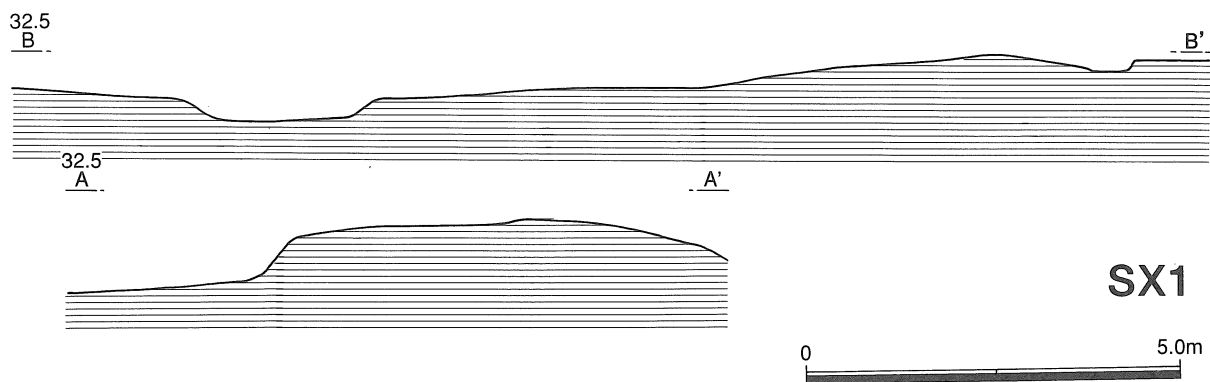
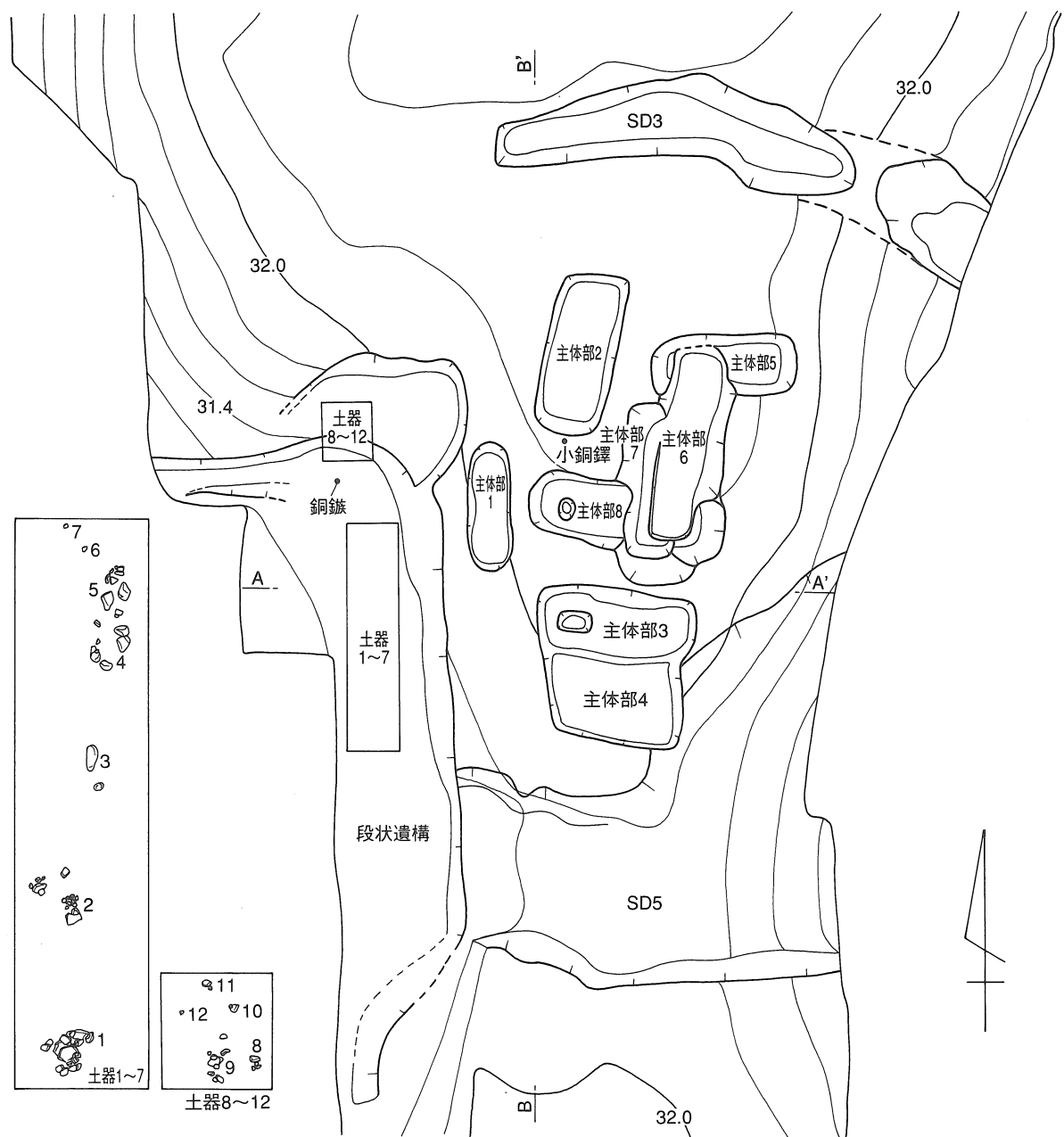
第105图 1号方形周沟墓实测图



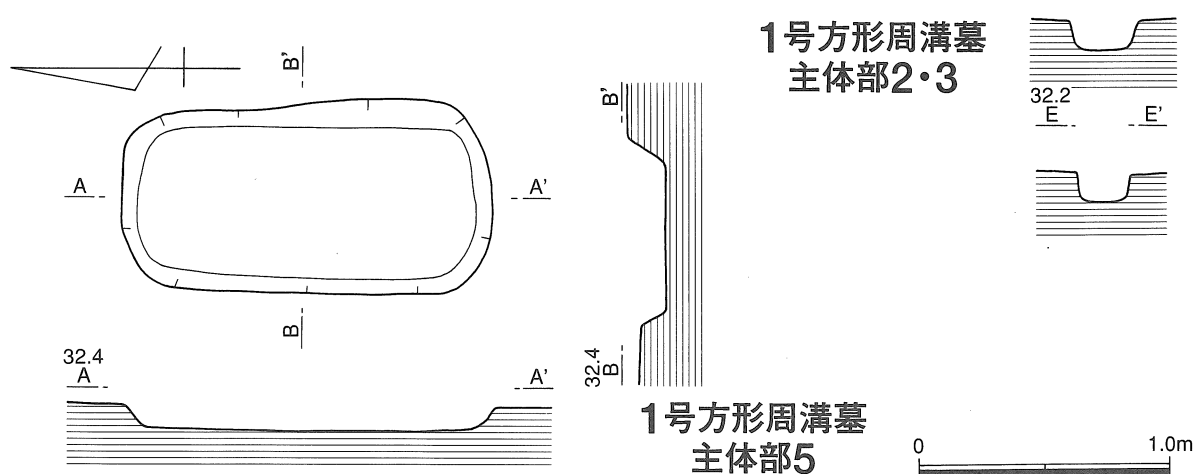
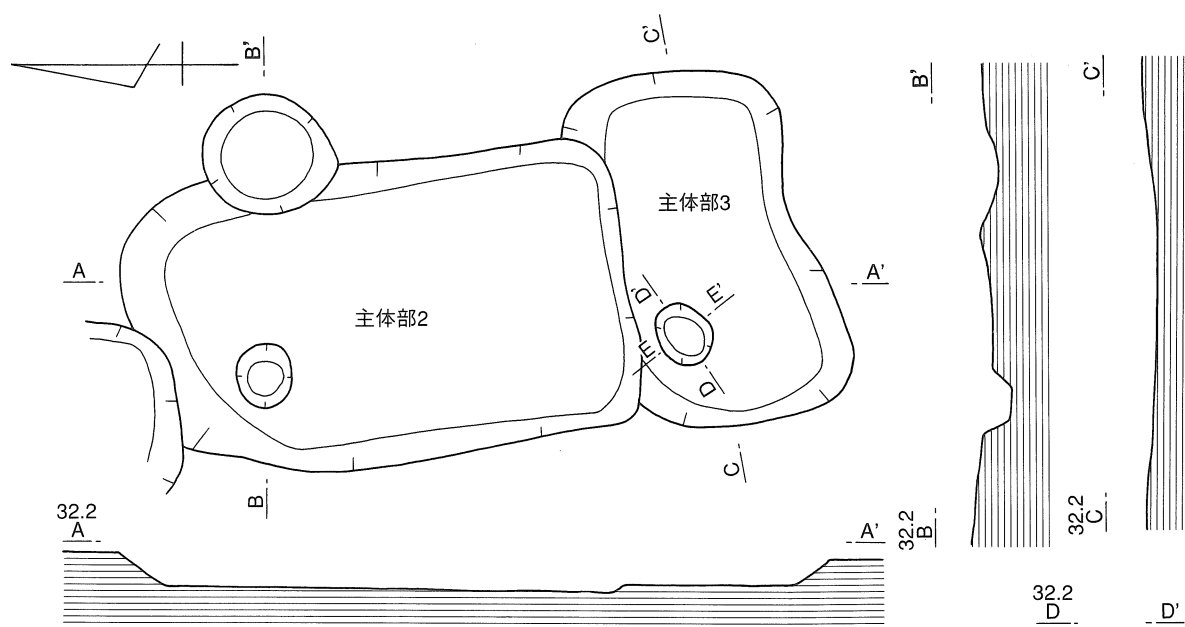
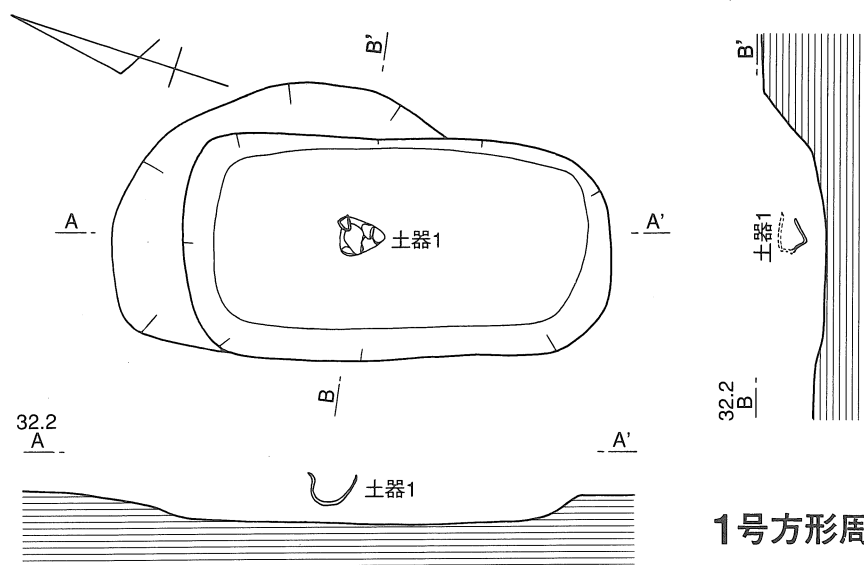
2号方形周溝墓

0 5.0m

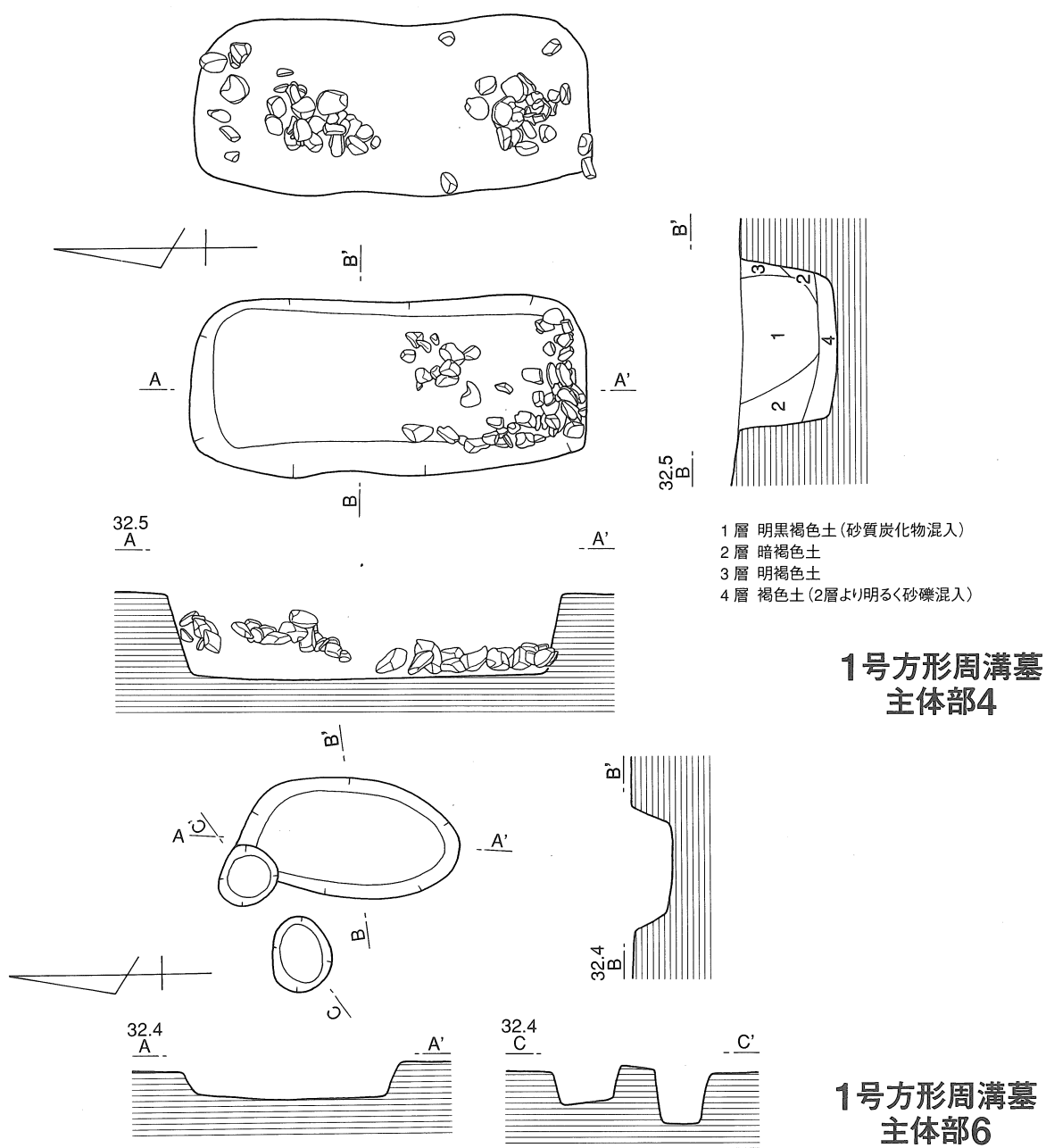
第106図 2号方形周溝墓実測図



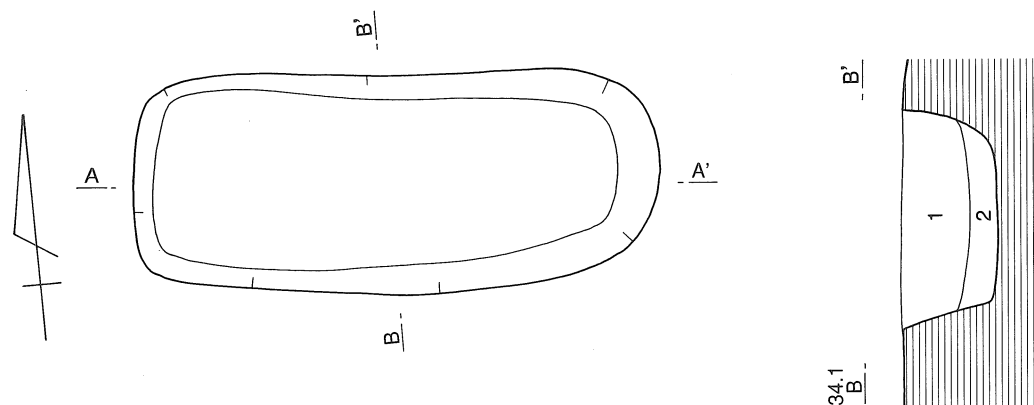
第108図 S X 1 実測図



第109図 1号方形周溝墓主体部1～3・5実測図

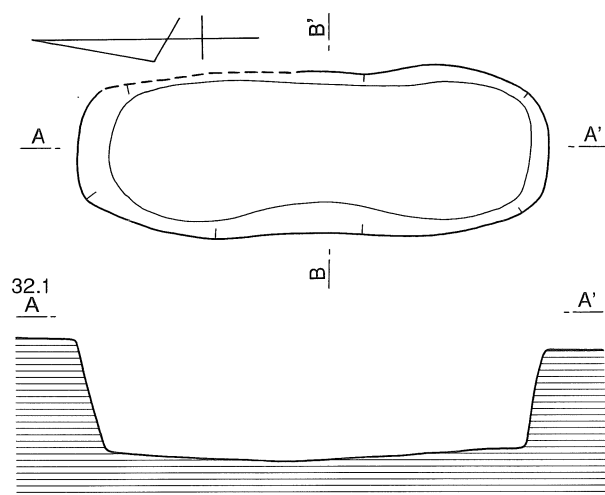
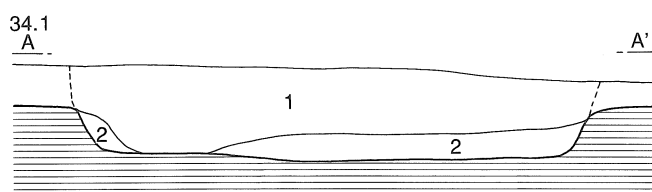


第110図 1号方形周溝墓主体部4・6実測図



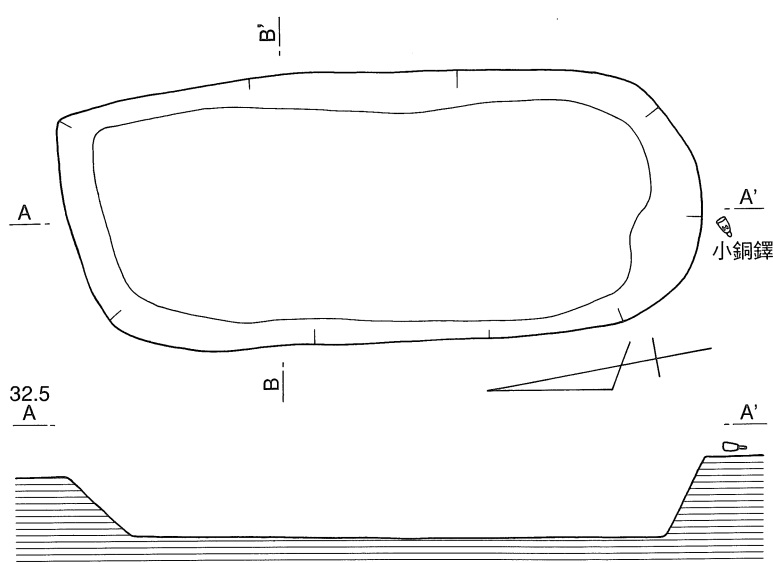
- 1層 褐色土 (灰色粘土混入炭化物・粘性)
- 2層 暗褐色土 (灰色粘土混入)

3号方形周溝墓 主体部2



- 1層 暗褐色
- 2層 褐色
- 3層 黒色土

SX1 主体部1

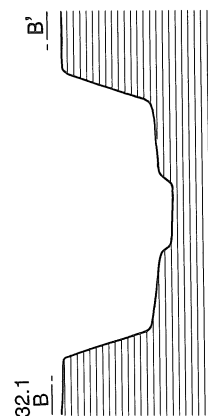
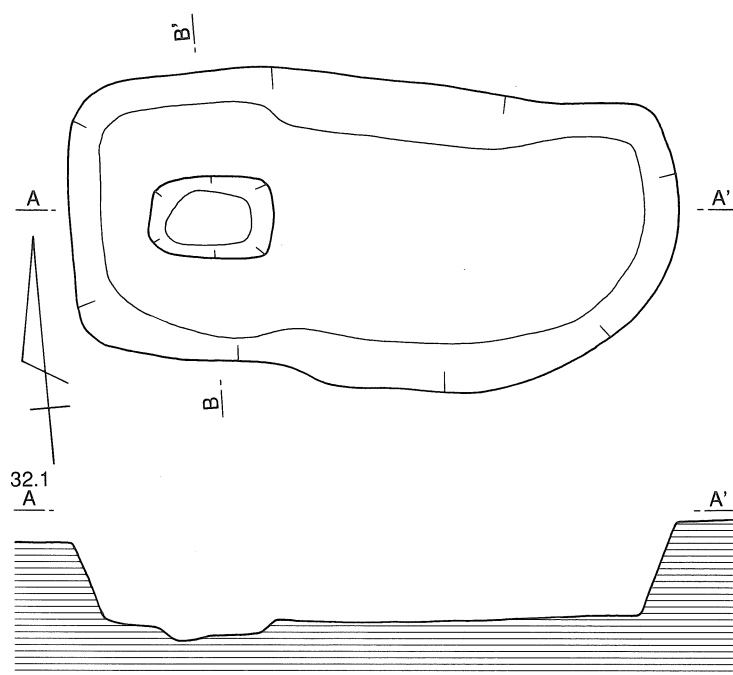


- 1層 褐色
- 2層 暗褐色
- 3層 褐色 (1層より明るい)
- 4層 褐色 (3層より明るい)

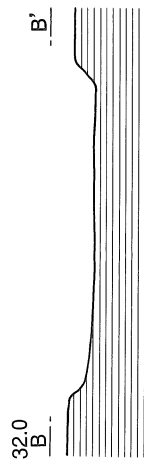
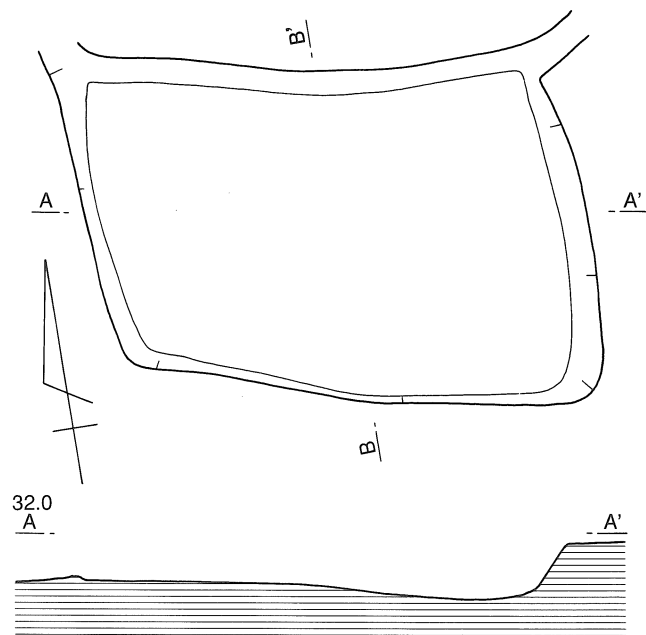
SX1 主体部2



第111図 3号方形周溝墓 主体部2 SX1主体部1・2 実測図



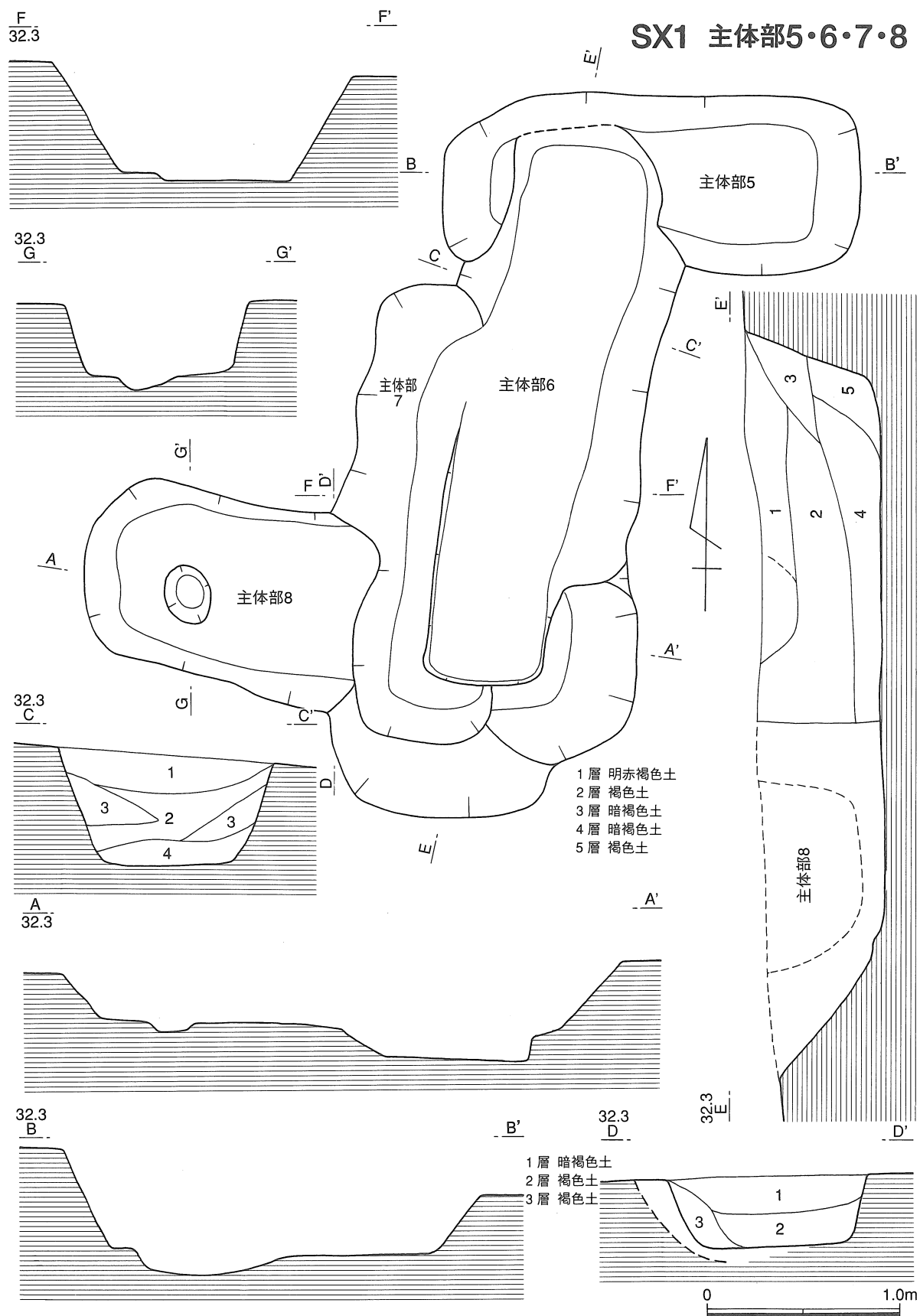
SX1 主体部3



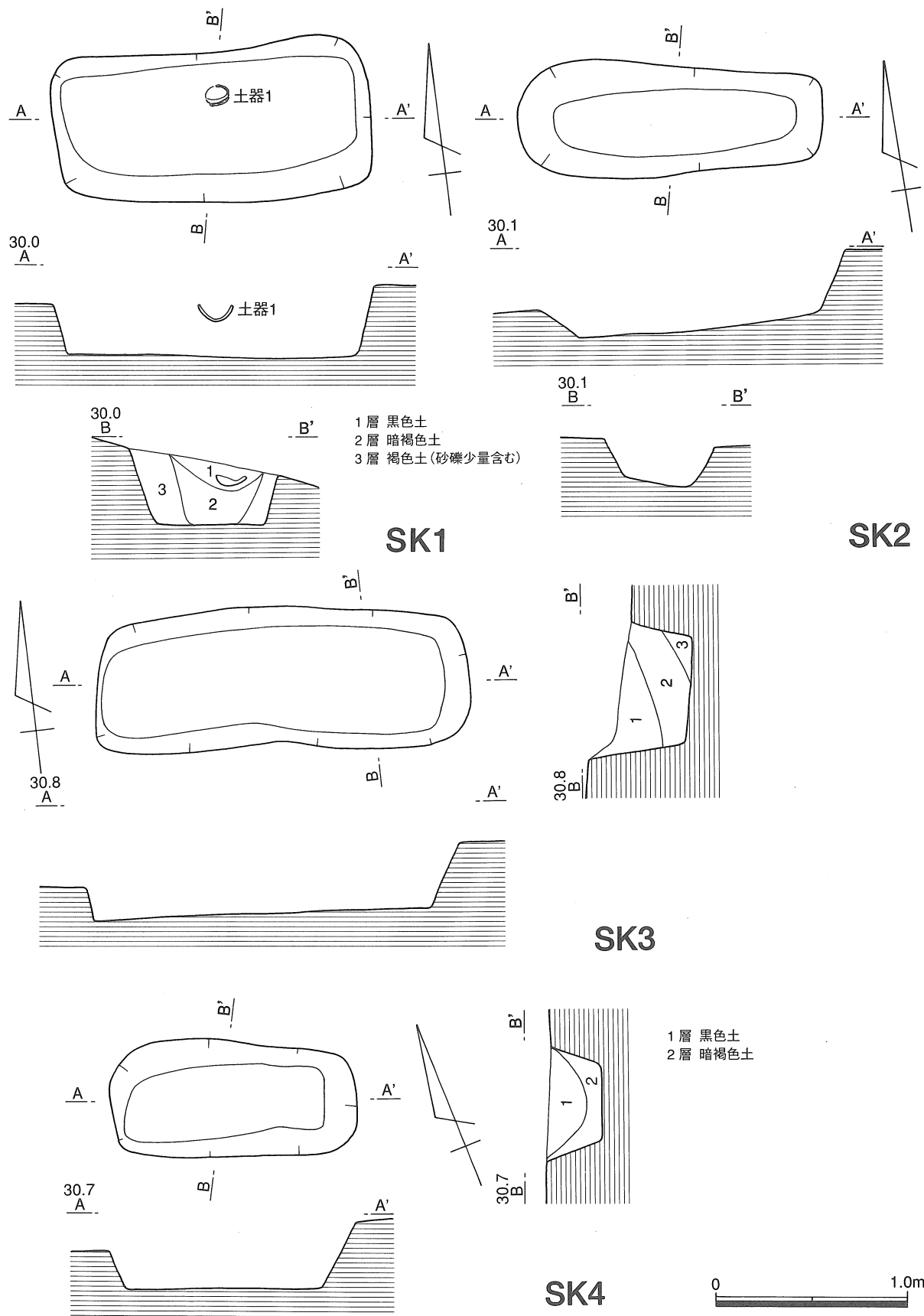
SX1 主体部4



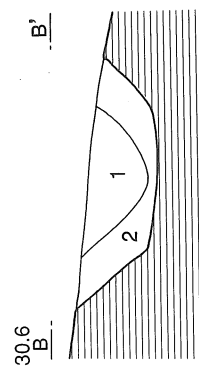
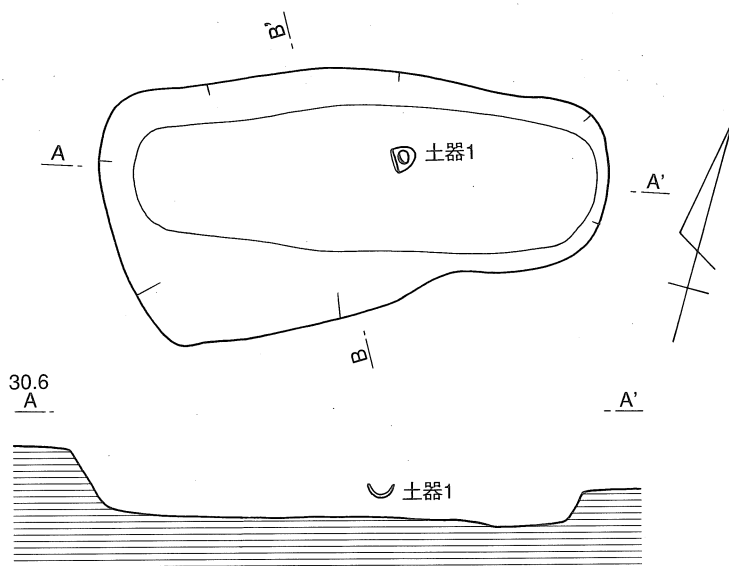
第112図 SX1 主体部3・4実測図



第113図 SX1 主体部5～8実測図

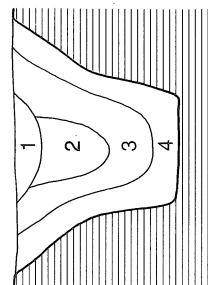
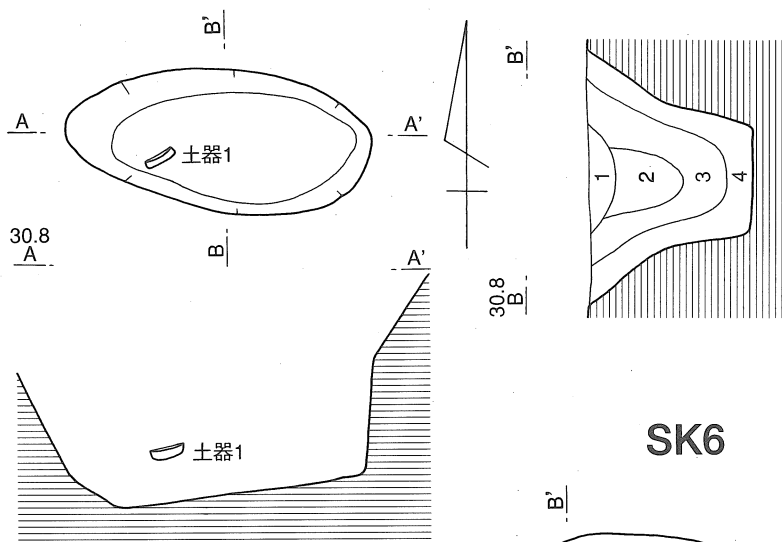


第114図 SK 1 ~ 4 実測図



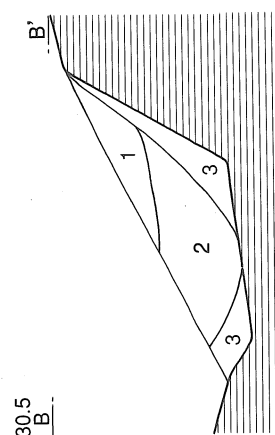
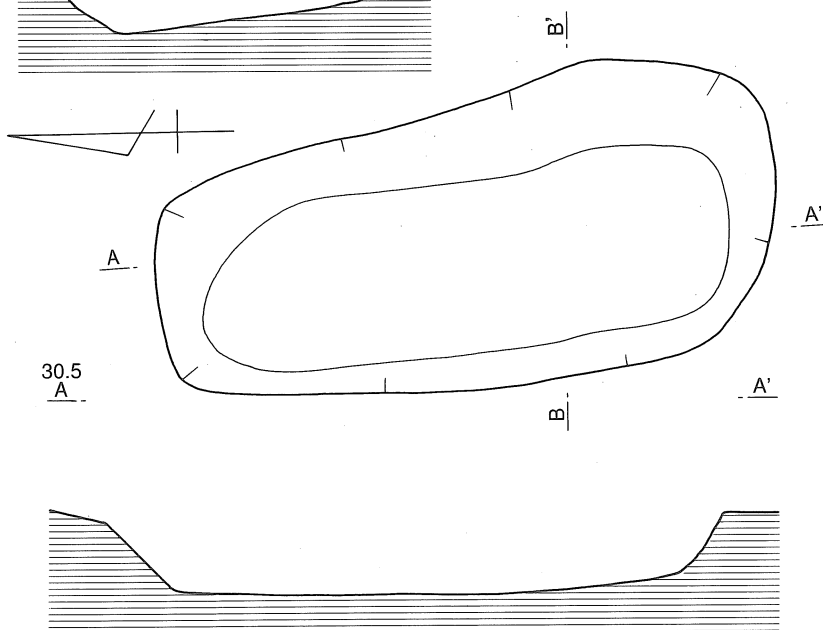
- 1層 黒色土(しまりなく、遺物含む)
- 2層 暗褐色土

SK5



- 1層 褐色土(礫を含む)
- 2層 黒褐色土
- 3層 暗褐色土
- 4層 褐色土

SK6

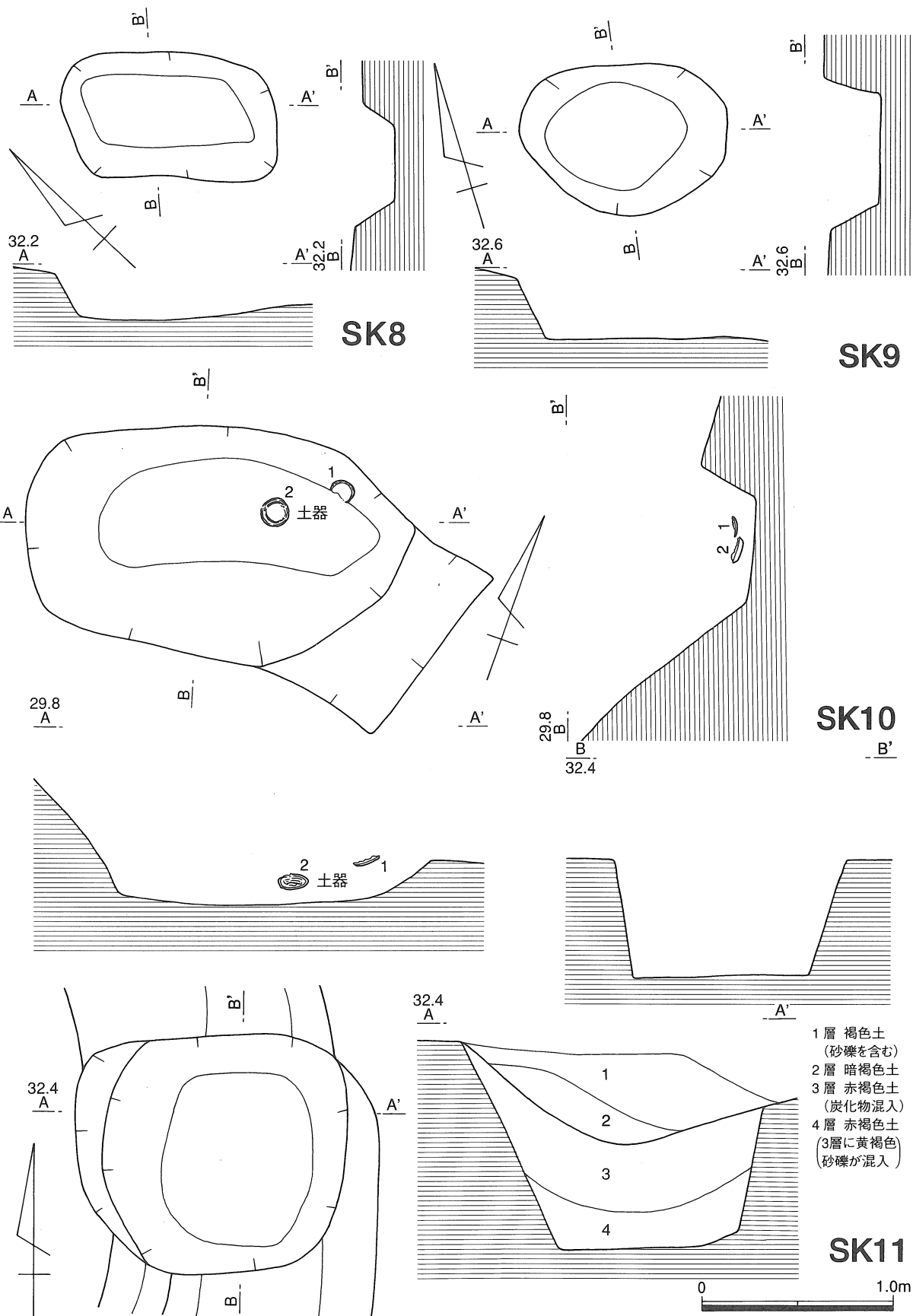


- 1層 暗黄褐色土
- 2層 黒色土
- 3層 黄褐色土

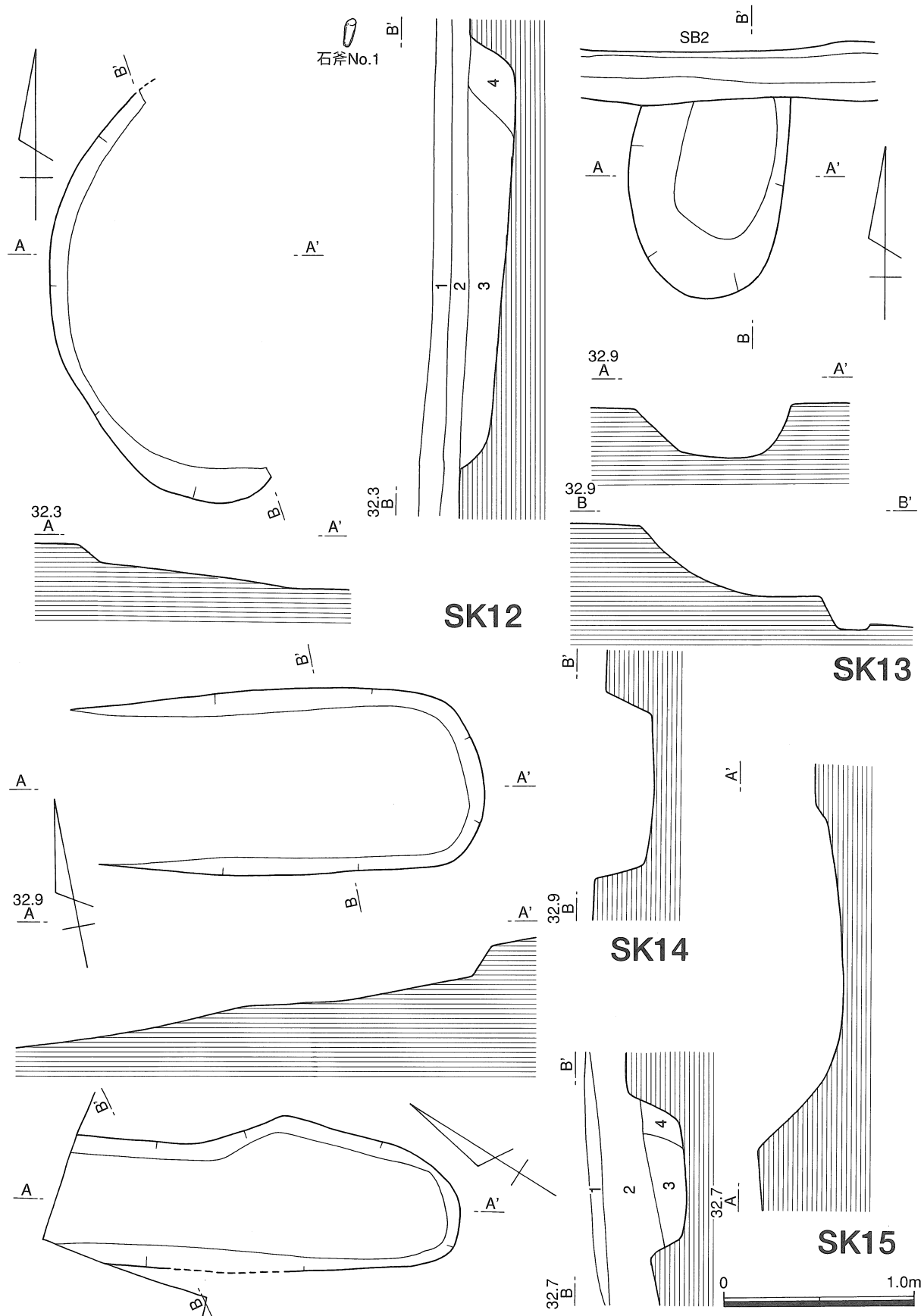
SK7



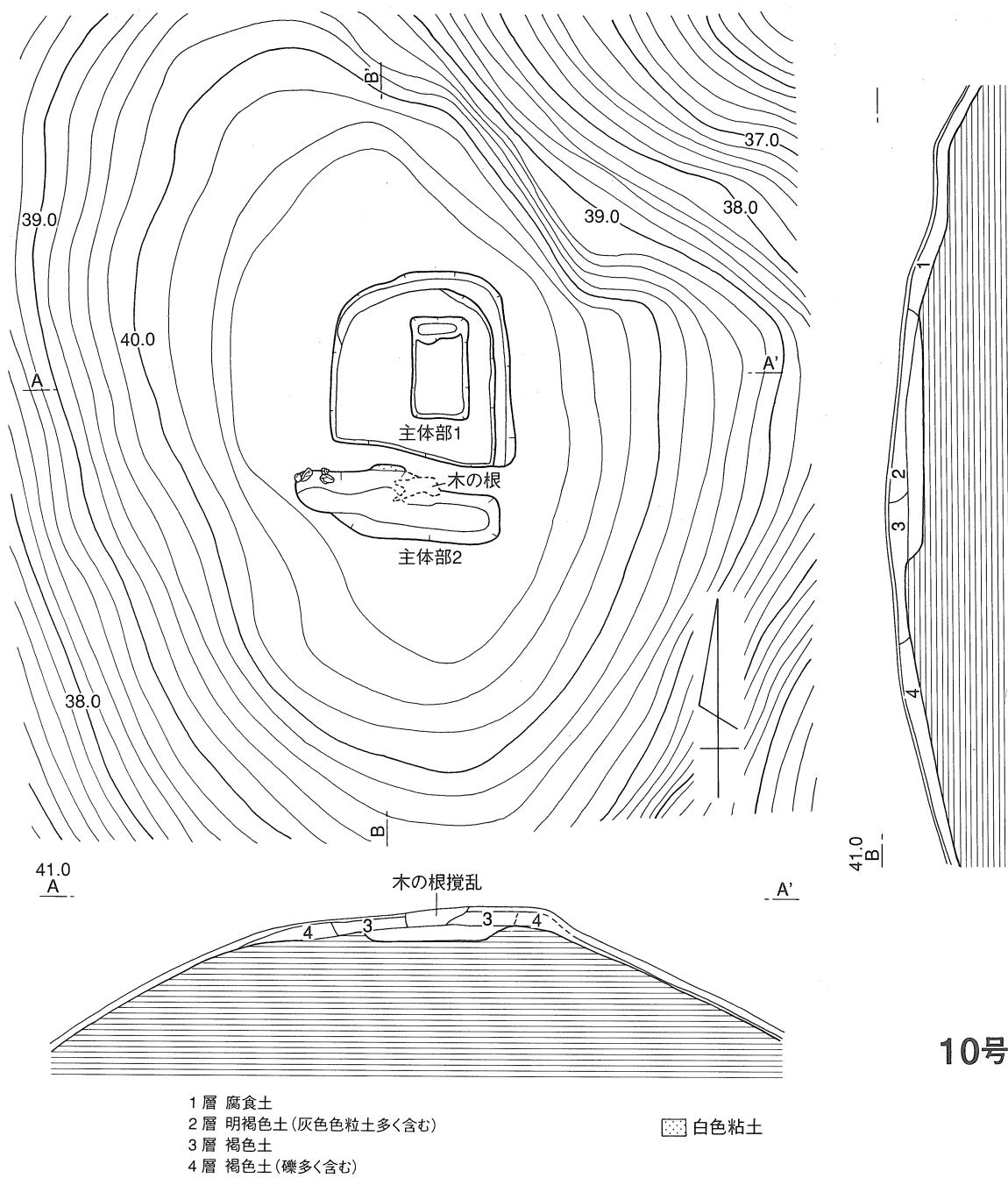
第115図 SK 5～7 実測図



第116図 SK 8～11実測図

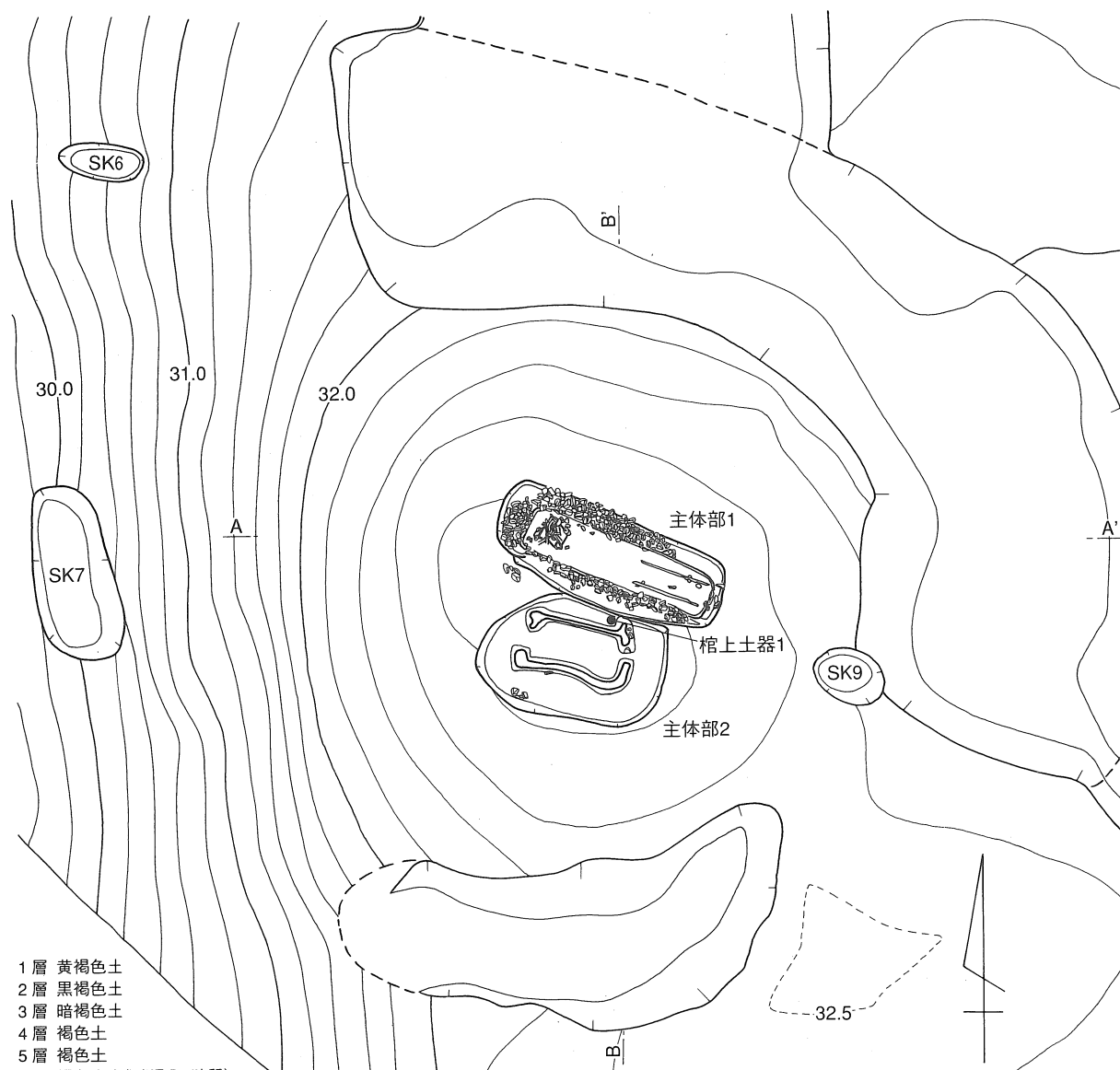


第117図 SK12~15実測図

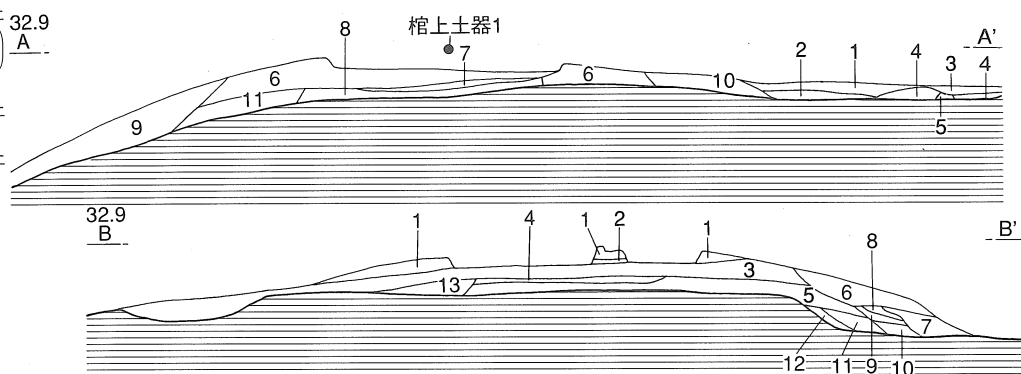


10号墳

第118図 B 10号墳実測図



- 1層 黄褐色土
- 2層 黒褐色土
- 3層 暗褐色土
- 4層 褐色土
- 5層 褐色土
- 6層 褐色土(砂礫混入・砂質)
- 7層 暗褐色土 32.9
(炭化物・焼土混入) A
- 8層 褐色土
- 9層 明褐色土
- 10層 褐色土
- 11層 暗褐色土

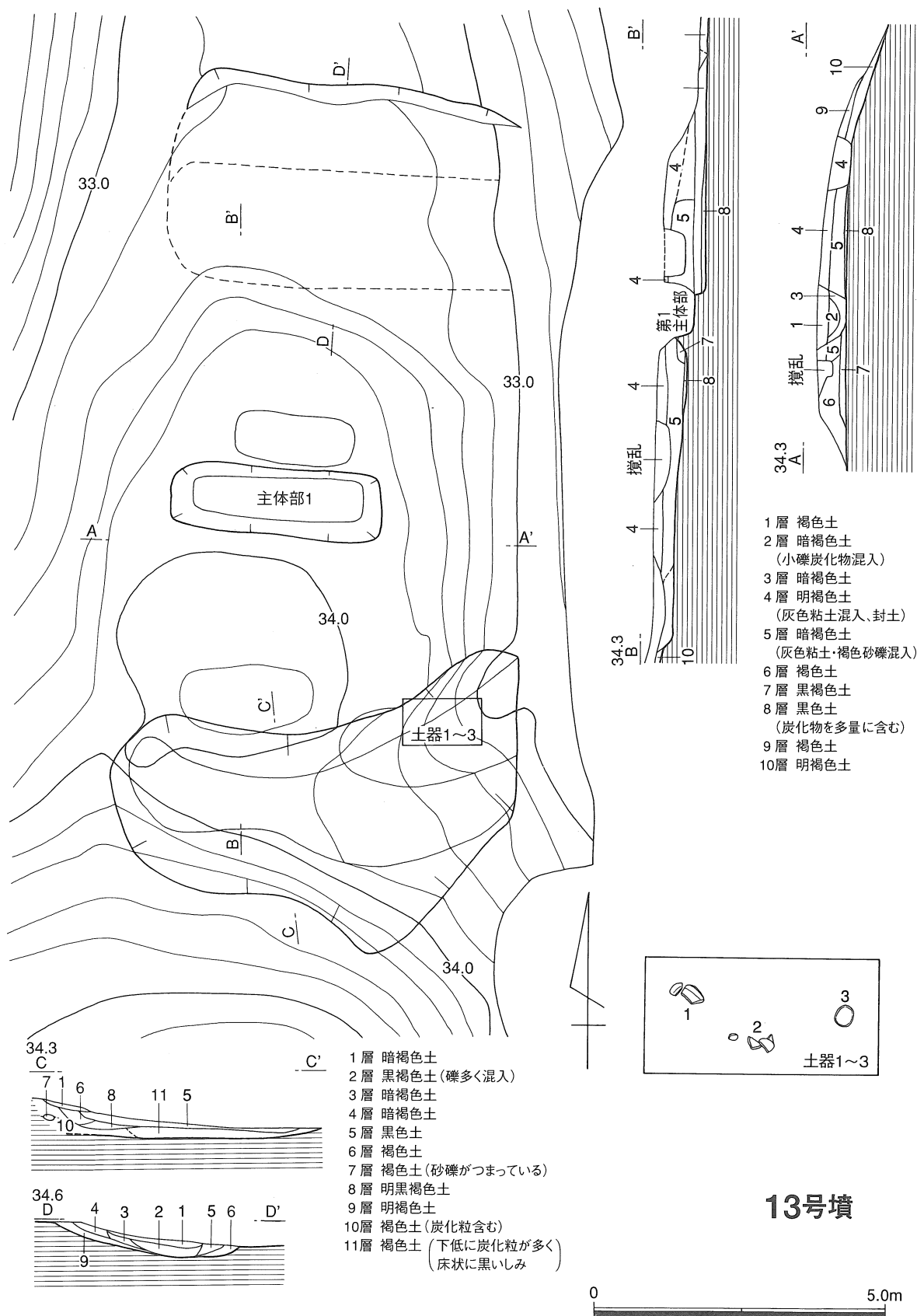


- | | |
|-------------------|-----------|
| 1層 明褐色土 | 8層 黒褐色土 |
| 2層 黒褐色土(砂質炭化物含む) | 9層 暗黄褐色土 |
| 3層 褐色土(小礫混入・砂質) | 10層 黒褐色土 |
| 4層 暗褐色土(炭化物・焼土混入) | 11層 暗黒褐色土 |
| 5層 褐色土 | 12層 黒褐色土 |
| 6層 明褐色土 | 13層 暗褐色土 |
| 7層 褐色土 | |

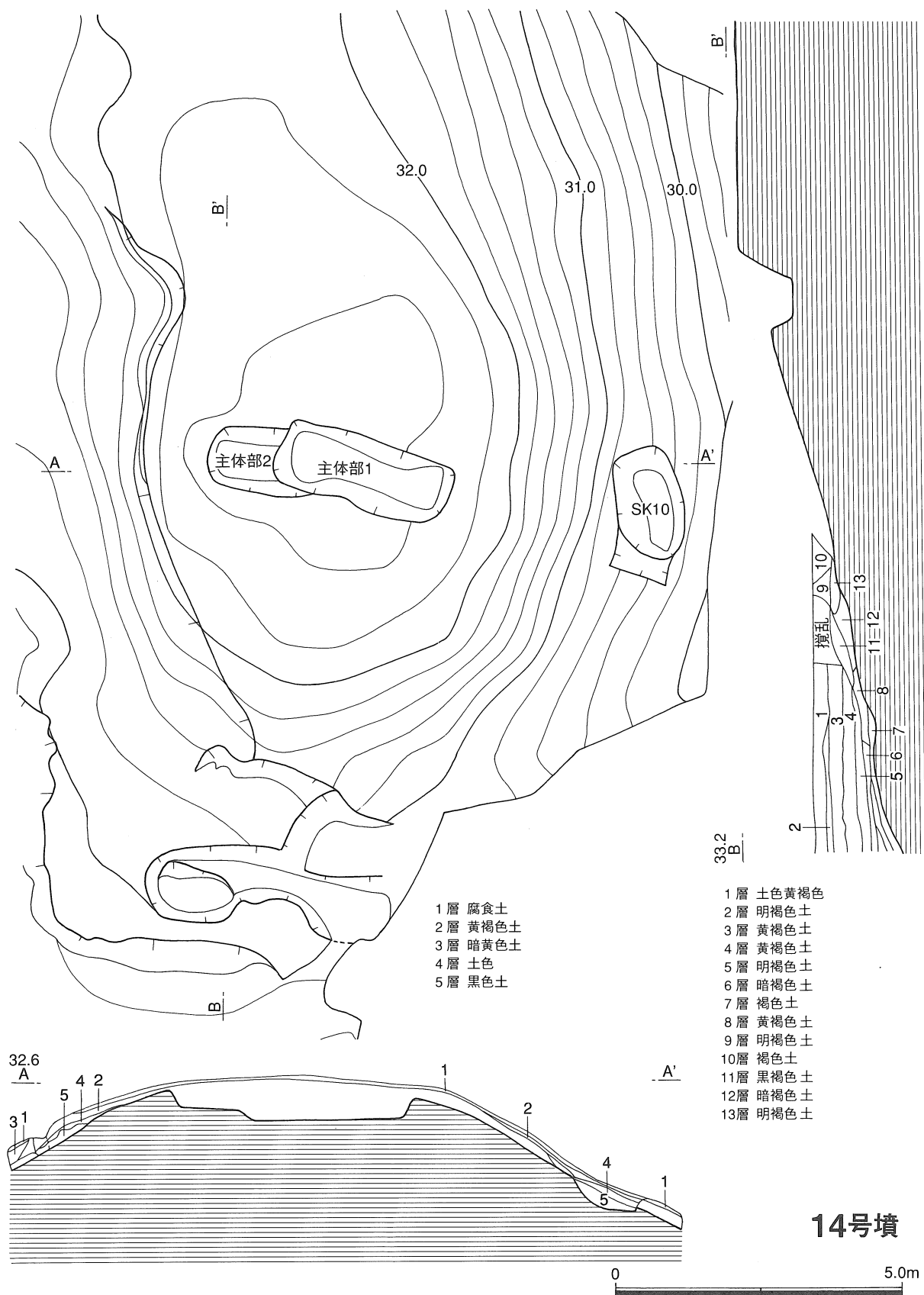
12号墳

0 5.0m

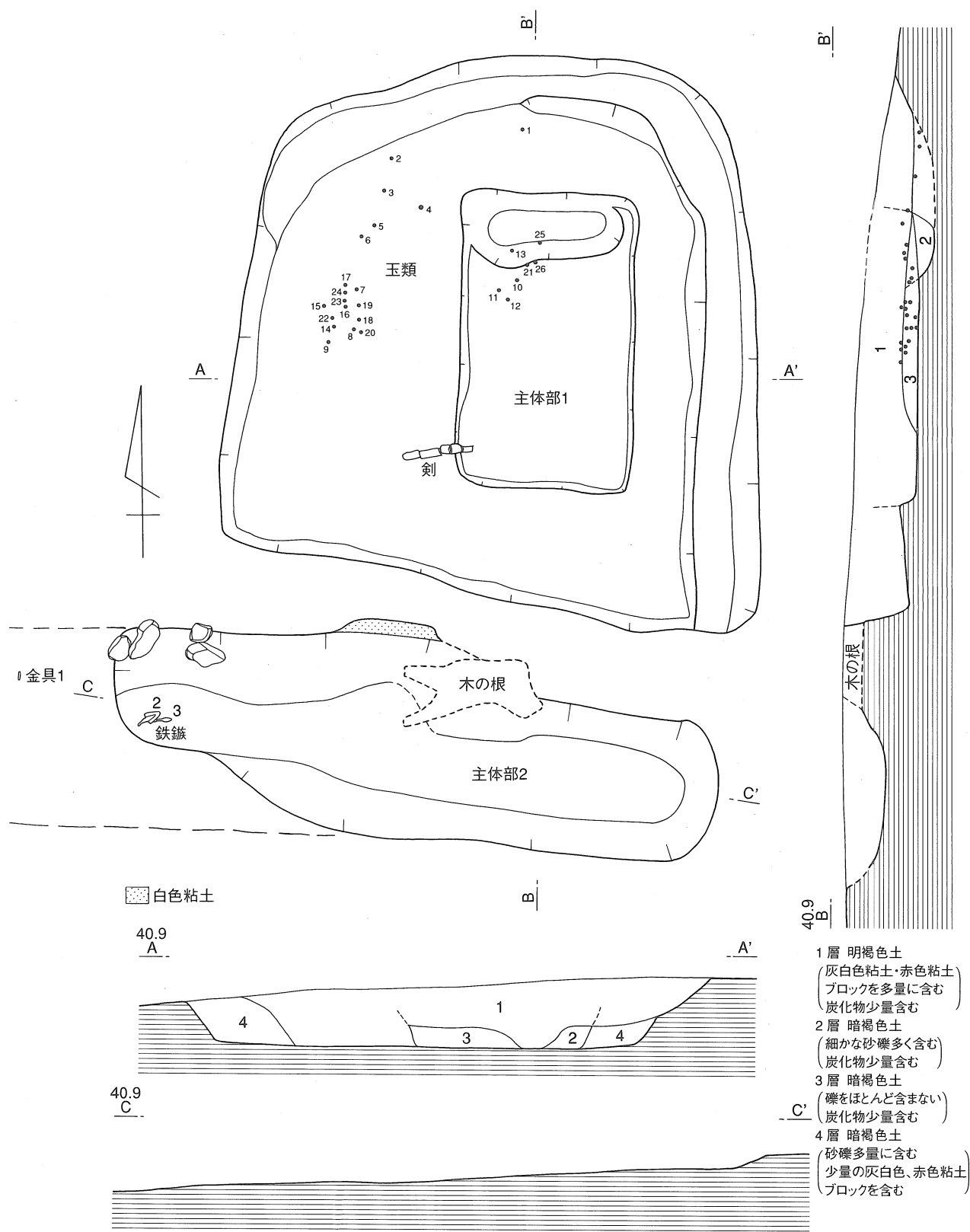
第119図 B12号墳実測図



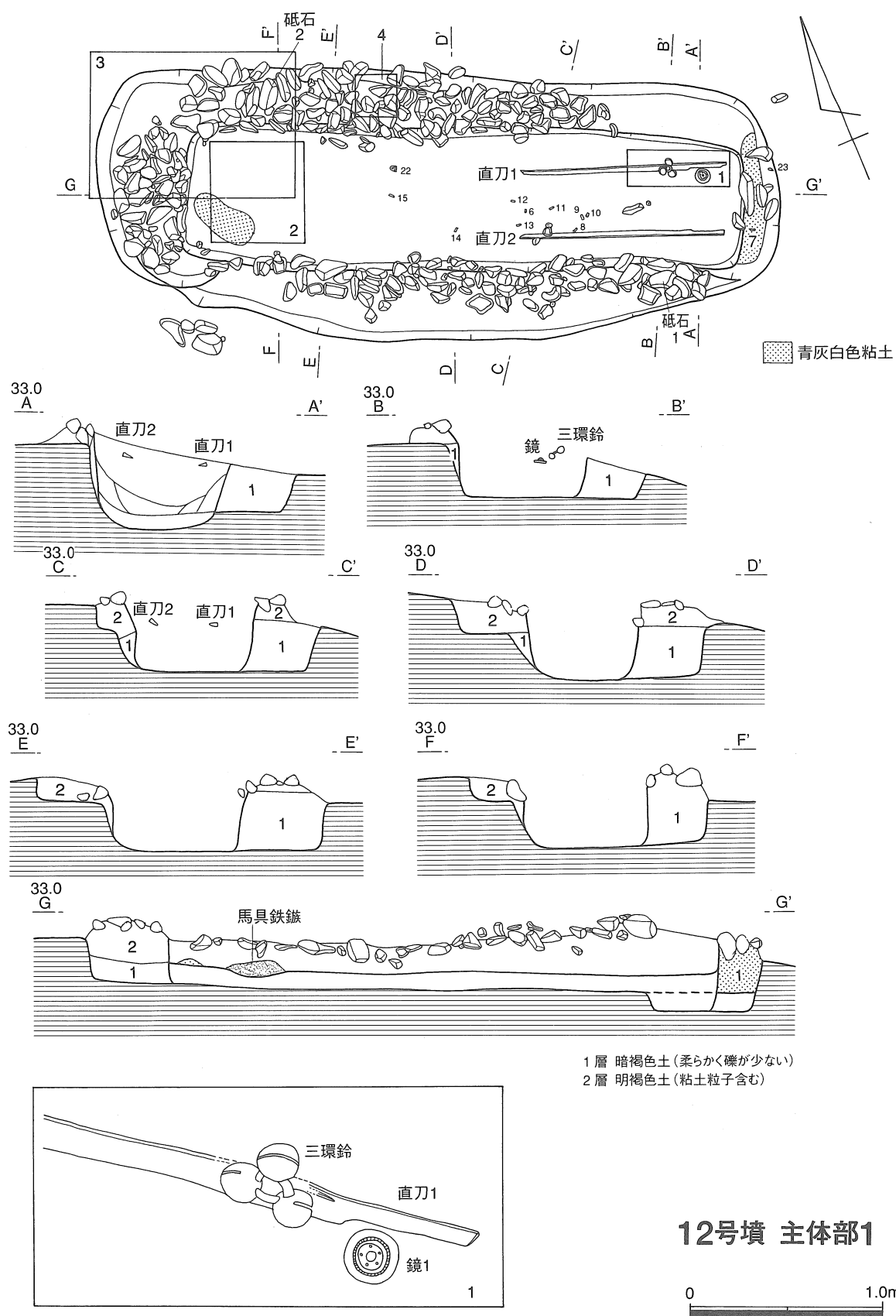
第120図 B 13号墳実測図



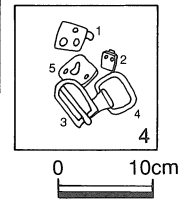
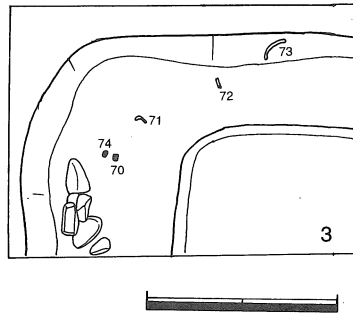
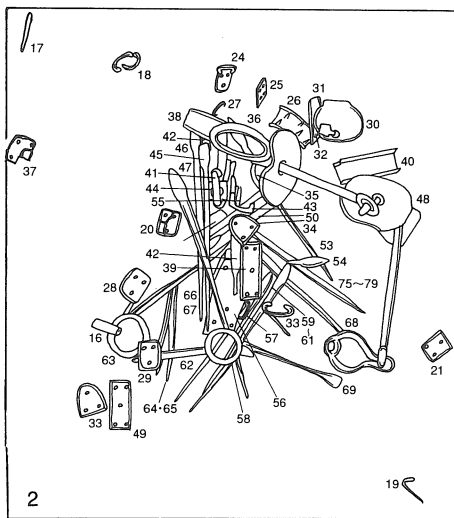
第121図 B 14号墳実測図



第122図 B 10号墳主体部実測図

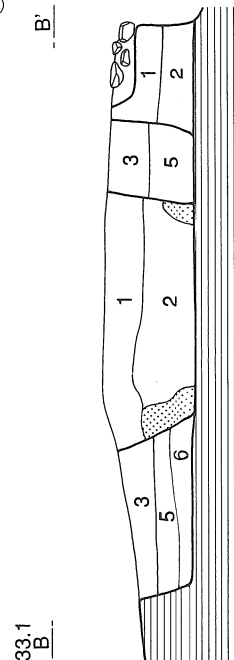
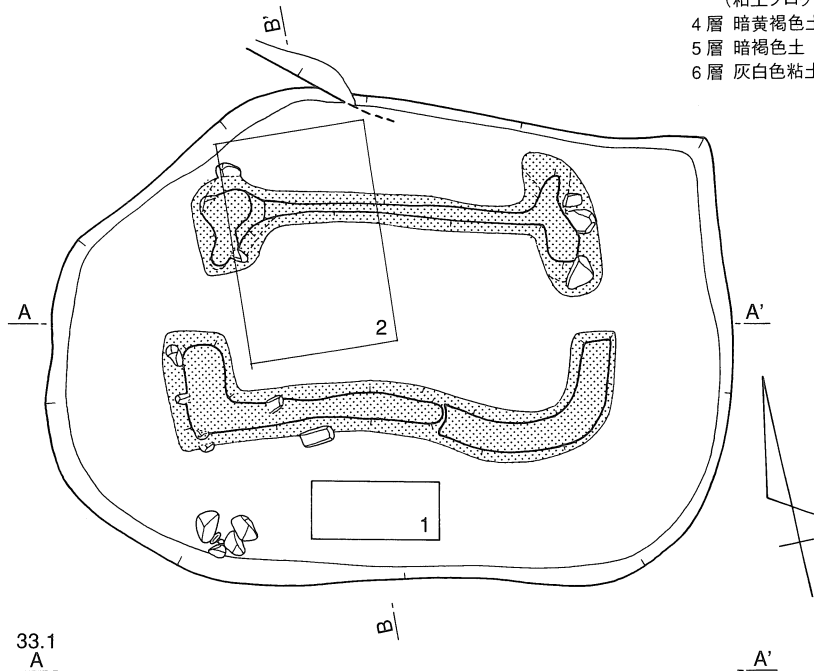


第123図 B 12号墳主体部1 実測図



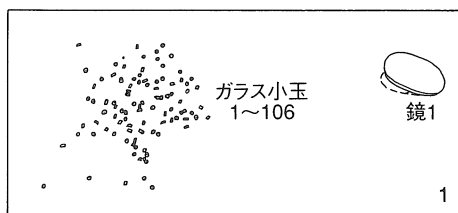
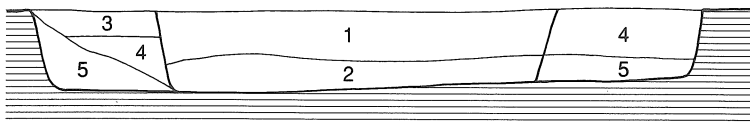
青灰白色粘土

- 1層 暗黄褐色土
- 2層 暗赤黄色土
- 3層 暗赤黄色土
(粘土ブロック混り)
- 4層 暗黄褐色土
- 5層 暗褐色土
- 6層 灰白色粘土

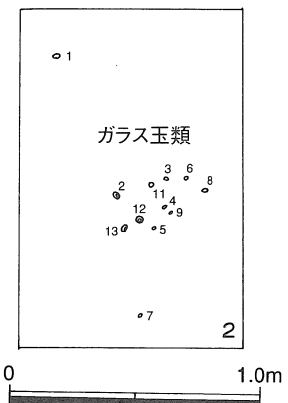


33.1
A

33.1
B

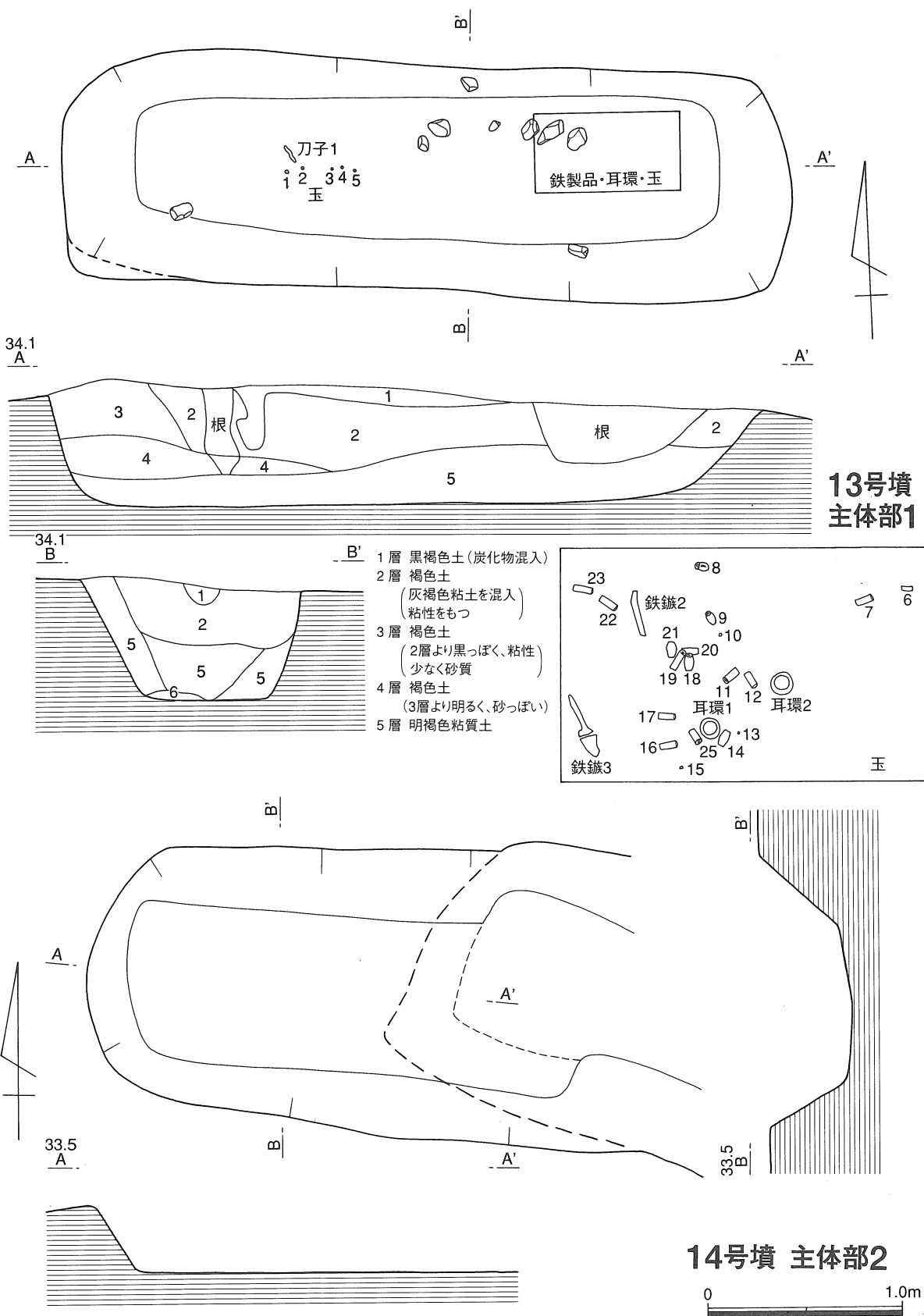


- 1層 黄褐色土
- 2層 暗褐色土
- 3層 黄褐色土(1層より暗い)
- 4層 赤黄色土
- 5層 暗褐色土

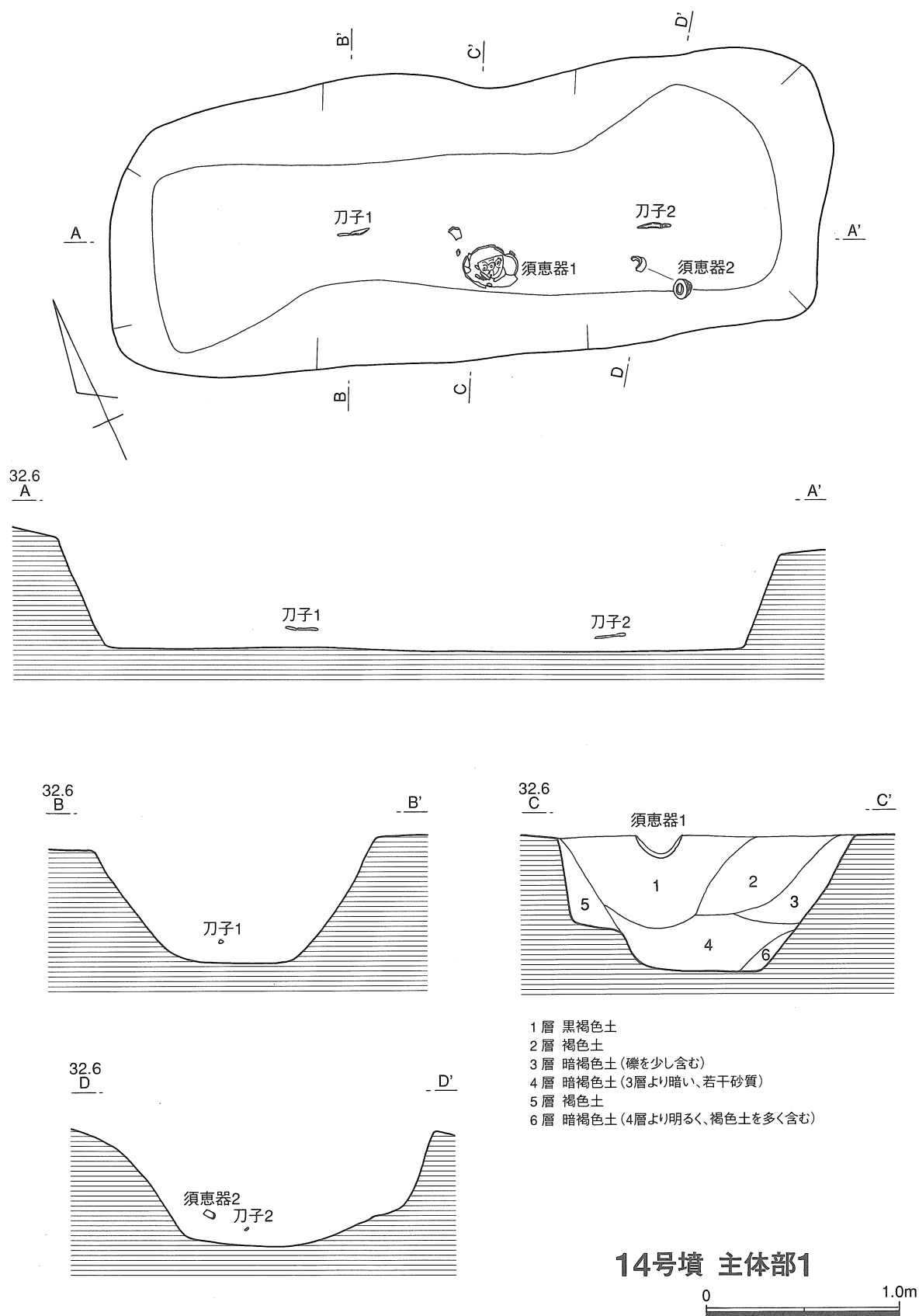


12号墳 主体部2

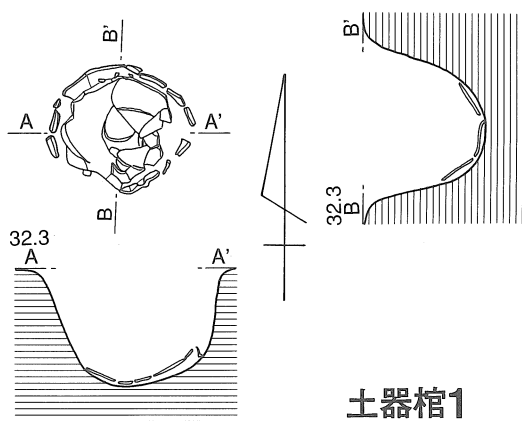
第124図 B 12号墳主体部2 実測図



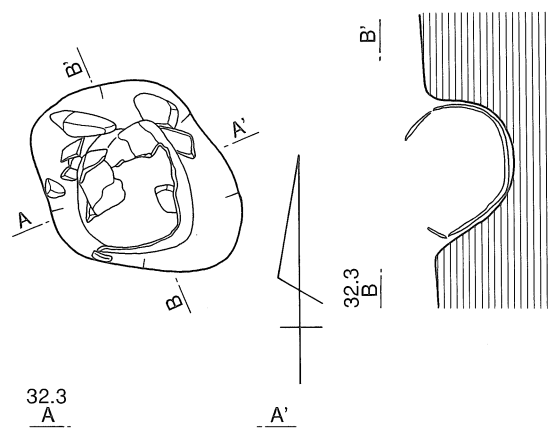
第125図 B 13・14号墳主体部実測図



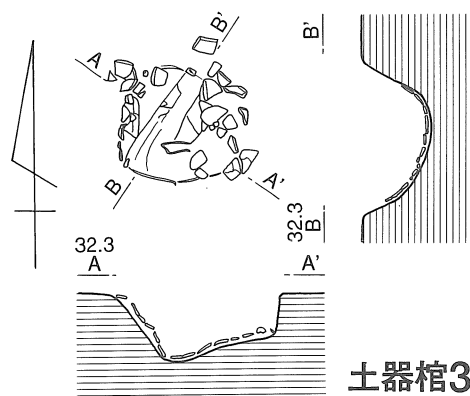
第126図 B 14号墳主体部1 実測図



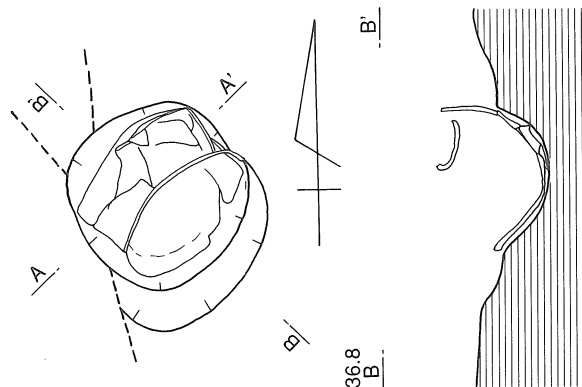
土器棺1



土器棺2

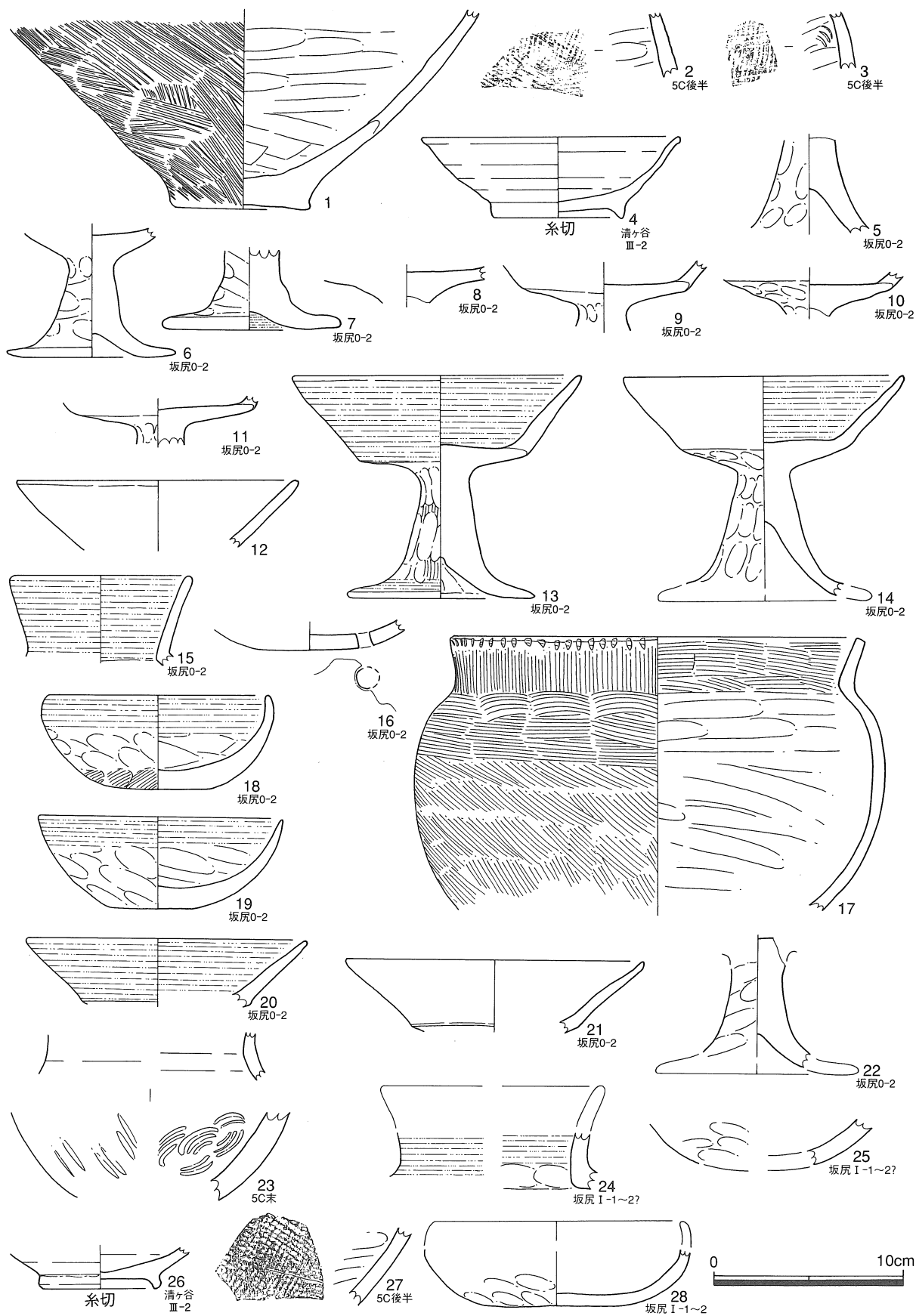


土器棺3



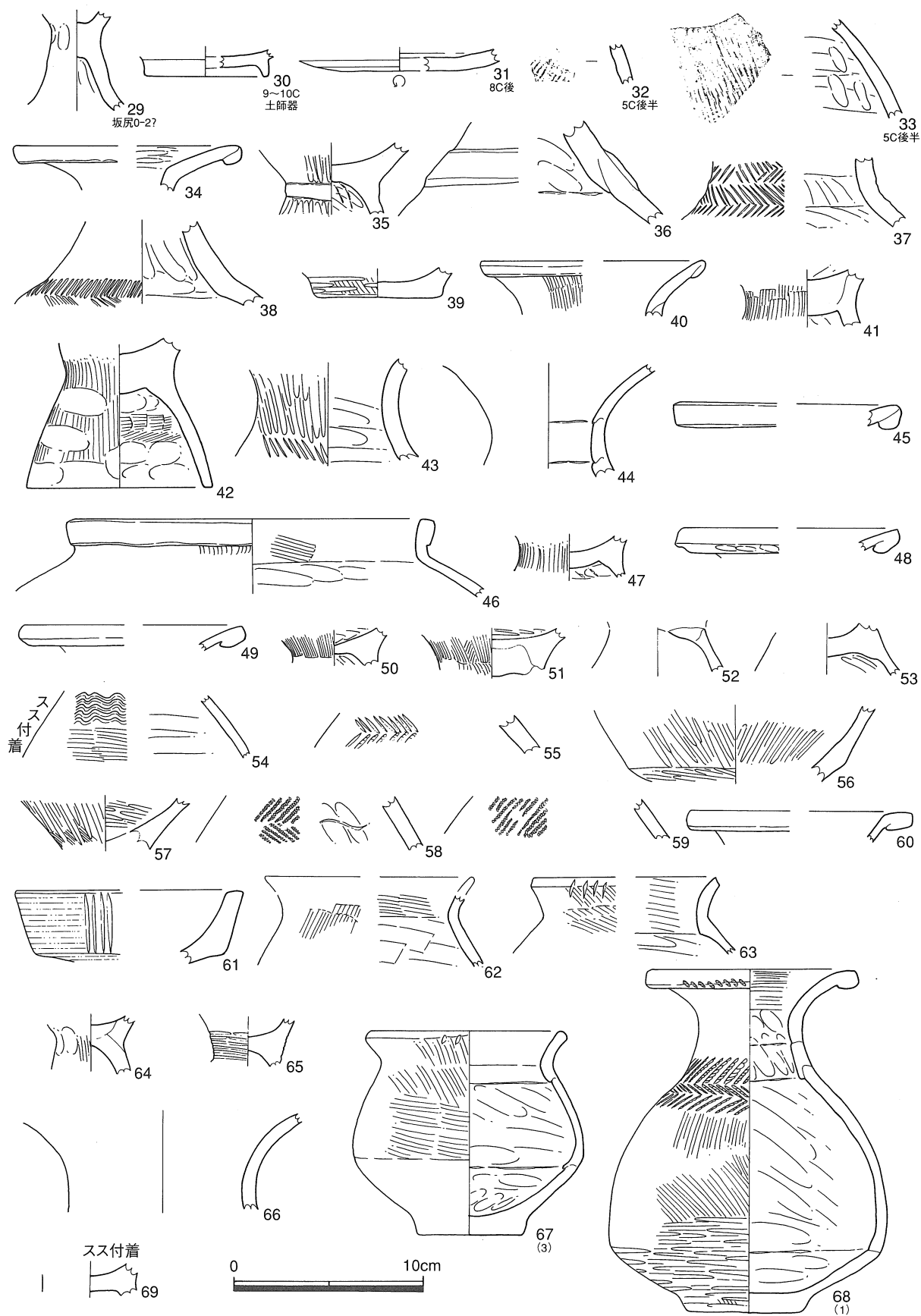
土器棺4

0 1.0m



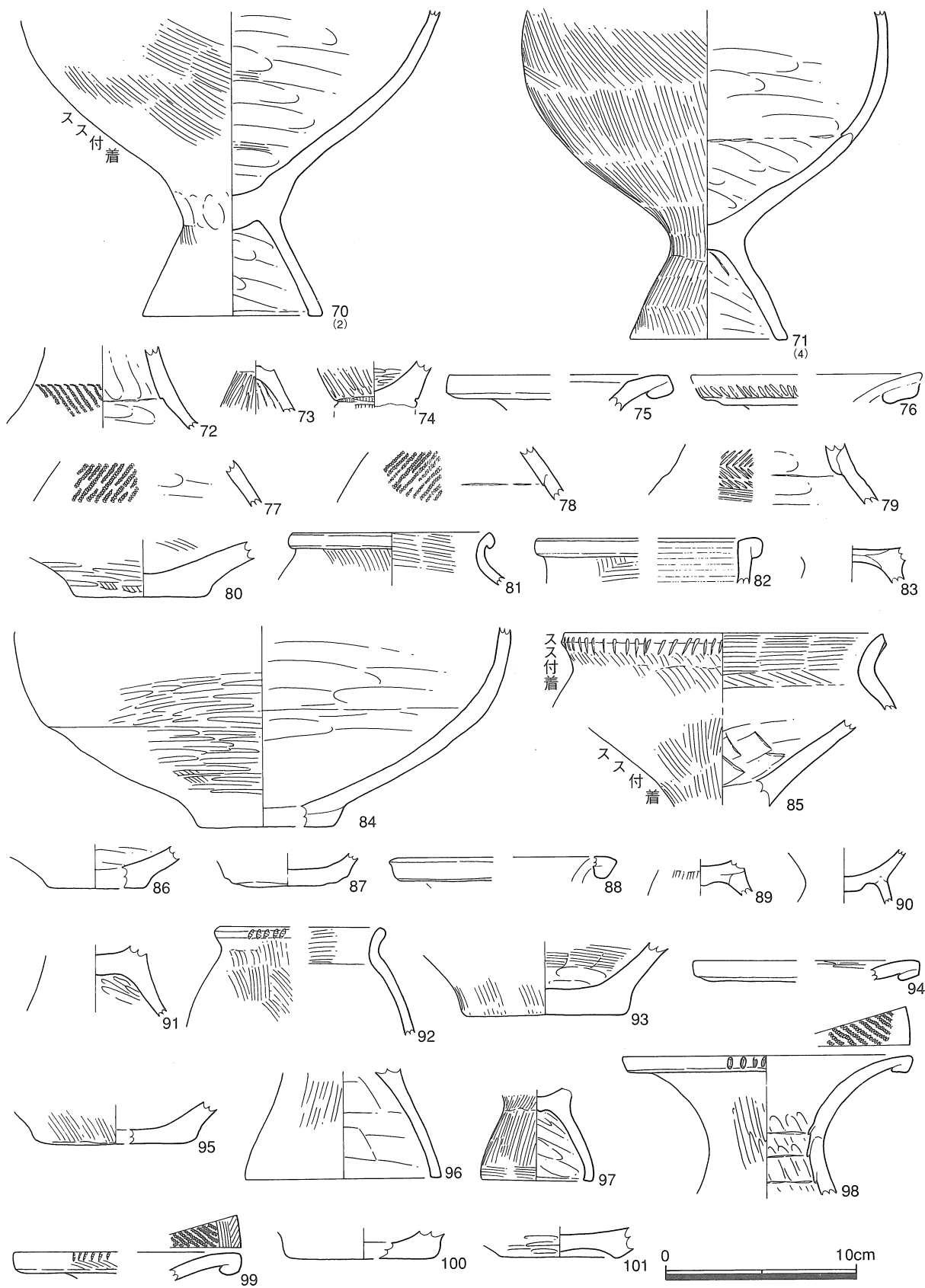
第128図 土器実測図1

A区 1=1号周溝墓東溝 18~23=4号墳墳頂 27=5号墳表土
 2・3=3号墳周溝上層 24・25=5号墳北スソ 28=5号墳墳丘北スソ
 4~17=4号墳墳丘北東 26=5号墳斜面



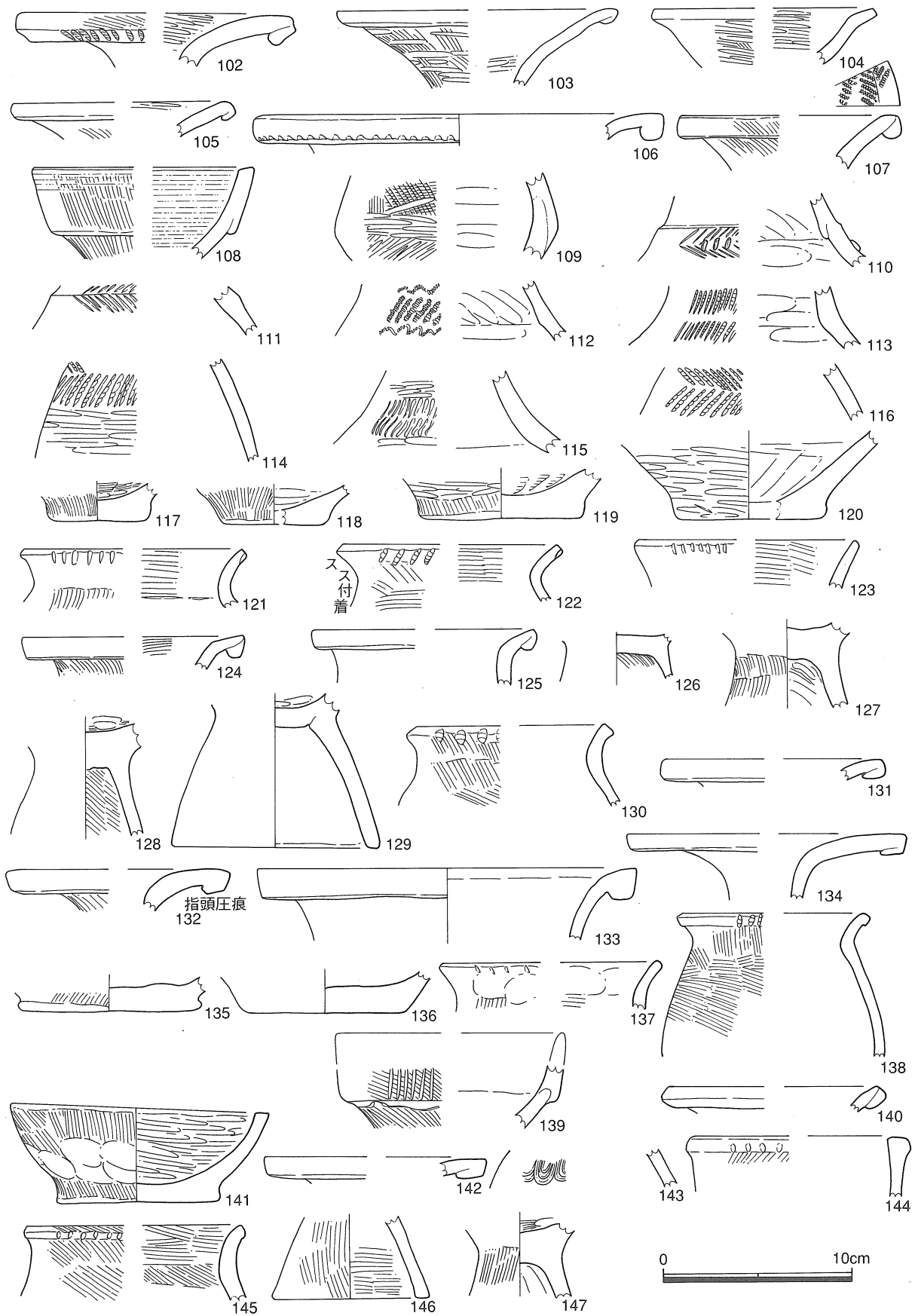
第129図 土器実測図2

A区 29・30=表土 31~33=表探 34~42=SB2 43=SB3 44~47=SB4 48~53=SB5 54・55=SB5・P3 56~63=SB6 64・65=SB7 66~69=SB7-A



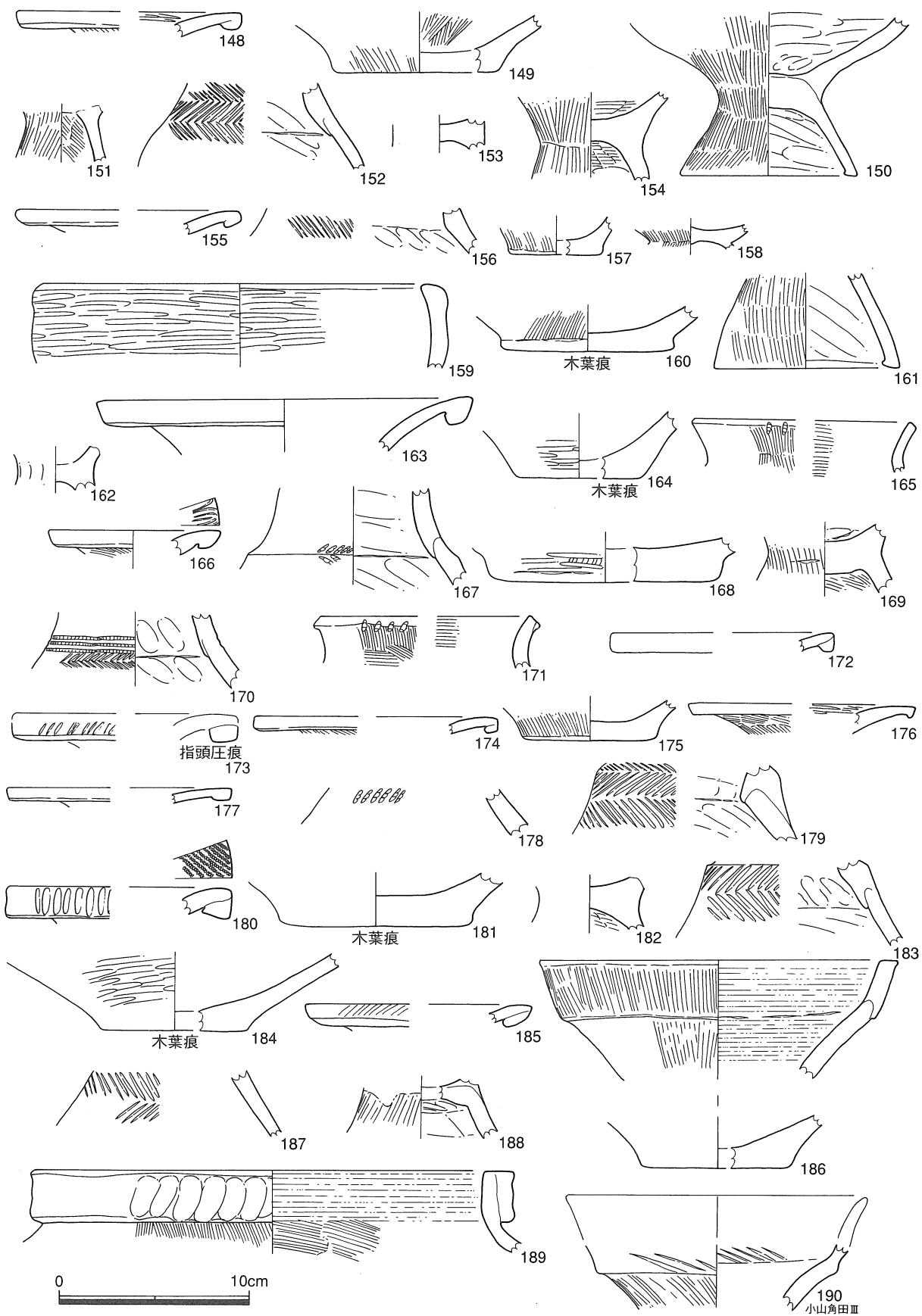
第130図 土器実測図 3

B区 70・71=SB7-A 84・85=SB7-C西壁清 94~96=SB8
 72=SB7-B・西壁清 86~92=SB7-C・D 97=SB9・P3
 73~83=SB7-A・B 93=SB7・P5 98=SB10
 99~101=SB11



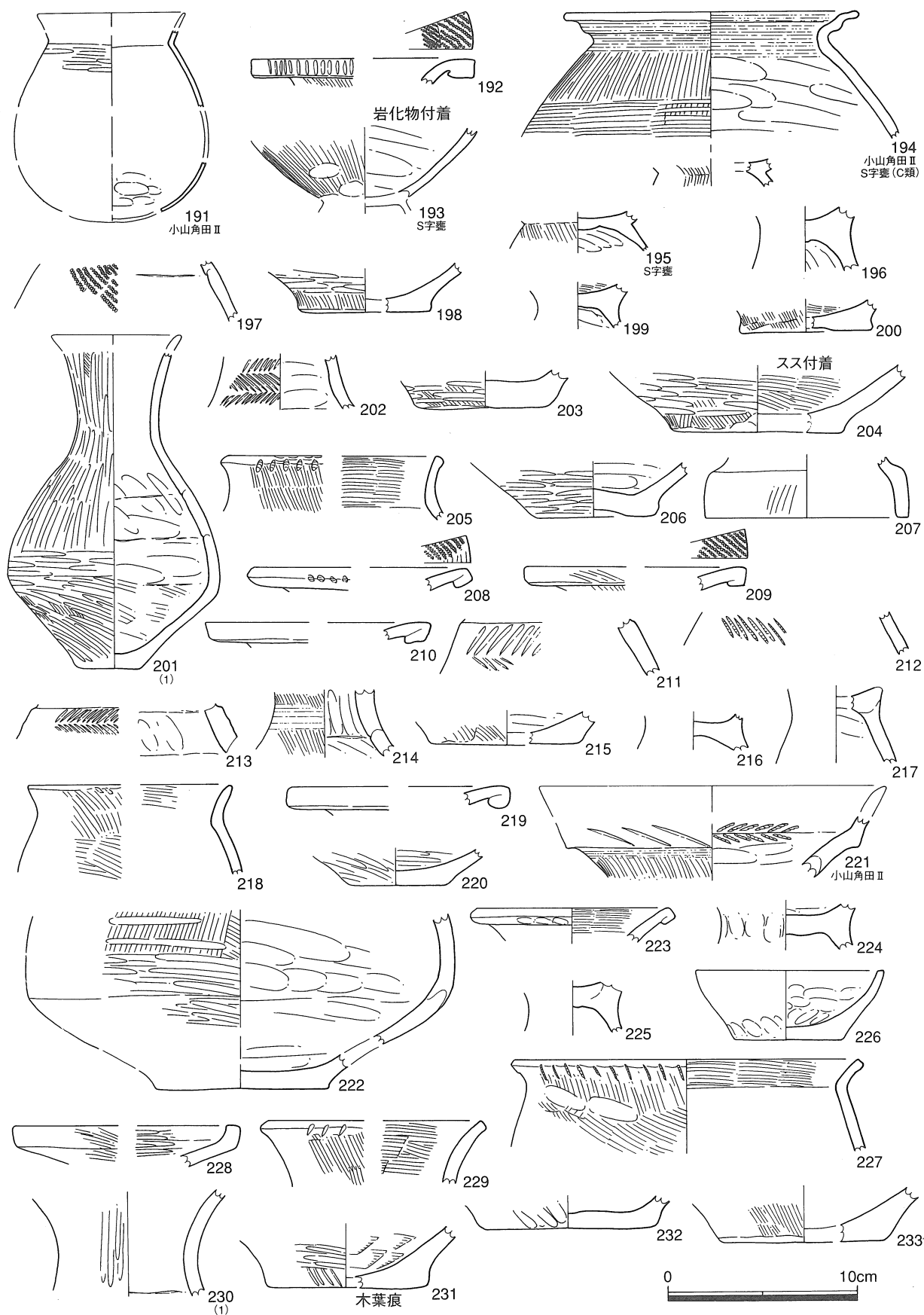
第131図 土器実測図 4

B区 102~129=SB12-A 139=SB12-C・P5
 130=SB12-B 140=SB12-C・P7
 131~138=SB12-C 141~147=SB12-D



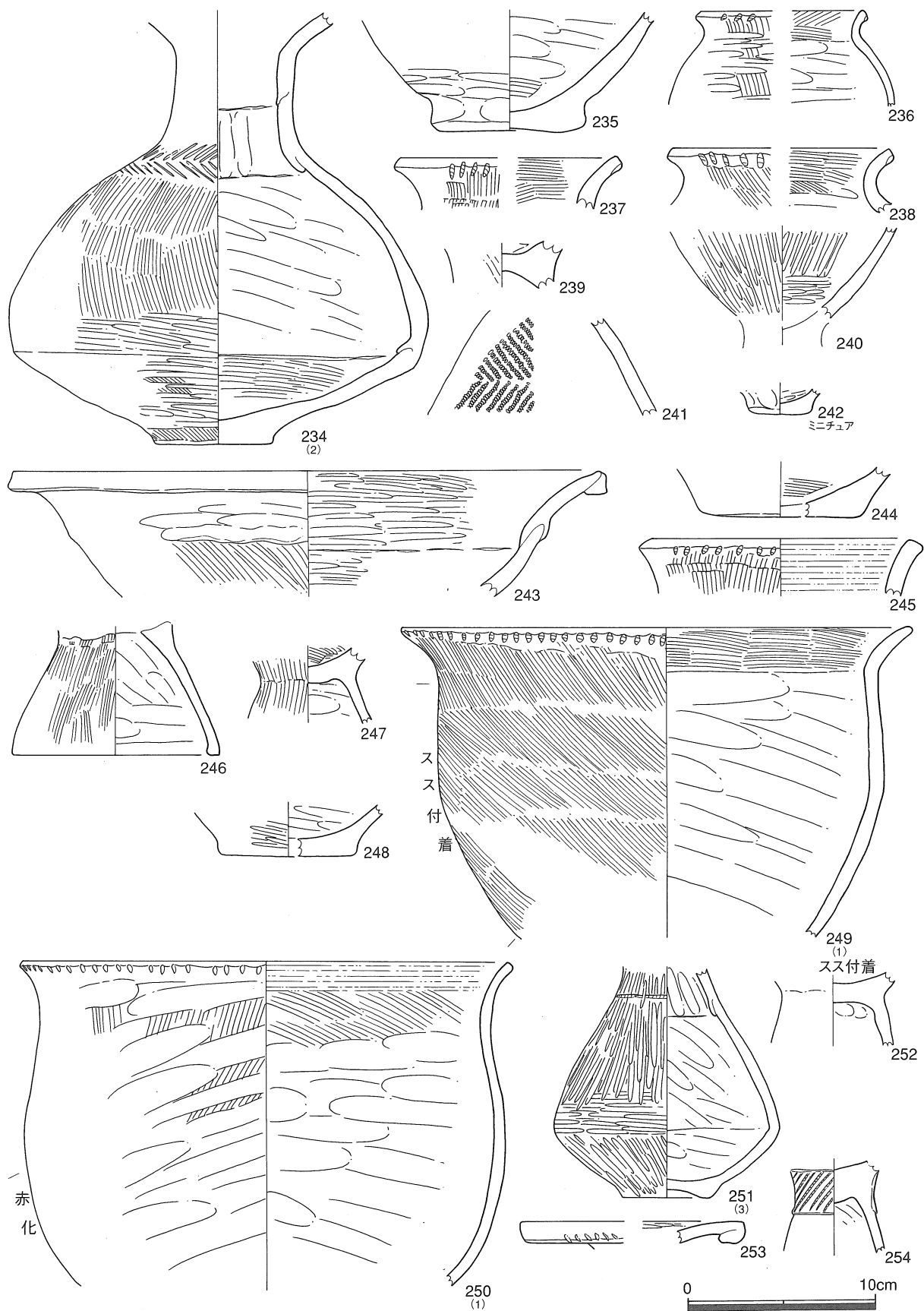
第132図 土器実測図5

B区 148・149=SB13 153・154=SB15 166~171=SB14~16削出 176~182=SB18
 150=SB13・P3 155~158=SB16 172・173=SB17・P1 183・184=SB17・18
 151=SB14 157~162=SB16削出 174=SB17・P4 185~189=SB19
 152=SB14壁溝 163~165=SB14~16削出・壁溝 175=SB17壁溝 190=SB19削出P5



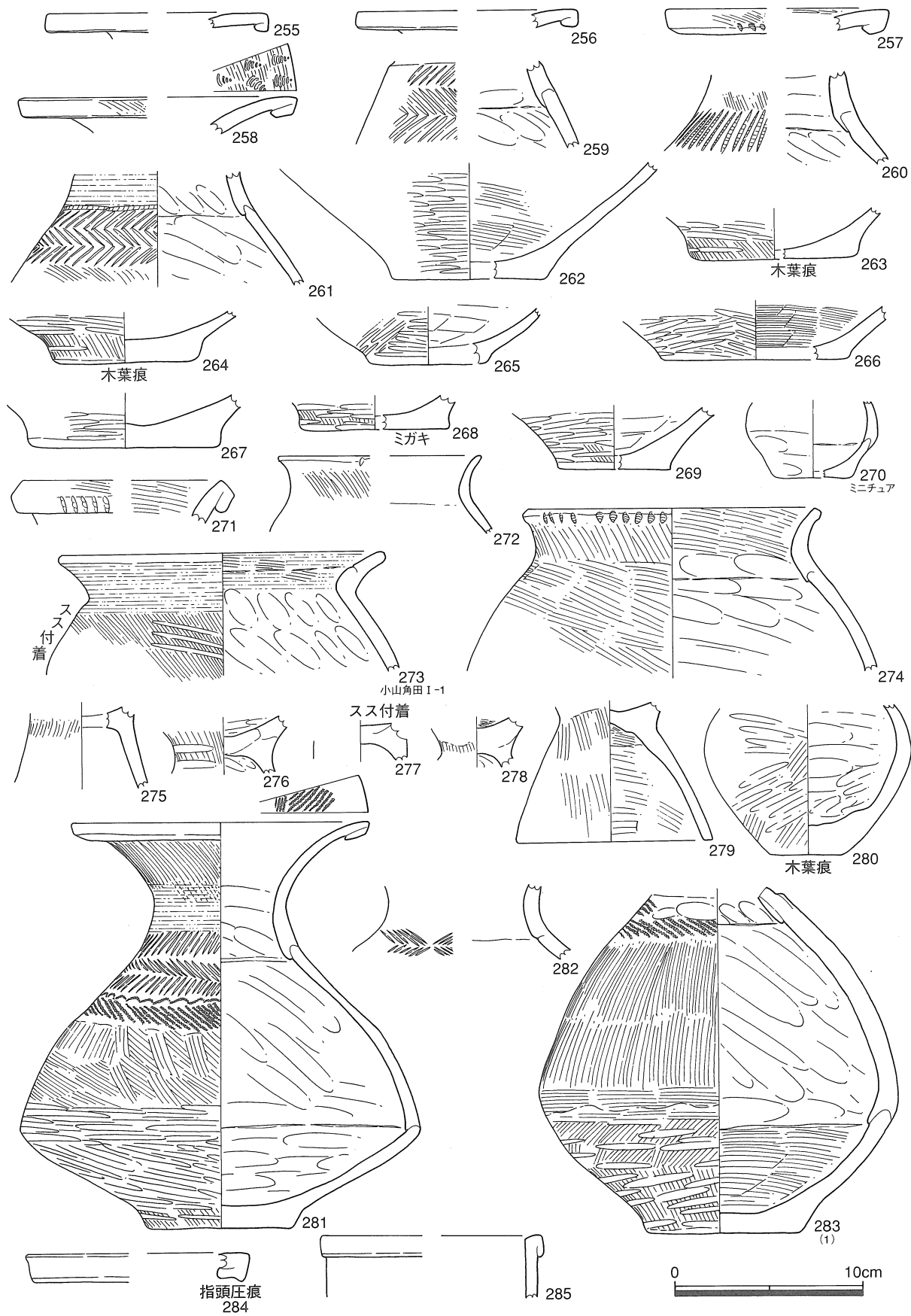
第133図 土器実測図 6

B区 191=SB19・削出P6 202~205=SB25-A 220=SB26-A・B 228=SB29
 192~196=SB19・削出 206=SB25-A・壁溝 221・222=SB27 229=SB29上層
 197~200=SB20 207~218=SB25-C 223~225=SB28 230~233=SB29-A
 201=SB21壁溝内 219=SB25-B・C 226・227=SB28-A



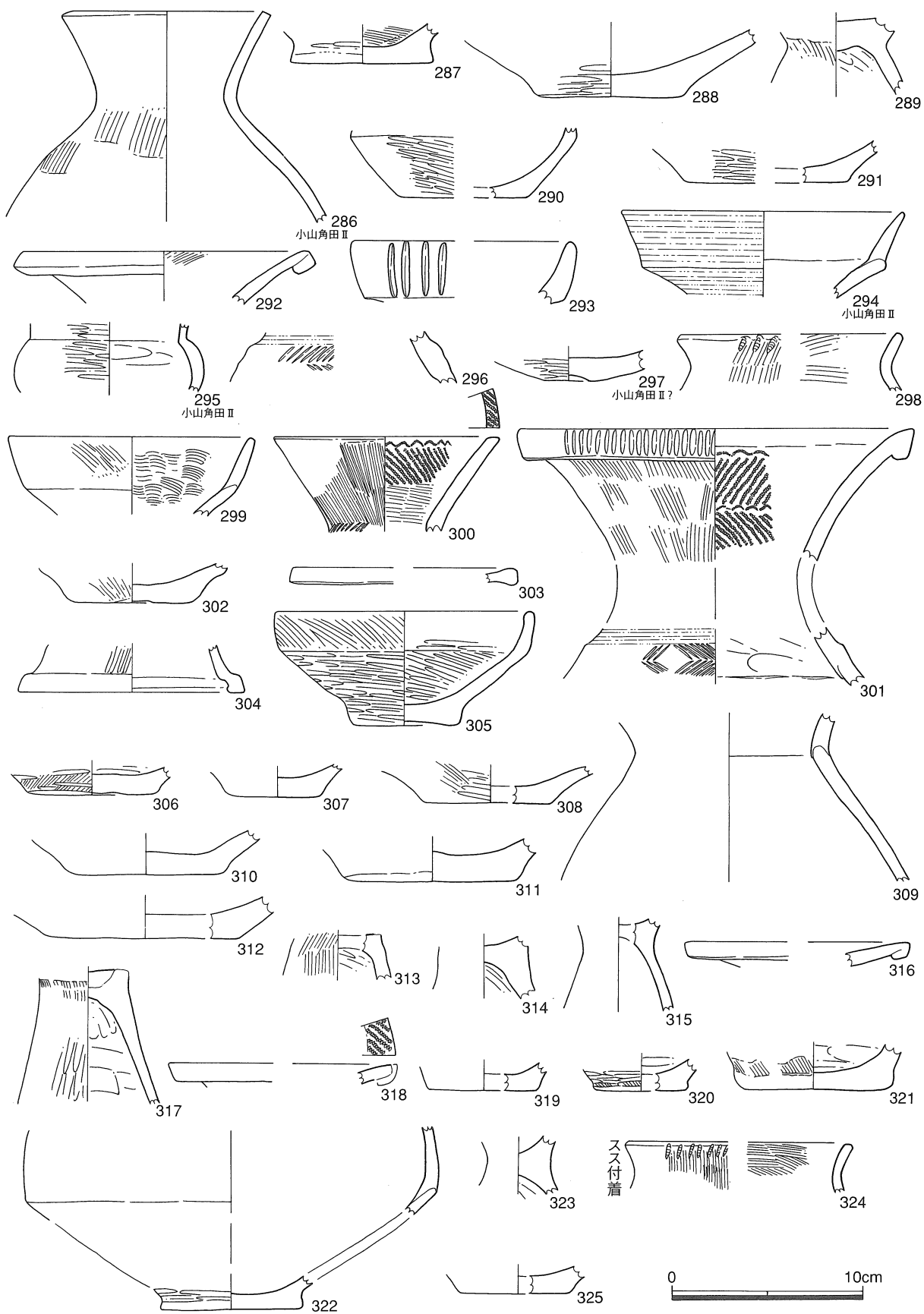
第134図 土器実測図 7

B区 234~239=SB29-A 248~250=SB29-B
 240~242=SB29-A床下 251・252=SB29-B壁溝
 243~247=SB29-A上層 253・254=SB30



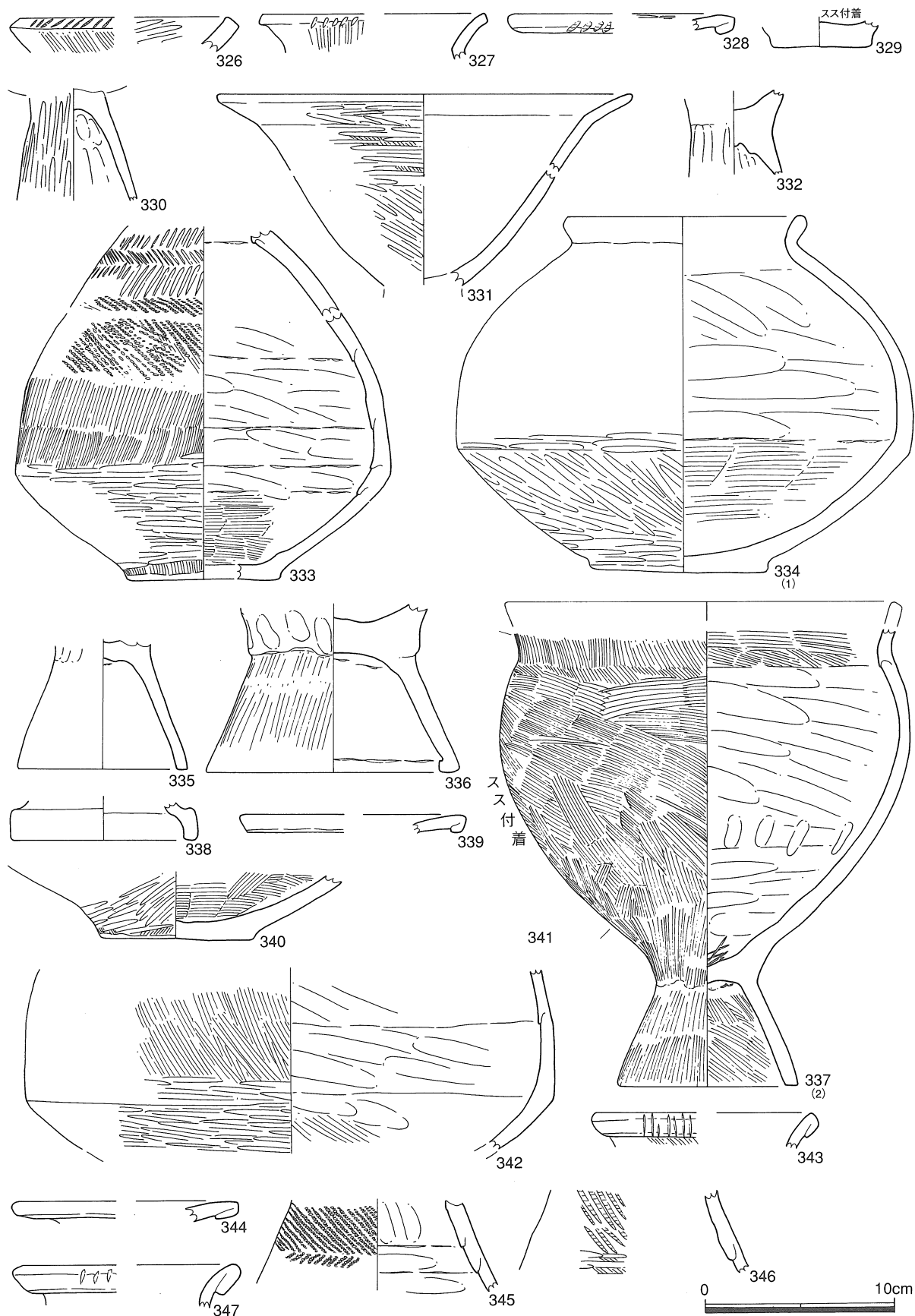
第135図 土器実測図 8

B区 255~280=SB30
281=SB30・P3
282~285=SB31



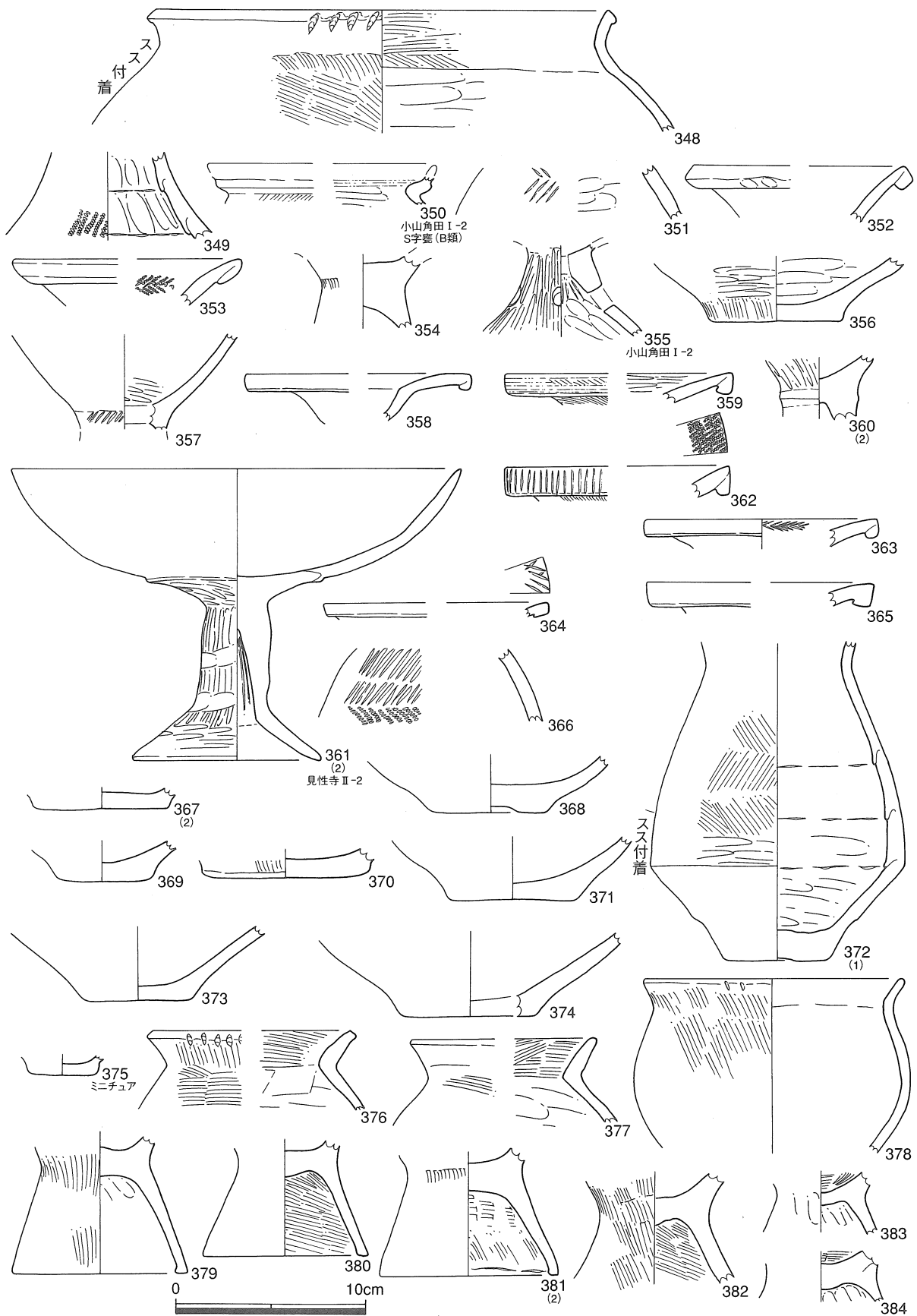
第136図 土器実測図 9

B区 286・287=SB31 290~291=SB32 303~315=SB36 325=SB39
 288=SB31下段 292~298=SB33 316~323=SB37
 289=SB31壁溝 299~302=SB35 324=SB38・P5



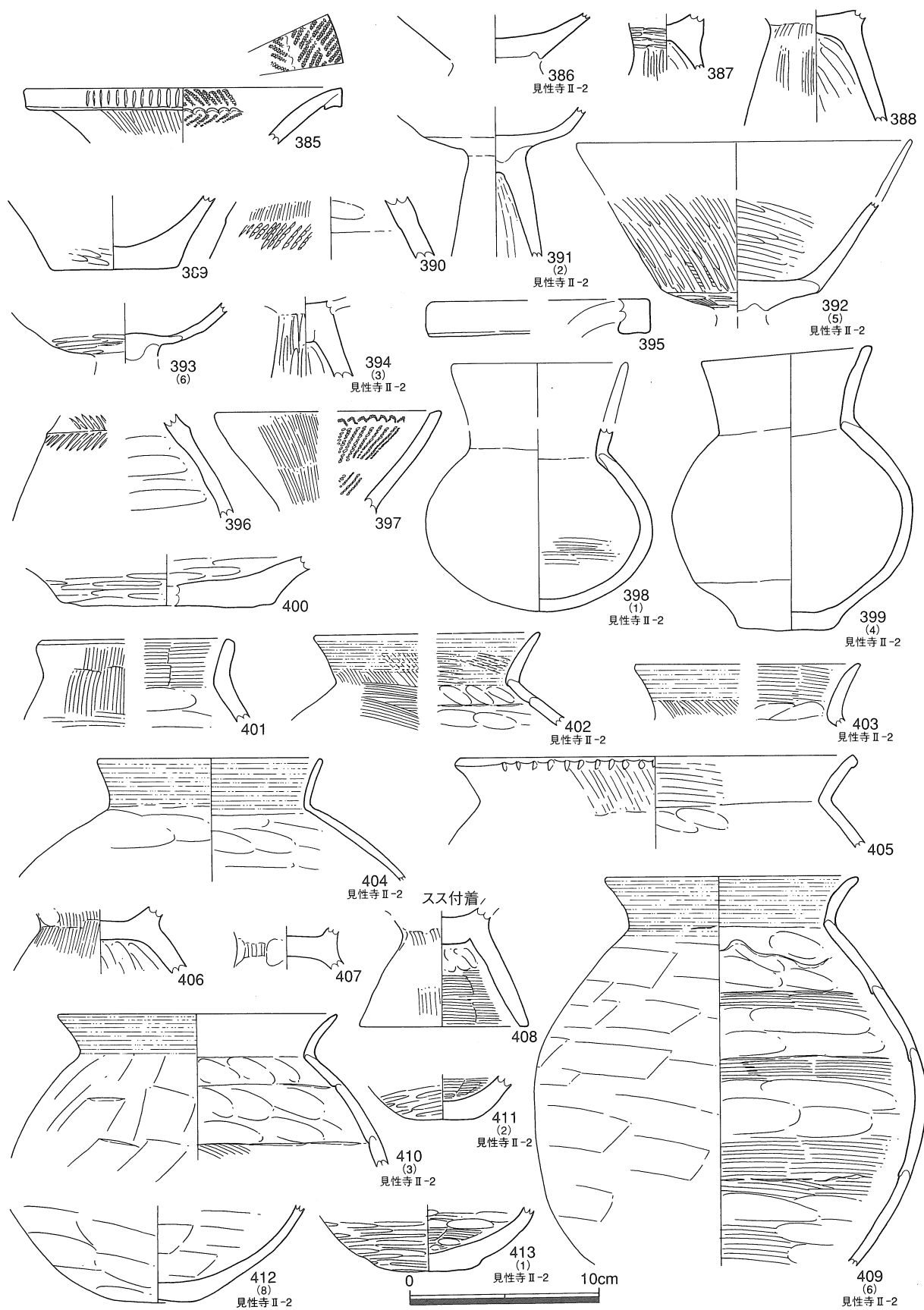
第137図 土器実測図10

B区 326~328=SB40 332~337=SB41
 329・330=SB40東部 338~343=SB41東部
 331=SB40南壁溝 344~347=SB41西部



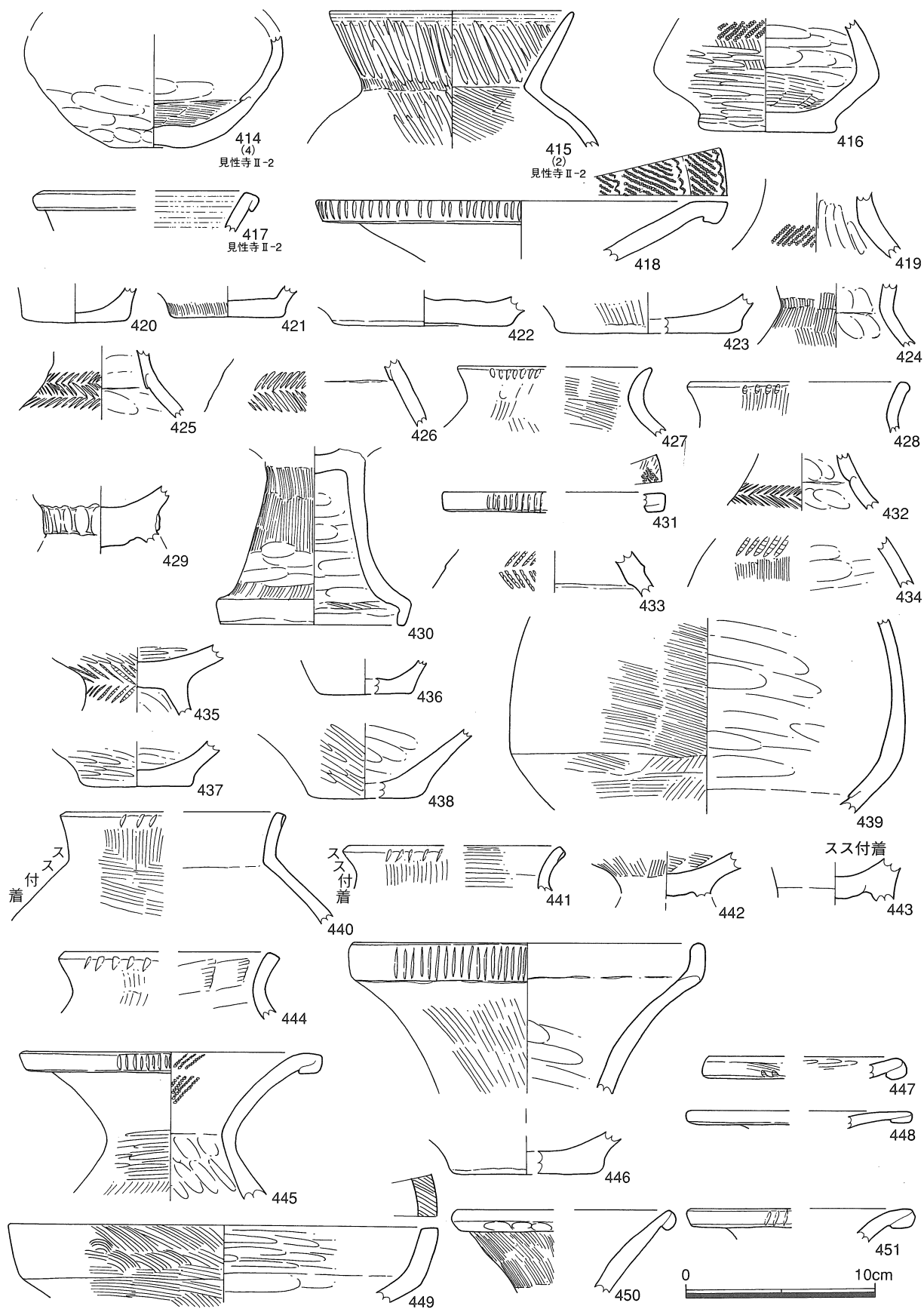
第138図 土器実測図11

B区 348=SB41・P5 351=SB42南部 354~355=SB42南東部下層
 349=SB42 352=SB42北部 356=SB42-A壁溝東
 350=SB42東部 353=SB42北東部 357~384=SB43



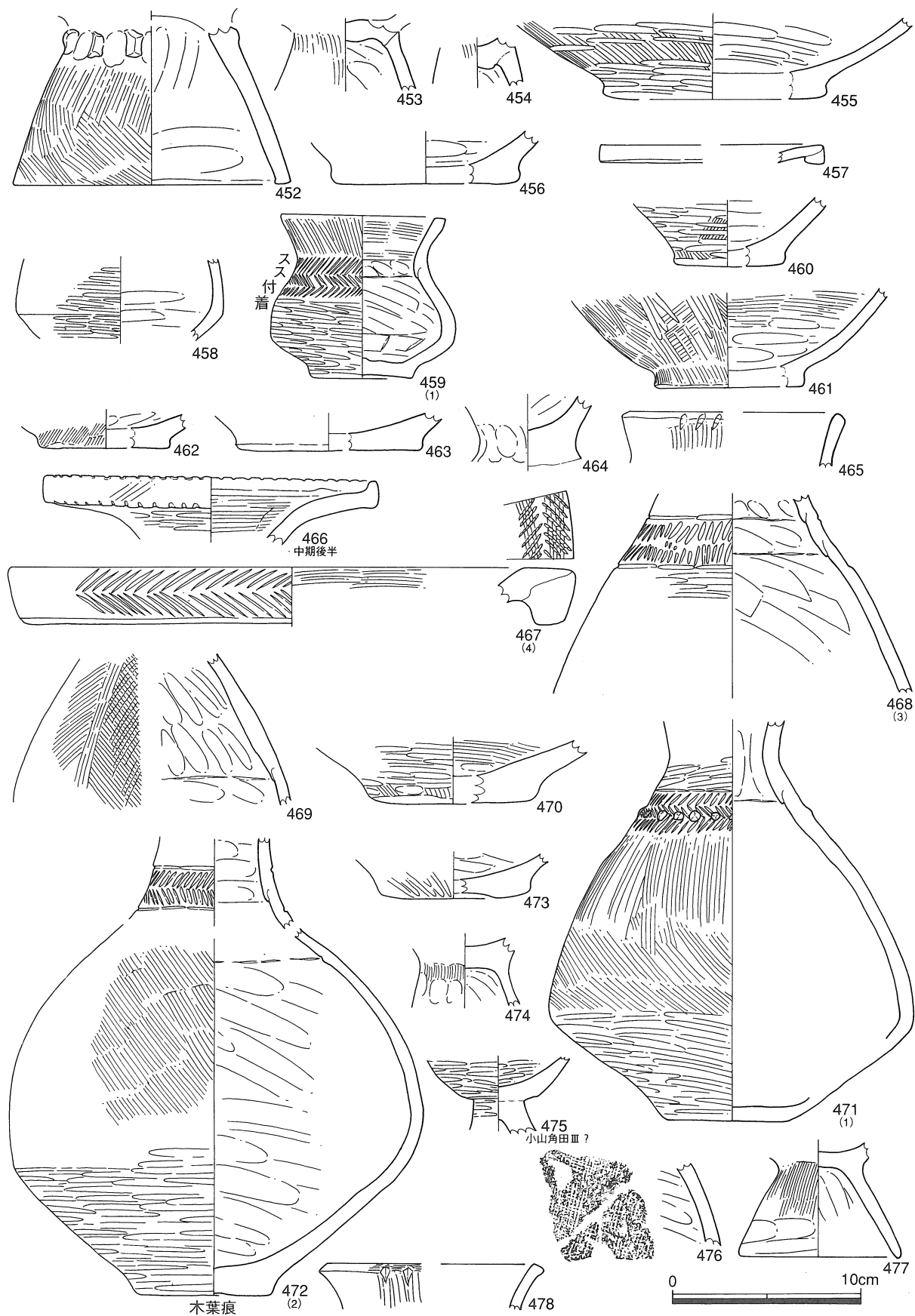
第139図 土器実測図12

B区 385~387=SB43北西部 390=SB44削出
 388=SB44東部 391~413=SB45
 389=SB44西部



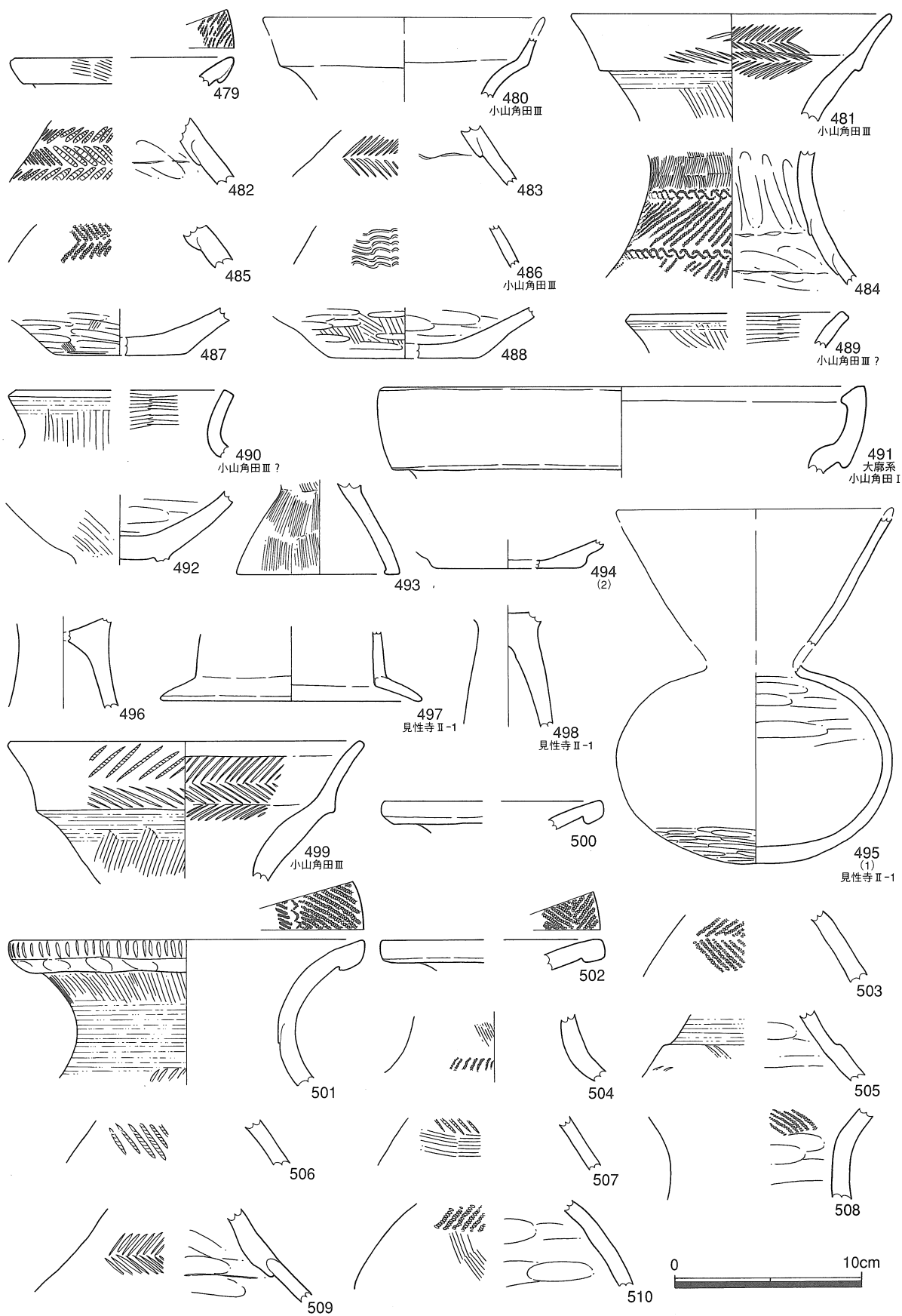
第140図 土器実測図13

B区 414・415=SB45 419~424=SB46 445=SB48
 416=SB45・P1 425~428=SB46削出 446=SB49
 417・418=SB45削出 429~444=SB47 447~451=SB50東部



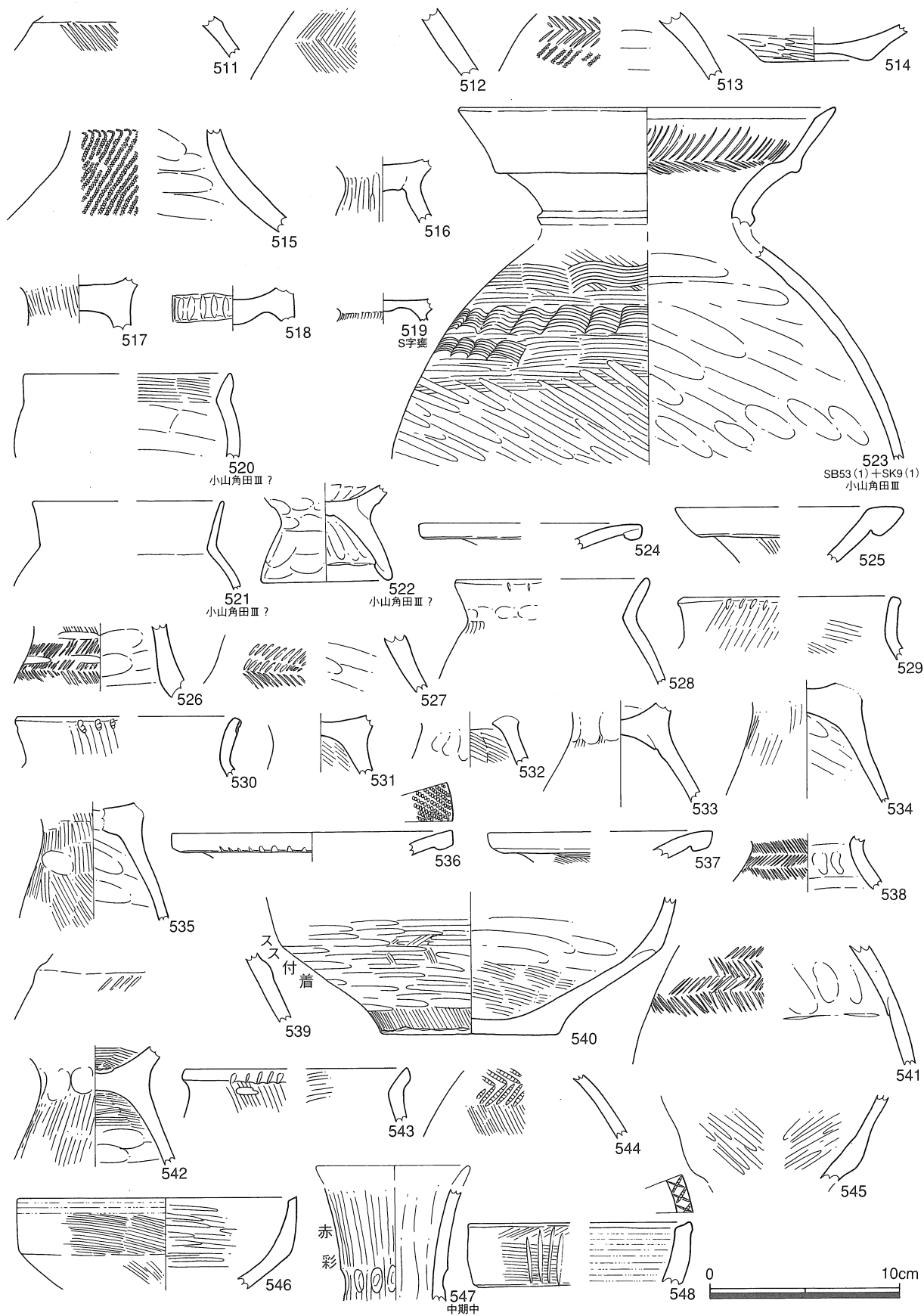
第141図 土器実測図14

B区 452~454=SB50東部 457=SB50-P2 460~465=SB49・50削出
 455=SB50西部 458=SB50-A・P3 466~474=SB51
 456=SB50・P1 459=SB50-A 475~478=SB51西部



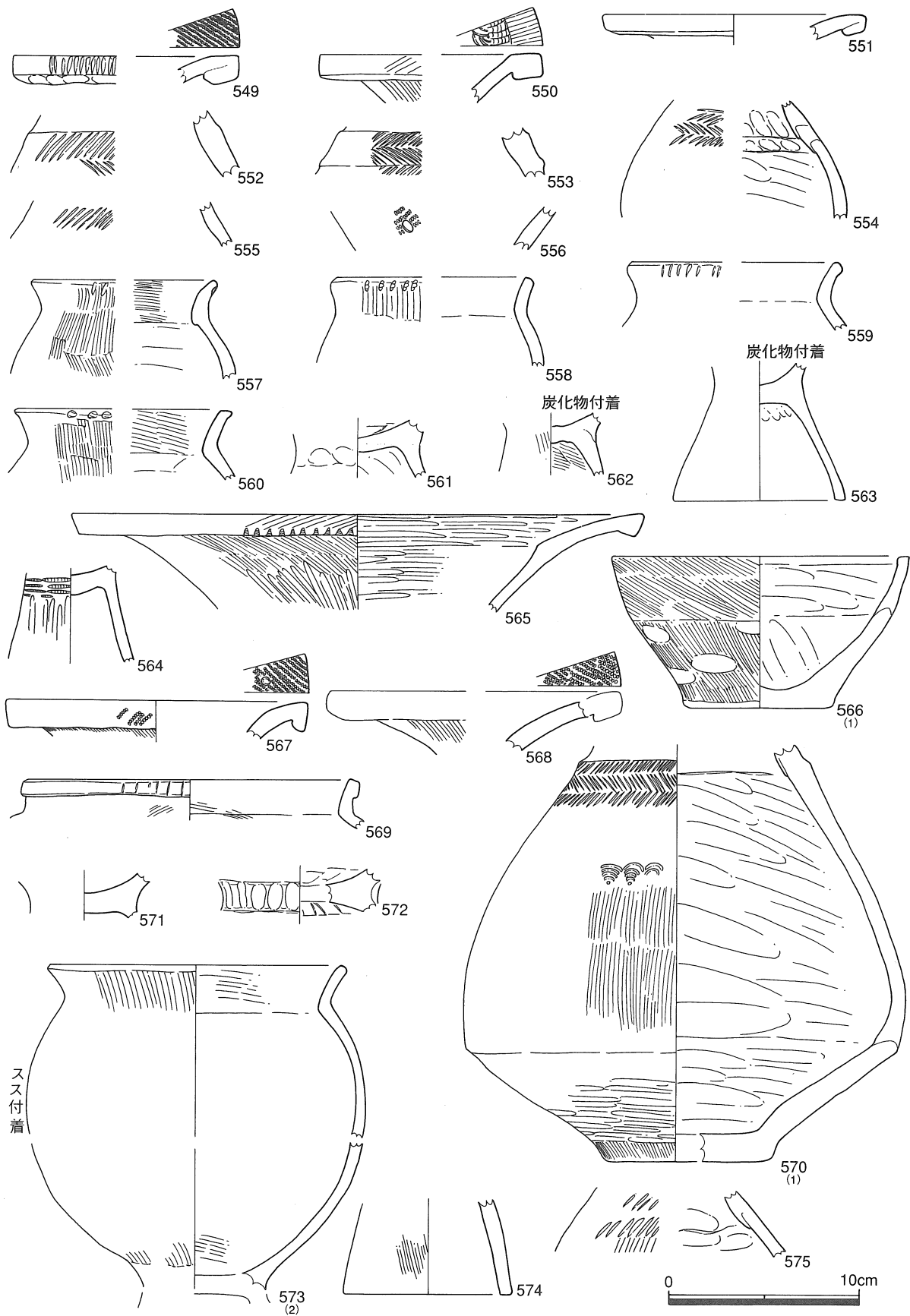
第142図 土器実測図15

B区 479~492=SB52・西部 496~510=SB53-A
493=SB51・52削出
494・495=SB53



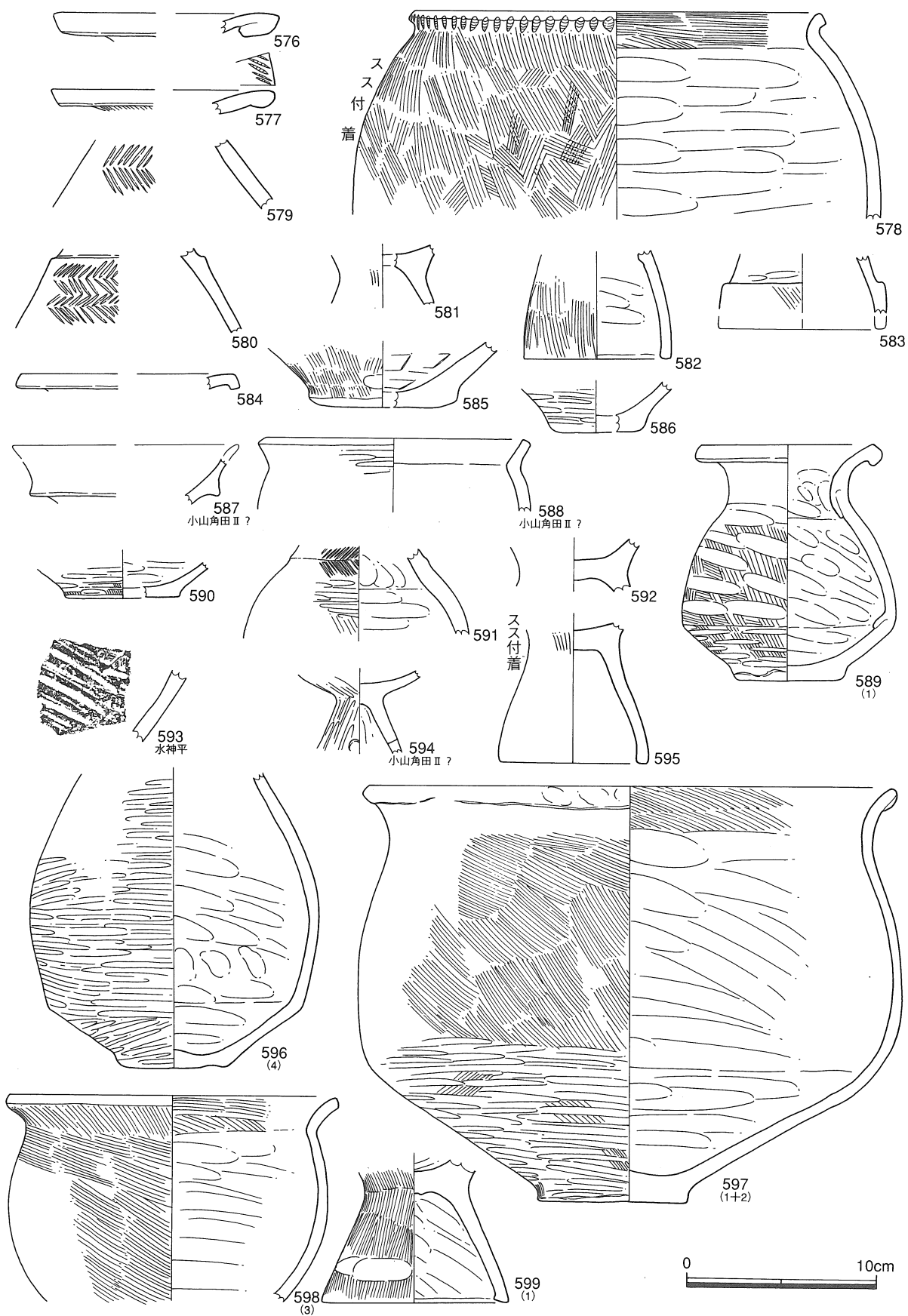
第143図 土器実測図16

B区 511~522=SB53-A 536~543=SB54-A
 523=SB53+SK9 544=SB54-B
 524~535=SB54 545~548=SB54・88削出



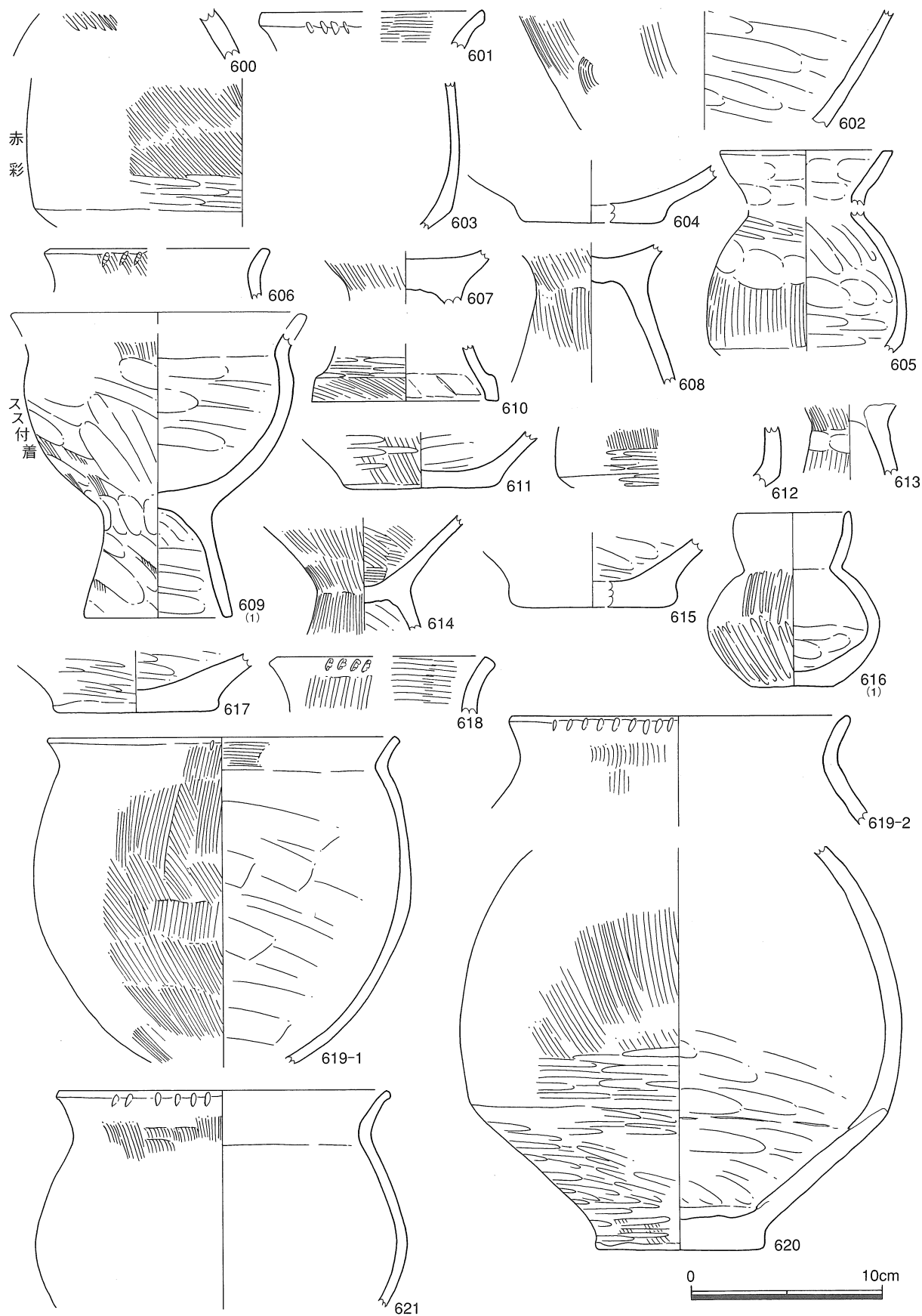
第144図 土器実測図17

B区 549~563=SB54・88削出
564~574=SB55
575=SB55東部



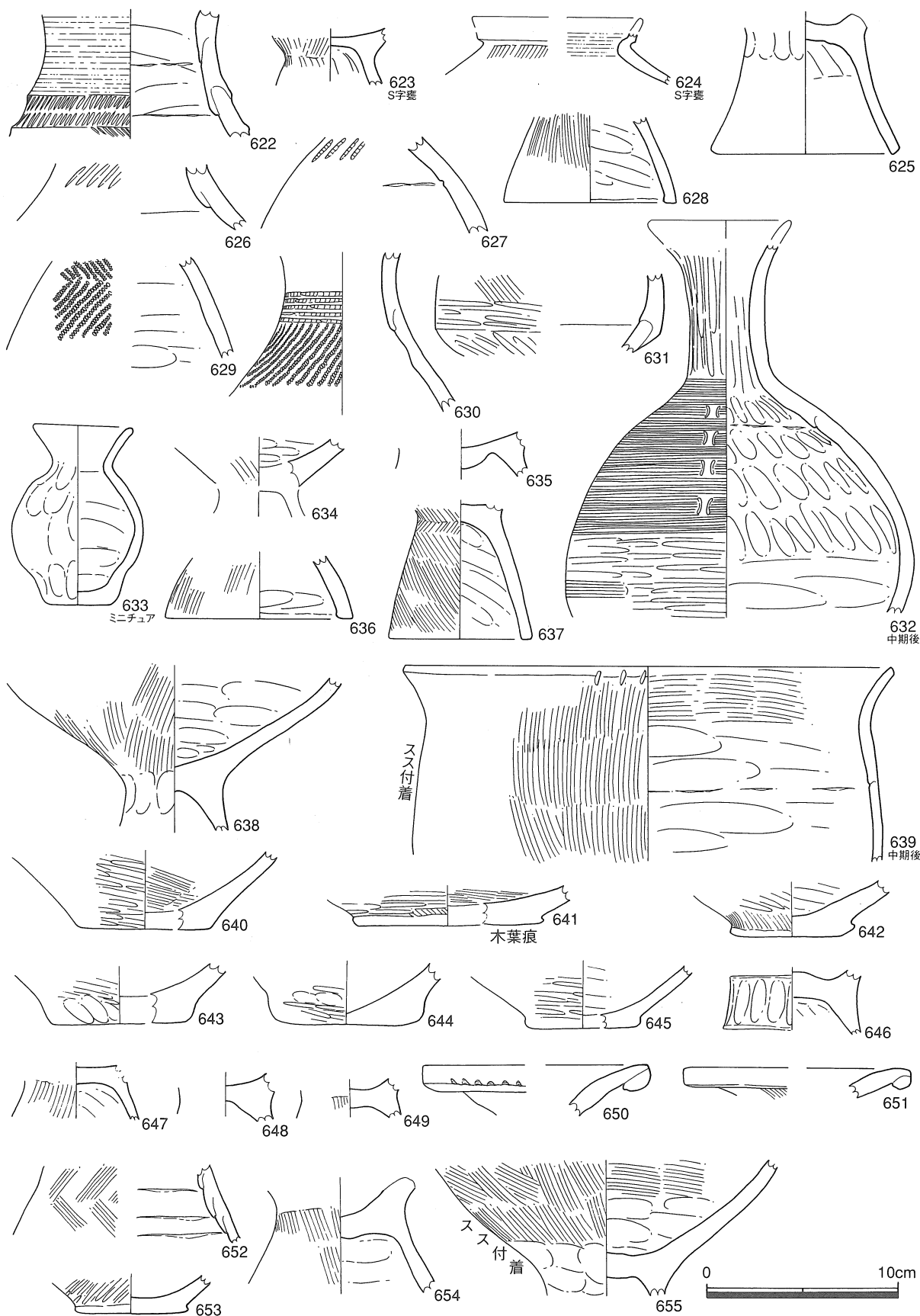
第145図 土器実測図18

B区 576~578=SB56
579~582=SB57-A
583=SB57-A・P5
584=SB57-B
585・586=SB57-B・P3
587=SB58-A
588~593=SB58-B
594=SB58-B・P1
595=SB58-B・P3
596~598=SB59
599=SB60



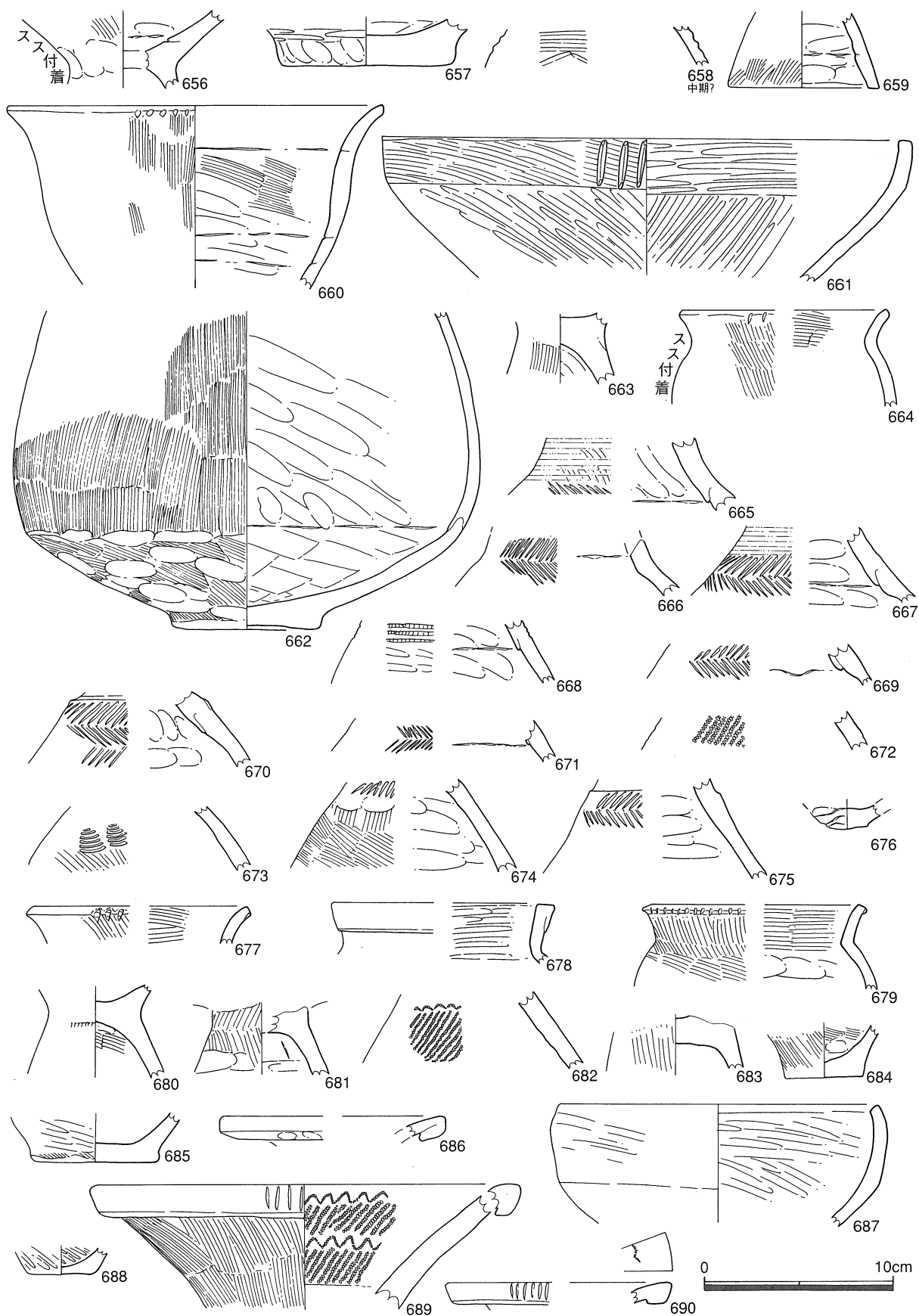
第146図 土器実測図19

B区 600~602=SB61-B 615~618=SB61-F 621=SB62-A・P3
 603~609=SB61-C 619-1・619-2=SB62
 610~614=SB61-D 620=SB62-A



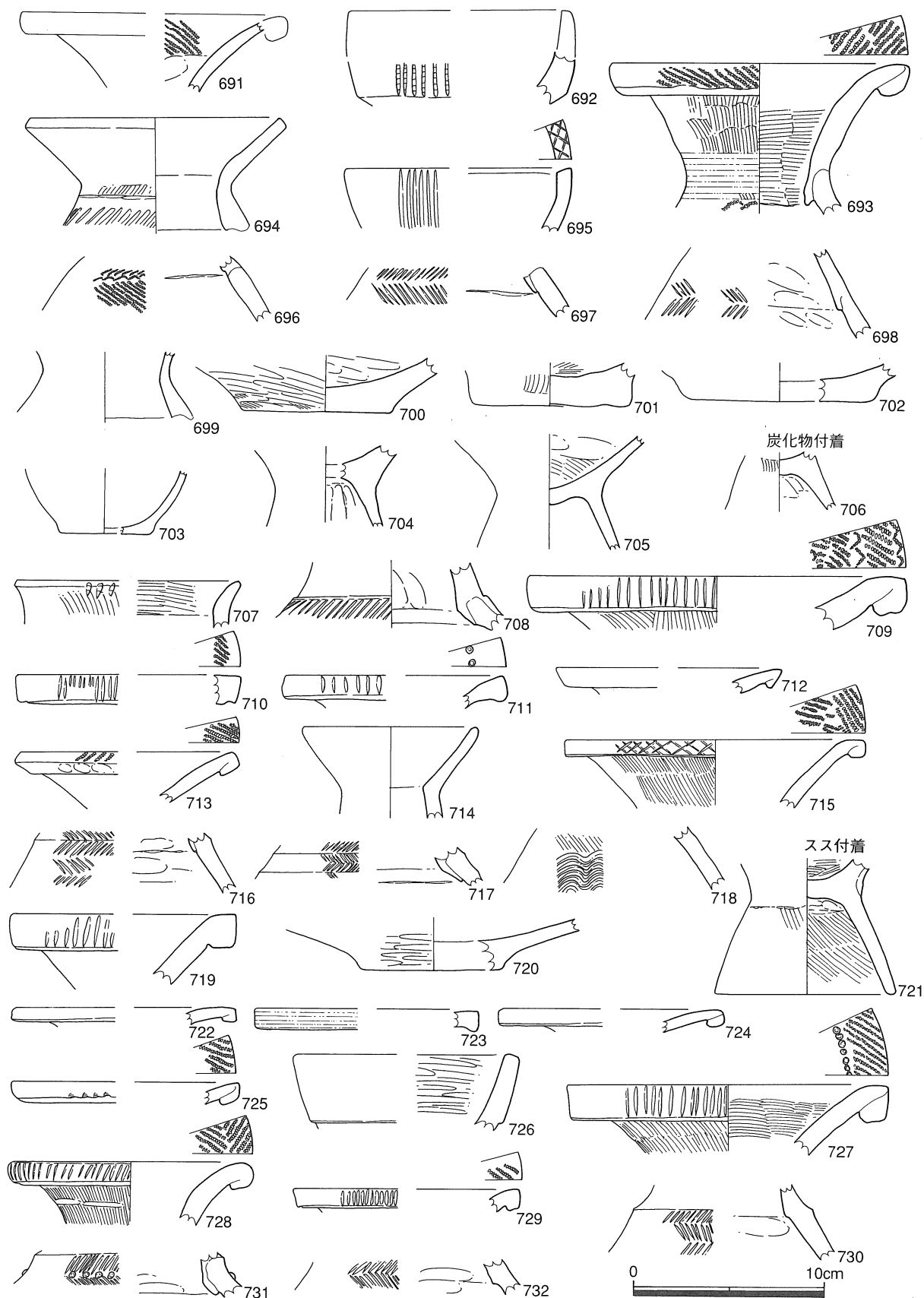
第147図 土器実測図20

B区 622~625=SB62-A・B 640~649=SB63上層
 626~628=SB62-C 650~654=SB63削出
 629~639=SB63 655=SB64



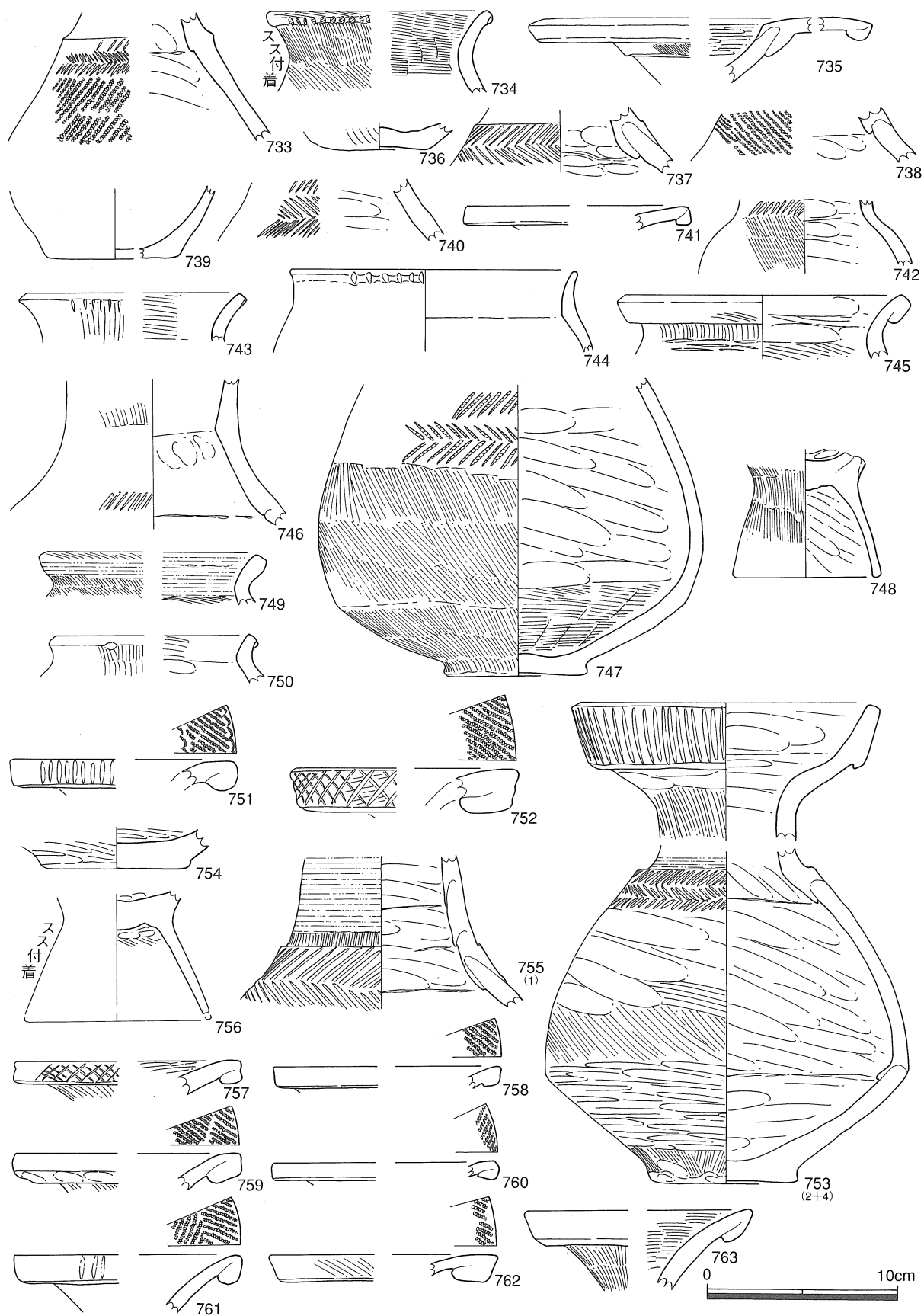
第148図 土器実測図21

B区 656=SB64 663・664=SB66 683=SB67-A
 657~660=SB64か? 665~681=SB67 684・685=SB67-B
 661・662=SB65 682=SB67・P5 686~690=SB68



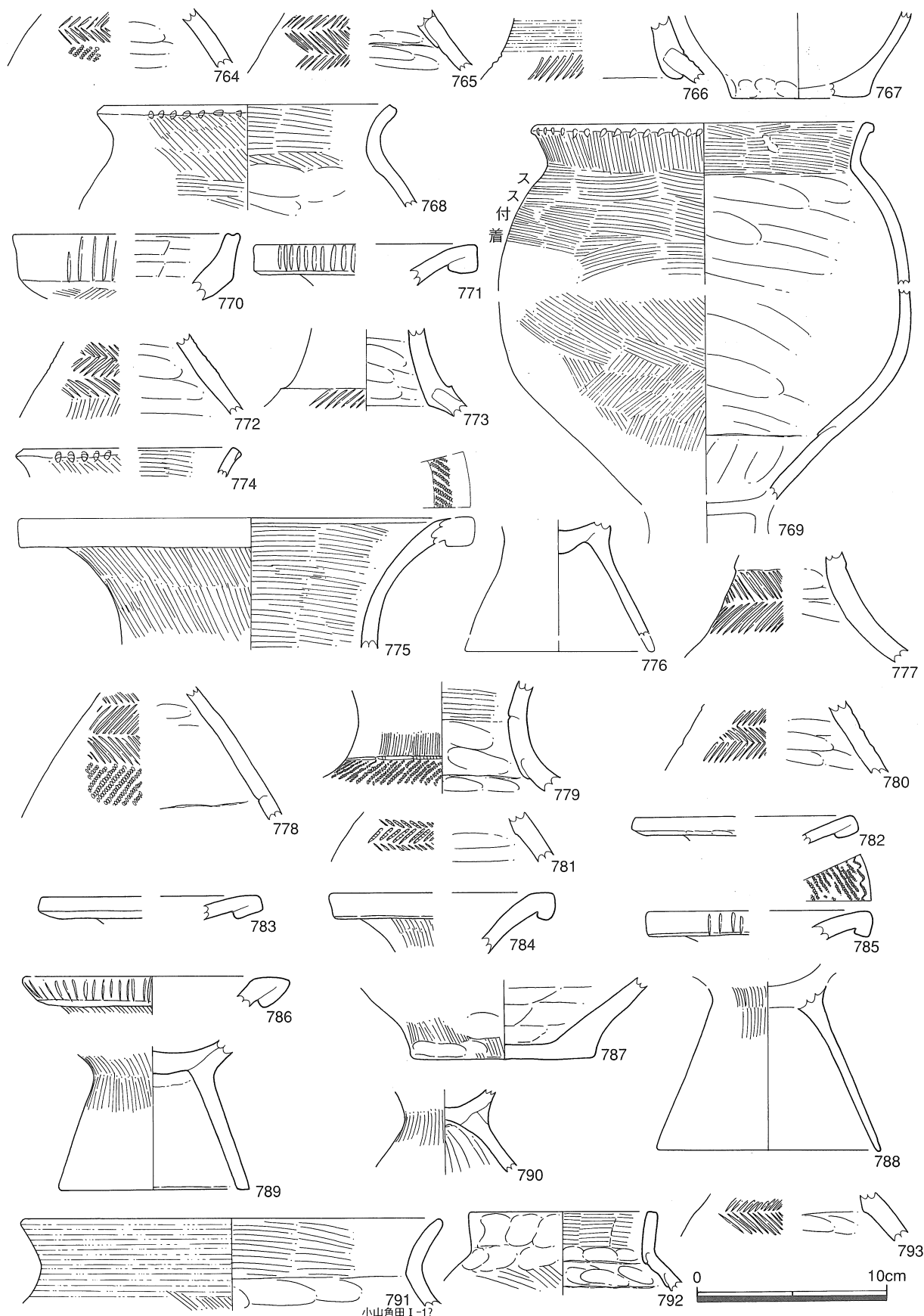
第149図 土器実測図22

B区 691~707=SB68
 708=SB68 フク土上層
 709=SB68 フク土
 710~718=SB69
 719=SB69・P5
 720・721=SB69・P6
 722~724=SB69南東削出
 725~728=SB69南面削出
 729~732=SB69-A壁清



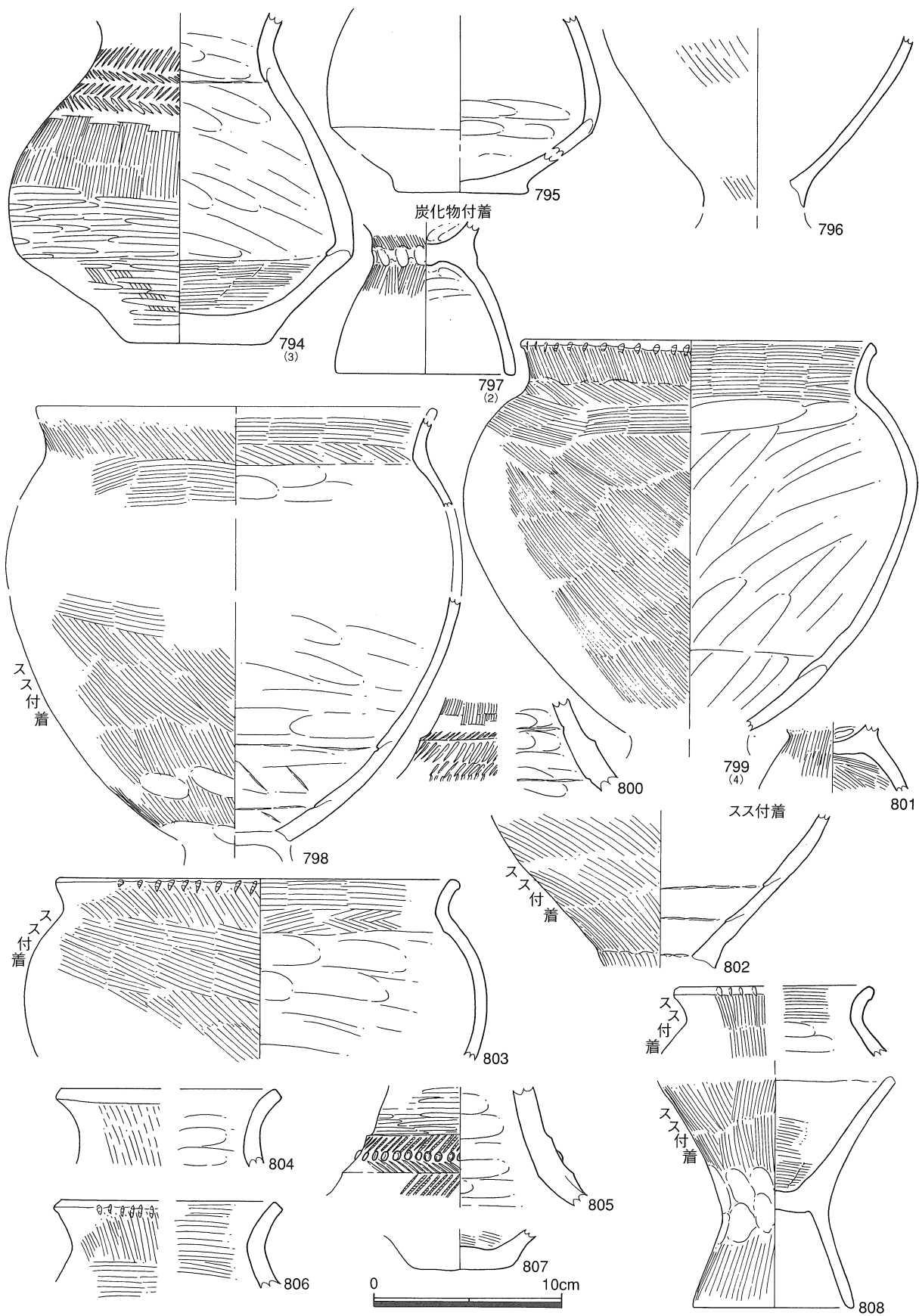
第150図 土器実測図23

B区 733・734=SB69-A壁清 741~743=SB69-B壁清 751~756=SB72
 735=SB69-A壁清南面削出 744・745=SB69-B西側削出 757~763=SB73
 736~740=SB69-B 746~750=SB70



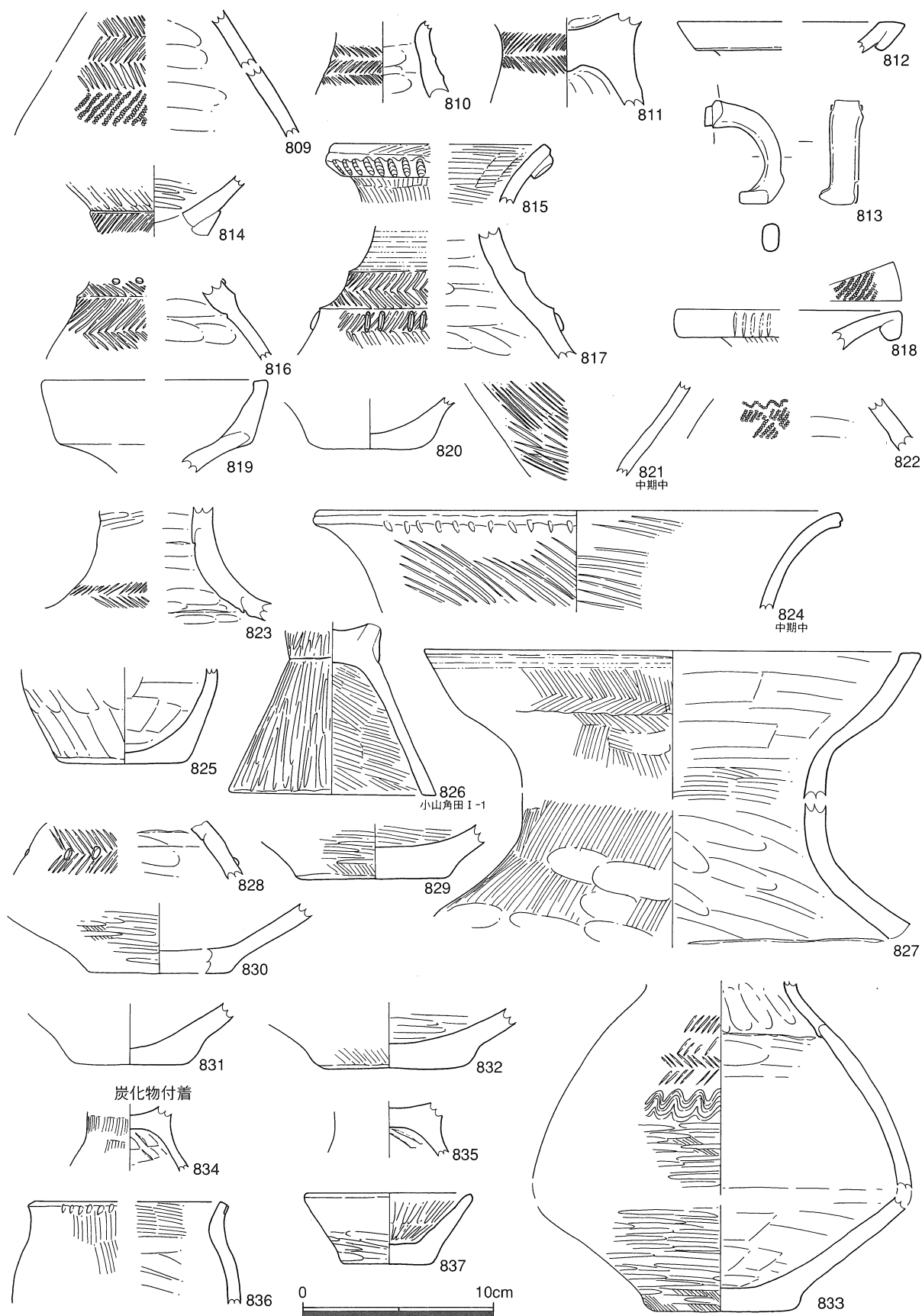
第151図 土器実測図24

B区 764~768=SB73
 769=SB73・P5
 770~774=SB73北西床面削出
 775=SB75北東
 776=SB77
 777~790=SB78
 791・792=SB78壁清内
 793=SB78南削出



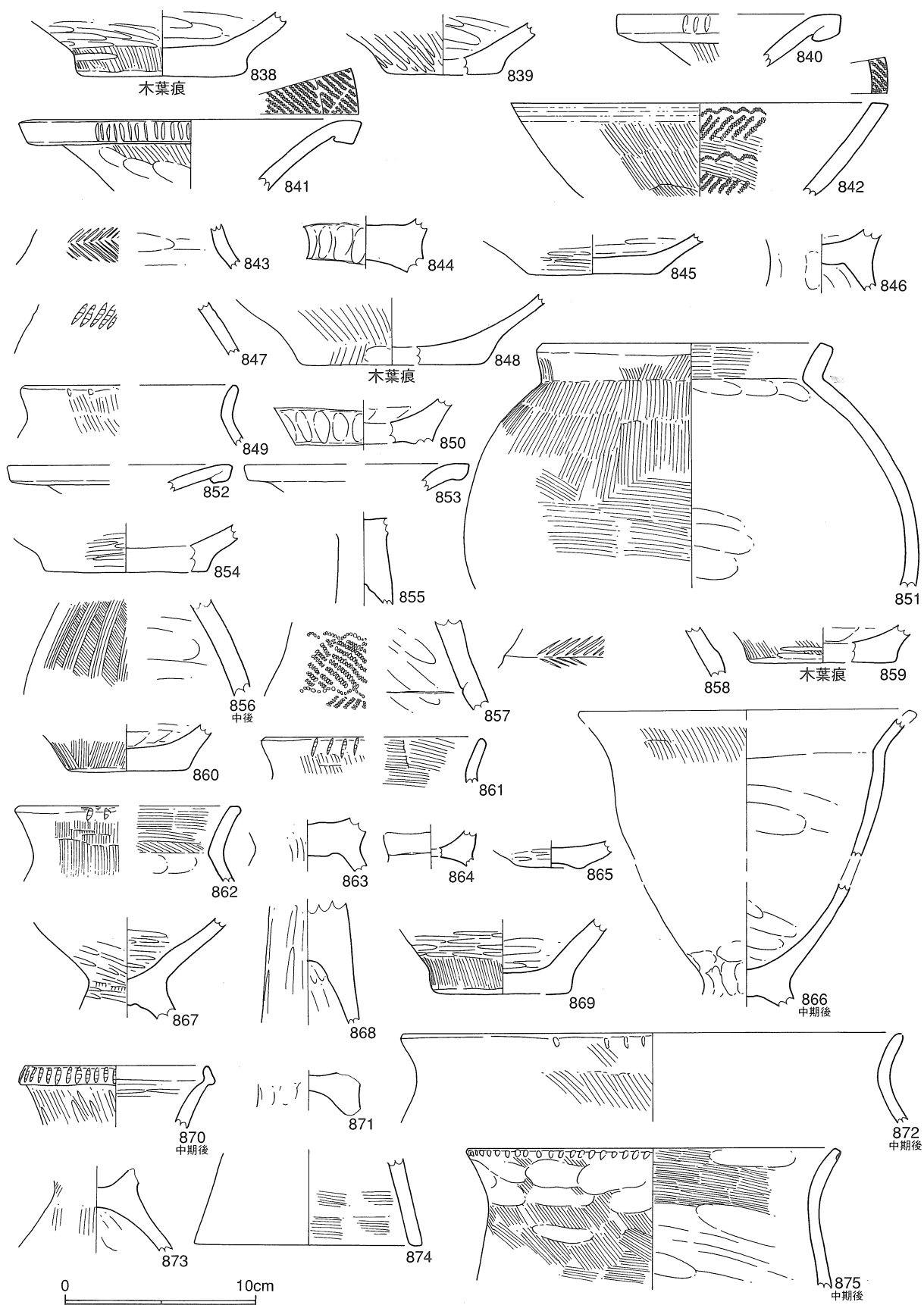
第152図 土器実測図25

B区 794~799=SB80 804=SB81・82
 800~802=SB80壁溝内 805・806=SB83・84
 803=SB81 807・808=SB84焼土中



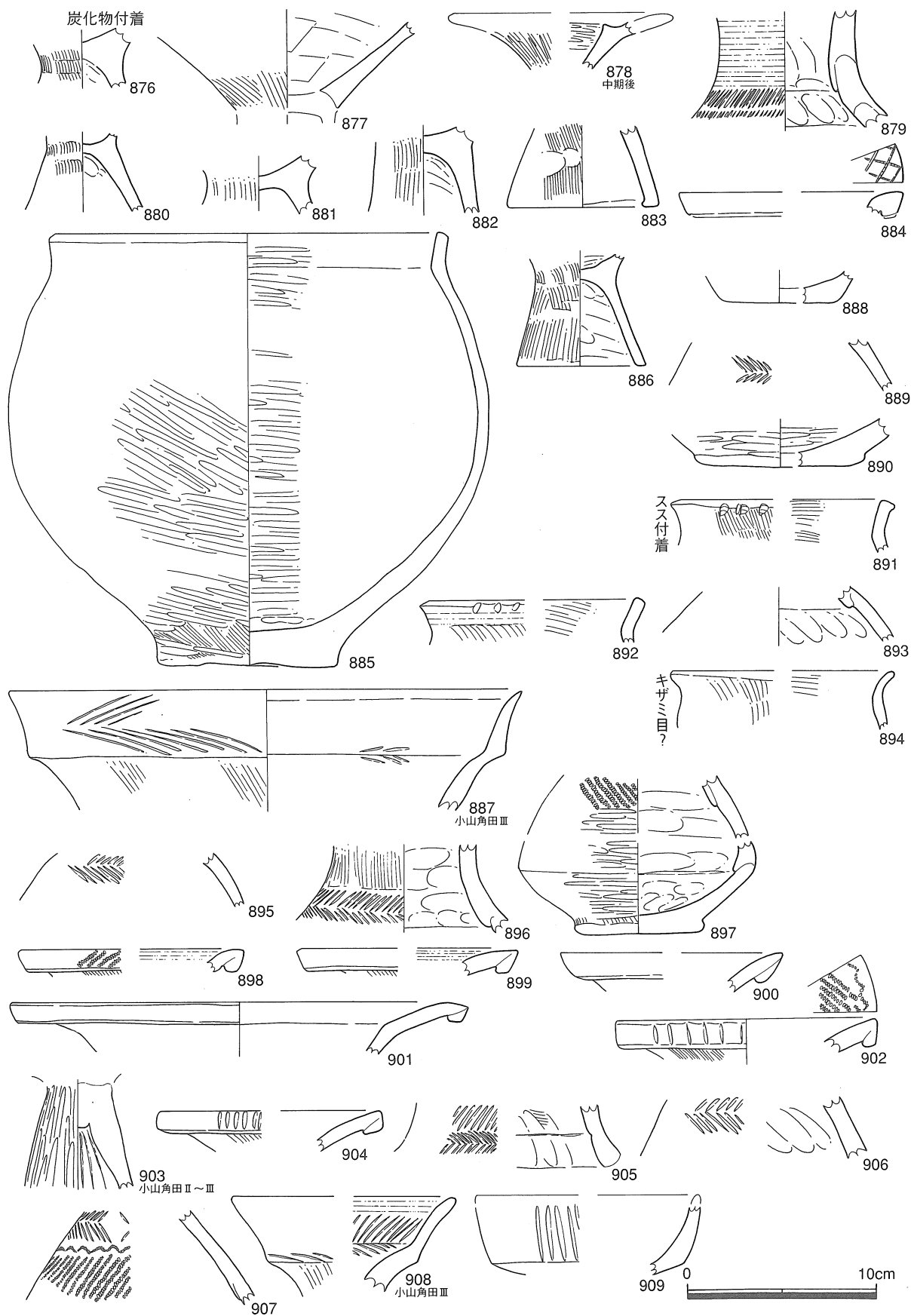
第153図 土器実測図26

B区 809=SB87 822~824=SB89南削出 837=SH3削出
 810~813=SB88 825=SB91
 814~818=SB88南削出 826~835=湧水遺構
 819~821=SB89 836=SH2-A・P6



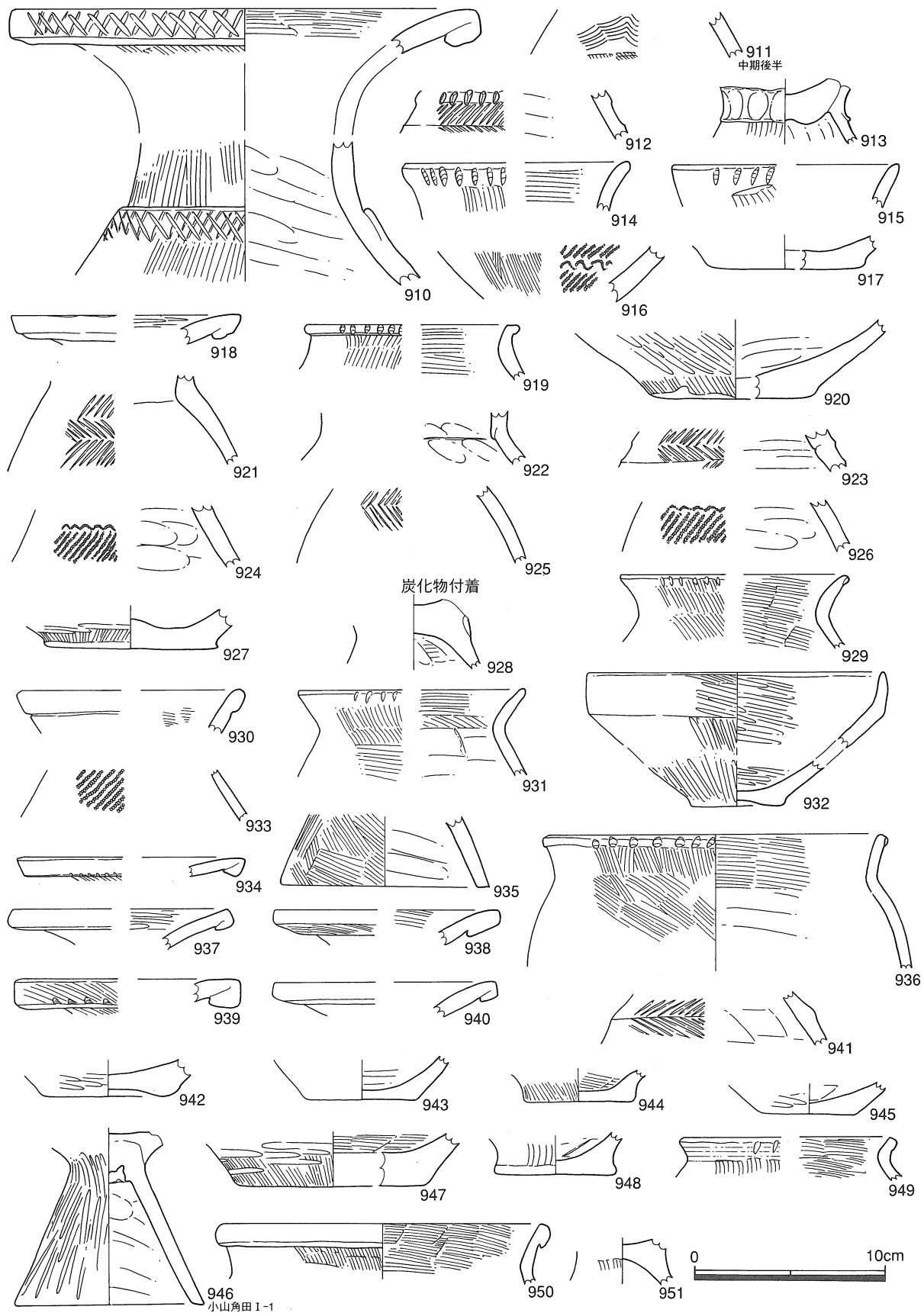
第154図 土器実測図27

B区 834~844=SH5・6削出 847~850=SH10・P2 855~866=SH9~11削出
 845=SH9・P6 851=SH10・P4 867=SH13削出
 846=SH10・P1 852~854=SH11・P5 868~875=SH14削出



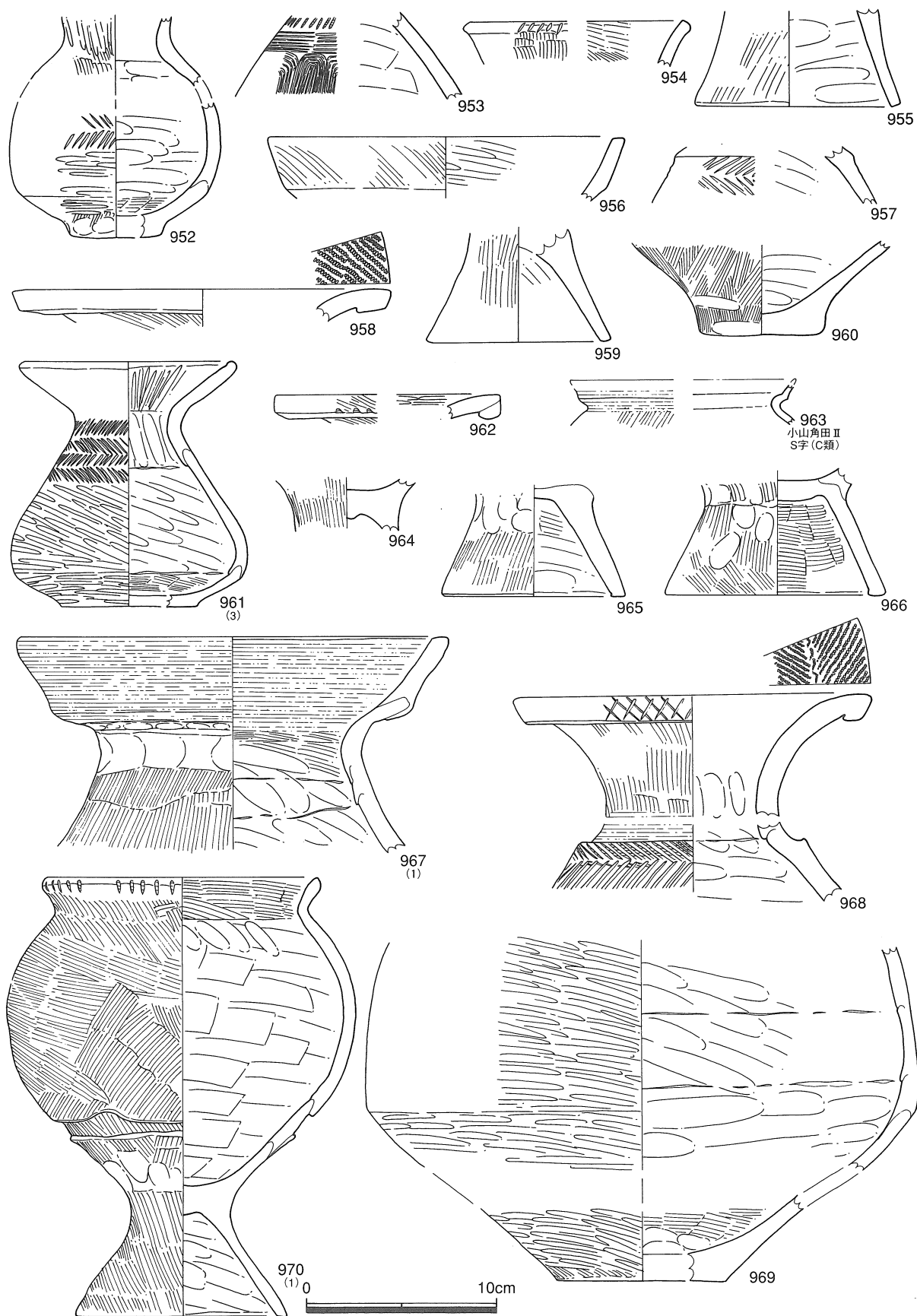
第155図 土器実測図28

B区 876・877=SH16削出
878～883=SH18削出
884・885=SH19・P1
886=SH19・P9
887=SH19削出
888・889=SH22・P1
890=SH22・P4
891=SH22-B・P1
892=SH22-C・P1
893・894=SH22削出
895～899=SH23削出
900～902=SH24
903～909=SH24削出



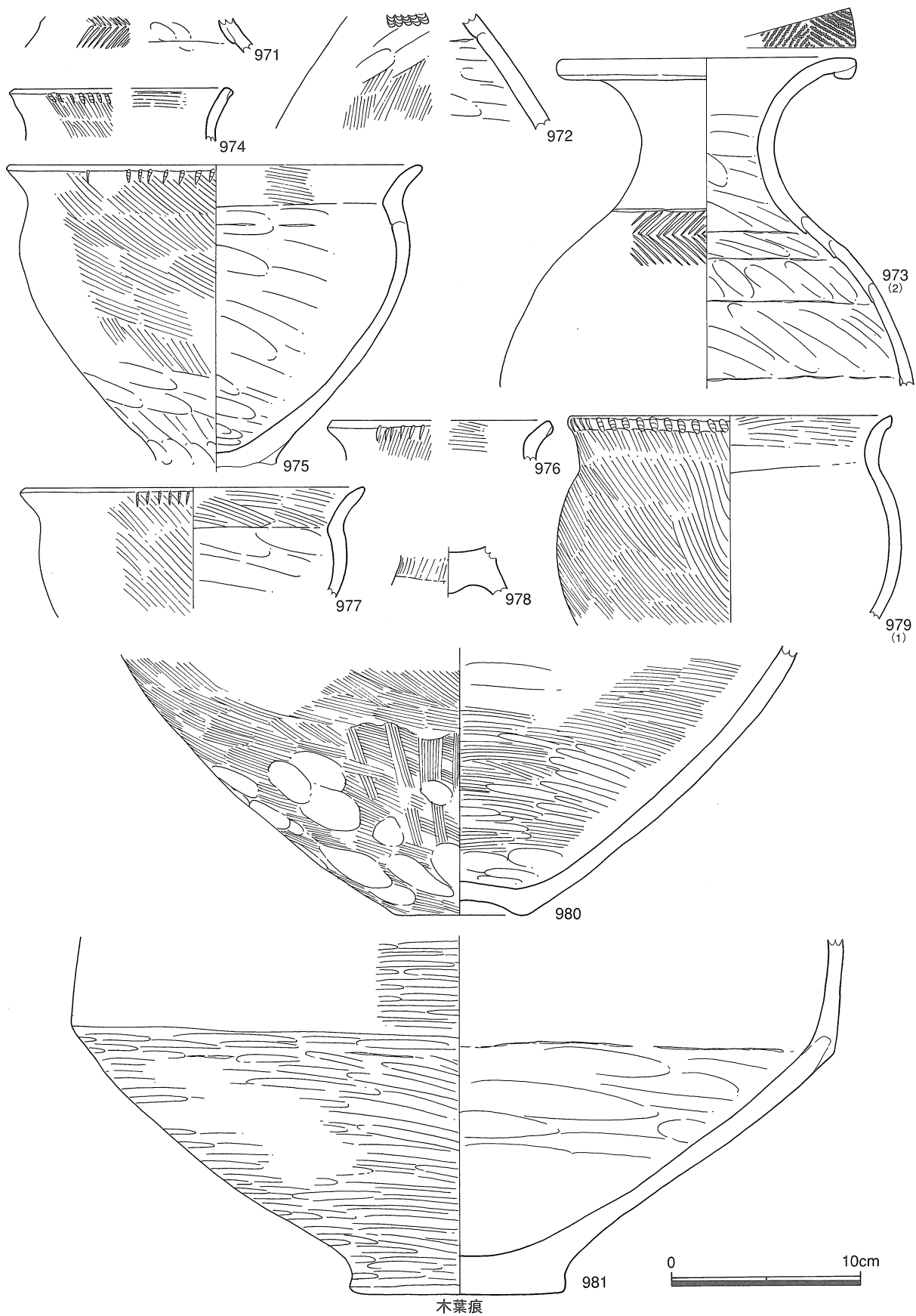
第156図 土器実測図29

B区 910~915=SH24削出 920~922=SH25・P9 933=SH41-B・P5
 916・917=SH25 923~929=SH25削出 934~936=SH47・P3
 918・919=SH25・P8 930・931=SH27・P2 937~945=SH47削出
 932=SH33削出 946~951=SH46・47削出



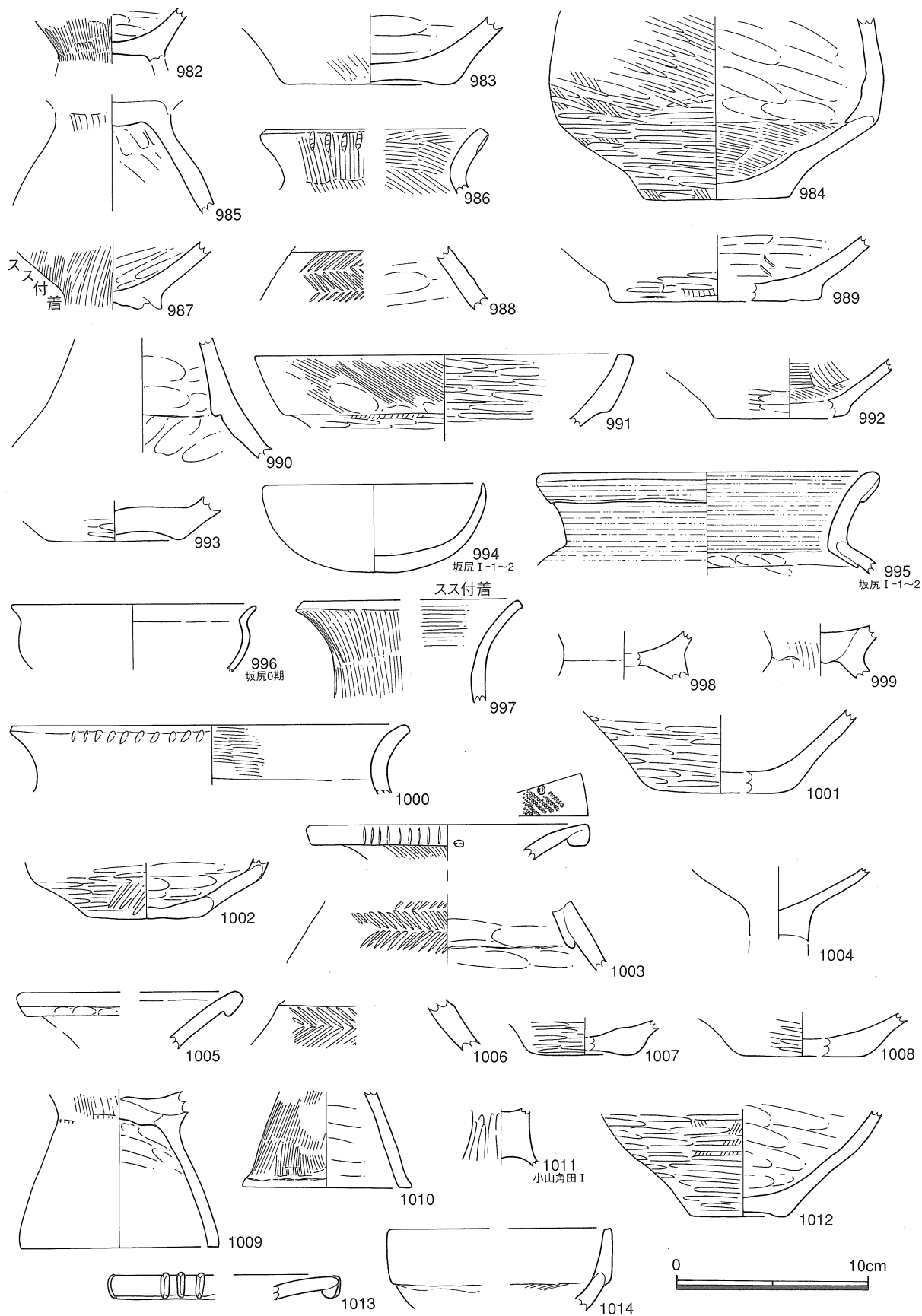
第157图 土器実測図30

B区 952~955=SA2・P1 961=6号周溝墓
956~959=SA3削出 962~966=6号周溝墓東南周溝
960=1号周溝墓付近 967~970=6号周溝墓西溝



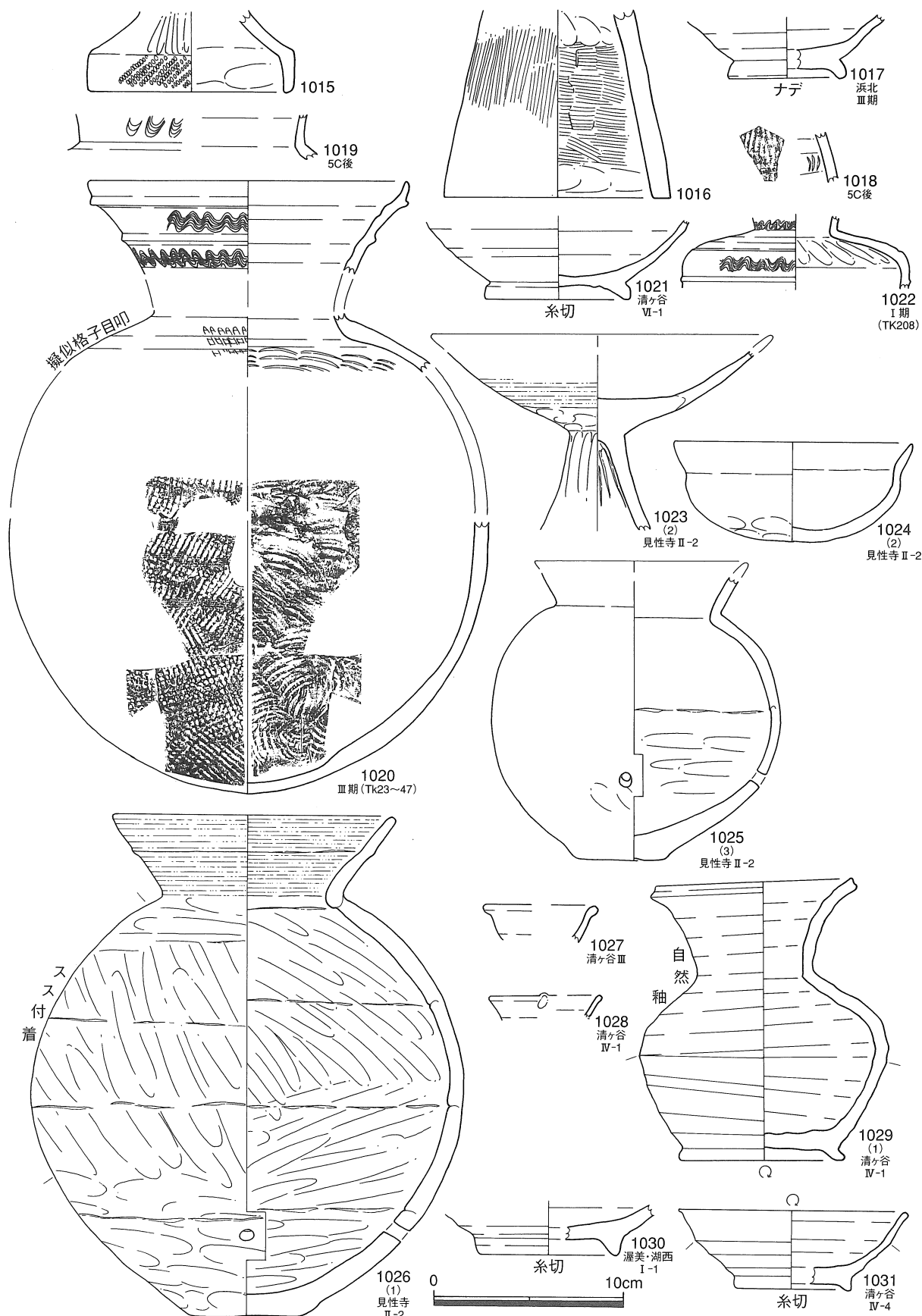
第158図 土器実測図31

B区 971~979=6号周溝墓西溝
 980=6号周溝墓西溝内土器棺3
 981=6号周溝墓西溝内土器棺5



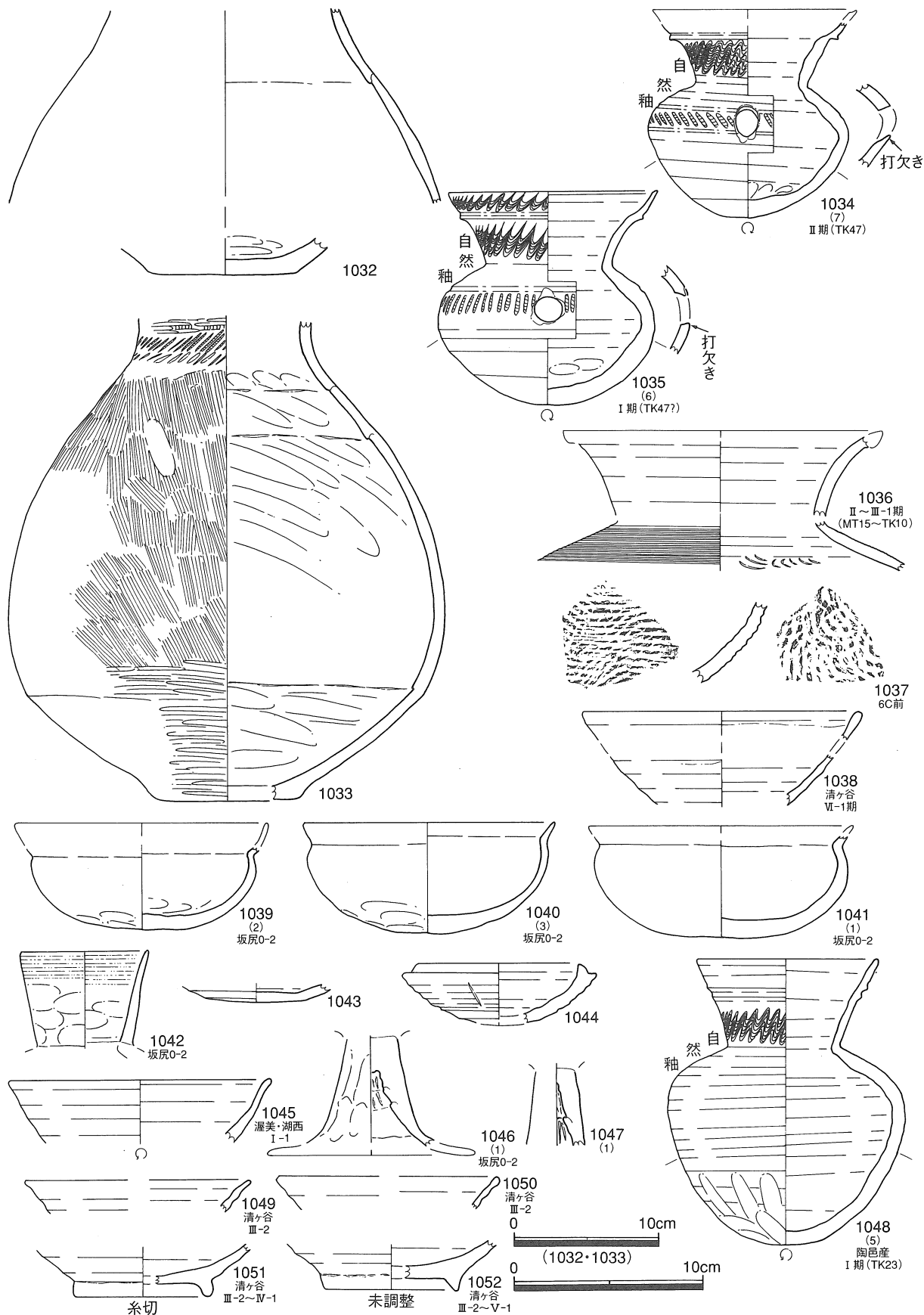
第159図 土器実測図32

B区 982=10号周溝墓南溝 996=13号周溝墓主体部 1003=SK6 1007~1010=SK19
 983~987=11号周溝墓南溝 997・998=13号周溝墓主体部内 1004=SK9 1011・1012=SK21
 988~990=12号周溝墓西溝 999・1000=SK1 1005=SK16 1013=SK23
 991~993=13号周溝墓墳丘表土 1001・1002=SK4 1006=SK17 1014=SK25
 994・995=13号周溝墓南溝



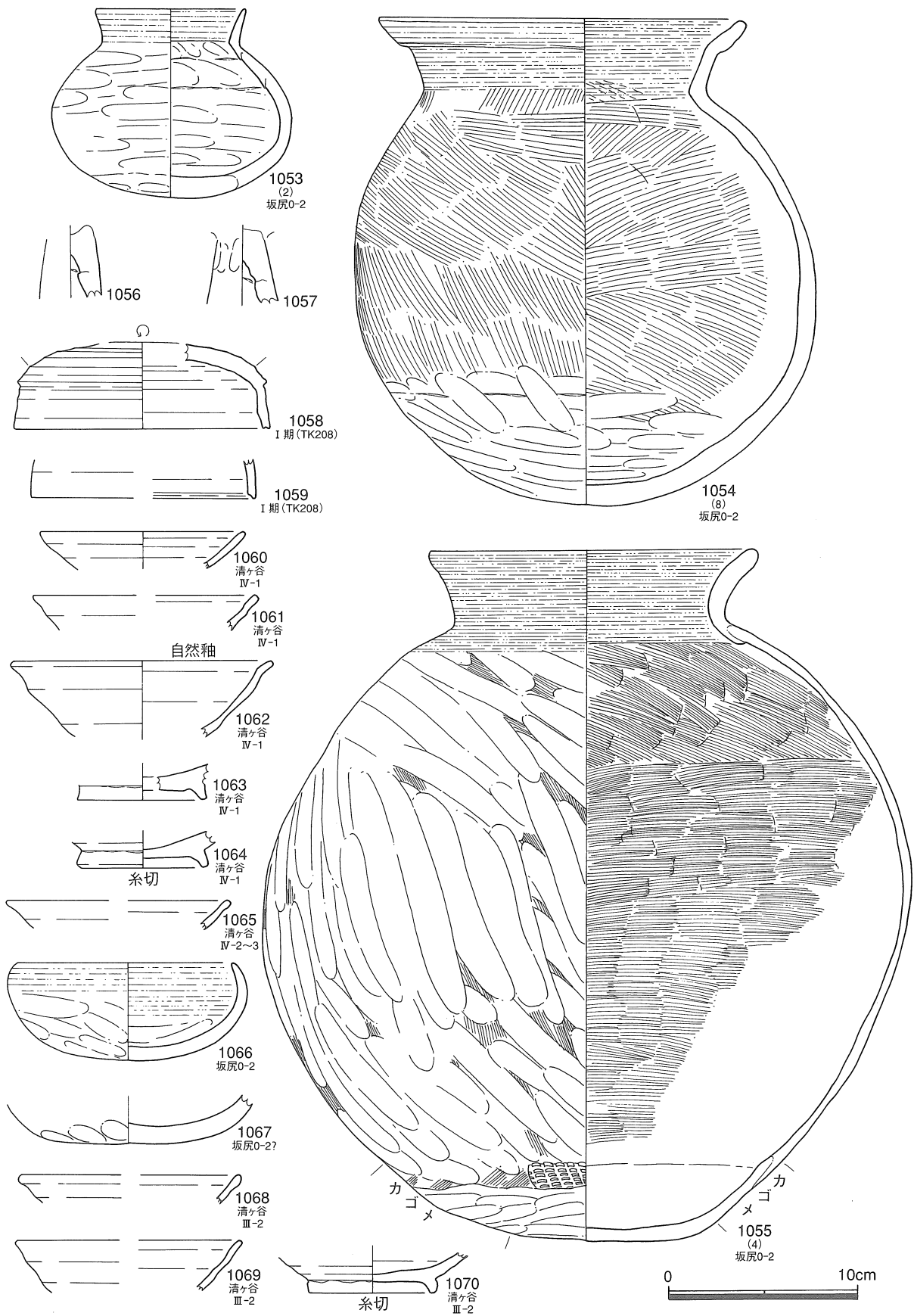
第160図 土器実測図33

B区 1015・1016=SK28 1019=8号墳 1023~1026=18号墳南周清
 1017=6号墳東周清 1020・1021=8号墳墳頂表土 1027~1029=18号墳東脇
 1018=6号墳墳丘 1022=15号墳 1030・1031=18号墳西脇



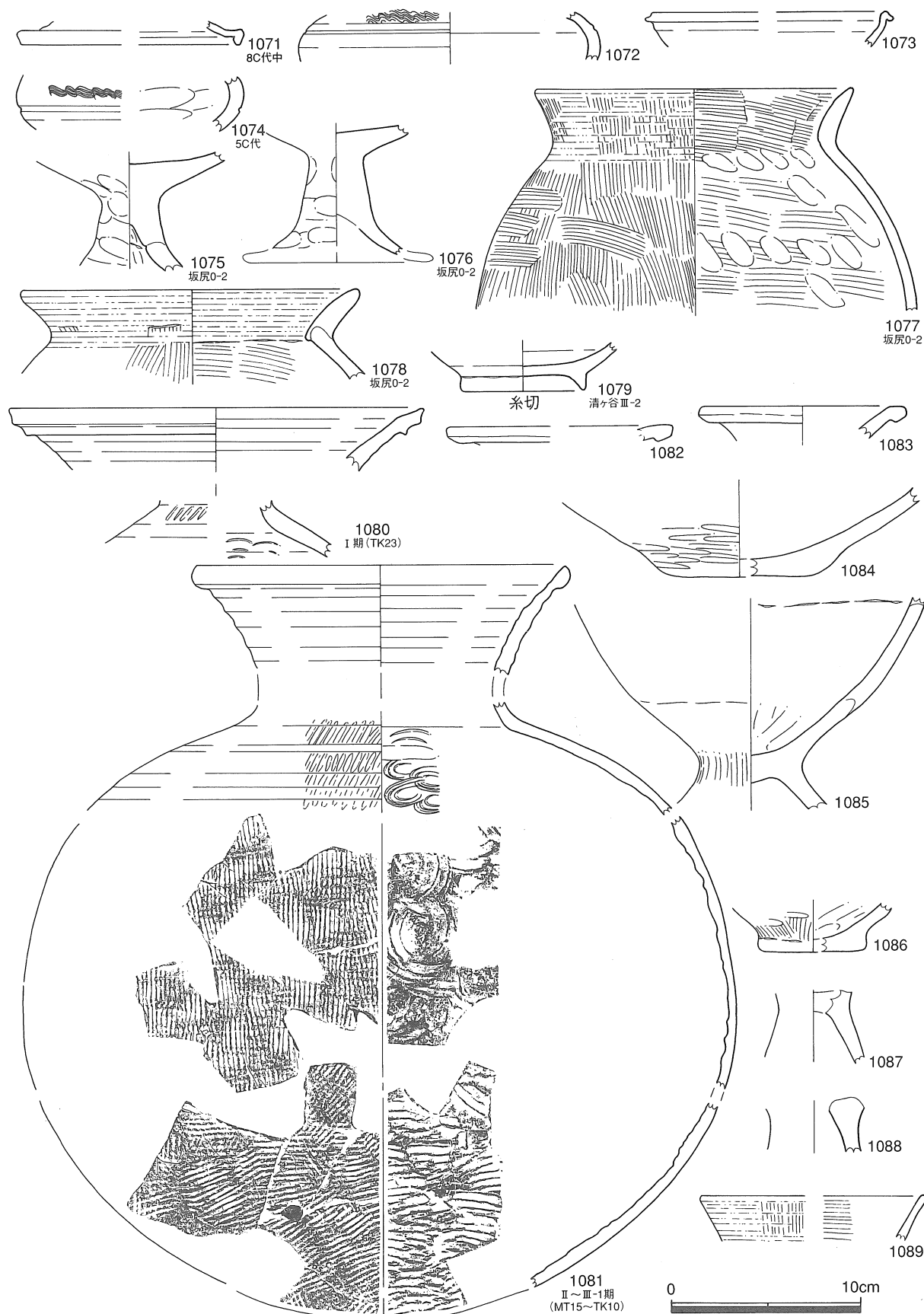
第161図 土器実測図34

B区 1032=土器棺4 (18号墳周溝内) 1036~1042=19号墳周溝内
 1033=土器棺1 1043~1048=19号墳北西周溝
 1034・1035=19号墳周溝内 1049~1052=19号墳墳頂



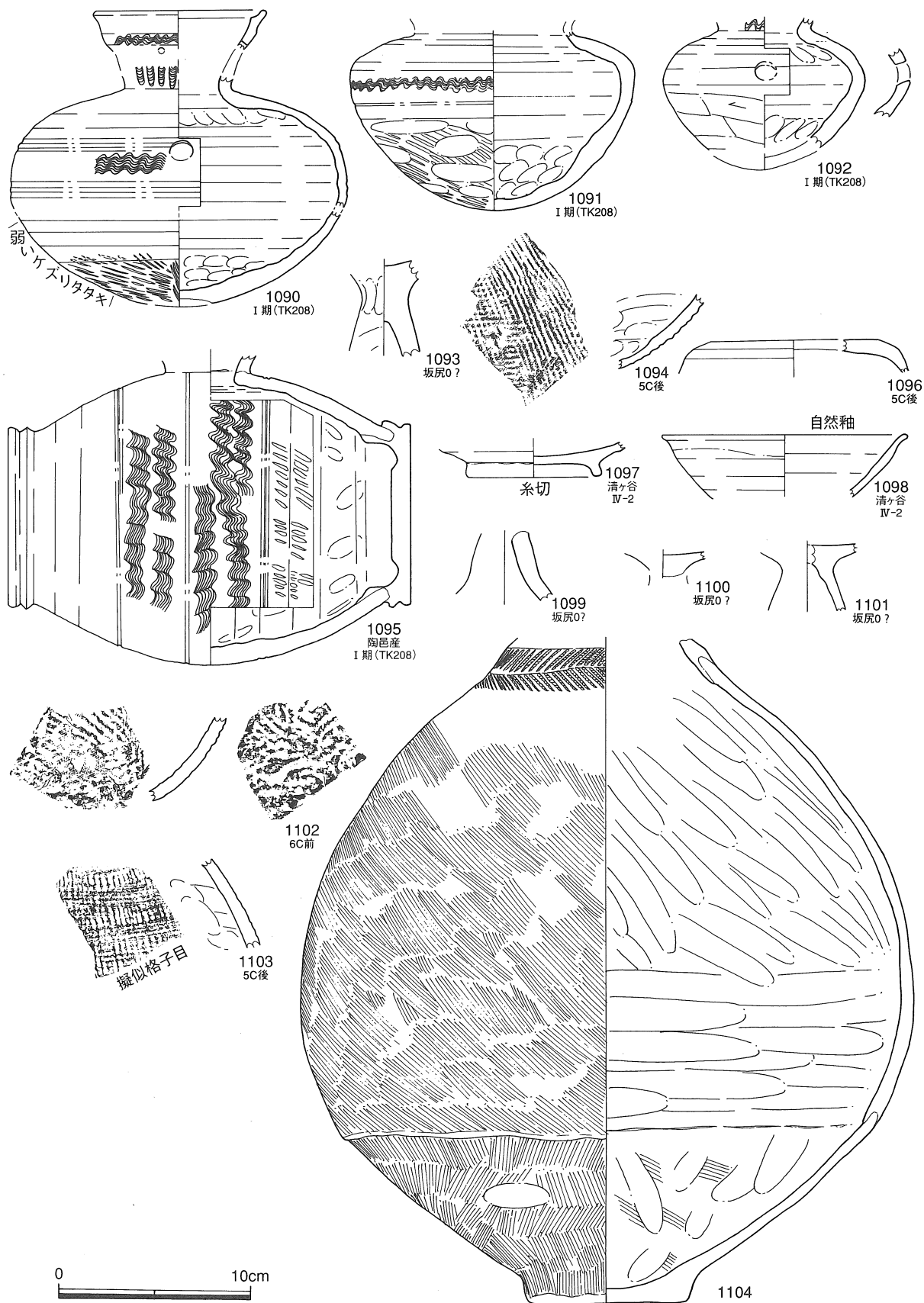
第162図 土器実測図35

B区 1053~1055=19号墳周溝内 1066=20号墳墳頂
 1056・1057=20号墳南東溝 1067=20号墳墳頂北西
 1058~1065=20号墳北東溝 1068~1070=20号墳スノ南西



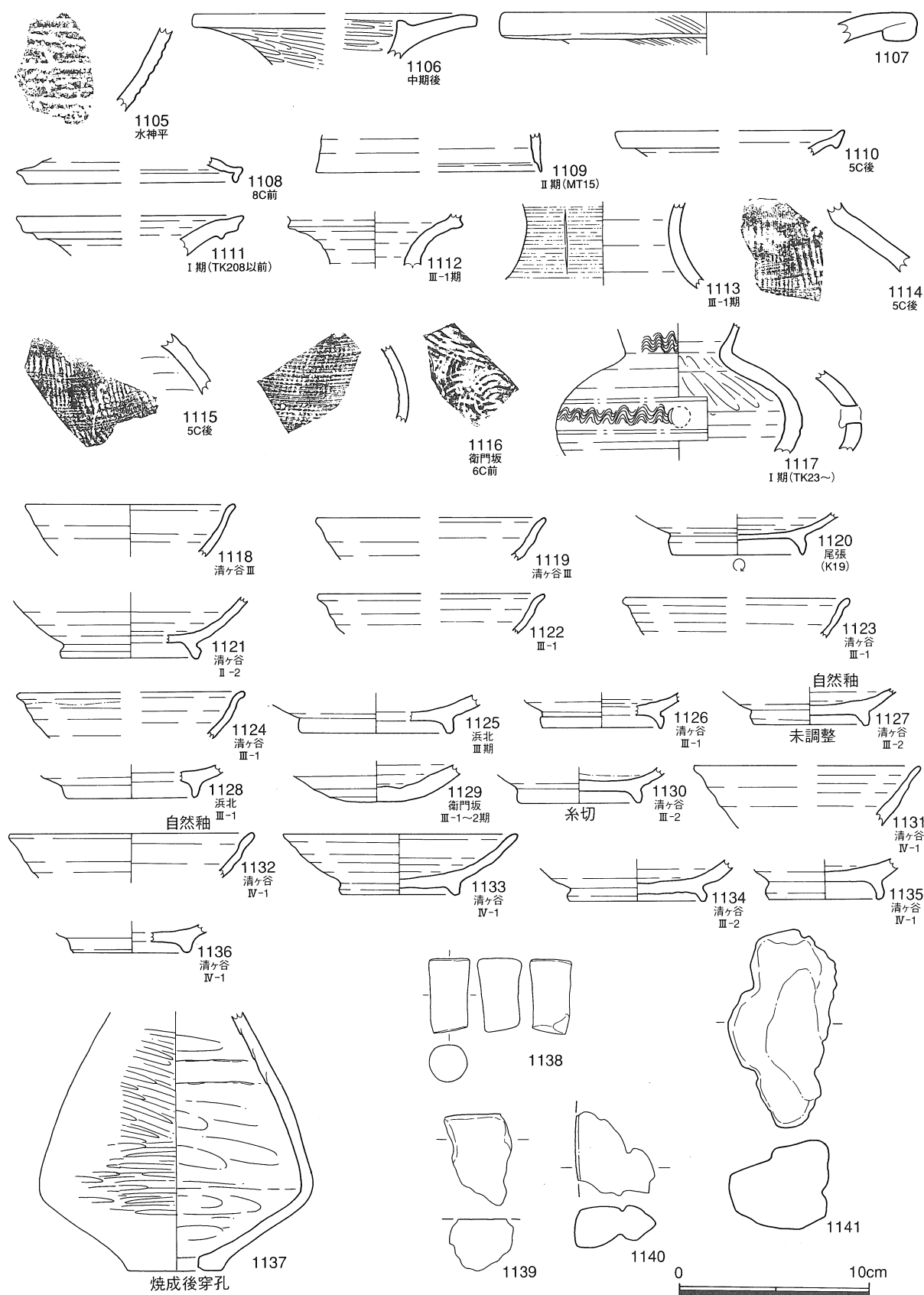
第163図 土器実測図36

B区 1071～1074=21号墳北東周溝 1080・1081=24号墳
 1075～1078=22号墳南西周溝底 1082～1088=24号墳南周溝
 1079=23号墳 1089=24号墳主体部



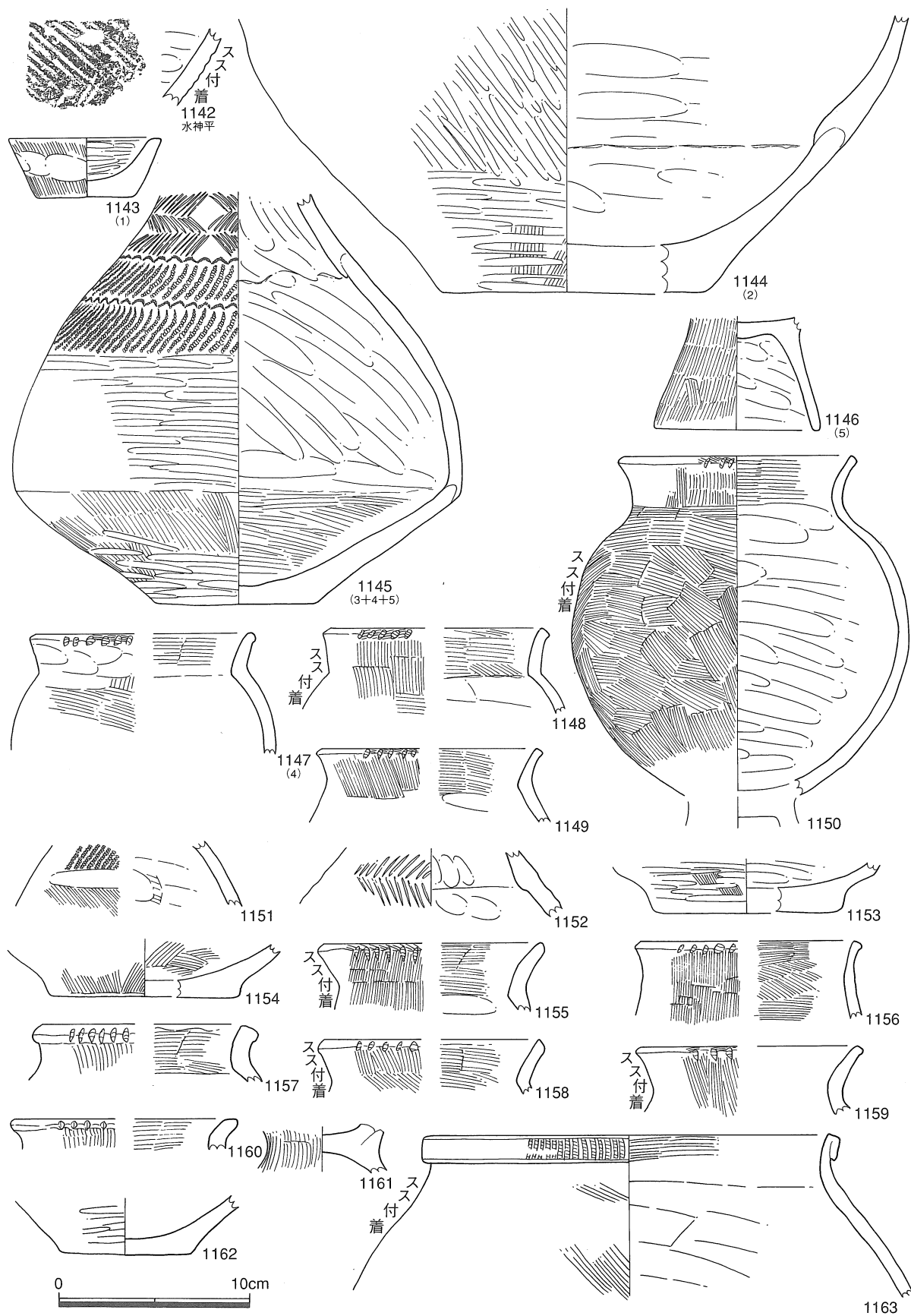
第164図 土器実測図37

B 区 1090=27号墳南周溝 1093=27号墳南スソ表土 1097~1099=30号墳東周溝上層
 1091=27号墳東周溝 1094=28号墳南東周溝 1100・1101=30号墳西周溝
 1092=27号墳南東周溝 1095=29号墳周溝 1102・1103=31号墳南西周溝
 1096=29号墳 (SK1上層) 1104=土器棺2



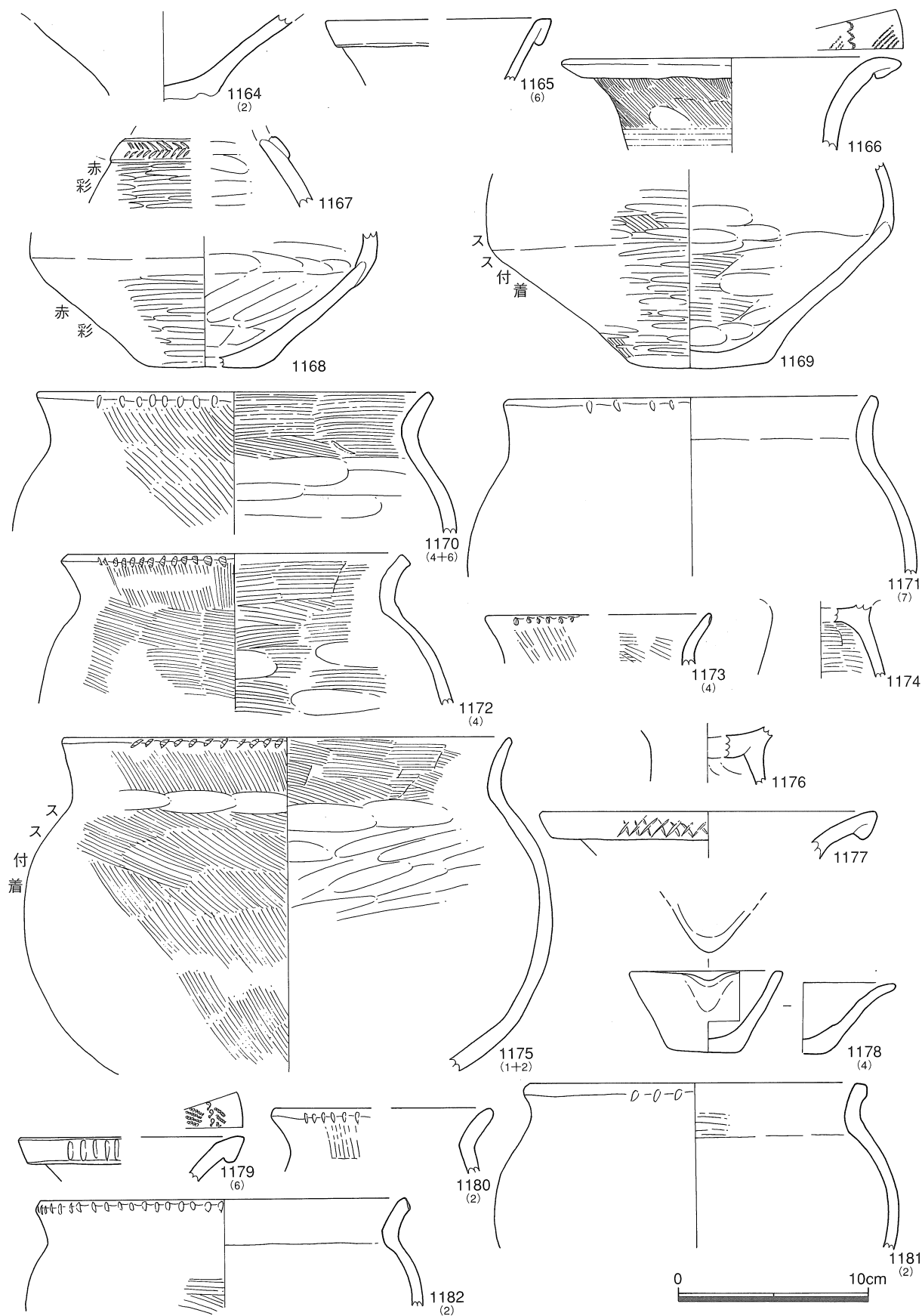
第165図 土器実測図38

B区 1105~1136=B区山頂部東半分表土
 1137=不明
 1138=SB25-B・C土製品
 1139=SB50土製品
 1140=SB81・82土製品
 1141=SH47削出土製品



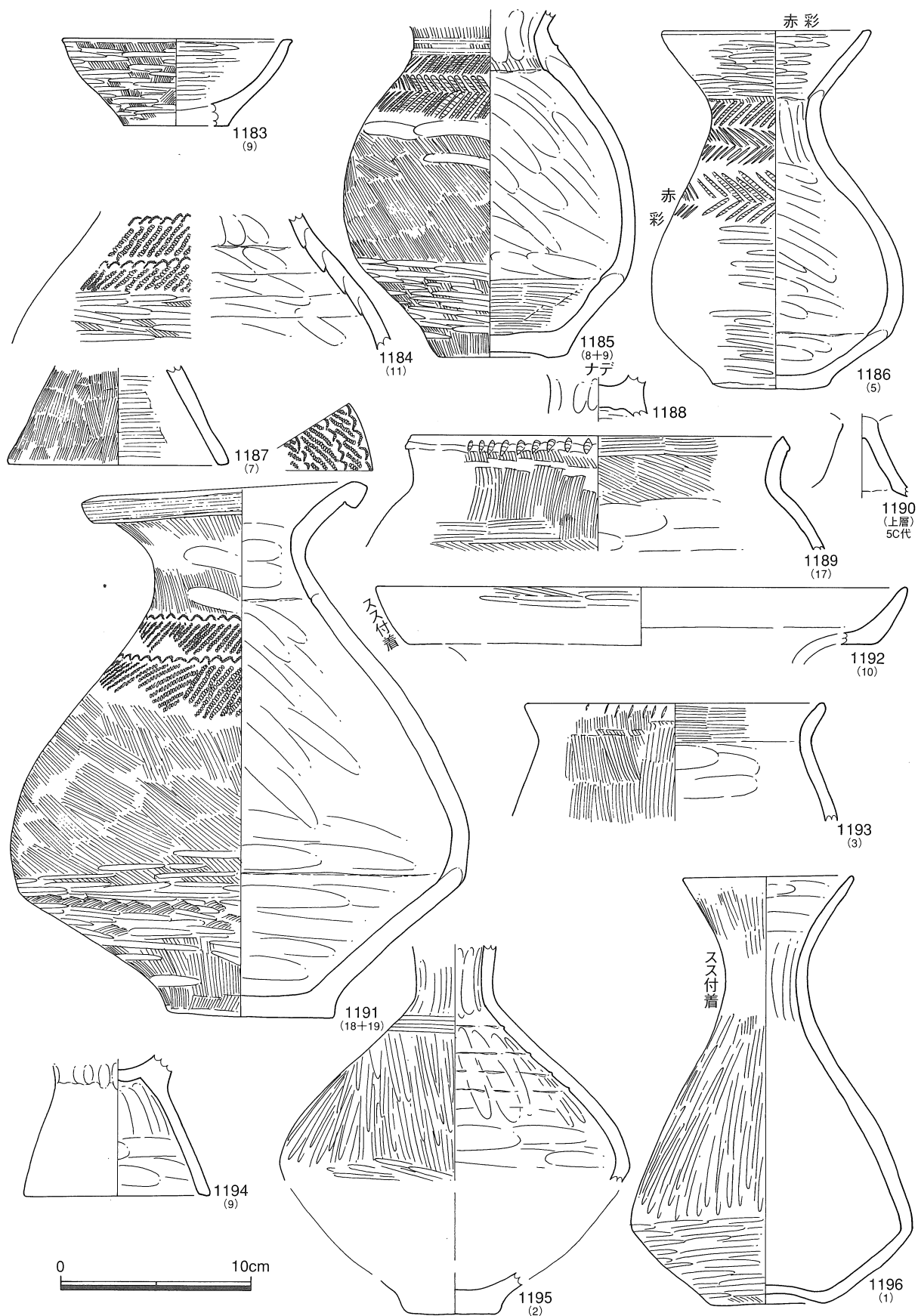
第166図 土器実測図39

C区 1142~1149=SB1 1151~1161=SB3
1150=SB1東部 1162・1163=SB3西端



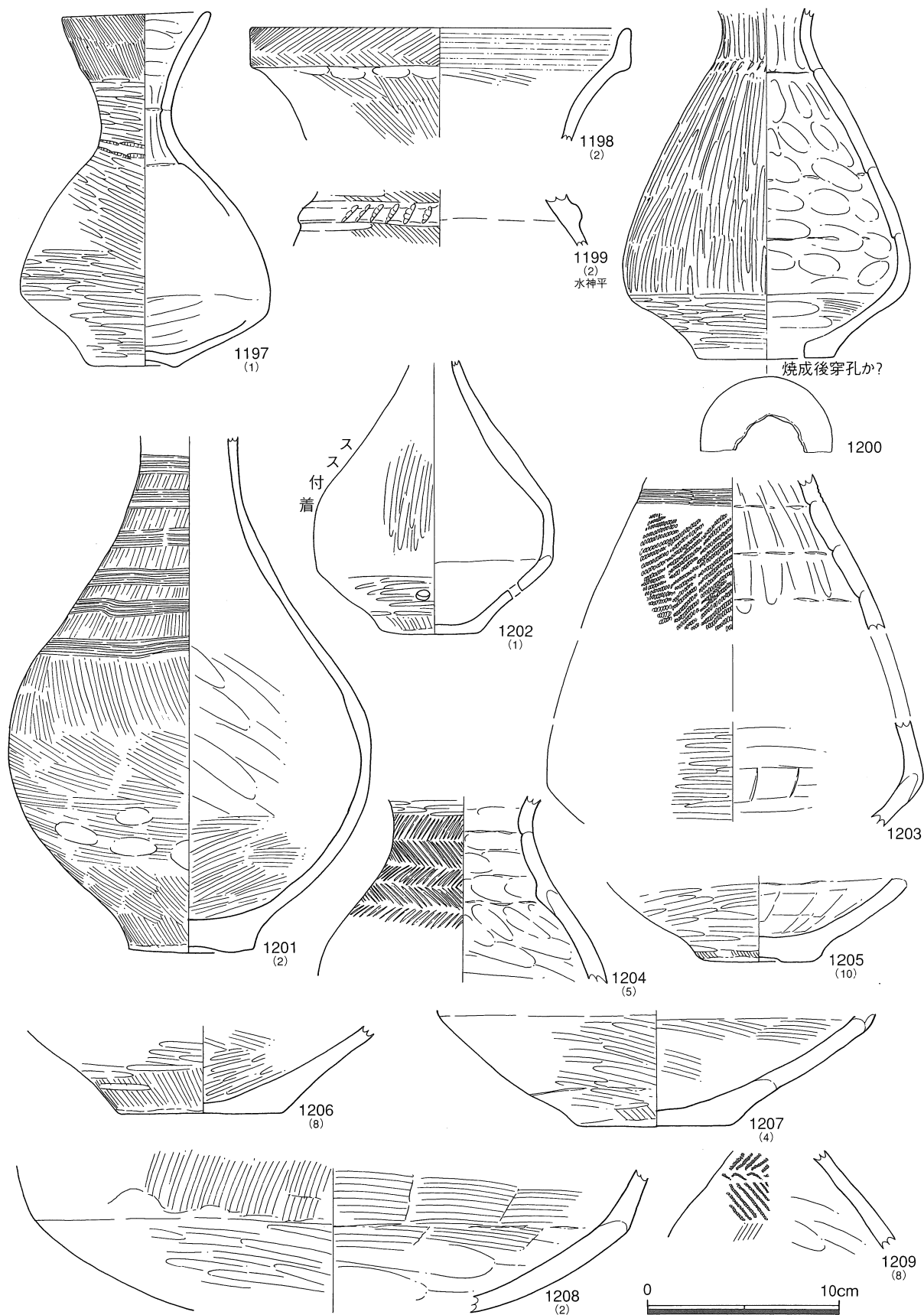
C区 1164~1175=SB4 1178・1179=SB4壁側
1176・1177=SB4南西部 1180~1182=SB4床面

第167図 土器実測図40



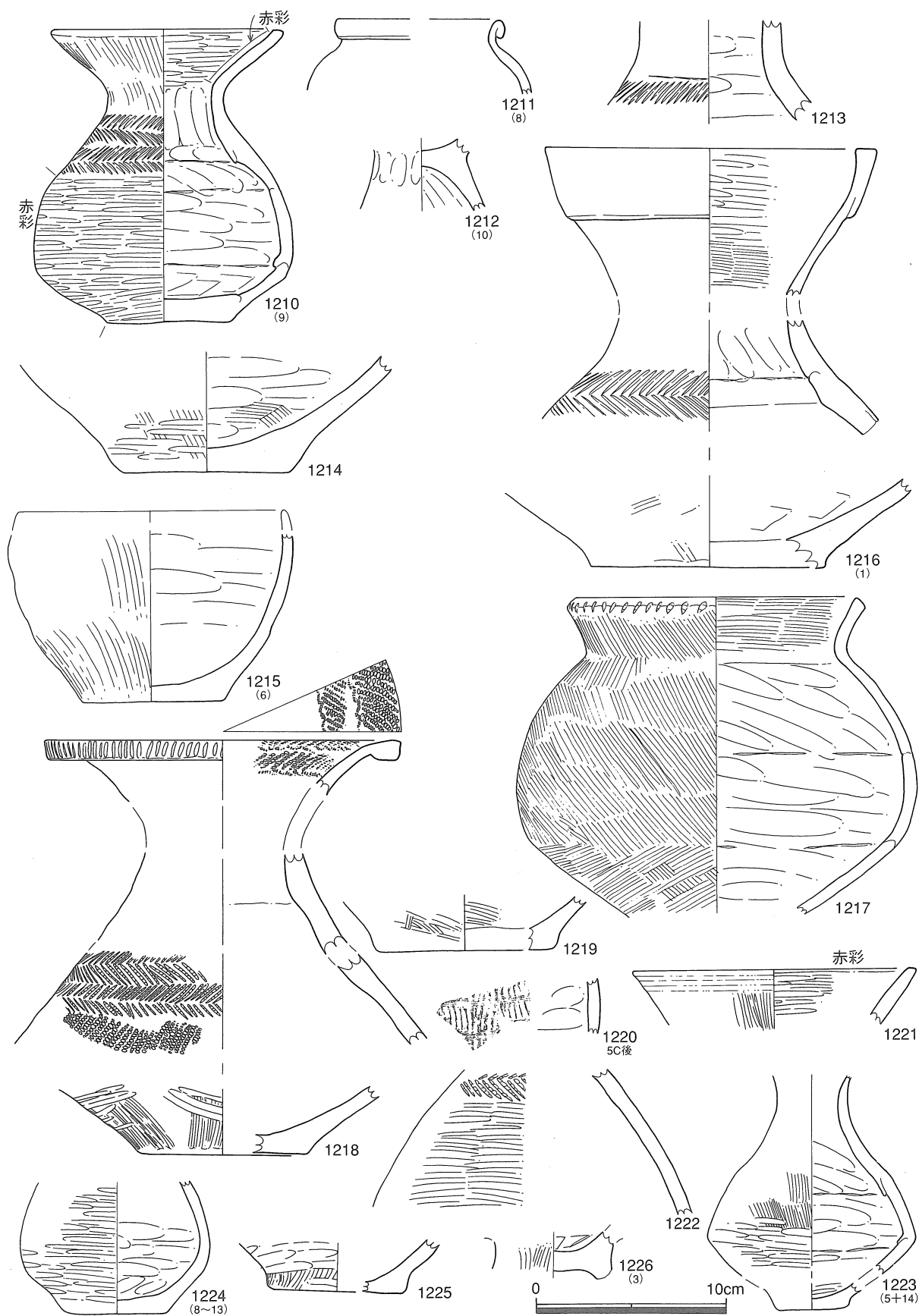
C区 1183~1189=SB5
 1190=SB5上層 1193・1194=SB5床面
 1191=SB5壁清 1192=SB5住居外 1196=1号周溝墓主体部1
 1195=1号周溝墓西溝

第168図 土器実測図41



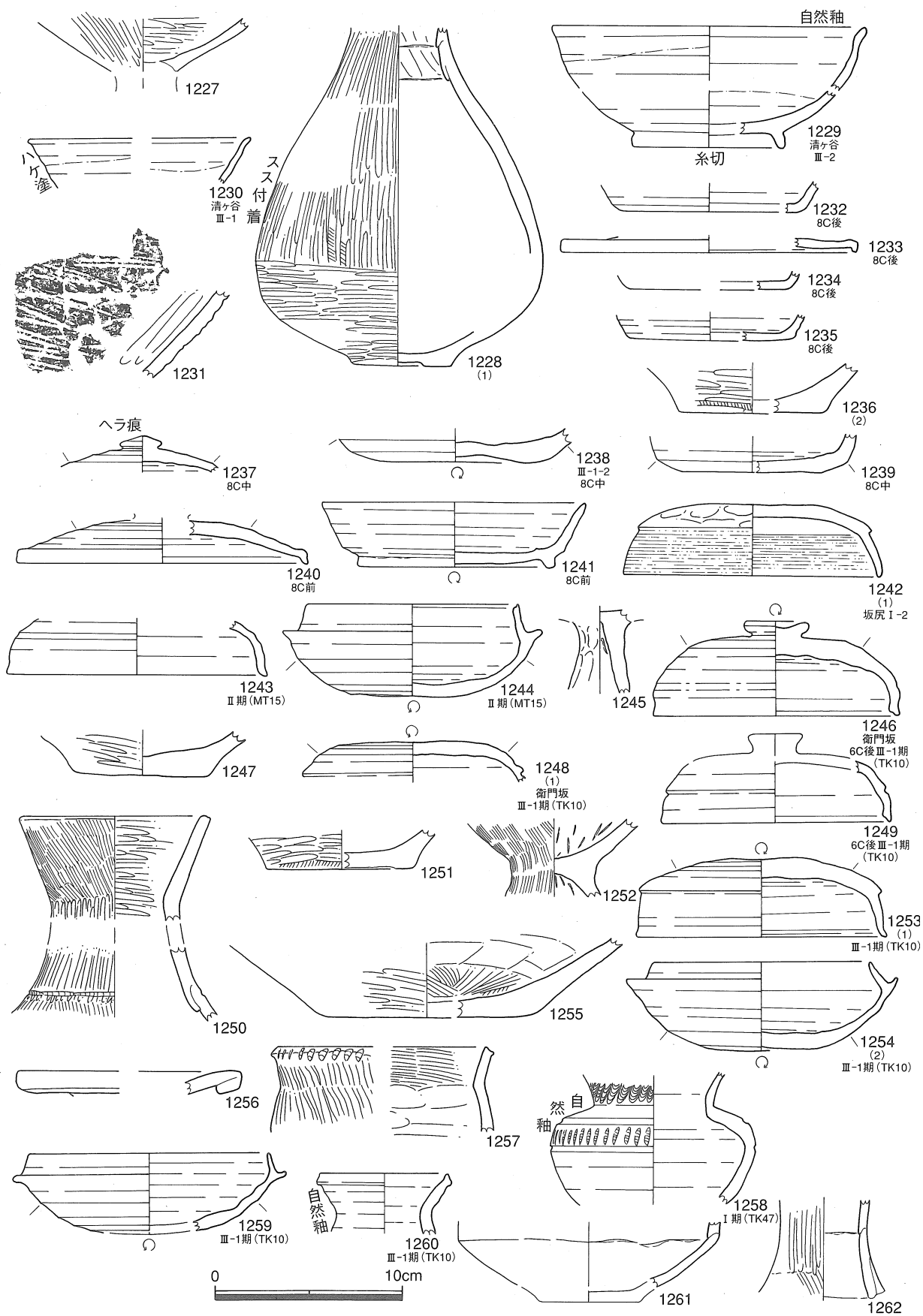
第169図 土器実測図42

C区 1197=1号周溝墓付近1 1201・1202=2号周溝墓東溝
 1198~1199=1号周溝墓付近2 1203=2号周溝墓南溝
 1200=1号周溝墓付近3 1204~1209=3号周溝墓



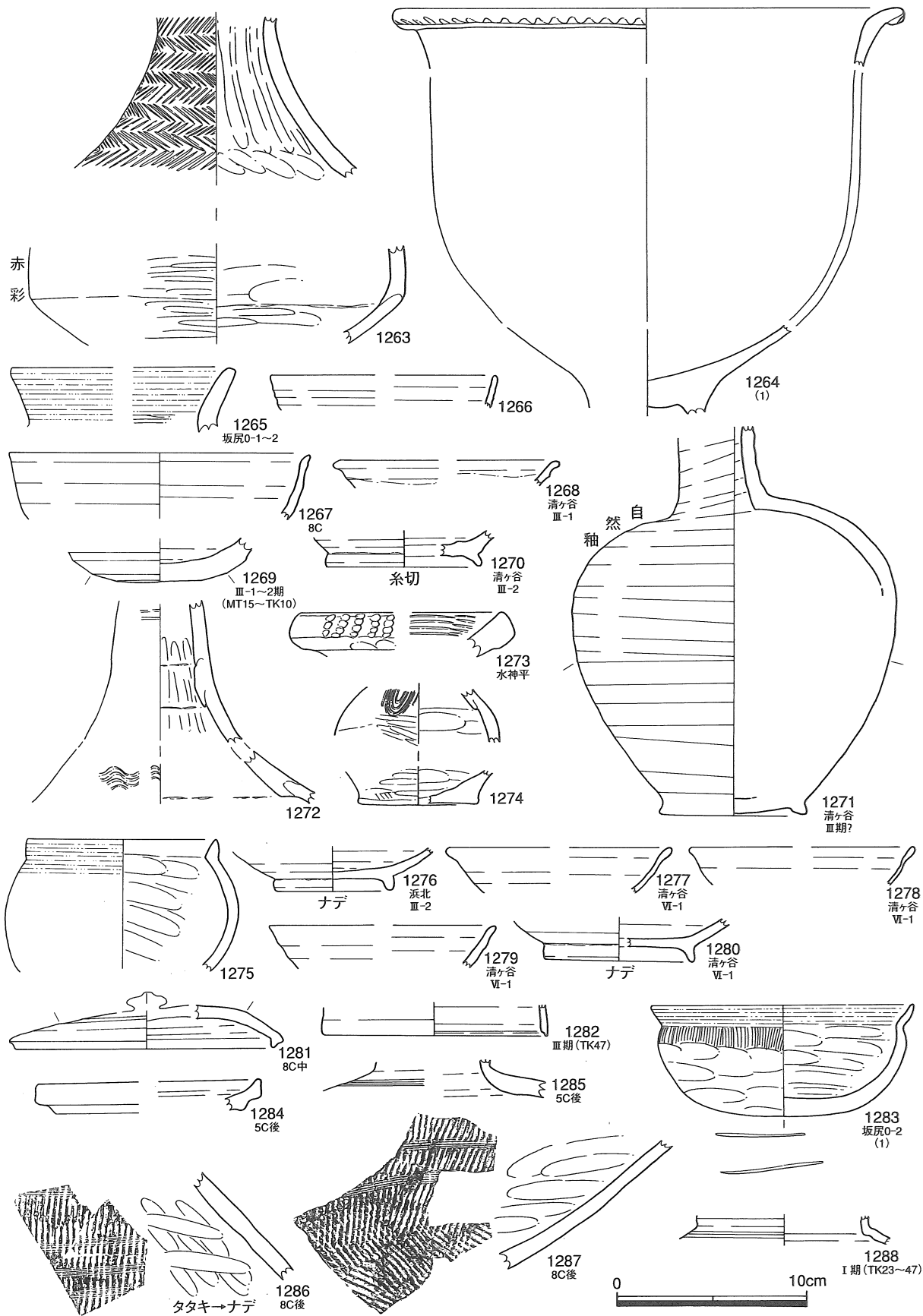
第170図 土器実測図43

C区 1210~1212=3号周溝墓
 1213・1214=3号周溝南溝
 1215=3号周溝墓墳丘
 1216=3号周溝墓墳丘+13号墳周溝
 1217= SX1主体部1上層
 1218= SX1主体部2
 1219= SX1主体部3
 1220~1226= SX1



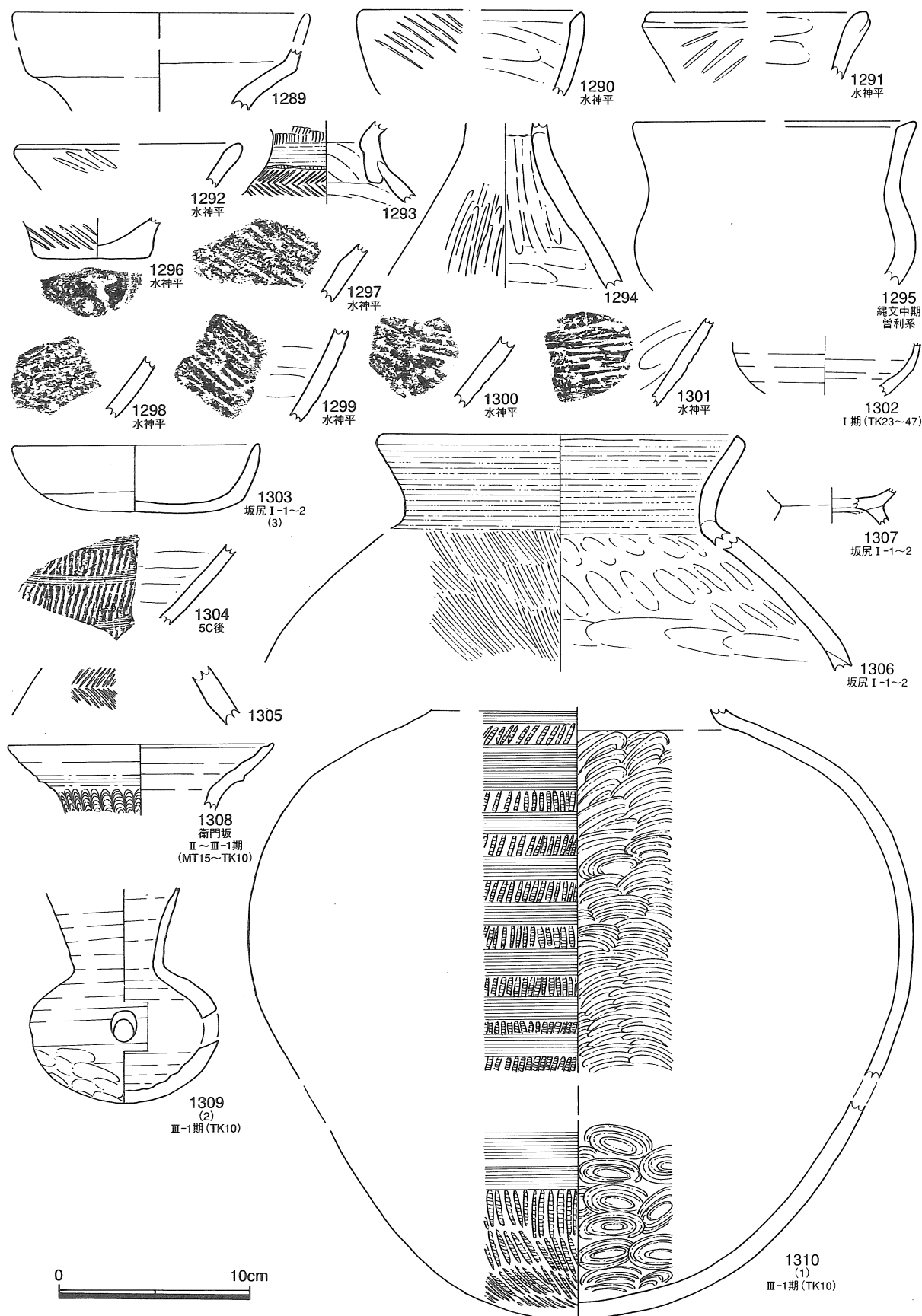
第171図 土器実測図44

C区 1227~1230=SK1段状遺構 1237・1238=SD6 1246・1247=SK3上層 1256・1257=SK14
 1231=SD1 1239・1241=SD7 1248・1249=SK5 1258=10号墳裏面
 1232~1235=SD2上層 1242=SK1 1250~1252=SK10 1259・1260=10号墳北東斜面
 1236=SD5 1243~1245=SK2上層 1253・1254=SK10裏側上層 1261=10号墳墳丘北テラス
 1255=SK12 1262=10号墳墳丘北面ス



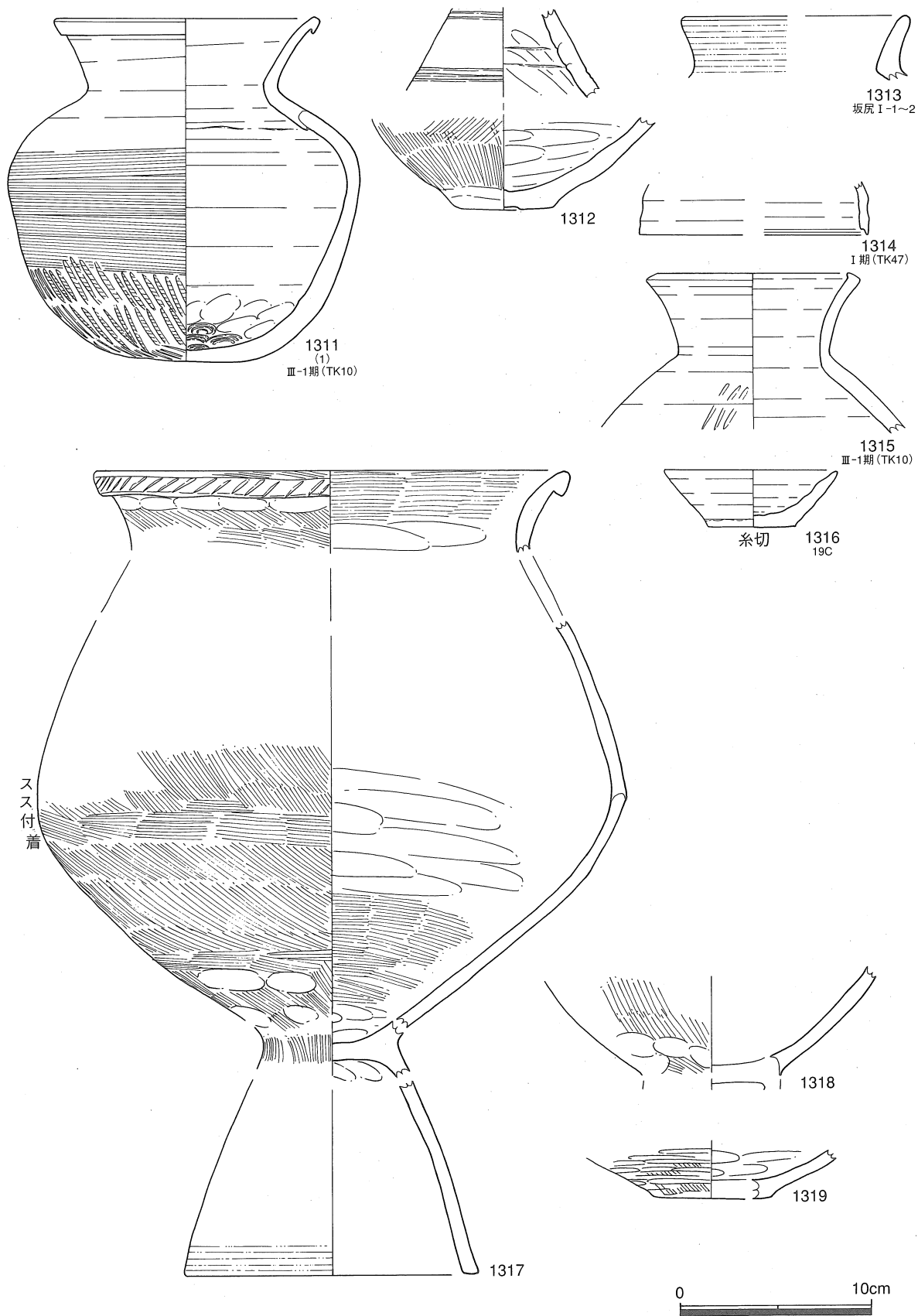
第172図 土器実測図45

C区 1263=土器棺4上層 1273~1275=12号墳南周溝 1282・1283=12号墳主体部1
 1264=土器棺4東スノ 1276~1280=12号墳北周溝 1284~1287=12号墳主体部1・周溝内
 1265=12号墳 1281=12号墳周溝内 1288=12号墳墳丘上
 1266~1272=12号墳周溝



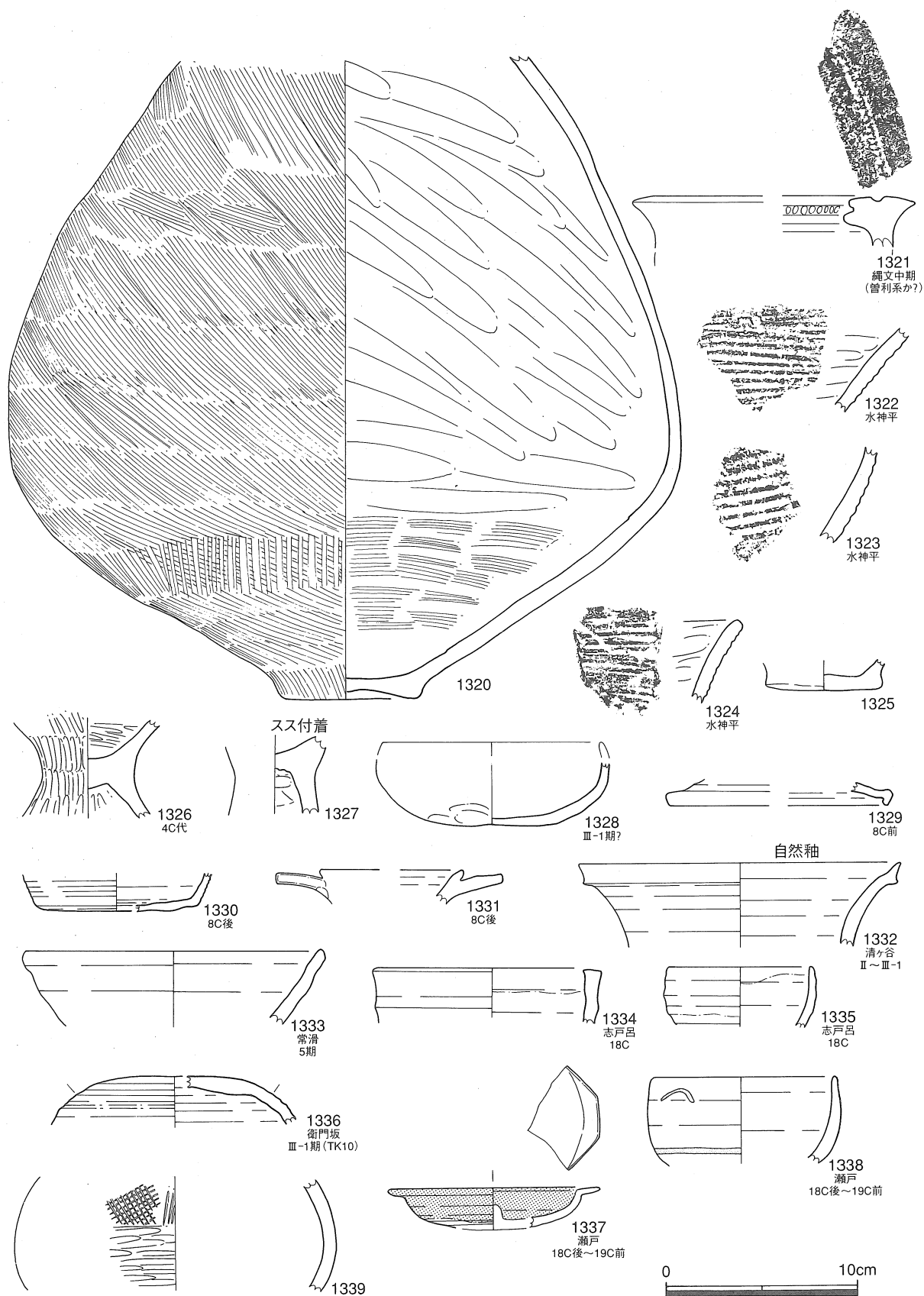
第173図 土器実測図46

C区 1289~1301=12号墳境内内 1304=13号墳北周溝 1309=14号墳主体部1
 1302=12号墳墳頂 1305=13号墳主体部 1310=14号墳主体部1十墳頂
 1303=13号墳南周溝 1306~1308=13号墳墳丘



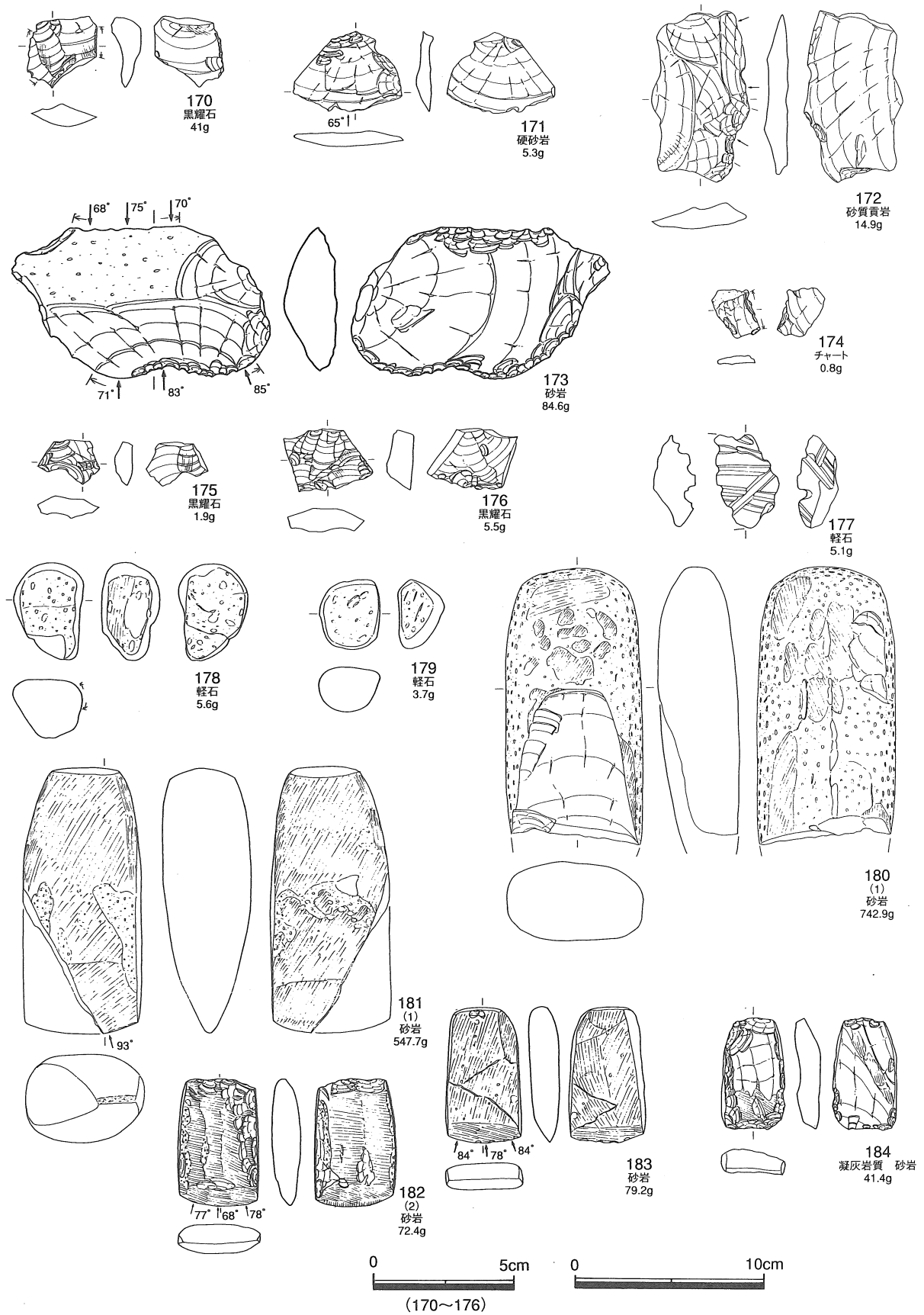
第174図 土器実測図47

C 区 1311=14号墳主体部十墳頂 1314~1316=14号墳墳丘
1312=14号墳北周溝十墳頂 1317=土器棺1
1313=14号墳西北周溝 1318・1319=土器棺2



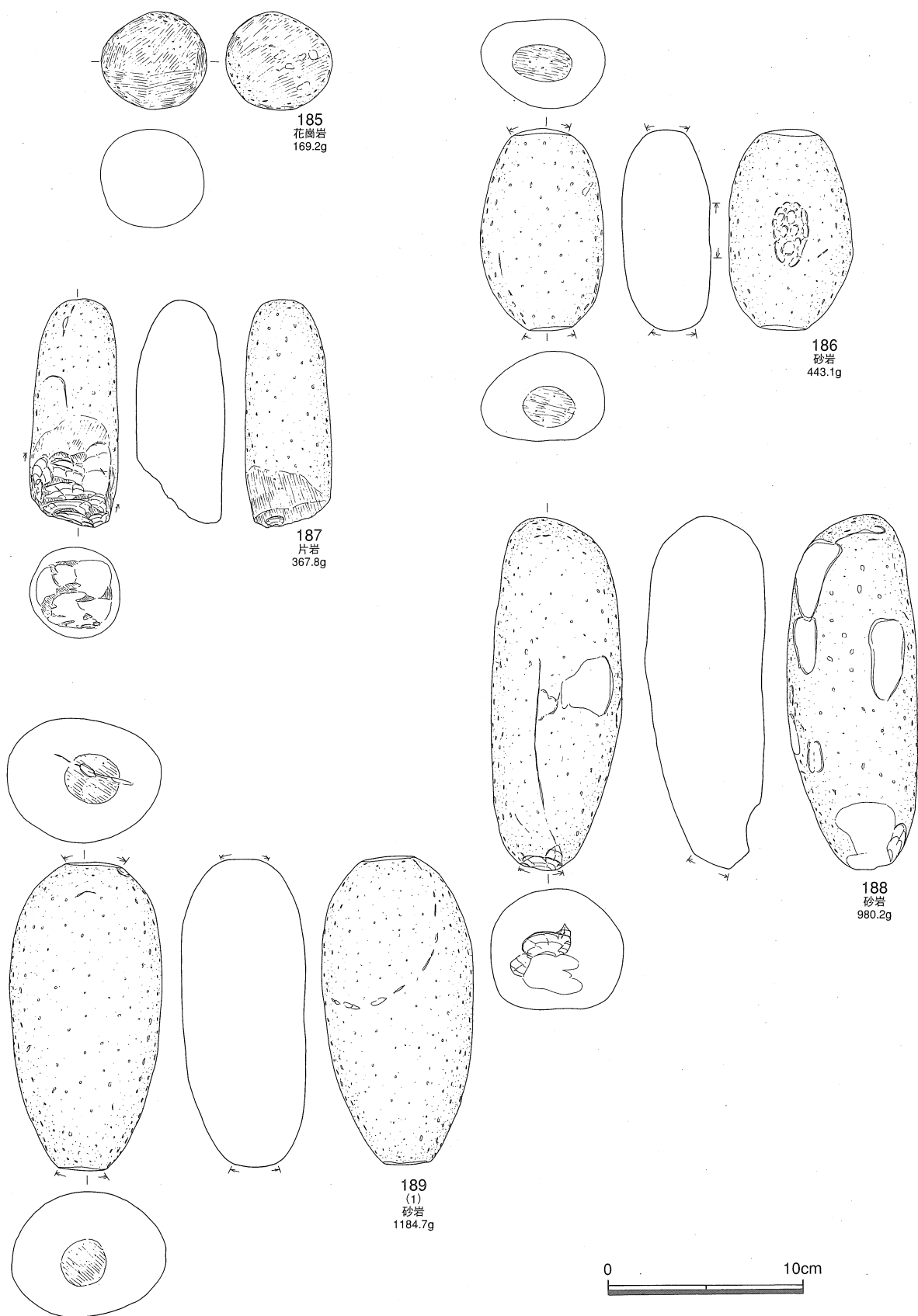
第175図 土器実測図48

C区 1320=土器館2 1336～1338=14号墳上・道状遺構
1321～1335=北半表土 1339=横穴墓前域



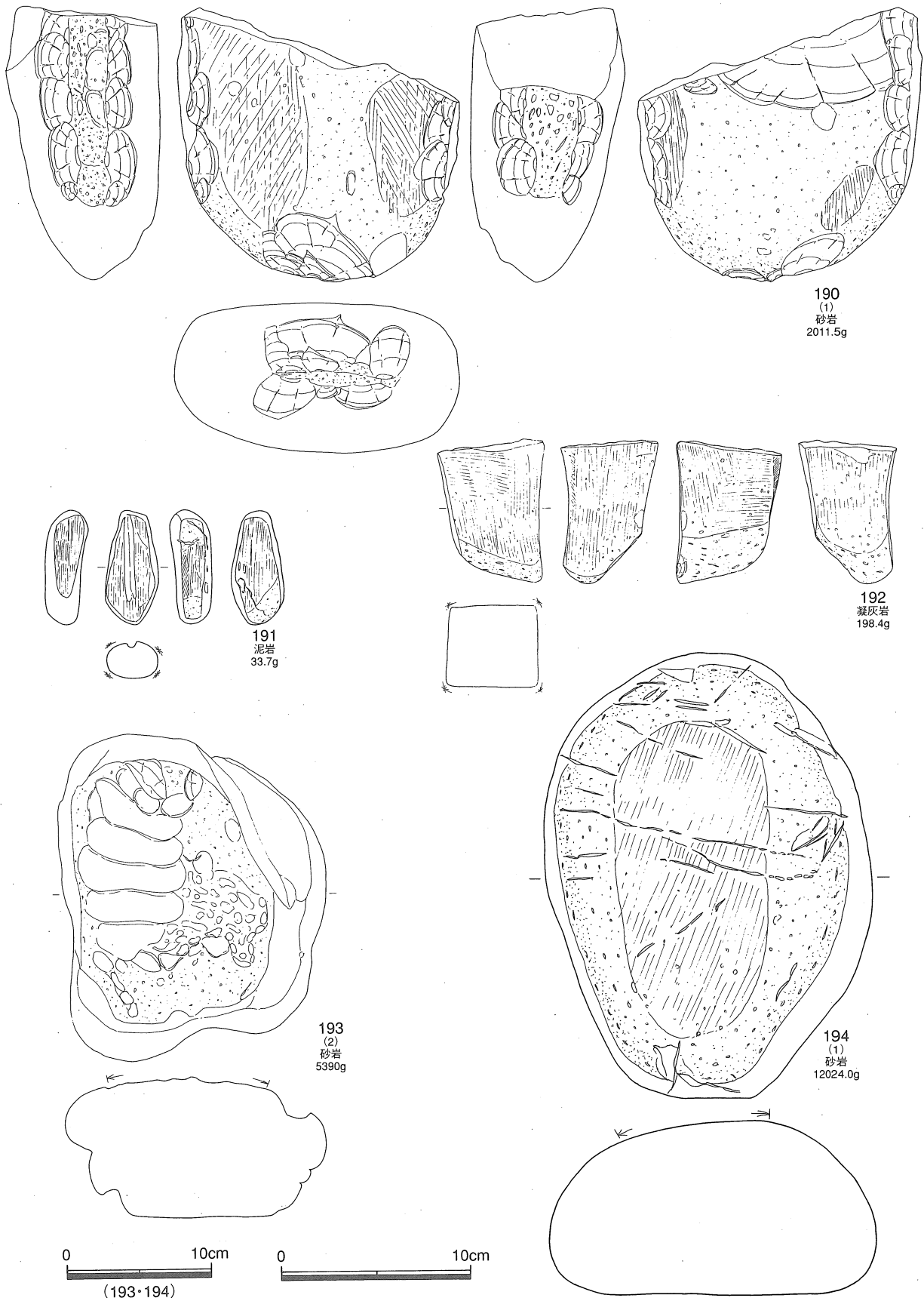
第177図 金属器・玉類・石器実測図2

B区 170=SB29-B 174=13号周溝溝主体部 179=SB69 183=SB73
 171=SB36 175・176=SK28 180=SB2 184=SB87
 172=SB62 177=SB43 181=SB49
 173=SB80 178=SB67 182=SB12-D壁溝内



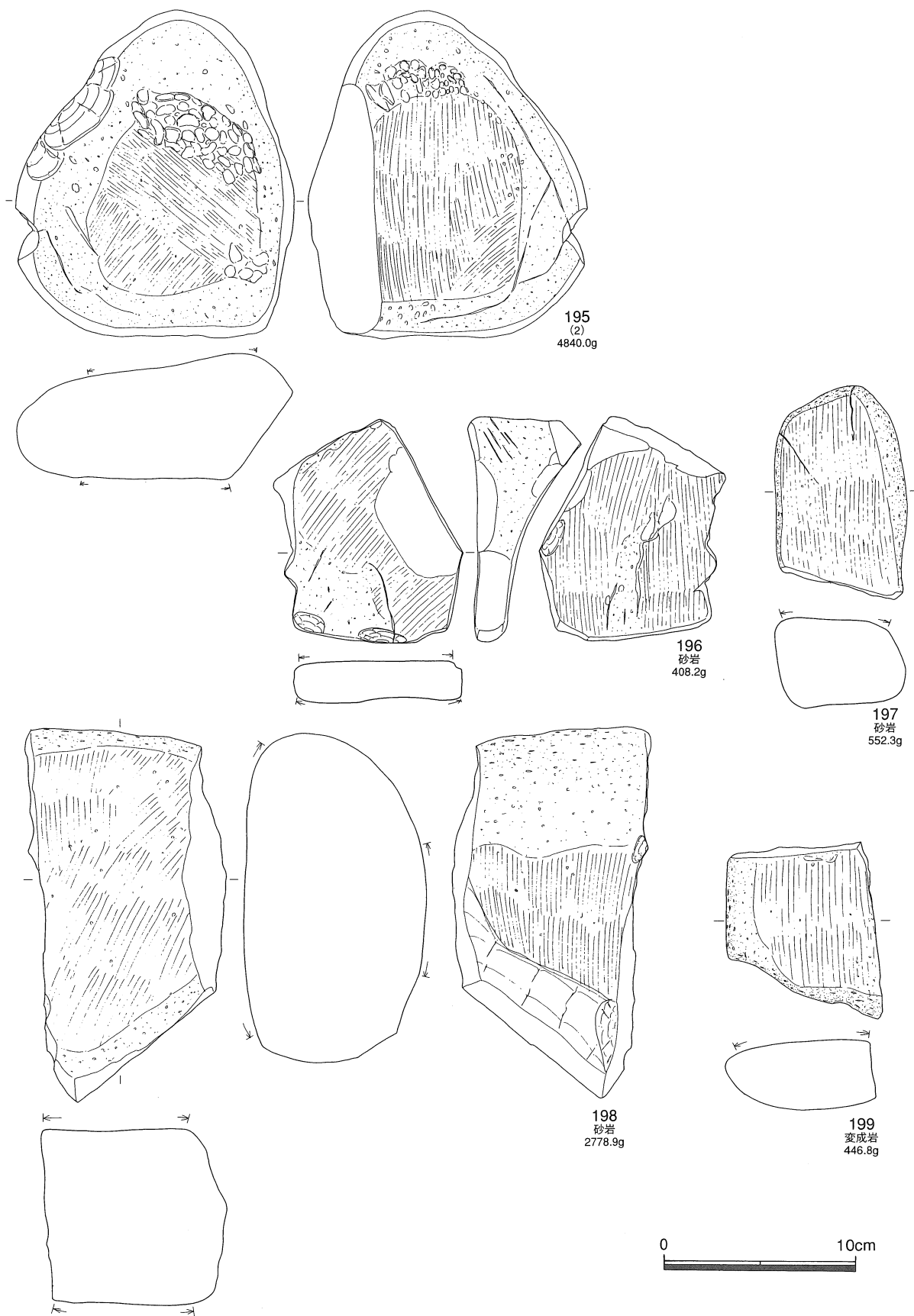
第178図 金属器・玉類・石器実測図 3

B区 185=SB73 187=SB88
186・188=SB67 189=SB12-D



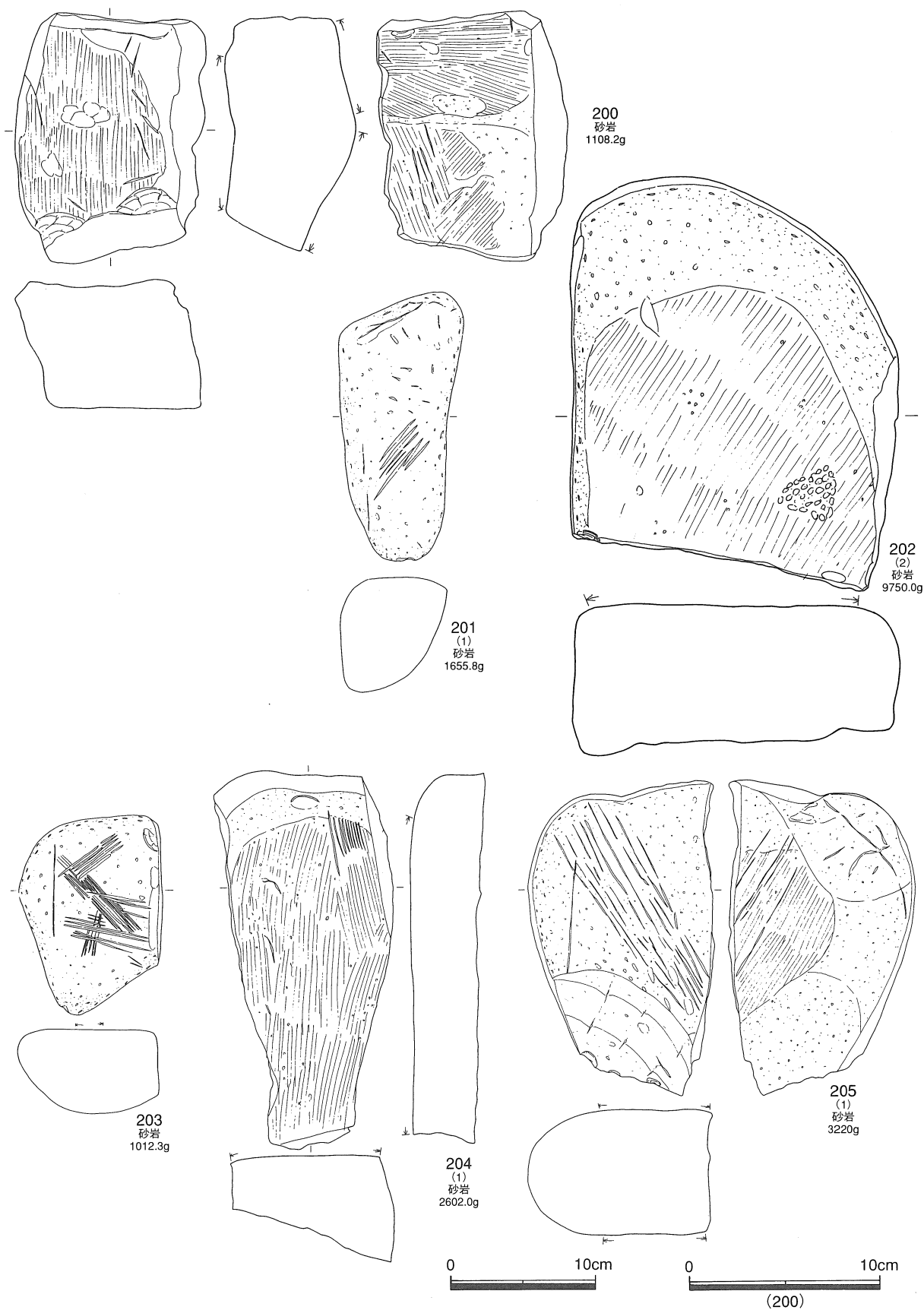
第179図 金属器・玉類・石器実測図 4

B区 190=SB27 193=SB51
191=SB45 194=SB59
192=SB12-B



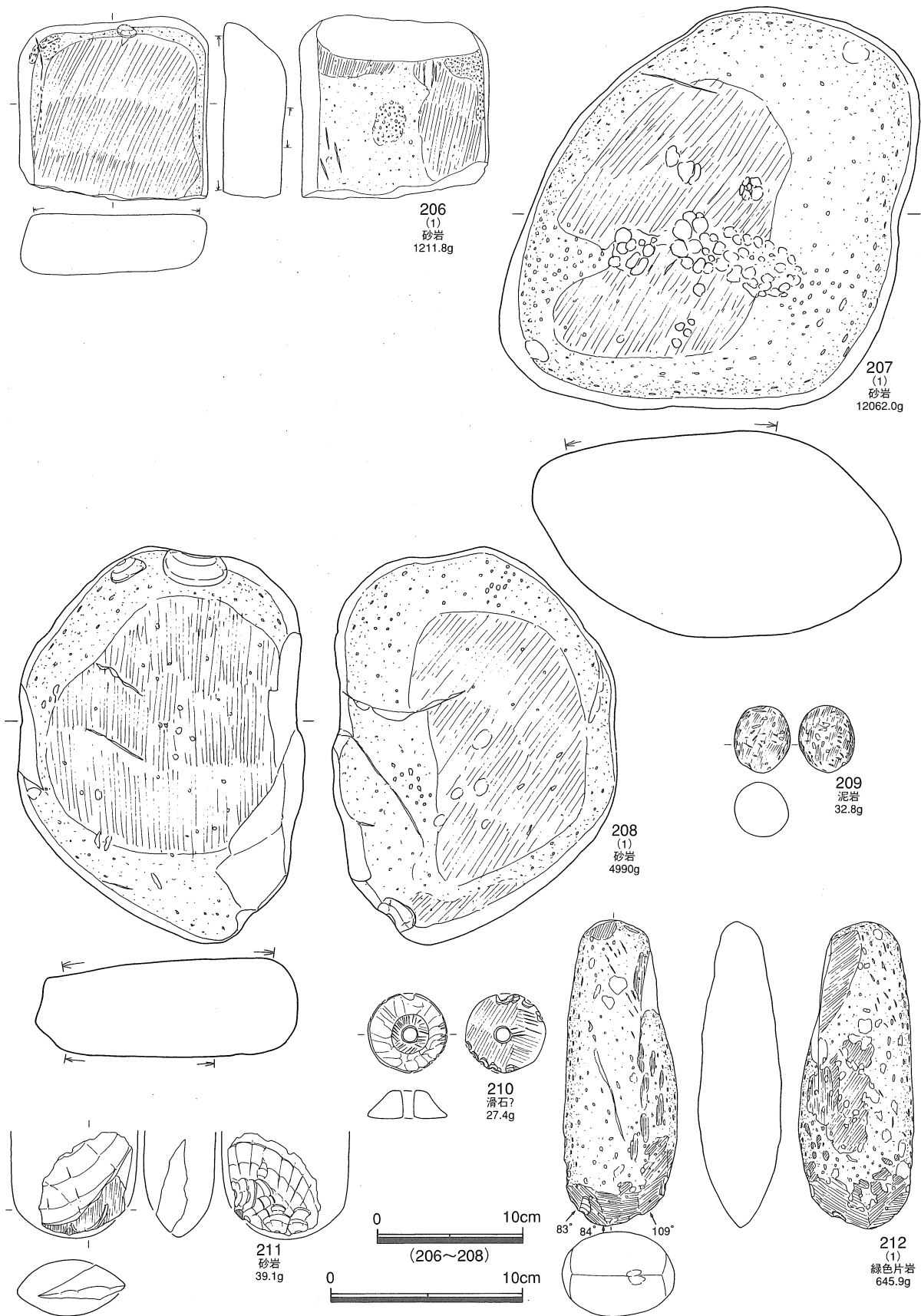
第180图 金属器・玉類・石器実測図 5

B区 195=SB53-C壁溝 198=SB59
 196=B8区表土 199=SB70
 197=SH44・P1



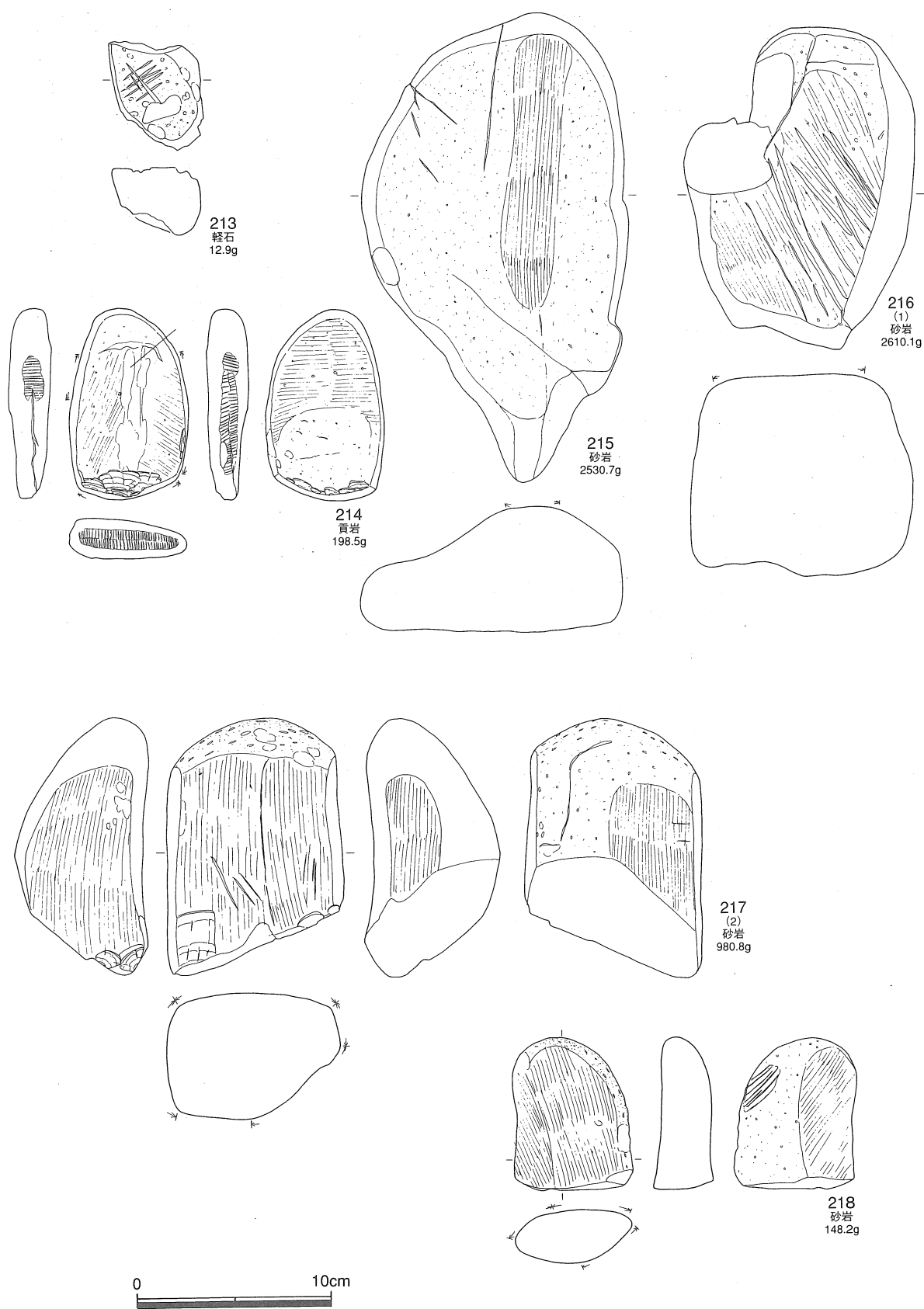
第181図 金属器・玉類・石器実測図 6

B区 200=SB63床面 204=SB53
201・202=SB24 205=SB55
203=SB51



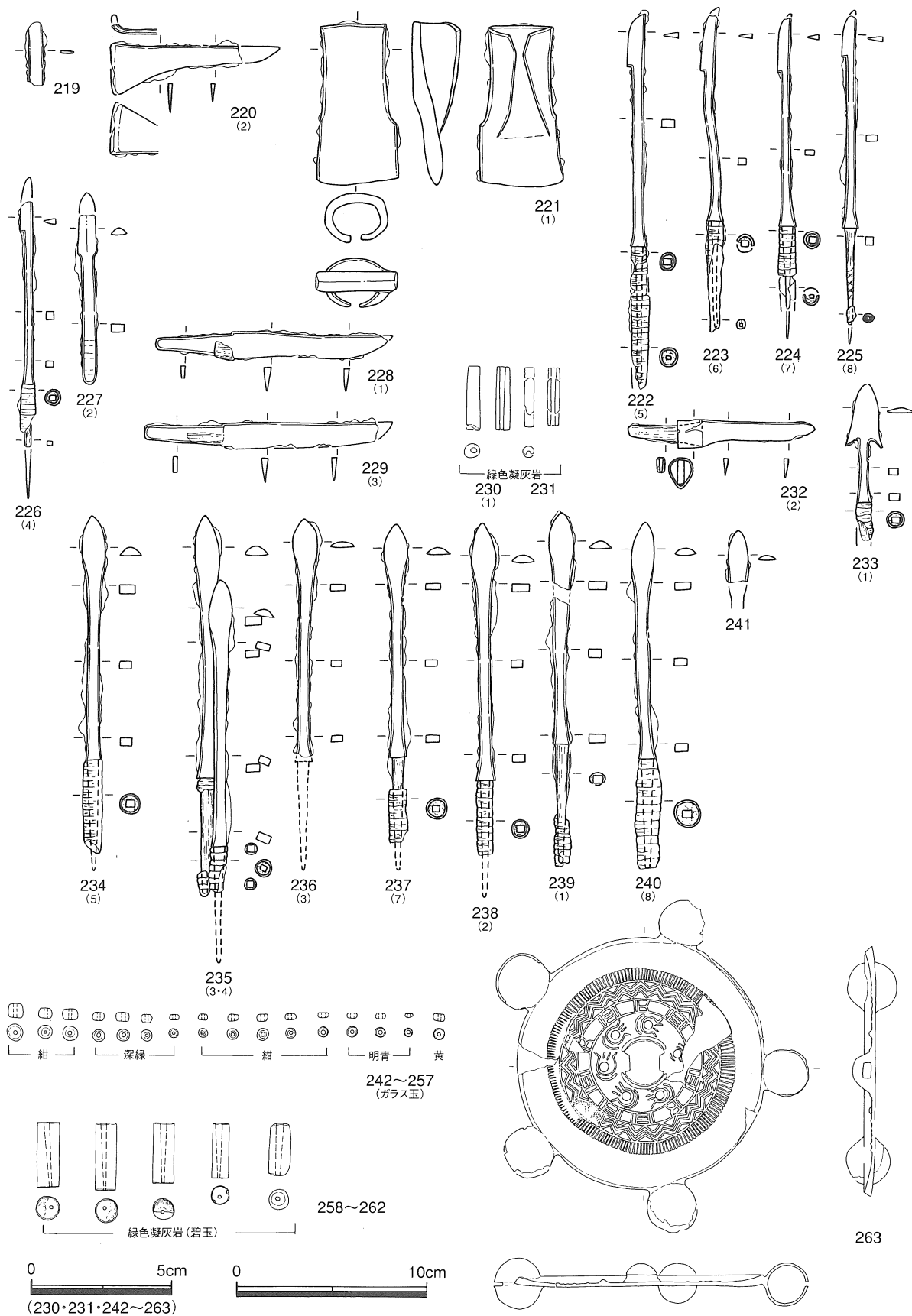
第182図 金属器・玉類・石器実測図 7

B区 206=SB51 210=G4区表土
207=SB29-A 211=C3区表土
208=SB36 212=SK12
C区 209=G3区表土

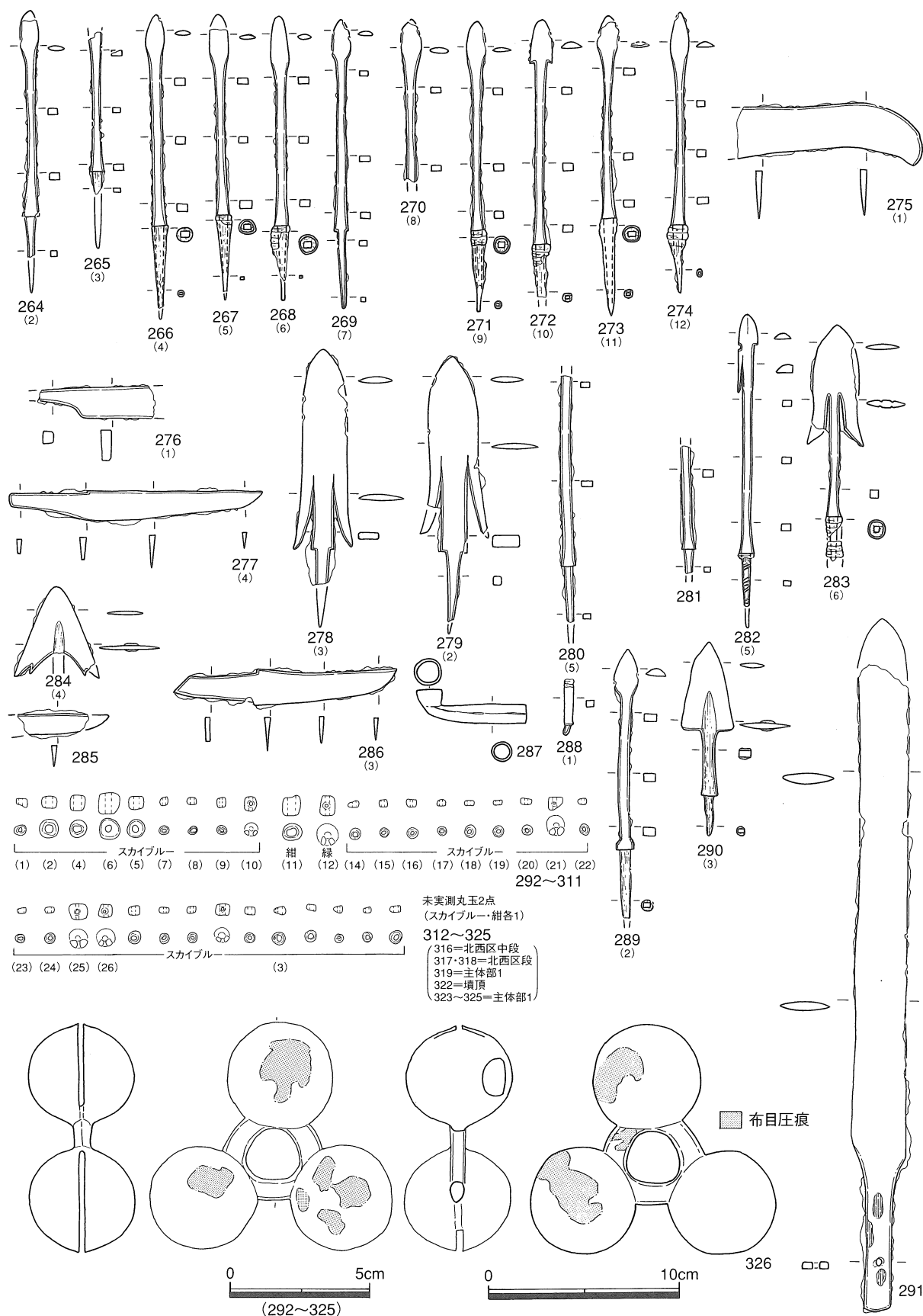


第183図 金属器・玉類・石器実測図 8

C区 213=C3区表土 215~217=12号墳主体部1
214=G3区表土 218=12号墳主体部2

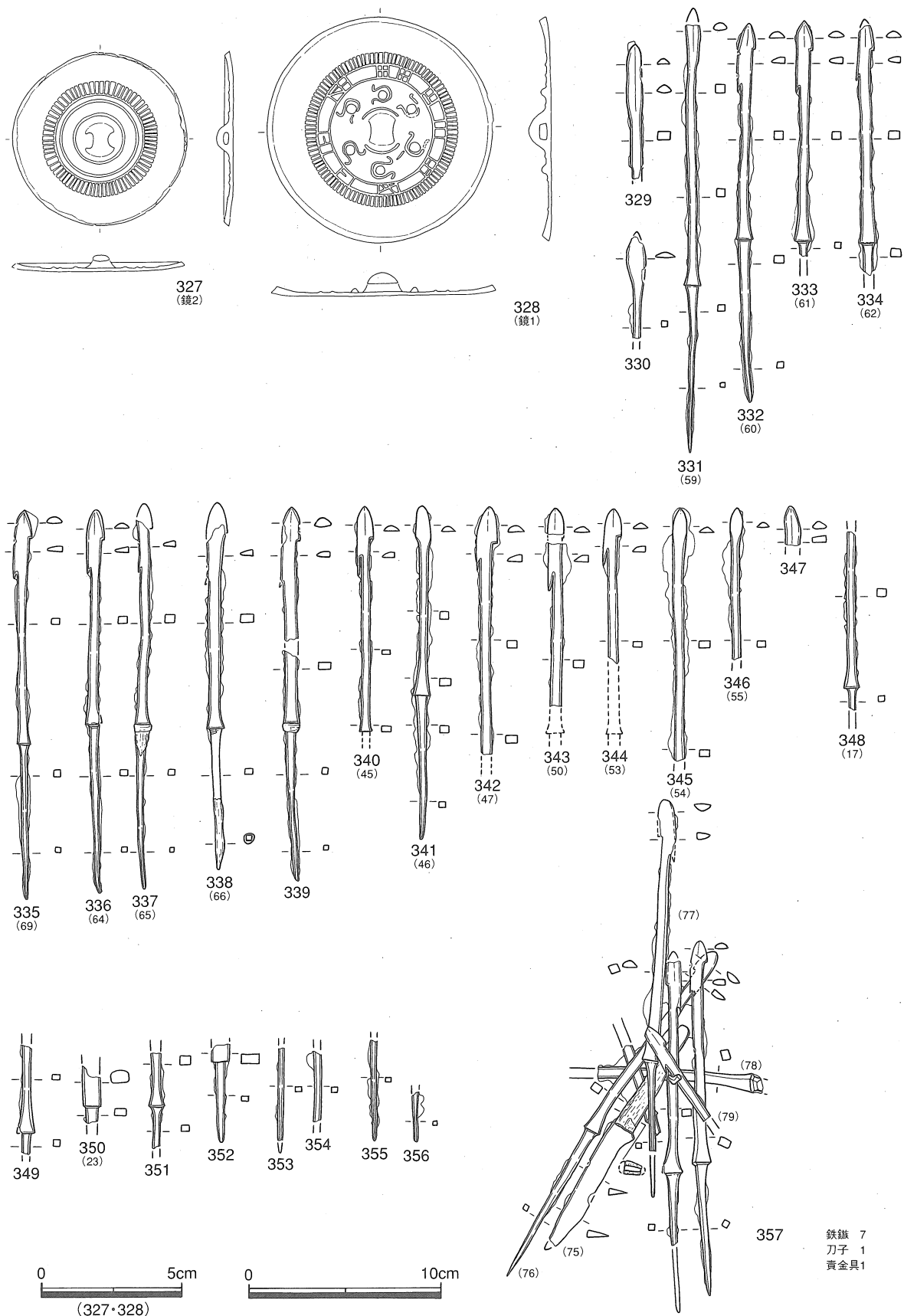


第184図 金属器・玉類・石器実測図9



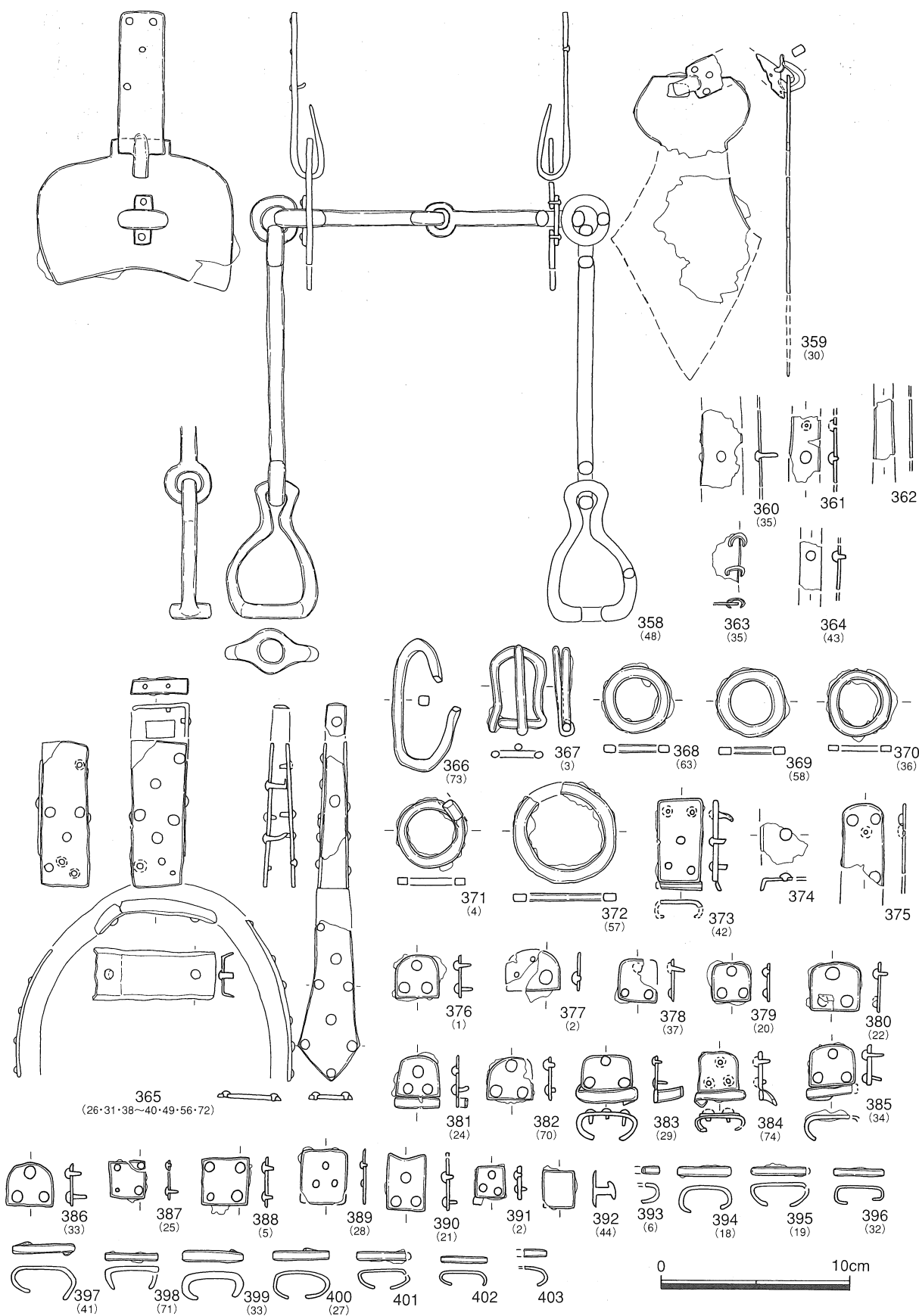
第185図 金属器・玉類・石器実測図10

B区 264~274=29号墳墳頂 281~286=32号墳主体部 291~325=10号墳主体部1
275=29号墳-SK2 287=山頂部・表土 326=12号墳主体部1
276~280=30号墳主体部 C区 288~290=10号墳主体部2



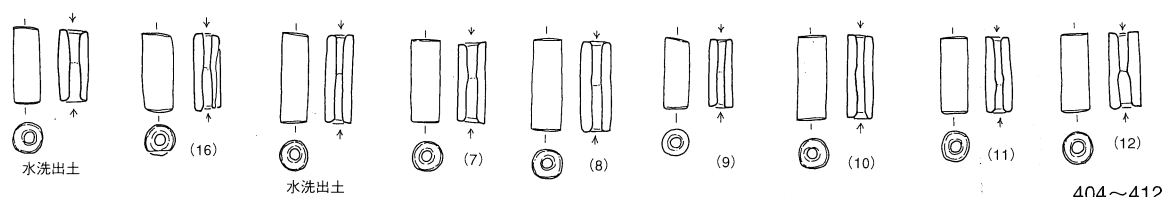
第186図 金属器・玉類・石器実測図11

C区 327~357=12号墳主体部1

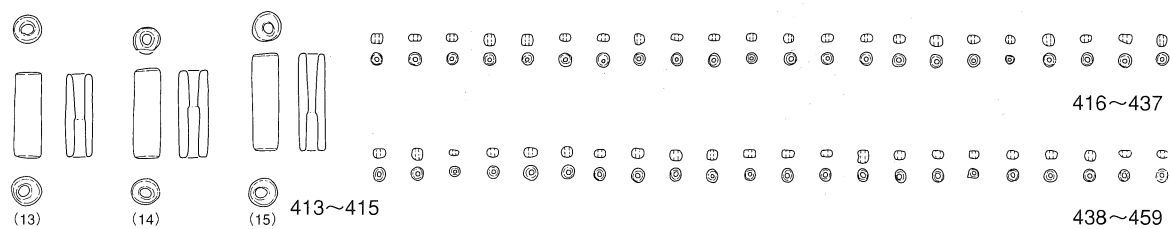


第187图 金属器・玉類・石器実測図12

C区 358~403=12号墳主体部1



404~412



416~437

438~459



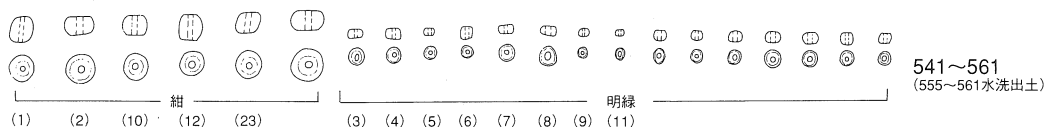
460~490



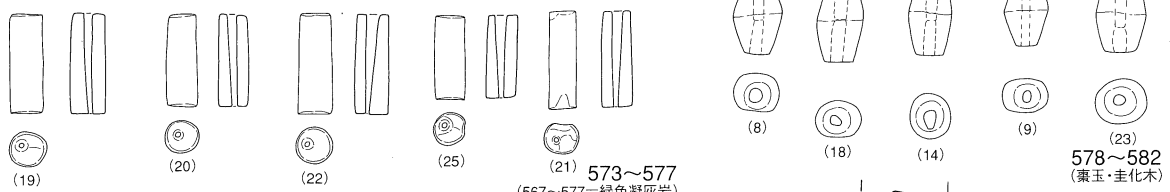
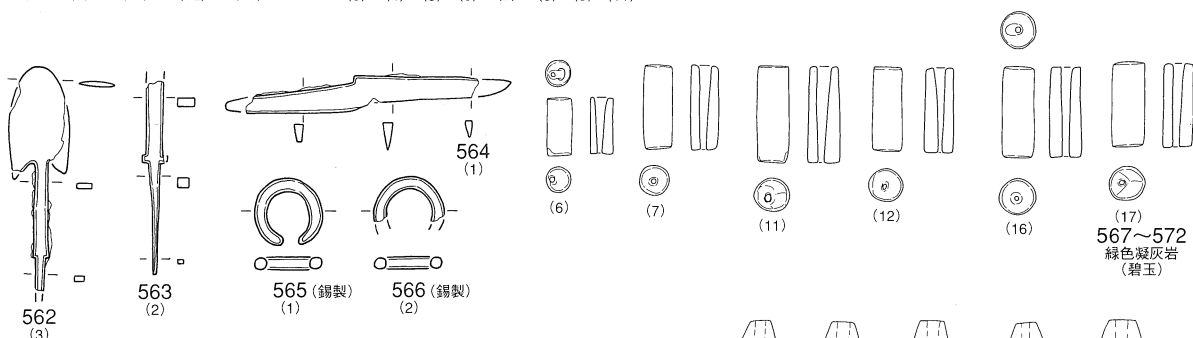
491~522



523~540 (416~540すべて紺)

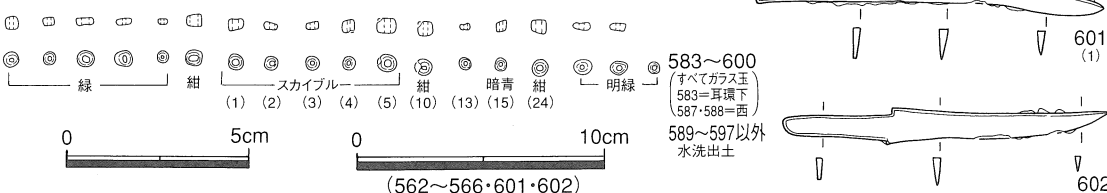


541~561
(555~561水洗出土)

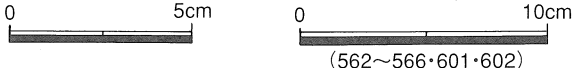


573~577
(567~577=緑色凝灰岩)

578~582
(碧玉・圭化木)

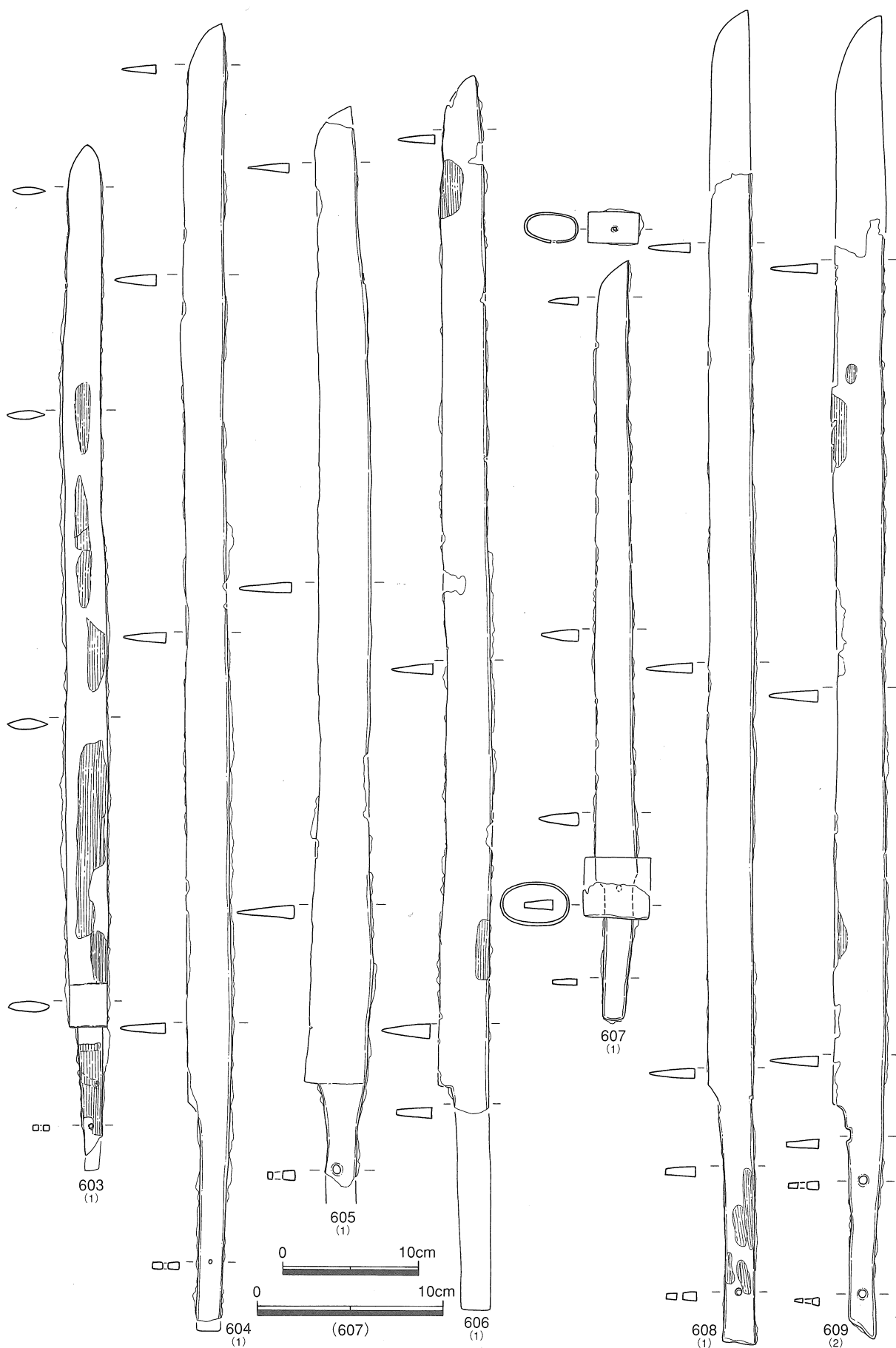


583~600
(すべてガラス玉
583=耳環下
587~588=西
589~597以外
水洗出土)



第188図 金属器・玉類・石器実測図13

C区 404~415=12号墳主体部1
416~540=12号墳主体部1掘方
541~561=12号墳主体部2棺上
562~600=13号墳主体部1
601・602=14号墳主体部



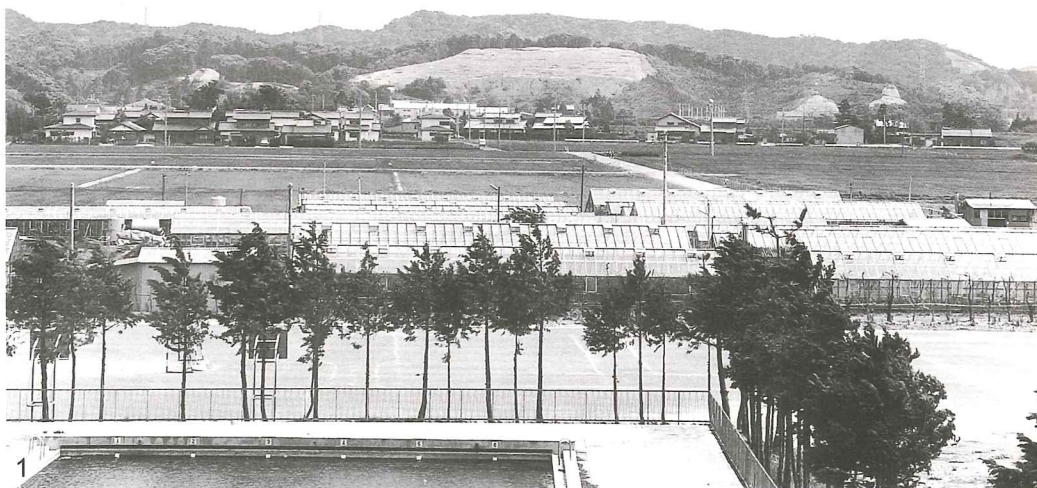
第189図 金属器・玉類・石器実測図14

B区 603=26号墳主体部2
604=29号墳墳頂
605=30号墳主体部
606・607=32号墳主体部
C区 608・609=12号墳主体部2

写真図版

写真図版目次

- | | | | |
|----------|-----------------------|----------|----------------------|
| 図版 1 - 1 | 遺跡遠景 | 図版18 - 1 | B23・21号墳検出状況 |
| - 2 | 遺跡遠景航空写真 | - 2 | B26号墳墳丘礫検出状況 |
| 図版 2 - 1 | A - 2区南部分全景 | - 3 | B26号墳墳丘礫下主体部検出状況 |
| - 2 | A - 2区北部分全景 | - 4 | B18号墳検出状況 |
| 図版 3 - 1 | A地区2号方形周溝墓検出状況 | 図版19 - 1 | B29・30号墳、土坑墓検出状況 |
| - 2 | B5号墳検出状況 | - 2 | B27号墳検出状況 |
| - 3 | 1号方形周溝墓主体部検出状況 | - 3 | B30号墳主体部検出状況 |
| - 4 | B4号墳主体部検出状況 | - 4 | B27号墳主体部検出状況 |
| 図版 4 - 1 | B地区全景航空写真 | 図版20 - 1 | B19号墳検出状況 |
| - 2 | B地区全景 | - 2 | B32号墳検出状況 |
| 図版 5 - 1 | B地区東部分竪穴住居群全景 | - 3 | B19号墳周溝内土器出土状況 |
| - 2 | B地区東部分竪穴住居群全景 | - 4 | B32号墳主体部検出状況 |
| - 3 | B地区西部分竪穴住居群全景 | - 5 | B29号墳西裾土坑墓検出状況 |
| 図版 6 - 1 | B6・7グリット付近竪穴住居群検出状況 | - 6 | SK2内鉄鎌出土状況 |
| - 2 | B8・C8グリット 付近竪穴住居群検出状況 | 図版21 - 1 | C区北部分全景 |
| - 3 | C1・D1グリット 付近竪穴住居群検出状況 | - 2 | C区南部分全景 |
| 図版 7 - 1 | SB2 検出状況 | 図版22 - 1 | SX1 検出状況 |
| - 2 | SB7 検出状況 | - 2 | SX1 木棺・土坑墓群検出状況 |
| - 3 | SB14・15・16 検出状況 | - 3 | SX1 主体部2 検出状況 |
| 図版 8 - 1 | SB29 検出状況 | 図版23 - 1 | SX1 主体部2 上層遺物出土状況 |
| - 2 | SB41、SH16 検出状況 | - 2 | 小銅鐸出土状況 |
| - 3 | SB41 検出状況 | - 3 | SX1 西側段状遺構検出状況 |
| 図版 9 - 1 | SB45 検出状況 | - 4 | C区土器棺1 検出状況 |
| - 2 | SB60・61、SH43 検出状況 | 図版24 - 1 | 2号方形周溝墓検出状況 |
| - 3 | SB80 検出状況 | - 2 | SB1・2 検出状況 |
| 図版10 - 1 | SB73・77、SB72 検出状況 | - 3 | SB3・4 検出状況 |
| - 2 | SB74 検出状況 | 図版25 - 1 | B12号墳検出状況1 |
| - 3 | SB8、SH33 検出状況 | - 2 | B12号墳検出状況2 |
| 図版11 - 1 | SB64 炉跡検出状況 | - 3 | B12号墳検出状況3 |
| - 2 | SB22 炉跡検出状況 | - 4 | B12号墳主体部1・2 検出状況 |
| - 3 | SB23 炉跡検出状況 | 図版26 - 1 | B12号墳主体部1 検出状況 |
| - 4 | SB33 鉄鎌出土状況 | - 2 | 馬具・鉄鏃出土状況 |
| - 5 | SB64 鉄斧出土状況 | - 3 | 三環鈴・銅鏡出土状況 |
| 図版12 - 1 | SH19 検出状況 | - 4 | B12号墳主体部2 銅鏡出土状況 |
| - 2 | SH14 検出状況 | - 5 | 1号方形周溝墓主体部1 土器出土状況 |
| - 3 | SH1 検出状況 | 図版27 - 1 | B14号墳検出状況 |
| 図版13 - 1 | SK21 焼土坑検出状況 | - 2 | B14号墳主体部1 検出状況 |
| - 2 | SH89及びSK2 焼土坑検出状況 | - 3 | 愛野向山横穴墓1号横穴 |
| - 3 | SK2 焼土坑検出状況 | 図版28 - 1 | B10・13号墳検出状況 |
| 図版14 - 1 | 9～11号方形周溝墓検出状況 | - 2 | B10号墳主体部検出状況 |
| - 2 | 10号方形周溝墓検出状況 | - 3 | B13号墳・3号方形周溝墓主体部検出状況 |
| - 3 | 11号方形周溝墓検出状況 | - 4 | SK7 検出状況 |
| 図版15 - 1 | 3号方形周溝墓検出状況 | 図版29 | 出土遺物1 |
| - 2 | 6号方形周溝墓、SB64 検出状況 | 図版30 | 出土遺物2 |
| - 3 | 3号方形周溝墓主体部検出状況 | 図版31 | 出土遺物3 |
| - 4 | 6号方形周溝墓主体部検出状況 | 図版32 | 出土遺物4 |
| 図版16 - 1 | 13号方形周溝墓検出状況 | 図版33 | 出土遺物5 |
| - 2 | 13号方形周溝墓主体部検出状況 | 図版34 | 出土遺物6 |
| - 3 | 主体部内管玉出土状況 | 図版35 | 出土遺物7 |
| - 4 | B地区土器棺2 検出状況 | | |
| 図版17 - 1 | B地区山頂部古墳群東部分全景 | | |
| - 2 | B22・28・26号墳検出状況 | | |
| - 3 | B地区山頂部古墳群西部分全景 | | |



1.遺跡遠景、沖野平野面には、原野谷川、逆川などが流れている。（北より）



2.遺跡遠景航空写真、右手よりA地区、B地区、C地区が展開する。（北東より）



1.A-2区南部分全景、B4号墳（左）、B5号墳（右）検出状況、
双円墳状をなしている。（北より）



2.A-2区北部分全景、B3号、1号方形周溝墓検出状況（南より）

1. A地区 2号方形周溝墓検出状況
(東より)



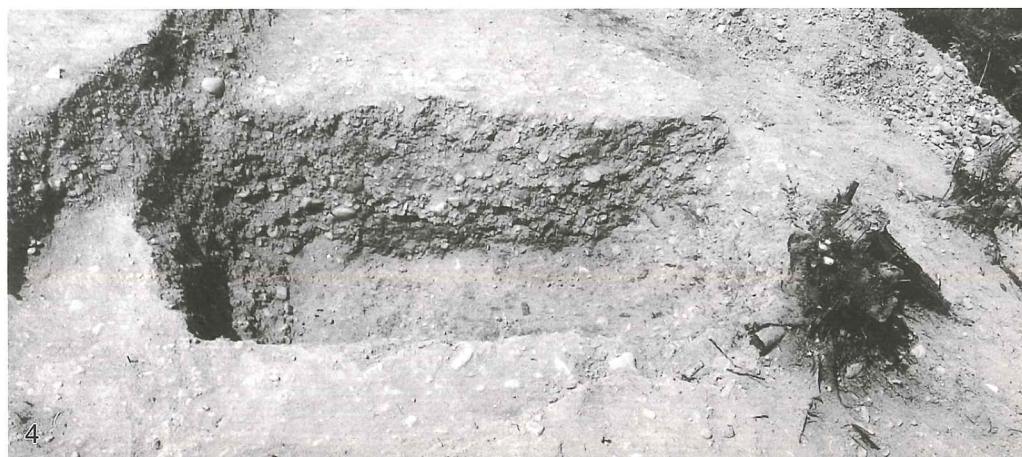
2. B 5号墳検出状況 (北より)



3. 1号方形周溝墓主体部検出状況
小口部分に小ピットがある。
(西より)



4. B 4号墳主体部検出状況
(北より)





1. B地区全景航空写真、山頂部に古墳群、斜面部には竪穴住居跡がある。（北より）



2. B地区全景（北東より）

1. B地区東部分竪穴住居群全景、
東西に連続して建てられている。
(西より)

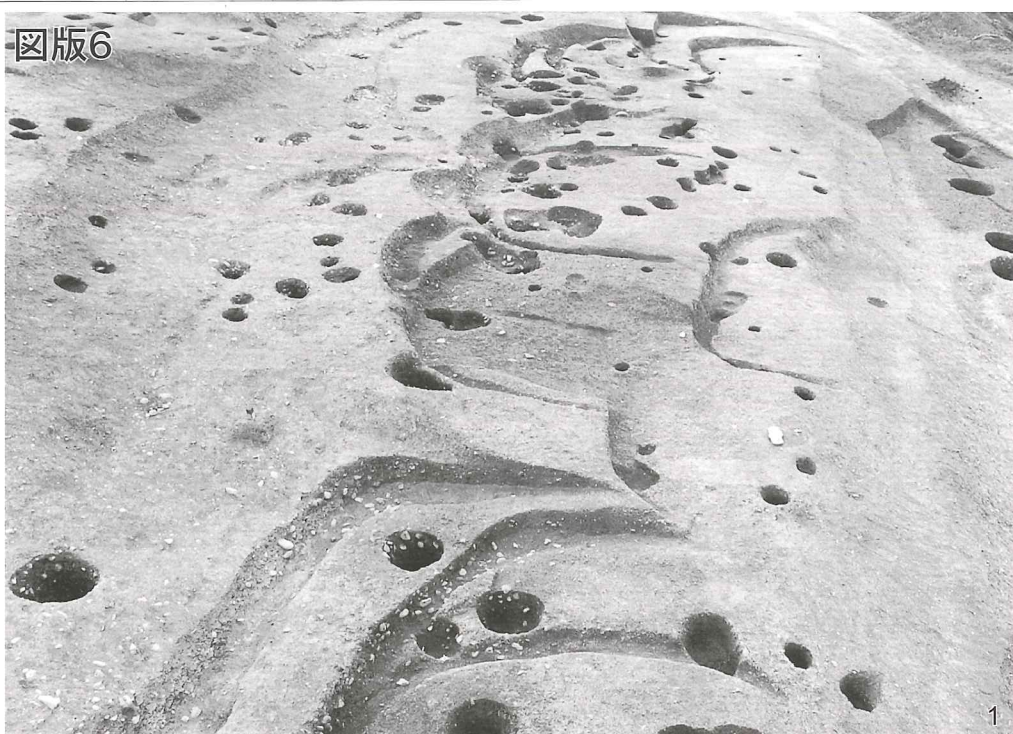


2. B地区東部分竪穴住居群全景
(南東より)



3. B地区西部分竪穴住居群全景
(東より)

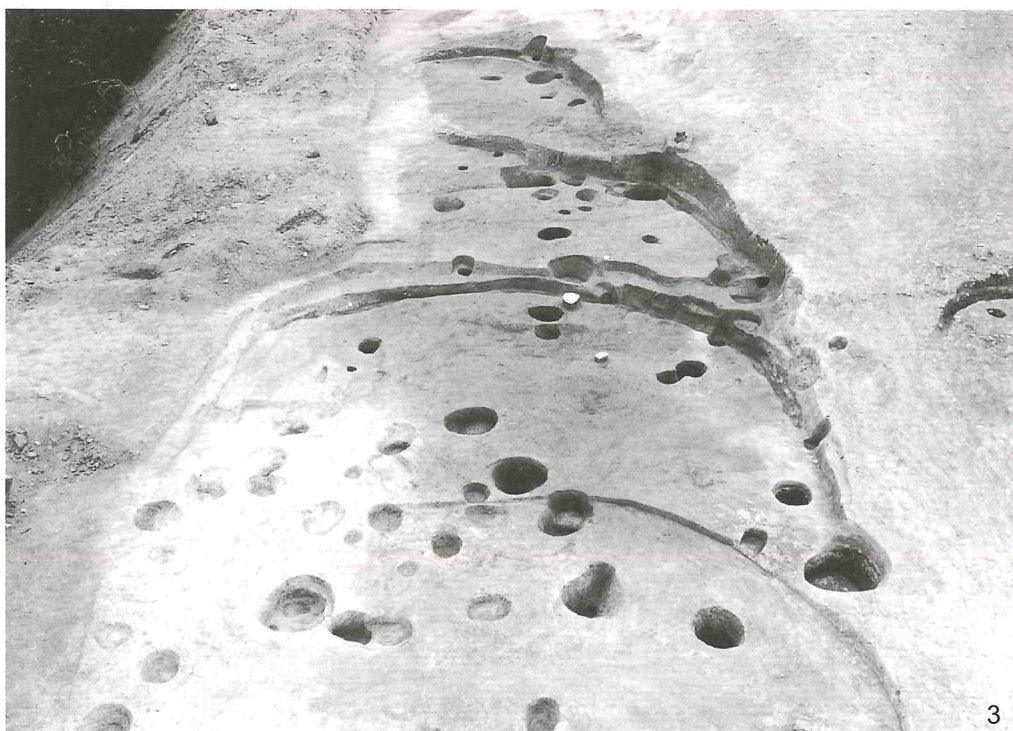




1. B 6・B 7 グリッド付近竪穴住
居群検出状況、手前より奥へ
SB25・19・17・18 (東より)



2. B 8・C 8 グリッド付近竪穴住
居群検出状況、手前より奥へ
(SB62・58・57) (東より)



3. C 1・D 1 グリッド付近竪穴住
居群検出状況、手前より
SB38・36・33・34 (北より)

1. S B 2 検出状況、大形の隅丸方形住居跡（北より）



2. S B 7 検出状況、床面積を縮小しながら建て替えられている。（北より）



3. S B 14・15・16 検出状況、床面積を拡大しながら建て替えられている。





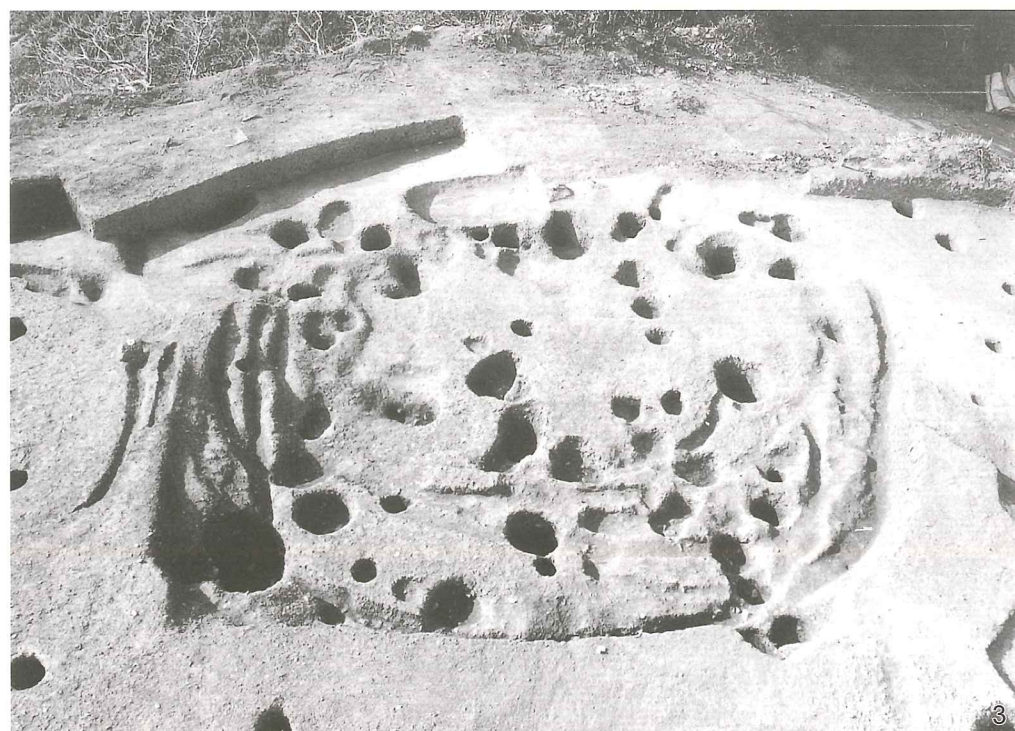
1

1. S B 29検出状況、数回の重複がある。（北西より）



2

2. S B 41、S H 16検出状況、大形掘立柱建物と竪穴住居が重複している。（南より）



3

3. S B 41検出状況、頻繁に建て替えられている。（南より）

1. S B 45検出状況（北より）



2. S B 60・61、S H 43検出状況
（南より）



3. S B 80検出状況、焼失家屋、
壁溝が屋外にのびている。
（北より）

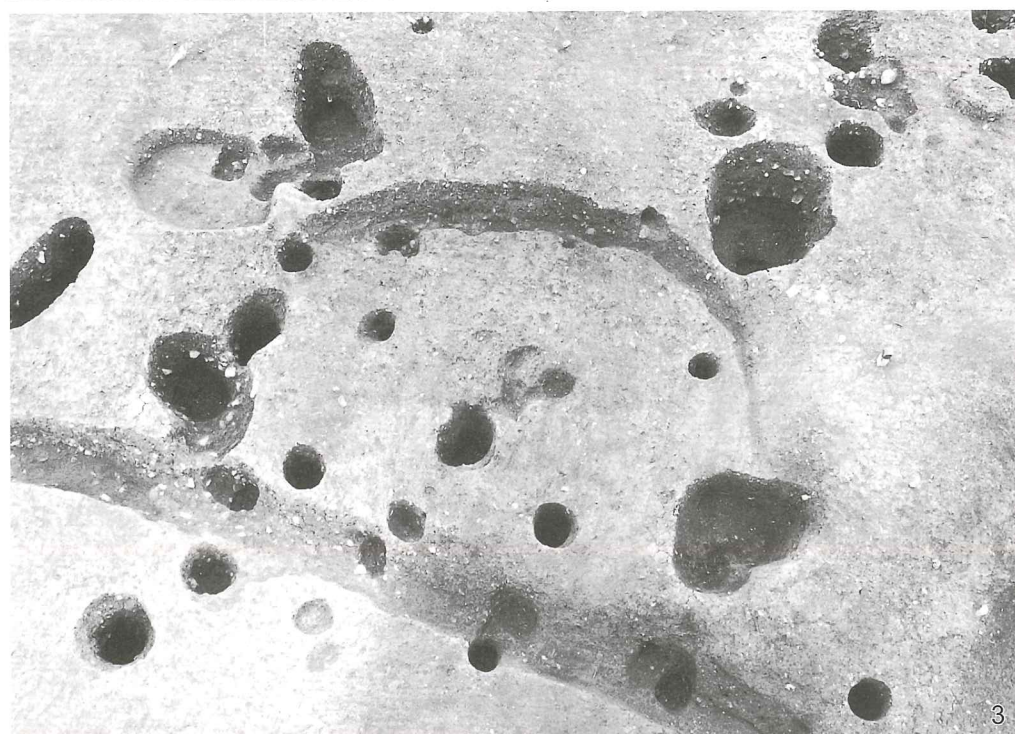




1. S B 73・77 (手前より)、
S B 72 (右手奥) 検出状況
(東より)

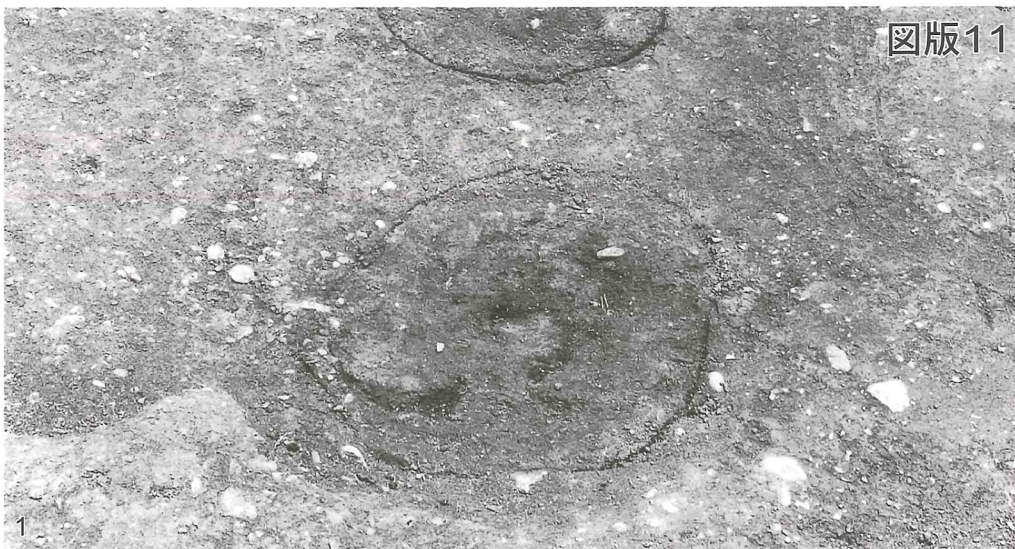


2. S B 74検出状況 (北より)



3. S B 8、S H 33検出状況
小形竪穴住居 (S B 8) と掘立
建物 (S H 33) が重複している
(北より)

1. S B 64 炉跡検出状況、地床炉
(西より)



2. S B 22 炉跡検出状況、配石の
ある炉 (南より)



3. S B 23 炉跡検出状況、粘土床の
ある炉 (北より)

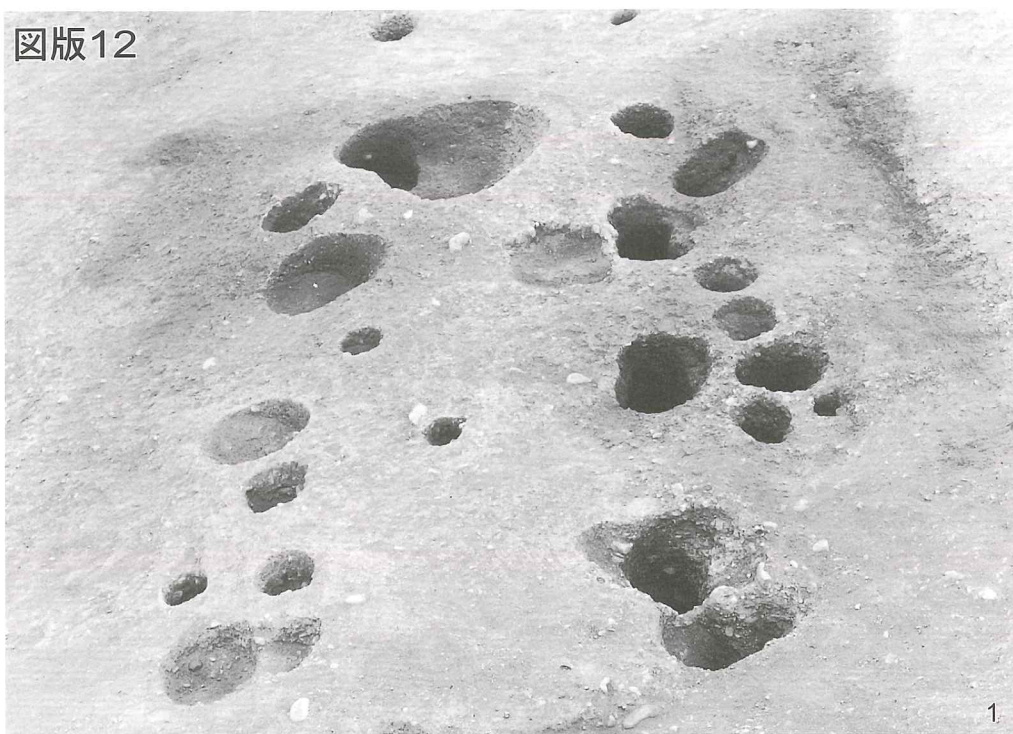


4. S B 33 鉄鎌出土状況 (北より)

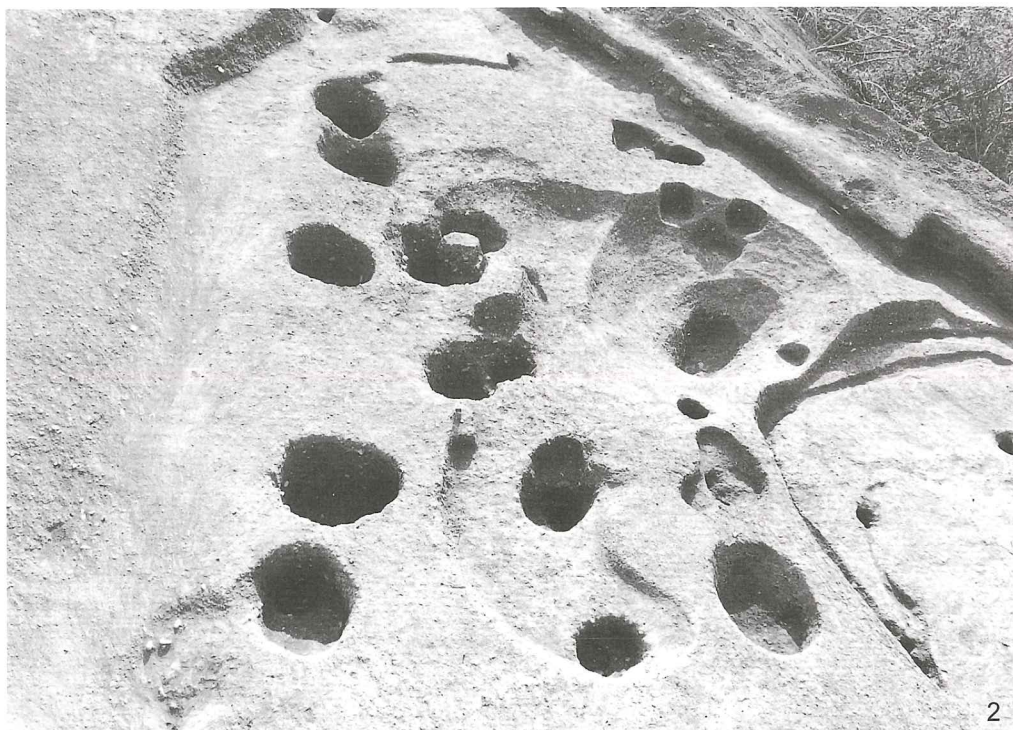


5. S B 64 鉄斧出土状況 (北より)

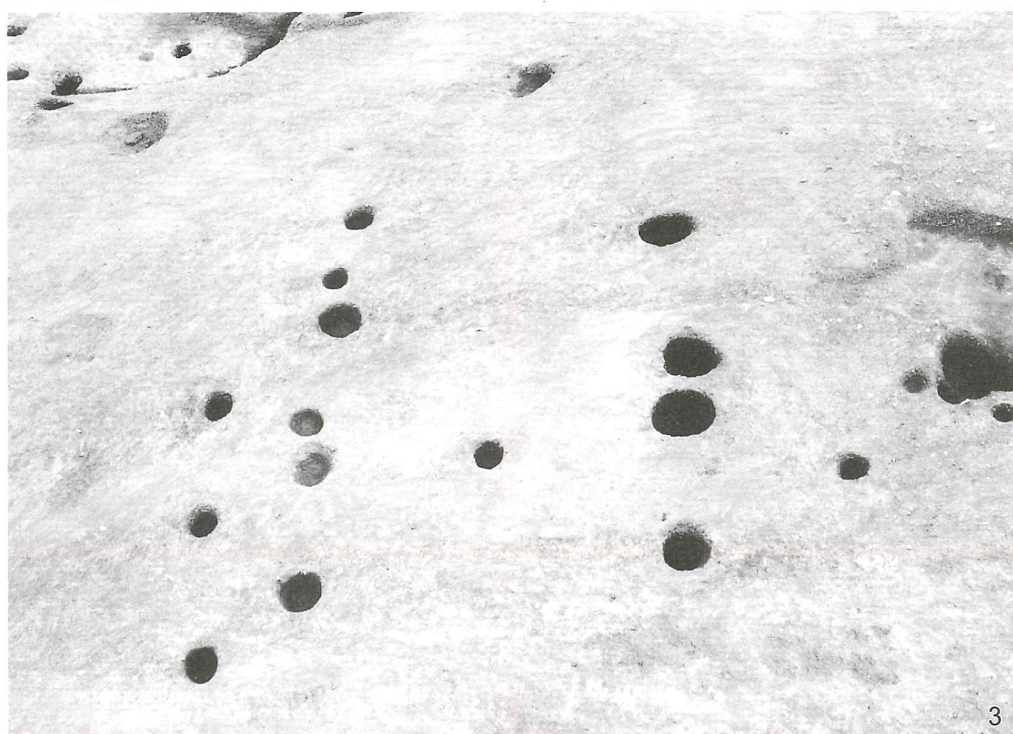




1. SH19検出状況、柱穴掘り方が
大きい大形の建物（東より）



2. SH14検出状況、2～3棟の重
複がある。（東より）



3. SH1検出状況、手前左手小形
の建物がある。（西より）

1. S K 21、焼土坑検出状況
(北より)



2. S H 89及びS K 2 焼土坑検出
状況 (北西より)



3. S K 2 焼土坑検出状況 (南より)





1. 9～11号方形周溝墓検出状況、
きれいにならんでいる。
(北より)



2. 10号方形周溝墓検出状況、主体
部が中央にない。(東より)



3. 11号方形周溝墓検出状況、主体
部が円形土壇(東より)

1. 3号方形周溝墓検出状況、主体部が2基ある（北西より）



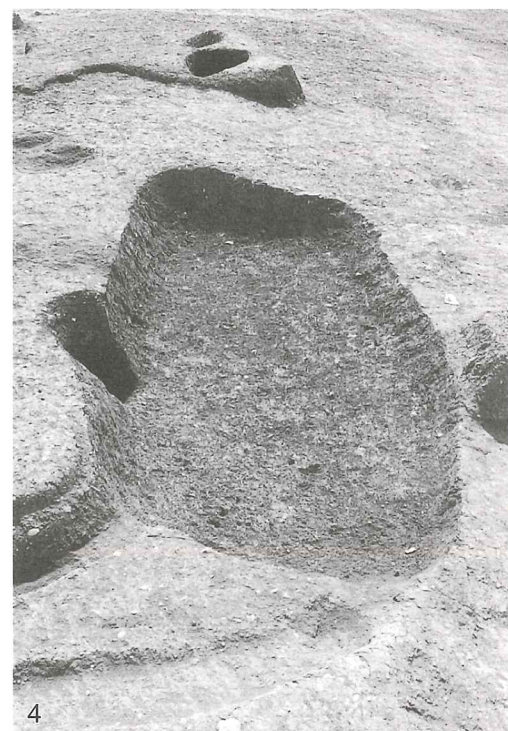
2. 6号方形周溝墓、S B64検出状況、互に重複している。（北東より）

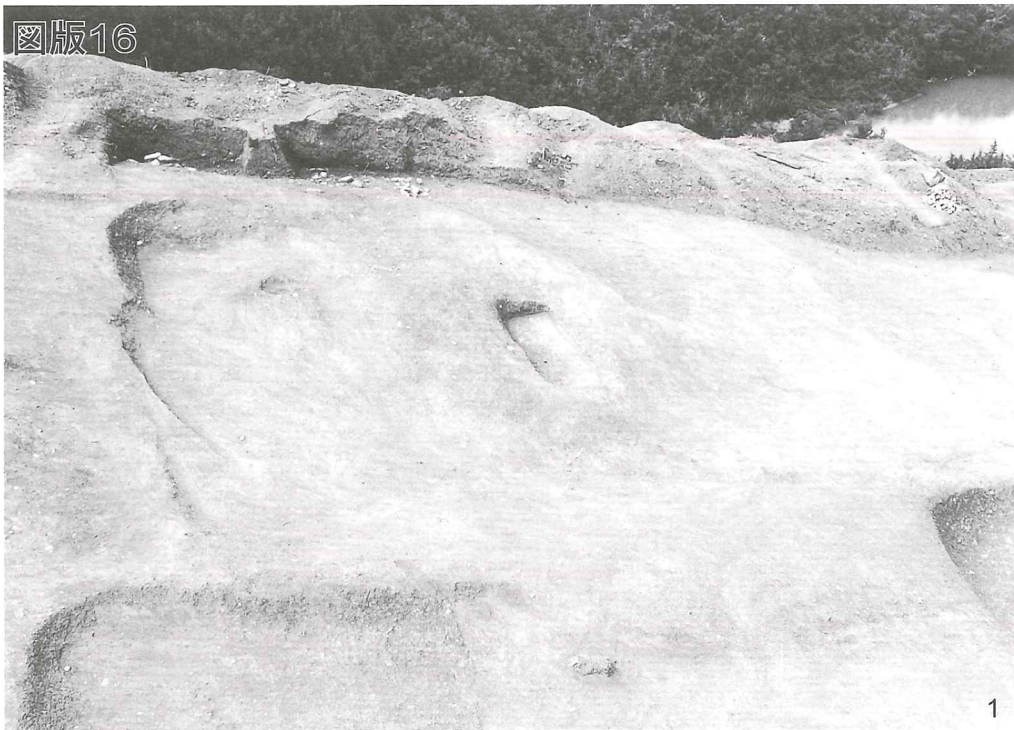


3. 3号方形周溝墓主体部検出状況（東より）



4. 6号方形周溝墓主体部検出状況（東より）





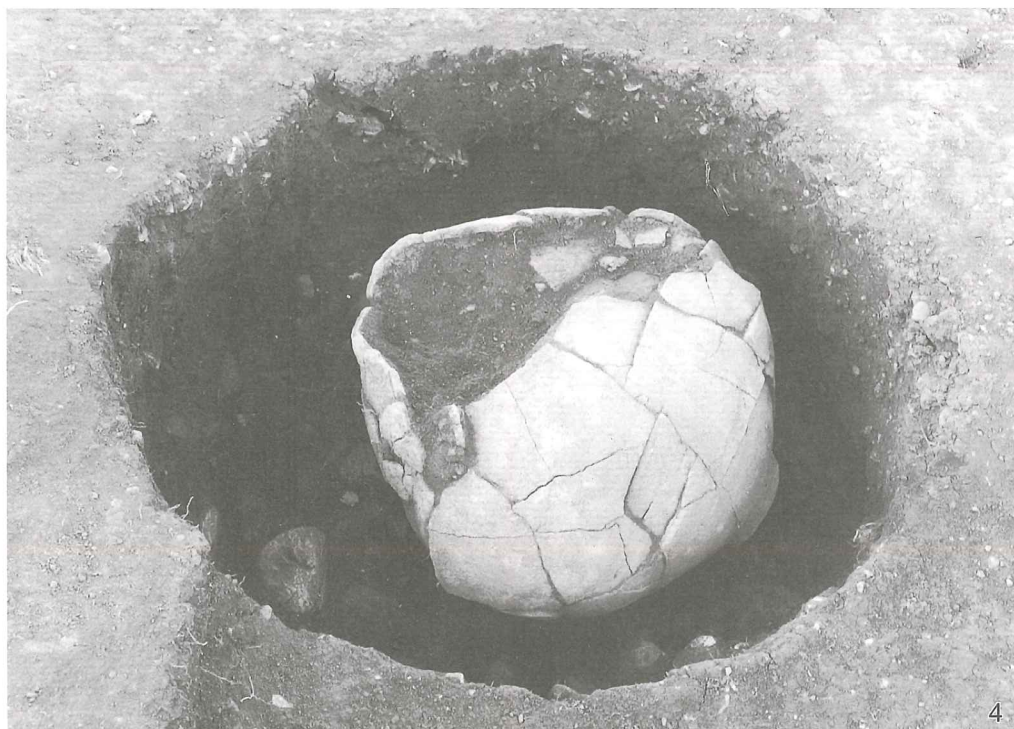
1.13号方形周溝墓検出状況
(東より)



2.13号方形周溝墓主体部検出状況
(東より)



3.主体部内管玉出土状況



4.B地区土器棺2 (壺形棺)
検出状況 (南より)

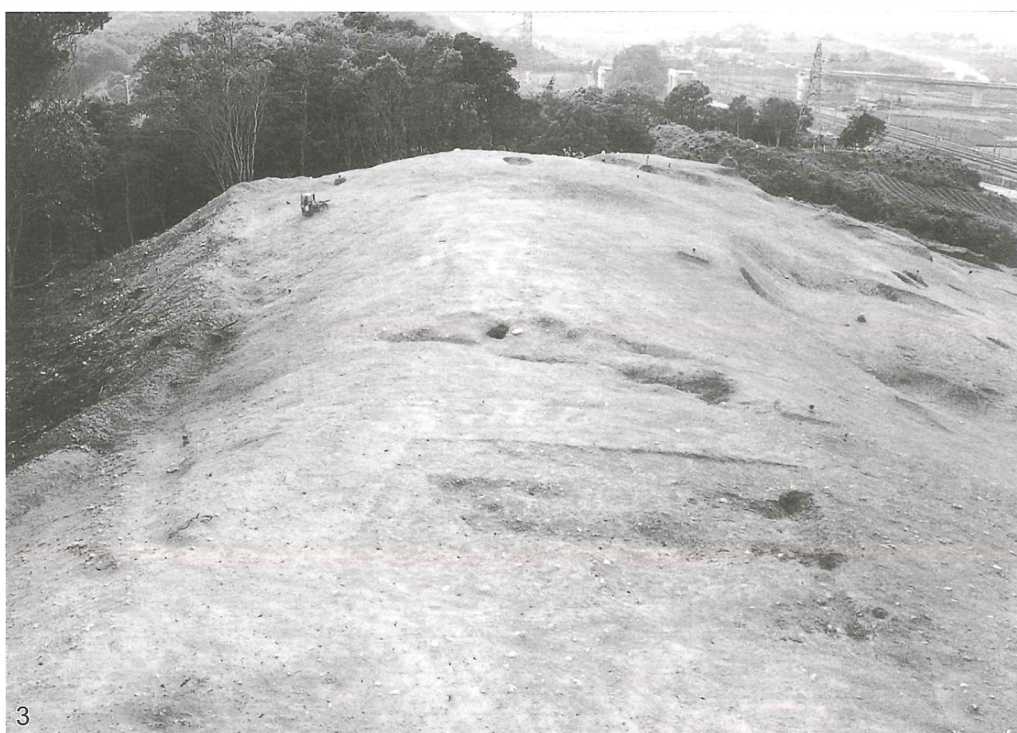
1. B地区山頂部古墳群東部分全景
手前よりB20・23・21号墳
(西より)



2. B22・(手前より) 28・26号墳
検出状況



3. B地区山頂部古墳群西部分全景、
中央奥B6号、右手前B27号、
右手奥B30号墳(東より)





1. B23 (奥)・21号墳 (手前)
検出状況、周溝一部切り合う。
(東より)



2. B26号墳墳丘礫検出状況、積
石塚か。(西より)



3. B26号墳礫下主体部検出状況、
剣、鉄鏃などが副葬されている。
(西より)



4. B18号墳検出状況、小形の方墳。
(西より)

1. B29 (奥) ・ 30号墳 (手前) 、
土坑墓 (右) 検出状況 (北より)



2. B27号墳検出状況 (西より)



3. B30号墳主体部検出状況、直
刀、鉄鍬が副葬されていた。
(東より)



4. B27号墳主体部検出状況、か
って五鈴鏡が出土したと推定
される。(東より)





1. B19号墳検出状況、南斜面に位置する。（北西より）

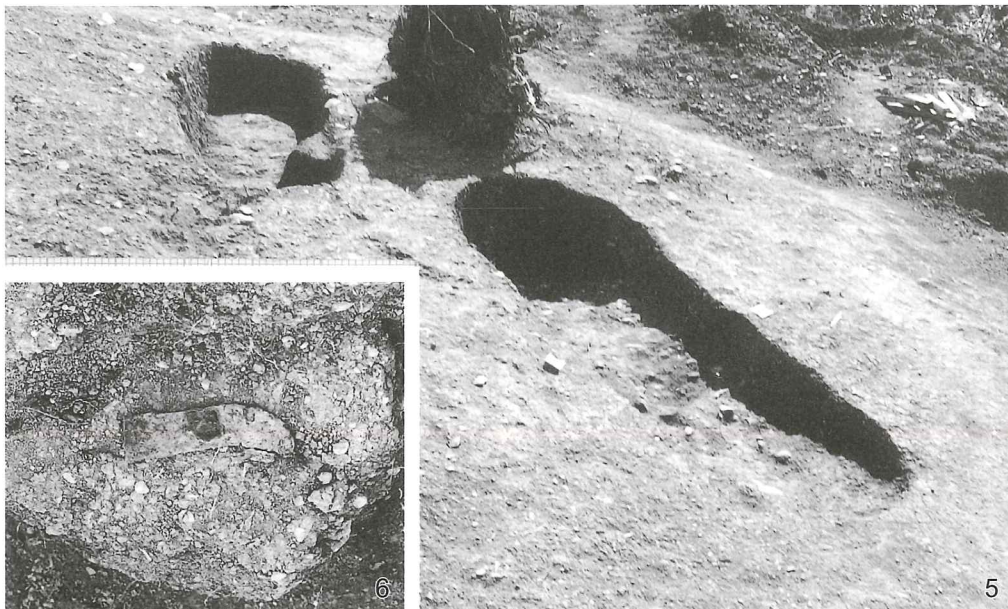


2. B32号墳検出状況、周溝は半分検出されたのみ（北より）



3. B19号墳周溝内土器出土状況、
甕と土師器（壺？）

4. B32号墳主体部検出状況、直刀、
刀子、鉄鏃が副葬されている。
東（手前）小口に白色粘土がみ
られる。（東より）



5. B29号墳西裾土坑墓検出状況、
SK 1（左）SK 2（右）
（北東より）



6. SK 2内鉄鏃出土状況、底面より
浮いている。



1. C区北部分全景、手前S X 1、左手奥B12号墳（第2 方形周溝墓）
（南より）



2. C区南部分、手前よりS B 1、S B 2、S B 6、B13号墳、B10号墳
（北より）



1. S X 1 検出状況、中央に木棺・
土壇墓群右奥に削り出し奥に区
画溝？（SD 3）がある。矢印
は小銅鐸出土地点（北より）



2. S X 1 木棺・土壇墓群検出状況、
直角に交わるように切り合っ
ている（南より）



3. S X 1 主体部 2 検出状況
（北より）

1. S X 1 主体部 2 上層遺物出土状況、礫、土器片及び小銅鐸が出土した。



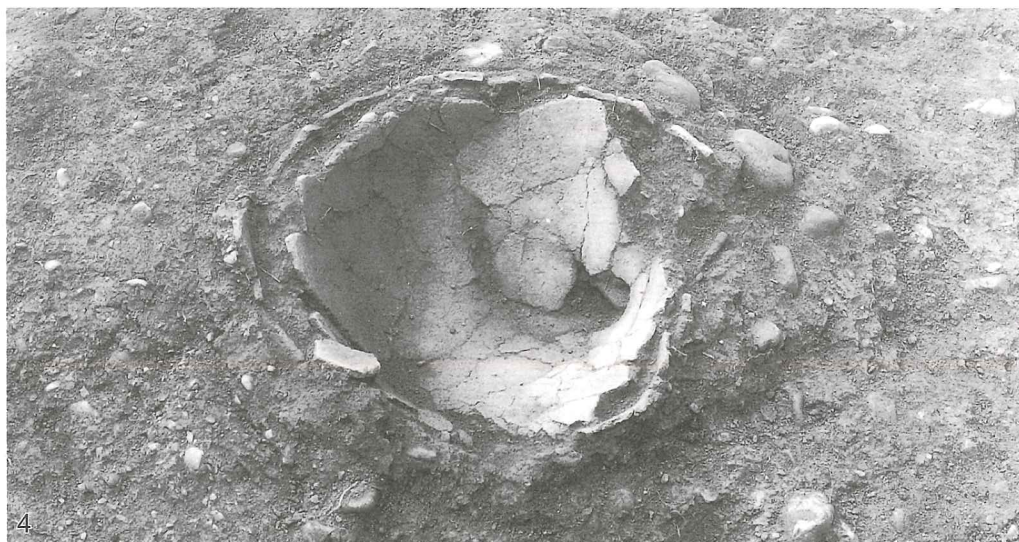
2. 小銅鐸出土状況（西より）



3. S X 1 西側段状遺構遺物出土状況（西より）

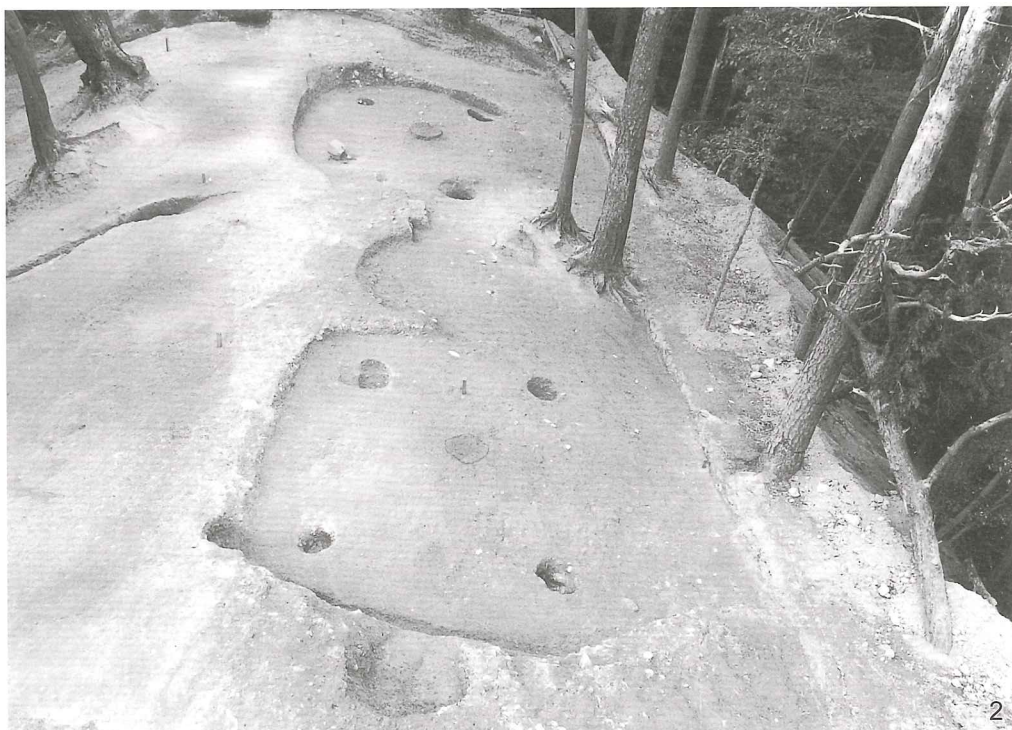


4. C区陸土器棺 1（台付甕）検出状況、胴部のまわりに口縁部を入れ子状にまわしている。（南より）





1. 2号方形周溝墓検出状況、土壙は古墳時代の土壙墓（西より）



2. SB 1（奥）・2（手前）検出状況、4本柱中央に炉がある。（南より）



3. SB 3（手前）・4（奥）検出状況、SB 3、SB 4とも建て変えられている。（北より）

1. B12号墳検出状況 1、主体部 1
検出時陸橋が 1ヶ所見られる。
(西より)



2. B12号墳検出状況 2、主体部 2
検出時 (西より)

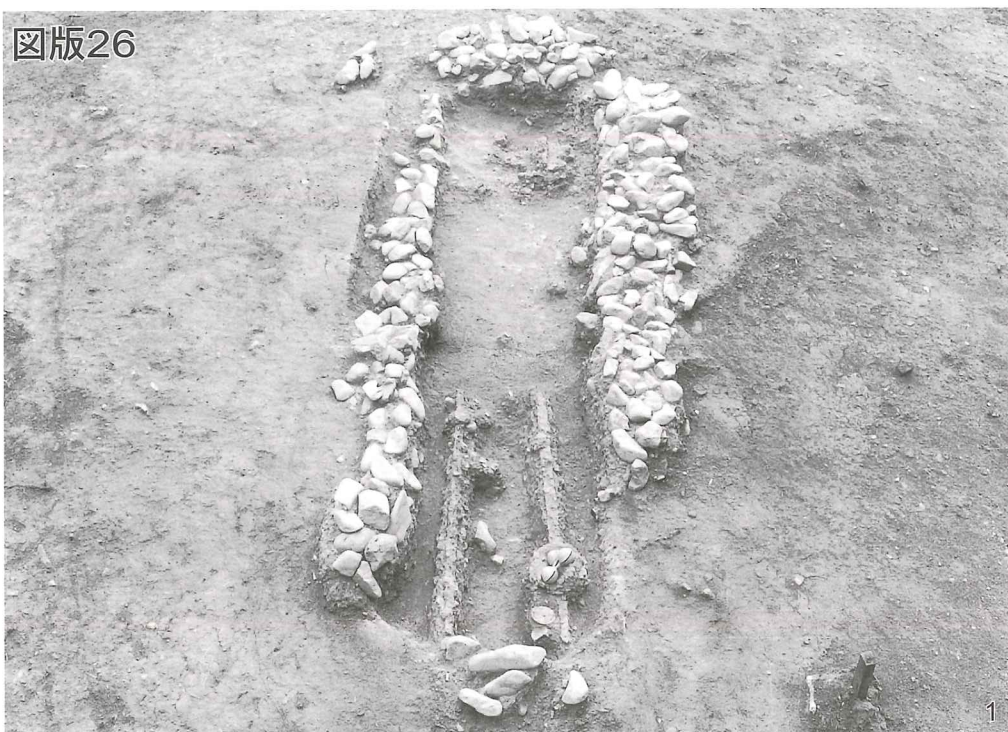


3. B12号墳検出状況 3、1号方形
周溝墓検出時、多数の主体部が
見られる。(西より)



4. B12号墳主体部 1 (右掘方)
主体部 2 (左) 検出状況

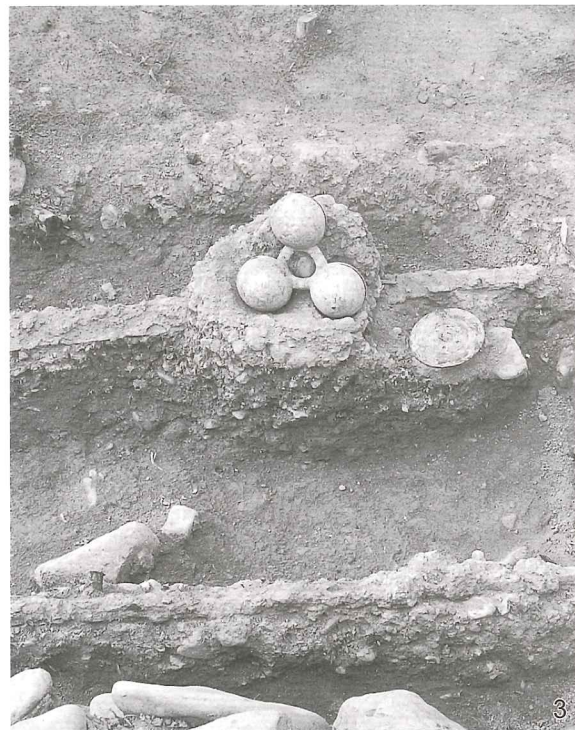




1. B12号墳主体部1 検出状況、直刀、三環鈴、鏡（手前）と馬具、鉄鏃（奥）の副葬が見みられる。



2. 馬具、鉄鏃出土状況



3. 三環鈴、銅鏡出土状況、三環鈴のレベルがやや高い。棺外副葬か。



4. B12号墳主体部2 銅鏡出土状況



5. 1号方形周溝墓（B12号墳下）主体部1 土器検出状況、上層に土器が供献されている。

（北より）

1. B14号墳検出状況、明確な周溝が見られない。（北より）



2. B14号墳主体部1 検出状況、刀子2点の副葬が見られる。2体合葬か。（西より）

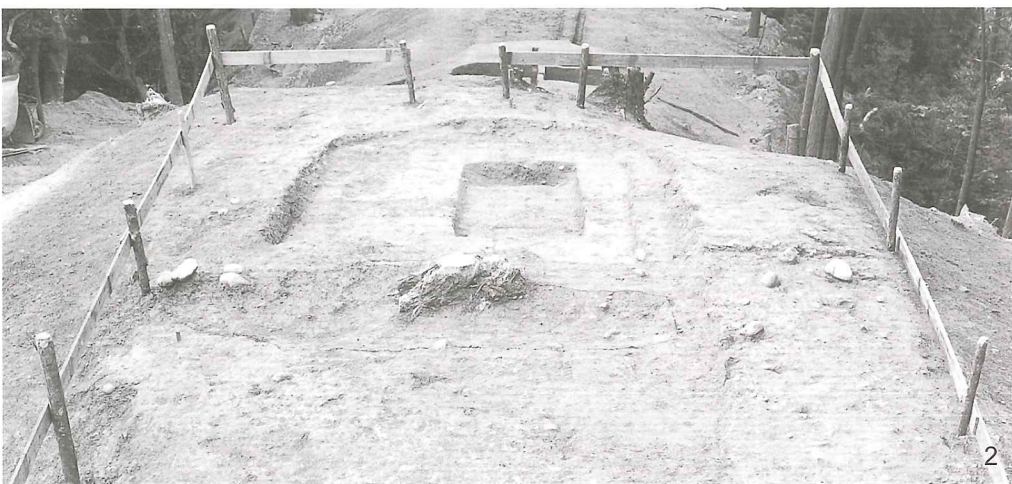


3. 愛野向山横穴群 1号横穴
（北より）

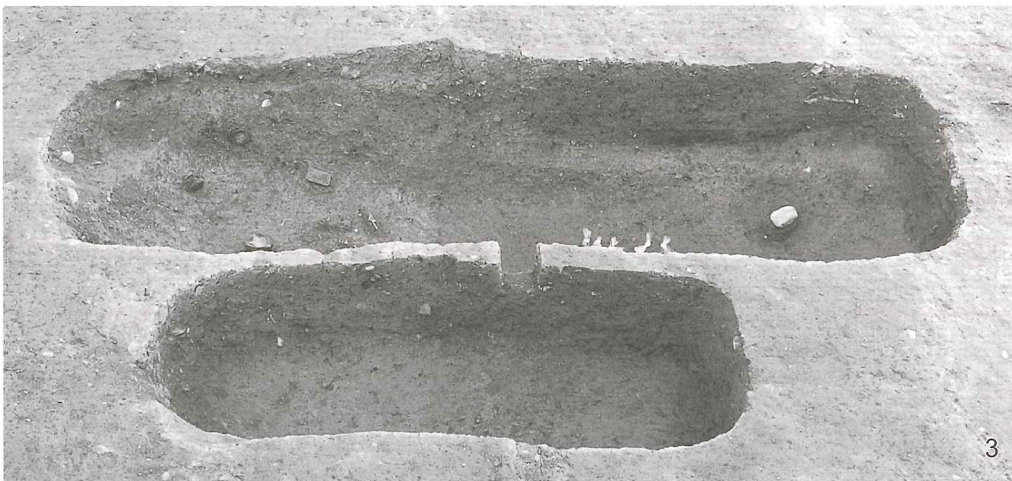




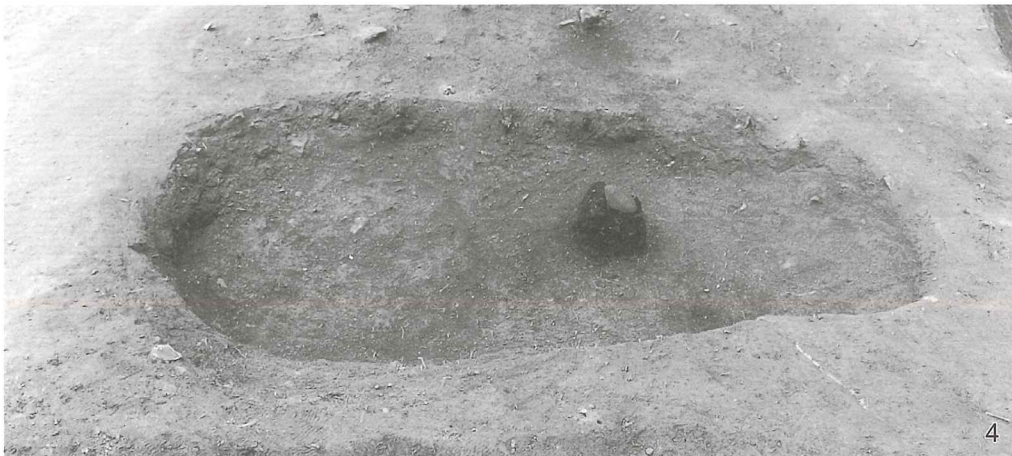
1. B10号墳（奥）・13号墳（手前）
検出状況（北より）



2. B10号墳主体部検出状況、主体
部1（奥）、主体部2（手前）
（南より）



3. B13号墳主体部（奥、古墳時代）
3号方形周溝墓主体部（手前、
弥生時代）検出状況（北より）



4. SK7 検出状況、古墳時代の土
坑墓、中央に土器が供献されて
いる。（北より）



14



67



68



141



201



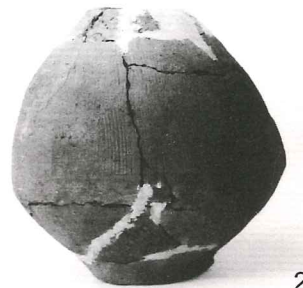
234



251



281



283



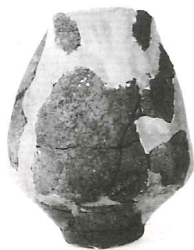
334



337



361



372



398



399



409



459

出土遺物1

※No.は図版No.と一致する



471



495



566



570



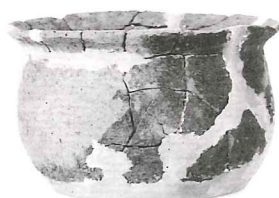
589



596



597



598



616



632



633



753



794



799



961



970



973

出土遺物2

※No.は図版No.と一致する



994



1025



1026



1029



1034



1035



1041



1048



1053



1054



1055



1058



1066



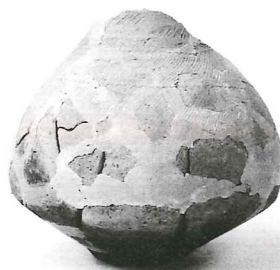
1090



1091



1095



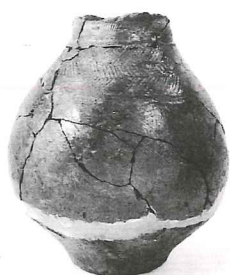
1145

出土遺物3

※No.は図版No.と一致する



1178



1185



1186



1191



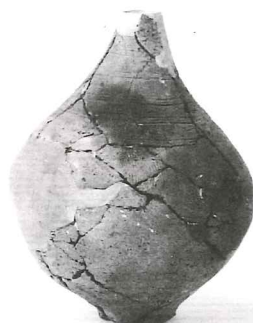
1196



1197



1200



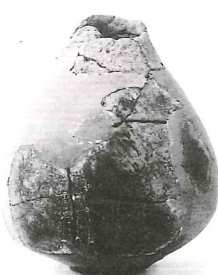
1201



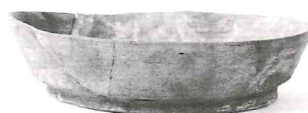
1202



1210



1228



1241



1244



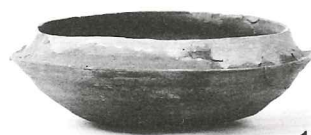
1246



1249



1253



1254

出土遺物4

※No.は図版No.と一致する



1271



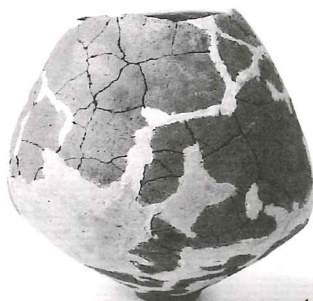
1283



1309



1311



1320



1137



604



607



328



606



608



327



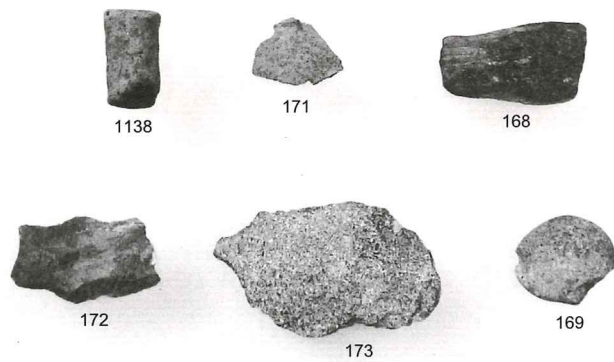
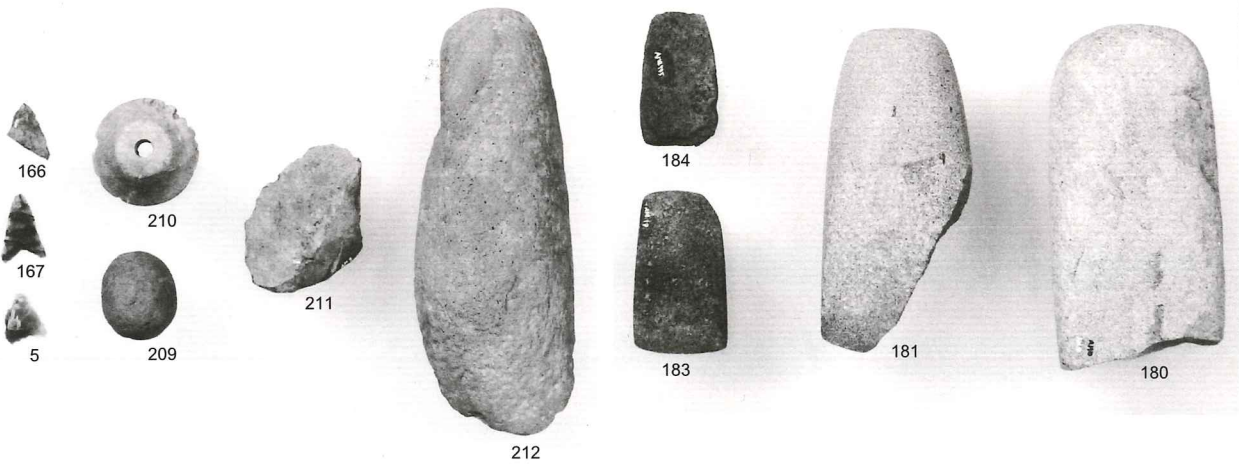
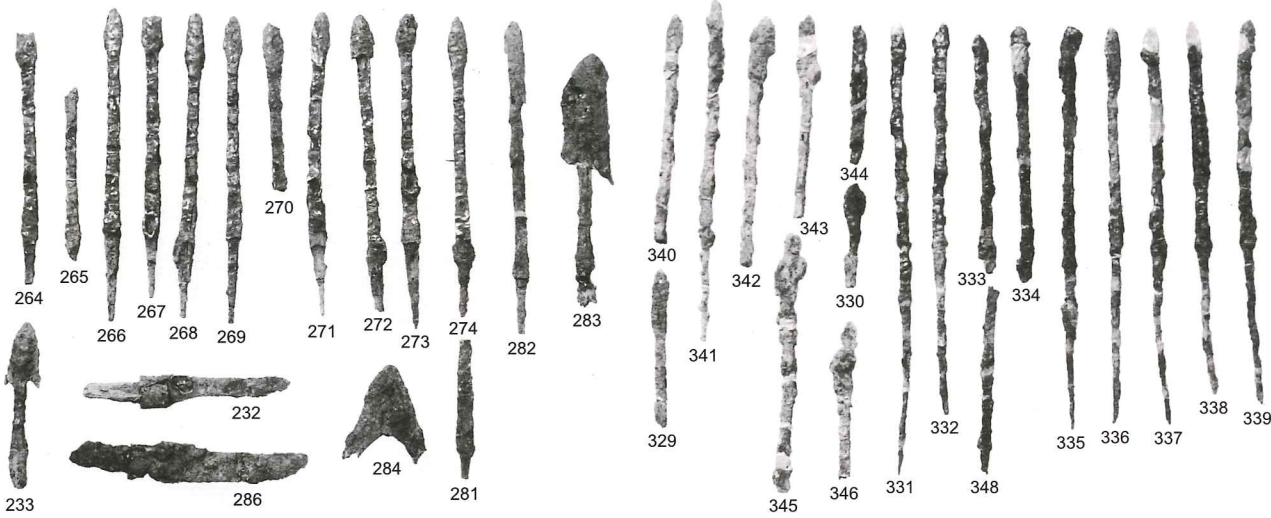
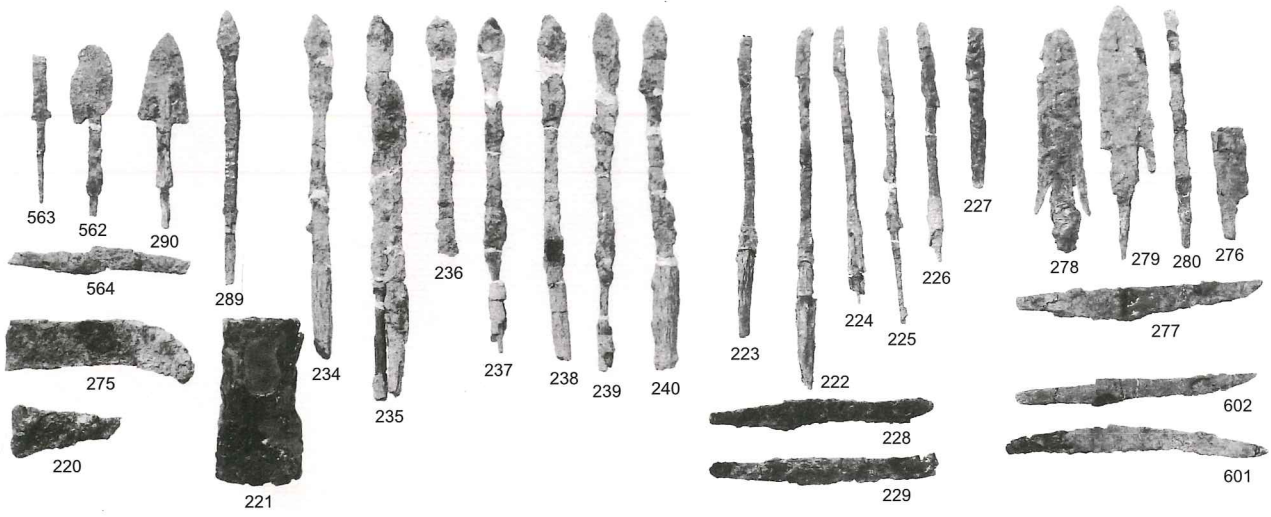
609



605

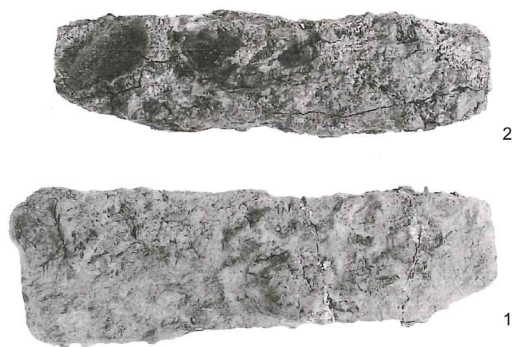
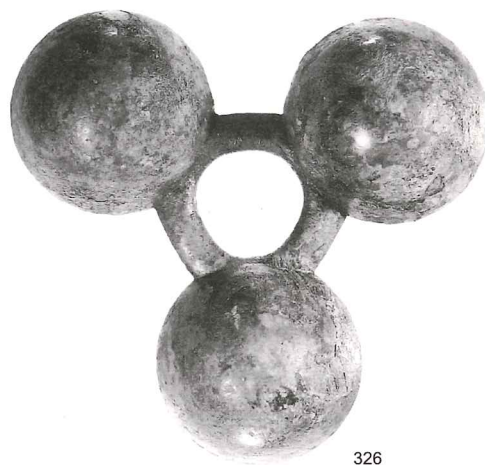
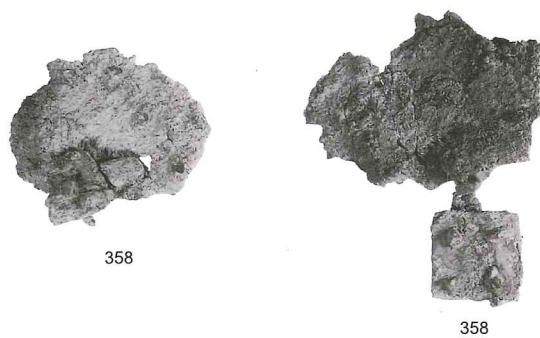
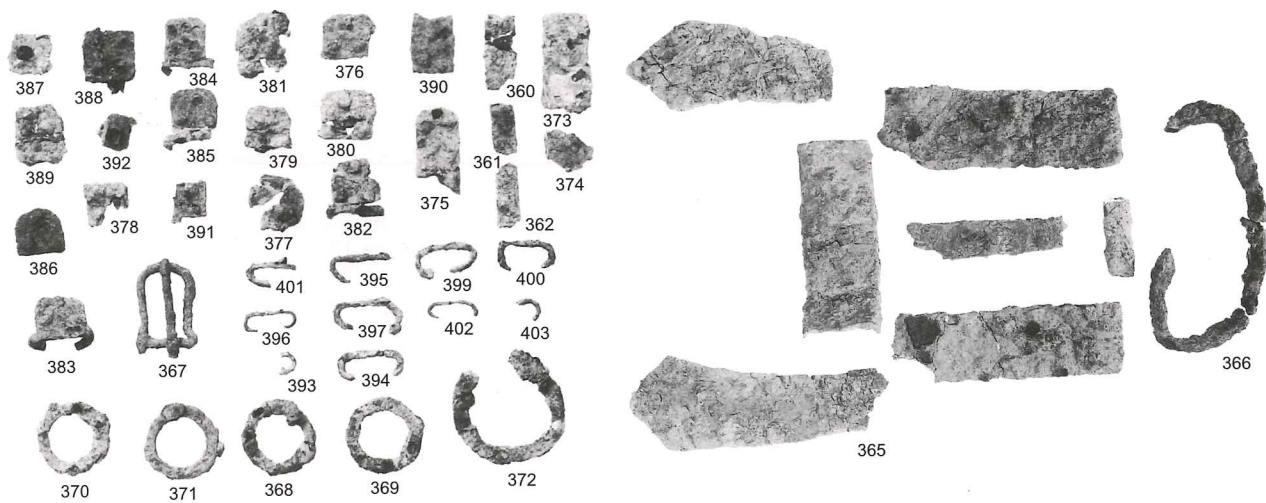
出土遺物5

※No.は図版No.と一致する

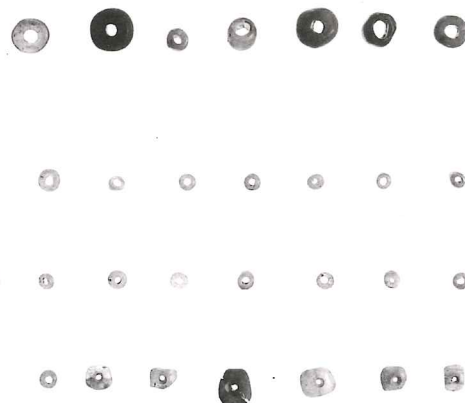


出土遺物6

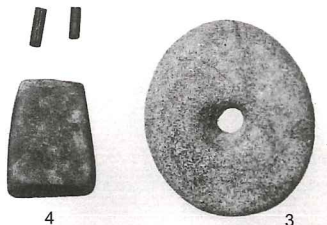
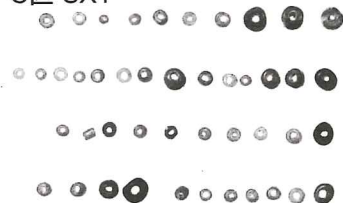
※No.は図版No.と一致する



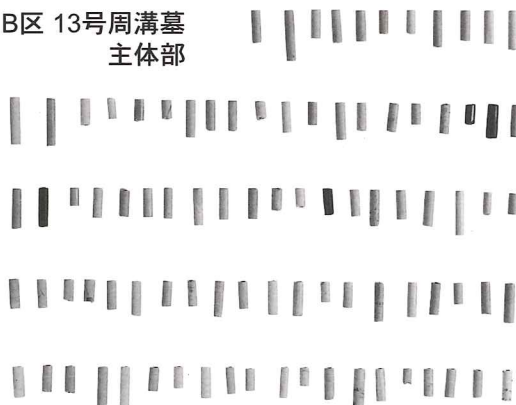
C区 10号墳
主体部1



C区 SX1



B区 13号周溝墓
主体部



C区 13号墳主体部



出土遺物7

※No.は図版No.と一致する

報告書抄録

フリガナ		アイノムカイヤマニイセキ				
書名		愛野向山Ⅱ遺跡				
副書名		愛野向山Ⅱ遺跡・愛野向山B古墳群発掘調査報告書				
編集著者名		松井一明・富沢威・馬淵久夫・葉袋佳孝・富永健・門倉武夫・中田節子・渡辺智恵美・菅井裕子				
編集機関名		袋井市教育委員会				
所在地		〒437-8666 静岡県袋井市新屋一丁目1番地1 ☎0538-44-3141				
発行年月日		2004年3月26日				
フリガナ 所収遺跡名		アイノムカイヤマニイセキ アイノムカイヤマビーコフンダン 愛野向山Ⅱ遺跡・愛野向山B古墳群				
フリガナ 所在地		シズオカケンフクロイシアイノムカイヤマ 静岡県袋井市愛野・向山				
コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	34° 44' 40"	137° 57' 10"	19850601 ～ 19860731	A区 450.0m ²	工場建設
22216	179 181				B区 10200.0m ² C区 2300.0m ² 合計 12950.0m ²	
所収遺跡名		種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
愛野向山Ⅱ遺跡		集落跡 墳墓	弥生時代 中～後期	竪穴住居跡 掘立柱建物 方形周溝墓 焼土坑	弥生土器・石器・鉄器 小銅鐸・銅鏃・玉類	弥生時代 後期の拠点集落 小銅鐸出土 木棺墓群
愛野向山B古墳群		祭祀 古墳群	古墳時代 前・中期 奈良時代 平安時代 古墳時代 前・中期	竪穴住居跡 掘立柱建物 溝 埋納壺 古墳 土坑墓 土坑	土器（土師器） 須恵器 灰釉陶器 銅鏡・馬具・三環鈴 直刀・鉄剣・鉄鏃・ 玉類・初期須恵器	有力初期 群集墳

愛野向山Ⅱ遺跡

— 愛野向山Ⅱ遺跡・愛野向山B古墳群発掘調査報告書 —

発行年月日 2004年3月26日

編集・発行 袋井市教育委員会

〒437-8666 静岡県袋井市新屋1-1-1

印刷 株式会社開明堂

〒430-0904 静岡県浜松市中沢町1-1